

---

# 帝都異聞鬼灯録

燭海司

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

帝都異聞鬼灯録

### 【Nコード】

N2933G

### 【作者名】

焔海司

### 【あらすじ】

死人還りの都守蒼装、破魔の大太刀業丸を継ぐ武官燕倪、幽身でありながらこの世に縛られた伯。それぞれが紡ぐ異国絵巻。。。

非常に不定期更新ですので、気長にお付き合い下さい。。。

## 序章

## 幻香

## （前書き）

死人還りの都守蒼桒、業丸を継ぐ武官燕倪、幽身であるがこの世に縛られた伯。それぞれが紡ぐ異国絵巻、序幕。。。。

## 序章

## 幻香

最初は、ただ見守るだけだった。

月の高い晩。

海中に、細やかな気泡が立ち上る。

その海域まで歩き、その穏やかで温い海中へと降りてゆけば、月光を浴びてゆらゆらと、蒼くもあり、翠でもあり、時折白々と、金色にも輝く巨大なものが波間に、たゆとっていた。

辺りには、白々と【儚い輝きを放つもの】。

その海域で生を全うした、それは、魂。

茫洋と、誘われたのか、一様に息を潜め、その時を今か今かと待っている。

羽化を待つ、その瞬間を。

やがて、、、

【たゆとうもの】が胎動を始めると、周りに漂う無数の魂は、その中へと吸い込まれていった。

その【もの】と共に天へと昇り、神の名を冠し、天上を舞いながら浄化されていく。

それが、待ちわびた彼らの宿願、だったというのに、、、

男は、その白々とした手を伸ばす。

今、白い狩衣は、水中であたかも強い風の中に在るかのようにはためき、月光で染めて紡いだ銀系の髪は、靡いた。

長い指が、伸ばされていく。

オオオオ・・・オオオオオ・・・

彼方で揺らぎ、姿を現そうとした【もの】をそうさせるのか？

海底の底から、湧き上がるのは紛れもない、

オオオオ…ンツ…

怨嗟の声。

露草の花の色を思わせる、青い唇が、微かに笑みを刻んだのは、伸ばしたその手を、ゆつくりと握りしめた時だった。

空気が、気泡となって毀れることもなく、

しかと、その名、その意味、受け取った、、

唇が、言葉の形を取った。

【たゆとうもの】は、急速にその胎動を早め、そして、オ・・アアアア・・・ア・ア・・

収縮していった。

かつて、その海域で死を迎えた者達の魂と、同じ形を取りながら、悲鳴のような音をか細く残し、

新たな名を、与えよう、、新たな形と共に、、

握り締めたその手の人差し指が、伸びた。

ゆつくりと刻んだ文字は、

伯<sup>はく</sup>

そのまま、神を現す、【名】であった。

赤々と光ったその文字がそのまま、弱々しくも胎動する塊に吸い込まれると、

ヒイユ…

引きつるような音と共に、その姿が現れる。

放射状に長く伸びた輝きは、群青色した髪となり、突き出したものは白くか細い四肢となった。

華奢な造りの、その姿。

かつて、この地で人柱として海の神に捧げられた者の姿だと、その男は知っていたのだろうか？

緩やかに海面に向かうそれを見送りながら、神をも意のままに繰ろうとするその男は、

「、、、、、、」

目を細め、その者が無事に海面に上がるのを、腕を組み、見守って

いる。

月明かりが冴え冴えと、幾重にも交錯する光の紗幕となつて差し込む中、

我らが祖に、連ならんとするお方に、狼藉を働く輩がおりと思えば、貴様か？

ぬ、貴様は、、

低く、しゃがれた声音が、わんわんと辺りに響いた。

「久しいな、ウンベク、ウイベル、、」

濃紺に、闇が交じり合う、深海の淵。

その辺りより、それぞれ馬の頭と牛の頭を持つ、四腕の異形、「カウゴン」鯨龍が、手に四つ又の矛を持って泳ぎ寄る。

「神が生まれるのをこの目で見られるのなら、この上ない眼福だと思つていたのだがなあ、実際に見てしまつたら、気が変わつてしまつたのだ、、」

な、、

尊大極まりない、そのもの言い。

人よりも遥かに巨大で、強大な【深海の守】を前に、

「なんと言つのか、この上なく、いとおしむべきものだ、そう、な、、」

切れ長の闇色の眸が、睨める。

人の世に連れ出し、なんとする！？

神は鬼とは違う。人の手に負えるものではないのだぞ

「人の、なあ、、」

艶然と微笑むその男が、目を眇める。

「そつめくじらを立てずと、しばらく、我に預けよ。何、つつがなく天津国に送ると、約束しよう、、」

貴様の暇を埋める存在ではないと、分かつておるのか？！

よせ、ウンベク

馬頭の【めず深海の守】、ウンベクが、矛を握る手を震わせるのを、牛頭であるウイベルが、制す。

止めるな、ウイベルツ！！

水流が巻き上がり、無数の渦を成して男に向かわんとする中、  
「では、今すぐ、冥府めいふに落ちるか、、？」

その男。

狩衣の袂で口元を隠しつつ、目尻を下げた。

闇色に沈んでいた双眸が、黄金こんじきを刷はき、瞳孔鋭くなると、その身を囲むようにぼんやりと浮かぶ、金色の将の姿。

ぬ、八火業はつかうえんしゅう焰衆

呻いた、ウンベク。

、、、、

そして、ウンベクを制したまま静観する、ウイベル。

「我を追えば、これらが代わりに汝らを阻もう、、では、な、、」

「

その言葉通り、舞い上がるその男を守るかのように金色の将が居  
並ぶと、

ぐぬぬっ、、

待て、都守ッ

沸々と、煮え滾り始めた、海域。

さすがに、声を荒げたウイベルであつたが、ウンベクと同様に、  
陽炎のようにゆらゆらとくゆる、そこから先へ進むことができず、  
くっ、、

ただただ、見送ることしかできないのだった、、

夜の浜辺に打ち上げられた、裸軀。

群青色の髪は乱れ、浜辺に長く広がっている。

ぴくりと、指の先が動くとやがて、腕が曲がり、ずるりとその頭  
を擡げた。

「伯、、」

その音に、顔を上げる。

月光の元で、淡く微笑む美丈夫が、手を差し伸べて、

「、、、、、、、、」

深くも、鮮やかに透ける董色の双眸が漂い、その人へと焦点を結ぶ。

「あ、、、、あ、、、、」

少し置いて、力無く、手を伸ばした。

その手を取ると、男は衣の袂で包み込むように、その体を抱き上げた。

「う、、、、」

おとなしく、その胸に抱かれた童は真綿のように軽かった。

やがて、眩しそうに空を見上げると、そのまま大粒の涙をがこぼれた。

「月の明かり。産まれ出でたばかりのそなたの目には、まだ痛からう、、、、」

ころころと、玉となって転がり落ちたそれを拭ってやりながら、

「長い生だ。急<sup>せ</sup>くこともあるまい、、、、」

その髪を撫でてやると、すんすんと鼻を鳴らしながら男の胸に潜り込み、桃色貝の如き爪を齧りながら、目を閉じた。

男はその身を抱いたまま、浜の先で待たせていた漆黒の馬に乗り上げた。

腕の中、もう寝息を立てているその童を見つめると、

「、、、、、、、、」

夜の闇を渡るかのように、馬を奔らせたのだった。

「動くな。動くな。というのに、、、、」

都。

あちがわ

阿智川沿いに広がる公家や武家、素封家の屋敷が居並ぶ、その一つ。

縁側に出て、水干姿の童を膝に入れていた男は、手から刃を取り落として、溜息。

「あ、ああ、、、」

ひらりひらり、、、

童は、己に舞い寄った蝶をその袂で上手に捕らえると、

「あんぐ、、、」

こともあるつか口に入れてしまった。

「、、、、、、」

「んぐんぐん、、、」

しばらく咀嚼し、ぷぶぶぶ、と出すのを、懐紙で拭ってやりながら、

「伯、それは蝶というもの。お前の香りに誘われてせっかく寄ってきたものを、食べてしまうのは、哀しいことだ、、」

「かふっ、、、かがっ、、、」

燐粉が喉をくすぐるのが、噎せるその背中をさすってやっているところへ、

そのうち

「蒼装」

直衣を纏った大柄な男が、案内の女に連れられ、姿を見せた。

大概の事には動じぬのか、異形の童を目の当たりにしても、濃い眉を僅かに寄せただけで、

「これはまた、奇妙な風貌だな。しばらく、留守をすると出て行ったのは、弟子を取るためだったのか？」

苦笑を浮かべ、尋ねた。

「気紛れに、地に縛り留めたのよ、、」

「縛り留める？」

群青色の髪を切っていたのだが、動くものだから、首の辺りに絡まるぐらいの長さになってしまったらしい。

その髪を、手で梳きながら向き直ると、

「それより、燕倪<sup>えんげい</sup>、何用か？」

「それよそれ」

その向かいに腰を下ろした。

すぐに別の女が、酒の入った瓶子と杯を運んで、二人の前に置く  
と、

「すんすん、、、」

それまで空に視線を彷徨わせていた童、伯が鼻を鳴らし、身を乗り出す。

「伯、これが酒と言うものだ。人の世に、かくも素晴らしきものはこの他に無い」

「お、おいおい、子供相手に何を、、、」

「子供に見えるか？それはいい、、、」

くつくつと喉を鳴らしながら、なみなみと注いだ杯を鼻先に持つていってやると、董色の眸が見開いた。

「んん、、、」

朱鷺色の可憐な唇が、漆黒に金の箔を散らした杯の淵に吸い付き、蒼装が傾けるまま、

「こく、、、」

喉を鳴らして干してしまう。

「そ、蒼装ッ」

「どうだ、美味いか？」

「うあ、、、あ、、、」

手を伸ばすその童に、もう一杯満たしてやると、同じように手ずからそれを飲ませてやりながら、

「子供に、なんて事をするのだ、お前は?!」

「これは、人ではない」

「では、、、式神か？」

「そのようなものでもないが、今となつては、似たようなものか、  
、  
」

「分かるように説明しろ」

「気紛れにと、そう言っただろう？ふふ、、出るぞ、、」

「は、、？」

困惑した表情の燕倪を他所に、その視線は童の口元に。

「はあふ、、」

溜息にも似たその吐息が、青紫の小さな雲のように吐き出され、漂った。

しかもそれが、

「なんだ、、このえもいえぬ芳香は、、」

恍惚と蕩けた、その表情。

「<sup>れいし</sup>霊紫というものでな、吸えば寿命を百年延ばすと言われている」

「な、、」

「どうした？急がねば、消えてしまうぞ」

くすくす笑って言う男を、睨みつ、

「別に俺は、そのように長く生きたいとは思わぬ」

「やはりお前は、奇特な男だ。この世には、それを望む者がごまん  
といえると言っのに、、」

杯の中、朝陽を映して光るその酒を、一息に飲み干した。

「ふ、、」

相変わらずの呑みっぷりに、蒼装が呆れたような、笑みを浮かべている。

「大体、そのようなものを出すとは、この童はいったい何者だ？鬼か？」

あまりにも現実味の欠けた、話。

さしもの燕倪も、ここから先を聞くに、酒の力を必要としたのかも  
しれない。

「生ける者の原型であつたものよ」

「分らんとっている」

「人の世に習うのなら、神」

しれ、と言うと、蒼装は再び酒を欲しがるその手に杯を乗せ、瓶

子を傾けた。

「か、、、神?!」

「そうなる前に、私とその名と理を封じたがな、、、」

「お、おまえ、、、よりによつて、か、神を、封じたのか?!」

「まだ生まれて間もない神よ。神という自我も無い。それにこうなれば、人の子と同じだろう?」

「おまえつてやつは、、、」

呆れて額を押さえた。

「あふ、、、」

満足したのか、くつたりと寝そべった童を膝に寝かしつけながら、柔らかな群青の髪を撫で、

「で、用向きは?」

視線はそのまま、問う。

「瑪甲まごうの、伊禮正賢殿の屋敷にて起こっている怪異の事だ」

「聞いては、おる、、、経過もな、、、」

「話が早い」

燕児の笑みに続いて、蒼装は、目を細めた。

とろとろとまどろんでいた童が、眠りに落ちたからだ。

「そうでなくば、都の守は、務まるまい、、、」

「放つておいてもいい、そう言うことか?」

「散らぬ桜などない。ただ、それはそれだけの事よ」

「それでも、散つてもらわねばならぬのだ」

事の起こりはこうだ。

梅が香る如月に、伊禮正賢の若い女房が流行り病で死んだ。

死ぬ間際、桜が桜が、としきりに呟いていたと言う。

その年の春、遅咲きではあったが見事な花を咲かせた桜は、秋が迫ったというのにいつこうに散る気配がない。

それどころが、夜になると死んだはずの女房が立っているのを、使用人他、当の本人も目撃するようになったと言うのだ。

高僧に供養してもらっても、何にすがっても効果はなく、ついに

気が悪くなつて、木を切ることにした。

しかし、いざ切ろうと斧を振るえば、高々と血を吹き上げたとい  
うので、いよいよ大事になつて、蒼装の数少ない友である燕倪に、  
泣きついたらしい。

「このままでは、伊禮殿が衰弱してしまう」

「私は別に構わぬが、」

「おいっ」

「そうなると困るのは、お前か、」

「、、、、」

この伊禮と言う者、香道を良くして、燕倪の師でもある。

黙りこくつてしまった、燕倪に、

「まあ、よい、」

蒼装は、意味深な薄笑みを浮かべた。

「気には掛けていたところだ。明日は新月、影も無い。子の刻に、  
伺えるかな、」

「おおっ」

珍しく二つ返事で引き受けたことに、喜び隠せぬ、燕倪。

大きく頷くと、

「お前が来てくれるのなら、首を立てに振ろうよ」

もうその姿は、階きざはしの下。

「屋敷の鍵を開けてくれる者だけいればそれでいい。いつものよう  
に休んでいて結構だと、伝えおけ」

「ああ、分かった」

忙しい足音を残し、逸早く知らねばと、もと来た方へと歩み去  
る背を見送つて、蒼装は、杯を手にした。

「、、、、」

ただ今は、安らかな寢息を立てるその子を膝に、酒を飲みたいの  
だ。

星の輝きも秋の霞に、朧気に滲む晩であつた。

先に伊禮正賢の屋敷の前に居た燕倪は、ふらりと闇の中から現れた白々しい美丈夫に目を疑つた。

狩衣を纏い、白き髪を長く腰まで垂らした蒼装が背に、

「お前、その子は？」

「まあ良いではないか。裾を離さぬ子の手を、邪険に振り解くのもおかしかろう、」

衣の裾を握り、爪を齧つたまま空へと視線を彷徨わせている、童。その髪、眸共に闇を湛えているのを見ると、少しは人の目を気にするのか、蒼装が術をかけたのだらう。

「お前も、人並みにそんな顔をするのだな、」

頭を撫でるその男の、切れ長の双眸。

その眸に湛えられた慈愛を、感じ取れば、

「悪いかね？」

しれ、と妙な色気を含んだ眼差しを、寄越す。

それ以上何も言わずに肩を竦めると、傍らで呆然としている若い男の背を押した。

「あ、主伊禮正賢は、実は昨日より遠乃院殿の元にお出になられ、お戻りには、」

「ふん、かつての恋女房がよほど恐ろしいと見えるわ」

「蒼装ッ」

燕倪の窘めも聞かず、さつさと篝火の焚かれた門を潜つてしまつた。

香道の権威だけあり、手入れの行き届いた庭の先には竜胆、撫子、萩と、季節の花々が彩り、さらにその先には蓮池を広々ととつた、寝殿造り。

くん、く、くんくん、

鼻を鳴らす伯が、ふらりと蒼装から離れると、四阿屋あすまやのある方へと渡り廊下を歩んでいく。

くるり、また、くるり、

水干の袖を翻し、真綿のようにふんわりと舞い上がる。

「お、おい、」

燕倪が止めようと伸ばした手を、掻い潜り、奥へ。

咄嗟に蒼装を見れば、

「これに月琴と酒があれば、な、」

慌てるでもなくうつそりと、嘯いたところであった。

「あ、あの、蔵に行けば、」

「亜児、間に受けるな。この男、性根がひねくれておるのだ。言う  
とおりにすると、損するぞ」

「はあ、」

行灯を手にした若者が、項垂れる。

闇であつた。

暗い闇。

氣を利かせて、ところどころに篝火を焚いてはくれるが十分  
ではなく、白い水干だけが、確かに一行を導く者であり、それが無  
ければ、当の桜に辿り着けたかどうか。

もっとも蒼装は、薄笑いを唇に刷きつつ、時折辺りを睥睨してい  
る。

どうやらこの男、夜目が相当利くらしい。

「ま、まもなくです、ひつ、」

屋敷の裏手。

小高い築山に、鮮やかに狂い咲く、桜の老樹。

枝垂れては重そうに、しかし堂々としたそれに、伯が駆け寄った。  
しかも、その身を抱き上げた手があるではないか？

茫洋と霞む白い輪郭に、燕倪が眼を凝らす。

その手が、急速に色を纏い、衣を纏った。

垂髪、<sup>ひとえ</sup>単を纏った、一目で良家の出と知れる。風貌の女。

鈴の音のように軽やかな声が、腕の中の童に、何やら語りかけて  
いる。

さも愛しい者であるかのように、伯に頬擦りすれば、伯もまたころろと、鈴が転がったような音を出して、返す。

言葉にはならぬ、幽鬼の声。

「蒼装様、あ、あれが、先に亡くなられた、ふ、芙蓉の方様です、  
」

腰にしがみつかれた蒼装が、そのまま傍らで目を凝らす男に、

「間違いないか？」

「ああ、確かにあのお顔、、、奥方だ」

「では、問うてみよう、、、」

その桜に歩み寄ると、蒼装が喉を押さえた。

ガカアルル・・・

それは声とは程遠く、譬<sup>たと</sup>えて言うなれば、詩を吟ずるかのように朗々と響く、異界の旋律。

「あ、あの燕倪様、、、あれは？」

「ああ、俺も初めて見た時は驚いたが、あいつは異界の言葉を解すんだ」

燕倪が見守る中、

キルルルルッ

大気が、甲高い音によって、張り詰めた。

女の髪が、ざわざわと風に舞い上がる。

悲しみに震え、鬼と化すのか？

その女の腕で、伯が怯えた眸で蒼装を見つめ、そして女の首にしがみついていやいやをする。

どうゆうことだ？

さすがに燕倪が眉を顰めた時、蒼装の右手が上がった。  
心得た燕倪、

「そこを動くな」

「は、はひっ」

短く亜兎に命じると、桜に歩み寄る。  
その右手は、

「、、、、、、」

太刀の柄。

ゴウエルルサモナキアシキハシキ・・・  
低いその異界の旋律が、闇夜に刻まれる。  
ヒイエアアアルルナクモナク・・・

細く、今にも途切れそうな甲高い、声音。

ナクナクカナシアシキカナルルハキ・・・

蒼装の眼差しが、女の腕にいる童へと注がれば、

・・・ハクルル

女が、伯を見つめ、伯が女を見つめる。

二つは、ひしと抱き合い、

「燕倪」

「おう」

抜き身を見せずに、太刀が振られていた。

刹那、

むっ?!

燕倪の目には、伯の姿が、確かに赤い着物を纏った幼い女童に見えた。

女だけを斬った、その太刀。

青い光の粒子となって空に登ってゆくのを見上げると風が巻き、

「おお、、、、」

桜の花が、季節外れの花嵐に、舞い上がったのだった。

氣を失った伯を腕に抱いた蒼装と、腕を組んだまま、煮えきらぬ顔の燕倪。

「分かん」

「何がだ？」

人気の無い街道を、歩いている。

「俺には、その仔が一瞬、女童に見えたのだ」

「ふ、、なんだ、そんなことか、、？」

「一体、どういうことだったのだ？ 鬼になったとはいえ、師の女房殿を斬ったのだ。説明しろ」

「当人には、心当たりがあるはずだが、、まあ、、」

蒼奘が伯の耳元に何やらつぶやくと、黒い眸が開き、

「このような女童であつたか？」

その顔は、伯のものではなくなっていた。

着ている物ですら、赤々とした晴れ着であつた。

「あ、、ああ」

「お前の師は、どこからか聞き及んだようだなあ。胎児の骨が香道で言う、幻香の一種であると、、」

「何っ?!」

大きな声に驚いた女童が、蒼奘にしがみつく。

その背を擦る相手に、

「う、、では俺は、もしかしてその類の香を、愛しくも、馨しきものと、、」

尋ねたところで、堪らず、口元を押さえた。

「安心しろ。さすがにそうは無い。大陸の神帝にしても、そう易々と手に入れられぬ代物だ。それに、その幻香、完成しておらぬしな」

「完成、していない？」

「ああ。いずれにせよ、手取り早く、流産した胎児を、、」

「なんだと?!」

「まあ、聞け。私が知っている限りだがな、これには少しこつがある。その胎児は、閏年生まれでなくてはならん。それもその年の花の盛りに桜の木の下に埋めねばならんのだよ」

「では、この女童は、、」

「哀れ父御に埋められた、弔いされぬ胎児であつたものよ。其れが死した母を呼び、桜に縛りつけ、鬼とせしめた、、」

燕児は、花が散り、見る見るうちに枯れ果て、塵となった桜の老

樹を思い出した。

「では、女童はどうした？何故、ここに、、この子の中に？」

「母が散った以前に、その魂は鬼となつて桜に宿った。伯が写したのは、胎児が残した残留思念　　想念　　だ。既にその魂は鬼、

、桜に、食われた後。そういうことだ、、」

「だが、残った。想いとして、、ただ一度、母の腕に抱かれないと、そう？」

「生まれ出でたばかりの伯は、無垢な生命体。其を映す、鏡。憑代として、これほどまでに完璧な存在はいまい」

いつの間にか、元の姿ですやすや寝息を立てている伯を見つめ、

燕倪は、複雑な表情を浮かべた。

「酷なことを、、」

「伯か？それとも、胎児か？女か？」

「そのどれもだ」

いつもの調子で、どこか愉しげに言うものだから、たまらずむつとした燕倪が返した。

燕倪の屋敷と、蒼奘が屋敷に向かう、別れ道。

恵堂橋。

「では、またな」

「ああ、また」

いつものようにその男は橋を渡り、燕倪は背を向けて歩き出し、振り返った。

彼方に広がる闇の中、白々としたその姿が、どこか人外の獣の姿に見えて袖で目を擦ると、闇だけがこんもりとして夜気に滲んでいくだけだった。

陽の光が溢れる縁側で、何やら童が弄ぶのを眺め、美姫に酒の相手をさせているのは、蒼奘。

その相手。

纏っている衣は単であるにも拘らず、その吊り上った眉の下には琥珀色の鋭い瞳。

頬から、おそらく全身に、青い蔦のような刺青が施されている。

何よりも、逆立つように広がった甘栗色の髪が、短い。

猫科を思わせる四肢に、不釣り合いに豊満な、体躯。

その匂い立つような色香に、えもいえぬ妖艶さがあつた。

しかし、蒼装がその姿に目を留めることは無く、

「、、、、、、」

先ほどから注がれている相手は、ただ一人。

桜の花枝を、床や欄干に叩きつける伯、その人。

「伯、そろそろ焚き上がった頃だ。おいで、、、、」

董色の眸が蒼装を映すと、すんなりとその袂に抱かれて、膝に入る。

袂の先で柔らかく肩を抱くと、そのまま力を抜いて、胸に凭れてきた。

ことり、、、、

手から落ちた枝を受け取ったところで、御簾が上がった。

そこから、盆を手にした異装の翁が、二つの極彩色の香炉を捧げもって、現れた。

「遠路はるばるご苦労だったな、ばんきおつ蛮器翁、、、、」

「いつでも、お呼びとあれば、、、、」

芳いの言葉をかけると、翁は姿勢を低くしながらそのまま御簾の向こう　見通せぬ闇　に消えていった。

盆に置かれた、香炉。

それを手に取ると、器に伝わる温もりを愉しみ、そつと香炉の上部を擦った。

「伯、香には、人の世で生まれたもの以外に、秘香と言うものが存在する」

手を伸ばすその鼻先に、香炉を近づけながら、

「秘香、、俗に幻香ともいうが、その一つ、天香。天上界で調合されたもの。その数ざつと九万。そして、もう一つ、魔香、、」  
「けほつ、、ケシヨケシヨつ、、」

双眸はみるみる潤み、紫の玉がいくつも床に散らばった。

なおも咳き込むその背を擦ってから、もう一つの香を手にとった。  
「誰が戯れに噂を流したのか、傍迷惑なことなのだが、人相手になら此れほどの香は生み出せぬと、宮中あたりでは騒がれよう。が、我らにとっては所詮、紛い物は紛い物、、」

蓋をずらすと、極彩色の彩雲が細く、こぼれだした。

「は、、んん、、」

くん、と鼻をならすと、その眸が今度は明らかに恍惚と、蕩けた。  
「幽世で調合された魔香、ざつと干。これが、紛れもないその魔香の一つ、人贗香、、」

可憐な薔薇色の唇が、震えるのを見つめ、

「まず、桜などは誤りだ。閏年の花の盛りに、巳の日を選び、一万体もの胎児を黒き実を結ぶ桃里に埋めること八回。さらに一歳に満ため赤子の血肉を与え続けること一千年。食い合いで残った桃の木の枝を翡翠湖に沈めて三千年。ようやく出来上がったそれこそ、このような得もいぬ馨しさ。魔香の名を冠すに、相応しい、、」  
慈愛に満ちた眼差しを注ぐ。

「試しにと、滅ぼす前に枝を一つ手折ってきたが、お前の遊び道具にもならなかったな、、」

その腕に抱かれ、短く呼吸を繰り返していた伯がやがて、

「はあふ、、」

溜息をついた。

たなびく青紫の吐息

霊紫

ゆらゆらと空に昇っていく様を、蒼装がつつそりと眺めている、

## 序章

## 幻香

## （後書き）

前4話は異国にて、病んでいた時に書きなぐったもの。

少しずつ謎解きをしていくつもりで、ざっくりと世界観を切り取ったものなので、非常に読みづらいつかと、思います。ただいま添削2から4を添削中。。。

僕が言うのもなんですが、5話あたりから安定してきておりますので、お付き合いくださる方は、ご了承ください。

## 第壹幕

## 花燈籠

（前書き）

蒼奘が友、燕倪に浮かぶ死相に気付いた伯は、燕倪と共に宮中に赴くが、、、

死人還りの都守蒼奘、業丸を継ぐ武官燕倪、幽身であるがこの世に縛られた伯。それぞれが紡ぐ異国絵巻、第壹幕。。。。

第壹幕 花燈籠

薄らと、庭の池に氷が張った朝だった。

その薄氷の下に緩慢ながら緋鯉が泳ぐのを、追う者がいる。

「ふおお、、、」

浅葱の綾紐で結わえた群青色の髪、菫の大きな眸。

素足で飛んだり跳ねたりしつつ、庭先を舞う、伯。

まるで重さが無いのか、氷はひび一つ入らない。

風に舞った昨夜の雪の残りが、屋根から下りてくれば、ゆつたりとした水干の袂でそれを捉えては身を翻し、袖をふわりと振って空に放す。

そうすると、風が待っていたかのように天高くへと舞い上げる。

陽射しを浴びて、舞うその姿に、

「伯、今日は随分と機嫌がいいのだな」

燕倪が、声をかけた。

「、、、、、、」

じつとその顔を見つめ、たつと縁側に舞い上がる。

「お、おい」

袖を翻して駆け込んだ先が、御簾をまだ下ろしたままの蒼装の部屋で、

「蒼装、俺だ。見舞いに来てやったぞ」

声をかければ、

「あいもかわらず、律儀な男だ、、」

案内の女が、するすると御簾を上げると仄の暗い寝室に光が差し込んだ。

「宮中に上がりたくないという口実かと思えば、まさか本当に、、」

苦笑した燕倪が見たものは、

「上がりたくなければ、ないと、そう言うがな。今日こそは人の身

が、恨めしいものだ、」

寝着を纏い、肩に単を纏ったその姿。

その胸の中には伯が逃げ込んでいて、解けかかった水干の肩紐を、  
やんわりと結び直してやっているところであつた。

喉に布を巻いているところを見ると、相当、具合が悪いらしい。

「これは見舞いの酒だが、どうする？」

「ほう、菊の香りがするな。どれ、燗をつけて、」

「いけません」

いつの間にか縁側に現れたのは、異相の美姫。

「汪果」

「毎晩遅くまで、雪見と言つては若君と庭にお出になられたからで  
す。風邪が治るまで、このお酒は蔵に、」

「かう、」

腕に中から手を伸ばしていた伯が、悲しそうな声を上げたが、燕  
倪の顔を見てまた逃げ込んでしまう。

その髪を撫でながら、

「仕方あるまい。では、茶を」

「かしこまりました」

去つて行くのを見送つて、燕倪は火鉢の側に腰を下ろした。

「今日は伯が一段と怯えるが、お前がこんな姿だからか、？」

「いや、」

ひどく澄んで、冷たい色を宿した双眸が燕倪を見つめる。

「ふん、」

すぐに柔わらいで、

「お前の顔を見て、だ」

「俺の？」

「死相がでておるのだよ」

「お、俺に!？」

「ああ、心当たりはないのかね？」

「無いに決まっているだろうっ」

「そうか、」

すぐに見上げてくる伯と眼差しを交わす。

「そうか、とは、冷たい奴だ。近々、俺は死ぬと言うのか？」

「まあ、そうなるのが理というものだ。故の死相」

「悠長な、、なあおい、何か手はないのか？」

「ふむ、、心当たりが無いのなら、無い」

「何とかしてくれ。お前、占術、得意だろう？見舞いの代償が、己が命とは、高くつく」

「この状態ではまともな卦など読み解けぬさ。起き上がるだけでも全身が痛んで、結構、しんどい、」

「いつそ見舞いなど、来なければ良かった、」

ぶつぶつ言うその前に、茶と菓子が運ばれた。

落雁を砕いて欠片を、雛のようにせがむ伯の口に運んでやりながら、

「まあ、そう言うな。私でなくても、適任な者があるではないか？」

「あ？」

青い唇に笑みを刷きつつ、

「伯よ」

「伯が？」

「その顔に死相が出ていると、すぐさま私に知らせてきたのだ。しばらく、連れて歩くといい」

「だが、」

「何、蒼装のところの式だと言えば、それで済むだろう」

「伯が俺の言うことを聞いてくれるとは思えぬが」

「そんなことは無い。伯は、お前を気に入っている」

こほこほと、口元に袖を当てて咳を繰り返す蒼装。

汪果が用意した脇息に肩肘をつけて楽にすると、茶を一口啜り、

「伯、私の代わりに、頼まれてくれるか、」？

髪のを結い直しながら深い黒瞳で見つめれば、伯もまたじっと蒼装を見上げる。

「しばらく、そうさな、一日、二日、三日、この燕倪に付いてやつてはくれぬかな？」

「、、、、、、」

「その死相が晴れるまで、だ」

「、、、、、、」

「お前は、死相の相手を見極めればそれでいい。後は、燕倪の業丸が斬り拓く、、、、」

「、、、、、、」

こくり、、、、

頷いた伯は、ぎゅっとその胸に腕を回してしがみついた。

「伯、、、、」

「何やら、お前達を引き離すようでひどく後味が悪い、、、、」  
親子の今生の別れのような、それを目の当たりにした気分だったのだろう。

かつて、蒼装のこんなにも慈愛に満ちた眼差しを、燕倪は見たことがあっただろうか？

それは、どこか愛しい者を見つめるようなものにも似ていて、燕倪は頭を振った。

「これを、、、、」

汪果が捧げ持つ漆の箱から勾玉と瑠璃の管が交互に通った首飾りを取り出すと、伯に掛けてやる。

すると髪と瞳は黒く染まり、一見、どこにでもいるような童の姿へ。

とことこ、と燕倪の傍らにて端座すれば、そう目立つ事もない。

「良い仔だ、、、、」

そつと手を伸ばして頬をさすると、両手でその手を取って小さく、きゅう、と声を漏らした。

「伯の食事は酒でいい。下手な食べ物を食べさせると、祟るやもしれぬ」

「な、、、、」

「だから寝る前には、良い酒をたっぷり吞ませてやってくれ。一合も吞めば、朝までは起きぬ」

「う、うむ」

「それと、伯は、、やはり、もう一人世話役をつけよう。琲瑠」

庭先に忽然と現れた女。

どこにでもいるような風体だが、

「お、おなごでは、こ、困る。屋敷には時折母上が見えられる。伯ならまだしも、いろいろうるさい、、」

「では、琲瑠」

「え」

もう一度見れば、そこには同じような顔立ちの男が一人。

「まったく、お前には驚かされる」

「牛車を用意しよう。それまで、ゆるりとしていけ。私は、、悪いが休ませてもらうぞ、、」

こほこほと咳き込みつつ、御簾の向こうに消えると、伯はしばらくその方向を見ていたが、すぐに燕児の衣の袖を掴み、肩の辺りに背を預けた。

燕児は、その伯の頭を無骨な大きな手で撫でると、

「よろしく頼むぞ、相棒、、」

己が命綱を言葉とは裏腹に、不安げに見つめたのだった。

「なんなんだ、これはいったい、、」

恙無くその日を終えようとしていた夜更け。

琲瑠に、伯に酒を吞ませるのを頼み、燕児が寢所に戻ると、奇妙な光景が広がっていた。

「お召しになったお酒に、少々混じり物があったようでした、、」

「それで、宙に浮くと言うのか？混じり物？都一と謳われる籐満酒造の一等品だぞ」

「主は、若君がお召しになるものには、厳選に厳選を重ねておられ

ますから、大陸の皇帝とて、目にするに叶わぬ代物でございます。お言葉ですが、この都の酒では到底、――

苦笑を浮かべた琲瑠と、呆氣にとられた燕倪。

二人の視線の先、寢所の天井辺りに、ふわりふわりと浮かぶ伯を見つめた。

その目は据わり、頬は朱鷺色に、可憐な唇は今、への字に曲がっている。

明らかにむっとした様子で、燕倪を睨み据えている。

「た、祟られるのか？」

「質はともかく、たくさんお召しになれましたから、そのような心配はございますまい」

「ん？」

見れば、大振りの瓶子が七、八本空になって転がっていた。

「、、、、、、」

やがて、

「げふ、、、、」

吐息をもらすと、ふよふよと舞い降り、

「若君」

琲瑠が用意した狩衣を広げて抱きとめると、くるりと包まり、大人しくその腕の中。

そつと机帳で囲まれた寢床に寝かせれば、もうすやすやと寢息を立てている。

「それは、蒼装の、、？」

「ええ。日がな一日中、主様の側から離れぬのでお一人でお休みなられるのは心細かろうと、一枚頂いてまいったのです」

「用意のいい事だな、、」

御簾で仕切られた向こうが、急拵えの燕倪が寢所。

「俺も休むよ。明日は早くから宮中に上がらなくてはならぬ故」

「おやすみなさいませ」

細い瞳をさらに眇めて、火の明かりの元に座した従者に背を向け、

横になる。

遠くに響く野犬の遠吠えに聞き耳を立てていると、すぐに眠気が支配した。

夜半、ふと目を覚ました燕倪は、御簾越しに琲瑠の姿を捉えた。見つめたその人は、その姿勢のまま朝まで、眠る伯を見つめていたのかもしれない。

ただひっそりと、微笑み浮かべ端座しているその姿を視界に捉えながらも、燕倪は、重くなる瞼を押し上げる事ができなかった。そのまま再び、まどろみの中へ。

『燕倪殿、その童はどうされたのじゃ？』

『、、、』

『登台せぬ都守殿の式とは、本当かの？』

『宮中に何か怪しき卦でも立ったと言うが、何故？それより当の蒼奘殿は？』

日がな一日中、そういう事になった。

幸い伯は、一言も言葉を発することも無く、燕倪が政務中は廊下にひっそりと座っているなど、それなりに式神のようだ。

蒼奘が先に文を飛ばしたのが、具合の優れぬ蒼奘に代わって宮中の異変がないかを調べるため、信頼のおける燕倪に預けたという届出が出され、即、受理された。

しかし、暇を持て余す公家連中にとっては格好の的。

伯の周りには終始、人垣が絶えない。

帰りしな、燕倪と共に牛車に乗っていた伯が、

「ああ、、、」

覗いていた物見から身を乗り出そうとした。車を止めると、外に走り出して、

「お、おい、伯っ」

見れば、駆けて行くその先に、大きな黒い狗。

橋のたもとで、ちょこなんと座っている。

往来の人も避けて通るその狗に伯が駆け寄ると、燕倪の心配他所に尾を振ってその腕に抱かれてしまった。

そろそろ空が茜に染まる逢魔が刻だと、ぐずる伯を牛車に戻せば、狗はその様子を琥珀色の瞳でもって、どこか寂しそうにこちらを見つめていた。

「形は大きいが、ずいぶんとおとなしい狗だったなあ、、、」

物見から外を眺めている伯に言ったところで、

「、、、、、、」

反応、からつきし。

がつくり、肩を落として、

「相変わらず冷たいな、相棒、、」

苦笑交じりの溜息だ。

話しかけても一言も発せず、燕倪が姿を現すまでその場を動かぬ伯に異変があたったのは、翌日の宿居の最中であつた。

遠く響く狗の遠吠え。

さして珍しいものでもなかったが、傍らに座っていた伯がゆらりと立ち上がった。

「伯？どこに行く？」

「、、、、、、」

ひたひたと、裸足のまま廊下から庭へ出た。

そのまま伯の背に付いて行けば、見上げる程に巨大な門が見えてきた。

燻された木肌も重厚な大櫓の柱には、青銅の扉。

平素、固く閉ざされたままの不浄門。

宮中で死した者が、運び出される時だけに開く、死者の門だ。

伯の歩みは止まる事無く、その門の方へと歩いていく。

篝火が焚かれた門の両脇にいる検非違使<sup>けびいし</sup>が、燕倪の姿に会釈した

時、伯の水干の袖が振られた。

「あれは、、、」

下弦の月が赤々と冴え、大気も凍えるその夜の闇に、巨大な闇色の獣が蹲っていた。

良く目を凝らさねば見えぬその獣は、今、伯が投げたと思われる札三枚によつて、陽の光にも似た輝きに当てられ、動けずにいる。

「燕倪、、、」

低い、その美声は、、、？

「蒼奘?!」

見れば伯が漆黒の双眸を向けたまま、

「この狗、逃すなよ、、、」

「お前、どうして伯の、、、」

「憑代として最適だと、そう言っただろう? さすがに病に侵されぬ体は、冴えが違つわ」

もう一枚札を投げると、

ギイイイエエエツ

その体が引きつったように痙攣した。

「燕倪様ッ」

「おい、検非違使、その篝火を消せ」

「は、、、」

伯に言われ一瞬呆気にとられた二人に、

「とにかく言うとおりにしろ」

「は」

燕倪の一押しで篝火を大地に倒して踏みつける。

「ここではお前の業丸が抜けぬ。引きずりおろすぞ」

伯の手がすなりと手首まで大地に差し込まれると、巨大な根がうねりつつ迫り出した。

「おお?!」

「遷都以前よりこの地にあつた齡五百年の橘の木よ。その神通力、借り受けた」

生き物のように撓むと、獣に絡みつぎ、  
ギャンッ

大地に叩きつけた。

それでもなお立ち上がり牙を剥く、黒き獣。

グギガガガアアッ

「ぐ、、、なんて咆哮だ、、、」

その声が、紛れもない怨嗟であると、肌に奔る悪寒で嫌でも分かる。

柄頭に手を置き、身構える燕倪の傍らで、伯が人の悪い笑みを浮かべた。

「その声、お前にしか聞こえぬよ、、、」

「何?!」

どういうことだ、と問う前に、もう一度咆哮が襲った。

顔を顰める燕倪に、

「お前の一族に向けられた恨み辛みだ。それを獣に巢食わせた輩がおるようだな、、、」

伯は、うつそりと言った。

「何故、俺なんだ?!」

「簡単だ。備堂の一族の中でも、お前は帝の信頼も厚い。そのうちうつかり左大臣になどなられては、困る者がおるのだろう」

「別に俺は、、、」

燕倪が生まれた頃既に、権力争いにおける勝者であった備堂家。

その夭折した先の天皇に代わって、当代醐耀天皇の後見役を勤めた太政大臣備堂尚継康成を、伯父に持つ。

渦中にいる者は気にも掛けぬが、この燕倪、年頃も同じ帝をかつては友と呼び、共に育ったような男なのだ。

「待てよ。すると、術者は、、、」

「一族に名を連ねる者の企みであろうよ」

「、、、、、、」

一瞬、憂いに沈んだその顔を、伯の一瞥。

「ふ、、お前でも、神妙な顔をするのだな？」

「からかうな、こんな時にっ」

伯の顔なのに、その笑みを刷いた容貌は、まぎれもなく蒼装のもの。

「誰か、知りたくはないか？」

「知ったところで、俺がどうこうすると思うか？こんな時に、くだらぬっ」

むっとした様子で頭を掻き毟った。

「今、月を隠す。月の光は魂魄を惑わし、夢に誘うでな。しくじるな」

どこか満足気に頷いた蒼装。

「お前が言うことはよく分らんが、姿が見えるものなら斬れぬものなど、無いよ」

「いつもながら、頼もしいかぎりだ、、」

短く呟いた後、その唇に押し当て空に投げた札は、変じて雲となった。

盛り上がり、うねりながら漆黒の雲龍となったそれは、月の光を阻むべく駆け上り、そしてその巨体で、月を隠してしまった。

「今よ、、」

「おう」

太刀の鯉口を斬ったその瞬間、

「な、、」

白い水干が阻むように舞い込んだ。

その一閃。

「か、、う、、」

赤々とした飛沫が、翡翠勾玉の首飾り共々、飛び散った。

「伯ッ」

庇ったその巨大な獣は、伯の体を抜けた閃光を受けると高く跳ね上がり、そのまま闇に紛れてしまった。

「逃げたぞっ」

咄嗟の事に、検非違使がその場から逃れるようにあたふたと獣を追って行く中、

「何故、、、おまえ、、、」

呆然とした燕倪は、胴を割られて痙攣を繰り返すその童を見下ろし、震える声でその肩に触れた。

俺は、なんてことを、、、こんな、幼子を、、、

「かふ、、、か、、、」

ごぼ、血泡を吹くその瞳から、涙が溢れ、

「伯、、、」

そのまま、あっけなく頭を垂れてしまった伯を腕に、項垂れるしかできずにいた。

「一足、遅かったか、、、」

声に振り向けば、開くはずのない不浄門が、音も無く開いていた。その門を潜り現れたのは、狩衣姿の蒼装。

「随分と、迎えに来るのが遅れてしまったな、伯、、、」

「蒼装、、、」

物言わぬ、その体。

蒼装が代わって、その袂で抱き上げる。

白き衣の袖にじんわりと、朱が滲んだ。

「帰ろう、、、」

燕倪に何も言わず蒼装が背を向けると、忽然と牛車が現れた。

行灯を手にした琲瑠が、いつものように淡く微笑みながら燕倪に会釈をして、主のために簾を上げた。

「蒼装」

たまらず名を呼べば、僅かに首を捻った男が、

「安心しろ。死相は去った、、、」

ただ、それだけを言い残し、車に乗った。

「そ、うではなく、、、そうでは、ないだろうっ」

憤りと申し訳なさ。

優しげな響きさえ残して、その男は去ってしまふ。

「蒼装ッ」

いっそなんて事を、と胸倉を掴んでくれたら、どれ程気が休まるか？

その仔を奪った俺を赦さぬと、人らしく恨み言一つこぼしてくれれば？

握り締めた拳。

己がした事をと焼き付けねばと振り返れば、

「お、、、」

あつたはずの血溜まりは、忽然と消え、何時閉まったのか、不浄門も固く閉ざされたままであつた。

傾いた板戸の隙間から吹き込んだ風。

四方に据えられた灯明が、掻き消えた。

「ああ、、、」

印を結び、祭壇の前で端座していた紫紺の薄絹被った者がよろめいた。

仄の暗い古びた庵であつた。

その後方で腕を組んでいた男は、口髭を忌々しそうに扱きつつ、その者を睨み据えた。

小紋を散らせた浅葱色の直衣が、その身に纏わりつくようなそんな気品を漂わせた、到底こんな廃屋など似合つかわしくない男であつた。

「しくじったのか、、、」

低いその声音に、薄絹を纏った者は慄いた。

「も、申し訳ございませぬ、、、よもや、魂移しをしてこようとは、、、」

「東国一の怨み屋も、そんな程度か、、、」

「お赦しくださいまし。幸い、業丸にて連れの者が手傷を負ったようでございます。すぐに別の鬼を仕立てて、、、」

「、、、、、、」

震える女の声であつた。  
はらり、、、、

太刀の柄でその薄絹を払えば、額から赤紅の血を滴らせた若い女の顔。

その女の細い顎を上向けると、闇の中で男が低く、

「では、そなた自身が鬼となれ、、、、」

その口を押さえると、薄絹を絡めとつた刀身が、鈍色に煌いて、  
「うううくツ、、、、」

背から脇腹までをも貫いた。

薄絹が塗れて重くなつた時、ようやく男は太刀を引き抜き、女を置いて外へ出た。

大気が冷え冷えと凍える、夜。

男は茂みに用意してあつた油壺を庵に撒いて、そして馬を繋いだ木に掛けてあつた行灯を、無造作に放り投げた。

立ち上る炎に怯えた馬の首筋を撫でて、いなしながら、その庵が炎に巻かれるのを見届ける。

程なくして、

ギキ・・・イイイイツ・・・

炎に焼かれ傾き、重さに耐え切れず軋む、柱や梁の、悲鳴。

まるで女の断末魔のようで、男は、端正な口元に侮蔑の笑みを浮かべたまま、馬の腹を蹴った。

山村に住まわせた女の元に通うために。

「、、、、、、」

牛車の中、そつとその青褪めたままの頬を擦っていると、袖に滲んでいた血は、霞んでいく。

深く斬られ、内臓も覗いていた体はしかし、その人の腕の中で何事も無かつたかのように再生していった。

だが、それとは裏腹に体は重く冷たく、確実に死に向かつて行く。

「魂が、、抜けておる、、」

ぽつりと呟いた蒼装。

そつと胸に手を置くが、その先に感じられるはずの肝心な魂の輝きが、無い。

「都守、、」

程なくして屋敷に着く辺り女の声がして、牛車が止まった。

垂髪も長々と地に這う程の十二単の女が、古びた屋敷の門前にひっそりと佇んでいた。

「天狐の使いか、、」

その両肩の辺りに青々と狐火が灯っていた。

「若君を呼びに無限坂を下るのならと、主様がこれを、、」

「痛み入る、、」

琥珀色の双眸をした女が捧げ持つのは、この季節だというのに、

四季折々の花で拵えた燈籠。

どのようにして編まれてあるのか、その骨組み、枠、すべてが彩り違う花々で出来ていた。

そしてそのどれもが互いの彩を引き立て、香りは絡み合い、一つの機能としての自覚か、月明かりの中に茫洋と輝き、浮かび上がる。淡く桃色に染まった大輪の牡丹が、開かれた花の燈籠の中で仄白い燐光をちらつかせ、甘い香りと共に煌々と光っている。

長い柳の枝で編まれた燈籠の柄を取ると、

「これは良い香りだ」

「主が丹精込めて育て、合わせた花でございます。花は生き物。お急ぎくださいませ、、」

「ああ、日を改めて礼に参ろう。主殿に、どうかよしなに、、」  
「はい、、」

深々と一礼すると、その姿は狐火そのものとなって屋敷の門の中へと消えていった。

灰褐色の湖面に、太陽が遠く浮かんでいた。

鈍色の空には、まあるく満ちた月が二つ。

そのか細い月光の中、白い布に黒字で　を描かれたものを顔の前に垂らし、右前で合わせた死装束の者達が列を成して湖面を沈むことなくしずしずと歩いている。

大人も子供も男も女もいる。

皆、一様に無言だ。

案内の者がいるわけでもないのに、その足取りは何かに導かれるように一定の速さを保っていた。

彼方。

何も無い。

ただ、湖面だけが果てしなく広がっている。

その限りなく広がる湖面のどこに行くのか？

よくよく目を凝らせば、遠くに小さな黒い一団がいくつも、同じ方向に向かっているのが見えるだろう。

彼らも同じ装いで、同じ目的でもってそこを渡るもの達だと、考える者はいまい。

皆、何も見えては居ないのだから。

湖面の下には、皆の影が、落ちている。

あるものは胸を押さえ、あるものは足を引きずり、五体のいずれかが欠けている者もいる。

それでも体は進んでいく。

その群れの一つ。

巨大な黒影が、湖面の下で蠕動していた。

列はそのまま、湖面の下では巨影の中で、他の影達が怯えていた。程なくして、列から、一つの小さな体が抜けた。

巨影も、その体に続いた。

「、、、、、、」

伯であった。

邪魔そうに顔の前にある布を外すと、ひたひたと湖面を歩きはじめた。

しかしすぐにしゃがみ込んでしまう。

両手で湖面を掬う仕草を繰り返すと、灰色を帯びた水が、その手の中でさらさらと砂と化した。

「あ、、、」

いらだったのか手を払うと湖面の下で影が身震いし、その衝撃が大きな波が起こった。

突如としてその巨大な波に吞まれていく人の群れ。

そして、その騒動に目覚めたのか、巨大な背びれが四方より現れ、迫ってきた。

それは、湖面の主だったのか？

巨大な顎が湖面から迫り出すと、どす黒い鼻面が覗いた。

漆黒の闇を詰め込んだ眼窩を持つ、髑髏の形相をして、体は骨ばった深海魚のようであった。

四匹の髑髏魚が伯を飲み込む刹那、

ギイグガガゴゴオオオ・・・

湖面下の巨大な影が、伯を包み込むように迫り出し、翠の透明な鱗と紫の背鰭を持つ者として一体と化した。

巨体にぶつかる手前で、その四匹は触れる事も構わず大きく仰け反ると、眼窩から赤黒い血を流しながら、湖底へと沈んでいってしまったのだった。

人々の群れも、その髑髏魚の引波に吞まれてしまったのか、すでに忽然と消え去ってしまい、世界には、それだけが残った。

ぽつねんと残った巨大なものは、湖面の上を這いながら、突き出した頭部なのか - 突起を巡らせて、しばしその空間に遊んでいたが、

くん、、

不意に鼻を鳴らした。

いや、鼻なのかは定かではない。

突起が、そのような音を立てたのだ。

のそり、、

突起が振り向くと、ゆるゆると這うように両脇に突き出した鰭状のもので体を押し始める。

すん、、、すんすん、、、

香りに導かれるまま、進むことしばらく、

「こんなところに、、、」

まるでかくれんぼをしている子を見つけた親のような、どこか暢気な、そんな声音。

突起が、覗き込むように湖面に近づいた。

そこに立っている男が誰なのか思い出せなかったが、その手に持った花の鮮やかさ、香りの芳しさにくったりと体を伸ばし、湖面に腹を付ける。

「死者の目にも花の色、色鮮やかに映り、その鼻にも、香りは届く。幽世にも、成る程、花は咲くからな。故に、現世において弔いは、花、と相場が決まっている、、、」

手に花燈籠を持った男が、湖面にしゃがみ込むと、手を伸ばした。その手が、翠の鱗を持つ透明な粘塊質の巨体の腹に入ると、

伯

そう名を呼んだ。

粘塊質の中から、白い手が伸びる。

膝を抱えた姿勢でうつそりと、顔を上げた童の姿が、ゆらりゆらりと陽炎のように現れた。

その手が男の手を取ると、死装束の伯が太陽のある湖面へ。たちまちにして足元となった月の世界。

そこには、翠の巨体の姿は無く、巨影だけが広がっていた。

「ああ、うう、、、」

すんすんと花燈籠に顔を近づける伯を、そのまま袂に抱くと、無理をさせたな。赦しておくれ、、、」

その群青色の髪に頬を寄せた。

きつく抱くものだからたまらず身じろいだ伯も、すぐにおとなしくなり、鼻を鳴らしてその人の香りと温もりを確かめる。

「伯、さあ、行こう、」

二つの影がそのまま溶け合い、彼方の白い太陽へと続く坂を上り始めると、俄かに黒い雲が湧き雷雨となった。

が、花燈籠を持つ者には、風、雨、雷、そのいずれも白い繭の如き光に包まれ、歩みを阻む事は出来なかった。

御簾の向こうの闇から現れた蒼装は、すぐさまその足で己が寝所に向かった。

手には花燈籠を持ったまま、乱暴に御簾を掴み上げると、そこには伯が横たわっていた。

「主様、」

隅に置かれた行灯にとも燈る薄明かりの中、伯に付き添っていた汪果と琲瑠が主を見上げた。

「下がれ」

一礼して出てゆく二人と入れ替わりにその傍らに座すと、白い纖手をその胸元に当て、しばらくしてそつと手を引いた。

その金色に染まつたままの眸に滲んだのは、紛れもなく安堵、そのもの。

伯の寝着の襟を正し、掛けていた衣をそつと胸元まで引き上げると、花燈籠を軒下に吊るした。

後は傍らで、夜空が白々と明け、薄桃色の雲たなびく彼方の山々が現れる様を、御簾越しに眺めている、

「、、、、」

明け方、勤務を終えて宮中から帰宅し、結局一睡もできぬまま燕倪は、蒼装の屋敷の前に立っていた。

目の下には隈を刻み、白目は赤々としていた。

まんじりともせずに腕を組み、ここまで言葉を探して歩いて来たのだが、結局の所、掛ける言葉も見つからず。

どうしたものか、時分は、あんな事があつた翌昼であつた。

結局、黒い獣を討ち果すことは出来なかった。

追っていた検非違使も、さらに四散した為に、すぐに見失ってしまつたと言う。

往来の人々の視線も気付かぬほどに、眉間に皺を刻んでいると、

「燕倪様、主がお待ちかねでございます」

ふいに見知った水干を纏った若い男が立っていた。

「琲瑠、、、」

「いつまでもそうして門の前にいらっしゃっては、往来の方々も不審がられましょう」

小首を傾げて向こうを見つめるため、振り向けば、道行く人々と  
の眼差しに慌てて背を向けた。

「ここは知らぬ者はいない都守蒼装様がお屋敷。ささ、燕倪様、いつものように、、、」

ようはさつさと中へ、そう言いたいらしいのだが、いつもは一声  
掛けただけで案内の者を待たずして入るのに、今日の燕倪は琲瑠に  
背を押されるようにして中へ。

よく手入れされた山野草が茂る小道を行けば、

「待っていたとは、蒼装は、、、」

「お待ちかねでございます」

「、、、、、、」

それ以上何も言えずに薄く氷が張ったままの池に出た。

阿四屋の先、渡殿伸びる母屋に、艶やかな紅の衣を肩に羽織った  
白い髪的美丈夫が、佇んでいた。

「燕倪、遅かったな、、、」

「蒼装、、、」

「浮かぬ顔だな。道中、何かあったか？」

「こんな時に存外意地悪い、と見つめた先に、

「あ、、、」

御簾越しに大杯を干したのか、げふ、と霊紫を吐く伯の姿。

「は、、、は、、、」

「菊の香りも七日までだと、花守が言っていた。お前の酒、先に呑んでいたぞ」

御簾を上げれば、けろりとしたもので、伯が杯を叩いて催促。その伯の背中を抱くように座ると、大振りの瓶子を燕倪に渡す。

「、、、、、、」

何も言えず燕倪が酒を注ぐのを、董色の眸が見つめている。

やがて満たされた杯は、その可憐な手によって軽々と上げられ、酒は一息で呑み干された。

「まふ、、、、」

「それくらいにしておけ、伯」

髪を撫でながら杯を取り上げると、汪果が運んできた膳から、瑠璃の食器を手にし、蒼装自ら匙を持つ。

とろりと、海松色みるいろを帯びた乳白色の粥。

磯の香りが、ぷんと漂った。

「それは？」

「今朝方、今居の浜に上がった黒鮑だ。人の手には直接触れさせず、やわく炊いて、すりおろし、粥状にしたものでな。神饌料理の一種よ、、、、」

それを赤子にするように口に運んでやりながら、袖を掴んで放さない伯を見つめ、

「伯に掛けた首飾り、あれはなあ、こんなこともあるつかと造らせた身代わり護符のようなものだ。まあ、魂は驚いたのか、抜けてしまい、探し出すのに少々手間がかかったがな」

「さ、先に言ってくれっ、俺はってつきり」

「斬った、か、、、、」

「俺は、今でもはつきりと思い出せる。あの時の手応えを、、夢見が悪過ぎるぞ、、、、」

溜息と共に、肩を落としたその姿に苦笑しつつ、蒼装は匙を置いた。

「お前は斬ったさ。あの狗に付いた鬼をな、、、、」

「鬼だと？」

「ああ、狗に巢食った鬼だ。もう、その魂は喰われた後だったのだろぅが、宿った鬼共は四散しつつ、術者に還ったことだろぅて、」

代わりに瓶子を持つと、小振りな杯に酒を注いで、すつと燕倪の前へ。

「お前は、冷静だな。犠牲など厭わぬと平気な顔をして、策を講じ実行して、」

恨み言の一つを、酒気を帯びた吐息と共に吐き出した。

蒼装は、淡く微笑んでいる。

「そんなことばかりしていると、いつか誰も戻って来なくなるぞ」

「ああ、分かっている、」

伯の肩に手を置いたまま、

「誰かが代わりに死を負わねば、死相は消えぬ。そう言うものでな私であれば良かったのだが、」

「これからは、先に言え。そのようなものであるのなら、俺はお前にも伯にも、迷惑は掛けたくはない」

強い眸に蒼装が、微笑んだまま、頷いた。

故に、みすみす死なせたくないのだが、

伯も、じつとその顔を見つめている。

鈍色の燕倪の眸が、その伯を見つめると、

「お前は俺の恩人だ。だが伯、今度、俺に死相が出ていたら、俺はちゃんと自分で落とし前をつける。蒼装の頼みだろぅが、俺の為に身代わりになるうなんて、考えてくれるな」

茫洋としていた伯の紫の大きな眸が、焦点を結ぶ。

「俺も蒼装もお前の気持ちも知らずに、あの狗を斬ろうとした事はすまないと思っっている。思えばあの狗は、お前に助けを求めていたんだな。だからこれからは、伝えたいことがあるのなら、お前もちゃんと先に言っ、」

「わかった、」

小さな声であつた。

思わぬことに一瞬顔を見合わせた蒼装と燕倪。

「い、今の聞いたか、蒼装」

「ああ。私も、伯の声を聞いたのは初めてだ、」

「お前、なんで今まで黙っていたんだ」

「、、、、」

再び黙つた伯は、もぞもぞと袖を引いて、蒼装の懷に逃げ込んだ。その背を擦つてやりながら、

「伯はよく喋る。そうさな、神託とでも言おうか、想いを伝えたい相手の脳波に合わせて送ってくる。それは脳で言葉や映像として変換され、まあこれには、個人差があるがな。私と伯は、こうして交信していたから、特に現世の言葉を必要としなかったのだ、」

「いずれにせよ、俺には理解できんし、体験もできんということだな」

「そう思っているうちは、そうなるかな」

「まあいい。伯に声やそれなりの考えがあることが分かつただけでも、いいさ」

無骨な手を伸ばして、伯の頭を撫でると、ちょっとだけ燕倪を見つめ、すぐにまた顔を蒼装の胸に埋めてしまう。

「照れているのだよ、」

「それくらい、俺でも分かる」

「、、、、うう」

もぞもぞと衣に顔を押し付けるのを好きにさせながら、蒼装はようやく杯を手にした。

その杯に、燕倪が酒を注ぎ、

「雪だ、」

白く薄雲が覆つた空より、羽毛大の雪が舞い降りる。

それを眺めながら杯を干せば、燕倪がもう一杯、と瓶子を傾ける。

「さて、風邪を引く前に、中に入ろつか、」

「ああ。続きは火鉢をひきつけて」

「肴は干したサザエがあるが」

「それで呑もう、」

「ああ、」

御簾の向こうへ。

蒼装に手を引かれて歩きながら、伯が振り返ると、

「、、、、」

軒先に吊られた花燈籠が役目を終えたのか、細かい粒子となって雪の合間に流れていくところであった。

## 第貳幕前

都守

（前書き）

蒼奘は妖異を鎮めるため、業丸の対になるものを燕倪に探させるのだが、、、

死人還りの都守蒼奘、業丸を継ぐ武官燕倪、幽身であるがこの世に縛られた伯。それぞれが紡ぐ異国絵巻、第貳幕前編。。。。

## 第式幕前 都守

「主様は、若君共に今し方、お出かけになられたばかりで、」  
往来も白く染める雪が深い、朝方のことだった。

ちらほらと梅も咲き始めたと言うのに、珍しいこともあるものだ  
と、ふと思いついて訪れてみれば、すでに家主は経った後だと言  
う。「いつ戻る？」

「さて、、、すぐにと、晩にと、明日とも、果たして一月、一  
年先か、、、」

言いながら、門前に応対に現れた琲瑠が苦笑した。

「朱央門に鬼火が出たからと出掛けて行って、戻ったのは半年後。  
思い立ってかつての都跡へ陵墓を見回りに、ふらりと行ってしま  
うあいつの事だからな。お互い、苦労する」

「はい、、、あ、いえ」

今度は燕倪が苦笑した。

「また、寄るよ」

「お待ちいたしております」

懷手で往来に行く者同様、寒さに背を丸め、歩き出す。

しばらく行った先の辻で、ふと顔を上げ、

「白梅か、、、まるでいたずらな女童のように、かるやかに風に遊  
ぶ香りだなあ、、、」

見上げた先の古びた屋敷の堀の向こう。

突き出した梅の枝。

気が早い春を謳歌する鶯に、思わず足を止め、目を細めたのだっ  
た。

燕倪が見上げた梅香るその屋敷の内に、二人は居た。

咲き乱れる花の繚乱。

竜胆、鷺草、女郎花 木瓜に芍薬、蓮の花 菖蒲、椿に牡丹に福

寿草。

ありとあらゆる季節の花々が、屋敷を覆いつくさんとはかりに競い咲いた庭。

しかし庭と呼ぶには、あまりに広大。

蝶が舞い、小鳥が歌い、鹿が遊び、兎は野を駆けていた。

彼方には、遠く緑深い山稜さえ仰ぎ見え、屋敷の塀は何処？

外界の凍える季節は嘘のようで、木漏れ陽が心地良く、空は青く澄んでいる。

その庭に、立っていた。

「伯、むやみに踏み荒らしてはいけない。この世に在るものには、等しく命があるのだ、、」

蒼装の手から離れ、青い蝶に誘われ、飛び石からその庭へ入り込んで、くんくんと鼻を鳴らす伯。

足元で可憐に揺れる蓮華の一つに手を伸ばし、

「伯、、」

口へ。

蒼装の静止の声も聞かずに、また一つ。

「無邪気なものじゃなあ、、」

「天狐、、」

忽然と現れたのは、金色の髪を葛で編み長く背に流した、獣の耳と尾を持つ者。

その長身に纏ったのは、天界で折られた極彩色の綺羅の重ね。

虹色に変化する羽衣をやんわりと纏い、ふわりふわりと長く広がった尾は九つ。

紺碧に澄んだ涼しげな双眸が伯を見つめると、秀麗なその容貌が愛おしげにほころんだ。

「我は、構わぬよ。天界の大気と陽光で育てた草花だ。この幼な神には、どれもこれも、約束された彼の地の産物であると同時に、その神器を満たす氣、そのものなのだから、、」

長く赤い爪を持つその白い手を、蒼装の肩に置くと、翡翠色の唇

を耳元に近づけて、

「で、、どうなんだえ？具合の方は、、」  
とたんに下世話な顔になる。

「せっかく縛った幼な神。悪食な、その食指が動かぬはずがなかるう？」

「いずれは、天津国に還す約束でな、、」

「ぬ、、そなたでも畏れるものがあるのだなあ」

少々驚いたのか、柳眉を寄せた天狐。

その足元に、

「ふああ」

立った、伯。

「伯、、天狐の遙絃。花燈籠を私に持たせた者だ」

伯の目線までしゃがみ込むと、

「そうじゃ。かように近いのに、中々参らぬので、少々世話を焼かせてもらったぞ、伯」

ぐしぐしとその頬を抓る。

ようげん、、

見つめるその董色の瞳が澄み、

ソウ、、

その声が、二人の脳に直接流れ込む。

伯が手を伸ばすから、握ってやると、

ようげん

「私は地仙だが、これでも神の端くれでな。なあ、伯。どうだ、天匠に作らせた菓子がある。中でゆるりともてなしを、させてはもらえぬか？」

蒼装の顔を見てからこくりと頷いて、一行は飛び石を渡ってその先へ。

古びた概観とは無縁の、朱塗りの屋敷。

両翼に広がるのは、回廊によって繋がれた離宮。

屋根は、孔雀の羽で葺かれ、梁に渡さているのは薄桃や乳色、浅

葱の紗。

屋敷に足を踏み入れた刹那、

ビクッ、、、

伯が硬直。

「何もせんよ、、、」

蒼装にしがみついた。

その視線の先に映ったものは、天空を写す床。

彼方の雲間から、巨大な龍魚が遊ぶ姿。

伯を抱き上げた所で先を行く遙絃が、

「こつちだ」

離宮の一つへ。

一室には、極彩色の調度品が揃えられていた。

それらすべてが天匠によって命を与えられ、描き刻まれた月は満ち欠け、柳の枝はそよ風にはらはらとなびき、鳥は時折こちらの世界に姿を現した。

円卓に腰を下ろせば、茶器と菓子に乗った盆を手にした美丈夫が、雪菊を縫い取った長袍を纏い現れた。

長い砂色の髪を編んで肩に垂らし、涼しげな眼差しで二人に会釈。

「伯、胡露と言う。私の夫じゃ」

うろっ、、、おっと、、、

「共に暮らし、過ごすと決めた伴侶の事だ」

伯の眼差しに胡露は微笑み、茶器を操つる。

その芳ばしい香りが満ちると、柔らかな真綿の如き菓子を伯の前へ。

「どうぞ」

蒼装が菓子を割ってやると、砂糖漬けになった色取り取りの花弁が金色の糖衣を纏い、こぼれでる。

指で摘むと、それを伯の口へ。

しゃくしゃく……

気に入ったのか、伯はひとつぶひとつぶ手に取り、眺めながら自

ら頬張り始めた。

その様子を見つめながら、蒼装が青磁の茶器から注がれた琥珀色の茶を、薄い翡翠の碗に受け、そつと唇に当てる。

碗の中で開く花々が、えもいえぬ香りでもって舌を弄い、まろやかな甘露はほろ苦くも甘やかに、口腔に広がった。

「ほう、、、天香四万七千八百九番、江華香か、、、」

胡露が、嬉しそうに目元を綻ばせた。

「くく、、、」

口元を押さえた遙絃だったが、すぐに堪え切れず口を天井に向けて笑い出した。

豪快なその笑い声に、董色の瞳を大きくした伯。

薄つすらと唇に笑みを刷き、傍らにいる伯の髪を撫でる蒼装に、

「胡露、また、お前の負けだ」

「ええ」

胡露が眼差しを向けて頷いた。

「いや、私の方こそお前の調香には、恐れ入る、、、」

しげしげと碗の中を覗きながら、

「時が経てば、移ろいゆくものと同じ、、、碗の中と言うのに、其の庭と同じだ。咲く時期を違えては混ざり合い、新たな天香へと変わる、、、既にこの香り、私も知らぬ香りとなった、、、」

「恐れ入ります」

「待て待て、胡露。蒼装はそう言うては、お前に花を持たせるが、賭けは私の勝ちだぞ」

恐縮して拱手した胡露に、遙絃が子供のように頬を膨らませた。

その肩に、胡露が微笑みながらそつと手を置けば、それで気が済んだのか、遙絃もまた手を重ねた。

「、、、、、、」

もう菓子に飽きたのか、伯は指を咥えたまま、感情を浮かべぬ深い董色の瞳で二人を見つめている。

その伯の唇に、茶を含ませながら、

「さて、天狐。胡露の調香の腕を試すために、招いたのではあるまい」

蒼装の漆黒の双眸が、深く澄んでいく。

微笑を浮かべたまま、紺碧の双眸を獣のそのように細めると、卓の上に付いていた肘を立て、手の上に顎を載せた。

「私がこの地に流れ着いて根を下ろし、百八十年。その頃はここも人など入らぬ芒生い茂る草原であつたな」

差し伸べた手には、胡露が差し出した煙管。

昔を懐かしむのか、一息つけると、深緑の煙が舞い上がった。

「そこが切り開かれ、都が作られ、人が集まつた。人の中は存外住みやすいものだ。そのまま居を構えてみれば、生まれ、そして終りある者等のなんたる愛しいことよ。地仙にありがちな情が、つい、出てしまつてなあ。数多のこの土地を汚す者どもを祓つてきたわな、」

「、、、、、、」

蒼装は、菓子と茶に飽きて庭に出て行く伯の背中を見送っている。

その端正な横顔に、細く深い藍の煙を吹きつけると、

「気まぐれに、人の形にて現れたそなたを黙つてこの都に受け入れたのは、私と同じだと、そう、思っていたのだが、、、、」

蒼装は、眼差しそのまま、

「真に等しいものなど、この世にふたつと存在せぬよ、、、、」

「では、まかりなりにも都守の名を持つのなら、早々にこの異変、鎮めぬか？」

席を立つた。

広いその背が、伯の姿を追つて外へ出て行く。

「蒼装」

呼びかけに、

「そのうちにな、、、、」

低く、ひどく面倒そうな声音が、風に乗って舞い込んできたのであつた。

燕倪の屋敷である。

無骨な門構は武門の出であるが故だろうが、その門を一步潜ると、雪が積もった庭の向こうにさすがに名うての貴族らしく、重厚な寢殿造り。

今は、ひっそりと雪に沈んで、白々としていた。

屋敷から戻つてすぐ火鉢を引きつけ、昨夜読みかけた書物などを、と手を伸ばしたところであつた。

御簾を押し上げて、雪が舞い込んだ。

白い、水干の袖が翻つたのだと気付いた時には、うつ伏したその背中に何かが腰を下ろしていた。

「燕倪、寄つたぞ、」

何かなんだか分からず、とにかく声がした方に顔を向けると御簾越しに、白い狩衣に灰薄の絹をゆったりと首に巻き、紫紺の長衣を羽織つた長身の男。

その腰をゆうに越す、白い髪の主に一見、雪の精でも現れたかと思えば、

「よう冷えるな。上がるぞ」

ずかずかと上がつて来ては、火に当たった。

「蒼装」

座つたその膝に、背中に居た伯が入った。

「今し方、お前の屋敷を訪ねたばかりだぞ」

「ああ。近くの屋敷で茶を馳走になつていてな。雪が深くなる前にと出てきてみれば、お前の後ろ姿が遠くに見えた」

「それで、ついてきたのか、」

「そんなところだ」

「まったく、一声掛けぬところが、お前らしいよ」

ようやく身を起こしたところで、

「で、お前はいったい俺の背中、」

伯が、無言で天井を指差した。

「ああ？」

その白い指の先。

天井の隅に、青白い輪郭を浮かび上がらせた黒き闇が張り付いていた。

「な、何だ、あれはッ」

思わず刀架に手を伸ばすその手首を、白い手が掴んでいた。

「刺激するな。別に、悪さをするようなものではない、」

「だが、あんな化け物、」

「伯が、すでに抜った。あれが、お前の首の後ろから、入り込もうとしていたのでな、」

「入るって、俺の中に？！どうなるというんだ？！」

「酷い風邪を引く」

鼻で笑ったようだった。

「お、おい、」

「それより、この屋敷は客に茶も出さぬのか？」

「案内の者を待たずに屋敷に上がる奴を、客とは呼ばん」  
ぶつぶつ言いつつも、廊下に出ると、

「籐那、居るか？」

既に勤める若い奉公人の名を呼べば、少しして軽やかに駆けてくる足音。

「はい。何か、旦那さま」

「茶か、何かあったかな」

「えつと、見てきま、」

踵を返すその背中に、

「茶は、先ほど馳走になつてな」  
しれ、と蒼装の低い美声。

「お酒でしたら、」

奉公人の声。

溜息をつきつつ、

「お孟どのに言つて、爛をつけてくれ。それと、何か肴があればと」

「はい」

燕倪が火鉢の側に戻ってきた。

「最初からそのつもりだったのだな」

「たまには良いではないか。私がこの屋敷を訪れる事など、そうなのだから」

そして、降り積もる庭の雪を眺めながら、

「このまま二晩も降り積もれば、さすがのこの都も、埋もれるやもしれぬなあ、」

先程まで小振りであつた粉雪が、今はもう、親指大の羽のように、ゆらゆらと灰色の影を落としながら舞い降り始めていた。

「都守が、不吉な事を言うのだな」

「吉も不吉も本来なら、人の手でどうこうして良いような、理などではないのだがな」

それきり黙つて、膝でうとうととしている伯に長衣を掛け、そのまま眠りに落ちてゆく様を見つめていると、盆を持った奉公人が姿を現した。

黒目の大きい、利発そうな十二、三の少年。

主の古い友だと聞いていたが、目近に見る白い髪之都守、蒼装の姿に少しばかり肩に力が入る。

「お酒、こちらに、」

「ああ、置いてくれ」

早々に籐那が置いていった盆には、杯が二つ、瓶子が二つ。

そし干して漬けた粕漬けの大根。

皿の上でひねくれたそれがこんもりと盛られていた。

それを齧りながら、互いに杯に酒を注ぐと、

「病みには、二種類程あつてなあ。不摂生をして罹る病と、病魔、疫神とも言つが、その名の通り、鬼に巢食われる病だ。その一つが、これさ」

干された杯で指し示した天井に、今だ張り付いたままの化生のもの。

「抜ってくれ。そんなもの、屋敷の者に憑いては困るぞ。現に俺に入り込もうとしていたんじゃないのか？」

「無防備にうつ伏して、首の後ろを晒したからだ。ここには、五臓六腑に続く孔が空いているからな。姿勢さえ正せば、近づきはせん」

「そんなもののなか？」

首の後ろを摩りながら、燕倪が首を傾げる。

「何、養生しておればこの手の病魔は問題ない。普段は見えぬだけで、そここいらに、うようよしておるのだしなあ、」

「ぬぬ、一度聞こうと思っていたのだが、お前、そんなものを毎日見て暮らしているのか？」

蒼装の長い指先が、空の杯を弄う。

「そこに在ると思えば見え、無いと思えば見えない。人の目は、都合良く創られているものだ」

「答えになってないぞ」

「陽の光の中で暮らし、闇の訪れに眠れば、闇に生きるものを見ずして生きることができる」

「うつむ、」

「闇に目が慣れれば、それを容易に見ることができる。月明かりの中であろつと、陽の光の中であろつと、」

燕倪の空になった杯に、酒を注いでやりながら、

「人も動物も、幽鬼も神も、等しく皆この世という一つの世界に発生したものに変わりは無い。その存在を認めれば、その目も慣れて、人の世ではない、等しきこの世を、見せてくれるだろう」

「そうゆうものなのか？」

「そうゆうものだ」

その杯が、干されるのを愉しげに眺めていた。

「それじゃあ、今日、俺が見たと言うことは、俺もお前と同じように、」

「そうとは限らんだ、これが、」

琥珀色に漬け込まれた大根を摘み、露草の如き青味がかつたその

端正な口へと放り込むと、小気味良い音が響いた。

酒と共に喉に流し込むと、

「実はな、この雪も、妖異に変わりが無くてなあ」

「なんだって？」

「この月にこんな大雪が降る事など、この地ではありえぬことな。各地で吹き上がった瘴気によって、お前の目にも力を増した鬼達が見えるのさ、」

「起こっている事を、分かるように説明してくれ」

瓶子をつまみ上げながら、手酌で酒を注ぐと一息に干して、

「この王都の四方には、四神が祀られている、」

「都の者なら誰でも知っている話だ。西の白虎。南の朱雀。東の青龍。北の玄武、だろう？」

その応えに意味深に微笑んだ。

手には、空になった瓶子がつままれ、振られている。

「勿体ぶるなよ」

燗をつけた酒を、新たに運んでくると、蒼装は空になった杯を差し出した。

「そんな高尚な神が、人に力を貸すかよ。祀られているのは、人、そのものよ」

「お前、そんな事。人が、神の代わりになると言うのか？」

差し出されるままに注ぎながら、

「あれは確か、陰陽寮だったか。地下書庫の碑文の間には、真実を語る書があったぞ」

「待てよ、蒼装。大体お前、陰陽寮とは反りが合わなかったんじゃない、」

「ついつい、呆れ顔。」

「都守の名はなあ、宮中では都合が良い。私がまだ、宮勤めで星読みをしていた頃に、大概の碑文には目を通していたがな」

「碑文自体、門外不出。都の大事以外はその門扉固く封じられてい

、  
「というそれを、読んだと言うのか？それも、都守を戴く以前に、」

「糸程の隙間あれば、事足りた、」

「はあ、で、今からお前は、それを俺に言うつもりか？」

燕倪の言葉を受けて、蒼装は唇の端を吊り上げた。

「まあ、そんなもの読まずとも、おおよそは見当をつけていたが、時の結界師は、神と契約する代償を畏れたのだろ。代わりは手っ取り早く人を選んだのさ。それも、贅にはな、その地にとって罪深い者のほうが、良くてなあ」

「都にとって罪深い者、？まさか、槇廼、」

蒼装は、唇に刻んだ笑みを深くした。

槇廼堯元。

今よりさらに北の地に都があつた頃、帝位を争い、朝敵となつた男。

各地の豪族を束ね上げ帝都に乗り込むや、実の兄の首を掲げた男は、その腹心で末の幼い太子を戴いた土師業鷲によって討たれたとされる。

末裔は、その業を封じるために土師の名を改め、備堂を名乗つた。

燕倪はその直系の四男である。

燕倪が手にしている業丸も、槇廼堯元を討つた際に折れた大太刀を、打ち直したものだと言われている。

「心根が清らかであると、人柱となつてもそのまま成仏してしまうのだ」

「大海原に、その屍は流されたと聞いたが」

「刻まれて、首、胴、右手、左手、右足、左足と埋められたのだろ。怨念は、時を経てさらに増長して行くもの。生半な術で封じきれぬものを、あさはかにも試すのが人と言うものか、」

その場所が、正に瘴気を噴いているというのだ。

「このまま進めば、どうなる？」

「瘴気によって人は鬼に巢食われ、両日中に、槇廼堯元は真に鬼と

なつて、復活するであらうな」

「何を悠長に、」

「仕方なかるう。この手の結界を張り直すには、復活を果たす不安定な時期を狙うか、より強い人柱で押さえ込むしかないのだ。お前に策があるなら、別だが、」

「ない」

「んん、」

ふと、膝で丸くなっていた伯が目を覚まし、ぐずり始めた。腕を突つ張つて、身を擦る。

濡れたような深い瞳で蒼装を見つめると、ふらりと雪の降り止まぬ庭先へ。

「、、、そうか」

伯が、雪の中で、こちらを見ている。

少し残った杯の酒。

それを振ると、酒の滴が天井へと跳ねた。

燕倪の視線が天井を這うと、化生の姿がない。

蒼装が立つて、御簾を上げた。

長衣を纏いながら、庭先へ。

「おい」

「伯が帰ると言つて、聞かぬでな。良い酒であつた」

「この事で何か、俺に用があつたんじゃないのか?!」

伯を腕に座らせて歩き始めたその背を追つて縁側に出ると、彼方に開かれた門前に、忽然と牛車が止まっていた。

「ああ、一つ、」

「おう」

「次の満月までに、業丸の対になるものを捜しておけよ」

「業丸の対、」

膝下をゆづに越してしまふ雪の中足を取られることもなく、その白い人影は、牛車へ。

琲瑠が引き戸を開めると、こちらに向かつて一礼し、静々と牛車

と共に深い雪の紗幕の中に消えてしまったのだった。

「おや、、、」

屋敷に着く手前、恵堂橋に差し掛かり、目を細めた蒼装。

「伯、嫌な思いをさせるぞ」

蒼装の長衣を羽織って、覗き窓、ぼんやりと浮かぶ白い山々を遠くに眺めている伯の頭を、優しく撫でた。

屋敷の前には、こもり雪の紋を刻んだ牛車が一つ。

辺りの屋敷の門前の燈籠に火が入れた、青白く滲む宵闇の頃。蒼装が門を潜ると、牛車の主に仕える女が幾人も出迎えた。

「旦那様、奥方様がお待ちでございます」

その声に鼻先で笑い、母屋への渡り廊下へ。

「、、、、」

伯が、ふいに物陰に隠れた時だった。

母屋への渡り廊下の途中にある、来客用の離宮。

平素閑散としたその部屋が、俄かに煌びやか。

机帳には、縫い取り鮮やかな重ねが掛けられ、焚き込められた香で噓せ返るようだった。

御簾越しに見えるのは、黒髪を長く流し、脇息に体を預けた華奢な影。

「こんな雪深い日に、どちらへお出掛けに？」

甘さの欠片も無い、凍てつくような声だった。

「どこでもよからう」

無遠慮に、その手が御簾を押し上げた。

黒瞳深く、目じり吊上がった若い女であった。

「このような雪深い日に、待てど暮らせど訪れぬ男の元へ参ったか？見上げたものだ」

「妻が、夫の下に参るのに、理由などいりましようや？」

「夫、か、、私は、そなたに触れた事など、ただの一度も、無い

と言つのに、、」

侮蔑さえ含んだ眼差しであつた。

「あの日交わした誓いに、偽りはありませぬ故、わたくしは妻となりました」

「人の心は、変わるものだと言つたが、、」

「しばらく、この屋敷におりますので、入用な際はなんなりと、、」

「

艶然と微笑む妻に、蒼装は背を向けた。

「好きにするがいい、、」

廊下に出ると、たつ、とその背に駆け込む小柄な人影。

脇息に凭れていた女が、身を起こそうとした時には既に二人は、母屋の暗がり溶けていたのだった。

「お前が実家に寄るとは、珍しいこともあるのだな」

左大臣備堂真次の屋敷である。

五十を幾つか経て尚、端正な細面そのままに、口髭を蓄えた男は、漆の重ねに沈金の月を施した月吞杯を上機嫌で差し出した。

頼りない灯明の灯りの元、傍らに座していた男が、瓶子を傾けつつ、

「こんな深い雪の中を訪れるなど、気でもふれたかと思えば、、」

「父上に、是非とも伺いたいお話があつて」

「言ってみよ」

それまで右側に置いていた宝刀を前に差し出し、揺らめく明かりの中顔を上げたのは、燕倪であつた。

翌日、降り止まぬ雪の中、宮勤めの帰りにそのまま寄つた態である。

「業丸。其は、武官の道を歩むお前にこそ相応しい」

「破魔の太刀業丸は、打ち直された土師業鷲が大太刀と聞きました。その際に残つた鋼は、、」

「土師業鷲の妹、愛智姫の輿入れの際、桧扇に打ち変え持たせたと

聞いているが、、どうかしたのか？」

「実は、、、、」

燕倪は、昨日訪れた蒼装との出来事を語った。

「ふむ、、、、」

顎先を擦って聞いていた真次は、杯を置いて腕を組んだ。

「宮中に寄せられた嘆願に、怪異に関するものが多く混じり始めたとの報があり、帝が気に掛けておられたが、都守が言つのなら、間違いないだろう、、、、」

「榎廼堯元が関係しているのであれば、土師業鷲が末裔備堂の責」

「榎廼堯元が怨念で、都に怪異、、、、いずれにせよ、都守が必要とするのなら、なんとか探し出さねばなるまい。お前の宮勤めに関しては、わしがどうとでも言っておく。早急に愛智姫に縁あるところを訪ね、其れを都守に渡すのだ」

「はい」

「お前の友の計らいだ。土師業鷲の名に、傷が付くことだけは避けねばならぬ。頼んだぞ」

低く応じた燕倪は、それではこれにて、と席を立とうとし、

「ところで燕倪、通うておる相手はおるのかな？」

再び杯を手にした真次に、引き止められた。

「父上、それどころでは」

「良い娘御が、おるのだがなあ、、、、」

末の燕倪だけが今だ嫁を貰わず、顔を合わせれば父母のこれだ。

故に、二十を過ぎてすぐに実家を出て、早くに妻を亡くした叔父の屋敷で寝起きしていたのだが、この叔父も翌年に病であっけなく逝き、屋敷を継いだのだ。

帝の信頼も厚い燕倪には、すぐにでもそれなりの身分の娘を貰って身を固めて貰いたいところなのであろう。

どうも行く行くは左大臣の座すら上の兄を置いて、この末の燕倪に渡したいと思っているようなのだ。

気配な今の生活が性に合っている燕倪にしたら、出来の良い兄達

こそふさわしいとまるで取り合わないが、今日ばかりは自分から訪れた故、無碍に席を立つことも出来ず、渋々酒の相手。

これでは仕様が無い。明日にでも、始めるとするか、、帝都の行く末が掛かっているというのに、父の暢気は相変わらず。瓶子を傾けつつ、少し羨ましくも思う燕倪であつた。

白々と都を染める雪も、流石に三日も降り積もることは無く、覗いた朝陽に軒先からひたひたと雫となつて零れ落ちる。

昨夜遅くまで酒に付き合つたせい、足取り重く門を潜つた。

厚手の長衣を纏い、足指も十分に厩から引き出された漆黒の肥馬に跨り、

「主様」

「古い縁でな、遠野まで行つてくる。しばらく戻れぬかもしれぬが、心配するな」

籐那に見送られ肥馬『千草』の腹を蹴つた。

白々と光るまだ人も疎らな往来を、軽やかに駆ける千草の背で、

満月と言つていたか、後、五日もない、、、、

思わず、腰に帯びた業丸の柄頭に手をやった。

見つかるのか、、、、

不安に思いながら、頭を振る。

いや、見つけるさ

都の西門を抜る街道へ向かう道すがら、ふと白梅の香りに首を傾け、

「う」

ふわり……

白い衣の袖が肩に触れ、見れば小さな手がそこにある。

「な、、、、」

首を巡らせようとして、

「エンゲ」

その声を聞いた。

いつか聞いた、その茫洋としてたどたどしい声の主は？

「お前、は、伯か?!」

こくり、、、

背中で頷いた気配。

こんな往来に気配、重さを感じさせず、疾駆する馬に飛び乗れるものなど、化生か摩訶不思議な都守のところの伯しか思い当たらない。

「こんな朝早く、、、い、家出か？」

まさかとは思いつつ問えば、またしても少しして、

こくり、、、

と、頷く気配。

「家出、したのか、、、早熟な、、、」

屋敷に連れて行こうか、と思えば、

しやらり・・・

見透かしたように肩越し見せられたのは、翡翠と硝子管の首飾りであつた。

「それは身代わりの、、、蒼装が？」

ふるふる、首が振られた。

「違う？」

「ハイル」

「琲瑠か、、、」

あの夜、終始その側に居て、穏やかに見守っていた付き人の顔を思い浮かべて、燕倪は千草の脾腹を蹴った。

どこか、特別な感情すら感じさせる付き人の直向な想いを酌んで、

「もう、俺にあんな事、させてくれるなよ」

こくり、、、

童の体が、ふわりと舞い上がると燕倪の腕の中へ。

まっすぐに前を見つめる伯の黒髪が、鼻先をくすぐる。

見れば解けかかった青い綾紐。

それを結び直してやりながら、

「いずれにせよ、頼りにしてるぞ、伯  
相変わらず反応が無い、伯。  
千草の鬘を弄って一人、遊んでいる。

母屋の裏庭。

井戸を覆うように、侘助が枝を伸ばしている。  
地を覆う穢れない雪色と同じく、可憐で小振りなその花が、辺り  
に甘く香っていた。

その木の枝の下に立ち、塀の向こうを眺めていた若者は、現れた  
気配に振り向いた。

白い羽二重の寝着をその長身に纏い、肩に濃紫の長衣を纏った蒼  
槳が、懷手で縁側に立っていた。

「行ったか、」

低い声で呟き、目を細めて塀の向こうを眺める。

「はい。燕倪様の香りがすると、お出になれました」

「翡翠輪は持たせたのだな？」

「はい。人外の髪と瞳、それだけで人は、何をするか分かりませぬ  
ので」

琲瑠は、瞳を伏せると再び顔を塀の向こうへ。

翡翠輪。

翡翠の勾玉と瑠璃色の硝子管で作られた首飾り。

それは伯の髪と瞳の色を、人が持つ色に変じさせ、時として身代  
わりをも果たす神器の一つ。

琲瑠は、手に残った袱紗の包みを畳みながら、

「余計な事、でしたでしょうか、」  
ぼつりと、呟いた。

「大海原に生を受けたものなれば、あれは紛れもなくその頂点に君  
臨すべきものだ。その意志を阻むことなど、できようはずがあるま  
い」

うつそりとした、蒼装の声。

「はい、、」

「ここで余計な詮索を、我が妻殿にされるよりは、余程燕倪の元におる方が、愉しかろう。これから、頼むぞ、琲瑠、、」

「はい」

琲瑠が跪いて、応じた。

すぐに顔を上げた時には、既に蒼装の姿は忽然と縁側より、消えていたのだった。

茜色に染まる逢魔が刻。

遠野と呼ばれる山間の盆地は、梅の産地として有名で、白く斑に残った大地一面に、紅白の梅が彩りを誇り、香っていた。

なだらかな台地の先、見渡すその高台にひっそりと静まり返った屋敷があった。

庭先にて、籠に入れられた鶯を飽きるでもなく眺めていた娘は、不意に巻いた風に顔を上げた。

「あ」

堀の上に、水干の童が立っていた。

目が合つと、袖を翻して庭先に舞い降りる。

まるで重さを感じさせない、ゆつくりとしたものだった。

「、、、、」

そのまま、漆黒の瞳に見つめられ動けずに居たところ、

「伯つ、おいつ、お前、勝手に入るなっ」

「羽琶姫」

さすがに慌てているのか肩を怒らせた燕倪と、尼僧が現れた。

伯の姿を捉え、そして縁側に文机を出している十二単の娘の姿を見て、一瞬、息を呑む。

こ、これは、、しかし、、

まだ、あどけなささえ感じさせる可憐な容貌と相まって、その髪は、水面に映る月の如く色だった。

死人還り、、

幽世に渡り、戻った者が持つとされる髪の色。

それは、見まごうはずなどない、色であった。

一方、濡羽玉色の黒目がちな瞳の主は、右手に太刀を持った大男を見つめ、僅かに身を強張らせた。

「羽琶殿、急な訪問、お許し下され。拙者、備堂燕倪と申します」

すぐにそれに気付いて、燕倪は、庭先で頭を下げた。

「羽琶姫、燕倪様は左大臣備堂真次様が四男のお生まれで、祖、等しい御方でございます」

「鷹乃杷羽琶でございます。そこでは、お寒いでしょう。この夜は冷えます。中へどうぞ」

「かたじけのうございます」

深々と一礼する様を見つめ、

なんと実直そうなお方、

羽琶は微笑んだ。

「そこのお仔は、」

「友の許にいる童なのですが、此度の遠出に諸細あって同行しております」

「潮風が、香りました、」

「え？」

目を丸くした燕倪に、

「みずは」

「こちらからお上がりくださいませ」

心得たもので尼僧が二人を母屋の玄関へと案内する。

燕倪に手を引かれる伯は茫洋と辺りを眺め、ふわり、またふわりと、欠伸を漏らしている。

「驚かれましたでしょう」

仄の暗い客間にて向き合つと、羽琶の白い髪は燐光を放つかのよ  
うに、灯火に煌めいた。

膝に両の拳を置いて、背筋を伸ばして座す燕倪は、頭を振って、

「死人還り、ですので、こうして山里に籠っているのです」  
死人還り。

幽世に行き、そして無事戻って来た者は皆、髪の色素が抜け落ち、見鬼となつて現世に戻ると言われている。

羽琶は、かつて土師業鴛の妹、愛智姫が尼僧となつて亡き夫の菩提を弔う為に、屋敷跡に立てたこの庵で、暮らしていると言つ。

「いえ、私の友もあなたと同じ髪の色をしているので、それ程は、」

真直ぐにその黒瞳を見つめるものだから、羽琶の方が鈍色の彫深い双眸から逃れるように俯いた。

その頬が、ほんのりと染まっている。

「あ、すいませぬ。つい、」

年頃の身分ある娘と、御簾も無しに顔を合わせている事に、今更ながら気付き、非礼を詫びれば、

「いえ、」

気まずい沈黙が辺りを包んだ。

油皿の中、

ジジ、、、ジ、、、

芯が燃える音が微かに聞こえる程、辺りはひっそりとしていた。

「くしゅんっ、、、くしゅんっ」

そんな中、燕倪の傍らでおとなしくしていた伯が体を震わせた。

「伯、おまえ、鼻、、、」

「ううう」

とつさに懷紙でその鼻水を拭ってやれば、

「この衣を、、、」

そつと、纏っていた一枚を伯に掛けるために立ち上がった。

「それでは羽琶殿がお寒いでしょう」

「わたしはこの暮らしが長いですし、寒さには慣れておりますから」

包み込むように若草色の衣を掛けると、茫洋とした董色の眸が焦

点を結び、その人を見つめる。

「この童を養っている者が、その友でして。耶紫呂蒼奘と言います」

「月色の髪之都守。都守の名は、この遠野でも聞き及んでおります」

「実はこの伯共々、とあるものを探しております」

燕倪は、傍らに置いてあつた太刀を引き付け、手前に置いた。

「見ても、宜しいですか？」

「もちろんです」

羽琶は、手を差し伸べ、その着物の袂で太刀を持ち上げた。

柄頭には、白銀に埋め込まれた石榴石が輝き、白鞘には翡翠と浅葱の綾紐が巻かれ、瑠璃の玉で止められていた。

「この業丸は、破魔の剣。始祖、土師業鷲が怨敵檣廼堯元を討ち滅ぼしたる折り、二つに折れた太刀を打ち直したものだ、備堂に伝わっております」

羽琶は少し躊躇い、けれどゆっくりとその柄を握り、刀身を引き出した。

「なんと、艶やかな、」

太刀は、油脂の曇無く冴えた月光をも思わす輝きを、羽琶の瞳に焼き付けた。

「その太刀が殺めるは、鬼のみ。人は、斬りませぬ」

「むしゅっ、」

小さなくしゃみに見れば、伯が肩頬を膨らませて見つめている。

片目を瞑って謝ると、背中を燕倪の肩に預けて黙った。

「燕倪様」

太刀を鞘に戻すと、そつと燕倪の前に置いた。

「その太刀の片割れは桧扇として、妹御愛智姫の輿入れの際に持たせたと伺いました故、拝借賜りたく、こうして馬を走らせて参った次第です」

「何故、其れをお求めに？」

「実は、私にもよく分からぬ話なのですが、」

燕倪は都守蒼奘が語った帝都の異変と、実際に自分が眼にした化

生、そして、父左大臣備堂真次が宮中にて聞き及んでいた妖異について話した。

「都の結界の人柱に、、」

「無論、時の結界師が施したものではありませんのでしようが、怨念と言うのは、時が経つにつれて膨れ上がると、、」

「都守は、それをもう一度鎮めるつもりなのです。最近、この山里にも、疫神が降りてくるので、気になっていたのですが、、」

「羽琶殿も、お見えに？」

「わたしの場合は、生まれつき鬼が見えていましたので、、ただ今年に入って、雪に紛れて上方より渡ってくる疫神が多く見受けられましたから」

羽琶は、短く息を吐くと、

「しかし、困りました。愛智姫の身の回りの物は、亡くなった後、共に葬られたと伺っております、、」

「それでは、桧扇は、、」

再び薄闇の中に沈黙が満ちる。

夜気の凍える冷気が迫っていた。

くん、、

爪を齧っていた伯が、鼻を鳴らしてしばらく、

「羽琶姫、夕餉の仕度が整いました」

沈黙を破る凜と響く、みずはの声。

「愛智姫、縁のものでしたら、蔵に何かあるのかもしれませんが。今宵はもう遅いので、こちらにお泊りになって、明日にでも蔵にご案内致しましょう」

「何から何まで、かたじけない」

「都の一大事に、わたしができることなど微細な事。それに、、」

自ら立って、廊下への御簾を引いた羽琶は、

「こんな雪深い山里に訪ねて来られた縁あるお方を、どうしてお帰しできましょう」

灯火の明かりの中、ふわりと梔子が香っている。

ん、、、？

夜更けに、ふと目が覚めた。

月が出たのか、青白く板戸の隙間から差し込む光に目を瞬かせた。気になって見れば、夕餉の時も行儀良くしていたはずの伯の寢床が、空。

肌を刺すような寒さに、寢着の襟を合わせ、長衣を肩に掛けると冷たい床に歩を進めた。

板戸に手を掛け、ゆっくりと開き、

「な、、、、」

夜露が凍り、白々とした霜原に、擦じれた青い角を持つ巨大な獣が白い息を吐いていた。

深い緑柱石を思わせる瞳が捉えているのは、その鼻先を撫でる伯だ。

伯は、人外存在だとは聞いていたが、これは、、、  
全身が泡肌を立てている。

紛れもなく、凄まじい力を秘めた存在だと全神経が、知らせているのだ。

その存在が、童の前に跪いて、鼻筋を差し出している。

一瞥だけを寄越して、獣は再び伯に視線を戻すと、その目を細めた。

低く喉を鳴らしやがて、恭しく頭を垂れると、堀を越えて一陣の風となって去っていった。

その後姿を見送って、寝巻き姿の伯が振り返る。

「伯、今は、、、、」

強張った四肢を気力で動かし、縁側に上がる伯の手を取るが、

「あふああ、、、、」

涙目に欠伸。

そのままとこと寝床に戻り、崩れ落ちるように眠ってしまう。

「何なんだ、一体、」

戸口で突つ立ったまま伯を見つめ、そして外を見た。  
煌々と、中天になだらかな曲線を描く月が、輝いている。

同じ月の下を、錫杖をつきながら紫紺の長衣を纏った長身の男が歩いていた。

長く、どこまでも続くかと思われる石の階段が、続いている。

淡々と、休むことなく歩みを続けるのは、月色の髪を長く腰まで流した白皙の美貌の主。

都守蒼装であつた。

青い唇に薄く笑みすら浮かべて、月光の元、山頂の社へ向かつていのか、？

ここは、帝都の北に延びる勝間山の中腹にある奥恵大社。

登りきるに、屈強な者でも一刻は掛かる石段で知られる。

その為、平素訪れる者も知れており、無論こんな夜更けに社を目指す酔狂な参拝者も居らず、上を見ても、下を見ても、細く延びる影の主は、その人ただ一人。

細く白い息を吐いている蒼装が、顔を上げたのは、その耳に聞きなれた水音を捉えたためだった。

滝の音が、近づいていた。

青い月明かりの中を脇道へ逸れて、獣道の如き細道を進んでいく。やがて、檜や櫟、杉の原木が生い茂り、所々雪が残った苔生した大地のその先に、轟々と飛沫を上げて流れ落ちる滝に辿りついた。

訪れる者と言えば、獣を除けば修験者か、化生か、？

巨岩が連なるその脇に誰に顧みられる事も無い、子供の腰にも満たぬ朽ちた社がぼつねんと立っていた。

墨色になった社の屋根にも、歳月と共に緑の苔が覆うまさにそこに、蒼装が立った。

しゃりる・・・

大地を、その柄で一突きすれば、社が淡く燐光を放ち、

「こんな夜更けに都守が何用じゃ？」

幼い女童の声。

ふわりと舞い上がった燐光は、白い光の粒子となって姿を纏う。  
蒼装の鼻先に、大きな赤紅の瞳。

肩で切りはなたれた黒髪に、胭脂と藤色の衣が映える。

女童が、宙に浮かんでいた。

「檣葉、久しいな、」

「ふん、挨拶じゃなあ。汝がわらわの元に来るなぞ、ろくな事が無い」

衣の袂で口元を隠しつつ、流し目だ。

「そう言うな。召喚でなく、こうして足を運んだのには、訳がある」

「人柱が、暴れておるのだろう？」

「話が早い」

「こうしてお山から都を眺めれば、嫌でも見えるわ」

顎で指した方角を、蒼装は改めて見つめた。

流れ落ちる滝の水は、川となって流れ落ちて行く。

その先彼方、都が茫洋と月明かりの中で眠っていた。

「紅に翠、まこと禍々しい瘴気の中で、よく人は生きて行ける」

二人の目には、噴出す霧に煙る帝都が見える。

「いつそ、この都なんぞ、その人柱なんとかとやらに呉れてやれば

いい、」

女童檣葉が低く笑った。

「そうしたいところだが、そうはいかぬのだ、」

「ふん、そろそろ人の皮なんぞ、被るはやめたらどうだ？」

「、、、、」

蒼装はそれには応えず、錫杖を鳴らし、

「手を貸せとは言わぬ、」

「では？」

「そこで見守ってくれさえすれば、それで事足りる、」

それだけを言うと、踵を返した。

来た道を戻るその背に、

「西の森の青角のところより、使いが来たところだ。おかしな気配に出向いてみれば、汝の眷族が出て来て『邪魔をするな』そう言ったそうだ、」

「ただ、成せば良い、、あの仔が、それを知っているのなら、古参の神に名を連ねる者よ、解からぬとは言わせぬ、」

振り返る事無く、歩み去るその背を見送って、檣葉は舞い上がり巨岩に腰を下ろした。

膝に両肘を付いて、頬を手の平に預けると、

「何をしておるのか、蒼装よ、、箒葉もいつまでも待つてはくれぬぞ、」

ほう、、、

白い溜息をついたのだった。

闇の中で頼りなげに揺れている。

柔らかに、小金色の細い炎。

その炎の先に、顔が浮かんだ。

「はあふうう、、」

「は、伯つ、こらつ、灯りを消すなつ」

土蔵の奥、煤や埃にまみれて櫃を覗いていた燕倪は、それまでおとなしくしていた伯にほとほと手を焼いていた。

「伯つ、うわわつ、、」

慌てて燭台に向かおうとして闇の中、積み上げられていた書物に足を取られてそのまま床に倒れ込む。

鈴を転がしたような、小さな笑い声が、あちこちから聞こえてくる。

「ぬぬぬ、、遊びじゃなんだぞ、、」

肝心な伯がすぐに手がかりをくれるのでは無いかと思っていたのだが、当人は人の目も無いのの良いことに、土蔵の中を身軽に舞い踊っている。

闇の中でも、目が利くようだ。

「まったく、蒼装じゃなきや、だめなのかよ、」

蔵にはこれといった物も無く、物置と化し、写経や古い文机などが並び、一通り探したところで日が暮れた。

もう一日、羽琶の好意で庵に厄介になり、今度は地下の土蔵に居るのだが、かれこれ半日、手掛かりらしきものも見当たらず、伯のこの悪戯である。

伯は羽琶が気に入ったのか、その傍らから離れようとせず、羽琶もここから遠く離れたかつての都跡に住む末の弟のようだと、可愛がつている。

どうせならそのまま大人しく羽琶にくっついていて欲しいくらいであつたのに。

様子が気になったのか、気まぐれか、おそらく後者だろうが、そんな伯の悪戯に閉口しながら、体を起こそうとしてふと、

「これは、」

細く噎び泣く篠笛の・・・

乳色の空の下、御簾を上げて膝を立て、瞳を閉じていた羽琶は、漆黒の篠笛から唇を離した。

目を開くと、いつの間にか伯に袖を握られた燕倪が庭先に立っている。

「あ、邪魔を、」

「その笛は？」

「わたしがこの庵に隠れ住む事を決めました日に、笛を能くする一つ上の兄が不憫がってくれたのです」

燕倪が、土足で部屋に上がり込み、煤だらけの顔の中、大きな瞳をさらに大きくして手の中の笛を見つめた。

「あの、燕倪様、」

鈍色の瞳が、羽琶を見つめると、

「あ」

そのたおやかな手を取って、腰の太刀の柄に導く。

「ご、業丸が、、」

幽かに、鞘の中で震えるその太刀。

「その笛です。この業丸が申しております」

「しかし、燕倪様、この笛は決して古いものではないはずです。細工も近年の螺鈿ですし、確か、兄の氣に入りの樂師より買い付けたものだ、、」

「時として縁とは奇なもの、都守が言っていました。巡り廻って戻っても不思議はありません。しばらくそれを、お借りできませぬか？」

「それは、構いませぬが、、」

「ありがとうございます、近日中に、必ずつ、、あ」  
そう言ってから、今だ手を握ったままだと氣がついた。

「こ、これは失礼をつ、、ああつ」

あたあたと縁側に下がって、更に土足だと氣がついた。  
慌てて庭先に飛び出すと、赤くなって深々と頭を下げた。  
なめした鹿の皮袋に篠笛を入れると、赤い綾紐で結わえ、縁側へ。

「燕倪様、どうぞ、頭を上げてくださいませ。これを」  
その手に握らせた。

顔を上げると、羽琶が微笑んでいた。

「羽琶殿、、か、かたじけないっ」

再び頭を下げると、

「戻るぞ、伯」

「う、、」

指を咥えて羽琶を見つめる伯。

「この礼は、いずれ日を改めて参ります」

「あの、こんな時分に都に？もう一晚、お泊りになって、明日早く御出立されれば、、」

頭を振った燕倪。

「友が、満月までに戻れと、そう言っておりました。おそらく時間

はそう無いでしょう。この陽気なら、雪が深くなることもありま  
すまい。私の馬ならば今夜中には都に着くでしょうから」

「そうですか、」

草履を脱ぐと、客間に置いてあつた長衣を纏い、手短に足拵えを  
整え、少ない荷を背負つて戻つて来た。

煤のついた顔もそのまま、頭を下げる精悍な顔立ちの燕倪に、急  
いでみずはに用意させた包みを手渡しながら、

「これは、遠野で作られた柿餅です。道中、くれぐれもお気をつけ  
て」

「何から何まで、羽琶殿、みずは殿。お気遣い、感謝致します」

みずはによつて衣を重ね着し、足にはこの遠野の童が履く藁の長  
沓を履かされた伯が、もこもこして大地に膝をついた。

「まうう」

呻く伯を、小脇に抱える。

「では」

馬を預けてある丘の下の方農の屋敷へ向かう背を見送つて、

「お戻りになれる日を、愉しみに待っております」

自然に口をついて出たその言葉。

驚いて口元を押さえた羽琶の傍らで、みずはは主を優しく見つめ  
ている。

## 第貳幕後

夜都

(前書き)

業丸の対を探し当て、帝都に戻った燕倪と伯だったが、、

死人還りの都守蒼装、業丸を継ぐ武官燕倪、幽身であるがこの世に縛られた伯。それぞれが紡ぐ異国絵巻、第貳幕後編。。。

## 第式幕後

## 夜都

冴えた月が、中天にて煌々と銀波を放っている。

星は影を潜め、千切れ雲は薄くたなびいては、山の向こうへと流れ去った。

ひっそりと静まり、門扉固く閉ざされた家々の合間に、蠢くものがある。

凍える夜気の中、青や白の輪郭を持った、鬼。

列を成し、舞い踊りながら辻々に姿を現す。

帝都中に溢れた小鬼の群れ、その中を用心しつつ馬を進めながら、「本当に危害が無いんだろうな、伯？」

胸の前で、干し柿を練って餅状にした柿餅を暢気に頬張る伯が、こくり、頷いた。

口の周り、打ち粉で白くなっている。

「しかし、これが噂の百鬼夜行とは、なんとも愉しげな、、」

ある小鬼は手に古い扇を持ち、また、草や枝、箸やら鳥の羽でもって舞っている。

どの小鬼も、口の端を一樣に上げて牙や舌を出し、実に愉しげ。

さわさわ、、

足元から聞こえるのは、重く実り枝垂れた稲穂が、風に揺れ擦れたような、音。

人外の化生達の嬌声だ。

その小鬼の邪魔をせぬようと、千草を小鬼の群れに添って進めれば、辻に白い人影が浮かんた。

それまで大人しく柿餅を頬張っていた伯が、舞い上がる。

宙を蹴って、その人影の広げた腕の中に飛び込み、

「あああう」

胸元に顔を押し付けた。

「伯、、、」

口元の粉を、赤子にするように袖で拭いながら、千草の前に立っているのは、

「蒼奘。おまえ、こんな晩に立っていれば、化生と見紛うぞ」

「構わんよ。この世に在れば、どれもこれも似たようなものだしな」

白い髪を長く背に垂らした蒼奘、その人。

「どうやら、間に合ったようだな」

「ああ。遠野に住む愛智姫の末に、この篠笛を借り受けてきたぞ」

「ほお、、、」

包みを懷から出すと、蒼奘に手渡した。

漆黒に輝く艶やかな篠笛がその纖手によって取り出されると、蒼奘が眉を寄せた。

「業丸が、鞘鳴りで知らせてくれたのだ」

千草から降りた燕倪が、鼻息荒く業丸をかざす。

「、、、、」

「ぬっ?!」

業丸は、鞘鳴りはおろか、何の変化もしない。

「ソウ、、、」

伯が、蒼奘の腕に手を掛けてしばし、

「そうか、、、」

そつと頭を撫でやった。

篠笛を包み直し、

「これでは無い」

啞然とした燕倪の鼻先に突きつけた。

「た、確かに業丸が、、、」

業丸と篠笛を交互に見やり、燕倪は頭を振った。

蒼奘は顎先に手を当てつつ言葉を選んでいたが、やがて、

「其れは媒体に過ぎぬようだ。どうやら遠野の末である姫でなければ、この笛が業丸に番う事は出来ぬようだ」

「つまり、羽琶殿でなければならぬと?」

「愛智姫と共に葬られた桧扇。おそらくは、姿を失った後もその血宿り、受け継がれたのだ。元はといえば、妹の幸せを願い贈ったもの。その思いこそ、桧扇の真価」

「想いが、鬼を抜う、、、？」

「この笛を奏でる時、其の音が羽琶殿の中で眠る大太刀として数多の鬼を葬りし真の姿を、呼び起すのだろう。生半可な鬼では、浄化を免れまい、、、」

「それでは、羽琶殿を都に連れて参らねばならなかったのか、、、」  
「そうなるな、、、」

腕を組んだまま、そのまま黙り込んでしまった。

「いずれにせよ、鬼が闊歩する都をこのまま放置しておくことできません。今戻れば明日、陽のある内には戻れる」

再び千種の鞍に手を掛けた燕倪に、

「それでは間に合わんのだ、、、」

蒼装の白い溜息だ。

「間に合わぬかどうか、行くしか道が無いのだろう」

見つめる友に、都守は顎で促した。

「あ？」

振り返ればその向こう。

闇の深みより、今までの小鬼とは明らかに格の違う化生が這い出していた。

その引きずる巨体。

あるものは暗緑色の体液を振り撒きながら、またあるものは体中の触手を蠕動させながら、道いつぱいに広がり滲み出す。

「これは、、、」

「今宵、夜は明けぬ、、、」

「どういうことだ?!」

「都は、夜都となった。檣廼堯元の怨念ここに極まった、とでも言おうか、、、明日の正午、この月満ちれば怨敵檣廼堯元、復活を遂げるであろうな」

「悠長な、、」

「結界は張った。万が一、この都が吞まれたとしても、槇廼堯元は都を出ることは出来ぬよ」

「だが、都自体が槇廼堯元の体を基に構成された結界では、無駄じゃないのか?!」

「都の周りに住む神共に、動かぬように言い置いた。元々神というものは、己の神通力の及ぶ範囲を統括していてな。それらが存在しているというだけで、結界として機能するのが、この世の習いだ」  
のらりくらりと近づいてくる巨大な化生に、千早が嘶く。

「だがいずれにせよ我らは、槇廼堯元が結界内にいるという訳だ。夜都となった今、外界とは別次元だと考えるといい」

手綱を取って押さえながら、業丸の柄に手を置く燕倪の前に、腕に伯を座らせた蒼瑒が立った。

「中々戻らぬ故、都守の名で戒厳令を敷いておいたのは正解だったようだ。妖星による蝕だと言う事にしてあるが、さて、いつまでもつか、、?」

いつの間にかその手には、鈴が連なった房が下げられていた。

一見したところ、白銀に輝く大粒の葡萄の房だ。

「鈴?」

「ああ、、」

袖を振ると、朗々と大気に澄んだ音を立てた。

「おお、、」

それまで洋々と前進してきた巨体が、ゆるりと向きを変える。

一行の傍らを通り過ぎるのを見送って、

「風鈴、錫杖、寺の鐘。金の気はどれも、化生が嫌うのでな」

蒼瑒の屋敷へ向かって歩き出した。

「なあ、俺ができることはないのか?」

「そうさな、、」

「何かしていなければ、夢見が悪い。遠野まで出向いても、役に立つどころか、、」

「無い事もないが、」

「おう」

「だが、今は休め。すぐに動いてもらう事になるやもしれぬ。部屋を用意した。煩い女が居るが、」

「煩い女？」

屋敷に着いて門を潜ると、

「お帰りなさいませ」

見慣れた水干姿の若者が頭を下げた。

琲瑠であつた。

千種の手綱を取つて何処にあるとも知れぬ厩に連れて行くのに任せ、奥の母屋へ向かう途中、見慣れぬ牛車が屋敷内に留まっていた。

「このこもり雪の紋は、勝間の山の箒葉殿か？」

「汪果」

「燕倪様、お部屋にご案内致します」

汪果が現れた時、琲瑠が別の馬を連れて戻ってきた。

青乳色の鬣を振り乱した、赤紅の瞳の肥馬。

蒼装の愛馬、鋼雨。

琲瑠に伯を預けると、馬上の人となる。

錫杖を受け取ると手綱を手繰り、馬首を門へ。

「おい、俺も、」

「正直なあ、燕倪。この先、少しばかりどうなるか分からぬ。もしものは、お前に都中の鬼を斬つてもらつやもしれぬ。だから、休んでおけよ」

腹を蹴つて、鋼雨が走り出すのを、

「ひああ」

手を伸ばす伯が呼ぶが、すぐに道の向こうへ見えなくなってしまった。

「むいっ」

一呼吸して、琲瑠の腕を振り払った伯。

「若君」

ふわりと水干の袖を広げて舞い上がると、塀の上。

そのまま道の向こうへと消えてしまう。

「は、伯っ」

髪を結わえていた青い綾紐だけが燕倪の足元へ。

追いかけようとしたその背に琲瑠の声。

「若君なれば、この程度の百鬼夜行、問題はありませんまい。神在れば、そこは浄域となりますから」

「しかし、」

「燕倪様はお休みくださいませ。後は、わたくしめが、」

しかし燕倪、足元のその紐を拾うと、業丸の柄に手を掛け、

「あいつはまだ子供だ。ほうっておけるかよっ」

そのまま走り出てしまった。

複雑な表情を浮かべる琲瑠に、

「神を、人の仔とおっしゃるか、」

「そこが、あの御仁が主様の友であられる所以なのでしょう」

汪果が慥然とした様子で腕を組み、月明りの下。

二人、それぞれの帰りを待って、いつまでも佇むのだった。

鋼雨が手綱を引かれ、大きく前脚を上げて立ち上がり、止まったのは帝都の外れ。

南東にある青梅池。

低い塀に囲まれたその池は、凍りつくこと無く、青緑に沈んでいる。

錫杖をついて蒼装が湖面に浮かぶ浮御堂に進むと、湖面が波打ち、渦巻いた。

底が覗き、漆黒の櫃が浮かび上がるのを見つめ、

「緋皇」

金色の光を纏った漆黒の肌を持つ鬼神が、茫洋と蒼装の傍らに現れ、手にした漆黒の櫃を持って宙を渡り、櫃を入れ替えた。

鬼神は蒼装の傍らに戻るとその櫃を捧げ持ち、膝を付いた。

蒼奘が櫃の蓋に触れると、それはひとりでに開き、その中身を蒼奘に晒す。

「確かに、」

一人、目を細めて頷くと緋皇は蓋を閉め、姿を消した。

蒼奘が背を向けた時、青梅池はいつもの静寂を湛えていた。

くん・・・

鼻を鳴らし、屋敷の塀の上で立ち止まった伯。

くんくん・・・

夜気に潤んだような瞳が開き、水干の袖を翻して舞い上がり、ふわりと路の真ん中に降り立ったのだが、

「うつつ」

その体は、蒼き衣の袖に抱かれていた。

うろっ

身じろいで恨めしげに見上げた相手は、長い砂色の髪を肩に垂らし、穏やかに微笑む美丈夫。

その耳は、銀毛で葺かれた獣の耳で、その寛衣からは銀糸の太い尾が伸びていた。

くわっ・・・

小さな犬歯を剥く伯の口を、やんわりと長い袖で押さえながら、その髪に頬擦り。

手足をばたつかせるその耳元で、

「貴殿にしか、出来ぬことをなさいませ、」

「があうつつ」

「夜都に堕ちた以上、都守は、その名に縛られております。さすがの蒼奘殿も、それ故、この都から出ることはできませんまい」

「うーつつ」

さらりと袖から腕が覗く。

白々としたそれが、見る見る鉛色に変化し、鈍色の光沢を宿す刃と化す。

「結界を敷く動けぬ地仙に代わって、夜都の結界に風穴を開けるとが出来る者は、貴方を置いて他にいませぬ」

「かうっ」

もどかしく、胡露の手首に伯が齒を立てる。

「僭越ながら、その道、この胡露が開きましよう、」

赤く滲んだ血が衣の袖を染めても、胡露は眉一つ寄せる事もなく、  
「其の秘された名、導くままに、」

左手を上げ、そのまま睨み続ける伯の胸に向けて振り下ろす。

「おや、」

鋭く伸びたその手の甲を、貫く一閃の輝き。

脇差によって大地に縫い付けられた腕の主は、肩で息をする男を見つめた。

「エンゲっ」

伯が叫ぶが、もう一方の腕が緩まる事は無かった。

「残念でしたな」

「はっ、、、がっ、、、」

脇腹に入っていた五指が、伯の水干に食い込む。

「伯ッ」

仰け反った伯の体内へめり込むその五指。

業丸を抜き、駆け寄る先、大地が渦巻く。

漆黒の闇を集めたかのような、深淵。

「は、あっ、、、あっ、、、え、、げっ、、、」

既に肘まで体内に含んだ伯が、苦しそうにその名を呼んだ。

舌を出し、溢れた涙が頬を濡らす。

「どこに隠しても、封じたそのものを刺激してしまえば、其の記憶、溢れてしまうもの、」

体内を大きく探るように腕を深く入れる。

「いぎッ」

ひきつけを起こし、痙攣を繰り返す幼い体。

「伯ッ」

渦巻くその中へと足を踏み込んだ燕倪。  
業丸を突き刺しながら進むその姿に、

「馬鹿な、、人間が、瘴氣の渦を渡れると？」  
眼を剥いた。

地下深くを巡る帝都の水脈は今、瘴氣そのものと化している。  
生身の人間が触れば、ひとたまりも無く、発狂する。

そこを、その男は突き刺した太刀を頼りに進んでくるのだ。  
しかし、その足掻き虚しく、

「ぐぬっ」

中程で足を取られ、そのままズズッと腰まで吞まれてしまう。

「大したものだ。が、それまでだ、、」

端正な貌が、冷酷な笑みを刻み、

「ああ、こんなところに、、」

胡露は腕に力を込めた。

「あ、、ああ、、」

伯の瞳が、裂ける。

赤い涙が頬を伝う時、燕倪の高く突き出された手は漆黒の水に吞  
まれてしまう。

「少々、手間取ってしまいましたが、これで、、」

胡露が、勢いよく腕を引き抜いたのは、伯の全身に細やかな亀裂  
が生じた後だった。

「あ、か、、う、、」

まるで卵の殻が剥れるかのように、その身は亀裂が走り青い光が  
漏れ出した。

「都、鎮まったあかつきには、いかなうな罰もこの身に受けましょ  
う」

腕に抱いた水干姿の伯。

胡露はその体を、悲痛な面持ちで渦の中へと投げ込んだのだった。

「ッ、、、、」

ふとその方角を睨み据えた。

渦に吞まれる直前の、か細く儚い声を聞いたのかもしれない。

鋼雨の手綱を絞った蒼装。

「八火業焰衆」

金色の炎を纏う鬼神衆。

陽炎のように宙に浮かび、膝をつく。

「冥府、御苑淵を開け」

八人の鬼神がそれぞれ印を結ぶと大気が裂け、漆黒の闇が覗く。

「蒼装」

その闇の前へと進み出ると、己の名を呼んだ。

応えるはずなどない闇の向こうが、小波を刻んだかと思うと、闇の彼方から人影。

「帳簿と居並ぶ面々が一致して、久々の余暇だったのに、、、、」

眼を擦りながら現れたのは、白々としたばさら髪、どこか飄々とした男。

深い黒瞳が、揺らめく小波の向こうを見つめる。

「久しいね、都守、、、、」

着ているものこそ漆黒の狩衣だが、その面差しは瓜二つ。

「そついえばこの間、無限坂の辺りまで来たんだって？挨拶も無いなんて、つれないなあ」

「蒼装、後は任せる」

「後はつて、、、僕はまだ、すべてを理解したわけじゃ、、、、」

「時間が無い」

低く、腹腔に轟く声音。

鋼雨から降りると、右手を伸ばす。

「僕に体を還して、貴方はどうするつもり？」

小波の向こうではもう一人の蒼装が、小首を傾げた。

「汝の友、冥府に流れ着くぞ」

「状況が読めないんだけれどな、、、、」

困ったようなそうでないような、どこか漠然とした表情。

「蒼装」

己自身に睨まれて、しぶしぶ左手を伸ばした。

二つの指先が小波の狭間に、融けた。

「まだ、この世の真理には、程遠いんだけどね、」

潜るようにこちら側に現れたのは、漆黒の狩衣を纏った蒼装。

澱む瘴気に靡く髪を、うつそりと掻き揚げるその背に、闇の中に現れたものは一瞥を与える。

ただ成せ。最後にその櫃を治める場所、知らぬとは言わせぬ

金色の双眸。

翡翠色の紋様を細やかに全身に刻んだ、白銀の巨獣。

それが銀の軌跡を残して、闇の向こうへと駆けて行く。

闇の淵が塞がれると、鬼神の一人が漆黒の櫃を差し出した。

それを小脇に抱え、ひらりと鋼雨に跨ると、

「心を砕く相手でも、出来たとか？まさかねえ、」

蒼装は馬首を廻らせる。

其の先、御所のある辺り。

禍々しくも赤々と、噴出す瘴気。

それと呼応するかのように、震える櫃の蓋を押さえ、

「だめ。」

鋼雨の腹を蹴る。

「まだその恨み、吐き出してはいけないよ」

夜都と化した帝都に都守、舞い戻る。

ぐっ、

漆黒の流れの中。

眼も開けられぬ瘴気の奔流。

その中で、燕倪は途切れそうになる意識を手繰り寄せる。  
握り締めた業丸が、ただ一つの間。

口腔から腹腔へと流れ込む冷たい瘴気。

このままで、終るものかつ

握り締めていた手を、刃へと滑らせる。

熱く、手首にぬらりと滴るのは、己の血潮。

それが、唯一四肢とを繋ぐ感覚。

ぬぐおおおおッ

気力と共に太刀が振られる。

手応えなど無いまま、何度も、何度も。

意識を、痛みで縛りつけた。

伯ッ

僅かに零れる青い光を頼りに進み捉えたものは、

「あ、い、いい、っ、っ」

蹲って苦鳴を上げる伯。

腕を伸ばせば、

がぁぁッ

指先が瞬間に凍え、骨の髄に響く、激痛。

はぁぁあくッ

胸に抱えるようにして、軋む体そのまま、伯を抱きしめた。

「かぁっ、っ、ぁぁが、っ、っ」

伯の体から零れる青い光は強烈で、眩む目を伏せ、痛む体に最後

を覚悟した刹那、

「伯」

その声。

その声の主を、燕倪は知っていた。

否、知っているつもりだった。

意識を手放す寸前、瘴気が晴れる。

神の光臨に。

燕倪の周りには、金色の輝きを纏う鬼神。

囲むように佇めば、一帯の瘴気が霧散。

鬼神の一人が燕倪の肩に触れると、ゆっくりと仰け反りつつ、宙に浮かんだ。

その腕の中から、

「ぎ、ああ、、、ぐぐっ、、、うつ、」

青い光を放つ亀裂を、無数に肌に刻んだ伯。

「か、、、かあうっ、、そっ、そ、、、ひっ、うっ」

頬を伝う紫玉。

いくつもいくつも堅い漆黒の大地の上。

欠片となって砕け、散らばる。

「あああうっ」

力の限り腕を伸ばし、差し伸べた首にしがみつく。

私を待っていたのか、伯、、、

頬を寄せると、

「んっ、んっ」

顔を埋め、しゃくり上げながら呻く。

銀の毛並み巨虎を思わせる存在が、前脚で優しく体を摩り、そして伯の背に鼻先を近づけた。

お前に、名を還そう、、、

触れたその背が割れ、光が溢れる。

オオオオオオオオオ、、、

溢れ出したのは、翠の透明な巨体となり、鱗と紫の背鰭を併せ持った。

ぐぐ、と頭部を伸ばすと、か細い声を上げ、身震い。

そして、巨虎に寄り添って頂垂れた。

これで、誰もお前を縛ることはできぬ。この狭き大地に縛りつけ、辛い想いばかりを、させてしまったな、、、

巨虎は、その首の辺りに頬を寄せて言った。

行くがいい。その名が導くところへ、、、

その言葉を待っていたのか、巨体が羽を広げるように鰭を動かした。

深い闇へ。

その彼方に消えた巨体を見送って、巨虎はようやく燕倪の方へ。

燕倪、

気を失ったその体。

それでも放さぬ業丸を見つめ、巨虎は体を低くした。

燕倪の体がふわりと舞い上がり、巨虎の背に負われると、咆哮。瘴気が払われ、開かれたその先へと進む。

後は蒼装が、万事巧くやるだろう、

帝都を流れる栖霞川が割れ、巨虎が背に負った燕倪を土手に降ろす。

銀色の粒子が、燕倪の体を包み込み、ゆっくりと吸い込まれていく。

すう、と呼吸が正常に戻ったのを見届けて、巨虎は開いたままの闇の中へ。

都を背に立ち止まり、一度だけ振り返った。

「、、、、」

見つめた先は、滔々とした栖霞川の流れ。

彼方に在る大海原を、その金色の眸は映していたのかもしれない。

鋼雨がその銀の蹄にて、路に溢れる鬼共を四散させながら走り込んだ先。

己が屋敷であつた。

「おや、随分と様変わりしたものだ」

繁々と屋敷を眺めると、轡を取った者を見下ろした。

「新しい顔だね」

「琲瑠と申します。都守」

「琲瑠、宜しくね」

蒼装が櫃を抱えたまま、鋼雨を任せた。

「都守、久闊です」

汪果が長い袖口を合わせて異国の礼をすると、

「久しいね、汪果。君は変わらないのだね」

慈愛を含んだ穏やかな眼差しが見つめる。

「主の力が及ぶ限り、我等が老いる事はございませぬ」

「分かっているのだけれど、どうもこの感覚だけは冥府でも捨てられないのだ」

「お察し致します」

行灯でもって蒼装の足元を照らし、先に行く汪果。

「この櫃を納めたら、まだ目覚めの時までには時間がありそうだから、少しばかり状況を説明してくれないかな？あちらの暮らしが長くて、どうも、」

淡く微笑み、こくりと頷いた。

白い玉石を踏み鳴らせば、

「お」

ふと、片隅に止められた牛車に目が止まった。

「参ったね、いったい今更どんな顔をすればいいのか、」

どこか照れているような、少し緊張したような、そんな苦笑いを浮かべ、蒼装は渡り廊下へ。

嗅ぎ慣れた、総檜の芳しい香り。

飴色に濡れ光る廊下の、素足で感じるしつとりと冷たい感触。

どれも懐かしく、けれどどれも他人行儀な、己が屋敷。

寢所のある母屋への廊下。

その途中に在る来客用の離れに、灯り。

通り抜けようとして、戸口に控えていた侍女が戸を開いた。

揺れる部屋の灯火。

御簾越しにぼんやりと、浮かぶ華奢な女人。

思わず眼を細めた蒼装。

「箏葉、」

唇について出た、名前。

振り向いたその顔は、歪んでいた。

鬱々と日々を過ごす箏葉が、自ら御簾を上げる。

「箏葉様」

侍女が立ち上がり、手を貸すその前にその眸は濡れ、蒼装の胸の中。

「蒼装様っ、っ、」

腕から零れ落ちる櫃。

床に当たって緩む、紅の綾紐。

「蒼装様っ」

「箏葉、っ、」

「いったいどれ程、わたしを待たせれば気が済むのです？あなたでないあなたを、わたしは夫と呼んでいると言うのに」

蒼装は、腕の中で震えるその人の肩を摩りながら、

「僕ではない僕を、夫と呼べるのなら、僕はあなたを妻と呼ぶ。そう、約束したものね」

強い力でしがみつくその人の髪を撫でた。

二人を交互に見やる侍女に、

「何も心配ないから、そなたは、もうお休み」

穏やかな眼差しで微笑んだ。

一礼して下がる侍女の背中を見送って、

「何も聞かないでくれるあなたに、僕は甘え過ぎている。苦勞をかけるね、っ、」

「いいんです。あなたがあなたで居てくれるのなら、いつまでだって待つと己に誓いましたもの、っ、」

「箏葉」

しばしの間、二つの影が溶け合ったままにいるのを、行灯を手に渡り廊下にて控えていた汪果が見つめていたが、

「都守、櫃が」

「あ」

蒼装、ふと落とした櫃に眼をやれば、赤い綾紐が解け、長く伸びている。

見れば、蓋が開いた櫃から覗く袱紗が、濡れていた。

「これは、厄介な、、、、」

点々と庭へと続く紅の染み。

それを見つめても、蒼装はただ肩を竦めただけだった。

、、、、、、

闇の中で何かを感じたのか、巨虎は首を擡げた。

そして小さく呟いた。

蒼装、、、、しくじったか、、、、

巨影がうねる。

馬の頭を持つ四腕の蛟龍ウンベク、ウイベルは、手にした三叉の槍を伏せ、膝をついた。

軋むような声を上げ、闇から姿を現したその巨影は、水の感触を愉しむかのように舞い、ゆらゆらと集まる朧げな魂魄等と共に海面へ上がっていく。

重く立ち込めた雲が、夜が明けるのを拒んでいるような、そんな空模様。

体を水面に叩きつけるように飛び出したのは、翡翠色の鱗を持つ、紫紺の背鰭も巨大な存在。

何度も何度も、水面に体を打ちつければ、空が泣き出した。

雷雨となって激しく海面を穿つと、その体、海水を巻き上げながら雨の中を舞い上がる。

無数の魂魄を纏いつかせ、悠々と体をうねらせながら。

おお、ようやくお戻りになられた、、、、

見よ、あの空を舞うお姿、、、、喜ばしい限り、、、、

海面にて見上げれば、渦を巻く雲間へと登って行く。

ぬ、、、、

どう言うことだ？

巨影がぐぐ、と体を擦ったのだ。

クオオオオオオオオ・・・

そのまま身震いして纏っていた無数の魂魄を振り払うと、そのまま雲間に紛れてしまった。

千切れ雲となって四散するその雲をウンベク、ウイベルはただただ呆然と、見送るしかできなくて、、

「都守、、」

珍しく不安気な汪果の表情。

「困った、、」

腕に箒葉を抱いたまま、蒼装が眼を細めた。

「この屋敷自体が結界だから、ここからは出られないだろうけれど、、」

「夜都となった今、屋敷に張られた結界は微力。内側に歪が生じれば、簡単に吞まれます」

「あ」

苦笑していた笑み、次の瞬間深くなる。

懸念していた事が、起こった瞬間であった。

凍りつく、汪果。

「破られちゃった、、」

緊迫した様子など欠片も見せず、その手は愛しい者の髪の中。

「ひっ」

怯えたように小さく鳴いたのは、箒葉。

塀の向こうに、大きな目玉が浮かんでいた。

「箒葉、、」

目が合った事により、瘴気に当てられ気を失ってしまったその人の体を抱きなおし、

「せつかくの逢瀬の邪魔を、してくれたね、、」

それまで屋敷を避けていた鬼共のいくつか、結界が破られ、屋敷の存在に気がついたのだ。

塀、囲い、屋敷、そのものが結界であったのだが、それが一度内

側から破られると、そこは彼等の住まう土地と同等になる。

半透明、粘塊質の巨大な鬼が、這うように体を進めた瞬間、  
「だめ。」

蒼装が眉を寄せて、拒絶。

言葉は、無より力を取り出すための、鍵。

それだけで巨大な鬼は、瘡にかかったように震えはじめた。

「やはり。まだ僕が戻る時ではないから、こんなことに」

御託はいい

それは、不機嫌この上ない声であった。

最後の詰めを誤るとは、都守の名も無いな、、

「素直に役立たずとお言いよ」

のほほん、と言うその鼻先の空間が歪んだ。

闇の中に、巨虎の姿。

すべてが、我の手から滑り落ちてゆく、、、汝のせいだぞ、

「それも承知で、僕に手を貸したんじゃないの？」

黙れ。さっさと我に明け渡せ、、

うんざりしたように、巨虎が片手を差し出した。

駆けつけた琲瑠に箒葉を任せると、鼻から息を吐き出しつつ、手を伸ばした。

その異なる二つの体が、境界線で揺らめき重なると、背を向けあった二人の蒼装。

白い髪が靡き、闇から舞い降りる。

「やれやれ、、」

怜悧な眼差しが、辺りを睥睨。

屋敷の塀や壁を抜けてきていた鬼が、粒子となって宙に散った。  
結果が、張りなおされたのだ。

「都守」

閉じようとする揺らめきの中で、黒い狩衣の蒼装が呼んだ。  
一瞥だけを与えた都守へ。

「頼りにしているよ」

その言葉、背中越しに聞いた。

「汪果」

「はい、主様」

「真の名をもつて、その身を解放する。凰火」

コオオオオオオオオオオ・・・

抜け落ちた唐衣。

その姿はすんなりとした首を持った、炎纏う真紅の化鳥の姿へ。

紫紺に揺らめくのは、全身に渡る細やかな紋様。

「趣くままに、食らえ」

オオオオオオオオ・・・

明らかにそれは歓喜の声。

四枚の翼を一度窄めると、その体は上空へと跳躍し、滑空。

雲間から、その神々しくも禍々しい姿を見え隠れさせながら遠ざ

かった。

「八火業焰衆」

揺らめく八つの金色の焰の中で、鬼神が膝をついた。

「内側より、外界に張られた結界の強化に当たれ」

音も無く、散り散りになる。

それを見送って、蒼装は門の方へと歩き出した。

その背中に、

「主様、、、」

琲瑠の声。

「その女を、頼む」

返ってきたのは、そのまま不機嫌そうな、声音だった。

「燕倪、本当に、久しぶりだね」

それまで、秋の山に鹿狩りに出ていたのに、急に耳元で間延びした、それでいて聞き覚えのある声がする。

振り向けば、色鮮やかに紅葉した森は闇に埋没してしまったのか、

辺りは漆黒に包まれていた。

見れば跨っていたはずの馬も、引き絞っていたはずの矢も弓も、共に駆けていたはずの友の姿も無い。

「燕倪」

顔を上げれば、

「蒼装、、、」

漆黒の狩衣を纏った長身の、よく見知った顔が穏やかに微笑んでいる。

「逢えて、嬉しいよ」

「なんだか、薄気味悪いが、、、俺もだよ、蒼装」

死人還りとなる前、確かにその人はどこか飄々として、暢気を絵に描いたような若者であった。

しかし以後、他人を寄せ付けぬ雰囲気纏い、目付きや言動も変化した。

それだけではなく、妙な術も使う。

当人が蒼装であるのならそうなのだろうと片付け、気がつけば、昔と変わらぬ付き合いを続けているのは、己一人くらいなものとなつてしまつたが、

「せっかくの御指名だったのに、少しばかりへまをしまつてねえ。彼だけではきついから、君に手伝ってもらいたいんだ」

「手伝う？」

「ああ。ちょうど良かった。ちゃんと持っているじゃないか、、、」  
指された指先を見つめると、右手。

手の中に、感触。

白銀に鈍く輝く大太刀、業丸。

「人柱、槇廼堯元は、手足首胴、六つに切り分けられ、さかしまにして都に埋められた。彼は、正午、槇廼堯元が復活を遂げる前に、御所に埋めた胴にかつての大太刀にて、一太刀呉れて封じ直すつもりだったんだろうけど、、、」

「俺が、狂わせたんだ、、、」

「そうそう。で、今度は胴以外を一つづつずらしておいて復活させ、肉体定まらぬ隙を狙って、魂魄に直接一太刀くれようとしていたみたいだけれど、」

「へまっていったいお前、何をしたんだ、？」

蒼契は、肩膝を抱え、闇の中にたゆとい、

「その一つを逃がしちゃってね」

「あ、、、」

苦笑を浮かべている。

合点した燕倪に、

「そうするともう、子供騙しは通用しなくなっちゃうんだ。逃げたそいつは、すべての部位と繋がっているし、櫃から出た時点でこちらの手の内は筒抜け。封印は解かれたようなものだから」

「都守が、とんでもない事を、、」

「各封印は点と線で封じられていたのだけれど、その一つがその点と線を廻ればいとも容易く解けてしまう。槇廼堯元が魔王となって夜都に現れるのは、もう時間の問題なんだ」

「相変わらず、お前の言う事はよく解からないが、、」

燕倪、右手に握った柄を引き寄せた。

「とにかく、業丸で斬ればいいんだな」

「うーん、ちょっと違うけれど、まあ、そういうこと」

「おいっ」

につこりと微笑んだその人は、闇の向こうに歩き出した。

「蒼契ッ」

「君なら分かるよ。ほら、ちょうど迎えも来たようだ。これで役者が揃ったね。夜都となった結界に戻るのには、大穴を開けられたその結界の縫合部を決じ開けられる、つまりは当人くらいだから」

「待てっ、、お前は?!」

大丈夫。君ならきつと上手くやるよ。

「はぁッ」

「っ、っ、」

大きく口を開け、見開いた先に、ぼつかりと月が浮かんで見えた。そして、驚いておもわず口元を袂で覆ったのは、

「う、っ、羽琶、殿?!」

跳ね起きた燕倪の目と鼻の先に、紛れもない羽琶の姿。

まだ所々に白々とした雪が残る川添いの土手。

枯れ草が茫々と生い茂った一画であった。

「どうして、こ、こんなところに?!」

「燕倪様、っ、その、っ、」

言葉を選ぼうとしているところに、

くんくんくん・・・

「んな、っ、?!」

燕倪の背中辺りから、ほんのり漂う潮の香り。

鎌首を寄せ、燕倪の胸元に鼻面を近づけたのは、

「いいいッ?!」

さすがの燕倪。

手にしつかと握った業丸を振りかざそうとして、

「いけませぬっ」

羽琶の細腕に腕を取られた。

その巨大な半透明の生き物は、鬼にしては酷く優美な曲線を持ち合わせていた。

っんっん、と鼻先を押し付けてくるその仕草。

「こいつ、っ、」

漂う、どこか空虚で、けれど子供じみた雰囲気。

「ひょっとして」

かぶ・・・

甘咬みしたのは、合わせた襟。

ひっぱられると、ころりと包みが覗いた。

羽琶がそれを手にすると、包みの中から篠笛を取り出した。

「夜半に、胸騒ぎがしまして外にでましたら、雲間より下りてくる

のが見えました。みずはは怯えておりましたが、潮の香りがいたしましたので、」

羽琶は差し出されたその鰭に抱かれ、空を渡って来たのだと言った。

「は、伯？」

こくり、羽琶が頷いた。

「どうしてまた、こんな姿になって、、いや、、これが、お前そのものなのか？」

チュキユチキイキキ・・・

「伯、、」

そつと鼻　先なのだろうか？　の辺りを撫でやれば、大

人しくしている。

「何よりも無事で良かった、、」

首の辺りを馬にするように軽く叩けば、其れを察したのか、

「あたたた、、」

ぐいつと押しのけた。

伯　であったものはそのまま土手を滑るように降りて行き、滔々と水を湛えた栖葉川の川面を覗き込んだ。

波打ち渦巻いたのは、瘴気そのもの。

ギリギリギリ・・・

苛立たしげな音を出しながら、じつとその先を見据え、体を伸ばす。

ぬらぬらと妖しく濡れ光る紫の背鰭が迫り出し、半透明の表面にははつきりと翠の鱗が刻まれた。

深紅の鬣のようなものが、尾の辺りまで伸びると、四枚の鰭の内、右前の一つを折った。

「行きましよう。燕倪様」

何を成すのか、それを語るわけでもなく、羽琶が篠笛を抱いて立ち上がった。

「ああ、羽琶殿」

鞘に戻した業丸。

微かに震えるその振動を確かめてから、燕倪は羽琶の手を引いて、その鰭に掴まった。

左腕に羽琶の華奢な体を抱くと、ゆるりと巨体が前にのめった。ぎゅう、としがみつく羽琶の温もりを感じながら、再びあの忌まわしい瘴気の渦へ。

百鬼夜行が練り歩く辻に、赤々と点々と続く血痕。

尾を引くように蠢くのは、極彩色に彩られた人の腕。

時折のたうつようにしながら進み、橋の手前で跳ね上がった。

高く、高く。

赤々と、青々と、灰白くも黒々と、瘴気が渦巻くと、鬼達が吸い上げられる。

くるくる、ようよう、、

巻き上げられる鬼達の唄。

オオオオオオ・・・

その中から漆黒の煙が飛び出すと、勢い良く辺りを駆け巡り、帝都の中枢へ。

青梅池。

浮御堂の先。

湖面が渦巻くと湖面が割れ、納めたはずの漆黒の櫃が浮かび上がる。

そのまま瘴気渦巻く空に吸い込まれると、漆黒の煙となって空を駆ける。

帝都の中枢。

御所。

広大なその宮。

篝火を焚き、武装した検非違使が絶えず弓を鳴らしていた。

祭壇でもって、祈祷と続ける陰陽師。

護摩壇にて経文を唱え続ける僧侶。

見えぬ空に星を追う星読み師。

その誰もが瘴気に怯え、それでも成すべき事に追われている時だった。

グググガガガアア・・・

耳を押さえ、一様に地に伏す者達。

渦巻く瘴気から、一閃。

紅の雷。

黒煙を上げた場所は、

「み、み、帝はご無事か?!」

「寢所でお休みでは?!」

最奥にある寢殿。

「も、もうだめだああああっ」

「うわわあっ」

「持ち場を離れるなッ」

ばらばらと弓を投げ捨て、逃げ出す者達。

俄かに混沌としたその最中、漆黒の影が黒煙に飛び込んで蟠る。

ギウグゴエゴググガガッ・・・

帝都中に響くは、紛れもない怨嗟の声。

化生には免疫のあるはずのさすがの陰陽師達も、地に伏す中、

「気をしっかり持て。動ける者は、倒れた者を建物の中へ。鈴の音をけして絶やすなッ」

凜と響く声の主。

緋色の戦袍鮮やかな、女武者。

その弓を背負い、腰に下げた鈴の房を鳴らしながら、片腕で地に伏した者を引きずり上げては軒下へ。

頭を押さえつつも、他の武者の幾人かが同様に鈴を鳴らしつつ動けぬ者を引きずりはじめる。

「皆、きばれいいッ」

弱々しくも弓鳴り、鈴の音が響く中、再度の轟音。  
同じところに再び雷。

そして、頭を劈くような高い音。

「くうッ」

さすがに耳を押さえて膝を付く中、

「天部、軒下からでるな。死にたいなら別だがな、、」

錫杖の音と、どこか冷ややかな男の声を聞いた。

重い瞼を決じ開けた先に、白い髪が、揺れた。

天も地も、禍々しいまでにどんよとした煙の渦の中。

風が巻くその中央へと飛び込む黒煙。

その数、五つ。

深く抉りつけられた寢所の一画。

辛うじてその原型を留める黒墨の欄干より、目を凝らせば、赤光が蠢いた。

「槇廼堯元、、」

眉を顰めた蒼装の眼差しの先。

甲冑を纏い、ばさら髪の大男の姿が浮かび上がる。

ギィィィィウウグググ・・・

声にならぬ音を絞りだしながら、腕が伸びた。

すると靄のような瘴気が晴れ、極彩色に彩られた顔が覗いた。

ぬめぬめと輝くのは蛇のような光沢を放つ甲冑。

深緑、橙、群青。

そして腕、足、首、胴との繋ぎ目から滴るのは、紛れもなく、かつての傷跡から止めどなく溢れる、赤紅。

落ち窪み、赤光を放つだけの眼窩が、錫杖を手に見上げる者を捉えると、咆哮。

ひょう、と風が巻いてその体が靄から抜け出し、

「っ、、」

蒼装がよろめいた。

その左肩に、生首が食らいついていた。

靄の中には、今だ繋がれずにいる体が、取り残されている。

「邪魔をするな、か、、月並みだな」

肩にめり込む牙の感触。

ギギギギギギギギ……

怨々と喉の奥を鳴らし、肩の骨を軋ませる。

足場になっていた大地が、めり込んだ。

痺氣が重力となり、増したのだ。

鈍い痛みと重みに膝を付く中、白い狩衣が、赤々と染まって行く。

「貴様の怨み、この程度か？」

蒼装の左手が伸ばされると、大地がうねる。

撓りながら迫り出したのは、橘の古木の根だ。

それは蒼装の手に触れると、鋭い切っ先を持つ槍と化す。

「この都に在るものを使役できぬで、都守が務まるか、、」

今だ、定まらぬ肉体に投擲。

四肢を貫き、突き出した切っ先は大地を穿つ。

撓りつつ、大地に縫い止めようと古木は、しかし、

「ぬ、、」

次の瞬間、腐乱した。

首に掛かる重力が、増す。

前のめりになり、辛うじて錫杖をついた時だった。

「これは」

彼方で、奏でられる旋律は、、？

もの悲しく、響き噎び泣く。

重みが半減し、赤光を放つ眼窩が、宙を彷徨う。

「おい、、」

青い唇に笑みを湛え、蒼装は赤光を受け止めた。

深い闇色の黒眸。

さすがの鬼も、その最果てを見通すが出来ぬのか？

赤光は、捉われた。

「私が立つこの場所は、絶対浄域。神の末である代々の帝が休む地だ。其処に、その首を埋めたのは、時の結果師の功績であり、今に残る失態、」

錫杖、澄んだ音を響かせた。

「悪いが、もう一度逆しまに、この都に繋ぎとめるぞ、」

蒼装の右腕が上がると、ばさらの髪を掴んでいた。

その手と頭部の間には、三枚の札。

「ぐっ」

力ずくで引き剥がせば、その口に肩の布ごと蒼装の肉。

手を放すと同時に札は、両目と口を覆っていた。

肩を押さえ、見つめる先に、宙を彷徨うその生首。

漆黒の瘴気渦巻く帝都の一画。

辻であつた大地が波打ち、辺りに溢れた鬼共を跳ね除けて空へと

抜けたのは、

オオオオオオオオ・・・

優美な曲線。

長く伸びた背鰭と、緑の鱗を浮かばせた巨体。

「これはっ」

ぐるぐると上空を回るその前肢に抱かれた燕倪が見たものは、瘴気に煙る夜都。

眼下に広がる光景は、いたる所で黒煙が上がり、心の弱い者から病んでは狂い、百鬼夜行の列に連なる者達の姿。

「燕倪様っ」

羽琶が指差した方向彼方には、真紅の輝き。

紅の炎を纏った化鳥は空を弄い、巨大な鬼共にその屈強な鉤爪をつき立てては食らっている。

そして、点在する八つの輝く金色の柱は？

「あの光は蒼装の鬼神、、だが、あの鳥は、、」

「鬼を、食べて、、」

青褪めた羽琶の音が、震えていた。

その化鳥の眸が、一瞥。

コオオオ・・・

静かに宙に停滞した巨体は、微かに声をあげただけだった。

「伯ッ、どこに蒼装がいるか、分かるか?!」

くんくんくん、くんくん・・・

鼻を鳴らし、

クアオオオオオオツ・・・

体をうねらせた。

頬に当たる風の冷たさが増す中、

「怒りを、感じます、、、」

羽琶が、その手の平を巨体の胸元へ。

優しく摩る羽琶に、

「怒り、、蒼装に何かあったんじゃ、、」

「もどかしさのような、、でも、後悔のような、、あ、、」

「羽琶殿?!」

溢れ出すのは、何故?

その眸から零れる涙。

「ごめんなさい。こんな時に、何故かしら、、」

燕倪は、何も言えず、ただ、そのたおやかな手を握った。

「燕倪様」

止めどなく溢れるそれを、肩袖で押さえた。

「どうして、、」

心が、、ひどく揺さぶられて、、こんな、、こんな、、

込み上げる、切なさ。

羽琶は、怖くなって、繋いだ手を握り返した。

そして、そつとその手を引くと、鹿皮の包みから篠笛を取り出し、唇を寄せた。

溢れる涙と共に紡がれる旋律。

「羽琶殿、、、」

燕倪は、焦げ臭いその臭いの先に、

「宮が、、鳳祥院、、」

黒々とした煙と、瘴気に煙るこの国の中枢を見た。

錫杖が、金色の閃光を放つ。

その度に生首は打ち据えられ、声無く咆哮する。

靄に煙る体は為すすべなく、しかし、その度に靄の濃さは増してゆく。

増長する憎悪が、そうさせるのだろつ。

「、、、、、、」

飛び散る深紅の雫が、貌に撥ねても、その表情は変わる事は無い。  
鈍い音が響く中、

オオオオオオオオオオ・・・

「蒼装ッ」

「何故、戻って来たのだ、、」

クウキチチチ・・・

巨体が、宮中上空に現れる。

その屋根にべたりと体をつけると、鎌首を廻らせ蒼装に近づこうとし、

「寄るでない」

血塗れた錫杖の切っ先を向けた。

クギユギユ・・・

「燕倪、そこで見ている。人の都に必要なのは、他でもない人柱だ」  
「蒼装、、、、」

再び錫杖を振りかざし、返り血に染まる都守。

「この都が、百八十年の間、大した天災に悩まされる事が無いのはな、たった一人の想いがそうさせているのだ。この地に仇為すのは、己のみ。その怨念が結界と生り、退けている」

淡々と、錫杖を振る。

「封じ直す前に、思い出させねばなるまい。かつての屈辱をな、  
聞こえるか、ここに居るは、土師業鷲が末ぞ」

「蒼装ッ」

「、、、、、、」

怪訝な顔を向けた。

「もうやめろ、、」

その先に錫杖を押さえた燕倪が、憮然としていた。

「離せ、、」

「もう、充分だろう」

「手足をこのまま打ち砕き、再び封じ直す」

「だが、これではまるで、、」

お前が、悪鬼のようだ、、

そう口に出そうとして、

「勝者は都合良く敗者の口を封じ、史実は後から文字として創られ、  
後世に残る、、」

蒼装が顎で指し示した方へ、眼をやった。

「羽、羽琶殿ッ」

篠笛を奏でながら巨体の腕を伝って舞い降り、生首に駆け寄る羽  
琶。

それを止めようとして、

「何をッ」

後ろ襟を凄まじい力で引き戻された。

「魔王も、元は人であった。燕倪よ、魔王足るを知れ」

「どういうことだ?!」

「ああ言う事だ、、」

札で目と口を塞がれた生首のすぐ前。

可憐な娘が、長い髪を瘴気によって起こる風に靡かせながら歩み  
出た。

その姿が青白い燐光を帯びると、粒子が羽琶の前にもう一人の女

を形作る。

面差し良く似た、しかし、まるで別人だと知れるのは、纏っている衣が、今よりも遥か昔の時代の衣。

麻の織の衣と、黒々とした髪を結い上げたその女が、手を差し伸べた。

生首が声無く震え、血涙と共に頂垂れた。

すると首の後ろの辺りから、黒い粒子がゆらゆらと立ち昇り、男の姿へ。

その眼窩は赤い光が占め、額には一角が突き出し、唇からは人外の牙が覗いていたが、その眸の奥から零れるのは、紛れもない感情の欠片。

魔王と呼ばれた怨敵、槇廼堯元。

その中の人であつた記憶を、呼び戻せるのは、

「愛智姫、、、」

愛智姫の手が赤い涙を拭うと、その顔が、穏やかな容貌の男のものへ。

男は、愛智姫の手を取って、唇を寄せた。

「まさか愛智姫が愛した男は、槇廼堯元、、だと？」

「真相は、愛智姫を内に宿した羽琶殿が知っている」

見れば、篠笛を胸に抱いて、羽琶が咽び泣いていた。

「羽琶殿、、」

「時間が無いぞ、燕倪」

「なんだと？」

「愛智姫を斬れば、槇廼堯元は再びこの地に縛られる。それができる大太刀は、今、お前の手の中だ」

「、、、、」

「それで、終る、、」

チキキキキ・・・

巨体が鰭を伸ばし、一行を覆うように抱え込んだ。辺りで瘴気の嵩が増した。

ガガ、ガガガアア・・・

角が生じ、牙が覗き、黒眸は赤い光を帯びて、男は両手で頭を押さえて髪を振り乱す。

「斬れ。このままでは、羽琶殿が持たぬ。槇廼堯元が愛智姫を拒絶し真に魔王となれば、この都どころか、全土が鬼に巢食われるぞ」  
「くそッ、、、」

先程から、鞘鳴りが止まぬ業丸の柄を握り締めた。

頭を抱える槇廼堯元を、抱きしめる愛智姫。

無言だが、漆黒の眸が燕倪を見つめていた。

憐憫を、湛えて、、、

「おおおッ」

唇を噛んだ燕倪が、短い呼吸と共に、刃を抜く。

空が、晴れた。

中天に昇っていた白い太陽で、人々は長い夜の終わりと、厄災が過ぎ去ったのを知ったのだった。

「果たして、良かったのか、、、」

眩しそうに、眼を細めた燕倪。

その腕には、羽琶。

傍らには、蒼瑒。

揃って眺める先に、白い燐光が二つ。

重なり合いながら昇り、やがて、太陽の光の中に溶けてしまった。

「何、心配はないさ。人は、お前が思っているよりも、ずっとしぶとい生き物だ」

「そうだな、、、」

蒼瑒は、空の櫃を拾い上げるとそれを結わえ懷から出した札を張ると、抉れた大地の亀裂へ押し込んだ。

「おい、蒼瑒」

「器だけの見掛け倒しだが、案外、効果があるやもしれん。無いよ

りは、マシだろう」

業丸の一閃で解放されたのは、二つの魂だった。

羽琶のに残っていた愛智姫と、槇廼堯元。

燕倪は愛智姫の深い哀しみと、想いを知った。

槇廼堯元の中に眠る孤独を知り、無念を知った。

そしてその涙にうたれ、大太刀を振ったのだ。

「愛智姫は、この日のためにずっと、この世に留まり続けたのですね、、」

篠笛を胸に抱いて、羽琶が微笑んだ。

「羽琶殿、、」

「槇廼堯元は生来、穏やかな気性の御方。ただ、それ故に心が弱かったとも、、」

態良く、側近等に担がれたのだろう。

「愛智姫は、意に添わぬ相手との婚姻の後、一人、娘を産んだと聞くが、、」

羽琶は、蒼装を見つめた。

白々とした髪を揺らし、頷くと、

「愛智姫が、私の中で教えて下さいました」

燕倪の手を借りて、立ち上がった。

「愛智姫は難産で死んだとされていますが、その実、お産の床に就き自らに刃を突き立て、取り出したる仔こそ、槇廼堯元が忘れ形見」

「その刃こそ土師業鷲が大太刀で、折れた鋼を研ぎ出したものだったわけか」

「はい。生来見鬼であった愛智姫は、護身用にと桧扇に仕込める小刀を、その鋼で打ってもらったのです」

そつと、亀裂を手で辿った。

「だが、よく槇廼堯元の子であることを隠し遂げたものだ。普通、生かしてはおかないんじゃないのか？」

「土師業鷲も人の子だ。槇廼堯元が挙兵すると聞くや否や、身近な配下に妹を嫁がせることを決めたのだろう。それが唯一、愛智姫を

守る手立てだったのだ」

「帝位定まってすぐに婚儀を挙げたけれど、度重なる戦の傷が災いし、程なく夫まで失った。遠野に庵を構え隠棲したその愛智姫から、どうして子まで奪えましよう？」

「仔を守るため、己が命と引き換えに潔白という偽りを、演じきったというのか。当人の口でなくば、実際、誰の子とも知れぬしな」

「まったく、人の想いとは、凄まじいものよ」

「だが、業丸の対になる刃そのものは、、、、」

「ふ、随分と粹な事をした割には、鈍い男だな、燕倪、、、、」  
「もったいぶるなよ」

蒼装が、薄い笑みを佩きながら、

「緋皇」

金色の輝きを纏った鬼神が現れ跪くのを静かに見つめる。

視線を注いだ先に、大地の亀裂。

「羽琶殿、退いていられよ」

後ろに下がると鬼神が進み出て、両手を亀裂の両側へ。

その深紅の爪が揃って伸びると、そのまま大地に穿たれた。

深々と手首までをめり込ませると、次の刹那、大地が震動。

一息に亀裂を塞いでしまった。

「ご苦労だったな」

再び跪いた鬼神、緋皇。

金色の輝きと共に失せると、

「刃に宿った退魔の力は、愛智姫の魂と共に代々その仔へと引き継がれていったのだろう」

「それでは、、、、」

「魂は解放されたが、今尚、羽琶殿の中に息づいておるのさ」  
肩を押さえたままの蒼装。

くんくん……

鼻先を、その肩に近づけたままの巨体へと向き直る。

「私は心配無い、、、、」

キユキユウ・・・

頂垂れるように鎌首を垂れたその鼻先に、蒼装は手を伸ばした。

「、、、、そうか」

しばらくその額を撫でやって、

「其を、お前が望むのなら、、、、」

眼を細めた。

「伯」

そう呼んだ。

コオオオオオオオオオオオ・・・

甲高く澄んだ声音。

その巨体はみるみる縮み、白々とした象牙色の肌を持った。

鬣は、群青深い髪と成り、鰭は細く華奢な手足へ。

その体が大地に付くよりも先に、

「痛む所は無いか、、、、？」

片腕で抱き留めた。

「あ、、、、あう、、、、」

董色の眸。

「そうか、腹が減ったか、、、、」

微笑むと、その裸軀に燕倪が己の上着を掛けた。

「え、、、、エング、、、、」

「お前にまた、借りだな」

「あぐう」

強い力で、燕倪に髪を撫でられ、呻く。

「さて燕倪。私の代わりに、もう一仕事してくれるか？」

「おう」

「恩鼓寺へ」

「恩鼓寺？遠野の手前じゃないか。そこに何があると言った？」

「帝がおわす」

万が一の事もあると、極秘裏に帝を都の外へ落としたのだ。

「よくもあの鳳祥院が都を出たな、、、、」

小声で言えば、

「ふん、あの程度の正義感。どうしても、」

「お前、帝を脅したのか？」

「さて、な、、、琲瑠」

いつの間にやら細い眼の男、琲瑠。

「車を廻してございます」

「羽琶殿、貴殿も参られよ。煩わしい事に巻き込まれる前に」

「あ、、、蒼奘殿、、、燕倪様」

蒼奘を見、燕倪を見つめた羽琶。

「遠野には、すぐにでも使いをやらせます。みずは殿も、さぞ心配なさっているでしょう」

「お心遣い感謝致します」

「いえ、こんなことしかできず。心細いでしょうが羽琶殿、俺の友は信用に足る男。帝を都にお連れしたら、直ぐに遠野までお送り致します。それまで、蒼奘の屋敷に」

「伯も世話になった。当方に遠慮はいらぬ」

戸惑いながらも、お言葉に、甘えて　そう羽琶が頷いた

のを、漆黒の眸が見つめ、

「都守ッ」

凜と響く女の声。

見れば、緋色の戦袍を纏った女武者。

「天部清親、、、」

「帝のおわすこの御所で、一体何が起きたのだ?!説明しろッ」

瓦礫の中を突き進んでくるのを尻目に、

「燕倪、貴様ッ!!このような一大事に、どこをほつつき歩いていたッ」

「き、清親ッ」

燕倪が襟首を掴まれたところで、

「く、、、ま、待て、、、」

「妖星だと?!嘘偽りも大概にしろッ!御所に群がった鬼共はなん

だつたんだ?! つそれに、この有様はッ」

「清親ッ」

「埒があかぬッ! 都守ッ! !ぬっ、、どこにいった?!」

燕児の指差す方。

そこにいたはずのその人の姿、今はもう忽然と、無い。

「い、つつ、、」

寒さも陽射しに緩んだ、午後。

梅香るその庭に面した庇の下。

諸肌脱ぎの男が、端正な顔を歪めた。

「我慢なさいませ」

少しばかり憮然と、しかし、どこか穏やかな眼差しの女は、

「このように深い傷、熊と喧嘩でもなさったのですか?」

箏葉である。

「かああう」

伯がくんと鼻をならし、すぐに涙目になって顔を背けたのは、  
箏葉手ずから調合し、練り合わせた御山の薬草。

たつぷりとそれを含ませた晒しを傷口に当て、引き絞っているの  
だ。

「そなたが、冗談を言うとは思わなかったが、このような事も得意  
だとは、知らなかったぞ」

「夏になれば御山を駆け、よく切り傷をつけて戻ってきた頃からの  
わたくしの勤め、、」

手馴れたもので晒しの端を咥え、きつく引き絞って結わえた。

「汪果」

「はい。奥方様」

「今の要領で、包帯が汚れたらこれを摺って当てるのよ」

「かしこまりました」

「箏葉様」

廊下に現れた侍女。

それに二人ばかり、水干を纏った若者が控えていた。

「御山より、迎えの者が参りました。出立の仕度、万事整ってございます」

分かったと頷き、漆黒の眸が、蒼装を見つめた。

「あなたでないあなたに出会えた。それだけでも雪深い中、来た甲斐もあつたというもの」

「そうか、」

当人は、目を伏せた。

「箏葉様、」

「羽琶殿も、どうか息災で、」

傍らで、晒しを蒔絵の付いた箱に片付けていた羽琶。

「はい。箏葉様も、どうかお健やかに。道中、お氣をつけて」  
手をついて、頭を下げた。

「羽琶殿も、、、そうそう、燕倪様は、とても良い御仁ですよ」

「え、」

はっと顔を上げた。

幼さ残る可憐なその顔、ほんのり、鵝色。

単の袖を翻し、踵を返した時だった。

「送ろう」

低い、鬱々としたいつもの声。

見れば、袖に腕を通し、肩紐を結びつつ立ち上がった。  
少し驚いた表情は、

「、、、、」

すぐ、微笑みに変わった。

ことことこと・・・

こもり雪の紋の牛車が二台。

「緋皇」

金色の輝き纏う鬼神が、蒼装の傍らで膝を折った。

「檣葉の結界まで」

両手を組んで応じたそれは、そのまま光りとなって上空へ昇った。  
「ひとつ、お伺いしても」

「構わぬが、」

「あなたでないあなた、と、」

羽琶の呟きに、

「人とは、人が測る以上に複雑に出来ているものだ、」  
低い声が、応えた。

数名の若者に守られながら、箏葉が乗る牛車が遠ざかっていくのを、白い髪の主が二人と、

「あふ、」

羽琶の袖を掴み欠伸の伯が、彼方の辻を折れてなおしばらく、見送っている。

恩鼓寺。

屈強な門構えの寺はかつて、亡き翠孔天皇の后がその菩提を弔うために晩年を過ごした所である。

帝都から西にしばらく、皇族の避暑地としても利用されている。

平素閑散とした山裾にあるこの寺が、俄かに物々しくなったのはここ、二、三日であった。

その警備の中、銀色の雪を蹴散らし、白い息と体表から湯煙を立たせた馬が、寺の門を潜って走り込んだ。

「御上」

武装した武官らが守る、奥座敷。

御簾を垂らしたその先に、ゆらゆらとゆれる灯火に浮き上がる人影。  
影。

寒々とした寒気差し込む、深更であった。

「ああ、燕倪。それに、清親、」

穏やかな、若い男の声音であった。

御簾を上げさせ、出てきたのは、蘇芳色も鮮やかな鳳衣を纏った男。

縁側にて蹲踞する二人に、

「そこは寒いだろう。早く中へお入り」

さっさと二人を招き入れると、人払いをして戸を閉めた。

四隅に置かれた火鉢の暖がじんわりと、冷え切った手足を包み込む。

「皆、わたしに伏せているが、民は大丈夫なのかい？」

「多少の被害が出ているが、都守が怪異の方は鎮めてくれた」

「多少だと？御所に雷が落ちたのだぞ？」

「清親、建物は、また直せば良い」

「だが、鳳祥院、」

燕倪と清親は、帝がまだ鳳祥院と呼ばれ、双子の兄と打って変わって、冷遇された幼年期を過ごしていた頃からの友だ。

当時三人は年頃も、屋敷も、近かった。

「噴出した瘴気のせいで発狂した者等は、陰陽師や星読みが被って回っているが、幾つか都に落ちた雷で、倒壊した建物の下敷きになった者も多い。人手を出して救助に当たっているが、」

「そうか、、そんな時にわたしはのうのと、」

俯いたその目の下に、深い隈。

ややこけた頬。

彼なりに、帝都を案じていたのだろう。

「だが、正直、御所から煙が上がっているのを見て肝が冷えたぞ、鳳祥院」

「そうだ。私もあの時ばかりは声も出なかった。いったい、どうしてお忍びでこんなところへ？」

友二人に詰め寄られ、再び顔を上げたその切れ長の眸は、少年のように輝いていた。

「りゅうを見たんだよ」

「竜って、」

話題が変わると、とたんににつこり。

手振り身振りを交え、二日前に都守が来た事を話し、

「わたしにも見えると言つてね。ちょうど、明日の恩鼓寺辺りが通り道だと」

「見たのか？」

「うん。竜と言うよりも何というのか、、翠の鱗が遠くにきらきらと見えただけで、、ああ、大きな紫紺がかった背鰭が見事で、でもどこかずんぐりむっくりで、滑稽な、、」

「そのようなもの、この世の中に存在するものか。ん？燕倪、どうした？」

「あ、いや、、それで？」

「本当に見たんだよ、わたしは。清親、燕倪」

うつとりしつつ、溜息をつくその人を見つめ、清親は眉を顰めたまま。

「そんな顔をしないでくれよ。本当なのだから」

脇息に凭れ頬杖を付き、灯火の頼りない明かりの中、漆黒の眸が穏やかに見つめる。

「わたしも燕倪も武官。鬼や神など、俄かには信じられぬ。まして竜など、、」

「燕倪は、そうでもないみたいだけど。ねえ？」

当人、腕を組んだまま、まんじりとしめない。

「燕倪っ」

「んあ、と、すまない。何だつて？」

「都守とばかりつるんで、最近は、わたしにろくに顔も見せに來ないじゃないか」

「我俣を言つてくれるなよ」

溜息混じりに吐き出して、

「とにかく、御所の修繕が落ち着き次第、歸ろう。直に後発部隊も着く」

「答えになつていないよ、燕倪。わたしを差し置いて、面白いものをたくさん見ているのだろう？」

「どうなんだ？」

二人に詰め寄られた。

「今はそんな話をしている場合では、、」

「この騒ぎ、妖星が近づいた為に引き起こされたとか聞いたけれど、都守と行動を共にしていたのなら、ちゃんと納得できるようにわたしに説明してくれなきゃ」

「うぬぬ、、」

腕を組んだまま後退さったところで、遠くに馬の蹄の音を聞いた。後発部隊が着いた事を知らせる使いよりも早く、戸に寄ると、  
「鳳祥院、清親、実際のところ、俺もよく分かん。都守を召喚してくれ」

「燕倪ッ」

清親の声を背中に聞いて逃げ出した。

吹き込む寒気に、清親が戸を閉めれば、くすくすと笑い声。

「鳳祥院」

「分かりやすいんだから」

「ああ。昔から、嘘がつけない男だったな、燕倪は」

束の間ではあったが、いつかを懐かしむ穏やかな時間が、流れていた。

白い風花が、ちらほら舞う、昼下がりに。

雲が、ゆっくりと流れていた。

枝に可憐な花蕾を散らせたのは、枝垂れ白梅。

あまやかに香るその枝に、手を伸ばしていた男は、

「蒼装ッ」

一直線に歩み寄ってくる者に次の瞬間、襟を掴まれていた。

「ご挨拶だな、燕倪」

微笑むその男に、

「帝を恩鼓寺に送ったってのは、伯を見世物に釣ったのか?!」

「そうだとしたら、どうなんだ?」

「おまえっ」

拳を握ったところに、ひやりとした小さな感触。

「エンゲ、、、」

ずしりときて見やれば、両手を腕にかけてぶら下がる、伯の姿。

「おま、、、少し、太ったんじゃないか？」

そのまま手を下ろすと、伯は腕を胸に抱いたまま、燕倪にくつついてしまう。

「伯、、、」

くしゃくしゃと、その髪を撫でれば、

「オレ、それキライ、、、」

上目使い。

「伯っ?! そ、そうか、そうか。今日はよく喋るんだな」

「、、、、、、」

すぐに口を噤むと、蒼装の背中へ。

手を伸ばすその先に、

「夜都となれば、その結界外に出る事は至難でな。それが可能なのは、この都では伯くらいなもの。都が完全に槇廼堯元に掌握される前に、伯だけは逃がすつもりではあったのさ。まあ、余計な輩が強引にそれを成したがな、、、、」

「輩、、、あの獣の耳と尾をつけた男、あれはなんだ？」

「この都が都である以前から、産土である神の眷族。今回の騒動で保険として伯に目をつけたのだ。いずれ、お前も会う事になるかもしれないぬ」

「恩鼓寺を通ると言ったのは？」

手折った花枝を渡してやると、たっ、と母屋に向かって駆けて行く。

「伯の生まれが、その向こう。神体となれば、己が成すべき事を思い出すため、最初の地に還るものだが、、、伯は、戻った」

「あ」

緩んだ大地に足を取られたのか、伯が転んだ。

「あいつ、案外、どんくさいな」

むっとしながらも、すぐに起き上がった伯。

白い水干が泥に汚れていた。

「羽琶姫が勧めるがまま、食事を摂るようになってな。地に、足が着き始めたというのか、」

「これからも都で生活するのなら、その方が都合がいいんじゃないのか？」

「そうかもしれん、」

軒先で心配そうに見ていた羽琶の元に駆けつけると、袖で泥がついた枝を拭いてから、差し出した。

「わたしに、くれるの？嬉しい」

たおやかに微笑んで、両袖で花枝を抱いた。

その光景を、穏やかな眼差しで見つめている蒼装に、

「お前も、素直になればいいのに」

「何をだ？」

「昔は鳳祥院に似て、お前が地に足着いていなかった、」

「ふん、」

「伯が戻って、本当は嬉しいんだろう？」

庭先に琲瑠が現れ、燕倪に気づいて会釈をした。

それに手を振って応えれば、

「出立の準備が出来たようだ、」

蒼装は、そちらに歩き始めていた。

「今から出れば、美津辺りに宿を取れる。明朝に出れば充分昼には、遠野に着くだろう」

「おい。話を逸らすなよ」

「なんなら私が、遠野まで送ろうか？」

「いやいやっ、俺が行くっ！羽琶殿、仕度は出来ていらっしやるか？！」

伯の顔についた泥を懷紙で拭っている羽琶の方へ。

その光景を見つめる蒼装の傍らに、琲瑠。

「緋皇が戻りました」

「そうか。では、遠野までの警護は、」  
「オオオオン・・・」

何処からとも知れぬ、狗の遠吠え。

真昼の寒空に響くその声を聞けば、蒼装が青い唇が微かに吊り上った。

「償いの足しにもならんが、、天狐の連れ合いが、負うと言うのなら、任せてみようか」

「ではそのように、、」

伯に手を取られ、土産の入った漆の櫃を担いだ燕倪の後ろ、羽琶が母屋から渡り廊へ。

門前に用意しておいた牛車に乗り込む羽琶に手を貸し、

「道中、気をつけていかれよ。羽琶殿」

「お心遣い、感謝致します。都守蒼装様」

梅の花枝を抱いて、牛車の中へ。

「伯様も、健やかに。また、遠野にいらしてね」

「うわ、、」

「こくん、と頷いた伯。

「燕倪、頼んだぞ」

見上げた先には葦毛の肥馬、千草に乗った燕倪。

胸を叩きながら、

「ふんっ、任せておけよ。さあ羽琶殿、参りましょう」

鼻息荒く、ゆるゆると動き出した牛車の傍らに寄り添った。

往来に消え行こうとするその姿を門前で見送っていれば、

「ふおおおっ」

伯が、小さな犬歯を剥いた。

右前脚に赤い布を巻まれた白い大きな狗が、上目遣いで現れた。

「かあううううっ」

董色の双眸を見開いて、前に出ようとした伯の肩を掴み、

「いああっ」

抱き上げれば、狗はたとと駆けて、早々と活気取り戻しつつある  
往来に掻き消えた。

「赦せ、伯。全ては、私がいたらず招いた結果だ」

「まううう」

がしがじと肩の辺りを噛むその髪を撫で、

「呑もうか、伯。お前の好きな梅の花を愛でながら、一晩でも、二晩でも、付き合おうぞ」

宥めながら、母屋へと消えていった。

開け放たれたままの門を閉じていた琲瑠がふと、顔を上げた。

先ほどまで晴れていた空が、薄雲に覆われ、ちらほらと白いものが舞い降りる。

思わず微笑んだのは、頬に当たって溶ける雪に、懐かしい海の香りを微かに感じ取ったからかもしれない。

薄雲は、見る見るうちに、本格的に雪を降らす厚い雲へと変わっていった。

今尚、傷跡を残すこの都を、真っ白な雪が包み込んで行く様に、

## 第参幕前

### 孤夢

#### (前書き)

先の怪異から一月。帝都では、また人々を震撼させる事件が起こっていた、。

死人還りの都守蒼装、業丸を継ぐ武官燕倪、幽身であるがこの世に縛られた伯。それぞれが紡ぐ異国絵巻、第参幕前編。。。

## 第参幕前

## 孤夢

上へ、下へ。

揺らめきながら差し込む、月明かり。

深い海を、力強く穿つ、陽の光。

そのどれをも、瞼を通して見ていたのかもしれない。

上へ、下へ。

体に刺さったままの、無数の矢。

黒い帯となつて流れ出る、忌々しくも赤い、己が血潮。

一滴残らず、染み出てしまえ、

そうすれば、まだ少しは、気が晴れるような気がした。

上へ、下へ。

冷たく傷を舐める、海の水。

このまま漂い続け、この身が朽ちれば、もう、あの人を想わなくて済むのに、

それは良く晴れた、しかし風の強い秋の終わりの事だった。

黒々とした葉をつけた、松の並木。

その先に広がるのは、ごつごつとした石ばかりの海岸。

そこに、小さな人影が立った。

眸に、強い光を宿す、女童。

若草色に染められた小袖の裾を摘み、石から石へ。

白い波が激しく打ち寄せる波打ち際までくると、

「、、、、、、」

青く滲む漆黒の眸が、足元に打ち上げられた者を、見下ろした。

強い風に、結っていた綾紐が飛ばされて濡羽玉色の髪が、靡いた。

「、、、、、、」

女童の足元に伏すは、その身に矢を無数に受けたままの、長身の男。

衣であつたものは、波風に晒され檻褸としか見えぬ有様で、細く息をしているのが、不思議なくらいだ。

凄惨極まりない男を前に、しかし、

「、、、、、、」

女童は、目を背けはしない。

むしろ、その眸は炯々と、輝きを増す。

「聞こえて、いるのだろうか？」

強い風の中、その澄んだ声音は、凜として、放たれた。

浜に、打ち上げられたままのその男へ。

「、、、、、、」

その姿、異形。

朱金の髪は、斑。

腕から先は、びつしりと同様の体毛で覆われ、爪にいたっては漆

黒の鉤爪であつた。

「そなたの夢を、視ていた、、、、」

恐れなど、微塵も感じさせぬ、女童の声。

その言葉に導かれるように、微かに、瞼が動いた。

覗いたのは、瞳孔鋭い金色の双眸。

そしてその眸に映るのは、陽の光の中に立つ、女童の姿。

鼻腔に甘い、人の匂い。

それも、骨柔らかく、上等な…

飢餓に、紅へと色を変えた眸は、

「、、、、、、」

しかし、すぐに元の色に落ち着き、異形は、目を閉じた。

「夢の中。ずっと、そなたの声を、聞いていた、、、、」

「、、、、、、」

「冷たい海を漂つても、その声が途切れることはなかったのは、、、、」

「

冷え切って、感覚の無い四肢を貫いたのは、

「生きたいから、だろう？」

女童の、言葉。

瞼が、動いた。

「、、、、、、」

もう一度、声の主を探し彷徨う、眸。

女童が、光の中で手を、差し伸べる。

頭を掻きつつ御所に上がったのは、鈍色にじいろの眸にどこか愛嬌のある男。

片腕には、書簡を抱えている。

「やれやれ、、、、」

燕倪えんげいである。

陰陽頭不在を見計らって、蒼奘そつじょうが左大臣と共にでつち上げた妖星

騒ぎ以来、昼は宮中に入り、夜ともなれば御所を見回り、

何でいつも、俺ばかり、、、、

ろくに屋敷にも帰れぬ、忙しい日々を送っていた。

溜息混じりに見上げた空に、煙が爆ぜている。

定例会、召集の合図だ。

今日は、見回りの合間に見聞きした文官、武官、はては後宮の女御達が直面している御所の内での怪異や、彼等から寄せられた修繕

の手が行き届いてない箇所等々、帝をはじめ重鎮連中に諸事諸々報告する日であった。

直属の上司であり、従兄弟の左近衛府中将真紀烈也さこんえふ ちゆうじょうまきれつやによって、先の一件で、お心病み、お休みになれぬ方も多いと聞く。よって当面は御所を見回り、不安の種を見極めてくるのだ』

『何で俺なんだ』

『お前は女運は無いが、妙に女御受けが良い』

『余計なお世話だッ』

『月末の定例会にて、御上に御報告奉る。しっかりやれよ』  
押し付けられた次第である。

それでも性格柄、手は抜けぬようで、目の下の隈がこの男の仕事振りを物語る。

大内裏と内裏を繋ぐ渡り廊に差し掛かった辺り、

「ん？」

視界に入ってきたのは、冠を頂いた束帯姿の長身の男。

欄干に肘をついてうつそりと、遠い眼差し。

どこか物憂げで、それでいて、冷たさを湛えた黒瞳。

春先の、からりとした雲一つない空の下が、此れほど似合わぬ者もない、

「おい、蒼装」

その人である。

「珍しいこともあるものだな。お前、定例会に出るのか？」

「いや、、、」

平素、各寮の長や諸将集まるこの会にはこの男、出席した試しが無い。

都守は星読寮、陰陽寮、稀に神祇官の中から選出されるが、帝直属の扱いになるため、待遇が異なる。

元々は、代々の帝の傍らに在ってその身を災いから退ける、またはその肩代わりをする帝の形代の色合いが強かったが、『民在る都を守ってこそその安寧』を掲げた当代より数えて六代前の剛珪帝の御

世に、今の都守の位置に定まった。

帝付きではあるが、その存在は帝都安寧のため。

その安寧守るためならば、いかなる者にもその所業阻むこと、裁くことが出来ない、と言うことになる。

「今日は、先の件で、ついに呼び出しを食ってな。帝直々に、こっぴどく搾られた後だ、」

「そうか。まあ、それも御上の御公務の内さ。酌んでやれよ」

「竜に、いたくご執心だったが、」

「ははは、」

憂鬱な表情の原因を垣間見て、これはまた面倒なことをねだられたのだろう、と悟った燕倪は、それ以上聞くことをやめた。

「ところで、肩の調子はどうだ？」

「御山の薬草はひどく沁みるだけで正直、芳しくは、無い」

「さすがの箒葉殿も、異形の鬼から受けた傷に効く薬草は知らないか、」

「こればかりは、な」

「ん？」

ふと、見れば意味深に蒼装の織手が弄んでいるものがある。

書簡だ。

「それは？」

「お前の好きな厄介事よ」

「別に好き好んでは」

「私もだ、」

「何やら上の空だな、さつきから。いったい何を見てるんだ？」

視線の先。

御所正面の広い庭に、人が出ている。

忙しそくに右往左往するのは、白き袍で身を包んだ陰陽師達。

「明日の大祓えの儀。祭祀の仕度か。まあ、あの規模の百鬼夜行。

鎮まったとは言っても、さすがに民が不安がるのも無理はないよな」

「におうのだ、」

「あ？」

「ひどくあまく、な、な、」

ふわり……

蒼装が傍らを通り過ぎると、瑞々しい椿の香り。

「焚き染め過ぎたのか？」

「読んでおけよ」

「お？あッ」

いつの間にか懷に擦じ込まれたのは、紫紺に染められた綾紐で結わえられていた。

「おまつ、これ勅旨じゃないか？！」

すでに彼方を歩くその人が、

「お前の名を出しておいた」

言い捨てて手を振った。

その背を見送って、

「まあ、いつも俺が持ち込む事の方が多いか」

諦めて渋々、懷に仕舞ったのだった。

「銀仁<sup>いんじん</sup>、どうした？」

「いや、な、」

足を止めていた若者が、首を振った。

先に行くのは初老の男。

御所には、珍しいものもあろうと、視線を追った先には、

「ああ、都守か。宮中で会うなど珍しい」

特徴的な、白い髪の主。

「都守、な、？」

「帝都を預かる者だ。占星術、仙術、呪術を能くする者が選任されるのだが、我々が勤める陰陽寮ではなく、当代は星読寮の出でな。」

とにかく、気難しい男よ」

「だが、あの髪の色は、、、」

「死人還り。生きながら幽世を彷徨い、戻った者は、見鬼になって戻ると言われている。その者は、一様に髪の色素が抜け落ちて、あのように白くなってしまうのだ。あの男は、先代の都守が死んだ後、幽世に渡り、死人還りとして現世に戻った。異形の力と共にな、、、」

「、、、」

「今となつては無愛想な奴だが、あれでも昔は、可愛げのある奴だったんだが、、、」

公達らが道を開ける中、遠ざかるその背が、二人の視線の先で立ち止まった。

振り返り、

にこり…

会釈を送ると、そのまま社殿を星読寮の方へと消えてしまった。

「聞こえていたかな？」

「何やら笑って、、、」

「気にするな。嫌がらせのようなものだ」

「はあ、、、」

二人が立つそこへ、浄衣姿の陰陽師が駆け寄った。

「陰陽頭、砂庭用の浜砂が着きました」

「ああ。これで全て揃ったか、、、」

手にした古い書物を閉じると、

「銀仁、稀水きすいと共に見て回れ」

「分かった」

「頼んだぞ、稀水」

頷いた弟子に預け、陰陽頭は大内裏へ向かって歩き出した。

若者を連れた陰陽師は、

「陰陽寮は昨今、年寄りばかりで、当てにできませんからね」

「できる事があるのなら、なんでもしよう」

「助かります。清めた後に、この一帯に浜砂を敷き、祭壇を設置しなくては。こちですよ、銀仁殿」

師が連れてきたこの新入りに、人の良い笑顔を見せたのだった。

屋敷の門前で、ちょうど出くわしたのは、包みを抱いた瑛瑠<sup>はいる</sup>。

「燕倪様、今、案内を、」

「いいよ。勝手知ったるなんとやらだ。庭から回るよ」

「ではすぐに、お酒をお持ちいたします」

山野草が植わる母屋への小道。

鼻腔をつく、深く芳しい香り。

その正体は、闇の中に灰白く浮かぶ銀涼草<sup>ぎんじょうそう</sup>だ。

「ん？」

その群生した辺り。

植えられた楓の老樹が、ざわついていた。

見上げた先の新緑の中から、白い袖。

「伯、そこで何をしているんだ、」

重さで垂れ下がる枝を手にして、覗き込めば、

がしがじ・・・

幹を、齧っている。

「また、おかしな遊びを。降りてこい、ほらっ」

「いあっ」

手を伸ばし、袖を引いて下ろせば、伯が転がり落ちた。

抱きとめたところを、

「がうつ」

「ぎえッ」

肩に食いついた。

「やめよ、伯、」

首根っこを摘みあげて引き離したのは、蒼装。

「なんなんだっ?！」

「乳歯が、生え換わる時期らしくてな、」

「だからと言って、口に入れるものは選べ」

「あむう」

上唇を摘むと、歯茎から小さな犬歯が覗いている。

「楓は他のどんなものよりも甘く、都合が良いらしい。私も、この通りだ、」

たくした袖。

白々とした右腕に、点々と赤い痕。

「賤しろ」

手にした小太刀を抜くと余分な細い枝を切り払い、手を伸ばすその人へ。

大人しくなった伯を小脇に抱え、母屋へ。

ほどなくして汪果と琲瑠が、酒肴を運んでくると、蒼装の膝で枝を齧っていた手がさっそく伸びた。

その手に杯を持たせ、瓶子を傾ける。

蜂蜜色の液体が、細やかな泡と共に注がれた。

ほんのりと甘い香りが、鼻腔をくすぐる。

舌をつけ、刺激に小さく震えた伯を見つめてから、よく冷えた瑠璃の杯に二つ、なみなみと注ぐ。

一息に飲み干して、

「後味が、変わっている」

「牛の乳を醗酵させ、取り出した酵素で作られた異国の酒だ」

「牛の、」

二人が飲み干したのを見てから、もう一度唇をつけた伯だが、  
「ふやっ」

杯を置いてしまう。

その口に、蜜を絡めた胡桃を入れてやる男へ、  
「しかし、傷も癒えぬと言うのに、また、畳み掛けて来たな」

「私を都守の座から、引きずり下ろす口実にでもしたいのだろう」

「どうせまた、何かしたんだろ」

疑惑の眼差し。

「陰陽頭不在の内に、帝と都を危険に晒したのが気に食わないのだ、  
、、」

「夜都となつたのを良いことに、あれが妖星近づいた兆しであつた  
と言ひ張つたんだってな？ そのおかげで対応遅れたと、陰陽寮と星  
読寮は帝の御前で、面目丸潰れ。当の陰陽頭など黙ってこそいたが、  
露骨に首を傾げていたと、父上が言っていた」

「幸い、瘴気が目に見えて噴出し始めたのは、陰陽頭が諸用で都を  
離れた後であつたな。備堂家の悪運、大したものだ」

「それだけじゃない。清親が、御所に落ちた雷四箇所の内の一つに、  
陰陽寮の碑文の間があつたと嘆いていたが、、、」

「ふ、、、」

「やはり、お前の仕業か。あの大事の最中に、よくもそんな事が、  
、、」

「お前も何も言えまいよ。秘されたままの碑文がこの先世に出る事  
あれば、今の備堂の権威、失墜するぞ。土師氏の末、、、」

「むうつ」

相変わらず、涼しい顔で、

「人柱を解放した今、これから先、碑文も必要なかるう。四神に守  
られた神都と、思わせておけばいい。真実は、代々の都守が知って  
おればそれでいいのだ」

青い唇に杯をつける。

「そついうものかねえ」

「知らぬ方が、心安く生きられる場合もある」

「んー」

次の胡桃を欲しがる伯に、杯を再び箸に持ち替えた。

その鼻先に、勅旨である書簡を突きつけて、

「で、富紀の山へはいつ行くのだ？」

「人喰い鬼の棲まう山、か、」

勅旨は、こうだ。

帝都の南東にある、富紀の山。

峻険な山として知られ、修験者らの霊山でもある。

人を拒むかのように滅多に霧が晴れる事が無いため、原初の森がそのまま残り、麓の里の住人達らは、それ自体をご神体として崇めている。

その山で、しばし血生臭い事件が起こっているらしい。

夜更けに獣のような、声。

山に点々と立つ、焰。

山肌を疾駆する巨大な、影。

そんな目撃が寄せられてしばらく経ったある日、ついに犠牲者が出た。

麓の里から人らが攫われ、ずたずたの衣と共に腹を割かれて見つかったのだ。

それだけではない。

その事件を皮切りに都の周辺で、通りがかった貴族や、旅人も餌食となり、そのことごとくが腸を出され、惨殺され始めた。

届出が出されているだけでも、五件。

怪異から、一月足らずの事である。

「検死に向かった者の中に、星読寮の坂枝某という者も同行していてな。そやつが言うに、斬り殺されたな者には、同様に四つの揃いの傷が、深々と残っていたそうだ」

「四つの揃いの傷？」

「爪で引き裂かれたかのような、抉られたかのような、凄惨極まりないものだったらしい」

「ん？」

懷から取り出した、紙の束。

何気なく受け取って目をやれば、

「お、おいおい、」

燕倪が顔をしかめた。

「一枚目と二枚目は、実際に坂枝が見て描いたものだ。後は、発見した者達の証言を元にしてある」

髪を振り乱し、目を剥いた女の姿。

襷褌と化した衣、生々しく抉られ覗いているのは明後日の方向を向いて晒された、太腿の骨か？

黒墨一色だが、事細かに、発見された子細を描いている。

「とても、酒の席で見るものじゃないな、」

さすがに眉を顰めた燕倪。

「星読などやめ、いつそ宮廷絵師、孔雀殿の書生にでもなった方が  
良い腕前だ」

「お前、それ、当人に言ったのか？」

「ああ」

「おい」

そんな燕倪の窘めも、どこ吹く風で、

「里の者の目撃例やこの遺体の有様を見るに、相手が人外の鬼であるのなら、陰陽寮の管轄。名つての陰陽師が数名向かったらしいが、現れたのは狐狸ぐらい。とんと手掛かりを得られなかったらしい」

「で、おまえにお鉢が回って来たと、」

「先の騒動で宮中も民草も、過敏になっていくからな。それに例の騒ぎを予見できなかったとして陰陽、星読、神祇の連中も先の怪異を重く受け止め、祭祀や暦の見直しで、手一杯だ」

「暇なのは、どこを探してもお前だけか、」

「手負いの者を労わらぬとは、世も末だと思わぬか？」

蒼装は、嘯いた。

「それが、お前の負った都守の責。諦めろよ」

「ふん、」

「手勢が必要ななら、俺が揃えるが、」

「いや、構わん。そろそろと、お前のような大男らに囲まれてたま  
るかよ」

「出立は？」

「明日の大被えの儀、さすがに顔を出さぬわけには行くまい。その後、だな」

「ちえっ」

「何だ、えらくやる気だな？」

蒼奘の言葉を受けて、燕倪が瓶子を取り上げた。

「いやさ、つまらぬ宮勤が長かったからな。お前との鬼退治の方が、性にあっているのさ」

「の、後の酒だろう、、、、」

苦笑しつつ、空の杯を満たしてやりながら、

「伯は、どうするすんだ？」

「、、、、、、、、」

膝で眠るその童を見つめ、

「今回は、置いていこう」

静かに言った。

「そうか、、、、」

先の一件で、蒼奘は伯に、その身が張り裂ける恐怖と痛みを、与えてしまった。

それを、引きずっている。

燕倪は、空の杯を置くと、立ち上がった。

大きく伸びをしながら、

「もう行くよ。ようやく定例会も終って、引継ぎをしたところだ。ゆっくり休みたい」

「ああ、そうだったな、、、、」

いつものように、脱いだ草履を引っ掛けて庭から小道を抜けて門へ。

篝火の明りの中、提灯を持った琲瑠が、微笑んでいた。

「いつも、悪いな。琲瑠」

「いえ。道中、お氣をつけて」

提灯を受け取ると、人気の無い往来に出る。

ふと、恵堂橋まで中程のところで振り返れば、彼方に赤々と篝火見えるは、蒼装の屋敷のみ。

その篝火の下で、ぽつねんと見送っているその人の姿。

「相変わらず、律儀な、、、、うう、寒っ」

辻にさしかかり、吹き込んだ風にぶる、と身を震わせると、襟を掻き合わせ走り出した。

月の高い、薄雲たなびく、そんな夜であつた。

屋根の上。

彼方に星を頂き、黒々と鎮座する勝間の山裾の少し、上辺り。とろりとあかい、十六夜月夜。

ここで聞こえるものと言つたら遠く、野犬の遠吠えくらい。

あんなに耳に障つた潮騒の音が、今はどこか、懐かしい。

潮で焼けた喉も目も、体の傷も皮肉なもので、半年も経てば元通り。

病の癒えた主と共に朱央門を潜つたのは、帝都のあちらこちらに材木が運び込まれ、人夫行き交う、騒ぎの後だった。

この都は、多田羅の浜の辺りと違って、物々しい

また今日も、どこかで人の死臭がする。

嗅ぎ慣れたその、匂い。

飢えを覚える、匂いだ。

月色で綺麗だ、とよく主が覗き込む眸が、赤々と染まって行く。

「銀仁」

声。

主の、声。

あと。

首を振つた。

「、、、、、、」

金色の眸は、声の主を探して屋敷の内に視線を彷徨わせる。

軒下で探す幼き人の、主。

音も無く、舞い降りれば、

「寒の戻りか、今宵は冷える。はよう中に、」

その寝所へ。

「おやすみ、銀仁」

「ああ。甘い夢を、」

幼い主は、腕の中で眠る事が当たり前になって、

「、、、、」

あとの傍らで眠るのが、いつしか男の当たり前になっていた。

しとしと、氷雨に煙る都を、出る牛車があった。

「散々だったな、」

窓から外を眺めていた燕倪に、

「人の祈りが、空を行く竜に届いたのだ。竜によってもたらされる雨は、浄化の雨」

さもつまらなそうな、声音。

薄暗い闇の中、天井より提げられた燈明の灯りで、書物を読んでいるのは、浄衣姿のままの蒼装だ。

「竜ねえ、、あの一件以来、何も見えぬが」

「あの時は都中、瘴気で満ちていたからな。今は、例の一件で結界も弱まった。上空を化生や自然神霊が容易に行き来できるようになったのだ。精進せねば、星も暦も、読み違う」

「うつむ」

「別に、お前をせめてはおらんさ。人で拵えた結界などというものは、いつかは綻び、歪む、」

それつきり、二人の間に沈黙が満ちた。

聞こえて来るのは車輪の軋みと、雨、そして、書物を捲る音。

「なあ、さつきから読んでいる、それは何だ？」

「大陸の古い書物だ。昔、大陸から来た高僧が妖に関する伝承を記したものを、勝間の御山に納めたそうだ。これは、それだ」

「箏葉殿の、」

「ふと、思い出してな。朝の内に、琲瑠に使いに行ってもらったのよ」

「今回の鬼騒動に、関係しているのか？」

「それは分らん」

「あ？」

「ただ、暇潰しにはなるうよ」

「おまえはいいさ。暇潰すものがあつて。ああ、俺はこんな湿気の多い狭い所で、後何刻も過ごさないといけないのが、憂鬱だ」

再び、顔を窓の外へ。

辺りには、長閑な田園が広がっていた。

水を引き入れたばかりの田には、規則正しく稲の苗が植えられ、水面には雨蛙が我が物顔。

それを狙って、大きな青鷺がじっとしていた。

ぬかるむ道には、ちらほらと菰を被った者達が行き来しているだけで、彼方に見える小屋の戸は、固く閉められている。

そんな中を、ぎしぎしと、牛車は行く。

牛車を先導しているのは、琲瑠。

水干の裾をたくし、傘を差している。

顔を出している燕倪と目が合って、にこりとした。

「寒くは無いか、琲瑠？」

「ご心配無く。冷たい水に慣れ親しんでおりますから」  
意味深なその言葉に何の疑問も抱かず、

「そうか。でも、無理すんなよ」

再び、中へ。

「しかし、良いのか？琲瑠を連れてきて」  
「伯なら、預けてきた」

「預けるって、どこに？」

燈籠の灯りの薄暗がりの中で、燕倪は青い唇が吊り上るのを、見た。

「貸しのある、近所の屋敷にな」

一面に咲き狂うは、撫子、紫苑、鬼百合、虞美人草に芍薬、木蓮、露草、杜若。

一步古びた門を抜ければ、外は雨だと言うのに、その庭は花と言う花で覆いつくされている。

その花咲く庭に、金色の髪を長く背に流し、獣の耳と尾を持つ者が立っていた。

てんこようげん  
天狐遙絃の屋敷である。

「ほ、、、泣き疲れて眠ったか？」

主が望まねば、けしてその門は開くこと叶わぬ、屋敷の内。

花に囲まれ指を啜えて丸くなっているのは、群青色の髪を乱した、伯。

紫紺の玉、泪の欠片が、あちこちできらきらとしている。

それを辿れば、容易く見つけることが出来た。

「寝顔だけ見ていれば、まあ、仔も悪くは無いな」

長く赤い爪で頬を突くが、僅かに身じろいだけで、起きない。

「遙絃、、、」

そこへ、腕に綺羅の織物を持った砂色の髪的美丈夫が歩み寄った。

「言っただろう。私は探し物が得意なのだよ、胡露」

「助かりました。若君にもし万一の事あれば、都守に申し訳がたたない」

手にしていた織物で包み、抱き上げれば、

「しかし、この天狐が子守とは、」

「すみません。お手を、煩わせるような事に、、、」

「気に病むな。思えば長く生きて、仔を持つ事だけは無かった、、

」  
遙絃が覗き込む。

「余程、離れるのが辛かったのだな」

時折、スンスンと鼻を嚙っている。

「健気よな。名を、存在意義を封じられても、縋る先には、全てを歪めたあの男しかいないのだから」

紺碧の双眸を細め、群青色の髪を一房、手にとって口付けた。

「いずれにしても」

胡露に背を向けて、歩き出した遙絃の腕が振られる。

降り注ぐ陽射しに煌いて、胡露の手に収まったのは、

「これは？」

多面体の小瓶。

「鈍いやつだな」

「遙絃？」

「瑠璃宮を使え」

瑠璃宮。

屋敷と対になって、その逆しまに存在する遙絃氣に入りの水宮の一つ。

「よろしいのですか？」

「ああ。はぐれ神とは言え、元々海皇の眷族だ。その方が心休まるだろう」

母屋へと続く渡り廊下で、控えていた侍女が手を差し出す。

その手を取って、階段を上り、

「蒼装が戻るまで、上等な酒でも、食事でもいい。とにかく、靈紫を吐いたら、その小瓶にいれておけ」

艶然と微笑んだ。

「一体、何にお使いに？」

「靈紫は、若返りの秘薬よ」

珍しく、二つ返事で子守に応じたのはその為であったかと、今更

ながらに気づいた胡露であつた。

肩を、揺さぶる者が居る。

競い合いで、式の香と伍の香が何か、悩んでいる所で目が醒めた。  
「む、、、」

灯りの中に茫洋と浮かぶ男が、

「着いたぞ、、」

先に出て行つた。

開け放たれたその先には、闇が塗り込められていた。

「暮れたな、すっかり」

「今、猪の刻を少し回つた辺りです」

雨も止み、空には遠く星々だけが輝いている。

「ここは？」

「里の裏にある富紀の祠への入り口です」

火を、燈籠に移しつつ、琲瑠が言つた。

緩やかな勾配の道を、上がってきたのだろう。

その視線の先、眼下に闇に蹲る里が見えた。

「こんな時間から、御山に入るのか？」

「さつさと終らせるに限る」

「ああ。次の犠牲者の事を思えば、そうも言つてられんか」

「鬼への手掛かり、得られるかどうかは分からんがな」

「夜の時分、参道の辺りで火柱を見たとも言つしなあ」

その参道が、細く、木立の中に伸びている。

錫杖について、手に燈籠を持った蒼桒と燕倪が、歩き出す。

「お気をつけて」

二人の背を、いつものように琲瑠がにこやかに見送っている。

牙の先の皮膚の下。

弾けんばかりに膨張して、脈打つのが分かる。

押さえ込んだ体の下で跳ねていたしなやかな四肢。

生暖かく胸元を濡らしながら、大地に蟠ったものは、甘く鼻腔をくすぐった。

やがて細かく痙攣した体は弛緩して、獣は獲物から牙を引き抜いた。

鼻先を近づけた先に、細かく柔毛が密集した腹部。

腹腔で湧き上がる微かな、苛立ち。

その日の獲物は、雌の鹿であった。

それを前にして、より一層浮き彫りになる浅ましき、性質。

脳裏に浮かんだ、かつての記憶。

思いのままに、人を狩っていた頃の自分。

その味を、この舌が忘れる事は無いだろう。

そして、

「シユエ、、、」

愛した人の名も…

規則正しく鳴る錫杖の音だけが、響いていた。

深く苔生した原生林に入ったと思えば、奇岩覗く岩山になる。

山の中程にある祠へは、富紀の山を西側から回り込み、海に面した南側に出なくてはならない。

幸い、この辺りは雨が降らなかったのか、足を取られるような事は無かったが、薄く霧が立ち込め、二人の衣はしつとりと水分を吸って重くなっていた。

霧は徐々に深くなり、そのせいで、目安になるはず景色も見えない。

「まだ先なのか？」

「さてな。そろそろだと思っただが、、」

「霧が深すぎて、何も見えないぞ」

額の汗を拭い、息を整え、

「御足労、願ってしまっただようだ、、」

低いその声を聞いて、顔を上げた。

少し先を歩いていた蒼装が、佇んでいる。

「お、、」

その先に、金色の紋様を刻んだ肩耳赤毛の、狼。

灰鼠の双眸が、二人を静かに見据えている。

ざわり…

全身が総毛立つ。

遠野で見た青い猪以来だ

狼が、たっ、踵を返した。

その背に続き、

「てつきり、斬りかかると思っていた」

「遠野で見てなきゃ、な」

「遠野の辺りを縄張りに行っている地仙、青角を見たのだったか」

「地仙？主みたいなものか？」

「まあ、そうだ」

燕倪は、まじまじと先を行く狼を見つめた。

「富紀の山の主、か、、」

「ああ。夜都となった都の周りに、結界を敷いた神の一つさ」

霧の中に、古びた注連縄を架けられた巨岩が姿を見せた。

大地から突き出したその巨岩の付け根に、木製の古い祠。

狼は赤い軌跡を描き、巨岩の上に舞い上がると、前肢の上に顎を乗せた。

蒼装は祠の前に進み出ると、

「掛巻も、綾に畏き富紀の」

これは、祝詞？

朗々と低く、奏上を始めた。

霧が、、、

穏やかな風が巻き、眼下に開けた視界に占めるは、黒々とした大海原。

巨岩の彼方前方には、峻険な頂が天に聳え、箒星が幾つも通り過ぎた。

富紀の山の主は、目を閉じてじっと耳を傾けている。

お、、、主は、、、？

しばらくして、蒼装が頭を上げた時にはその姿は忽然と、消えていた。

「、、、、、、」

しばし黙って、巨岩を見つめていたが、

「帰るぞ」

「帰る？」

「一つしかあるまい。都だ」

来た道を戻りはじめる。

その背を追って、

「何しに来たんだ、一体。用は済んだのが？」

「結界の返礼を述べに来た。祝詞はな、それ自体に力が宿る。神や主と言うもの、この世で必要とされなければ、忘れ神となる運命。

人知れず、消えていくものもいる、、、」

「消えて、、、」

「人が寄る神社の神が、何故肥え太っているか知っているか？人の想いで、力を得るのだ。憎しみが鬼と成るように、願いや想いは時に、万物を支配する影響力を持つ。力を手繰り寄せる詞となるのだ」  
「だが、この山の祠には祭りの時くらいしか、人が入らないだろう？富紀の山の主は、消えるのか？」

「いや。地仙は、領域を持っているのがほとんどだ。そこに棲む動植物を育み、領域を守っている。この森は、人を寄せ付けぬが、、、」

「

二人の前方を横切るのは、鹿の群れ。

木の梢で休む、梟。

緑の苔蒸した大地で跳ねるは、兎の親子か。

「これらがいるでな、」

山の民と、言うわけだ。

「主が居ると知れば、これから狩りするところを選ばにやらんな」

「随分と、殊勝な事を言うな。自然というものは、気にするほど心は狭くはないよ。礼を尽くし、欲さえ出さねば、恵みとして惜しみなく与える。そういうものだ」

傍らの燕倪は、

「そういうものが、」

露骨に安堵した様子。

「平素お構い無しな癖、おかしなところで気を回す、」

つい、唇を突いて、零れてしまう。

「俺の事か？」

それには応えず、

「鬼の件だな」

「ああ」

「鬼ではないようだ」

「鬼ではない?!」

太い腕を組んで、首を傾げる燕倪。

「そう言っていた。それしか告げてはくれなかったが、偽りではあるまいよ。私も人を喰らったにしてもあの絵、少々不自然な点があるてな。鮭が揚がる川に行ったことはあるか？」

「ああ。兄上の別宅近くに良い川があつてな。夏は鮎やハヤ、ウグイも獲れる」

「熊は出るか？」

「おう。あいつら、鮭がたくさん遡上してくる時期には、卵が詰まった腹ばかりを食べて散らかすんだ」

「うむ。獣も鬼も、獲物は内臓を喰らう。一番柔らかく、温かいと

ころだからな。だが、あの絵で見る限り、腹は裂かれているが、食われている形跡は見受けられなかった」

「そう言われてみれば、確かに。書き忘れたつてのはいないか？」

「あれだけ克明に描く者だ。その観察眼に、狂いがあるとは思えん」  
「だが、あの爪痕は？人の者ではないぞ」

「今だ、納得できぬ様子で懔然としている。」

「それを確かめたくてな。死に切れぬ幽鬼に聞くのが早いかと思つていたが、死んで間もない者は彷徨う。何処にいるのか分からぬ者を掴まえるより、居場所が知れる者を訪ねよう」

「当てがあるのなら、最初からそこから当たれば早かったじゃないのか？」

「口実が見つかれば、良いと思つていたのだが、、」

「だが、なんだよ。何を、企んでいる？」

「それには応えず、

「私はそちらを当たるが、お前の方は手っ取り早く、餌が必要か、、」

「餌つて、鬼のか？」

「見てくれもそれなりの姫で、万一に備え、腕の立つ者でなければ、、、、」

式神で繕えばどうとでもなるが、当の人喰いを討つとなれば少しばかり、この男に動いてもらつての方が、都合良い、、、、

そんな思惑を廻らせているなど露知らず、

「天部清親」

「すぐに思いつくのは、その人くらい。」

「手を貸してくれるかどうか、、」

「あいつは、鳳祥院のために武官に成つたようなものだし、今回はその帝が民を案じての事だからな」

「話が早い。おそらく物盗りの線は薄い」

「金に困っている者でも無いとすれば、単に、人を、、」

「いずれにせよ、通常通り宮勤めし、内密に天部と打ち合わせてお

け。今回の一件で、我々が調査に来ていると知っている者は僅かだ」  
「お前はどつするんだ？」

「私の相手は化生だ。人ではない」

しれ、と言いのけた蒼装の燈籠の炎が、揺れた。

「なんだっ！？」

「、、、、、、」

風が巻いて、燈籠が斜面を転げ落ちていくのを視線が捉えた時、  
燕倪は黒い巨大な影が上空から降りてくるのを確かに、感じた。

ゴゲアガガアア ツ

全身朱金の体毛。

見上げる程に巨大な巨虎が眼窩に赤光を湛え、牙を剥き、二人の  
目前で、咆哮。

「ぐっ、、、、なんて声だッ」

びりびりと肌を泡立たせる、威圧感。

「こいつッ」

抜き放った大太刀、業丸。

燕倪が、次の瞬間、巨虎の懷に飛び込んでいた。

ガガ ツ

前肢の一閃。

「いくッ」

鈍い衝撃が、燕倪の腹部にめり込んだ。

そのまま吹っ飛んで、斜面を転がり落ちていく。

「、、、、、、」

燕倪が彼方の木に引っかかったのを、視線の端で捉えていたのか  
どうか定かではないが、蒼装は変わらず同じ場所に佇んでいる。

漆黒の深い眸は、赤光湛える巨虎の乾いた双眸を、静かに受け止  
めていた。

ガガッ

その視線に耐えかねたのか、巨虎が風を巻いて跳躍。

ガグぐああああアア ツ

空を覆う古木をざわつかせ、彼方に飛び退った。

静寂が、辺りに戻った。

「燕倪、生きているか？」

道から目を凝らせば、彼方で男の呻き声。

仕方なさそうに道を外れ、腐葉土と苔に足を取られながらも、原生林の中を慎重に降りていけば、鳩尾を押さえて咳き込む燕倪が、横たわっていた。

「あ、あれは、、？」

咳き込む燕倪が蒼装の手を借りて、よろよろと体を起こした。

「富紀で目撃されたていた鬼だな」

「結局、鬼じゃないかよ」

「肋がいったか？」

燕倪は、胸を軽く叩き、首を振った。

腰を強か打ったが、敷き詰められた枯葉のお陰か、どれも掠り傷程度の軽症で済んだ様だ。

「頑丈な男だ」

「感心している場合か。早くなんとかせねば、次の犠牲者が」

「心配無い」

「なんだ、式神にでも追わせたか、、」

ほっとした燕倪に肩を貸ししながら、

「いや」

暢気な返事。

「なんだとおッ」

拳を握る男に、

「居場所も知っている。それにあれば、人を喰ってはおらんよ」

「あの形で、よくもそんな事が言えるな?! そんな保障が、どこにあるッ」

「喰らうつもりなら、あの一撃お前はでどうにかなっているはずだ」  
「あ、、、」

呆れた一瞥。

先に行く蒼装の歩みが、心無し速くなる。

幸いこの辺りはまだなだらかだが、木々の枝に邪魔され、中々参道に近づくことができない。

小枝が跳ねて、その頬に当たるものなら、舌打ちだ。

それでもなんとか、参道に燕倪を引きずり上げたところで、

「重い、、、」

不機嫌この上なく、放り出した。

「怪我人を放り出すかよ、普通」

「減らず口を叩くヤツを、怪我人とは言わん。さっさと立て」

近くに落ちていた木の枝を杖代りにして、立ち上がった。

惘然とする二人。

無言で歩き出してすぐ、参道の先に灯りが見えた。

見知った顔が、微笑んだ。

「良かった。ご無事でし、、、」

明りの先で、所々赤く滲みんだ狩衣姿の燕倪の苦笑。

袖や裾が切れた燕倪と、白い髪は乱れ、浄衣の裾も土で汚れた蒼

装の姿に、

「そうでもないようですねえ」

琲瑠は肩を竦めたのだった。

「獣の咆哮がしたので、牛を落ち着けてすぐ、飛んできたんですよ」

燕倪に肩を貸しながら、燕倪の視線の先を辿る。

「、、、、、、」

黙々と、先に行く主の背。

「主と何か？」

「いや、なんだか相当苛立つててさ、あいつ」

「先の一件以来、主様も都中に足を運ばれ、瘴氣に中てられた方々を被って回ってらっしゃったので、お疲れが溜まってらっしゃるのでしょうか」

「あ、、、」

道中からずっと、思い返せば質問攻め。

拳句、何も知らぬのに、食ってかかった。

「あの、燕倪様？」

俺ときたら、どうも体が先に動いちまう。あの時だって、あいつには策があつたのかもれないのに、、、

打ちひしがれている男に、さすがの琲瑠も慌てたのか、

「主は、燕倪様の真つ直ぐ過ぎるところが、頼もしくあるんだと思いますよ」

「鈍感なだけだ。子供じみているのさ」

上げてみるが、逆効果。

ますますうなだれた。

「あの方は、負った責務に忠実であろうとしていらっしゃいます。

この御気性ですから、いらぬ誤解を招くでしょう。でもどうか、燕倪様は、あの方を信じてください」

「おう、、、、」

琲瑠は縋るような眼差しで、当人を追ったのだが、  
「、、、、、、」

苛立たしげな主の背中には、彼方。

かたり…

その音に、女童は目を覚まし、寢床を抜け出した。

微かに板戸から差し込む、外の薄闇。

張り詰めた夜気の中、戸に手を掛けて開けると、赤毛の獣が丸く

なっていた。

時折、ふらりと出て行つては戻ってくる、獣。

女童は、掛け布を持つてくると、その体に寄り添った。体の割に小さな耳が折れ、薄く金色の眸が覗き、

「、、、、、、」

獣は、小さな体を包み込むようにして抱えると、前足に顎を乗せ直し、目を閉じたのだった。

空が、白々とした暁刻。

無遠慮にも、屋敷の門を叩く者が居る。

居間で侍女に爪を磨かせていた女主人は、

「よい。我が行く」

虹色の羽衣を肩に立ち上がった。

扉に手を伸ばせば、呼応するかのように開く。

その先に、慄然とした男が立っていた。

「おや、、、、」

腕を組み、微笑んだ。

「ずいぶんとまた、男前が上がったじゃないか、都守」

汚れた浄衣そのまま、

「渡来の化け猫とやりあったか？」

「真の鬼か、かつての鬼、いずれを狩るか。公正を欠く調伏は、都守の名において、許されておらんのでな」

「面倒だと、顔に書いてあるぞ。不精なそなたの事、さぞ、齒がゆかろう。それもこれも、人に情けなど掛けた己を恨めよ。案内しよう」

手にした錫杖を琲瑠に渡し、敷居を跨いだ。

天狐遙絃の後に続き、玉砂利が敷き詰められた屋敷正面に立つと、足元から湧き出す清水。

空を写す水鏡になると、二人はその中へ沈んだ。

「ようこそ、都守。瑠璃宮へ」

開けた視界に飛び込んだのは、深い藍の世界。

宙に龍魚が遊ぶそこには、群青に沈む屋敷が逆しまに存在していた。

「昼夜の無い水底だが、これはこれで落ち着くものだ」

地上の屋敷とは違って、瀟洒な佇まい。

足が着いた先が、屋敷の正面。

「む、、、」

異変はすぐにあつた。

屋敷の調度品と言う調度品が倒れていたり、衝立があさつての方向を向いていたり、果ては、

「マギの国で作られた香炉が、、、」

無残に砕かれた香炉や壺。

「一体、胡露は何をしておるっ」

何やら騒がしい物音に、遙絃の歩みが速くなる。  
最奥の一室。

細やかな七宝の細工も鮮やかな扉を開いた時、

「こ、この有様は、、、」

卓子はひっくり返し、玉で造られた牡丹の花は無残に塗り取られ床に転がり、もはや何であつたか分からない。

掛け軸は破られ、茶器や酒の入った瓶子は、辺りに散乱。

その真ん中で、放心状態の胡露。

瀟洒な概観とは裏腹に内装に贅を凝らした、遙絃自慢の寛ぎの空間であつただが、

「わうっ」

白い小さな影が、立ち尽くす遙絃の足元を抜けた。

両手を床につけて、走り出て来たのは、

「伯、、、」

口に引き千切った胡露の衣の袖を銜えた、伯。

その前方で足を止めた蒼装を、董色の双眸が捉え、  
「あああつ」

その人の腕へ舞い上がる。  
「がうつ」

白く小さな、それでも一目で牙と分かる犬歯が、煌いた。  
「ッ、、、、」

「かうつ、があうつ」  
古傷の左肩。

「、、、、、、」

董色の眸が睨む先、  
「遅くなつた」

骨張った手が、群青色の髪を、優しく梳いた。

「、、、、ああ、琲瑠も戻つた」

「くう、、、、」

するとそれで満足したのか、そのまま胸に顔を埋めてしまう。

「ああ、そうだ。渡すのを、忘れていた、、、、」

袖から楓の枝切れを差し出すと、伯の手がそれを引き寄せた。  
おとなしくなつた伯を抱き直すと、

「世話になつたな」

放心状態の二人をそのまま、来た道に戻っていった。

砂色の髪を耒られた胡露は、溜息と共に立ち上がり、

「申し訳ございません、遙絃、、、、」

主の前で項垂れた。

「起きたと勝手に暴れだして、食事も酒も、玩具も、この有様、、、、」

「れ、霊紫はどうだったのじゃ?!」

「、、、、、、、、」

胡露が指し示す先に、粉々に砕け散つた、小瓶。

「これでは割りにあわんど、都守ッ」

しかし振り向いたその先に、その人の姿、もはや無し。

第参幕前

孤夢

(後書き)

今回の蜂蜜色の酒は、チリのリコール デ オロ《金の酒》。。。色が鮮やかな金色なのだが、なんてゆーのか独特で癖が非常に強く、甘い酒。。。。

プエルトモン辺りで試しに一本買い、酒好きの友人と共に試飲したが、結局その一口で終わり、後は観賞用。。。。

日本では中々お目にかかれない代物だが、チリに行くことがあれば、是非一口、お試しあれ。。。。

## 第参幕後

虎精

（前書き）

燕倪と清親が、富紀の山の鬼を追う中、蒼装は、大陸渡来の人喰  
い虎と対峙する、

死人還りの都守蒼装、業丸を継ぐ武官燕倪、幽身であるがこの世  
に縛られた伯。それぞれが紡ぐ異国絵巻、第参幕後編。。。

くわああああ…

大きな鈍色にびいろの眸に、薄らと泪。

伸びをしつつ、さすがに寝不足だな、と昼下がりの雲一つ無い空を見上げていれば、

「宮中で、不謹慎な奴だな」

澄んだ、それでいて低い声音が掛かった。

束帯そくたいを纏った、天部清親あまへきよちか。

備堂びどうと並ぶ名家、天部家の長子であり、右近衛府中将うこんえふを勤める、

女丈夫。

妹に婿を貰うと、かつて右大将を勤めた父に代わり近衛府このえふに入り、その腕を買われて今に至る。

「一体、何の相談だ？」

燕倪えんげいは、勅旨ちよくしを差し出し、

「何の真似だ。この紫紺に銀系の綾紐は、都守宛であろう？ 鬼退治ならば、私の管轄ではない。先の一件で、鬼には懲りている」

「鬼だけならな、」

事の次第を、燕倪は手短に説明した。

「それなら、仕方あるまい。御上も、さぞお心を痛めておられることだろう」

勅旨を畳むと、人目を気にして早々に燕倪の懷に擦じ込んだ。

「もう一度あんな化け物が出てきたら、さすがに勝てる気がしれんが、」

「都守が管轄外と言ったのだ。威信に掛けても、その化け物では無いのだろう」

真っ直ぐな、褐色の双眸。

「そ、そうか、、、そうだよな」

「それに、もし仮にその化け物であつたら、あのいい加減な蒼装を

都守の座から引きずりおろせる訳だ」

「おいおい。その前に俺達が無事で居られるか、」

「鳳祥院<sup>ほうしょういん</sup>が、竜やら何やらに躍らされ、二度と遊山なんてしないようにな」

眸の奥の、狂気じみた輝きを見て取って、

やっぱり、そこを引きずっているのか、清親、

燕倪は、思わすこめかみの辺りを押さえた。

そんな彼の胸中を、知ってか知らずか、

「燕倪、手を貸すぞ」

端正な口元を歪め、清親は、燕倪の申し出を二つ返事でもって、  
請け負ったのだった。

毎月、決まった日に朝市が立つのは、帝都の南東にある布津稻荷<sup>ふついなり</sup>の境内。

早朝より集められたのは、新鮮な野菜だけではない。

活きの良い魚介類から、職人がこの日のためにと腕を振るった、  
螺鈿細工<sup>ろうてんさいく</sup>も細かな櫛や、蒔絵<sup>まきえ</sup>を施した文机。

日用品から嗜好品、贅沢品まで、ありとあらゆるもので埋め尽くされたその活気は、さながら縁日のようだ。

その一画。

大小様々な桶が、所狭しと居並んでいる。

その一つ。

水の中、人々の喧騒なんぞどこ吹く風。

長い尾鰭をゆらゆらとさせて、金魚らが優雅に泳いでいる。

飽きるでもなく、その様子をしゃがみ込んで覗き込む女童が、一人。

「？」

その傍らにもう一人、並んだ。

顔をうかがうより先に、水干から手が伸びて、

「ああ、触ってはいかん」

咄嗟に、先にいた女童が、その手を押さえた。

刹那、

「え、、、」

海辺の別邸で養生していた時に嗅ぎ慣れた潮の香りが、鼻腔をくすぐり、女童は、思わず手に、力を込めた。

ひやりと滑らかな、象牙色の肌。

腕の先、黒髪を青い紐で結び、大きな眸でじつと金魚を見つめる女童の姿。

女童は、咄嗟に目を瞑った。

茫洋と、瞼に映し出されたのは、良くは晴れた日の大海原を思わせる群青の髪と、黎明を思わせる董色の眸。

その奥。

何かが、霞みがかったその先に、在る。

「っ」

不意に、掴んでいた手を振り払われた。

目を開けると、漆黒の眸が、見つめていた。

「そなた、いつたい、、、」

「ハク」

「ハクと、言うのか？」

「、、、、、、」

こくり…

頷いた。

「わらわは、あとりだ」

「あ、と、り、、、」

大概の鬼や幽鬼は見慣れていて驚かないのだけれども、この童は、まだ何かある様な気もするのに、見通せない。

こやつ、人ではない、、、？

底知れぬ癖に、

「やめよ。それは、水から出ては生きてはゆけぬ」

人の子のように、無邪気にまた手を伸ばすものだから、気が気でない。

伯が、桶の前から離れるまで、あとは、その目を離せず、、

境内に、一際大きい椿の木が、在る。

既に盛りは過ぎたのか、色褪せた椿の花は大地に散り、今は誰もその木の存在を気にも止めない。

ただ、その木の前には、人だかりが長く左右に伸びていた。人々の視線の先。

組まれた格子に無数に結び付けられ、竹で編んだ籠から、

ピチチ…

リ…ロロ…

クイ…イイ…

賑やかな囁りと、落ち付かなげな羽音が、聞こえる。

色鮮やかな、小鳥達。

春を告げる鶯から、川の宝石と呼ばれる翡翠、喉から腹にかけて橙が美しい駒鳥、藤色がかった体色も珍しいカケス。

忙しなく羽ばたくものもいれば、疲れたようにじっと動かぬものもいる。

「、、、、、、」

地味な褐色の直衣を纏った長身の若者が、その籠の一つに手を伸ばした時だった。

「虎精<sup>こせい</sup>、一夜で千里を駈けるとは、あながち嘘ではないらしい」

背で束ねた、白い髪。

鴉色<sup>ひわいろ</sup>の直衣。

見間違いのような、その姿。

「都守」

慌てて、辺りを見回した。

肩もぶつかる人ごみにあって、しかし、誰もその人に気づくことは無い。

それどころか、今の今まで、己自身でさえも、

辺りを素早く伺えば、皆、一様に歩をゆつくりと進めている。

音も、羽ばたく小鳥達も、明らかに異なる時間軸に存在していた。  
うかつだった。既に、術中か、

若者の胸中を他所に、

「挨拶が遅れたな、陰陽頭の式殿。耶紫呂蒼装やむろそうじょうと言つ、

「、、、、、」

それまで鳶色に沈んでいた双眸が、俄かに殺気立ち、深い紅へと染まっっていく中、

「これは、いつぞやの。お初におめもじつかまつる。銀仁ぎんじんと、申す」

掠れた声が、応えた。

冷たい汗が、背を流れる。

咄嗟に探るのは、あとの気配。

あとリだけは、

本懐遂げる前に、その人だけは、

まんじりもしない若者、銀仁の胸の裡を察してか、薄笑いと共に、

「いつでも参るがいい、我が屋敷へ、」

呆気なく背を向けた、蒼装。

「伯はく」

名を呼ばれ、小さな童が人込みを抜けて駆け寄ると、衣の裾を握って寄り添った。

緩やかだった【時の流れ】が、戻る。

人々の喧騒が、どっと、押し寄せてきた。

「銀仁」

すぐ傍らで、その人の声が、した。

見上げてくる、あとの青みがかった、黒瞳。

「そなたも、あの童を見たのか？」

そして、銀仁の手を包み込む、熱い両の手。

それを握り返しながら、

「いや、我は何も、」

探すその姿は、気配は、すでに忽然と、消えている。

その後、数日間。

大した騒ぎも無く、穏やかな日々が続いた。

そのまま、何事も無く過ぐるかと思っていた、矢先。  
事態は、急展開を見せる事となる。

『心配すんな。何かあれば、俺もすつ飛んでいくから、な？』

こんな事なら、受けなきゃ良かったっ

主にどうしても頼まれ、連日連夜狩り出されているのは、何も知らされぬまま巻き込まれた、籐那。

まだ、あどけなささえ覗える容貌に滲むのは、明らかな恐怖。

しかし、すぐ傍らにいる相手は、穏やかとは無縁の日々を送っている者のようで

「案ずるな。私が付いている」

いちめがさ  
市女笠を被っている旅装束の女が、低い声音で応じた。

風体からすれば、雨風凌げる軒先を探す、親子。

「でも、ここら界限はついこの間、惨殺された遺体が見つかった辺りですよ？巡回に清親様だけとは近衛府の方々、随分と軽率過ぎやしませんか？」

「ああ」

「、、、、、、」

あつさりそんな事を言うのが、市女笠の中で目を光らせる女丈夫、清親だ。

連日場所を、姿を変えては、疲燕俣れ知らずに目を光らせている。先の一件と言い、人喰い鬼の出没と言い、どの家々も固く門扉を閉ざし、こんな夜更けに姿を現すのは、野良猫や犬といった動物くらい。

「今日は、もう、、、、」

「静かに、、、、」

帝都東、碧亜門<sup>へきあもん</sup>を抜けた先には、北へ抜ける街道に合流する道がある。

御所を回りこむ事を考えたら、家路を急ぐ旅人は皆、この道を通る事で知られている。

帝都の築地壁が左手に延々続く中、右手には鬱蒼とした竹林が広がっている。

北の街道との合流地点まで、半刻程。

臥待月<sup>ふしまちつき</sup>がようやく顔を出した時分、動きがあった。

「、、、、、、」

清親の視線の端。

茫洋と、炎が竹林の奥で揺れた。

耳障りな、衣擦れの音。

踏みしめる落ち葉の音の、忙しなさよ。

素早く前後を挟んだのは、

「ひっ」

額に一角、裂けた口、赤々とした形相の鬼。

「お、、おっ、おにつおにつ」

きらりと籐那の顔を照らした銀光は、鬼達が手にしている抜き身の輝き。

「昨今の鬼は、随分と良い刀を持っているな、、、、」

腰を抜かした籐那の片腕を取って、築地壁を背に後退る、清親。

薄ら笑いすらさせて、じりじりと近づく二人の背後に、朱華色に銀糸で花鳥と縫い取った直衣姿の男。

左手に松明。

その右手に、何やらごついものがついているのを確認して、  
ピウッ

清親の口元から、甲高い音が響いた。

「ぬんッ」

咄嗟の事にも同ずる事無く、刀を振りかざす二人のうち一人に笠をぶつけ、

「遅い」

もう一方の太刀の下を掻い潜り奔る、閃光。

その瞬間、闇夜に噴き上がり、

「あ、、、」

ピッ、と籐那の頬に撥ねた、生ぬるい雫は？

一呼吸置いて、

ぼと

鈍い音と共に、籐那の足元に転がったものが、ある。

「はひっ!？」

人の、手であった。

恐る恐る手をやつて、拭ったその指先が、赤く、濡れた。

ち、、、血いいッ!？

錆び付いた匂いが立ち込める中、籐那は目眩を覚えた。

同時に、

「ぬぐああああッ」

劈くような、野太い悲鳴。

それまで呆氣にとられていた鬼の眼差しは、転がった手首と血濡れた肘から先を交互に見つめた。

無理も無い。

鬼の手首は、清親の袖に仕込まれた小太刀によって、刀もろとも跳ね飛ばされたのだ。

腕を押さえ、のたうつ一人をそのまま、胸の前で血塗れた小太刀を構えなおし、籐那の前に立った清親は、

「フ、、、」

頬に飛んだ返り血を、舌先で舐め取った。

「この女ッ」

鬼面を金繰り捨て、刀を八双から突きを繰り出す構えへ  
剎那、

「うおおらあッ」

「ぬああッ」

見上げる程高い築地壁から、男の頭上めがけて飛び降りてきたのは、燕倪。

どうやら二人が行くのとほぼ同じ速度で、壁の向こうを梯子片手に歩いていたらしい。

「、、、、、、」

清親が、無言で走り出す。

燕倪は、肩に掛けていた荒縄でもって、後ろ手に縛ると、  
「手加減してもんがないな、あいつ」

のた打ち回るその惨劇に、溜息。

その当人は、竹林に逃げ込んだもう一人を追って行った。

「これじゃ、助からんかもしれんが、、、、」

流れ出す手首を止血するべく、襷掛けをしていた紐で肩を圧迫すると、

「籐那、大丈夫か？」

青褪めたまま、咳き込む籐那の背を擦ってやった。

「こんな、、事、平気な主様って、、ううつ」

目の前に落ちているのは、先程清親が斬り飛ばした、手首：

「だ、、だめかもっ、、」

むかむかと込み上げるのを耐え切れず、道端に蹲ったのだった。

「、、、、、、」

巨虎は、胸騒ぎに、瞼を押し上げた。

傍らの、温もり。

琥珀色の眼差しの中には、安らかな寝息を立てる幼い主の姿。

その頬に掛かる、黒髪。

「、、、、、、」

そつと、傷つけぬように鉤爪で払った。

掛け布を肩まで掛けて、褥から抜け出すと、足音を忍ばせて廊下へ出た。

四日前、都守との邂逅から、あとにも陰陽頭にも何も伝えられないまま、いつものように昼は陰陽頭に仕え、夜は結界の張られていないこの屋敷で、あとりと過ごしていた。

それに、終止符を打とうとしている。

「富紀の鬼、、か、、」

帝都から少しでも遠くの山で、この飢えを獣で凌ぎ、結果、人に利用される結果となった。

事件が明るみになり、陰陽師を差し向ける事になっても、陰陽頭の態度は変わらなかった。

いつか、得体の知れぬ鬼の噂に、名うての被い屋が討ちに来れば、自身こそ、その鬼だと首を差しだそう。

人が演じる鬼を、餌に。

『いつでも参るがいい、我が屋敷へ、、』

その者は、すぐに現れた。

あの日から、あの男の声が、耳から離れない。

全てを見透かし、この魂までもを、滅ぼせる者。

それでもいざとなると、あとりの寝顔を見る度、もう一日、もう一日と、心が、揺れた。

それも、今日まで、だ、、

巨虎は、いつものように屋敷の裏手から、塀を越えた。

彼方から漂う、嗅ぎなれた香り。

舌に甘く、喉に暖かく、腹腔に蟠る、人の血肉。

その渴望も、あとりにへの想いも、全て振り払うかのように身震いをする、四肢に、力を込めた。

全てを見透かしたその者の元へ、向かうために。

「燕倪、拝んでみる。鬼の顔をな」

後ろ手に縛った小太りの男の右足首を蹴り上げ、清親は顔色一つ変えずに、燕倪の前に突き出した。

「ヌグツ、ムグウヌグ　ッ」

燕倪の前に突っ伏す主犯格と見られる男は、右足を小太刀で射抜かれていた。

乱れた髪を掴み、顔を上げさせると、

「お前、、、」

白塗りに、置眉。

鈍痛に濡れ縊る、目尻の下がった眸に、見覚えがあった。

「知っているのか？」

「瑪甲の伊禮正賢先生の門下で確か、三条、、、成由」

先生の屋敷で会う度に、業丸を見せてくれとせがまれたこともあったな、、、

「刑部の三条成辰殿の縁者が何か、か。いずれにせよ、後でたつぷりと話してもらうぞ」

冷やかな眼差しを注がれ、後退る成由。

その脇腹に手をかけて転がせば、

「これは、、、」

男の手に不釣り合いなもの。

「鬼の爪」

差込式になっているのは、四つの鋭く長い刃を持った、鉄爪。

しかも、

「この焦げは、」

不恰好に黒々とこびりついているものがある。

「こいつッ」

察した清親の顔が、俄に険しくなる。

握りしめた拳が、何度も何度も成由を打つのを、

「なんて、惨い仕打ちを、」

この時ばかりは燕倪も、止める事が出来なかった。

傍らにいた巨虎が出て行つてすぐ、あたりも褥しとねを抜け出した。  
寝着も髪もそのまま、庭に降りれば、

いつもは、もつと早い時分に出ていくのに、

隣の屋敷の上を越え、南西の方角へ駆けて行くその人に、

「銀仁」

その小さな呟きは、届かない。

「藤那を先に帰らせ、三人を連れ、一先ず近衛府へ向かう途中、  
む、む、？」

ふらりと辻から現れた者がいた。

伯？

白い寝着。

纏う雰囲気に、一瞬、目を疑ったが、

「あれは、確か、」

清親が、しきりに辺りを見回すその者に、近づいていった。

「天羽殿のところの、あたりではないか」

「清親様、？」

はつとして、一向を見つめたその深い眸。

天羽<sup>あもつ</sup>と言え、陰陽頭の、

さすがに、いぶかしむ燕倪を他所に、

「こんな夜更けに、一体どうしたのだ？お父上が心配されるぞ」

「、、、、、、」

「夜気は冷える。屋敷まで、送ろう」

清親は、あとの肩に手を置いた。

その時であつた。

「主さまッ、主さまアアッ」

甲高い、叫び声に続き、血相を変えて駆けてくるのは、

「どうした、籐那!?」

先ほど、先に帰したはずの、籐那。

「鬼、鬼がッ」

息も絶え絶えに指を差す、その方角。

「あとりッ」

走り出す、女童。

燕倪が追いかけて、すぐにその腕を掴んだ。

「は、放せッ」

暴れるあとりを、咄嗟に小脇に抱えると、

「籐那、どこで見つたッ」

「恵堂橋の向こうですッ!!赤くて、とにかく大きいんですッ」

「どうする、燕倪。本物の鬼のおでした」

あの時の鬼がッ

富紀の山で会った巨虎の姿が、脳裏を過ぎる。

「俺が行く。厩舎のお前の馬、借り受けるぞ。それと、いったん、この娘は左近衛府で預かる」

「ああ。こっちは任せておけ」

「すぐに何人か、人手を回させよう。籐那、応援が来るまで、そいつらを連行する清親を手伝ってくれ」

「え、ええッ」

じたばたするあとりをそのまま、御所へと走り出す。

寺院や公家の屋敷が居並ぶ界限を抜けると、堀に囲まれた御所の高い築地壁に出た。

篝火の焚かれた門の一つに向かおうとして、

「わらわも連れていってくだされ」

袖を引かれて見れば、深く青味がかつた眸にぶつかつた。

「何かあつてからでは、遅い。人をつけるから、屋敷に戻るんだ」

「一人では戻れぬッ」

微かに震えながら、あとは燕倪に告げた。

「わらわは、その鬼の主なのじゃ」

ひっそりと夜の静寂に包まれた界限。

しかし、一つだけ煌々と篝火焚かれたままの屋敷が、ある。

「お待ちいたしておりました。主が、お待ちかねです。どうぞ」

「、、、、」

門前に立つた男は、間髪入れずに開いた扉より現れた、柔和な笑顔の若者の背に、無言で続いたのだった。

くん…

それまで大人しく、膝枕で眠っていた童が、鼻を鳴らした。

ひどく鼻腔につく、その香り。

人は少しも嗅ぎ取れないのに、人外の者の鼻はごまかせないようだ。

目を擦りながら、蒼装を見上げたのは、伯。

「、、、、」

「伯」

見下ろした先に、董色の眸。

見つめる先で、董色の眸が、大きく黒目がちになる。

蒼装の右手を引き寄せ、

かぶっ…

小さな犬歯が、親指の付け根をしたたか噛んだ。

「、、、、、、」

じわりと手の甲へと滴る、赤い血潮。

そのまま、

ぽた…ぽたた…

伯の唇を染め、白い顎先を伝い、滴る。

「ぶぶっ、、、、」

とたんに眉を寄せて首を振り、両袖で口を覆って身悶え。

「人は、お前が思うほど、美味なものではないよ」

「あうぶぶっ、あえぶぶっ」

じたばたと暴れる伯を支え、口を懷紙で拭ってやりながら、

「神と虎精では、発生の過程が異なる。なあ、銀仁」

腕組みをしたまま、庭に佇む異国の男。

朱金のばさら髪。

長身で彫り深く、金の双眸鋭い偉丈夫。

臍脂の長袍を、その身に纏っている。

「我らは人に似て、けれど獣に近く、そして人と対極の存在」

「我らはそれに比べ、万物の中に在って、万物の外郭を成すもの」

「我らは、我らの祖を蹂躪し続けた人への憎悪、その過程で、発生した」

「その通りだ」

「人を喰らう事で我らは、その憎悪という飢えを癒し、その恐怖の対象となる事で、大陸で棲み分けを可能にした」

「そんなお前がこの国に辿りつき、人の中で暮らしている。しつこくも甘く、鼻腔深くに蟠る人の腐臭を、その身から漂わせて」

「、、、、、、」

「その匂いは業と同じだ。いくら人を絶ったところで、今生、消えることはない」

銀仁の瞳に宿った、翳り。

「この先、人を喰らわぬ保障はない。御所でそなたを見た時、できる事なら早急に何も知らぬ燕児の刀に斬られてしまえばいいとさえ、思っていた」

「我も、其れを望んだ。我はかつて、人を喰らい過ぎた、、」

銀仁は、視線を落とした。

「そして、その業故にただひとり、愛した人までも、失った、、」

「虎精が人を、な、、」

女は、人だった。

怪我をして山で動けなくなっている所を、助けた縁。

目を放した隙に、何も知らぬその人を、何も知らぬ他の虎族が、喰らった。

逆上し、我を失った銀仁は、その虎族を狩ったのだった。

「この身を裁くのは、人の太刀では生温い」

それが出来るのは、愛した女の最後の叫びであり、断腸の想いで眷族の汚名を晴らすために立ち上がった実の弟の牙であり、そして、家族として共にあり続けた者達の爪だ。

しかし、それですら、虎精の命は紡がれた。

「だが、我を滅ぼすのなら、貴公のような者でなければ、」

眷族に、実の弟に、屍を晒すことで与える痛みを恐れ、海に身を投げたのに…

幾日も海に漂い、流れ着いた先で拾われた、命。

何よりも異形の虎精を恐れる事無く、献身的な介護で看病を続けた幼い人の、主。

赦されるのなら、あとの傍らに在りたい

今でも、その思いは変わらない。

変わらないが、

それを望んでは、、

「我が牙に掛かった者達は、報われぬ」

差し出すように、伸べた、頭。

刹那、

「銀仁っ」

その人の、声がした。

可憐な単の袖を翻し、山野草が植わる小道から現れたのは、紛れもない、

「あとり、、、」

その人。

手を広げて銀仁の前に立つと、

「都守、わらわは陰陽頭天羽充慶が娘、あとり。わらわこそ、銀仁の真の主じゃっ」

異形の都守、蒼装を睨み据える、勝気な黒瞳に、恐れはない。

真っ直ぐなその視線を、蒼装の無機質な闇色の眸が、受け止める。

「銀仁を、斬るといふのか?!」

「あとり、我は海の方こうで、、、」

「赦されぬから、死んでもいいとは、おかしい。赦されるいつかのために生きようと、わらわの手を取ったのではないのか?!」

あの日、死ねぬ自身を呪い、自ら幕を引こうと目を閉じた。

それを見透かしたかのように現れたのは、あとり。

人を憎み、そして人を愛し、眷族から追われた異形の鬼とも等しい存在に、幼いこの娘は、手を差し出した。

何も恐れぬ、魂。

目が眩む程の陽の光の中、銀仁は、あとりの手を取ったのだ。

赦されたい

ただ、そう望んで。

「銀仁がこの都に仇なしたのなら、主であるわらわの責。わらわも共に、その報いとやらを受ける所存だ」

「あとりっ」

「面白い、、、」

欄干を手に立ち上がった蒼装は、青い唇を吊り上げた。

そのまま裸足で庭に降りると、腰ほどまでしかないあとの前で膝を折る。

「姫、生まれながら、そのように深い眸を持つのか？」

こんな時に、随分おかしな事を言う男だと、あたりは思ったのかもしれない。

首を傾げながら、蒼装の眸を見据え、

「生まれながら、わらわは鬼と共に在った」

可憐な唇は、への字になった。

「さすが、天羽殿の血を引く姫だ、、」

「鬼にも人にも、耳があるのは、悔い改めるためじゃ。母上が言っていた」

「良い母君をお持ちだ、、」

蒼装の笑みが、深くなった。

「いんじん」

ふわり、、

白い袖が、翻る。

軽やかに宙を蹴り、銀仁の肩に幼い手。

ぺろ…

「っ」

頬にぶつかった、生暖かい感触。

細まったままの瞳孔が、まあるく琥珀色の瞳に滲んで、銀仁は、

頬に手。

「あまあく、、ないっ」

ぷいっ…

身を振ると、伯は、同じように宙を蹴り、そのまま蒼装の首にしがみついた。

その群青の髪を梳きながら、

「私は、ただの都守。この小さき国の都一つでも手に余る。ましてや大陸で犯したお前の罪とやらを裁けるほど、万能ではないよ」

眼差しは、小道の先へ。

「燕倪よ、富紀の山に棲む鬼、どうなった？」

暗がりから現れたのは、燕倪。

あとりに乞われ、連れてきた張本人。

「お前の推察の通りさ。やんごとなき姫君に化けた清親に、捕らえられたよ。無類の刀剣好きで知られる三条成由と、その屋敷の若衆だ」

手にした包みを解けば、

「これが、鬼の爪だよ」

四本の鋭い鉤爪を持つ鉄爪。

赤銅色のそれは禍々しく、

「お前が里の人に目撃されたのを隠れ蓑に、都の周りで犯行を重ねたんだ。富紀の山で聞く噂に乗じて、新刀試し。その後は、鉄爪を焼いて押し付け、鬼の仕業と見せかけた」

すぐに包みに仕舞った。

「腹を裂いたのだって、人喰い鬼の仕業に見せかけるためだ」

「どうということじゃ、銀仁？」

「、、、、、、」

真っ直ぐに見上げてくる、その青みを帯び澄んだ、眸。

「黙っていては分からね」

「、、、、、、」

「飢えをしのぐため、鹿や猪を狩ったのだろう。都からおまえの足なら、すぐの山に」

「夜半に抜け出していたのは、そのせいだったのか」

「、、、、、、」

項垂れる、銀仁。

「虎精は元々肉食だ。我等と同じ食事では、命を紡ぐことができない」  
富紀の山で腹部だけを喰われ、放置された動物の屍骸を見つけた山伏が、まことしやかに語り、怖いもの見たさの人によって、さらに尾鰭がついたのだろう。

それを聞いた三条成由らがさも人喰い鬼の仕業であるかのように、大胆に事を成したのだ。

事件を知った銀仁は、それを己の所業であると甘んじて、自らの生に終止符を打とうとしていたのだ。

「いずれにせよ銀仁、お前は潔白だ」

「それでは、困る」

眉を寄せ、牙を剥いた銀仁に、

「それでも一応、役職持ちでな。理なき調伏は、許されておらんだ」

しれ、とそんな事を言う蒼装。

「、、、、、、」

ぬけぬけと言ってくれる、と、黙っていた燕倪は蒼装を睨んだ。

「この先など、我には無い」

「その命投げやる前にそなたを、そっくりそのまま受け入れた姫の想いを、考える事だ、、、、」

「銀仁、、、、」

その人の手が、銀仁の手を握った。

温かく、小さな手だった。

「あと」

銀仁は、膝をついた。

「我は、やはり赦されるべきではないのだ、、、、」

首を差しの出すように伸べたその肩に、あとりが、もう一方の手を乗せた。

「それなら何度でも、わらわはそなたに、手を差し伸べよう」

振り払われようが、何度でも。

「肺の病い深く、多田羅の浜の屋敷で鬱々と鬼と共に暮らしていたわらわを、屋敷の外へと導いたのは、そなただ」

生来、鬼を寄せ付けやすい体質。

それ故に、病にも蝕まれてしまったその身を案じ、忙しい合間を縫って訪れては訪れてくれた、父。

先月、一年振りに母が待つ帝都に父に連れられ、傷も癒えた銀仁と共に、あと日も病を克服して戻ってきたのだ。

「そなたがおらねば、あと日も、もうこの世に在らぬ身であったかもしれない」

願わくば、強く在りたい。

水底で叫ぶまだ見ぬ魂に、勝手にそう誓った。

何でも、良かったのかもしれない。

折れそうになる心を、強くこの体に繋ぎとめるものが欲しかった。そして“何か”が、二つの異なる魂を、引き合わせた。

「銀仁が、わらわをこの世に繋ぎとめる楔だったのじゃ、」

欠けたものを、互いに補うかのように導かれた二つの魂は、あの日、あの場所で、出逢った。

「だから、わらわは生きたい。銀仁と共に、」

共に、生きよう。

「あと」

銀仁の金色。

その双眸から溢れ出すのは、

「こ、、れは、、」

涙。

おろおろと、頬に伝うそれを拭い見て、そしてようやく、

これが我が、生きる意味、、

その言葉が欲しかったのだと、銀仁は魂で思い知る。

赦されたい…

赦されない…

赦せない…

その中で漠然と、しかし確実に育まれていったのは紛れもない、

あとりと過ぐす 安らぎ であった。

握り返す、小さな手。

「あと、我は、何度おまえに救われるのだろっ、、」

この小さな温もりは、

「何度も、言った。これからも、銀仁が立ち止まる度に、言う」  
「いつかの力強い目を、していた。」

「ああ」

涙を拭うと姫を抱き上げ、腕に座らせた。

「都守、ここに誓おう。この先、我が、人を喰らう事は無い」

「陰陽頭の式殿だ。万に一つも、その言葉に偽りはあるまい」

銀仁は、深く頷いた。

「なあ銀仁。鹿や猪が必要なら、俺が狩りに付き合うぞ。都周辺の山なら、俺が知らぬ所はないからな」

なんともいえない感情が、その顔に浮かぶ。

俯きながら、両手を胸の前で組んで膝を折る、異国の礼。

「、、、、、、」

次の瞬間、銀仁は高く跳躍し、塀を飛び越えていった。

刹那、風が巻いて、三人は二人が消えた方角に、朧月を見る。

「お酒を、お持ちいたしました」

汪果と琲瑠が現れなければ、三人はそのまま庭に出ていたままだ  
ったかもしれない。

どこか哀しげに滲んだ、そんな月夜であつた。

人気の無い道を選んで疾駆する巨虎の背で、あとりが、首にしが  
みついて言った。

「銀仁、生きていればいつかは、そなたを恨む者より、想ってくれ  
る者の方が多くなる」

「想って、、、、」

「そうだ。だが、忘れるな。わらわが、その一人目だ」

「いつか、わらわがいなくなっても、、、、」

あの日、手を取った時と、何ら変わらぬ温もり。

あとりは、巨虎の首に頬擦りした。

「ああ、あと、り、」

巨虎は、大きく頷いた。

その憂いは、まだ晴れない。

この先、晴れることは無いのかもしれない。

それでも今は新しいこの土地で、この人と共に在りたいと、そう  
想えるのだった。

「なあ、本当に、俺に斬らせるつもりだったのか？」

汪果が月琴爪弾く、阿四屋。

それぞれが杯を持ち、琲瑠が酒を、満たしている。

「私はいつも、合図を送るだけ。斬るも、斬らぬも、お前次第さ、  
」

「いい加減な事を」

「それを斬れと言えば、そのどれをもを斬る。まったくお前は、い  
つも好き勝手やってくれる」

「先の一件を言つのなら、聞かんぞ。一人を残すなど、後味が悪す  
ぎる」

「そうだな、」

あの男なら最初から、お前と同じ選択をするだろう、

「等しく揺ぎ無い答えを、いとも容易く見出せるお前達が、私は少  
し、羨ましい、」

「あ？なんだって？」

「いや、」

傍らの伯が膝に入り、杯を手にとりし始める。

杯を取り上げると、そのまま丸くなって、蒼装の手を胸に抱く。

すぐに琲瑠が気を回し、着物を一枚持つてきて掛けてやれば、も  
うすやすやと寝息が聞こえた。

「なあ、あいつ、大丈夫だよな？」

燕倪の、どこか不安気味な声。

「万年の時を生きると言われる虎精。人を喰うその業薄れば獣に戻るか、人に成るか、はたして、、」

「憎しみもまた、純粹な想いの一つ、か、、」

「ああ。その想いをも超越した者を、私は今だかつて見たことがないが、あの姫なら、あの男、その業から解脱できるかもしれぬ」

「あいつが大陸で何をしたのか、何を背負っているのか、俺はよくは知らないが、、」

静かに、

「生きて欲しいと思うよ」

そう、言った。

鬱々と沈んでいた銀仁の顔が、燕倪の脳裏に蘇る。

あんな顔、誰だっ て見たくないじゃないか、、

その燕倪の横顔を一瞥して、

「そうだな。異なる種の中にいれば、失うものもあるが、そうやって得るものもある。そうして分かり合うのなら、その罪とやら、悪くないのかもしれない」

青い唇に、杯を当てた。

「いずれにしても、陰陽頭の式神としてこの都に在るのなら、心強いさ」

「お前、楽できると思ってるだろう？」

「いいや、、」

琲瑠が、瓶子を傾ける。

「陰陽寮に在るだけ、厄介な手駒には、違いないが、、」

じょうじょうと、爪弾かれる月琴の音に誘われて、

「ほ、これは風流。花精も来たことだ。ほら琲瑠、汪果も吞めよ」

「はあ」

「では」

何処からか舞いこんだ、薄墨色の桜の花弁。

杯二つに酒、満ちて…

浮かび、ゆらゆらとして、月、映す…

「都守の座、手放すつもりはないよ」

小さく、ひとりごちだ。

「あ？何か言ったか？」

ことりと杯を置いた燕倪に、

「いや。ところで、左少将殿」

長椅子の肘掛に置いた腕に、細い顎を預け、流れる長い銀系の髪の間から覗くのは、うつそりした闇色の眼差し。

「なんだ、改まって、、」

「こんなところで、油を売っていても、いいのか？」

「あッ」

思い出したのは、清親の顔。

「は、琲瑠つ、馬を出してくれ！！と、取調べが残っていたッ」

「はい。ただいま」

たつ、と走って行くその人に続き、鬼の爪の入った包みを抱くと、

「また寄る」

庭に出て、門へと抜ける小道の暗がりには走っていった。

「主様、もう一献、、」

砂利を踏む足音が遠ざかるのを見計らって、汪果が瓶子を持ち上げた。

空になった瑠璃の杯を満たすと、青い唇が杯に触れた。

「相変わらず、騒々しい男だな、、」

「ええ」

白く細い喉を晒して、一息に飲み干すのを、琥珀色の瞳が見つめている。

細く息を吐いて、杯を置き、

「万年を生きる者にとって、人の一生など刹那。それでも、その刹那を共有できる者が在れば、万年の孤独にも、耐えうるかもしれない、、」

「主様は、見つけられたではありませんか、その腕に。万年の時を

も、共に歩める者を、ゝ、ゝ」

闇色の眸が見つめる先には、寢息をたてる、伯。

「この仔の心を欺く私には、その資格はない、ゝ、ゝ」  
穏やかな、その寝顔。

群青の髪を梳きながら一人、蒼装は杯を重ねる。

そして汪果は、主に乞われるまま、いつまでも月琴を爪弾くのであつた。

## 第参幕後

虎精

（後書き）

虎精銀仁

もう十年以上になるだろうか？

昔、ノートに書きなぐっていたものを、帝都の登場人物として移植。シユエとの悲恋の話は、外伝で書き足せばいいのだけれど、なかなか、時間が許さず。。。。

元々、彼は主役で、現在という設定で、日本と中国を舞台に書いたんだっけなあ。。。もちろん、あたりも出ていた。ちなみに名前は【コサクラ】。って、どーでも、いいか。。。。

## 第四幕

### 潮騒

#### （前書き）

勅命により訪れた先の漁村で出逢った老婆は、伯の姿に哭く。そこで伯は、ある事を蒼装に望むのだった、、、

死人還りの都守蒼装、業丸を継ぐ武官燕倪、幽身であるがこの世に縛られた伯。それぞれが紡ぐ異国絵巻、第四幕。。。

## 第四幕

## 潮騒

あ、、、

肌を舐める海水の温度が、また少し下がった。

白い三日月の光が、まだ差し込む辺り。

微かな光の靄がぼんやりと揺らめく中、水干を纏った若者は、細い目を更に細め頭上彼方を、見上げた。

やはり、お側を離れなければ良かったかな、、  
胸中に少し、後悔。

一月も離れる訳では無いと言うのに、、

主様の事、早々にお酒で寝かしつけ、お出かけになったのかな、、

それまで、生まれ育った海の感触に懐かしさを覚え、浮かれていたのだが、

狛下の波動に共振して、お目が覚めてなければいいのだけれど、、

今は少し、幼い主君が気にかかる。

微かに細波を刻む穏やかな海が、広がっている。

まだ、陽も昇りきらぬ内に、大きな籠を背負った老婆は浜に出た。星が煌めく中、浜には昆布と一緒に流れ着いた流木やらで、黒々とした蟠りが点々と広がり、四半刻たらずですぐに籠がいっぱいになった。

早々に戻ろうと籠を背負おうとして、ふと顔を上げたのは、波打ち際で跳ねる子供の足音を聞いたから。

「こ、、」

その皺が刻まれ、落ち窪んだ眼窩がんかの奥にある眸が、大きくなった。膝下まで寝巻きを濡らし、袂を翻しながら飛び跳ねる。

くるくると薄闇の中で舞い踊るのは、黒髪を長く背に垂らした童

子。

老婆は、言葉を飲み込み、ふらふらと歩き出した。

一方童は、海水を手に掬すくっては空に放ち、足で跳ね上げては、遊んでいる。

その童の動きが、

「、、、、、、」

止まった。

視線の先には、老婆の姿。

「？」

小首を傾げ、無言で見つめる先に、

「こつっ、、、、あああっ」

手を摺り合わせるようにして、顔を歪めた老いたる女の姿。

垂髪すいはつが、風に靡なびいていた。

焚かれた篝火かがりびの下で、白々と浮かぶのは、浄衣じょういの美丈夫。

先月、帝都も未曾有の怪異に襲われ、地方でも不安が広がり、多くの嘆願書が届けられた。

中でも、早急に対応が必要だろうと、都守みやこもりが勅命ちよくめいにより自ら訪れたのだ。

度々氾濫を繰り返す、谷茅かやの川。

海へと注ぐその河口にある漁村ななこ奈七戸は、その被害に悩まされていた。

村の中程を割るようにして流れる川は、けして大きな川ではなかったのだが、今年に入って雨が続いた訳でもないのに四度よたびも村を水浸しにした。

川を見るなり人を集めさせ、寒空の下で、夜通し底を浚さらわせ続け見つかったのは、一抱えはある巨大な大鯰。

その体色は白く、何より額には珊瑚状の角が一对。

呆氣に取られる人々の視線の中、都守はその腕を、巨大な口に突っ込んだ。

何かを探る事しばらく、出てきたものは、古びた釣り針。

「これで当面は大人しくしているだろう」

すぐさま川に戻すと、祝詞と共に酒を、たつぷりと川へ流した。どうやら、釣り針を飲み込んだ川の主が痛みに暴れたためでもあったのだが、いずれにせよ低い土手。

流れ崩れた護岸は、早急に補強の必要がある。

「護岸の件は、私から上へ伝え置こう」

「我等はこの土地で生まれ育った者。ここから離れて暮らすなど考えられませぬ。どうか、宜しくお伝え願います」

用意されていた酒宴を断ると、白々と明けはじめた空の下、旅籠へと急いだ。

大陸の建築様式を取り入れた珍しい楼閣ろうかくは、かつての地主の屋敷跡。

村と海を一望できる丘の中程に建てられたのは、弓形に伸びた奈七戸の浜の虜になったお抱えの絵師の要望だとか。

「、、、、」

海に面した方は崖であつた。

その崖下辺りから、ふわりと舞い上がったものがある。

旅籠の玄関脇に枝を伸ばす老松おいまつに蟠ったと思えば、そのまま二階の窓辺へと消えた、白い影。

「先生、どうかされましたか？」

「いや、、」

村長がつけた案内の若者が、怪訝けげんな顔。

旅籠の主人が用意した湯で手足を洗うと、早々に二階の部屋へ上がった。

そこいるのは、裾を砂だらけにした、伯。

ぽつん、と布団の上に座っていた。

「伯、、」

酒を飲ませ、寝かせたつもりだったのだが、

「浜で、遊んでいたのか？」

触れたその頬が、冷たかった。

どうやら、蒼装が出て行ってしばらくした後、帝都では聞こえぬ潮騒で目覚めてしまったらしい。

手拭いでその足を拭いてやれば、

「オレを見て、泣くのだ、、」

ぽつりと呟く。

「泣く者、か、、」

それだけ言うと、そのまま胸に体を預けて、眼を閉じてしまった。穏やかな、寝息。

敷かれた布団に横たえながら、

「目覚めた後に、詳しく聞こうか、、」

あまりに激しく泣くものだから、どうしたらよいものか、堪りかねて私を待ったと言っわけか、、  
すっかり陽が昇った時分。

浜辺を一望できる崖に、狩衣姿の蒼装が立った。

傍らには、水干を纏った伯の姿。

その手には、陽の光を通して琥珀色に輝く塊。

この村に逗留していると言う、出入りの薬師がくれた飴を、齧っている。

見下ろす浜は、村を抱く山裾が突き出して出来た岬まで続き、遊ぶ子供等や船を引き揚げる漁師らの姿が窺える。

弓形の浜辺に沿って彼等の仕事場となる小屋が居並び、緩やかに続く丘陵に民家は肩寄せするようにして続いていた。

眼を凝らすと、東西に伸びる街道を行く荷馬車や、人々の姿も伺うことができる。

「いない、、」

「だが、この村のどこかに、居る」

伯が言う女はどうやら年寄りで、昆布を拾っていたらしい。

「お休みになれませんでしたか、先生？」

旅籠の女主人に起こされたのか、眼を擦りながら追いかけて来たのは、今朝方、案内を買って出た若者であつた。

「もう十分だ。ところで、この村の特産は昆布だと聞いたのだが、」

「ええ。冬の寒い時分から、今頃までですが、昆布が打ち上げられるのです。海が穏やかな時は漁師も船を出して、長竿でもって昆布漁をしたものですが、今年は先生もご存知の通り、谷茅の川の氾濫でそれどころでは」

「では、あの辺りに見えるものは、」

「家屋の修繕の合間を縫って、村人が集め干しているものです。食べに行くためには、出来る事をしていかなければいけませんので」

「そうか、」

「先生、昆布に興味がありますか？」

稀代の都守が、興味を引かれるにしてはあまりにも的外れな、とても思つたのかもしれない。

怪訝な顔の若者に、

「可笑しいかね？」

一瞥。

すると、若者は背筋を正し、

「めっそもないっ」

ぶんぶんと顔を横に振つたのだつた。

「するべき事は成した。後は、連れが戻るまでの間、好きにさせてもらうぞ」

長い袖を握る伯をそのまま老松の並木道、丘陵を下る。

穏やかな海面の大海原を右に、黒壁の家々が左。

道行く者達が、畏怖の眼差しを込めて会釈する中を、悠然と浜の中程に見えた干し場へ。

「ああ、」

ふと、伯が袖を引いた。

見れば、赤い鳥居が点々と続き、その奥に小さなお社の姿。

村の中程に建てられた、産土神社のようだ。  
伯が、ぱつと走り出す。

産土に訊ねるのが、早いか、、、  
その後姿に、蒼装の長身が続く。

細い参道の脇には長い年月、潮風に耐えた石灯籠が幾つも並んでいた。

「ほおお、、、、」

社の前に立ち、伯が首を左右に傾げている。

すぐに追いつき、

「どうやら、宿っていないようだ」

忘れ神となつて他へ流れたか、消えてしまったか、その運命を知る術は無い。

伯の頭に手を置けば、

「んんっ」

そうされるのがあまり好きでないのか、ぶるぶると首を振ると、  
またたつと走り出して浜の方へ。

「琲瑠が戻れば、話が早いが、、、、」

頼みの綱の琲瑠はこの辺りに縁が深いのだが、村に着いた一昨日から暇を出していた。

召喚する程のものでもないか、と浜辺へ出ると、

「あつ、都の先生っ」

浜に出ていた子供の一人が、興味をそそられたのか駆けってくる。

他の子供もそれに続き、俄かに腰程までしかない子供達に囲まれた。

「ソウ」

腰の辺りにしがみつかれて見れば、伯がいつの間にか逃げ込んでいた。

「この子、先生の子供？」

都から偉い先生が来る、そう聞かされているため、蒼装を知らぬ者はいないらしい。

「伯と言う。皆、仲良うしてくれ」

こんな時、ふと過ぎる友の顔。

燕倪がいれば、子供の扱いは容易かるうと思いつつ、伯を引き出した。

「オレ、エータ」

「カナだよ」

子供達が次々と名乗り、

「おいでよ、伯」

伯の腕をひっぱって行つた。

しばらく伯の様子を見守っていた蒼装であつたが、一緒に貝殻を拾つたり、小石を投げたり、浜に出ている子供らがする遊びを真似て、すぐにその輪の中に入れてもらった。

そのまま伯を子供達に任せると、干し場の方へと一人歩き出したのだつた。

干し場では、忙しく昆布をひっくり返し、満遍なく陽を当てる作業に追われていた。

長い昆布を返す作業は、漁師の女房の役目。

二人で組み、謡いながら行う。

一番端で作業していた頬被りのお里は、相方の美江が昆布を返さなかつたのを手応えで感じ顔を上げ、

「あれ、、、」

堪らず頬を赤らめた。

それもそのはず、美江の前に立っているのは、白い髪を長く垂らした蒼装。

帝都屈指の星読師でもあり陰陽師、都守。

「こりゃ、都の先生」

「あれまっ」

慌てて平伏してしまった二人に、

「そのように畏まらずとも、、二三、尋ねたい事があるのだが、、

、  
」

そう切り出して、蒼奘は二人が顔を上げるのを待った。

「へえ、なんでしよう？」

「人を探している。今朝方、私の連れがこの浜で昆布を取る老婆に会ったようだが、誰か心当たりはないか？」

「この村では洪水のお陰で今じゃ人出不足。力のある若衆は皆家屋の補修に回り、あとの残りの者は大抵浜に出て、昆布を拾うものですからねえ。村の者だけでも八百はいますから」

「そうか、、、」

仕方ない、とばかりに視線を上げた彼方に、細く煙が上がっていた。

長く伸びる入り江の彼方。

海に突き出した岬の上。

「あれは、、、」

「江汰岬です。石で組まれた祠があつて、何か祝い事や不幸があると、竜神様に村で獲れたものを社の前で火にくべて、その灰を海に流すのです」

「ほう、、、」

「先生はすでにご存知かも知れませんがね、この村には古くから天災時に、巫女を海の竜神へ捧げる儀式があつたんですよ」

「初耳だ、、、」

「ああ、でも先生、古くと言っても、もう何十年と昔のことですよ  
お」

「そうそう。この村は時化に早に疫病、そりゃ酷い時期がありましたね。今考えれば、倭中が同じ有様だったそうで、当然、先生のような方が来てくださるようなこともありません。皆、耐えるべきでしたのに、その時ばかりは、盛んに逆さ舟で人を送ったと言います」  
「中々、穏やかにはいかな、、、」  
「へえ」

破顔した二人に礼を言うと、蒼奘は浜辺を彼方の岬の方へ歩き出

した。

そこへ、走り寄る、童。

狩衣の袖を掴んだのは、

「伯」

どうやら、もう子供達との遊びに飽きてしまったらしい。

「先生、どこ行くの？」

そのまま、わらわらと子供達が集まってきたしまう。

「岬の祠だ、」

行く先を告げようものなら、

「あそこは松が茂って、道も細いよ」

「オレ、近道知ってる」

「こっちこっち」

どうやら子供達が案内してくれるようで、

見上げる程に急勾配の、険しい獣道。

村の子供達は、そこを猿の如く駆け上がる。

「、、、、」

村人が祭りの際に使う比較的穏やかな道があるそうだが、子供達は慣れ親しんだ近道に、蒼装を案内した。

伯も、ふわりふわりと、舞い上がって、それに続く。

「先生、早く早く」

「遅いよお」

「、、、、」

一步一步、歩を進めるのは蒼装くらいなもの。

足元の頼りは、突き出した松の根で、それに手を掛け、足を掛けることしばらく、ようやく岬へと続くならかな細い道に出た。

「やれやれ、」

一息ついて、うつそりと視線を、まだ見ぬ松の先へ。

強い潮風に長年晒されたためか、松の背はことごとく低く、身を屈めねば通り抜け出来ぬ程。

とつくに子供達は先に行ってしまったようで、一休みとばかりに背を松の木に齎もたらせた。

一方伯は、その足元にしゃがみ込み、暢気に松笠を拾っている。

「、、、、」

ひとつ、ふたつ、、

大振りのものより、小振りの松笠を探して、袖に入れる。  
その様子を眺めていれば、

「む、、」

賑やかな声音が、戻ってきた。

「鴉婆からすばだッ」

「逃げろおおっ」

子供達が勢いそのまま、獣道を下り、浜を走っていく。  
それに驚いたのか、伯が蒼装の肩によじ登る。

肩にそのまま、頭上に這う松の枝を手に先へと歩いていく。  
程なくして、開けた視界。

「ふあ」

伯の漆黒の眸が、大きくなった。

白く細波刻む、大海原が広がっている。

両側には所々石が積み上げられ、どこか荒涼とした雰囲気。  
その先に一際大きく、眼を引く石組み。

長い時間をかけ、村人の手によって築かれた、祠。  
その祠の前。

細くたなびく煙を背に、一人の老婆が立っていた。

皺深い顔、虚ろな眼窩。

引き結ばれた唇。

枯れ枝のように細いその体を、棒切れの杖を頼りに、ゆっくりと歩を進める。

鴉婆。

墨色の檻褸とも思える衣が、そう呼ばせるのか？

「伯、、」

肩から飛び降りると、そのまま老婆の前へ。  
皺深い顔が、上がった。

「こ、江汰、、、」

再び、目の前に現れた、童。

あの日、枯れたとばかり思っていたのに、、、  
滲む涙の中、

「そうか、、、この者が、、、」

もう一人の呟きが、聞こえた。

「久闊でございます。ウンベク様、ウイベル様」

紺、群青、藍、碧。

交じり合う色彩の中、彼方に茫洋と白亜の宮殿が聳えている。  
その広大すぎる庭の一つに、琲瑠は蹲踞していた。

上へ、下へ、、、

揺らめく、無数の虹色の輝きと共に。

その庭に面した大回廊。

見上げる程に巨大な柱の列。

彼方の宮殿へと繋がる回廊の一つ。

「御子に、お変わりないか？」

柱を背にして四腕を組むのは、馬の頭を持つ鮫龍ウンベク、ウイベル。

「はい。健やかに、お過ごしでございます」

「そうか、、、」

「すぐにそちを都へ使わしたのは、正解だったようだ、、、」

久しぶりに戻った眷族の言葉に、安堵した様子。

「御子のお世話には、わたしののような水気の者が要りようだと、快  
く眷族に加えていただきました」

「人の形ではあるが、神に名を連ねる者。幸いであつたと、言っベ  
きか、、、」

「だが、ウンベク。海皇よりあの男、異端と聞いた事がある」

「ああ。確かに、冥皇が配下には違いないが、、」  
二人の溜息に眼を細め、

「こうしてわたしを海皇宮へ伺わせたのも、都守の配慮でございませうれば、ご懸念されていた『神碎』《かみくだき》などと言つ最悪の事態は、万に一つとしてありますまい」

つい、口をついて出てしまう。

「無論、あつてはならんことだッ」

「おいそれと口にするでないッ」

「軽率すぎました。どうか、ご容赦下さいませ、、」

再び深く、頭を垂れる琲瑠に、

「重ねて訊ねるが、御子に不自由はないのだな？」

やはり不安を払拭できない、その声音。

「はい。私は、お仕えてまだ日が浅うございますが、幸い、都守の御子へのお心の砕きよう日に日に深く、御子はその導きで現世に在る神の習いと見識を、深めておいでです」

「幸い、な、、」

「引き続き、頼むぞ」

「はい」

結果、都守を擁護する形になってしまった事に、琲瑠は内心首を傾げていた。

私も、人の世に慣れ過ぎたか、、

ふと、脳裏を過ぎつたのは、都守の友の顔。

「しかし、、」

そんな琲瑠の心境を他所に、

「海皇が眠る今、この海皇宮の『一の庭』へ辿りつく魂魄は、朽ちること叶わず、蟠りつづける」

「それが、海皇に捧げられた魂魄の宿命、、」

点在するのは、沈んだ船の数々。

荒波にもまれ朽ちたものもあれば、出港した時そのまま、朱色の塗装鮮やかなものまで様々。

ウンベク、ウイベルは、一の庭と呼ばれる、広大な庭を見つめた。  
見通せぬ彼方の暗がりへ、延々続く船の原。  
しかし、その荒涼とした様よ、

魂魄の宿命か、

無数にたゆとう輝きは、海で命を落とした者や人柱として流された者達の、魂魄。

「白暈<sup>はくうん</sup>を潜り、冥府への魂送りが出来るのは、今となつては御子のみ」

「海皇が紡いだ夢。産まれ出でたその瞬間に、よもや戯れに攫われようとはな。海皇に合わす顔が無い、」

肩を落とすウンベク、ウイベルに、

「猊下の御目覚めは？」

「それが知れば、苦勞は無い」

「御心知れぬ今、我らはただ、海皇の帰還を待つのみ」

「左様で、」

こうなると最早、掛ける言葉もない琲瑠であつた。

「この調子じゃもう一晚くらい、駆けれそうだなあ、」

褐色の狩衣。

頬を弄る風は今だ冷たいのだが、捲くつた袖から、太い腕。

愛馬、千草を駆る、燕倪である。

どこから聞きつけたのか、左大臣である父備堂真次が遠野の羽琶姫と燕倪の仲を取り持とうと反物や櫛やと、世話を焼き始めた。

燕倪にしても、先の騒動で大層迷惑を掛けたというのもあるのだが、その実、様子が気になるようで、夜通し馬を走らせる事も厭わない。

今日は、父が仕立てさせた春物の袷を届けた、その帰りであつた。燕倪も仕事柄、長く屋敷を空ける事もできないため早々に馬首を返しが、不思議と体中には精気が満ちている。

このまま、まっすぐ帰るのもどうか、馬上にて頭を捻ると、

「そう言えば、あいつ、確かこの辺りの、、」  
ふと、思い浮かんだ。

富紀の鬼の件が片付いて間も無く、二、三日留守をすると帝都を出た都守。

「寄つてくかッ」

悪戯を思いついた子供のような笑顔で燕倪は、街道を南へ下るのだった。

村外れにある、古びた庵。

長年の雨風に傾き、修繕の手も回らぬその家は、所々隙間風が吹き込んでくる。

辺りは雑草が生い茂り、朽ちた板の間から、緑の葉が覗いていた。そんな、囲炉裏と寢床である筈が敷かれただけのこじんまりとした居間に今日は、来客があつた。

「白湯しか、ありませんが」

「お構いなく、、」

竹を割っただけの椀に、囲炉裏に掛けた鍋から湯を注ぐと、枯れ枝のような手が震えながら差し出した。

それを受け取ると、青い唇をつけ、

「んー、、」

袖を引かれ見れば、膝に入った伯が、見上げていた。

「熱いぞ、、」

椀を受け取ると、両手で包み込み、暖を取る。

少しずつ口へ運ぶのを見つめ、黒衣の老婆は、

「都の先生が、おいでになるとは聞いておりましたが、このように村から離れて暮らしていますので、なんのお構いもできず、、」  
しっかりとした物言いで、口を開いた。

「勝手に出向いたのは、当方。お気になさらず、、」

老婆は山に在る畑で作物を育て、季節の山菜を採り、この時期はまだ村人が出てこない朝の早い時分から昆布を拾って、暮らしてい

ると言う。

岬では毎日、いくばくかの供え物をし、手を合わせているのだと語った。

その老婆の視線の先に、伯がいる。

「この仔は、人のように見えてその実、神霊の一つ」

「人では、ないと、？」

「仕事柄、鬼を祓うため、自然神霊の力を借りる事があるのだが、契約を交わす事で常に側に置くこともできるのでな」

首に掛けていた翡翠輪を外すと、その髪は深い群青色に、眸は董色に。

「ひと、では、、、ない、、、」

どこか寂しげで、それでいて安堵したかのような、複雑な表情が浮かんだ。

「だが、心が無いわけではない。今朝方出逢った貴殿を、気にかけていてな、、、」

伯は、老婆を見つめている。

時折、その頬を伝う涙の意味を、心の声で問うているのだ。

やがて老婆は、擦れた声で語り始めたのだった。

「江汰は、嵐に遭って漁に出たきり戻らなかった夫との間に出来た、一人息子です」

蒼莢の視線が捉えたのは、部屋の片隅の古びた文机。

「今から、もう五十年以上も昔のこと。その年は旱続きで川も枯れ、海に出ても魚が取れず、皆その日生きるのが精一杯な時でした。わたしが、隣村の親戚の家に食べ物に分けに行った日。陽が暮れて戻ってみれば、江汰が居ませんので、探しに出ようと思いましたら、隣に住む者がわたしの留守を待って、村長が江汰を連れて行ったと言うのです」

文机の上には、黒く塗りつぶされた巻物が床へと伸びていた。

「あの子は、少し先が見える子で、それまでも幾度となく洪水や、

嵐を予見していましたから、度々そういった事はあったのですが、

「写経に、写経を重ね続けたのだらう。」

「胸騒ぎがしまして急ぎ、浜に向かいました」

文机の横には、粗末な作りの仏壇。

小さな手彫りの仏像の前には、薊の花が供えられている。

「けれど、わたしがついた時には、江汰はすでに供物と一緒に、さかしまの船に結び付けられ、沈められた後、」

あだ名の由来でもある鴉婆が、その身に纏う黒衣は、

「江汰が、竜神様に頼んでくださったのか、翌日から時化はぴたりと無くなり、漁は大漁。雨は豊富に田畑を潤し、お陰で村は、飢饉から脱したのです。それから竜神を祀る祠のある岬は、江汰岬なんて呼ばれているのです、」

我が子と夫を、弔うための僧衣であった。

「わたしは、打ち捨てられたこの庵で、菩提を弔っているのです、」

人柱となった江汰は、齢九つ。

浜に現われた童は、年の頃も近く面差し良く似た、いや、似すぎていた。

何十年経つても、色褪せぬ我が子の姿。

「だから、その子を見た時、嬉しかった、」

岬より何度身を投げて、海は懷に母親を抱こうとはしなかった。飛び降りる毎に波は、彼女を浜に押し戻したのだった。

今朝その姿を見た時、海から戻って来たのかと、それともようやく己を連れに来てくれたのかと、我を忘れて泣き崩れてしまったのだ、と語った。

滲んだ涙を擦り切れた袖で拭いながら、

「すみません。都の先生に、こんなところを、」

「いや、」

「こうして、よくよく見ればそうでは無いと、分かるのに、」

浜で見たこの童は確かに、江汰そのものであった。

だが今は、違うのだと分かるのが、皮肉でもあった。

「冷たい海の底で、寂しくしてやしないかと思うと、、、」

董色の眸が、老婆を見つめ、

「ソウ、、、」

伯の手が、蒼装の腕を掴んだ。

しばらく、内なる声に耳を傾けていた蒼装は、伯の背に手を置いた。

その姿は、赤茶け髪と栗色の眸の、よく陽に焼けた童の姿へ。

「こ、、、」

「確かに、良く似ている、、、」

「これは、、、」

江汰が、座っていた。

「貴殿の想いが、この仔をそう見せるのだ。この仔は浜で、貴殿の想いを、映したに過ぎん、、、」

「嗚呼、先生つ、、、我が子に一目会いたいと、願わぬ母が、おりましようか、、、」

「子も、そうであろうな、、、」

ふと、いつぞやの母子を思い出した。

子は、母の腕に抱かれたいと願い、母は、子に応えた。

その身を鬼に喰われても、、、

「その想い、しかと見せていただいた、、、、」

いつの間にか、董色の眸と群青の髪に戻った伯が、戸口に立っている。

開かれたその先には、宵闇が迫っていた。

うつそりと視線を彷徨わせた先に、月は無い。

新月だ。

「ん、、、」

くん、くん…

伯が、鼻を鳴らし、

「奇遇なものだな、」

蒼装は、袖を振った。

現われた白い繊手の指先から、札が一枚滑り出すと、ひとりでに複雑奇怪に折れ曲がり、

「おお、」

細かく折れ刻まれた翼の部分が延びると、羽毛が生え、その姿は白い雉へ。

「ほんの手慰みだ、」

夜の闇に出て行くのを、啞然として見送る、老婆。

「先生、いったいあなたは、」

その問いに、青い唇はただ、いつものように薄く笑みを刷くだけ。しばらく、遠ざかる雉の聲こえに耳を澄ましていたが、

「この村を訪れたのには、もう一つ用があつてな、」  
腰を上げた。

「調度、連れが来たようだ、」

見れば伯が、戸口から体を乗り出している。

喧かまひずしい白い羽ばたきが一枚の札となって手に収まると、荒い息遣いの男が現われるのが、同時。

戸に手をかけて、肩で息をしているのは、

「エンゲ」

伯が、腕にぶら下がった。

「お、お前、ッ、いきなり現われて、急かすなッ」

どうやら式神に、相当急かされたらしい。

「こんな所で何をしているとは、問うまい。大方、遠野に寄った帰りだろう？」

「うっ」

闇色の切れ長の双眸が、細くなる。

「ふん、こんな時間に現われるなんぞ、まだ、指一本触れてないと見た、」

「余計なお世話だっ」

二人のやり取りに、老婆はすっかり口を挟めず、

「あ、燕倪と申します。都守の古い友でして」

ようやく苦笑しつつ会釈した燕倪に、機会を得た。

「り、理亜りあです、、、」

庵の外に出たところで、蒼装が振り向いた。

闇色の眸で老婆を見つめると、

「貴殿も、来るといい」

「え、、、」

「この男、武官故、一人背負って行く事になんの苦もない、、、」  
しれ、と言つてのけた。

俺に背負わせる気で、急かしたのか？！

一瞬、口を突いて出そうになって、

「心配無用。どうぞ俺の背に」

呑み込んだ。

訳も分からぬのだが、いつもの成り行きに抗えぬ燕倪であった。

宵闇の中、伸びた枝に注意しながら、道を行く。

「すみません。こつも暮れるとすっかり目が、、、」

「お気になさらず、甘えてくだされ」

白い後姿を先頭に、老婆を背負った燕倪と、

「ああ、、、」

「お前は、降りてくれないか、伯？」

ぶらりぶらん…

腕に掛ったままの伯が続く。

静寂に時折交じるは、波の音。

しつとりと湿気を帯びた夜気は、潮の匂い。

「もうすぐ、岬に出る頃ですが、、、」

老婆の呟きの後、一行は松の林を抜けた。

「これは、、、なんとも、、、」

黒々と広がる大海原に突き出した、岬。

両側に積み上げられた無数の、石の塔。

左手には切り立った崖が迫り、右手には弓型に伸びる浜と、灯火の輝き漏れる集落が、闇の中に蹲っていた。

薄雲が出てきたのか、ぼんやりとした星の輝きの先に、月は無い。

「んん」

伯が、燕倪の腕を離れ、祠の前に立った蒼装の元に、走り出す。

「おい、伯。足元に気をつけるよっ」

ふわり、またふわり。

群青色の髪を靡かせ水干の袖を翻し、

「ソウ、、、」

伯は、差し出された蒼装の手を取った。

そして、次の瞬間。

「伯ッ」

「ひ、、、」

静止の声も聞かず、岬の向こうへ。

断崖絶壁。

まるで吸い込まれたかのような、一瞬の出来事であった。

「蒼装ッ」

眼を見開き、駆け寄る燕倪と、

「ああああ、、、」

うつたえる、老婆の声。

飄然と、祠の向こうを見つめる蒼装の背。

その肩に手が届いた刹那、

コオオオオオオ・・・

「んなっ!?!」

翠深い透明な巨体が、その姿を覗かせた。

刻まれる巨大な、鱗。

紫紺の背鰭が長く伸び、深紅の鬣が広がる。

その神々しいまでに巨大な体が、一行を見下ろしている。

「これは、どういう、、、」

老婆を背中から下ろしたけれど、燕倪はうまく説明できず、

「あの仔は、竜の化身、とでもしておこう、、、、」

その先は、蒼装が引き継いだ。

「これより先、貴殿が目にした事、他言無用に、、、、」

一の庭に、まだ琲瑠は居た。

すでに鮫龍の姿は無く一人、船縁に腰掛け、たゆとう輝きを見つめている。

手には、懐っこい魂魄が一つ、纏わりついていた。  
その好きにさせながら、

懐かれてしまった、、、、

つい陸に戻る機を逃してしまったようだ。

魂魄の中には何百年も、そのままたゆとい続けているものも在る。  
己のような者が、そのような事情を考えても、仕方が無いと分か  
ってはいるのだが、、、、

俄か仕立ての式神の私には、何も出来はしないけれど、、、、

時折、長い尾鰭くねらせ、上半身は人の体を持つ鮫人<sup>いっしや</sup>が、回廊を  
渡って彼方の宮殿へと急ぐのを、視線の端捉えては、

猊下がおわせばこの魂魄らは、鮫人としてお仕えすることも、

冥府に渡ることも出来る、、、、

酷く、感傷的になっている自身を、不思議にも思う。

若君がお戻りになれば、これらの魂魄は、、、、

考えて、肩を竦めてしまう。

伯自身がここに居るそれ自体を、望んでいないと、琲瑠は知って  
いるのだ。

掌で、ころりと収まる、魂魄。

「私を、心配してくれてるの、、、、？」

眼を細め、

「優しいコだね、、、、」

そつと表面を撫でてやった時だった。

「ッ」

頬に、強い波の揺れ。

顔を上げた時、琲瑠は微笑んだ。

「お行き。あの御方がそう、望まれた、」

頭上で、ゆらゆらと長い尾鰭が辺りを覆っていた。

紫紺の背鰭は隆々として、どこか睥睨<sup>へいげい</sup>するかのようになり、琲瑠を見下ろしている。

深紅の鬘、翠の透明な鱗煌めく、その巨体。

透明な鼻先が琲瑠に近づき、

キュウウ…

掌にいた魂魄を、突いた。

押されて一度は離れたが、すぐに傍らに添う。

一帯に漂っていた魂魄が、吸い寄せられるかのように巨体に纏われると、巨体は無数の輝きと共に舞い上がった。

「お、お、おおっ」

「御子がッ」

宮殿から急ぎ現われた、鯨龍。

「これは、どう言うことだ」

「魂送りを、？！」

琲瑠は、ふわりと舞い上がり、

「御子が、そう望まれ、都守が応えたのでしょっ」

突然の御子の来訪に呆然とする二人をそのまま、琲瑠は、泳ぎ去る伯の後に従ったのだった。

それまで吹いていた風が、ぴたりと止まった。

所々、青白い細波を刻んでいた海原は、今、鏡のように凪いでいる。

伯が、体をうねらせ、大海原の底に消えてすぐのことだった。

「一体、何が始まるんだ？」

祠の前、蒼装の傍らに燕倪。

眼を凝らしたところで、その先には暗い海がどこまでも広がっているだけ。

「この海域は、神が絶えて長くてな。そうなると、海に漂う魂は彷徨う、、」

「それじゃあ、やはり江汰もあの人も、海の底で、、」

袖に縋った老婆をそのまま、闇色の眸は伯が消えた海域を見つめている。

噁り泣きが、漏れた。

こればかりは燕倪も、その背を擦ることしか出来ず。  
やがて、

「来たか、、」

低いその呟きに。燕倪が顔を上げた。

「八火業焰衆、白暈はくうんを映せ」

金色こんじきの陽炎かげろうを纏った褐色の肌の鬼神衆。

四散し、上空に舞い上がると空に陣を敷いた。

八柱の鬼神が描く八角の陣。

藍色の夜空を切り取るかのように闇が渦巻くと揺らめき、波打った。

その中に茫洋と浮かぶのは、

「白い、月？」

燕倪は、冴えた輝きを放つそれを、見た。

「月が無ければ、喚よべはいい、、」

それまで凪いでいた海の一画が朧げに輝き、水柱が太く伸びた。  
離れるのが名残惜しいのか、まるでそれ自体が生き物であるかのように、とろりと剥がれる海水の欠片。

オオオオオオオオン・・・

その水柱の中から姿を現した巨体は、無数の小さな輝きを纏って

いた。

巨体自体が淡く発光しているようにさえ、見える。

ゆっくりと海面を旋回する巨体の、胸鰭の辺りから一つ。

一際強い輝きを放ちながら離れたのは、

「これは、、、」

「長らく、絶えていた魂送りだ、、、」

ゆらめく、魂魄。

「こ、、、」

老婆の頭の中に直接届いたのは懐かしい、声。

顔を上げ、見つめた先に、

「江汰っ」

その子の笑顔があつた。

祠の先から、老婆の胸に飛び込む童。

燕倪の目には、白く臃げに縁取られているに過ぎないが、老婆の目には生前の姿が映し出されているようだった。

蒼桀は、老婆が我が子を抱き、髪を撫でる様子を、ひっそりと見守っている。

やがて、

クウオオオ・・・

伯の呼び声に、童は母に頬を摺り寄せると、にっこりと微笑んだまま、踵を返す。

その先に、佇むのは、

「あなた、、、」

いつも潮の香りをさせた、姿変わらぬ良人の姿。

江汰と手を繋ぐと、二人は魂魄の輝きとなって、旋回する伯の元へ。

傍らに合流したのを見届けるとその身をくねらせ、白い月の元へ舞い上がり、

オオオオオオオ・・・

頭ごと、前のめりに結界陣へと、消えていった。

「海の神に捧げられた者達は、その懷に抱かれ、冥府へ渡る時を待つと言われている。波、穏やかで温かく、静寂に満ちているところともな、、」

「江汰の笑った顔が、あの人の穏やかな眼差しが、それを、教えてくれた気がします、、」

深々と頭を下げる老婆に、

「出来ることなら、肩の荷を少し、下ろされることだ、、」

「はい、、」

珍しく穏やかな眼差しと、口調であつた。

「燕倪、先に庵へ、、」

「ああ。お前は？」

「伯の帰りを、待たねばならんよ。我らも、すぐに行く、、」

「おう。さ、理亜殿。夜風は体に悪いですから、、」

燕倪が老婆を背負つて、松林に消えた後、程なく、、

白い月が波打ち、巨体が姿を覗かせた。

その姿に眼を細めた、蒼装。

キュキユ、チュキチュキ・・・

のっそりとどこか緩慢に、岬に身を寄せると、鼻先に蒼装の手が置かれた。

「伯、、」

急速に収縮する、巨体。

まず鱗が消え、紫の背鰭と深紅の鬣は背にしまわれた。

尾鰭がのたうち、鰭は華奢な象牙色の四肢へ。

深い群青色の髪が現われると、伯は蒼装の腕の中へ。

とろりと潤んだ董色の眸。

「眠れ、、」

その言葉に安堵したかのように小さく鳴くと、眼を閉じた。

安らかな寝息を腕に、踵を返した時、空には星だけが輝き、風が白い髪を弄っていた。

老婆を庵に送り届けた後、蒼装と燕倪は、一旦街道と合流して村へ入る道を下っていた。

松の木の根や、頭上を脅かす枝はなりを潜め、比較的平坦な勾配を下って行くことしばらく、櫟の木に結えられた葦毛が一頭、草を食んでいる。

そしてそのすぐ近く、

「主様、出立の準備は出来ております」

馬二頭の轡を取った琲瑠が、待っていた。

無人の街道を、三頭の馬が東へと向かっている。

「しかし、いいところあるんだな、お前も」

精悍な頬に笑窪を刻み、葦毛『千草』に乗るのは、燕倪。そのすぐ隣、一瞥をくれたのは、

「ただ、伯がそれを望んだのだ、」

腕に眠る伯を抱いた、蒼装。

青乳色の鬣、赤紅の瞳の異形の愛馬『鋼雨』の手綱を取っている。

「燕倪様こそ、どうして奈七戸にお寄りに？」

「俺は、その、」

二頭の少し後ろを、荷を乗せた月毛に乗った琲瑠が続く。

「琲瑠、野暮な事を聞くものじゃない、」

「ああ、すみません」

「人をなんだと思っているんだッ！羽琶殿がいなければ、今の都も無いんだぞ？それに、そ、そんなよこしまな思いを抱いているんじゃない、」

「だんだんと語尾が小さくなっていくので、

「ふ、」

青い唇が歪んだ。

続いて、琲瑠もくすくすとやってしまい、

「お前らッ」

耳まで赤くなった燕倪。

しかし、その先の言葉が見つからない。

うとうと、と睨むその男に、

「よこしまな思いも、結構」

助け舟と、

「そうですね。人生に張りは、大切です」

追い討ち。

「奈七戸になんぞ、寄らなければ良かった、」

からかわれてしまえば、純朴な燕倪に勝ち目などない。

そっぽ向いた先には、ぽつりぽつりと夜の帳に包まれた民家。

耳には、田植えが済んで、水を張った田圃で鳴く、雨蛙。

萌えて、頬にぶつかる、羽虫の音。

遠く彼方の山で吠える、狼。

不規則に響く三頭の馬の、蹄の音。

そして、体の納まりが悪いのか、蒼装の腕の中で身じろぐ伯の、  
声。

ふと、

「なあ、伯って一体、何者なんだ？」

「お前が、珍しい、」

顔にかかる髪を払い、包んでいた衣を首まで引き上げながらの、

蒼装が低い声音。

「どうして？」

「あまり、重きを置かないものと思っていた、」

「俺だつてな、さすがに疑問に思うさ。魂は映すし、帝都の結界に

風穴開ける。魂魄まで冥府へ送ったんだぞ？」

「そつだな、」

淡々と応じ、蒼装の闇色の眸は、傍らの男を見つめた。

「だがお前は、その答えを知っているはずだ、」

「ああ。でも、こんなに小さくて幼いのにさ。生まれてすぐに、随分と過酷なもん、背負ってんのな、って」

伯を見つめていた燕倪は、顔を上げた。

「お前も、だ。月まで呼んじまって、、」

「、、、、」

「何者だ？」

鈍色と闇色の双眸が、交錯し、

「その答えを、望むのか、、」

燕倪はその眸に、深い闇を見た。

そのまま待てば、この男は己が望む答えを、口にする。

燕倪は、漠然とだが、それを確信していた。

しかし、

「ま、いいさ」

すぐに、眼差し緩めて、

「酒の相手は、お前に限るしな」

苦笑い。

それに、応えたのか、

「正直、私にも、分からねのだよ、、」

冗談とも、本音ともつかぬものが息と共に、吐き出された。

その蒼装が見上げた先の、夜空。

濃紺から、藍色へ。

自然、馬の歩みも速くなる。

帝都が近いと、分かっているのかもしれない。

藍から、堇色へ。

どこかで鶏が、鳴いている。

「夜明けが、近いですね、、」

琲瑠の声音。

「急ごうか、、」

「おう」

鞭をくれた二頭が、揃って走り出す。

その様を、終始にこやかな琲瑠が、変わらぬ速度を保ち、見送っている、、



## 第伍幕前

夢裕

（前書き）

北の龍門を守る大天狗祇威が、都守の屋敷を訪れた。その末娘の身に起きた怪異を探るべく、蒼奘は伯と共に靈山斗々烏へ向かう、

死人還りの都守蒼奘、業丸を継ぐ武官燕倪、幽身であるがこの世に縛られた伯。それぞれが紡ぐ異国絵巻、第伍幕前編。。。。

## 第五幕前

夢 裕

刹那は、騒々しい。

庭の片隅で鳴く羽虫はむしの声。

朝を謳歌する鳥の羽ばたき。

荷車が行く往来の音。

刹那が、眩しい。

行き交う雲の流れ。

彩変える空の顔。

頬に触れる風の囁き。

それは、まだ陸に上がって間もない去年の神無月の事であった。

伯は、ひとり。

欄干に腰を下ろしていた。

茫洋と、視線を庭に落としてはいたが、持てる全ての感覚を研ぎ澄ました“目”が、全身にあった。

息を吐くたびに移ろう今を、懸命に、その不慣れな体に同調させようとしていたのかもしれない。

いつの間にか、白々と明けた空。

鮮明に、雲がその輪郭を現した時。

ぴくり…

投げ出されていた手指が動いて、伯は空を見上げた。

「、、、、、、」

弾かれたように身を振ると、垂らされたままの御簾を潜くぐった。

屋敷の最奥にある主の。寢所。

一段高くなった褥しとねに、白い人影が横たわっている。

伯は構わず、その上に舞い降りた。

額に、ひんやりとした手。

蒼装そうそうは、重い頭を擡げた。

燕倪と過ごした昨夜の深酒が、残っていた。

うつそりと眼を開けば、腹の上に伯。

「どうした、、、？私は、朝が苦手だと、、」

体を擦り、再び眠りに就こうとすれば、今度は、長く白い髪を引っ張られた。

「何だ、、」

「ん」

伯の顎が動いた。

御簾の先。

塀に添って植えられたのは、たわわに実を結び甘く香る、かりん榎櫨の古木。

ほんのりと黄色く色づき出した、楓。

その根元でつつましく揺れるのは、朝露を結んだ竜胆の青紫と桔梗の青。

見慣れた庭に、人影があつた。

まだひんやりとした朝霧の中に、漆黒の羽を持った大男。その向こうに、幾人もの屈強な若者が膝を折って控えた。

「何だ、物々しい、、」

うつそりと上半身を起こすと、

「突然の非礼、お詫び致す。都守」

「まったくだ、、」

「ああ、、」

共に出て来ようとする伯に、頭から掛け布を掛ける。

「其処にいろ、、」

目を細めつつ、

「靈山斗々烏れいざんとうたういの天狗が、一介の都守に何用だ、、？」  
不機嫌極まりない物言いで、腕を組み、柱に凭れ掛かった。

俄かに殺気だった屈強な男達を、手で制すと、巖の如き体躯の男は膝を付いた。

「その龍門を預かる祇威ぎいと申す。この度、貴殿にどうしても診ていただきたい者がある」

漲る鬼気とは対照的に、ひどくやつれた顔をしていた。

「所詮、私は人の身だ。地仙ちせんの頼みとは言え、出来ぬ事の方が多い」  
「幽世の深淵、この世の最果てを知る貴殿にしか判断できぬのだ」

「どこで聞いた？」

不機嫌この上なく、細まった闇色の双眸に、

「先程、その天狐に。古い知り合いで」

「天狐か。同じ流れを汲むのであったな、」

溜息が、煩わしいとばかりに青い唇から漏れた。

「そうと言ってもこの体、借物でな。理により生半な事では脱ぎ去れぬように出来ておる。人の目で、果たして何が視えようか、」

「とにかく、我々と共に来て頂きたい」

赤紅の強い瞳だった。

しばらくその眼差しを受け止めていたが、目を伏せた。

「こつも厄介事が、舞い込むとはなあ、」

自嘲気味に歪む、唇。

平素その厄介事を持ち込む相手、燕倪の顔が浮かんだ。

「そこを押して、どうか、」

「断る」

あつさりと言いのけて、

「琲瑠はいる、汪果おうが、丁重にお帰り願え、」

予期せぬ空からの来訪者に戸惑う使用人へ、命じた。

「ま、待ってくれッ！！娘の命が掛かっているんだッ」

悲痛な叫び。

しかし当人はさっさと御簾を上げ、褥に戻ろうとして、

「伯」

腰に、細い腕が回った。

澄んだ董色の瞳が、興味があるのか焦点を結んで、

「れいざん、」

見上げてくる。

「、、、、」

その眸に、何を見たのか、？

伯の頬を、親指で擦ると、

「いいだろう。その代わり、こちら条件を出すぞ、」  
人の悪い笑みを、端正な口元に刷<sup>は</sup>いたのだった。

半刻の後、二人は身支度を整え、牛車に乗っていた。

否、正確には牛車であっても、空に在った。

屈強な天狗の若者達が、車を轢いているのだ。

北へ。

人の世においては、未開の地とされる更なるその深み。

緑深い山々が眼下に延々と広がる中、伯は物見<sup>ものみ</sup>から突き出して  
いた顔を引つ込めた。

「むう、」

頬に手を当てて何やら呻く伯の手をどけ、指の背で触れる。

「冷えたのだ」

随分と帝都を離れた事だろう。

上空だけあって大気は冷たいが、汪果が急ぎ火鉢を蔵より出して  
きて持たせてくれたため、幸い車の中は温かった。

大人しく膝に入った伯は、蒼装の手によって蘇芳色の布を首に巻  
かれる。

その様子を腕組みしたまま向かいで眺めるのは、大男。

祇威。

「んん」

頬の異変が収まると、再び物見に向かう華奢なその背中。

肩膝を立てその上に肘をつき、前髪をかきあげた姿勢のまま、闇  
色の眼差しを向けるのは、蒼装。

しばらく、伯の背中を眺めていたが、

「話せ」

沈黙に低く、呟いたのだった。

祇威が語ったのはこうだった。

三月程前、末の娘、雫玖菜姫しくなひめが病に倒れた。

特に症状などから、風邪か何かだと思っていたのだが、一向に直る気配がない。

熱は無く咳が続いたが、苦しがる事もなく過ごしていた。

養生を続け三月程して、咳に白いものが混じるようになった。当人も心当たりは、無いと言う。

よく見れば、それは霜であり、日に日に氷の欠片となった。

八百万神がかかると言われるありとあらゆる医者呼んだが、一向に首を捻るばかり。

その内に姫の体温は下がり続け、眠ったままの状態が続いた。今月の初め、体の表面には氷が張り、見る見るうちに姫が養生していた屋敷一つ、凍りついた。

誰も近づく事叶わず、屋敷は氷の支配下に置かれたと言う。

目下、縊る者も絶え、誰ぞ、と昼夜重鎮連中と額を寄せ合っていると、噂を聞いたのか天狐遙絃てんこようけんから連絡が来たと言う。

霊山斗々烏。

峻険な墨色をした岩山で、その頂は常に雲に隠れ、それだけ見れば天を支える柱のようにさえ見える。

対して山裾は、なだらかに伸び、豊かで緑が深い樹海が広がっている。

また、霊山の周囲は切り立った山稜が連なり、空からではなければ成る程、訪れる事は出来ぬであろう。

天狗は、山稜を自然の要塞とし、樹海に氏ごとの里を拓き、暮らしている。

その里の一つ。

天狗族の一切を取り仕切る大天狗の屋敷から、少し離れた熊笹生い茂る静かな場所に、その屋敷はあった。

「ほう、これは見事な、、」

思わず感嘆の溜息。

それは、そのまま氷に抱かれていた。

眼を凝らせば朧気に、屋敷が氷の中に窺える。

行く手を阻むかのように、寒々と突き出した氷の棘は、複雑奇怪に絡み合い、門に近づくことすらできぬ有様。

透明なその氷は分厚く、周囲に渦巻く凍てついた大気が、来る者をことごとく拒んでいた。

「姫の他に、残っている者は居ないのだな？」

「凍てつく大気に、屋敷の外に追いやられたと」

「一同、成す術なく逃げ出したと言うわけか、」

その太い幹の一つに近づき、蒼装は手を置いた。

そのまま触れ、しばらく、

これは、

微かに感じ取れるのは、震動。

そして、

「屋敷がこの状態に成って、何日目だ？」

「梶女<sup>かじめ</sup>」

腰を低くした年配の女が、震えながら口を開いた。

「八日目でございます、」

居並ぶ者は、一様に憔悴しきった様子。

この有様。

姫の安否は、諦めているのかもしれない。

「一日にしてこの有様か？」

「いえ、最初は、姫様の寝所が凍りつき、その翌日に母屋。庭、塀へと、広がりました、今日のような状態に落ち着きましたのは、一昨日の晩でございます、」

現在、一先ず凍結は、落ちついているようであった。

「斗々鳥の意思か、それとも、」

「どうなのだ?!」

「ふむ。とにかく、姫のものではないように感じるが、」

「やはり、雫玖菜をこのようにした者が潜んでいるとッ?！」

怒りで声を震わせる大男に、

「そこまでは、まだ分からぬ。言っただろう。今の私は人に等しい、と、、、」

「ぬ、、、」

俄かに険しくなった視線の先、急くなとばかりに柳眉を寄せた、美丈夫の姿。

「今の私には、限度があるが、、、」

傍らに視線を落とせば、

「伯、どうだ、、、?」

それまで、蒼装の衣の袖を握ったまま爪を噛み、じっと、氷の向こうを凝視していた伯。

「ちいさい、おと、、、」

ぽつりと呟く。

どうやら伯の耳には、微かな心音が聞こえるらしい。

「そうか、、、姫は生きているか、、、」

「な、なんとっ」

どよめきとも安堵とも取れる声が、各方面からこぼれた。

「入れるか、、、?」

「、、、、、、」

ふわり。

一歩前に進み出ると、伯が切っ先の一つに触れた。

が、次の瞬間。

「あ」

拒絶して、突き出した。

咄嗟に蒼装がその襟を力任せに引き寄せたが、伯の右頬に、微かに朱が刺す。

董色の瞳が、赤みを帯びた。

「伯」

「ふっ、ふうッ」

小さな犬歯を剥く、伯。

腕を跳ね除けようとする伯を、羽交い絞めにし、

「落ち着け、、、」

そのまま小脇に抱えると車に連れて行き、閉じ込めてしまった。

「生きているのなら、未だ私の管轄か、、、」

蒼槠、いつの間にやら手に札を持っている。

札には、赤い墨によって、大きく橢円形が描かれていた。

「祇威よ。少し、氷を砕いてくれぬか？」

「雫玖菜の命には、、、」

「関わらん、、、」

恐らくな、、、

祇威は、腰に提げていた幅広の大太刀を抜いた。

鈍く輝くその太刀を反すと、柄に結ばれた浅葱色の房が、揺れた。峰でもって突き出した氷柱を一つは、叩き割られた。

大地に砕け落ちた氷柱は、次の瞬間、新たな切っ先を再生させていた。

それは何度と無く、助け出そうとした眷族によって繰り返された光景であった。

「どれ、、、」

手の平で包める大きさの氷を一つ拾うと、

「緋皇」

金色の輝きを帯びた褐色の肌を持つ鬼神が、現われた。

主人の差し出す欠片を受け取ると、そのまま握り締める。

程なくして滴り始めた雫を、札が受けた。

札がぐっしりと濡れると、手からひとりでに離れ、氷の壁に吸付く。

そして、そのまま易々と擦り抜け、門の梁へ。

もう一枚取り出すと、己が左目を覆うように張り、指先を齧った。血の玉が結ばれると、左目を覆った札の橢円に色を入れた。

すると梁に張りついた札の橢円形の中心にも紅が滲み、目玉とな

った。

二つの目玉が、揃って蠢いた。

「おお」

しばらくその具合を確かめた後、一行に背を向けて座り込み、

「蒼装殿」

「黙っている。これより時間軸を離れ、遡る、、、」

右目を、閉じた。

脳裏に飛び込むのは、門の記憶。

想いであり、念でもある、想念だ。

産まれ出でた純粹なそれは、記憶するもの。

そして、宿るもの。

写真のように、断片的。

今、色を纏つては、目の前を過ぎつてゆく無数の記憶の欠片を手繰り、繋がる糸口を探す。

「ふむ、、、面妖な、、、」

山裾に太陽が沈む頃、蒼装は札を剥がしつつ立ち上がった。

「一体、何が？」

裾を払うと車に向かう。

「ん、、、」

待ちくたびれ、蒼装の長衣に包まって丸くなっていた伯が気づいて、縋りついてくる。

それを抱きかかえ、さつさと車に乗り込んだ。

「姫は、神産みの最中だ、、、」

「な、んと、、、?!」

「人目を気にして夜半、出入りする姫の姿が視えた。よくよく目を凝らせば、何やら腹にて蠢く輝きが視えた」

「神産み、、、雫玖菜が、ややを、、、」

「ただの神では無い。この冷氣。どうやら霜月の神、白帝が眷族の

子だ。覚えは無いかね？」

「な、い、、、」

「姫の大事、と見境が無いのに、何も知らぬが父親と言つものか、  
、」

小声で呟きつつ、鼻で笑うと、

「産まれてしまえば、母体は回復に向かうだろう。まだ、先のようながな。その時が来れば、私も立ち会おう、、、」

柔らかな群青の髪を梳く。

手指に絡みつく、その感触を愉しむ男に、

「何か、出来ることはないのか？ いったい、どうすれば、、、」

「放っておけばいい」

「しかしっ」

「いらぬ刺激で、屋敷が凍った。これ以上、騒ぎ立てぬが肝要。いずれにせよ、産まれてしまえば、神送りをする事もできようよ」

神送り。

在るべき所へ、神がその産まれた意味を自覚し、自らを神と名乗る儀式のようなものだ。

びくり、、、

【神送り】の音に、微かに震えた伯。

蒼装は、その肩に手を置いた。

そして、

「ただし、其を望めばな、、、」

力を込めて衣の袂を握る幼い手に、眼差しを注いでいる、、、

気がつくつと、闇路<sup>やみじ</sup>を歩いている。

ぬるくもあり、ひどくなつかしくもあり、それでいて薄気味悪い。居心地だけで言ったら、けて悪くは無いのに、記憶は霞かすみがかかって、過去がそっくり抜けていた。

あるのは、今。

それと、ここで過ごした記憶だけだ。

ここで足を止める場所も、決まっている。

闇路の先で、すすり泣くその女の元だった。

どうやってここに辿り着くのかは、分からない。

けれど、確かな事は、一つ。

それはもう何度も、この地に足を踏み入れているという事。

「どこか、痛むのか？」

その日も、女童は袂で顔を覆うその女の前で、しゃがみ込んだ。

この闇路には、光源など無いのに、その人の容姿をはっきり見て取れる。

長い鴉羽色からすばいろの黒髪は宙をたゆとう。

雪よりも白く、透けるような肌。

淡い縹色はなだいろに、浅葱、藤色を重ねた寛衣を華奢な体にゆったりと纏っている。

一見、異国の姫の風情であるが、その背には海松色みるいろの翼があった。

「いいえ、、ただ、哀しくて、、」

涙を袂に吸わせて、女が貌を上げた。

額に金の吉祥紋を頂いた、蜂蜜色の双眸深い、美しい姫であった。

「哀しい？」

「ここに来て、とても長いようにも感じるのに、とても短いようにも感じるの」

「わらわもじゃ。ついさっきここに降りたような気がするのに、随分と長居しているようにも感じる。ここには、無限の安らぎがあるが、それだけだ。ひどく、虚しい、、」

女童は、溜息。

身近にあるのに、ここに居る時は、“ここ”を“それ”だと、気

づけぬ場所でもあった。

「でも、わたしはあとりに会えて、すごく嬉しかった。だってずっとここで、一人だったから、」

「わらわも、だ、」

女童、あとは、照れたようにはにかんだ。

自然と女も、微笑んだ。

けれど、それも束の間。

すぐに暗く沈む、その表情。

「雫玖菜？」

「あと、り、わたし、ずっと、思い出せないの。どうしても哀しかったのか、どうしても、」

その溜息に、

「なら、ここから出ればいい。すべて、思い出すかもしれない」

「それが、怖い。もし、思い出したくない事だったら？ 嗚呼、きつとわたしはここに長く居すぎてしまったのね、」

「雫玖菜、」

あとは、その人の隣に腰を下ろした。

「呼びたい名前も、以前はあったと思うのに、思い出せないの、」

大切な人の名。

再び、頬を伝う涙。

雫玖菜は、あとの手前、慌てて袂で拭った。

「それに、どうやって、ここから出るのかも、」

「実はわらわもじゃ。気がつくところに居て、気がつくところを出ている、」

からりとした、あとの声音。

「だから、今回は雫玖菜が戻る時に、一緒に戻ろうと思うのじゃ」

その声は、快活そのものであった。

「本当に？」

「ああ。それを今日は、言いに来たのだ。こんな薄暗いところでは、

わらわもそなたも一人では心細い。だから、一緒に居よう」

「ええ、あと。約束よ」

雫菜の手が、あとの手に触れた。

「約束、、、」

あとが、その手を握り返す。

その温もりが、今は、何よりも心強い。

庭の池では菖蒲の蕾が膨らみ、しとしとと甘い雨が波紋を刻んでいた。

小さな雨蛙は浮き草の上で休んでは泳ぎ、つすみいろ薄墨色の鯉がそれを狙って大きな口で追いかける。

柳や楓、梅に椿、青々と芽吹くその庭で、気の早い紫陽花の青と蔓薔薇の紅が、鮮やか。

梅雨にはまだ少し早い、皐月のある日。

庭の阿四屋あづまやに運んだ長椅子で、汪果が爪弾く月琴を聞いていた男は、物憂げに眼差しを向けた。

その先に、渡り廊下の欄干に座り、屋根から滴る雫を素足で弾く伯の姿。

菓子にも飽きて、ここ数日降り続く雨にも飽きての、その姿。

「すっかり、人の子のようですよ」

「そのようだな、、、」

都守が出張るような目立った怪異も無く、燕倪が持ち込む厄介事も無い。

平穩過ぎるのが、伯にとっては却って退屈なのかもしれない。

かつては見るもの全てが真新しく、それに感情がついて行かなかったのだが、最近ではそうでもない様子。

相変わらず口を使う事は少ないが、身支度など、琲瑠が手伝わずとも自分でやってのけてしまう。

それが、琲瑠には少し寂しいらしい。

「伯、、、」

名を呼ばれて、振り向く。

「髪紐が、解けている、、、」

「ん、、、」

そのまま歩いて来て、蒼装の膝に、腰を下ろした。

群青色の髪に纏わりついている浅葱の組紐を手に取り、結いなおす。

華奢なその背の中程まで伸びた、髪。

「雨が止んだら鋼雨を連れ、野駆けに行こうか、、、」

董色の眸が、見上げてくる。

エンゲ、も、、、？

そう、言っている。

「ああ。あやつもお前と同じで退屈していよう。誘おう、、、」

「ん、、、」

こくり…

頷くと、足をぶらぶらとさせる。

その手に青磁の薄い杯を持たせた時、伯が鼻を鳴らした。

「いいんじん、、、」

山野草の植わる小道から、傘を差した長身の男が、姿を現した。

「珍しい事もあるものだな、、、」

青い唇を歪めた、蒼装の向かい。

「人らしく、色は変えて、歩いてきた」

身震いすると、その黒髪と眸が変化する。

背に流した朱金のばさらの髪。

彫深い容貌。

そして憂いを帯びた、こんじき金色の双眸。

異形の姿だが、今日は蝉の羽の襲目色で合わせた直衣を、纏っていた。

傘を、汪果に預けた銀仁が腰を下ろすと、伯が左右に首を傾げる。  
「そうではない、、、」

杯を持ってきた琲瑠と、月琴を爪弾いていた汪果が、無言で席を

外した。

「散策にしては、幼き主人の姿が無い事よ、」

「、、、、」

「まあ、まずは一献、、」

眼を伏せた銀仁の手に、杯を持たせると、瓶子を傾けた。

淡く紅色に色づいた酒が、注がれた。

「去年摘んだ山桜桃やまおうもを、汪果が漬けていてな。昼間出される酒は、薬酒ばかりだが、これはまだましな方だ、」

「頂こう」

口に含まと、仄かな酸味が広がった。

その鬱々とした顔を見つめ、

「胃腸の調子を整え、疲労に効くそうだ、」

珍しく効能などを口にした。

しばらく、舌から消え去ろうとする酸味を探していた銀仁は、吐き出すように問うた。

「夢から覚める薬酒は、無いものだろうか、」

帝都の良。

北東に在る陰陽頭天羽充慶おんみよつのあきみつじょうけいが、屋敷。

高い堀に囲まれた重厚な寝殿造りのその屋敷は、雨に煙っていた。門を潜って右正面にまず、池のある広大な庭が広がる。

奥へと伸びる母屋の東には、住み込みの弟子達のための長屋があり、当主が住む北側から渡り廊下で結ばれた西側に、妻子のための住居が設けられていた。

出掛けていた銀仁が戻ったと思えば、

「邪魔をするぞ、」

その背に続いて、もう一人。

「きうう、、」

さらに、もう一人。

「これは、み、都守?!」

出迎えた若衆の異変に気づき、急ぎ現われた侍女長は、流れる白髪の主にも、言葉を失った。

かつて、当主と旧知の仲であつた先代都守と共に、この屋敷を訪れていた耶紫呂蒼装の面影は、無い。

怜悯な闇色のその眼差しに射抜かれれば、身を強張らせ、

「今日は、あと姫の見舞いに罷り越した、」

白い髪を背でゆつたりを結び、青柳の襲目色の直衣を纏つた蒼装が水干姿の連れを従え、銀仁と共に颯爽と歩み去るのを、見送るところしかできず、

「これは、」

あとの寝所に向かう渡り廊下。

鼻腔を突いたその香りに、覚えがあつた。

木瓜、紫蘇、赤箭、鼠麴草、山吹、松藤、白英、杜仲、王瓜根、

熊柳、紫苑、蓮子らを焚いたもの。

蘇生香。

そして聞こえるのは、朗々と響く男の声。

「嗚呼、銀仁」

単衣を纏つた初老の女が、若い侍女に支えられ、佇んでいた。

「今、充慶様が祈禱を始めてくださり、でも、もし、あとが眼を覚まさなかったら」

「落ち着いてくだれ、つつら殿、」

その傍らを、蒼装は通り過ぎた。

縋りつくあとの母を支えたまま、見送った先で、

「み、都守」

蒼装が、閉じられたままの板戸を、勢いよく開け放った。

「今すぐ止められよ。その魂、夢路を永遠に彷徨うぞ、」

紫煙で煙る寝所。

「今、姫の魂魄を繋ぐものは、眠るこの器。無理に起してもして、

その繋がり途切れれば、それこそ一大事」

横たわる娘の傍らに座していた男は、声の主の姿に眼を細めた。

「蒼装、、、」

髭を蓄えた初老の男。

「娘の寝所には、誰も近づけると言いおいたのだが、、銀仁か、  
、、」

「ああ、、、、」

水干の袖が翻り、褥の周りを囲う御簾が跳ね上がる。

「あ、とり」

眠る娘の頭を撫でる、幼い手を見た。

娘と年頃同じくらいの、童。

黒髪に、眸。

勾玉の連珠を首に掛けている。

炯々《けいけい》とした鉛色なまりいろの瞳が、すが眇められた。

「式か。かように幼き神霊を、悪戯にこの地に縛りおって、、、、  
、、、、、、」

呟きつつも、その眼差しが和らぐ。

「そなたも、娘を見舞いに来てくれたのか？」  
「ん」

こくりと頷いた。

童の頭を撫でると、大きな眸が見上げてきた。

「あと、寝てる、の、、？」

それまで強張っていた表情が、すっかり人の親のそれになっていた。

「ああ。だが、心配ない、、、、  
ほう、と小さい溜息。

「充慶殿」

申し訳なさそうに戸口に現われた銀仁の姿に、

「この子を想うのは、儼もそなたも同じ、、、、」

充慶は、寝息をたてるあとりを改めて見つめ、昏々と眠るその頬

を、擦った。

「都守」

「ああ、、、」

「心当たりがあるのだな」

低い声に、

「道すから、銀仁に一通り聞いた、、」

板戸に凭れかかったまま、応えた。

「夢に出たと言う異形の姫。以前、私が預かった姫でな、、」

「背に黒き翼がある者といえば、倭では北の大天狗が眷族」

「そのままその大天狗が末姫よ、、」

腕を組み、雨足が強くなった庭を眺めている。

「あとり姫は、天性の夢見。その異形の姫に同調し、魂と心を、通  
わせたのであろう、、」

「しかし、一つ腑に落ちぬ。異形の者が夢で会った人の子に縋ると  
は、その姫の心労は、いつたい、、」

「神産み」

「なんと、、異形の姫が？」

「不思議は無かるう。異形も人も、たどれば天孫。神の末には違  
い、、」

蒼装が、柱を離れた。

充慶の視線に、華奢な背中が映った。

白い手が、差し出された蒼装の手を、取る。

「充慶殿、これで失礼する。出産には立ち会うつと、大天狗に言い置  
いていたのを思い出した。恙無く産み終えれば、あとり姫も目覚め  
る事だろう、、」

早く行こうとばかりに伯に、手を引かれる蒼装に、

「三日してあとりが戻らねば、儂が力ずくで引き戻すぞ」

充慶が言い捨てた。

廊下に行くその人の青い唇が、どこか愉しげに歪むのを、微かに  
視線の端で捉えると、

「好きにされよ、」

低い、その眩きが聞こえてきたのだった。

「都守」

屋敷の門前につけられた牛車。

琲瑠によつて手向けられた傘の下に、乗り込む二人の姿。

傘も差さずに、走り寄つた銀仁の直衣は、雨に濡れて所々色が変わっていた。

「我も、連れて行つてくれ」

「銀仁様、濡れてしまいますよっ」

慌てて琲瑠が傘を差し向けるのも構わず、

「充慶殿には、都を離れる了承を得た。何かしておらねば、我は、」

苦悩するその顔を、闇色の眸がひっそりと見つめている。

「都守、頼むっ」

そこには、憂いを帯びたいつもの眸は無い。

あるのは、まっすぐな眼差しだけだ。

蒼装は、一瞥を琲瑠に送る。

にこりとして琲瑠が車へ、傘を傾けた。

「化生はとにかく、神霊の類ともなれば燕倪では正直、心許無いこころもとと思つていた所だ、」

「都守、痛み入る」

銀仁が車へ乗り込むと、鬱々とした蒼装の聲が、行き先を告げる。

「天狐の屋敷へ、」

帝都の空模様など、どこ吹く風。

案内に出た女に続いて庭に出れば、そこには古びた屋敷の概観とおおよそかけ離れた空間が、存在していた。

降り注ぐ陽光穏やかで広大な草原には、生まれたばかりの子鹿が遊び、猪の子らは親猪と仲良く草花を食はんでいる。

一際大きく枝を伸ばした椎の梢では、まだ羽毛が生え揃わぬと言  
うのに、熊鷹の子らがこぞって羽ばたきの練習中だ。

その草原の中にぼつりと、阿四屋がある。

遙絃は、長椅子の肘掛に上半身を預け、薄絹の衣を幾重にも重ね  
たのを長く床に這わしていた。

金糸の髪には、桃色の見事な蓮の花簪。

妖艶な色香を含んだ紺碧の双眸が、今日は一段と潤んで見えた。

「珍しい顔ぶれが揃ったものだ、」

翡翠に染められた長い爪。

摘んだのは、七宝を散せた煙管。

丹唇につけて吐き出された煙は、東雲色であった。

「銀仁と、申す」

両の手を組み合わせ、大陸の礼をした銀仁に、ようやくそこで煙  
管を置いた。

「遙絃じゃ。長く、この都で地仙をしておる。虎精よ、都守から話  
は聞いている。まあ、掛けてくれ」

蒼奘は、向かいに座った。

銀仁は、卓を挟んで、二人の間に、腰を下ろした。

伯は、銀仁の肩に攀じ登ると、その肩越しに、正面を睨んでいる。  
視線の先に、茶器を操る胡露ころうがいた。

「天狐、大天狗から、その後何か連絡は無いか？」  
薄く焼かれた茶碗。

その温もりを手で愉しみながら、蒼奘は低く問うた。

「そういえばここ数日、斗々鳥からの使いが絶えていてな、」

胡露が遙絃の前に小箱を置くと、極彩色の玉が覗いた。

遙絃が一粒摘むと、伯へ差し出す。

ちよつと戸惑いつつ、幼い手がその飴を受け取った。

透明に透ける、琥珀色。

すぐにかりかりと音を立てて齧る伯を眺めながら、

「何か兆しがあれば、祇威に参るように言っておいたのだが、」

「音沙汰無しと言うのも、やはり奇妙よの」

遙絃の小さな溜息だ。

「ここ三日。この銀仁が仕える姫が目覚めぬと言うのだ。陰陽頭天羽充慶殿の末姫だ。今月に入って、度々夢で会っていた友の具合が良くないと、言っていたらしい」

「黒髪艶やかな、背に海松色の翼を持つ姫と、」

「ふむ。雫玖菜に間違いあるまい。夢路に留まるその孤独に、姫が同調したのであれば、雫玖菜が夢から覚めれば自然とその姫も目覚めるだろうが、」

「子が見る夢は異界。その時間軸も、空間も、この世とはまるで異なる。魂が憔悴しきる前に、連れ戻さねば」

「うむ。しかし人の子で、そのように深く夢を渡る者がいるとはな、」

その先を続けようとする遙絃の双眸を、闇色の眸が窺めた。

微かに唇を吊り上げた遙絃は、茶を含んでそれを隠す。

「いずれにせよ、雫玖菜姫の一件は大天狗より預かり受けたままだ。夢の通り路から戻らぬ天羽殿の末姫のこともある。こちらから出向くしかあるまい、」

「ああ、そうであったな。翼無き者では、あの地に足を踏み入れる事すらできぬでなあ」

これ見よがしに羽衣を手指に巻きつける遙絃に、

「虎精、鋼雨の足であれば可能であろうが、氷雨に濡れるのがな、」

ぬけぬけと本音。

「ふん、、元々は私が大天狗に取り次いだと、そう言いたいのであらう？ 胡露、手隙な野狐<sup>やこ</sup>を、すぐに集めさせよ。車を出すのだ」  
傍らに控えていた胡露が、

「仰せのままに」

すぐさま、彼方に見える母屋へ向かう。

歩みは変わらぬのに、見る見る遠ざかる背は、程なくして母屋の

中へ消えていった。

それを見届けて伯は、ようやく銀仁から降りた。

「ヨーゲ、、、」

その膝に、手。

「ああ、おいで、、、」

飴が気に入ったのか、遙絃の手に抱かれその膝に入った伯。

「じきに仕度は出来ようよ。それまでは、ゆるりと寛いで行け」

柔らかい髪を撫でながら、天狐は珍しく目尻を下げたのだった。

『私も行きたい所だが、都守もこの地を離れるのであれば、そうも行くまい。その代わりこの車は、自由に使ってくれて構わぬ』

青い鬼火が、車輪に纏わりついている。

無数の狐が宿った車輪は、雲を従えて空を駆けていた。

雨雲の上を行けば、地上の様子とは打って変わって青空が広がり、彼方に白い月が覗いていた。

カリカリ…

奇妙な音がする。

「随分と、気に入ったようだな」

伯を見つめ、銀仁が言った。

「私も最近気づいたのだがな、伯はどうやら甘いものと言うより、透明なものが好きなようなのだ、、、」

「透明なもの？」

「これでいて、見通せぬ沼や霧を、怖がる、、、」

「それは、嗜好とは関係無いのでは？」

片眉を跳ね上げた銀仁に、

「味噌汁は飲まん。濁り酒も嫌う、、、」

隣でおとなしく、飴を齧り続ける伯の肩に、手を置いた。

「そういうものなのか、、、」

銀仁の呟きに、こくりと頷く、伯。

外見こそ、有り触れた童子だが、底知れぬ何かを感じさせる蒼装

の式神。

それなのに、無心に飴玉を齧っている姿などを見れば、少し犬歯が鋭い人の子、そのもの。

「伯は、貴公に仕えて長いのか、、、？」

思ったことをすぐに口に出し、行動してしまう燕倪に対し、銀仁はどうも奥歯にものが挟まった言い方をする傾向がある。

蒼装は、向かいに座る銀仁を一瞥すると、

「うう、、、、」

さすがに齧り疲れたのかぐったりと項垂れる伯を、膝に寝かせた。

「出会ったのは、お前があとりと出会う少し前くらいだ。戯れに大地に縛り、戯れに世話を焼いた、、、、」

「戯れに、、、、」

「ああ。だが、これから先、式神として使役するつもりも無い、、、、」

「

「では、何故？」

うとうとする伯の髪を撫でながら、

「私にも分かん、、、、」

蒼装は自嗤気味に、唇を歪めた。

「む、、、、」

猫のような、鼓膜に甘く纏わりつくような鳴き声が、外でした。

野狐達のざわめきだ。

「あれは、、、、」

弾かれたように、物見から顔を覗かせた銀仁が見たものは、

「雪？いや、氷か？」

天高く聳え、頂を雲で隠した霊山、斗々烏。

異変は、その中腹にあった。

峻険な霊山の中腹から、とたんになだらかに伸びるはずの麓。

そのまま広がる樹海はやがて、ぐるりと霊山を囲むように伸びる切り立った山脈そのもので、外界と遮断されているはずだった。

それが、凍りついていた。

初夏も間近だという、こんな時期に。

「麓の里はこの様子では、、、、」

「、、、、、、」

その圧巻の様に言葉を失う銀仁をそのまま、車内では外の様子など見ずに溜息が漏れた。

「刺激したか、、、、」

忌々しいとばかりに零れたのは、蒼装の呟きであった。

雨が上がり、西の空に掛かった雲が茜色に染まる頃、

「それが、昼頃に湯治に行くと、お出掛けに、、、、」

すぐに屋敷の門前に応対に現われたのは、困ったように眼を細める瑋瑠。

「なんだ。せっかく雨も上がって、良い酒も手に入ったのに、、、、」

濃い眉を顰めた燕倪だったが、すぐに、

「お前は、呑めんのか？」

「舐める程度しか、、、、」

「あ、そ、、、、」

肩を落とす。

当の相手の不在を聞かされても、中々諦めきれない様子。

大振りの瓶子を大事に抱えたまま、

「しかし、なんでまたこんな時に湯治になんぞ。あいつ、暢気過ぎやしないか？」

つい愚痴めいた口調。

「この氣候で、肩の傷が疼くと言っておりましたから、、、、」

「まだ完治していないのか」

「怨敵楨廼堯元の恨み辛みを、咬ませた際にその身に封じていますからね。そうでもしなければ、鬼の中の人を心と呼び覚ます事は出来なかったでしょう」

「なんだと！？あいつ、、、、そんな事、一言も言っていなかったぞ、、、、」

惘然とする燕倪に、

「そういう方ですから、、、、」

琲瑠の苦笑。

「お互い、苦勞するよなあ、、、、」

「はい、、、、あ、いえ」

暮れてゆく空の下、家路を急ぐ人達で賑わう往来に溶け込むそんな穏やかな時間が、流れている。

「、、、、、、、、」

不意に空を見上げた蒼瑒。

「どうかしたのか、都守？」

銀仁の問いに、

「誰かが噂しているような、そんな気がただけだ。先を急ごうか、、、、」

蒼瑒は、長衣の前を掻き合わせた。

幸い車の唐櫃には、遙絃の衣の換えがそのままになっていて、ひとまず防寒の心配は無さそうだ。

雨が上がったのを見計い、様子を見るために氷の上に降り立ってから、早半刻が経っていた。

ぐるりと囲む山脈の頂から、靈山の中腹にかけて張った氷は、鏡面のように平らで澄んだ青を湛えていた。

不思議なもので、その上から眼を凝らせば眼下に広がる樹海と、小さな集落が点々と窺える。

「ここ数日の間に凍ったようだが、こんな大規模に凍りつくなんて事があるのか、、、、」

銀仁のその問いに、蒼瑒は錫杖の柄で軽く氷を突いた。

「元々、姫の身を案じた事が発端だ。この氷は腹にいる仔に従う元素らが、騒ぎ立てる大天狗の眷族らから、主を守らんが為に張った結界のようなもの」

「待ってくれ。その元素が、従うとは？」

氷の底を覗きこんでいた銀仁が、顔を上げる。

「何というのか、その存在に付き従うべく発生した存在」

青い唇から、白い吐息が、細く流れた。

「この世は、想いを描き反映する粒子で満ちている。それは神や、自然や、動物、人を構成している素のようなものだ。また、時として想いそのものとなる」

「漂う元素が、自らそう望み意思を持つと、神霊となるのか？」

「そのようなものだ。普通、他の神に命じられ、または人に乞われ、使役される場合が多いがな」

「この世に在って得る眷族もあれば、生まれる以前より、眷族としての働きをするものもあるのか、」

「ああ。その奔流に大いなる意思があるのなら、それによって個々がどのような働きを担おうが、なんら不思議ではなるまい。まあ私は、今のこの世の有様すべてが、仕組まれたものとは、思いたくないのだがな、」

「神であっても、その奔流を前にしては、万能とは行かぬわけか」

銀仁の呟きに、蒼装は唇を歪めた。

「人の中に在ると、都合良く語ってくれる、とよく思う」

「気苦労が多そうだが、」

錫杖の柄が突くたびに、氷が澄んだ音をわんわんと反響させた。

どこかに下に降りる事ができる窪みや、歪み、脆い箇所を探しているのだが、見つからない。

「しかし都守、この分では氷に捕らわれた者の命は、既に、」

「さて、」

見渡す限り広がる、氷の原。

彼方の山稜に陽が沈むと、宵闇が迫ってきた。

## 第伍幕後

氷筍

（前書き）

変わり果てた里の外れで出会った天狗の若者。靈山斗々烏の真意を確かめるべく、一行は地下洞窟に行くことに、、

死人還りの都守蒼装、業丸を継ぐ武官燕倪、幽身であるがこの世に縛られた伯。それぞれが紡ぐ異国絵巻、第伍幕後編。。。

## 第伍幕後

## 氷筍

橙<sup>だいだい</sup>の炎が揺れていた。

見上げれば、拒むように聳える壁が迫っている。

凍りついた山稜<sup>さんりょう</sup>、その外側を流れる川辺に、車があった。

月の無い宵闇に、白々と浮かぶ川原の石。

茫洋と揺れる焚火の明かりの中、いくつもの影が、跳んだり跳ねたり、忙しい。

野狐<sup>やこ</sup>である。

細身の体軀を捻つては、足音も無く舞い降りる。

その真ん中に、伯<sup>はく</sup>がいた。

袖を翻しては、狐らを追いかけて遊んでいる。

炎に、枝をくべているのは、蒼桒<sup>そうじやう</sup>。

夜気に、濃厚な冷気が漂い始めていた。

「、、、、、、」

蒼桒が、立てかけていた錫杖に手を伸ばし、やめた。

独特な甘い香りが漂って来たのを、逸早く嗅ぎ取ったのかもしれない。

闇の中、赤光放つ双眸が浮かんでいる。

この程度の闇など、見通せぬはずもない獣のものであった。

その口に、啞<sup>お</sup>えているものがある。

肉置き見事な、雌鹿であった。

前方の茂みの先で、焚火の明かりがちらちらと見えた。

獣は、音を立てる事無く獲物を置くと前肢を伸ばすし、ぐぐぐつ、と背を丸めた。

その目は、新たな獲物を捉えている。

グゴアガガアア

ツ

腹腔深くを震わせる、咆哮。

驚いた野狐達が伯に寄り添い、あるいはその体に縋り付いて、固まった。

「ひいいいいッ」

茂みが大きく揺れ、焚火の灯りの下に這い出したのは、漆黒の翼を持つ若者。

その上に、朱金の毛並みの巨虎が覆いかぶさっている。

「銀仁、それくらいにしてやれ、」

「ああ」

巨虎が、ひどく緩慢な動きで若者の上から退くと、そのまま木立へと入っていった。

蒼装は、若者に歩み寄ると、その翼を見つめた。

「あ、、、ああ、、、」

涙を滲ませた天狗の若者に、

「無事、逃れた者もいたのか、」

手を差し伸べた。

「あ、あなたは、、？」

「耶紫呂蒼装。天狐の口利きで、大天狗祇威の末姫の様子を伺いに参ったのだが、、見てのとおり。この有様に、途方に暮れているところだ」

その手を取って、若者が立ち上がる。

そして無遠慮にもしげしげと白い髪のを、見つめた。

「人、ですか、、？」

消え入りそうな声が、問うた。

「死人還りでな。仕事柄、多少、呪術も使う。そなたは？」

「僕は、翠狗すいく」

「では翠狗、大分体が冷えているな。火にあたろう」

衣を一枚出してきて、火の側に座った翠狗に、投げてやる。

「ありがとうございます、」

そそくさと肩に掛けると、火にかざしていた手を擦り合わせた。

「あの、、」

ふと、向かいで狐らに揉みくちやにされたままの、水干姿の童子に気がついた。

「その仔は、あなたの？」

突然の銀仁の咆哮に怯えたせいか、その緊張を隠せず、伯を含めて眼を丸くして、翠狗を凝視している。

「伯と言う。式神とでもしておこう、、」

「ああ、そうでしたか、、」

ほっとしたのか、膝を抱え、頬を預ける。

そこへ、皮を剥いだ鹿肉を持った銀仁が直衣を着崩して現われた。

「虎精の銀仁だ。銀仁、翠狗と言うそうだ」

「脅かして、悪かったな、翠狗」

銀仁が、帯に引つ掛けていた枝を蒼装に手渡す。

ぶつくりと瑞々しい茜色の果粒が、たわわについた木苺の枝であった。

「いえ。僕の方こそ、様子を窺っていたのだし、怪しまれるのは、その、当然で、、」

生肉のいくらかを狐達に与えると、ようやく解放された伯が蒼装の元へ。

膝に入ると、摘んでくれた木苺を、口に運んでもらうのだった。

「他に助かった者はいないのか？」

銀仁が、残りの肉を引き裂いては棒に突き刺し、焚火の回りに挿してゆく。

肉が焼ける香ばしい香りが、辺りに漂い始めた。

「恐らくは、、」

翠狗は頂垂れながら、言葉を濁した。

「恐らく？」

「実は僕、今日ようやく風穴から抜け出してきたんです」

よくよく見れば、薄墨色の衣が所々汚れ、擦り切れ、血で滲んでいる。

「いったい何日経ったのか。真つ暗い中を手探りで、水が流れる方に風が来る方に進んで、さっきようやく外側に辿り着いたんです」  
誰か仲間がいるのでは無いかと、舞い上がった所に、焚火が見えたのだと言った。

「なら、腹が減っているだろう。まずは、腹ごしらえだ」

銀仁が焼けた肉を差し出すと、翠狗は齧りついた。

よほど、腹が減っていたのだろう。

蒼桙は、短刀で肉を削り取り、小さくしながら伯の口へ入れてやる。

食べなれた魚鳥とは違う、野性の鹿。

「うう、、、」

「良く噛んでから飲み込め、、」

「んーっ」

けれど、口の中の肉は、中々思うようには噛み切れないようだ。

銀仁は、そのまま生肉の塊を齧っている。

空腹を満たした野狐達が寄り添いあつて眠る頃、一息ついた翠狗は、話し始めた。

「今日が二十八日なら、あれは、二十三日の早朝の事です」

霊山斗々烏の山裾には、雪解け水が湧き出す泉が幾つも存在する。翠狗は、泉の守として親元を離れ、霊山の山裾で一人暮らしていた。

それは里の習いでもあり、十五になった男は皆、持ち回りで水源を守るのだ。

いつものように陽が上る時分には起きて、泉に落ちた枯葉を掻き出していると、凍てつくような冷風が風下から吹き上がって来た。眼を凝らせば、彼方の木々が白々と凍ってゆくではないか。

とつさに風穴に逃げ込み、渦巻く風の音が過ぎ去るのを待っていたが、程なくして静まり返った時には、凍てつく氷の壁が外界への出口を阻んでいた。

出口を探して暗闇を彷徨い、樹海の地下に張り巡らされた風穴、洞窟を辿り、ようやく出られたのが、まさしく今日であったと言う。「皆、大丈夫なのでしょいか、」

涙を滲ませ、悲痛な溜息をつくその若者。

「翠狗。そなたが出てきたその風穴に、案内してくれないか？」

はっとした翠狗と、ひっそりと沈んだままの銀仁の双眸。

「地に潜つても、雫玖菜姫の屋敷へ行かねばなるまいよ」

「ああ、」

確固たる覚悟を垣間見て、

「姫様を、皆を、助けられるのですか！？」

翠狗は叫んでいた。

淡々とした低い声音が、それに応じる。

「確実ではない。手を尽くし、足掻いてみるだけだ、」

闇色の双眸が、そそり立つ山肌を見上げていた。

「出立は明朝。それまで休んでおけよ、銀仁」

月の無い夜空に、星が、流れている。

夜が今だ、深い。

蒼装が休む車の下で丸くなっていた銀仁は、炎の側で衣を何枚も纏って休む翠狗を見つめた。

静寂の中で彼の寝息と、群になって眠る野狐達の息遣い、小川のせせらぎが、音と言う音の全てであった。

あたりは、どこに居るのだろうか、

時間の流れが、今日程緩やかで苛立つのも、そうはないと思われた。

ひよっとすれば、帝都の屋敷で目覚めているかもしれない。

そうであれば、どれ程心安いか、

だが、あのあとの事。

この凍りついた大地が、案じている姫の身の異変そのままを語っている。

あとの気性からして一人、苦しむ姫を残して、引き下がるはずはない。

そう思い当たって、少し頬が、緩んだ。

あとらしいか、

それが、銀仁の知るあとりであり、銀仁がここに来た理由でもあった。

高揚していた気が落ち少し着くと、待っていたかのように眠気がやってきた。

前肢に、ようやく巨虎は顎を乗せる。

眼を閉じようとしたところで、

「む、む、」

頭上から降ってきた者が、あった。

万一の時にと、空け放たれたままの車の扉から、伯が転がり落ちたのだ。

「ふあふ、む、」

ふかふかとした毛並みが気に入ったのか、そのまま首を抱いて、瞼を閉じてしまう。

銀仁は、冷えないように伯の体を抱え込むと、その温もりを感じながらまどろんでいった。

翌朝。

一行は、黒々とした口を開ける洞窟の前にいた。

光など届かぬ闇と冷気が、満ちていた。

灯りは、蒼装が手にした提灯、一つ。

青白い炎が揺れているのは、野狐が一匹宿っているからだ。

残りの野狐は、車と残す事にした。

「勘弁してくださいよおッ！また、穴蔵に逆戻りだなんてえっ」

涙目の翠狗を、喉鳴りが諫めた。

背に伯を乗せた巨虎の姿のままの、銀仁だ。

しぶしぶといった様子で、先に洞窟に入って行くと、銀仁、蒼装

が続いた。

洞窟内に残っている翠狗の臭いを辿れば、少なくとも斗々鳥の麓の風穴までは行ける。

地下に這うように伸びている風穴、洞窟。

もしかすれば、里の真下まで行けるかもしれない。

どこかで水が流れるが音がしている。

漆黒の闇の中で、時間の感覚が麻痺する中、

「ここからしばらく下りですんで、頭上に気をつけてくださいね」

翠狗の声音がわんわんと響いた。

巨虎が、身を縮めて縦穴を降りてゆく。

「あうっ」

その途中、伯が転げ落ちた。

「す、すまぬ」

伯が背にいたのだが、その体の分は考えてなかったらしい。

打った額を押さえながら、伯が慥然とした面持ちで銀仁の尾を掴んだ。

銀仁も、尾をしつかりと伯の手首に巻きつける。

その後を、青い炎に足元を照らされた蒼装が続く。

しかしその眼差し。

「、、、、、、」

どうやら先に行く翠狗の背中を、追っている、、

どれ程歩いただろう。

狭く勾配こうはい厳しい道の先。

広い空間に出たところで、休息を取ることにした。

ピシヨ・・・ンン・・・ピシヨ・・・ンンン

水が、滴る音が響いている。

その音に釣られ、脇道を覗き込んだ伯は、

「ふおおお」

眼を丸くした。

蒼装が灯りを近づけると、その先に、透明でこんもりとした氷の柱の群が浮かび上がった。

「ああ、氷筍ひょうじゅんですよ」

「氷筍、、、」

「岩盤から滲み出した水が、長い時間かけて少しずつ凍ったものです。もちろん、不純物なんて滲み出す過程ですっかり濾過されてますんで、って、、、嗚呼、、、」

言った時には既に手近な氷筍に、伯が噛み付いていた。

「かうう、、、」

固かったのだろう。

蒼装の元に戻って、袖を引いた。

袖から、小箱を取り出すと、飴を二つ三つ摘んで、伯へ。

飴を齧る音が、響く。

「あの、耶紫呂様、、、」

「なんだ、、、？」

腰を下ろした蒼装の向かい。

「道中、足掻く方法は、見つかりましたか？」

青白い灯りに、翠狗の不安そうな顔が浮かんた。

「無い、、、」

「ああ、やっぱり、、、」

頂垂れた翠狗に、

「水の流れを辿れば、斗々鳥には近づける。少なくとも、このまま進めば風穴の入り口までは行けるだろう。だが、その先にある氷の壁をなんとかせぬ事には、どうにもならぬ、、、」

鬱々とした声音が、響いた。

「氷の壁。都守、先日貴公は、眷族が主を守るために張った結界のようなものと言ったが、、、」

「ああ。言った、、、」

「我らは少なくとも、その主を傷つけに来たのではない。それを、その眷族に伝える事は出来ないのだろうか？」

青い唇が、僅かに吊りあがった。

「無理であろうな、、、」

首に巻いた布を、巻き直しながら、

「姫の身を案じ、医者や術者に診せたら、屋敷が凍った。産まれるのを待つが早い、その前に里も凍った。眷族に、耳は無い、、、」

「何か、方法があれば、、、」

闇色の双眸が、向かいで氷筍の欠片を齧り、喉を潤す若者を見つめた。

「方法なら、翠狗が知っている、、、」

「な、、、そんな訳ないでしょう?!」

はっとした、翠狗。

蒼装は、人の悪い笑みを浮かべたまま、だ。

「まるで、この洞窟を知り尽くしたかのように、闇の中でも歩みに迷いが無い、、、」

「そう言えば、辿っていた臭いも、道を外しているような感じでは無いぞ」

銀仁はそこ声音に背を丸め、臨戦態勢だ。

「銀仁様まで、僕を?!」

翠狗が、縋るような顔をした。

「下手な芝居はやめよ。その体温、さすがに天狗と言えども、有り得まいよ、、、」

昨夜、手を取った際の感触は、氷のようだったのだ。

「都守、こやつは、、、」

命じられればすぐにでも飛び掛かるつもりの銀仁に、蒼装の低い声音が告げた。

「どうやら、刺激したのは、この男らしい、、、」

翠狗は、頭を掻いた。

そして、観念したかのように腰を下ろすと、

「どうしてばれちゃったんだろう。年甲斐も無く、若作りし過ぎた

「からかな？」

屈託無い笑顔を見せた。

その姿、燐光を放つと、冷気が吹き抜けた。

白く透けた巨躯が、長く長く暗闇へ伸びていった。

目などは無い。

あえて言えば、それは白蛇に良く似た姿をしていた。

「ぬっ」

その鼻先に、巨虎が舞い降りたのは、背に蒼装と伯を庇ったため。毛を逆立てる銀仁の背に触れて、蒼装が前に立った。

「教えてくれ。姫の身に、何が起きたのかを、」

「やはり、ただの人ではないね。耶紫呂様、」

「話せば長くなる。今は、根を張る氷を溶かさねばなるまいよ」

「その前にその虎、鎮めてくれないかな？」

怯えたふりか、体を縮込ませた。

巨躯が触れたのか、彼方で洞穴の一部が崩れた轟音がした。

それに、更に気を悪くした巨虎が鼻に皺を寄せ、牙を剥いた。

「銀仁、」

「しかし、都守。この者のせいであとりは、」

「それは結果だ。逸るでない」

伯が、背に攀じ登る。

「いんじん、」

その太い首に腕を回し、頬を摺り寄せた。

その仕草、温もり。

あとりを、思い起こさせた。

「、、、、」

銀仁が、観念したかのように地に腹をつけた。

「聞かせてくれ」

蒼装が、促す。

翠狗の巨体が、再び若者の姿を取った。

「これでも多忙な身だね。冷気寒気を引き連れて、空を行くのが僕

の神命。ようやく一息ついたところで、雫玖菜に会いに寄ったのよ」どこか楽観的な溜息に、伏せたままの巨虎が片目で睨んだ。

「驚いたよ。まさか、僕の仔を宿しているなんてね。思えば、責任も無くは無い。一先ず取り上げとやらはしてやらねばと、凍りついた屋敷に向かえば、この有様。赤子の眷族に追われて、逃げ込んだのがこの穴だ。穴蔵を彷徨ったのは、本当だよ」

「翠狗よ。我らに接触を持ったからには、何か策があるのだろう」糸のように細まった眸。

翠狗は、薄い唇を吊り上げた。

「本当は、君達が気づいたって事にして欲しかったんだけど」そう前置きすると、

「その氷筍のもっと大きいものが、この先に在る。それが、里を包む氷の本質だ」

「そこが、屋敷の真下と言う訳か、、」

「大地を穿ち、吸い上げた斗々烏の雪解け水。水脈が、応えたのだろう。仔は、斗々烏の眷族でもあるからな」

額の辺りを揉みだした。

「随分と、嫌われたものだな、、」

「天狗族は、斗々烏の民。ここの本質が、それを望むのも無理は無いさ」

「新たな地仙として迎えるか、、」

「そうしたいようだが、こちらにも都合がある。どのような神命を帯びているかは知れぬが、白帝の拝謁賜らねば、名乗る事は叶わぬ。そちらはどうであつた？」

伯が、蒼装を覗き込んだ。

「、、、、」

その視線から逃げるように、顔を背ける様を、上目使いで銀仁が眺めていた。

「そういうものなのか？」

ぽつりと呟けば、

「まあ、眷族として生まれたからには、筋を通した方が、神命を遂行し易い、、、」

闇色の双眸が、翠狗を睨めた。

どこ吹くといった風情で、その人は背を向けた。

歩き出すその背に続いてしばらく、一行は巨大な空洞に出た。

その先に、青白くそそり立つのは、

「あれだよ」

巨大な氷の柱と、氷の天蓋。

「これが、根。あ、近づかないで」

手で制すと、

「さすがに小康状態だけど、上を見ただろ？」

「被害を拡大させたのは、そなただろうが、、、」

「ははは、、、」

銀仁の皮肉に翠狗は、からからと笑った。

凍てつく静謐の中、

キン…キイン…

金属を互いに触れ合わせたかのような澄んだ音が、聞こえる。

水を吸い上げ、それが凍っているのだ。

しばらく、柱を遠巻きに見上げていた蒼装。

「これは、生半な炎では、融かせないよ」

懷手で傍らに立った翠狗が言った。

「冥府の業火でなら可能だが、、、」

「冥府の縁者だったのかい？」

「ああ。だが、それは焼き尽くすためのものだ。加減が、出来ぬでな」

伯も、ぼんやりとその柱を眺めていたが、

「伯、待てっ」

「ひにゃっ」

襟を銀仁に噛まれ、吊り上げられた。

いつかの怪我を、思い出したのかもしれない。

「雫玖菜姫が、神産みをするのは、いつだ？」

「出てもいい頃なのだけどね。仔が、それを望まぬ内は、腹の中だ、  
、、」

「いずれにしても、氷を融かし、仔を諭さねばなるまい」

「それにはやはり、眷族としてこうして応じている斗々烏の理解が必要か、、、」

相容れられぬ者同士の悲しさか。

「龍門であるからには、地脈も通っておろう」

龍門。

空を漂う、万物を成す素でもあり源。

龍脈。

それが枝分かれし、大地に根を張るようにして水脈、地脈と繋がる点を、龍門とする。

靈山斗々烏は、その一つである。

「一つ、それに賭けるしかあるまい」

『僕は、この先は遠慮させてもらうよ。この熱気。さすがに、近づく事が出来ないから』

巨虎と蒼装は、比較的緩やかな岩肌を、下っていた。

翠狗が案内した風穴の一つ。

しかし、そこに立ち込める大気は、異様。

所々噴出しているのは、超高温の蒸気。

鼻を付く硫黄の臭いに、銀仁は気が遠くなりながらも歩を進め、蒼装は、額に浮かんだ汗を、袖に吸わせた。

ひゅうひゅうと喉を鳴らすのは、巨虎の上でしっかり伯に抱きしめられた野狐。

青白く纏う炎が、唯一の光源であった。

その光が、阻まれた。

「あれか、、、」

靄の向こうに、太い注連縄を結えた見上げる程に大きく丸い岩が、

鎮座していた。

「地脈の一端。岩座<sup>いわくら</sup>として祀っているようだな、」

「場所を把握していたといい、翠狗は始めからこの岩座を解放するつもりだったのか」

「おそろくな。だが、斗々烏にこれ以上煙たがられては、この地に寒気をもたらすやつの事、都合が悪いのだらう。上手く事が運べは、天狗との絡みもあるしな、」

蒼奘が錫杖を鳴らし、岩座に近づいた。

「気が引けるがやはり、余所者の我らが適任か、」

「しかし、」

銀仁が見上げた先に、逃げ場は無い。

黒々とした天井が、在るだけだ。

「我は構わぬが、」

前置きし、銀仁は、

「賭けるものが多すぎやしないか、都守？」

背に乗ったままの伯、その腕に捕らえられ怯える野狐、そして蒼奘を見つめた。

「何か、助かる策があるのなら、別だが、」

「無い」

「悠長な、」

さすがの銀仁も、溜息だ。

「今からでも、戻ってくれて構わぬが、」

「見届ける。それが、雫玖菜姫を負った私の役目だ」

錫杖の先で注連縄を引っ掛けるようにして引くと、腐蝕が進んでいたそれは、いとも容易く足元に蟠った。

伯が、暴れる野狐を擦じ込んだ。

「あの日、我に生きよと説いた貴公が、捨て身とは、」

銀仁が、笑って言った。

禍々しいまでに鋭い漆黒の鉤爪が、岩盤にめり込んでいた。  
「そうでもないさ、」

蒼装が、伯を抱き上げる。

青い唇に、刷かれたままの笑み。

「ならば、その笑みに賭けようか、」

朱金の体毛が逆立つと、金色の目が、赤々と染まってゆく。

一つ、大きく咆哮するとその身が、岩座に向かって突進。

振りかざした前肢によって亀裂が奔り、その肩でもって碎かれる。

飛び散る石飛礫。

崩れる天井。

そして、内側から轟音と共に亀裂を押し上げたのは、灼熱の蒸気であり、真緋の溶岩であった。

あとり、

「あ、」

声がする。

闇の中、聞き覚えがある、声がする。

「あとり、？」

雫玖菜の声。

あとり、

また、呼ばれた。

「誰じゃ、」

確かに聞き覚えがあるのに、思い出せない。

この空間では、問うことしか、できない。

「わらわの名を、呼ぶのは、誰じゃ？」

「何も、聞こえないけど、」

「この声は、誰？」

父であって、母であって、兄弟のもののように、その誰でもない。

声が、する。

わんわんと、耳腔に蟠る。

「誰かが、ずっと、呼んでいた？」

「あとり、大丈夫？」

「誰、、、だろう。ここには、居ない。ここじゃない、別の、、、」  
首を傾げ、声を探すが、わんわんとした余韻だけが、残っている  
だけだった。

ここに来て初めて、もどかしくなった。

「ここは、、、」

あとり

声の主。

その、名。

「そうか、分かった、、、」

「あとり？」

あとりは、雫玖菜の手を握った。

「どうして、気づかなかったんだろう。雫玖菜っ、ここは、夢だ」

「ゆめ、、、」

あとりが、微笑んだ。

「そうだ、そうだ。わらわは、良く夢を視る。それは、そなたも夢  
の中にあるからなのだ」

「夢、、、わたしは、眠って、、、？でも、どうやって覚めるの？」

「匂いが、するはずだ。何でも良い。土の匂い、雨の匂い、香でも  
いい」

雫玖菜は、それまで意識していなかったのだが、鼻から息を吸う。  
肺腑に深く、

「あ、、、冷た、い？」

空気が、肺を広げた。

雫玖菜は、胸を押さえた。

もう一度。

「なんだろう、これは、、、木の香り、、、？」

「体は、在る、、、」

「あ、、、」

何かが、小さく欠伸した。

胸を押さえていた手を、雫玖菜はそこに当てた。

下腹部から、布地を通して光が漏れている。

「あたたかい、、、」

そつと擦りながら、眼を細めた。

その存在を意識すると、安堵のような幸福感が、全身を包み込んだ。

記憶が、奔流となって押し寄せる。

「あ、、、嗚呼、、、」

ぼろぼろと零れた、涙。

涙の意味が、そこで知れた。

「ずっと一緒だったのに、ごめんね、、、」

その存在を確信した時、不安で不安でどうしようもなくなって、訪れぬあの人を恨めしくも思った。

「だから、わたしはここに閉じこもった、、、」

手の下で、光が、揺れる。

それを望み、仔は応えた。

「あなたも不安だったのね、、、」

穏やかな、光であった。

「待っていてくれて、ありがとう、、、」

それまで、沈んでいたかのように安定していた体が、浮かんた。意識が、戻ろうとしていた。

「あとリ」

体が、吸い上げられるように舞い上がる。

「ありがとうっ」

雫玖菜の腕が、強くあとりを抱きしめた。

「雫玖菜」

あとりが、強く手を握り返す。

「あとリ。今度会ったら、あとりに空を見せてあげるっ」  
「うんっ」

伸ばされた、腕。

繋がれた、手。

指先が、離れる。

雫玖菜の体が、靄の中へ掻き消えてしまった後も、あとはしばらくその先を見つめていた。

やがて、一息吐くと、眼を閉じた。

「父上、母上、銀仁、、、今、帰るから、、、」

その日、霊山斗々鳥の上空には、靄が立ち込め、一日中晴れる事は無かった。

翌日、凍てついた大気は陽気に掻き消え、一斉に芽吹いた木々の新緑は眩しく、遅い春に目覚めた動物達は、我先にとその恵を食んだ。

目覚めたのは、動物だけではない。

氷に吞まれた天狗族達は身に降りかかった異変を知り、そしてそれが過ぎ去った事実に沸いた。

大天狗と長老らは、雫玖菜の身に起きた事実の動転しつつも、霊山斗々鳥の示した神威を真摯に受け止め、眷族の理解に勤め、奔走する事となった。

霊山斗々鳥の麓にある、軒廂を長くとった神明造りの社殿。

四角に建てられたその中央には、底知れぬ闇が嵌め込まれていた。屋根は無く、空が覗く。

そこから見上げる空は、底と同様、深い闇が続いていた。

その間に浮かんでいる者が、居る。

白い水干が、靡いていた。

こぼ…こぼ…

可憐な唇から、空気の球が舞い上がった。

伯である。

まるで水中の中にいるかのような錯覚さえ、覚えるに違いない。しかし、一行は風穴で灼熱の溶岩流に吞まれたはず、、、

「地脈、水脈、龍脈、その線が交わつての点、龍門。いわばここは、神の道。浄域と言つても過言ではない」

低い声が、鬱々と告げた。

中央への闇へと続く階段に、杯を手にした男が座っていた。

臍脂に染められた羽二重の着流しに、銀系の髪が流れている。

「その浄域で、夢見心地じゃないか。あまり良い環境で、過ごさせていないと見た」

視線の先に、

「はあ、、、ん、、、」

とろりと瞳を潤ませ、短く呼吸を繰り返す、伯の姿。

「中々に、忙しくてな、、、」

「それで、手っ取り早く、ここを貸せと迫ったのかい」

懷手で現われたのは、呆れたような声音の主。

翠狗であつた。

相変わらず、天狗の若者の姿をしている。

「挨拶回りは、終えたのか？」

「まあ、、、」

「男前が、上がったな、、、」

その手に杯を持たせ、酒を注いでやるのが、蒼装。

「当代大天狗は、気性が荒くていかんよ」

一息に飲み干した翠狗は、左頬を擦りながら肩を竦めて見せた。

「仔は、どうした？」

「母子共々、もう少しそのままでもいいそうさ。取り上げは、いつ

になる事やら、、、」

「そうか、、、」

「すっかり、萱の外さ」

霊山斗々烏は地脈でもつて、仔に従つた水脈を宥め、里を氷の結界から解放した。

地脈が仔に従い、新たな地仙として迎えるつもりであつたのなら、天狗族は炎に吞まれていたのかもしれない。

「まあ、これで晴れて、互いに忍ぶ仲でもなくなったのだがね、」

「そうか、」

「そういえば、虎精の姿が見えないようだけれど？」

「先に都へ戻った。その主、雫玖菜姫と共に夢路にいた、人の姫だ」  
「まったく僕ときたら、随分と世話を、掛けてしまったんだね、」

反省しているとは思えぬ、口調であった。

「いつまで、その姿でいるのだ？」

「似合わないかい？ 気に入ってるんだけどなあ」

「ああ。どちらかと言うと、腹立たしい、」

苦笑しつつ、腕の辺りを擦る。

「正直、斗々烏が手加減してくれたからいいようなものの、当分は、  
神体には戻れぬ。次の神命までもう少しあることだし、それまでこの里で養生するさ」

溶岩流に吞まれる寸前、一行を呑み込んだのは、白蛇の口であった。

翠狗が身を挺して、地上へと運んだのだった。

「つまらぬ意地で、未来永劫、冥府で世話をしてもらえなくなるよりは、ましだろ？」

流し目の先で、男は、無言で杯を口に運んだ。

空になった蒼装の杯に、翠狗は、瓶子を傾けた。

「白帝には、どう説明するつもりだ、」？」

闇色の眼差しの先で、

「ふあああ、」

青紫の輝きが、揺れていた。

霊紫。

それがゆらゆらと舞い上がるのを眺めながら、

「何とか、言いくるめるさ、」

どこか晴れ晴れとした、翠狗の顔が、そこにあった。



## 第伍幕後

氷筍

（後書き）

ぼんやりとテレビを見ていて、氷筍の特集をやっていた。すぐに、それをネタにしてみた。案の定、そんなものも、言葉も、知らなかったんだけどね。

## 第陸幕前

### 探花

#### （前書き）

宮中で倒れた蒼装の腕に浮かぶ、痣。何も告げずに異界への入り口といわれる墨依湿原へと姿を消したその人を、燕倪と伯が追うのだが、

死人還りの都守蒼装、業丸を継ぐ武官燕倪、幽身であるがこの世に縛られた伯。それぞれが紡ぐ異国絵巻、第陸幕前編。。。

## 第陸幕前

### 探花

「あ」

少し早い昼餉の膳を提げていた汪果は、おつか阿四屋あずまやへ向かう軒下に出たところで足を止めた。

爪先にあたる微かな感触に視線を落とせば、金糸の装丁鮮やかな装飾が施された絵巻物が、長く伸びている。

岩絵具でもって伸びやかに描かれているのは、異国の獣の姿。

峻険な岩肌を登るのは、巨大な巻角を持つ鹿の群。

それを狙うのは、長く太い尾が特徴的な、白地に黒い斑点も優美な雪豹であった。

その息遣いまでも聞こえてきそうな、厳しい大自然の営みを描いたかと思えば、樹海奥深くで眠る虎の親子の姿や、花咲く野にて、その年に生まれた子らの戯れを眺めるつがいの羊の微笑ましさよ。

大陸に渡った名も無い絵師が、その生涯を費やしたと言われる絵巻であった。

「また書庫から鳥獸封筆絵巻を出して、そのままに。主様がいないと、この有様なことから、」

一先ず、膳を置いて膝にて巻き始めれば、ひたひたと音がする。

「あれ、」

その視線の先。

軒下を、ぎこちなく歩いているものがある。

一抱え程のその体は、透けていた。

よろよると頼りなげに体を震わせ、床の上でわたかま蟠ると、  
「いの、しし？」

首を傾げた汪果の視線の先で、

にああ…

水へ戻る寸前に、小さく鳴いたのだった。

同日、その少し前に、遡る。

長雨も止み、久しぶりに晴れた日の事であった。

池が、ある。

ふつくらとした大振りの蓮の蕾が、その葉に露を結んだまま、穏やかな風に揺れている。

湿気で肌を不快にべたつかせる陽気なのだが、水の上を渡る風は、涼しかった。

母屋の中庭にある、この小池。

ここから水が湧き、母屋を抱くように広がる庭の大池へと流れ込んでいる。

池へ降りれるようにと石段が組まれているのだが、その石段の上にしやがみ込んでいる者がいる。

「む、む、」

両の手首を水に浸けた伯と、

「袖が濡れますよ、若君」

その袖を後ろからたくし上げるのは、琲瑠。

琲瑠の心配を他所に、伯は手で水を掬うと、石段の上にて手を開いた。

とろとろと毀れる水が、震えながら纏まると、五つの突起を持つ塊になった。

「お上手ですね、若君」

しかし、すぐにそれは水へと戻り、石段に水の滲みをつけた。

「、、、、」

項垂れる、伯。

「初めてにしては、上出来だと思えますよ」

穏やかに微笑む琲瑠の声。

しかし、

「あ」

あっちに行けとばかりに、押し出された。

渋々、欄干に手をかけて石段を上がり軒庇の下に立つと、華奢な

その背中を見つめる。

袖が濡れ、裾が水を吸うのもお構いなし。

水から取り出す、新しい命。

透明な、水を媒体にした式神。

主の不在は度々あったが、こんな事は初めてだ

欄干に腕を乗せ、その上に顎を乗せる。

足元をよろよろと這い出していく、式神もどきを尻目に、

その器に封じられる事が、もどかしくなられたのかな？ 嗚呼、

そうならそうと、わたしにお命じくださればいいのに、、

琲溜の切ない、溜息だ。

大内裏。

平素その男が訪れると武官、文官、公達もまるで腫れ物を扱うかのように、道を空ける。

おまけに物珍しさか、遠巻きに眺め見る者まで出る始末。

「しかし、大した事なかったなあ、、」

今日は、その傍らに一人の武官の姿があった。

騒ぎに、執務を抜け出して合流した燕倪<sup>えんげい</sup>である。

帝に呼び出され、向かった先は、後宮。

そこに住む女御達が、夜更けに白い影が奔るのを見たと怯えるのだと言う。

実際にその場に立ってみても異変は感じられず、ただ、植木の根元が掘り起こされている。

そこで手隙な衛士<sup>えし</sup>に命じ、床下に潜らせる事にした。

袖を捲くり、真っ先に潜ろうとする左少将備堂燕倪。

衛士らの手前、さすがに手で制したのが都守耶紫呂蒼装、その人であった。

若い衛士らが潜ってしばらく、床下から声が上がった。

どこから紛れ込んだのか、ハクビシンが住み着いているではないか。

野に放つよう命じると、取り急ぎ報告を済ますために、踵を返したところであつた。

「大方、いずこかの女御が、慰めに連れてきたんだらうよ。とにかく、呪詛や物の怪の類で無くて、良かった」

「、、、、」

「？」

見れば俯くその顔、長く白い髪に隠れて表情が見えない。

「おい、蒼装。聞いているのか？」

微かに開いた青い唇から、荒い吐息。

「、、、、」

燕倪は、その細い顎先から汗が滴り落ちるのを、見た。

「お、おいつ、、、そ、蒼装　ッ」

傾ぐ、体。

どつと、床に倒れ込む蒼装を、すんでのところで燕倪が支えた。

その拍子。

仰け反った貌は、いつにもまして蒼白であつた。

だらりと、投げ出され伸びた、腕。

その左腕に、視線が吸い寄せられた。

「！？」

袖から現われた、腕から先。

「しょ、少将殿っ、どうなされましたか？！」

咄嗟にその腕を隠すと、慌てふためく女官らに笑顔を向け、

「何、いつもの事です。この陽射しに、やられたんでしょう。少し

休めば、良くなります」

その長身を、軽々と肩に担ぎ上げたのだつた。

「清親、すまん、、、」

騒ぎに逸早く気づき、通りがかったのは、あまへきよちか 天部清親。

内裏に隣接された、当直の者が仮眠を取るための一室を、空けてくれた。

「気にするな。しかし、お前が付いていて幸いだつたな、」  
差込む、初夏を思わせる陽射し。

それを几帳で遮り、寝かせた蒼装の傍らに二人。  
扇子で風を送る燕倪と、布で汗を吸い取る清親。

「他の者だつたら、余計な動揺を宮中にもたらしていたらろう」

「そうかもしれないな、」

燕倪は、蒼装の左腕を思い出していた。

「いつにも増して早々に、報告を済ますつもりだつたって事は、恐らく、この事態も想定していたのかもしれない」

「そういえばこいつ、季節の変わり目には必ず、体を壊していたな、」

清親の切れ長の眼差しが、昔を懐かしむのか穏やかな色を宿す。

「ああ、そうだったなあ。鳳祥院の屋敷の庭先でメジロを捕まえては、見舞いに持って行つた」

「我らは小鳥を捕るのが、得意だつた」

「鳳祥院と蒼装は、てんでだめだつたよな」

養生するその慰めにと、鳥とりもち繻をつけた長竿を振るつた幼い頃が、今は少し懐かしい。

「そのうち、眼を覚ましてくればいいが、」

「ああ、」

二人が黙つた時、几帳の向こうから人影が伸びた。

「中將殿、陰陽頭より遣わされた銀仁と申す。都守が倒れたと伺つたのだが、」

「おう、銀仁。こつちだ」

几帳の脇から、燕倪が顔を覗かせた。

「失礼する、」

現われたのは、白袍を纏つた長身瘦躯の男。

人の色彩を纏つた銀仁だ。

「清親、大陸からの渡来人で、陰陽頭のところに世話になっている銀仁だ」

「天部清親だ」

「弓をよくしてな。最近じゃ俺の狩りに、付き合わせている」

快活な笑顔を銀仁に向けるものだから、

「そうか。燕倪も都守も、皆、私の幼馴染でな。清親と呼んでくれ、銀仁」

つい清親も素性を疑わず、信じてしまったようだ。

「む、」

正午を知らせる鐘が、帝都中の寺で、鳴り響いている。

「すまぬが私は、今日中に決めねばならぬものがあってな。後宮での一件は、私から帝に、報告奉る」

「助かるよ。後は任せておけ」

「ああ。何かあれば、言ってくれ」

清親の足音が通り過ぎていくのを見計らって、

「いったい、何が起きたのだ？一大事とばかりに、衛士の一人が、充慶殿が元に飛んできたぞ」

銀仁が、問うた。

「まずいよな。完璧に、失態だもんな。都守が宮中でぶっ倒れるなんて、」

燕倪の溜息が、応じた。

「さつさと目を覚まして、いつもの不遜極まりない態度で、御所から出でくれればいいんだが、」

燕倪は、薄手の掛け布を捲った。

伸ばされた左腕。

長い袖に隠れた腕を、晒す。

「?!」

銀仁が、はっとして燕倪を見つめた。

黒く枝分かれた痣が、白い肌に禍々しく伸びている。

燕倪は、無言で腕を隠すと、掛け布を戻した。

「中将は、」

「いや。倒れた拍子に垣間見えて、咄嗟に隠した。俺が気づいただ

けだ」

どうせなら気のせいであってほしかったのだが、改めて見ても、黒い蛇のような痣はそのまま腕に巻きついていていた。

「充慶殿を、呼んでこよう、」

銀仁の低い声音に、

「だが、それをきつとこいつは良しとしないと思うが、」

「充慶殿は、都守に借りがある。懸念する事態には、ならんさ」

「、、、そう、だよな」

燕倪が、頷いた時だった。

「、、、、」

その上半身が、起き上がる。

「蒼装?!」

額の辺りを押さえたまま、

「耳元で、喚くな、」

鬱々とした、いつもの口調。

「大丈夫なのか、都守?」

「銀仁か、、、ここは、御所、」

「ああ。後宮でぶっ倒れたから、俺と清親が、ここに運んだんだ」

「そうか、、、どれくらい経った?」

「半刻程だ」

「半刻、、、か」

長い髪を掻きあげ、一息をつく、

「おい。まだ休んでいた方が、」

「ああ、屋敷で休む、」

緩んでいた肩紐を結び直して立ち上がる。

「清親が、お前に代わって、仔細を報告してくれたはずだが、」

「そうか、、、好都合だ、」

「お前、その言い方は、、、おいつ」

そのまま廊下に出ると、痣について問う間もなく、足早に去って

しまった。

不遜な態度を望んだが、いざその様子を目の当たりにすると、少し苛立ちさえ覚える燕倪であった。

「気を悪くしないでくれ、銀仁。あいつは、いつもあんな調子なんだ、、」

「ああ、気にはしていない。だが、都守のあの痣、、」

「そうだなあ、とりあえず、充慶殿には伏せておいてくれないか？  
今晚、俺が聞いてみるよ」

いつにも増して、その伶俐すぎる態度に心を乱されている自分がいるのを痛感しつつ、溜息交じりに頼めば、

「分かった。何かあれば、力になろう」

虎精とは言え、話の分かるこの存在に、少し救われた気がしたのだった。

月の決まった日に、御所に献上する季節の花々を育てる、花守の屋敷。

永寿宮。

門を叩いた若者は、水干姿の少年に案内され、広大な敷地の一画へ。

青々とした苗木が、整然と植えられたその新緑の中に、蹲っている者がいる。

「老爺ろういえ」

額の汗を拭って顔を上げたのは、袖無しの灰鼠の着物を纏い、帯の替わりに麻縄を結った腰の曲がった枯れ木のような、翁。

よく陽に焼けた褐色の肌に、榛色の細い眸。

癖の強い長い白髪を、柳の若い枝でもって無造作に束ねている。

「ああ、、」

「どうぞお構いなく、暮云殿ムゲン。我儘を言ったのは、当方。いつまででも、待ちましよう、、」

「そうか。今、菊の鉢上げの最中で、手が離せぬ。もうすぐ終るか

ら、少し待っていてくれ。おい、茶を、淹れてやれ」

「はい」

白髪、白髭の老人とは対照的に、色の白い少年が若者を母屋の南側へ。

そこには、帯状に伸びる彩の絨毯。

花菖蒲、金糸梅、姫百合、時計草、木槿、夾竹桃、萩、梔子、撫子、七段花、岩菲、等々、

渡り廊下が伸びたその先に、瀟洒な阿四屋。

籐の長椅子と卓が置かれたそこに腰を下ろすと、見渡す限り一面の花畑を渡る涼風が、肌を弄う<sup>いぢ</sup>。

程なくして、茶盤を持った少年が現われた。

茶器が触れあう、軽やかな、音。

蓋碗が返され、甘く漂う、芳香。

そして、茶葉が開く微かな、声。

流れるように無駄が無く、それでいて洗練された少年の一連の所作に、眼を細める若者。

「これは良い香りだ。黄金桂ですな」

茶海へと注がれ、差し出される聞香杯。

琥珀色が、揺れている。

口に含むと、香りと甘味が舌先に広がった。

「宵藍殿<sup>シャオラン</sup>、また、腕を上げられましたね、」

少し照れたように俯くその傍らに、

「待たせたな」

腕に鉢を抱えた、暮云が立った。

土に汚れた手。

藁で編んだ長靴は、泥塗れだ。

「この子でいいのだね？」

若者は、大きな葉を付けた枝振りのしっかりしたその鉢を、腕に抱いた。

「ええ。ありがとうございます。主も、喜びましょう」

「この酔芙蓉。陽の光が大好きでな。水も、たくさんやるんだぞ」  
持参した布で手際よく鉢を包む若者に、

「しかし、そなたはことごとく、わしが良いと思った子らを、攫ってくれる」

暮云の皮肉である。

「花守のご指導の賜物でございます」

「言うてくれるな。まあ、わしも、この子らを望む先が、この子らにとっても幸せだと思つようにしているのだがな、」

「その意に添えるよう、我らもいつそう花作りに精進致します」

正午を告げる鐘が、遠くわんわんと響いている。

「ああ、もうこんな時間ですか、」

礼を言つて若者は、鉢を抱いて立ち上がった。

「送ろう」

暮云と宵藍が、門前まで見送つてくれた。

深々と一礼した若者の向かいで、

「またな」

暮云の澄んだ声音が合図だったのか、門が閉められた。

固く閉じられた、その門扉。

それに背を向けて、往来を歩き出した時だった。

「おや、」

視界の先。

彼方に行く、白い背は、？

屋敷の離れ。

すっかり陽が長くなった、宵闇迫るその時分。

北東の深藍に彩られた山稜のちょうどその上に、とろりと琥珀色した満月が、掛かっている。

あの痣、

先に着替えを済ませるため、窮屈な白袍の襟を寛げた時だった。  
「銀仁、どうしたのじゃ？」

庭に出ていたあとりが、その姿を見つけて声をかけた。

少し後ろに、侍女が鋏を持って控えている。

「あとり、」

「いつもより、眉間に皺がよっておる。宮中で、何かあったか？」

「いや。少し、大陸の事を、考えていた」

「本当に？」

小首をかしげる幼い主を見つめる銀仁の眸に、穏やかな感情が滲む。

「ああ。それより、そんなにたくさん摘んで、」

腕を組んで覗き込んだ先に、あとりが抱く、蕾のついた芍薬の枝の数々。

「今年はたくさん蕾をつけた。明日には咲くだろうから、今日のうちに花生けにでも生けてやれば、朝には寢所に香りが満ちるであろう」

「そうか、」

「母上と、ご多忙の父上の寢所にも飾るのだ。姉上もご所望でな。

夕餉の前に、これから、置いてくるところじゃ」

侍女を連れて駆けてゆく、あとりの背中。

銀仁がひっそりと、見送っている。

門前に一対、煌々と明るい篝火。

帝都の一大事とあれば、夜半でも使いの者がすぐに都守の屋敷と分かるようにとの配慮だ。

その炎に誘われたのは、何も救いを求める者だけではない。

身を投じて、次々と灰と化す、哀れな羽虫達。

そして、

「、、、、、、」

今日は、その灯火の下に、もう一人。

とつぷりと日が暮れた時分、熊笹を敷き詰めた竹箆を手にした燕倪は、足を止めた。

家路を急ぐ者達も、疎らな往来に面した屋敷の門前に、しゃがみ込んでゐるのは、

「伯。何してるんだ？」

「、、、、、、」

焼け残つて大地に落ちた片羽や触覚を、手にした枝で集め、組み合わせてはばらしている伯だ。

くん…

顔を上げて、鼻を鳴らす。

燕倪が竹箒を振ると、甘く香ばしい香りが漂った。

「肴を持ってきたぞ。若鮎を焼いて干してな。甘辛く煮付けたものだ。これでいっぱいやろう」

「、、、、、、」

「どうした？お前、甘露煮好きだろ？」

ぷい、とまた大地と睨めっこ。

どうしたものかと、思案している所に、

「燕倪様」

「おう、琲瑠。蒼装の見舞いに来たぞ」

竹箒を渡しつつ言えば、琲瑠の表情が優れない。

「それが、まだお戻りになられていないのです」

「なんだと？だって、あいつ昼過ぎに、、、、」

「急な、御上のお召し。ここしばらく、お顔の色が優れませぬので、汪果と案じてはいたのですが、、、、迎えにと、寄越す式神も参りませんので、何か用事が出来たのだと、、、、」

「いったい、どこをほつつき歩いてやがるんだ」

頭を掻きつつ辺りを見渡したところで、家路を急ぐ者の中に当人が見当たらずも無く、

「若君も、お帰りを待つのだと、ここを動かれなくて、、、、」

視線の先に、伯の姿。

「健気なやつめ」

いたたまれず、華奢なその背中を羽交い絞め。

「あぐうつ」

太い腕が首に食い込み、厚い胸板との間で呻く、伯。その様子を、往来の人々の白い目。

父親と子に見えなくもないが、この親に対してこの子では、少々脆弱すぎる。

それが、往来で人の目を引くのだろう。

「あの、、、どうぞ中でお待ち下さい」

視線に気付いた琲瑠の苦笑。

「あ、ああ」

「ぐきゅう、、、」

琲瑠を案内に、ぐったりとしている伯を、小脇に抱え直した時だった。

「もし、、、」

えも言えぬ荷葉<sup>かよう</sup>の香りが、鼻腔をくすぐる。

「蒼奘殿の行き先なら、宛がありますが、、」

振り向いた先に立っているのは、

「そなた、どこかで、、」

さらりと纏うのは、卯の花の襲色目の直衣。

長い黒髪を編んでその肩に垂らした、中性的な若者が門前に佇んでいる。

「うつつ」

伯が犬歯を剥く、その相手。

「胡露と申します」

優美な物腰の若者は微笑み、右腕を擦った。

「あつ、、、お前ッ」

「先の騒動では、大変お世話になりました」

砂色の髪、銀毛の耳も尾も見当たらず、夜都にて対峙したその相手と同じ顔をしていた。

その際に負わした脇差の傷は、跡形も無い。

ただ、白く滑らかな肌を持つ腕が、袖から垣間見えた。

「燕倪様、こちらはこの都の産土が眷族であらせられます」

憤慨しているのも明らかな燕倪と、どこか愉しげに見つめ返す胡露。

その間に割って入った、琲瑠だったが、

「産土だか、何だか知らないがな、伯の腹を抉った相手だぞ?!」

「むうつ」

伯も、燕倪の脇から腕を伸ばし、腰の業丸の柄を「構わず抜けつ」とばかりに叩いている。

「嫌われても、無理はございませぬ、従者殿。わたしはそれだけの事を、成した者ですから、、、」

「しかし、、、」

さすがの琲瑠も、往来での一触即発の空気に表情を曇らせたまま。

「中へどうぞ、皆様」

凜、と響く女の声。

「汪果、だがこいつはっ」

「中へ」

有無を言わさぬ汪果の微笑が、そこに在った。

阿四屋の軒下に吊るされた灯篭。

虫除けの香木が焚かれたそこに、汪果が注ぐ新茶の香りが漂った。薄手の辰砂の釉薬鮮やかな薄手の茶碗。

その温もりを愉しむのが、胡露。

向かいで一息に茶を飲み干したのが、燕倪。

そして、少し離れて立つ琲瑠の袖を、掴んで佇むのが、伯。

「丸みがあつて、深みがある、、、」

「毎年この時期になると、先代縁の方が、遠路遙々届けてくださるのです」

汪果が、とうに空になった燕倪の茶碗に、もう一杯注ぐ。

「胡露様、それで、我が君の行き先の宛、お伺いしても宜しいでしょうか?」

静かに問う、汪果に頷くと、

「昼前に御所近くの花守の屋敷へ、馴染みにしている探花使が眼をつけた酔芙蓉を一株、代わりに譲り受けに参ったのですが、その歸りに、」

声を掛けるにしても、その背は彼方。

腕には、譲り受けた酔芙蓉の鉢。

どこか危うげにさえ見えたその背が、北西の黒亜門に消えるのを見届けて、引き返したと言う。

「先程、主が斗々烏より戻りまして話しました所、一応確認して参れと申されて。都守のこと、てつきり戻られているとばかり、思っていましたか、」

胡露が、眼差しを伏せた。

「しかし黒亜門、その向こうと言いますと、」

辺りの地理に詳しい汪果が、燕倪の顔を見つめた。

「墨依湿原、」

その人の口から零れた、名。

かつて、蒼奘が幽世に渡る為に訪れ、そして死人還りとなって現われた地でもあった。

「いったいまた、どうしてそんなところに、」

「さて、」

「、、、、」

伯が、琲瑠の袖を離した。

たつと、門へ向かつて走り出す。

「若君」

琲瑠が追おうとしたその視線に、広い背中。

「待てよ、伯」

門の前で追いついて、掴えた。

「あむむむ」

爪を齧って睨む伯に、

「水くせえなあ。ここまで来て、置いてきぼりは、よしてくれ」

「、、、、、、」

「俺も行くさ」

そのまま、大人しく小脇に抱えられた、伯。

「今、馬を出しますから、お待ち下さい」

琲瑠の声が、どこから聞こえた。

劈くような声に見やれば、刀を振り下ろす野盗の前に、母子。

すでに絶命した亡骸の上にて縋る、幼子。

手足を縛られ、頭上に広がる水面に手を伸ばしつつもがくのは、若い巫女装束の娘。

そうかと思えば、幾千もの鎧兜を纏った兵士が、骸の原を築き、川はその血で染まっていく。

草叢で、野犬に襲われる身寄りの無い子らの叫び。

喉を掻き毟るように苦しみ、息絶えんとする若い女御。

捕らえられ、無実を叫ぶ若者に突き入れられる、鉾。

あばら屋に放たれた炎に、巻かれる老夫婦。

「、、、、、、」

瞼の先で展開されるのは紛れも無い、この身に巣くう者達の、その記憶。

耳孔にひどく残る、声を忘れた者達の叫び。

魂魄を喰らい、鬼とせしめる、想念。

人々と向き合う毎に増幅し、日が経つ毎に、増長した。

押さえきれぬその想いの矛先は、歪められ、今だ帝都に向けられている、、、、

「薄気味悪いな、、、、」

首筋に止まった羽虫を、ぴしゃりとやりながら呟いたのは、燕倪。琲瑠が引いてくれた月毛に跨っている。

黒亜門の向こうに広がる貧困街。

あばら家が軒を連ねるその界限を駆け抜け、日中、茶毘の煙が絶

えない川原を背に、荒涼とした草叢の中に行く。

「、、、、、、」

立ち込める夜霧に怯えたのか、燕倪の胸に隠れているのは、伯。飛び出して行った勢いはどこへやら、、、、

『私は多少、鼻が利きますので、差し支えなければ同行致しましょうか？』

『結構だっ』

『かうッ』

胡露の申し出をあっさりと断った二人は、共に行くつもりだった琲瑠を待たず屋敷を飛び出したのだった。

「また、異界にでも渡るつもりなのか、あいつ、、？」

「、、、、、、」

「なあ、伯」

懷から、翡翠の連珠を首に掛けた伯の大きな眸が、見上げてくる。

「お前、あいつの左腕の事、知ってるか？」

「、、、、、、」

伯が、眼を伏せた。

そのまま、再び燕倪の胸に頬を寄せる。

ぎゅうと、しがみつく手の力が、強くなったのを感じた。

「知らぬはずが無いか、、、、」

琲瑠が言っに、その傷は、左肩から伸びていると言っ。

怨敵槇迺堯元によって、与えられた傷。

「まあいいさ、、、、」

伯の背をあやすように叩くと、

「首に縄つけても、引きずり戻すぞ、、、、」

墨色の水を湛えた湿原に、馬を進めたのだった。

クオオオオオ      ンッ

「ぬおっ」

突然、前脚が跳ね上がった。

咄嗟に手綱を引き締め、

「浮葉<sup>うきは</sup>つ、、、」

その名を呼んだ。

ブルッ、ブルルル：

輪乗りして落ち着かせると、ゆっくりとその脚を止めさせた。

低く喉を鳴らせる、浮葉の首筋を擦り、

「この先か、、」

己が腕を、擦った。

泡肌が、立っている。

馬から降りると、膝下までぐっしりと濡れた裾が、重く纏わりついた。

「なふっ」

「おい、、」

伯が胸から攀じ登り、頭にしがみつく。

「前が見えん」

「っ」

「伯、、？」

引き剥がそうと襟首を掴んだところで、冷やりとした肌に触れた。

「お前、、」

腕に抱きなおせば、小さく身を折り曲げて震えている。

青ざめた、唇。

噴出すのは、冷たい汗か、、？

この感じ、、、そうか、伯は以前これと同質の闇の中で、あの男に体を裂かれた、、、これは、瘡気か？

袖で汗を拭ってやると、その体を馬の背に。

「そこで待っている」

「エンゲッ」

「心配すんな。すぐにあいつを連れてきてやる」

その霧の向こうへと消えてゆく。

「あ、、」

一度は舞い降りようとして、馬の首にしがみつく。

その闇色の水が在るだけで躰が、裂かれた痛みに、疼く。

「あああああつ」

もどかしい、叫び。

しかし、無情にもその叫びすら、深い霧に閉ざされてしまうのだ  
った。

ここは、、、地獄！？

目の前で繰り広げられているのは、紛れも無い。

人が、浅ましい性質<sup>さが</sup>を見せ付ける光景だった。

わんわんと耳を劈く赤子の叫び。

息絶えて尚、無念を叫ぶ怨嗟の声。

怒りに染まり、鬼と成り果てた者達が見せる世界が、そこには在  
った。

こんな世界は、、、哀しすぎる、、、

闇の中に、散らばる大小様々な鏡。

その鏡面に映る様に、あとは自身の肩を抱いた。

うあああああ…ん… あああああ…

その中のひとつ。

鏡面に映るのは、あばら家の中で血に塗れた母に縋る齡三つか四

つの、童子。

何故、こんなつ、、、

いたたまれず、その指先が鏡面に、触れた。

「、、、、、、」

闇の中を、漂っていた男は、闇色の眸を開いた。

左半身に纏わりつく赤黒い霧を、そのままに、わんわんと木霊す

る異形の者達の慟哭に耳を澄ましていたのかもしれない。

涼しげなその双眸が、闇から色を変えてゆく。

瞳孔鋭い、金色に。

その果てを、見通す為に：

気がつくのと、熱く小さな体を、抱きしめていた。

「あああああつ、、、」

顎の下に、癖の強い黒髪が蟠っている。

鼻腔を突くのは、赤錆と雨、そして土の匂い。

外は、雷鳴轟く、嵐の夜であつた。

「つ、、、」

その子を強く抱きしめた手が、生温かく、滑つた。

調度手の下には、乱れた着物の女が、背を袈裟掛けに斬られて伏している。

その向こうに折り重なるように、老いた夫婦が息絶えていた。

「ああああッ」

板を何枚も打ち付け、立て掛けただけの板戸。

土間に倒れたその向こうには、数人の野盗が、手に手に抜き身の太刀を提げて集まっている。

あやつらが、、、

取締の管轄外である貧困街では、日常茶飯事なのかもしれない。

「う、、、うあああああッ」

腹腔を震わす声音と凄じい力に、あとは振り払われ、尻餅をついていた。

「あつ、だめッ！！」

視線の先に、華奢な背中。

腕を払い上げた童は、土間に転がっていた木切れを手にして、嵐の中を走り出して行く。

「だめッ」

たまらず、その童を追いかけようとする視線の中、気づいた野盗の一人が無造作に太刀を上げた。

その口には、蹂躪する事をなんとも思わぬ、笑み。

木切れを振りかざすその童にめがけて、無慈悲の太刀が振り下ろ

される。

「これは、私が負う夢だ、」

静かな、聞き覚えある声が、頭の上でした。

あとの視界には闇と、耳には静寂。

そして背に、温もりが在った。

「都、守、、？」

あとの問いに、

「ああ、」

男は、静かに応えた。

「童が、」

あとの目元は、白い浄衣の片袖で覆われた。

「見れば、魅入られるかもしれぬ、」

「あいにく、この天羽花鳥あもつあとり、見ずして通れぬ性分だな」

鼻息荒いあとりに、青い唇の端が吊りあがった。

「姫よ。それは、あの男の前だけにしておけ、」

静かな、声。

「そなたの身を案じ、そなたの存在を、生きる支えに据えた者だ、」

「」

その言葉に、

「銀仁、」

あとりが小さく、息を吐いた。

「その手が届く内ならばその性分、可愛げがあろうよ、」

「ぬ、、可愛げなど、無くて結構じゃっ」

腕から出ようと暴れるあとの耳の後ろに、

「ひとつ、」

今までよりもずっと低い声音が囁いた。

身を強張らせたその耳元で告げられたのは、

「その力、寿命を削る、」

血の気が引く、それは唐突な忠告であった。

「、、、、、、」

腕を掴む手に力を込めた、あとリ。

「見ずして行けるのであれば、このように瞼を閉じる事も、今のそなたには必要なはず、、、、」

「都守」

「子らの願いや想いは、一途故に強く現れる。その身を犠牲にしても、厭わぬ程に、、、、」

あとりの手が、蒼装の腕に回った。

強く、ただ、強く。

そして、しばらくの沈黙の後、

「分かっている、、、、」

呟いた。

腕を抱く力とは裏腹に、それは静かな声音であった。

「そうか、、、、」

打って変わって穏やかな口調が、応えた。

目元を覆っていた袖が、外れる。

あとりは、何も無い闇の中に立っていた。

傍らに、白い髪を長く垂らした都守の姿。

「仔細あつて、私はまだ、ここを離れる訳には行かぬが、、、、」

懐紙を取り出すと、手の中でひとりでに折れてゆく。

その姿が、鯨を模した。

光の粒子を纏ったかと思えば身震いし、一抱えはある白い大鯨へ。

生まれ出でた喜びか、宙を舞う、その鯨。

「これと共に行け。夢の浅瀬へと誘ってくれる、、、、」

長い髭の一端を、あとりに握らせると、その背を押した。

「都守、、、、本当に、大丈夫なのか？」

何を負うのかは、分からない。

分からないが、己がこの男の夢路に入ったのであれば、あまり良くない事が起きている前兆だ。

不安気に振り向くあとりに、

「私の事は気にするな。自ら招き入れたこの程度の想念に、喰われる事は無い」

いつもの不遜な笑みを、向けた。

あとの歩みに合わせて、緩慢に進む白い大鯰。

時折振り向くその姿を、遠く見送って、蒼装は呟いた。

「この記憶は、私が預かる。ゆつくりと、休むが良い。夢は、約束された彼の地が交わる、点、なのだから」

すみえしつげん  
墨依湿原。

温く裾に纏わりつく、そのまま墨であるかのようなとろみを帯びた、水。

枯れた葦や、山肌から転がり落ちたのか、どこまでも浅い湖面に老木が巨大なオブジェのように現われては、深い霧に吞まれて行く生物など居ないかのように思われる有様だが、すぐ傍らを仄白い魚影らしきものが背鰭を水面から覗かせて泳いで行くのを、何度も見送った。

「いつたい、どこにいやがるんだ、」

足を取られつつも、杖代わりについた木の枝でもって体を支え、前へ前へ。

「この濃霧じゃ、方向も分かったもんじゃないない」

見回せば、微かに登った月明かりが頭上を覆う夜霧を透かして、射し込んでくるだけで、四方は霧の壁である。

「心なし、深くなっている気もしないでもな、」

光るものが、視界に飛び込んでくる。

眼を瞬かせ、その輝きの方へ。

「これは、」

紅く、白く、蒼く、煌くその光の粒が、湖面に浮かんでいる。

手を伸ばし、指先が触れたものは、

「ほ、し、」

湖面に映った、空の星。

揺らめいて、体を起こした燕児の影に遮られれば儚くも、消えてしまった。

「ここ、、、は、、、」

無数の星を映すその先には、濃霧が晴れた空間が広がっていた。闇色の湖面に、たゆとう冴えた輝き。

まるでそこがそのまま夜空の中であるかのような、不思議な感覚。碧の尾を引いて、奔る彗星が流れるその中に、黄金色の輝き。ほんのりと紅く潤んだ、巨大な望月が、湖面に揺れていた。

湖面に映りこむ月を抱くかのように、朽ちた巨木が、横たわっている。

その太い幹を、抱くようにうつ伏したる白い、人。

「蒼装ッ」

湖面を揺らし、月の輝きも星の刹那の瞬きも、細波に吞まれてしまふ事など構わず、

「こんな辺鄙なところで、倒れやがってッ」

口を大にして叫ぶ、燕児。

握り締めた拳を、振り上げながら歩み寄ったところで、

「おおおおッ」

深みに足を取られた。

「ななっ、、、」

見る見るうちに膝上、腿、そして腰と吞まれ、あっという間に、肩。

「くっ、、、」

底に届けよと伸ばした大太刀、業丸。

こんなところでっ

しかし、そこに当たる気配も無い。

「お、覚えてやがれっ、蒼装ッ」

叫び声も虚しく、その体は、ゆっくりと黒い水に吞み込まれて行くのだった。

闇を湛えた双眸が、不機嫌に細まる。

頭上に映る月と、それを囲むように点在する星々の輝き。  
それが、波打った。

また、厄介事を、、

腕を組んで、忌々しげに睨んだ先に、

「結界が、崩れるか、、」

頭上彼方から染み出る黒い水を、見た。

轟々と腹腔に響かせ、闇に白々と飛沫を刻む勝間の大滝。

冷やりとした夜気に、凜と張り詰める大気。

樹齢数百年、いやそれ以上を数える木々が、闇にひっそりと沈んでいる。

彼方に茫洋と浮かび上がるのは、帝都。

大滝を背に、開けた視界を前にして腕を組み、浮遊している者がいる。

燐光放つ、その姿。

臍脂と藤色の衣を纏った、女童。

深紅の双眸も炯々と光る勝間の山の地仙、檣葉<sup>こぎょう</sup>。

しかし、その目が見つめるのは、帝都ではない。

「都守が敷く星中の陣が、崩れた、、」

帝都よりも、もっと手前。

「湖面に映る星の並びが歪めば、結界とは呼べぬ。何者かが、こんな時分に足を踏み入れたと言うのか？」

霧にけむる、その湿原を。

ゴボツ・・・ボボ・・・ッ

闇に、囚われる感覚。

上がってゆく気泡も、見えない。

辛うじて、体が沈んで行くのだけが、分かる。

やがて、足に固い感触が触れた。

突っ張ればぬめるが、確かな大地の感触。

力一杯、その大地を蹴り、手を搔けば、頭上に倒木の枝が伸びていた。

無我夢中で掴んで、体を引き寄せると、肺は空気を思いっきり吸い込んでいた。

「はあつ、ハツ、、はあッ」

ぐつしよりと濡れて纏わりつくのは、墨色に染まってしまった、直衣。

「は、あ、、は、、なんなんだ、、ここは」  
すぐ先に、瀬が見えた。

重い全身を、水から岸に引きずり上げて見上げた彼方に、月が浮かんでいた。

黒い水が流れ落ちる、垂直洞窟。

突如として湿原に陥没したその孔の真ん中には、ヘドロ状の土がこんもりと置いて、衣が更に重くなる。

「くそつ、、」

諸肌脱ぎになると、燕倪は辺りを見回した。

隆々と発達した筋肉質の上半身に、無数に奔る、刀創。

名うての太刀の使い手として、数多の修羅場を潜り抜けてきた証でもあり、逆賊と呼ばれた者達への制裁を行った忌々しい証、でもあった。

「どこに、、」

ヘドロに足を取られながら、そのこんもりとした山を回り込み、

「蒼装っ」

腕を投げ出して、うつ伏している人を彼方に見た。

足を取られながらも懸命に近寄る燕倪が、目にしたのは、

「お、、」

右腕の先から立ち昇る闇色の粒子であった。

小さな足の爪先。

湖面に触れて、波紋を刻むのだが、

「ひゃうっ」

弾かれたように、馬の背に攀じ登った。

「うぐぐ、」

ぎりぎり、浮葉の上で爪を噛んでいるのは、伯。

馬も不安なのか、一步もそこを動く事ができない様子。

見様見真似で腹を蹴っても、手綱で叩いても、びくともしない。  
濃くなる霧。

黒々と蟠る水。

じわりと、伯の眸に滲む董色の輝き。

「、、、、」

目を拭ってくれる手は、無い。

零れるままにして、伯は浮葉の鐙に両足を掛けた。

そのまま、鬣を掴みつつ、ずるずると落ちる。

「んあっ、、」

ぱしゃ

黒い水が跳ねたそこに、伯が尻餅。

ぐつしよりと墨色と化す、水干。

硬直したままの伯の視界に、白い影。

水面に白い筋を引いて集まってくるのは、白い魚だ。

それまで隠れていたのが、無数の背鰭が蛇行しつつ同じ方向へと  
泳ぎ去って行く。

「、、、、」

それに導かれるのか、伯は立ち上がると、重い袖を払った。

魚達が、彼方の霧へと、伯を誘う。

## 第陸幕後

真名

(前書き)

墨依湿原にて対峙するは、帝都に宿りし想念。破魔太刀業丸をも弾くその巨影を前に、果たして打ち勝つ術が在るのか、、、？

死人還りの都守蒼装、業丸を継ぐ武官燕倪、幽身であるがこの世に縛られた伯。それぞれが紡ぐ異国絵巻、第陸幕後編。。。

ばかり…

何かが弾ける音が、する。

ズズ…ズズ…ズズズ…

引きずられるようにして、伸ばされたのは、人の腕であった。

無数の黒い蛇、いや、蚯蚓のような、人の腕であったものの表面には、ぼこぼこ枝分かれして蠢くもので覆いつくされようとしていた。

「、、、、、、」

燕倪は、全身に冷たいものが流れて行くのを感じていた。

構わず抜き放つ、銀の太刀しろがね。

業丸。

その冴えた輝きだけが、今の頼り。

じりじりと爪先に重心を乗せ、下段に構えると、間合いを測る。

むッ

闇色の粒子が、濃くなった。

中指の爪が、真ん中から裂けている。

先程の音はその音だったようで、粒子はそこから立ち昇っていた。

出て来ようとしているのか？！

粒子が、煙のように濃さを増し、増長してゆく。

その一体に、赤光放つ二つの目が浮かび上がった。

これは、、、槇廼堯元？！

その輪郭。

低く唸るのは、声にならぬ異形の音。

馬鹿な、、あの日、確かに斬ったと言っのに？！

そのすぐ脇から、別の枝が伸びた。

漆黒にも係わらず、単衣を纏った女の姿。

眇められた紅の双眸と、細い啜り泣きが、混じった。

その背から伸びたのは、枯れ枝の如き老婆。

糸のように細い赤光を湛えた瞳が、物言わず此方を睨み据えている。

その下から生えたのは、童。

喉の辺りを掻き毟り、食いしばるのか歯軋りが重なった。

「とんでもないもんを、飼いやがって、」

みるみる膨れ上がる闇の塊。

隙間という隙間から、怨嗟の声。

巨大な球体に浮かぶ、無数の紅い目。

それらの声ならぬ音が、する。

「う、」

耳を押さえて、膝を付く寸前、視線の端に白い輝きが見えた。

頭上から、滴り落ちる黒い水。

そこからぼとと降り注いでくるのは、白銀の腹を見せる無数の魚。

「なんだ、？」

見上げたその淵に、白い影が立っていた。

「、、、、」

青みがかった漆黒の双眸が、静かに見下ろしている。

「伯？！おまつ、来るんじやなつ、あつ」

その華奢な水干の袖が、翻る。

ふわりとして、重さを感じさせぬまま、燕倪の傍らへ。

静かな眼差しが、闇色の蟠りを見つめ、その向こうで臥したまま

の男の姿を捉えた。

「こんな時でも、俺の言うことを聞かんヤツだな」

燕倪の呟きに、ぶすつとしたまま、前へ出ようとする。

その肩を引き戻そうとして、

「コンナトキダカラ、ダ、」

その手を、弾かれた。

「ッ」

自ら引きちぎったのは、翡翠の連珠。

その黒髪が、鮮やかな群青に染まり、瞳は澄んだ董色へ。

ひた・ひた…

素足が水面を渡ると、細やかな泡を生じ、水面がせり上がる。

その爪先に触れた水が、澄んでいく。

こぼ・こぼぽ…ん…

湧き出す水は、どこか潮の香りがした。

その湧き出す量が、徐々に増えてゆく。

黒い水を押し出すように、水柱となると、それはひとつにまとま

り、巨大な牙を持つ顎<sup>あぎと</sup>へと変貌する。

伯は、その上に居た。

「ソウを喰らうのは、オレだ、、」

ギギオオオオオオオオツ

無数の赤紅の目が赤光を放ち、せり出した。

水の顎が、迎え撃つ。

貫くつもりか、荊<sup>ひばこ</sup>を思わせる鋭い棘<sup>きずく</sup>が頭上に伸びて撓った。

その蔦状のものを、水の顎は僅かに身じろぐだけで受け止めると、

「ヒキチギレ」

太い猪首を、振った。

ヴッ…

鈍い音と共に、

ギゲゲゲエエエエ　　ッ

【黒い蟠り】の、断末魔。

噴出したのは、墨色の水よりも濃く赤く、どろりとした体液。

「、、、、」

返り血に染まる、水干。

半顔が染まっても、顔色一つ変えることない、伯。

透明な顎が蠢く【黒い蟠り】へ、その牙を穿ち砕き潰すべく進み

出て、

やったのか、、？いやッ、違うッ

燕倪は本能的に、走り出していた。

「伯ッ、よけるッ」

わなわなと蠢くのは、無残に引きちぎられた欠片。

それに太刀を突き入れた時には、振り向いた伯の顔がすぐそこにあった。

「くっ」

弾かれる、太刀。

そして、腹への衝撃。

「ぎっ、はッ」

吹き飛ばされながら燕倪は、その可憐な唇から、赤い糸が細く引くのを見た。

「くっ」

叩きつけられた、二人の体。

「伯ッ」

伯の脇腹を貫通した欠片は、黒い水と化して流れ出た。

伯に浴びせた血が、その身を穢れに染めたのか、透明な顎と水は、急速にその姿を失っていった。

「かう、、、」

傷を袖で隠し、大丈夫だと小さく呻いた、その姿。

立ち上がろうとするのを、

「動くなッ」

一喝した。

腹腔深く、丹田の辺りが、熱い。

怒りに、拳が震える。

それを、

「エ、、ゲ」

抑え込む。

守るべきは、この声の主。

だがどうしたら、、？

この【黒い蟠り】は、業丸を寄せ付けぬ。

それ程までにこの闇は、深い。

不意に燕倪は、何を思い立ったのか腕を広げた。

「おい化け物、俺に憑けッ」

業丸を下げ、

「その生つちろい奴よりも、俺の方が頑丈にできてらあ。腕も立つ。暴れるなら、俺に入れよ」

放り出す。

あいつが本調子なら、なんとかしてくれる

赤い目がその軌道を追い、

「、、、、、、」

再び、燕倪を捉える。

「つつ」

全身が総毛立つ、感触。

あいつ、ずっとこんなもんを体ん中につ

押しつぶされそうな重圧と、吐き気を催す程の憤りだけが、体内を熱く掻き乱そうとする。

ズ・ズズズ…

【黒い蟠り】は、尾を長く引いて前進した。

「それにな、俺は土師業鷲の直系だ。宮中に入り込むのなら、都合が良いぞ」

手を広げて、頭上から睥睨する相手を見つめる。

ぐぐぐ、擡げた頭部が前のめりになり、

来るッ

己を包み込むように広がったそれが、

「何?!」

脇を、すり抜けていた。

肩越しのその先には、

「伯ッ」

上半身を片腕で支えた、伯。

脇差を抜き放ちつつ、投げた業丸を取りに跳躍した視線の先で、意を決し犬歯を剥いて咆哮する伯の姿。

「ぬがっ」

鈍い衝撃が、全身を走り抜けた。

頭蓋を共鳴させたのは、骨が砕ける音。

振り払うように腹に穿たれたのは、【黒い蟠り】から伸びた巨大な瘤状の触手であった。

弾き飛ばされる、その体。

息が止まり、口腔に広がる錆の味に、ぎりりと奥歯を噛み締めた。視線の先に、赤々と染まったままの腹部を押さえた伯が召喚した、透明な獅子の姿を見た。

「う、、、」

しかし、それが限界だったのか小さな呻き声を残し、黒い水に沈んだ、体。

同時にその獅子も、ただの水に戻った。

無慈悲にも、その細首に巻きつく、黒い触手。

首を絞めつつ、可憐な唇を挟み開けようと触手が顎の辺りを圧迫する。

隙間を探り、歯茎を弄る触手の感触。

董色の双眸だけが、赤みを帯びて鋭く睨み付け、

「ぎがあッ」

腹を裂く触手に、仰け反る。

堪え切れず開いた口腔へ、ずるりと触手が入り込む。

見開いた、眸。

細い喉に、異様な瘤が浮かび上がっては、体内へ巢食うべく胸元へ下って行く。

「くそっ、、、」

業丸を手に、軋む体を引きずり上げた。

「いぐっ、、、っッ」

振り上げた、白金の輝き。

そのまま息を止めて、脚に力を込めた。

視線の先には、抑えたままの傷口を決じ開けるためか、頭部が鋭い切先へと変形する【黒い蟠り】の姿。

一息にその幼い体に潜り込むべく、後ろに撓った。

「やめるおおッ」

太刀を、長く伸びたままの尾へ振り降ろし、

「がッ」

銀波が、飛んだ。

業丸の刃が、、、毀れた?!

一見、柔らかそうなその体は、強靱な鋼の如き強度。

びりびりと、骨の髄を痺れさせる振動に、危つく刃を手放しそうになった。

しかし、

「ムギギガガガアア      ツ」

伯の、絶叫。

「こいつッ」

柄頭に手を乗せ、突き刺す。

僅かに切先だけを吸い込んだその体が、うねった。

「が、はッ」

巨木の幹程ある尾が大地に叩きつけられると、あっけなく業丸は抜け、その体はぬかるむ土の上に叩きつけられる。

「むぐッ、かあ、ああ、あ、、、、」

ゴぼ、ごぼン、ゴボリ…

ずるずるとその華奢な体に這入り込む。

紫紺の輝きが頬に零れ、墨色の水に沈み、象牙色の肌は、みるみるドス黒く変色して行く。

太い尾が、急速に窄まる。

「ぐぐ、、、、く、、、、そッ」

燕倪が、咽込みながら肘で進む中、

「、、、、、、、、」

糸状の先端が、投げ出されたままの腕、終にその指先から抜け出した。

それを待っていたかのように尾は、  
ギギッ

白い手に、絡め取られていた。

「随分と派手にやってくれたものだ、」  
鬱々とした声音と同時に、大気が震えた。

【黒い蟠り】が、宙へ跳ね上がった。

「げえッ、はッ、、、げほッ、、」

胸元を押さえて、咳き込む伯の唇から、闇色の欠片が零れ落ちる。

「はあッ、、、はあ、、、」

「伯、大丈夫か?!」

何とかその傍らに辿り着いて背中を擦る燕倪に、伯は辛うじてこくりと頷いた。

「ソウ、、、」

その視線の先。

いつの間にか札に覆われたままの、左右の手。

墨色の水も畏れるのか、一滴の染みすらない浄衣の男が、細い尾を手繰っている。

「八火よ、逃すな。結界を敷け」

金色の輝きが、上空に四柱、その下に四柱。

とたんに揺らめく壁が、一帯を覆いつくした。

「どうするつもりだ!？」

「この国に、漂われては困る怨鬼<sup>おんき</sup>。そのままこの国の民が想念だ。  
発生したものをその世から故意に欠く事となれば、どのような災厄  
が降りかかるか、想像もできん、、、」

激しくのたうつ【黒い蟠り】。

「燕倪。まだ、やれるか？」

「誰に言っただやがる!？」

「では、少し時間を稼いでくれ。無限坂の水底に、叩き込む」  
燕倪が業丸の柄に力を込めた。

齒が立たぬが、、それでもッ

蒼装が立つ足元に、波紋が刻まれる。

漆黒の水面に、銀の波紋。

無数に増えて、重なる中、

「いかん、下がれッ」

その手の札が、炎上。

「こいつッ」

蒼装の手からすり抜けた【黒い蟠り】は、そのままそり立つ壁へ激突した。

八箇所が鬼神が纏う金色の身光が、僅かに揺らいた。

一度は大地に崩れ落ちたのだが、その尾に宿った炎は、紫焰となつて瞬く間にその身を覆ってしまう。

「元より恨み辛みの化身。その身を焼いても、厭わぬが、、」  
自由になった手で印を結びながら、忌々しいとばかりの蒼装の声音。

その眼差しの先、赤光はなつ目は突き出した頭頂に集まり一つとなり、枝分かれしていた手足は、太く頑丈な形状に纏まった。

二股に別れ長く伸びたのは、相手を叩き潰すための瘤をいくつも付けた、尾。

鋭い鉤爪も禍々しい、八脚の魔獣。

「エンゲ、、、、」

伯の手が、燕倪の腕に掛かる。

その体を、透明な水の皮膜が覆い、太刀には細い水の筋が、それ自体が生き物のように幾つも絡みついた。

腹腔から込み上げる血潮を吐き出し、手の甲で口を拭くと、燕倪が無言で駆け出した。

ギィォォォッ

前肢の一閃を身を低くして躲し様、吹きつける熱波を諸共せず

刃を斬り上げた。

めり込む、業丸。

別の前肢が反対方向から向かってくるのを、めり込んだのを利用して体重を預け、

「ぬあッ」

腕の力でめり込む前肢の上に己の体を跳ね上げた。

そのまま刃を引き抜き様に、体重を掛けて振り下ろしたのが、赤光集まる頭上。

だが、

「がはッ」

その赤光集まる目に打ち下ろす寸での所を、吹っ飛ばされた。

大地に転がる破魔の太刀業丸。

頭上を防いだのが、瘤状の尾。

そして、もう一方の尾が、横殴りに燕倪を見舞ったのだ。

ゴグガガガガアア      ツ

紫焰に包まれた魔獣が、怨嗟の咆哮。

「ぐ、、、ぎぎッ」

歯を食いしぼり、動かぬ体を引き摺る燕倪。

焰の熱と、その衝撃から身を守ってくれた水の纏いは、消えていた。

それでも血みどろの手指は、未だ業丸を求め、餓える。

「えん、げっ、、、」

伯が、名を呼ぶのが、遠くに聞こえた。

伏して、呻く燕倪に止めを刺そうと近づくと、魔獣。

「ソウッ」

澄んだ、その声音が、その人を呼んだ。

「オレが、行くっ」

彼方で解放を望むのは、傷ついた、伯。

片腕で体を支え、牙を剥き叫ぶ、その声。

「、、、、、、」

それまで、封じこめるための結界を練っていた蒼装が、結んでいた印を取りやめた。

とたんに瘴気に晒される、体。

白い狩衣の袖がはためいて、

「やはり私が、代わろう、、、、」

織手が取り上げたのは、業丸。

「ばか、やるおッ、、、、おま、、、、」

それでは意味が無くなると、叫ぼうとして、込み上げた血潮に唇を濡らした。

「この仕打ち、、、捉え封じるなど、生温い」

すでにその眼差しが、彼方の魔獣へ。

いつもと変わらぬその背が、どこか茫洋と滲んで見える。

燕児の血で滑る、柄。

それを両の手に擦り付け、重さを感じさせず、無造作の一振り。

ギゲガガアアッ                      ! ! ! !

吹き付ける咆哮をもとめせず、血塗れた手を峰に走らせると、柄頭に手をやった。

蒼装の口元が、業丸の柄を持つ手で隠れ、魔獣が前肢の一閃と同時に懷に飛び込む刹那、現われる。

その青い唇、血塗られて。

「蒼装      ツー!!」

腹を押さえて立ち上がった燕児が見たもの。

紫焰に身を焼かれながら、その腹腔深くに業丸を突き立てる、後ろ姿。

ギゲガゲガガ      ツ

前肢で払いのけようとした魔獣がしかし、次の瞬間その八肢の自由を奪われる。

手足は、忽然と大地から突き出した水柱によって、貫き留められていた。

伯だ。

食いしばった歯はぎりぎりとしめ、その董色の眸は狂気に染まり、瞳孔鋭い。

その影が、巨大に伸びていた。

くつきりとした背鰭、六つの鰭と長い尾鰭の神体は今、影でありながら、その絶対的な存在感を得て、伯の背に従っている。

ぱっくりと抉られたままの脇腹に手をつ込み、その身を縛る術を、自らの身を引き裂く事で、半解放したのだ。

しかし、

業丸が、浅い、

伯が身を裂いてまで大地に縫い付けているというのに、

グギガガッ

押されている。

紛れもなく、この魔獣に。

髪を舐め、衣を焦がし、肌を弄う、灼熱の怨鬼の業火。

預かる身だが、赦せよ。やはりこの身、鬼神八柱の憑代とする

唇から滴る、己の血潮。

足元に落ちた瞬間に蒸発し、消炭となると蒼装の身に吸付いた。

そしてその身に刻まれる、細やかな紋様。

「八火業焰衆、契約を行使す　　、ぐッ」

「水臭ええッ」

蒼装の体を支え、柄を押える手に重なるのは、武骨な手。

炎の中に飛び込んだきたのは、

「離れよ、燕倪ッ」

その人。

「俺の太刀だろッ、なあ、業丸ッ」

叫び声と共に、業丸の柄がさらに深く、食い込んだ。

ギゲイツ、エギイガエエエッ

仰け反ると同時に紫炎が霧散。

すかさず蒼装が両手で印を結び、

「擦じ伏せよ、雷光」

魔獣の胸に血潮が飛び散ると、全身に紅の鎖が巻かれ、青白い輝きが奔った。

ギガガアッ、ガガゲ                    ツ

「ソウッ」

劈くような、叫び声。

真の名を呼んで…

「ソル―イ」

「！！！！」

伯が影に、吞まれる。

その影が、まるで羽化するかのようには剥がれると、眩い青き光を放ち、

オオオオオオン…

静かに、咆哮した。

八肢を貫いていた水柱が、凍りついた。

枝を伸ばすかのように四方八方から絡みつき、その身を覆う。

ガ…ガガゲ…

身じろぐ暇など与えず、全体を覆うと、収縮する力が加わった。

急速に縮むその体は、やがて耐え切れず、四散した。

から、り…

宙を漂い、大地に降り注ぐのは魔獣であったものの、粒子。

そして、業丸。

「やった、か、…」

膝から崩れ落ちた燕倪。

所々、焼け焦げた髪。

狩衣も酷いものだったが、幸い火傷もさほどではなかった。

「蒼装。おい、そ、…ッ?!」

ぬるりと手に纏わりつくもの。

人の皮であつたものと、気づくのは、一呼吸置いてからだつた。燕倪と伯の楯を、自ら買って出た者の代償。

「蒼装ッ」

「、、、、」

腕の中で動かぬその人の髪は焼け焦げ、その全身はケロイド状。

もやは、その人の面影すら、感じさせぬ有様。

「蒼装ッ、返事しろよッ」

人の形をしたそれは、炭に、近かつたのかもしれない。

青褪めた燕倪が、それでも医者に見せなければと頭を切り替える事に勤めた時だった。

キユキユ…

伯が、その鰭を割り込ませた。

「伯」

キユ…

胸鰭で、包むように腕に抱いた。

「伯、とにかく医者に見せよう。都まで、飛べるか？」  
ぶんぶん…

首を振る、伯。

「聞き分けてくれ。このままじゃ、本当につ」

いや、もう、だめなのかもしれ、、

クオオオオオ  
ッ

ぱつくりと頭部が割れ、鋭い牙の羅列が覗いた。

燕倪の絶望を、読んだかのように、、

威嚇するかのように背鰭広げ、深紅の鬣を逆立てる伯。

その姿、まるで聞き分けの無い子供のように、頑なであった。

「伯ッ」

押し問答をいつまでも続ける訳にはいかないと、燕倪が声を荒立てた時だった。

「下がっておれ、若造」

結界を張っていた鬼神も消えたのが、宙を過ぎつて舞い込んだ燐

光が、形をとる。

現われたのは、肩で切りはなれた黒髪の女童。

炯々と光る紅玉の鈴張目に、臍脂と藤色の衣がそれによく映える。  
「貴様の治療は、後回しだ。腹の傷を押さえて、そこに転がっている」

伯の鼻先に立つ。

燕倪は、全身が総毛立つのを感じた。

「か、神に名を連ねる者か、、、？」

背を向けたまま告げ、

「わらわは勝間の山の主よ。その腕に抱く者の器には、用があつてな。わらわも汝同様、まだその男、失うわけにはいかぬのだ」

クオオオ…

「診せてみい、、」

伯の俯いた鼻先を、ぽんぽんと撫ぜた。

「汝も、助けたいのであるう？」

ウウウ…

ほんの少し胸臍をどけた。

女童は臍に触れ、冷やりとした体温を測りつつ覗き込むと、

「むふ。そなた、中々に気転が聞くではないか。そのまましばらく抱いている。今、薬を調合する」

袖からこぼれた種は、大地に落ちてすぐに芽を出した。

見る見るうちに花を咲かせ、あるものは実を結ぶ。

野薊、桑、繁縷、刺槐、サルナシ、虎耳草、天胡、等等、、

見たことの無い極彩色の草花までも手早く摘むと、懷から取り出したすり鉢に入れて摺り始める。

「何か、できることは、、」

「無い」

無然とした、拒絶。

何とも言えぬ感情が、燕倪の表情に現れた時、  
「燕倪様、ご無事でっ」

「これは、勝間の?!」

頭上で聞きなれた声が、した。

「これをつ」

後を追ってきたのか、琲瑠と汪果が浮葉を連れて淵に立っている。

「これは、、、」

燕倪の傍らに落ちてきたのは、青紫に発光する小瓶。

「これよ、これ」

摘み上げた小瓶は、次の瞬間、ひったくられていた。

「それは、、、」

鬼神に手を取られて、淵より舞い降りた、琲瑠と汪果。

「霊紫です」

「燕倪様、今はご自分のお体を一番に、、、」

汪果が、傷を水で洗い、酒で消毒。

火傷の酷い箇所は冷やし、薬草を練ったものを挟んだ晒しを当てる。

「若君、、、」

燕倪を汪果に任せた琲瑠は、俯いたままの伯の鼻面を撫でた。

彼なりに、飛び出し傷ついたこの幼い主を、気遣っているのだから。

「出来たぞ」

どろりと濁った苔色の薬草に、霊紫が混じり合つと、その粘塊質のペーストは澄んだ蜂蜜色へ。

「伯。診せてくれ、、、」

ウウウウウ...

腕に、その液体で見たされたすり鉢を抱いて、檣葉が胸鰭の間に入っていく。

「蒼焚、、、」

「勝間の主は、薬草に深く、精通していらっやいます。心配要りませぬ」

一行が見守ることしばらく、

「後は、体内の熱を冷ます薬湯を、飲ませればいい」

胸臙から抜け出し、額の汗を拭った。

「ありがとうございます」

深々と頭を下げた琲瑠。

「目が覚めてもしばらくは安静にと、都守に伝え置け」

「はい」

「そなたは、どうするのだ？人形に戻るか？」

ウウ…

「ならば屋敷まで、わらわが結界でその身を隠そう。屋敷に着いたらそなたを、元の人形に封じてやろう」

キユ…

こくりと頷いた伯。

「少し余った。外傷に、良く効くぞ」

すり鉢を汪果に押し付けると、伯の首に跨る。

「燕倪様、またご様子を伺いに参りますので」

申し訳なさそうに琲瑠が、背に乗った。

「氣にするな。蒼装を頼んだ、てててッ」

手を振ろうとして、痛みに呻くのを、

「安静なのは、燕倪様も同じですからね」

傍らで残った汪果が、肩を貸しながら諫めるのだった。

三日して、何とか体の自由が聞くようになった燕倪は、蒼装の屋敷を訪れた。

寢所には、昏々と眠る蒼装の袖を抱いて、伯の姿。

「エンゲ」

董色の眸は赤く腫れ、辺りには紫の玉の欠片が散らばっている。  
涙の、痕。

『片時も、お側を離れないのです、、、』

先日見舞いに来てくれたのは、少しやつれた琲瑠。

彼がそう言ったのを、燕倪は思い出していた。

「お前も蒼奘も、怪我はもう、良いみたいだな」

「、、、、」

「肌に赤味がさしてきているようだし、直に目が覚めるさ」

檣葉が調合してくれた霊紫の入った薬の効果は、目を見張るものがあつた。

酷かつたはずの腫れもすっかり引いて、切り傷は跡形も無い。

ただ体内、折れた肋はさすがにどうにも出来ないようで、打身の痛みには相変わらず悩まされてはいるが、伯の手前、それを微塵も感じさせぬ燕倪である。

「ソウ、、」

伯の幼い手が、蒼奘の前髪に触れ、頭を撫でる。

腰まであつた髪は今、首の辺りまでのばさら髪だ。

蒼奘が伯にしていた事を、そのまま真似ていると思うと、燕倪もさすがにいたたまれない。

「なあ、伯、、」

目線を合わせ、その華奢な肩に手を置く。

「あれから、なあんにも食べてないんだってな？」

「、、、、」

「蒼奘が眼を覚ました時に、お前がげっそりしていたら、あいつの事だ、養生することもできんぞ」

少し間があつて、

「、、、、ん」

こくり…

頷いた。

「おう、そうこなきや。で、何が良い？」

「、、、、ささ」

「そうかそうか。なら、付き合うぞ」

腕に抱いていた大振りの瓶子を、叩いたのだった。

蒼奘の寢所に程近い、居間の縁側。

池の鯉が悠々と泳ぐのを眺めるために突き出した軒下に、琲瑠が厚手の更紗を敷いて、急ごしらえの宴席を設けてくれた。

肴は、干した帆立を戻して小芋と炊いたもの、梅肉で和えた湯引きの岩魚、栗の甘露煮。

どれも、伯が好きなものようだ。

「陽が高いが、なあに、かまうめえよ」

僅かに赤味がかつた黒に、深い苔色の釉薬がかかった杯。澄んだ酒を、注いでやると、

「ん、ん、」

伯が薄い朱鷺色の唇を、つけた。

手酌でやる燕倪も、一息に杯を空けて、

「はあ、沁みわたるっ」

酌み交わすとは、程遠い。

それでも、杯を重ねる二人。

「あつと、ん、」

「ん、ん、ん、」

「そういえば、お前と二人きりでこうして飲むなんて、初めてだな、ん、」

「ん、ん、」

「お前が来る以前、ここも寂しいものだったんだぞ」

蒼奘と汪果以外に、出入りする者は無く、客と言えば聞こえがいいが、燕倪が訪れて酒を飲むくらい。

それが、

「あいつの顔も、お前のおかげで晴れやかな気がするんだ」

誰も寄せ付けず、その異形の力でもって、都守の地位を安定させた、蒼奘。

死人還りとなってからは、その温厚柔和だった性格が豹変。

平素、鬱々として、この都に在ったものだ。

「一時は、近寄りがたい雰囲気だったんだが、お前といるとあいつ、人の顔をするんだよな」

「むみつ」

頬を抓られ、おかしな声をあげる伯。

伯の方にしてみたら、表情がくるくると変わる燕倪の顔の方が余程おかしいらしい。

「んやつ」

手を払うと伯は箸を手にし、栗の甘露煮を口に入れた。

なんだ、やっぱり蒼装が甘やかしているだけか、

羽琶の屋敷で膳を共にした時、伯はやはり自ら箸をとったものだ。甘露煮ばかりを口に運ぶのを、燕倪が穏やかに見つめている時だった。

「家主を置いて酒宴とは、いい身分だな、」

うつそりとした、低い声音。

羽二重の寝着を纏った長身の男が、柱を背に佇んでいた。

「ああっ」

伯が、駆け寄る。

「心労を、かけた、」

抱き上げた伯の眸から、零れる董色の玉。

しがみつくその温もりを感じながら、頬を転がるその涙を払った。

「呑むか？」

「いや、遠慮しておく。体内に熱が、留まったままでな、」

「お目覚めでしたか、主様。今、琲瑠が薬湯の準備をしておりますので」

汪果が慌てて走り寄ると、足元まだおぼつかぬ蒼装の腕を取って、燕倪の前に連れて行く。

腰を下ろしてすぐ、琲瑠が銀製のゴブレットに氷を入れ、薬湯を注ぎ差し出した。

黒い液体が、揺れていた。

青い唇をつけるのを、まるで自分が飲んでいるような顔で、燕倪

が見つめ、

「どうした、？」

闇色の双眸が、見つめ返す。

「それ、何が入っているんだ？酷い臭いだぞ」

「大陸最高峰の万年氷に、千屈菜、黄柏、长春花、麒麟草、薄荷、西瓜、ツルドクダミ、その他八十種程の薬草を煎じたものです」

にこりと説明する琲瑠。

それでも体が欲しがれば仕方なかるう、と少しずつ蒼装が飲み込む。

「俺たちの楯になろうと、無茶をするやつが悪い」

「あの炎、生半な術では消せぬでな。封魔陣に追い込むどころか、伯でさえ近づけぬのも無理は無い。いつその事、私の体を鬼神の憑代にし、一時的に神通力を借り受けさえすれば、冥府の業火で焼き尽くせたのだが、」

「捨て身も大概にしてくれ」

「元と言えば、異界に封じるために敷いた星中の陣に、お前達が踏み込まねば、他愛ない相手だったのだがな」

恨み言のため息に、

「一人で抱え込むからだ」

燕倪の反発。

その相手を、蒼装の一瞥が黙らせた。

「言ったところで、私を一人で行かせたか？」

「うっ」

言葉に詰まった燕倪を尻目に、蒼装はくしゃくしゃと、伯の髪を撫でた。

「伯か、」

珍しくそうされるがまま伯は、鼻をすすりながら蒼装にしがみつき、寝着の胸の辺りに歯を立てている。

「ああ。この仔は一度、夜都にて解放させられかけている。それを真似ての半解放。そして我らの身を案じて、解放の名を呼ばせた、

、  
「その身を引き換えにするつもりが、その声に、思いとどまらされた。」

「憑代になったら、ソウは鬼神に食べられる。そんなの、ハクは嫌、  
、、」

ぽつり、伯が呟く。

「誰かが犠牲になるのが、俺は嫌だ」

惘然とした燕倪の声が、続いた。

「お前達が、傷つくのを見るのが、私は嫌だよ、、」

蒼奘の、溜息。

そして、沈黙。

平素は鬱陶しいまでに無遠慮な羽虫も、この時ばかりは姿を潜<sup>なり</sup>め  
ている。

漂う沈黙に、耐えかねたのは、

「まあ、いいか。こうして無事に揃ってるんだ、、」

他ならぬ燕倪で、

「ああ、、、」

伯の背中をぽんぽんと叩く蒼奘も、それ以上その話はしなかった。  
ただ、今はこうして、いつものように酒に酔いたい、一同そんな  
気分だったのかもしれない。

## 第漆幕前

### 女雛

#### （前書き）

先の傷を癒す中、伯の身に変異が起きた。自ら屋敷を後にした伯は、蛸ヶ淵にて童に出会い、

死人還りの都守蒼装、業丸を継ぐ武官燕倪、幽身であるがこの世に縛られた伯。それぞれが紡ぐ異国絵巻、第七幕前編。。。

## 第漆幕前

## 女雛

風も無いのに揺れる橙、金魚草。

冷やりとした、朝露を結ぶ薄霧が漂い、遠く犬の遠吠えが聞こえる時分。

薄汚れた着物が肌蹴けるのもそのまま、童女が駆けていった。

山裾に広がる桑畑を突っ切り、草叢を渡り、小川を飛び越え、走る。

里山の、更に向こうの山懷へ。

蛇這う樹海に、駆け込んだ。

太く重厚な倒木の傍らまでくると、そのまま膝から崩れてしまう。荒い、吐息。

焼け付く程に乾いた、喉。

飲み込もうとした唾液さえ、出てこない。

汗ばんで、肌に張り付く髪をそのままに、しつこく纏わりつく羽虫に気にも留めず、辺りを包む静謐に気付いた時、足が震えているとようやく知った。

べたついていた手が、そのまま乾いている事に気がついた。

擦っても、擦っても、消えない朱の<sup>あけ</sup>、感触。

「あああああッ」

咆哮じみたその叫びを、森の獣だけが、ひっそりと聞いている。

その日は、うだるような暑さであった。

細い竹で組まれた格子に絡む太陽の申し子、空色の朝顔も、項垂

れている。

「暑い、、、」

諸肌脱ぎで、扇子で胸元に風を送るっているのが、坪庭から湧き出す泉に足を浸している、燕倪。

その傍らで、瓶子を引き付け、月琴を爪弾いているのが、

「蒸すな、、、」

鶺鴒色に染められた紹の着物も涼しげな蒼装、その人。

こちらは対照的で、汗一つ浮かべず、陽の下に存ってもまるで秋月を愛でているかのように、涼しげだ。

「俺も入ろうかなあ、、、」

眼差しの先には、

「んぷー」

群青の髪を水面に遊ばせ、泉に浸かる童の姿。

水の中で揺れる水草の流れのように、その髪はその身に纏う薄衣と共にゆらゆらとして、象牙色の肌を滑ってゆく。

「なあ、伯、俺も、、、」

「やつ」

ぴしゃりと水が頬に、跳ねた。

「まだ何にも言っていないだろ」

確かに、大人が浸かれぬこともなさそうだが、それではいささか窮屈そうだ。

湧き出す水底に顔を寄せて、いつまでも上がってこない伯はそのまま、燕倪は杯を持った。

「、、、、、、、」

月琴の音が、止んだ。

そのまま、傾けた瓶子から注がれる、酒。

孔雀石を薄く削った杯の底に、金箔が揺れた。

「傷は、いいのか？」

低く静かな声音に、

「おう。猪肉を喰って養生していればそんなもの」

晒で、がちがちに固めた腹部を、叩いて見せた。

「銀仁か、」

杯を当てた青い唇の端が、吊り上がる。

「ここにも来たのか？」

「ああ。精がつくからと赤蝮を持ってきてな。腹のものを、吐かせているところだ」

「蝮酒か。出来上がるのは、一月以上先になるなあ」

武骨な手が、瓶子の首を掴んだ。

そのまま、差し出される杯に注ぎ、

「、、、、、、」

「、、、、、、」

白い織手が、その瓶子を受け取った。

幾度となく酌み交わされてきた、杯。

その都度育まれてきたこの静かな時間が、一番の肴なのかもしれない。

「お」

軒下に吊られた黒金くろがねの風鈴が、澄んだ音を立て、青々とした蓮の

葉とほんのりと花弁の先を桃色に染めた花は、つつましく揺れる。

風が、出てきた。

酒で上気した頬に当たって、得も言えぬ酔い心地に、燕倪が目尻を下げた時だった。

「茹で上がりましたよ」

衣擦れの音をさせて現れたのは、盆を片手に提げた、瑋瑠。

その上の箆には、こんもりと塩茹でされた空豆が盛られていた。

「今年は雨も多くて、大振のものがたくさん摂れたんだ」

「屋敷の片隅を畑にしている武官は、お前くらいだろうな、」

「文句があるなら、喰うなよ」

濃い眉を跳ね上げた友に、僅かに唇を吊り上げた。

「頂こう、」

白い手が、ふっくらとした房を取った。

産毛のような纖毛に抱かれた豆が、ふつくらとしてそれでいて艶やかに覗いた。

口に入れば、ほっこりとほぐれてゆく。

そうして、再び杯を口に運ぶ。

「、、、、、、」

二人のその繰り返しを、蓮の葉の間から顔を覗かせた伯が、水に浸かったまま眺めている。

「ひああっ」

不意に頭を、両手でもって押さえる。

「つぁッ、がふっ、、、ごふっ、、、」

そのまま、爪を立てて掻きまじり始め、水の中に体が沈んだ。

「溺れてるぞ」

「、、、、、、」

燕倪に腕を掴んで引き上げられ、ごほごほと咽むせながら、石段に這い上がる。

蒼奘が膝を叩き、

「伯」

名を、呼んだ。

濡れるのも構わず、膝に入った伯の頭部を撫でやり、手を退けさせる。

ぎゅっ、としがみつくのを好きにさせ、群青の髪を梳きながら覗き込んだ。

「、、、、、、」

闇色の眸を細めたその視線の先に、自然と燕倪の眼差しも注がれ、

「んあ？」

髪の中に、突起が二つ。

それも地肌とは明らかに異なる色。

鮮やかな翡翠色をしていた。

「なんだ、これ?!」

「角つのだ」

静かなその声音に、

「牙の次は、角?!」

燕倪のすつとんきような声が重なった。

「お前はまた耳元で、、」

顔を顰め、左耳を押さえた、蒼瑒。

「んやッ」

その隙に突起を爪で突こうものなら、伯の手が払う。

「痛いのか?」

ぶるぶると、首を振る。

「かゆいいつ」

「角付きは、大陸の神霊に多く見られるのだがな。よもや、お前の流れがあちら側とは思わなんだ、、」

「むい」

頬を抓むようにされれば、そのまま胸に顔を埋めてしまった。

「一体、どうなっていくんだ、伯は?」

「子供の成長と同じさ。潜む力を知れば、著しく変化する、、」

「ちよつと違うと思うぞ」

「何、似たようなものさ。汪果」

着替えと布を持って来た汪果が、顔を上げた。

「軟膏を」

「はい。ただいま」

汪果の代わりに蒼瑒手ずから、華奢な体を布で包み込み、水分を吸わせていく。

「あのでつかいのが、本来の姿なんだ。そもそもこの体に封じておく事に、無理があるんじゃないのか?」

顎先に手を置きながら、燕倪の低い声音。

「、、、、、、」

びくりと、布の中で伯が震えたのを、蒼瑒だけが感じ取っていた。長く伸びた髪を、包み込むようにして拭いてやりながら、

「そうかもしれんな、、」

そう、一人ごちた。

蒸し暑い、夜。

人も獣も、すっかり寝静まり、静寂だけが漂っていた。

吊った薄絹の向こうで、羽虫達だけが今か今かと獲物が近づくのを待っている。

「、、、、、、」

背を向けて掛布を掛けた男の傍ら。

背中をくつつけるようにして丸くなっていた寝巻き姿の童が、

「、、、、、、」

そつと、起きだした。

衣擦れの音をさせて、唐櫃に用意されていた水干を纏うと、その群青の髪を靡かせてふわりと舞い上がる。

そのまま月明かりの下、庭先へと躍り出て、あつという間に塀の上。

「、、、、、、」

ほんの一瞬、屋敷の内を振り返り、塀の向こうへと姿を消した。

黒髪を長く垂らしたまま、琲瑠が素足のまま庭先に走り出す。

微かに香る、潮の香り。

辺りを見回して、塀の向こうへと視線をやった。

「若君、、、、」

わたしとした事が、うかつだった、、

ぎり、と奥歯を噛んだその華奢な背に、

「行ったか、、、、」

突き出した軒庇の下に、腕組みのこの屋敷の主の姿。

「主様、、、、」

「そのうち、戻ってくるだろう、、、、」

「しかし、翡翠輪も掛けずに、、、、」

「伯は、真名を知った。解放の名をな」

鬱々とした声音が、夜気に滲む。

「海皇が眠る宮を見つけ、宙へ上がる竜脈の点を知り、冥府へ渡った、」

「ですが、」

何を言いたいのかが分かったのか、珍しく食い下がる、琲瑠。

「あれはもう、子供ではない」

「お導きになられたのは他でもない、貴方様ではございませぬか」  
憤りを隠さぬ若者を、

「いずれは、気付いたはずだ。己の中にこそ、神意はあると、」  
闇色の切れ長な眸が、見据えた。

「果たしてそれが、仕組まれたものでないと言い切れるかは、知れぬがな」

青い唇の端が、吊りあがる。

その言葉を受け、

「そのお戯れのうちに、仕えるべき主君を陸へと揚げられた臣下の気持ちなど、貴方様には分かりますまい」

琲瑠の細い目が、蒼装を鋭く睨みつけた。

「いずれにせよ。若君が戻らねば、貴方様の真名を持つ若君の方に分があるということ、努々お忘れなきよう、」

「ああ。縛り付けるには最古参の神の末だろつと、それなりの代償を払う必要があったからな、」

蒼装は琲瑠に背を向けると、

「今度は、我が真名を預ける番、」

寝所の暗がりへと、消えていったのだった。

「ん、」

勝間の大滝にある、苔むした祠。

その上で、古い書物を捲る音がする。

装丁古く、垢滲みた羊皮紙には、色鮮やかな異国の植物の姿が描かれていた。

「今、あの仔の気配がしたと思ったのだがな、」

紅の衣の女童が、顔を上げ、首を傾げた。

「こんな時分に、気のせいかな、」

何事も無かったかのように、再び書物へと視線を落としたのだった。

田畑を細く流れる水路を渡ろうとして、伯は伸ばしていた足を戻した。

見上げた先に、黒々と聳える勝間の山々。

その菫色の眸には勝間の山の地仙檜葉が眷族、緋鯉が幾つも泳いでいるのが、見て取れた。

どうしたものかと、土手にしゃがみ込んだ鼻先に、  
「む」

黄緑色の小さな輝きが、羽根を休めた。

彼方に広がる閑散とした藪に、小さな輝きがたゆとう。

揺ら揺らとして頼りない、蛍の灯り。

身の丈をゆうに越す草木へ、誘われるまま深く深く分け入って行へば、いつの間にか空気がひんやりとした山の中へ。

木肌に触れながら、木立を分け入っていく事しばらく、目の前に現れたのは、沼。

頼りなげな十六夜月夜の明かりの中で、木々にて羽を休め伴侶を探す、蛍。

覗き込んだ水の中にも、茫洋とした輝きが無数に垣間見えて、伯は手を伸ばした。

温く、纏わりつくような水の感触に、目を細め、  
「、、、、、、」

菫色の眸に、何ともいえぬ寂しさが、滲んだ。

いつそのまま、その水底へ吞まれてしまおうか…

そんな事を、考えていたのかもしれない。

その耳が、

「？」

小枝を踏む、音を捉える。

近づく音の方へと目を向ければ、薄闇の中から、人影が抜け出した。

「、、、、、、」

「、、、、、、」

伯よりも頭半分小さい、童。

膝丈の薄汚れた着物を纏い、手に枝を持っている。

伸びるがままにされた髪が、蜘蛛の巣を引っ掛けて蟠っているが、見える手足は丸々として健康的に焼けていた。

「う、、、、」

どうしたものかと、髪を押さえて後退る異形の童、伯。

一方童は、前髪から少しだけ覗いた甘栗色の眸で伯を見上げ、にこりとした。

「あ」

ぽかりと口を開けた時には、

「こつち、、、、」

その袖は握られていた。

「ああ、、、、」

振り向いた先に、沼。

手を伸ばした先には、無数の儂い輝きが、二人を見送るように揺れている。

いったいどれ程歩いただろう。

背の高い木々の向こうの空が、白々と明け始めている。

薄く朝霧に包まれた中、熊笹の茂みを抜け、苔むした斜面を登り、袖を掴む童に任せて歩いている。

重たげな臉を擦りつつ辺りを見れば、霧の中に茫洋と佇む白い影。  
「ん」

輪郭だけが浮かんでいる。

「あ、う、、、」

手を伸ばそうとして、

「お前、あれらが視えるんだな、、、」

童の手を掴まれた。

「あれは、“彷徨う者”。悪さはしないけど、構うとつきまとわれる。放っておけ」

「あ、、、」

そのまま手を取られ、木々の根を足掛かりに霧の中へ。

ゆらゆらと一定の距離を置いてついてくる、その“彷徨う者”達。それが、ふたつ、みつつと増えて行く。

「やけに、集まるな。お前、好かれるんだな」

慣れた様子で童は、一つ柏手を打った。

すると音に怯えたのか、白々とした気配は霧の向こうへと、消え去った。

「それでおまえ、捨てられたのか？」

「え、あ、、、」

言葉にならぬその声に、

「まあいいさ。オレも赤ん坊の頃に、あの沼のほとりに捨てられたんだ、、、」

童が、小さく呟いた。

ほっそりとした手が、朽木に付いた茸を採る。

淡い狐色で、折り重なるようにして生える、タモギダケ。

背負った籠には、他に露草にウバミソウ、ウルイ、フキ、イラナ。

その中に、そつと加えた。

腰を軽く叩きながら、朽木に腰を下ろしたその娘は、不思議な髪の色をしていた。

鮮やかな緋色の髪は背で束ねられ、穏やか見つめてくる眸は、深い翠。

瘦躯に纏うのは、ほんのりと碧がかった山蚕の糸で紡いだ衣だ。  
朝霧を払った森の気は、しっとりとして、肌に心地よい。

肺腑に深く息を吸い込んだところで、

「ルウシャ」

聞き覚えのある声がする。

「まゆも。いったい、どこに行つて、」

腰まであるシダの茂みが揺れ、二つの頭が近づいてきた。

シダの茂みから現れたまゆもと、彼に袖をむんずと掴まれた童を  
見て、娘は目を丸くした。

「その子は、おともだち？」

「まゆもに問えば、

「ほたるがふち螢ヶ淵に居たんだ」

「そう、」

少し複雑な表情を浮かべたが、

「あ、」

見上げる伯の視線を受けて、すぐに微笑みに変わった。

「こんな山の奥まで、大変だったでしょ？」

「、、、、、」

しゃがみ込むと娘は、群青色の髪を撫でた。

「おいでなさいな、小さなぼつや、」

差し出された、手。

「、、、、、」

戸惑う童の手に、

「ほら、」

娘の手が重なった。

さわさわと、水が流れる音が近づいてくる。

山師でさえ踏み入まぬ山奥に、子供たちの笑い声がいずことなく  
木霊している。

姿は見えないが、ところどころその小さな影が現れては消えて、

「ルウシャっ」

また現れた。

「そいつ、新入りかあ?!」

木の枝からぶら下がった少年の声。

目を凝らせば向こうの木立や、枝の上に幾人もの子供達の姿が見え隠れしている。

「そうよ」

「ふうん」

その声音とは裏腹に、眸は興味津々といった具合。

「もう少ししたら、食事にしましょうね。それまで、遊んでらっしゃい」

「うん。岩魚が掛かってないか、見てくるよ」

猿まじらの如く、子供達が駆けて行つた。

程なくして、岩がごろごろとした一帯に出た。

苔むしたその岩から岩へ、木を二本並べて渡しただけの橋が、幾つもかけられている。

娘は、二人を軽々と腕に抱き上げると、するすると岩から岩へ。

「ん、ん、ん」

鼻腔を、くすぐる香りに腕の中の童、伯は鼻を鳴らせた。

ルウシャの胸元から立ち昇る、瑞々しくもほのかにあまさを感じさせる香りであつた。

ルウシャは、その先にある少し高い大地で、二人を下ろした。

水の音が、する。

木々の向こうに、切り立った崖が窺い見えた。

そこから、水が流れ落ちていく。

雪が溶け、雨が降り、長い年月をかけて染み出した水は、見上げた先の岩肌を伝い、滝壺へと注ぐ。

水量は岩肌を伝う程度なのだが、冬ともまればその水が凍りつき、その壮麗たる氷の大滝を目にする事ができるだろう。

今の時期、長い年月の末に掘り込まれた滝壺には満々と水が湛え

られ、溢れて溪流となり山を下ってゆく。

その滝を左手に、岩肌の一角が崩れて突き出し、苔で青々と覆われた大岩の上。

運び込まれた木々が組み合わさるようにして組まれ、その隙間を隠すかのように、藤の古木がその葉を茂らせている。

その周りの茂みには、目を引く濃い橙の花が揺れている。

金魚草だ。

「こつちよ」

大人一人が、腰を折って入るのがやつとな穴が、組まれた木々の間にぽかりと開いている。

ルウシャとまゆもに続いてそこをくぐれば、薄暗がりの中、中央に自在鉤で吊られた大鍋が、ぐつぐつとしていた。

夏でも肌寒いそこには、ツキノワグマや鹿、狐の皮が敷き詰められ、そのまま寝床にもなるようで、黒い獣が一匹、丸くなっていた。獣は顔だけを上げると、入ってきた者の顔を確認して再び、まどろみの中へ。

「まゆもは、これを洗って」

「うん」

水瓶から木をくり貫いただけの器に水を汲むと、その中に山菜を入れた。

手馴れたもので水を潜らせると、引き千切りながら鍋の中へ。

鍋に水を足し、上に吊るしていた干し肉を投げ入れながら、

「あたしはルウシャ。ぼうやは、なんて名だい？」

「ハク」

「じゃあ、ハク。遠慮なんていらないよ。こつちは、一人子供が増えようが、構わないから」

その笑顔に、ぺこりと頭を下げた。

みれば、まゆもも、にこにこしている。

「ルウシャ、ただいまッ」

「たくさんいたよっ」

「るーしゃあつ」

わらわらと入ってきたのは、子供達。

手に手に、まだ生きている魚を、掴んでいる。

慣れたもので、一番年上の少年が竹の串に突き刺しては、火に当たるように並べていった。

「さ、たくさんおあがり」

「、、、、、、」

木の椀に雑葉汁が盛られ、目の前に置かれる。

伯は、囲炉裏を囲む子供達を見回した。

子供はまゆもを含め、八人。

年もばらばらだが、下の子らは、年長者が自然に面倒を見ている。まゆもの傍らで、おずおずと椀に口をつけた時には、既にルウシヤは次々と突き出される椀におかわりを盛ってやるのに忙しく、、

「あら、、、、」

ようやく一息ついて己の椀を手にした時、椀を持ったまま互いに凭れるようにしてうつらうつらしているまゆもと伯に、気づいたのだった。

「いいよ、俺が、、、、」

部屋の片隅で、食べ終わった椀を集めていた少年が筵を持つてくると、その上に熊の毛皮を敷いた。

二人を抱き上げ、そこに寝かせるのを、黒狗も眼を細めて見つめている。

昼下がり。

陽が西に傾き始めると、東の書斎に池を渡る涼風が吹き込む。

それまで岩陰に隠れていた鯉らも、陽射しが陰った今は、暢気に浮き草を追っている。

池に迫り出した飴色に磨かれた廊下を、書斎に向かう者がいる。

衣擦れの小気味良い、音。

銀盆を手にした、汪果である。

一礼して、中程まで巻き上げられた御簾を潜ると、文机に向かう主の傍らへ。

慣れたもので文机の隣に盆を置き、水滴を結んだ重厚感のあるゴブレットに、蜂蜜色の液体を注いだ。

細やかな泡が収まるのを待って、硯の向こうへ置くと、敷かれたままの符は、真っ白。

「主様？」

筆に墨を含んだまま頼杖をついている主の顔を覗き込めば、

「まあ、、、」

汪果の、呆れ顔。

「、、、、、、」

耳を澄ませば、寝息が聞こえた。

若君の身を案じて身が入らぬのかと思えば、、、暢気な、お方、

念願叶って入台が決まった娘の父が、しつこく使いを寄越し頼んだ破邪符であったが、蒼装のこの様子では、いったいいつになるのやら。

そつと長衣から腕を抜き、その肩に掛けると、汪果は静かに書斎を後にしたのだった。

水鏡。

漆の塗られた手桶に張った水面に映るのは、うかない表情の琲瑠。髪はそのまま背に流し、纏っているのは寝着であった。

締め切った薄暗い部屋の中で、まんじりともしない時を、どれほど過ごしたか？

潮の香りで満ちるのは、手桶の水が海水のせいなのかもしれない。

夢へ渡る、その前に、、、

琲瑠が、目を凝らす。

その先にあつた桶の底には、たゆとう闇が、揺らめいていた。

契約に縛られ貴方の後を追う事叶わぬこの身なら、その名を汲

み上げ、せめて解放の時を整えよう、

水の音が、する。

そしてどこか懐かしい、潮の香り。

明るい空色が、徐々に藍が滲み、濃紺から闇へ。

その青に、融けている。

それは肌にあまく、緩慢ながらも確実に思考を弛緩させ、  
“融かすもの”。

「、、、、、、」

ゆらゆらと視界に入るのは、群青色の髪、水干の袖。

朱鷺色の唇が薄く開くと、泡がゆらゆらとして舞い上がる。

頭上彼方にある、水面<sup>みなも</sup>。

掴もうとして伸ばした指先が、

「、、、、、、」

気泡となつて、融けてゆく。

ゆっくりと見通せぬ水底へ沈む、その<sup>からだ</sup>軀。

名を捨てろ…

鼓膜を揺さぶる、水の声。

知り得た真名を体内深くに刻め…

響く、水の色。

「ん、、、、」

見慣れた、人の腕の形。

その肘から先が、半透明の鰭と化していた。

今となつては、どちらが本来の姿であつたのか、、？

気泡を立ち昇らせながら、じわりじわりと変化して行くのを感じながら、そのままとろりと目を閉じた。

細やかに弾ける泡音が、聞こえる。

どこかで聞いた潮騒に似て、膝を抱えて丸くなった。

時が経つにつれ、立ち昇る気泡の数が、範囲が増えていく。

やがて全身が気泡に包まれると、水底の方から茫洋とした巨影が

泳ぎより、伯の体を呑み込むように、包み込んだ。

そのまま沈むに任せた、幼い躰。

このまま身を任せ、水に還るのも悪くないと、そう思ったのかも  
しれない。

そんな中、

「、、、、、、」

手首に触れるむず痒い感触に、睫が揺れた。

重い瞼を開けば、細い左手首に絡む、青い綾紐。

それが、気泡によって舞い上がるのを、重色の眸が捉え、

「つつ」

咄嗟に、緑の鱗を持つ鰭が、追いつがった。

気泡が綾紐を弄つかのように舞い上げる中、半身を神体へと変え  
た伯が、それを追う。

長く伸びた尾鰭が、水を捉え、蹴る。

視線の先。

「ひらひらと舞い上がる、綾紐。

人の姿を留める右手の五指を広げ、伸ばした。

けれど無常にもそれは指先をすり抜け、水上へと押し上げられる。

「だめっ」

その端が、闇を湛えた水面へと吸い込まれる刹那、

「あ」

水面より現れた力強い手が、綾紐諸共、その手首を掴んだのだっ  
た。

か・らり…

「、、、、、、」

金色の眸が、水滴を結んだゴブレットの中で、触れ合う氷を見つ  
めた。

頬杖をついていた方の、肘から先。

狩衣の袖が、いつの間にかぐつしよりと濡れている。

「、、、、、、」

筆を置くと、肩に掛けられた長衣そのまま、御簾を潜って、廊下へ出た。

「、、、、、、」

欄干に背を凭れ、濡れたままの己の手を見つめた。  
闇色へと変わる、その物憂げな眼差し。  
滴る水滴そのままに…

カ、カンツ…

「つつ」

手桶が、割れた。

じわりと床に広がり、膝を濡らす桶の水。

割れた拍子に、強か打った手を取り、

「いったい、何をお考えに、、、、」

琲瑠が低く、呟いた。

寸でところで邪魔をされ、板戸の向こうを、苛立たしげに睨んだのだった。

「ひあつ」

視線に飛び込む、黒く燻された木々が組まれただけの天井。

薬草、干した肉や魚が、渡された蔦に吊られている。

己の肩を擦り、いつもの姿である事を、確かめる。

「はわ、、、、」

さらに、左袖に触れてから、小さく息を吐いた。

それからようやく辺りを見回すと、部屋の片隅に相変わらず獣が丸くなっているだけ。

額に浮かんだ汗を襟に吸わせていると、

「?」

薄っすらと光が入る外への穴から、何やら声が聞こえてきた。

「一人で山を降りては、だめだといったはず」

凜とした、ルウシャの声に、

「ごめんなさい、」

ややあつて、まゆもの声が応じた。

他の子供達はどこかで遊んでいるのか、川辺には着物を洗うルウシャと彼女を手伝うまゆもの、二人だけ。

「腹を空かせた獣が、おまえ達に何をするか分からないんだよ？」

「でも、俺みたいに、あそこに捨てられる子がいるかもしれないじゃないか。現にハクが、」

「まゆも、」

蛍ヶ淵。

飢饉や天災、戦禍を問わず、その池で眠る子らは少なくない。

かつて、人柱として山へ捧げられ、沈められた巫女に端を発するのか、いつのまにやら口減らしと称しては望まぬ子を沈めたり、置き去りにする場所となってしまった。

多くは既に事切れているか、沈められた後。

手に掛ける事ができず置き去りすれば、大抵野犬の牙に掛かり、その命が紡がれる術は無い。

うつそうとした茂みを探せば、噛み砕かれたそれらの骨が、いくらかでも見つかることだろう。

「おまえの気持ちは、分からないでもないよ」

子供達の中でもっとも奔放な性格の、まゆも。

ルウシャは、その子の気持치를、痛いほど良く理解していた。

「誰でもふと、父母が恋しくなる時がくるんだ」

「、、、、」

その言葉にまゆもの甘栗色した眸が、彷徨った。

蛍が多く舞うこの時期に、まゆもは蛍ヶ淵に置き去りにされた。

今でも思い出すのは、初めて見た、あの蛍の輝き。

そして、母を捜した胸の、痛み。

それから数日、迎えを信じた幼いまゆもの前に現れたのは、他で

もない。

ルウシャ、その人。

「まゆも、」

俯いて、大粒の涙を堪えるその子の名を、ルウシャが呼んだ。

この山に戻ると、度々まゆもは姿を消した。

それは一重に、あの日現れなかった母の姿を、探すため。

「お前を手放す、いろんな事情があったんだ、」

「そんなの、知らないよっ」

短い叫びとは裏腹に、溢れた涙が着物に無数の染みを作っていた。

「お前は強い子だ。今はまだ、分かりたくないかもしれない。けれど、いつかきつと、なあ、」

ルウシャは、その先を続けられなかった。

「ううあああっ」

嗚咽を隠せぬその子の気が済むまで、背中を擦っては、髪に頬を寄せるのだった。

その夜。

ひっそりと、寝静まった頃合。

それまで蹲っていた獣が、身じろいだ。

大きく張った、耳。

頬の辺りから喉元につけ、黒い体毛に銀の毛しろがねが混じっている。

炯々と光る銀鼠ぎんねずの眼差し鋭い、大狼であった。

「、、、、」

しなやかな足取りで、眠る子供達の間を渡ると、

「う、、、、」

一人の襟首を咥え、そのまま外へ。

木を組んだだけの庵から、随分と離れた辺り。

闇が深い太古の森の一画で、獣は咥えていた童を放り投げた。

「ふお、、、」

幸い落ちた先が、柔らかい腐葉土を覆う苔の上。

転がった拍子に倒木で頭を打ったくらいで、後頭部を擦りながら上半身を起こしたのは、伯である。

その様子を、苔に覆われた大岩の上から睥睨しつつ、

「貴様、何が目的だ、、、」

低い声が、響いた。

牙を剥く獣を前に、

「ふえあ、、、」

伯の、あくび。

董色の眸に涙を滲ませて、ぼりぼりと頭を掻いている。

「ずいぶんと、すつとぼけたヤツだ」

「あと、、、」

「その髪の色。お前、探花使か？」

「た、か、し、、、」

首を傾げ、手を握ったり、開いたり。

「、、、、、」

「、、、、、」

睨み据えたまま、伯の答えを待つことしばし、

「ああッ、やめろッ！！俺はそれがだいっきれえなんだっ」

黒狼は、頭を振った。

脳裏に浮かんだ光景は青く、嗅覚は潮の香りを捉えたが、それを獣は拒絶した。

「むん」

僅かに顔を顰めた伯に、

「だから、人の頭の中に送ってくるなっ！！イラつくヤツだな」

「たんかし、知らないっ」

その口調に負け時と膝を叩く伯が、堪り兼ねて声を上げた。

「本当か？」

口をへの字にして、こくり。

その様子に、

「、、、お前、喋るの面倒なんだろ」

「、、、、」

しばしあって、伯がまた、こくり。

「こんなとろくさい探花使に、捕まってたまるかよ、、、」

溜息交じりに呟いて、狼は大岩から降りた。

「で、お前、何？」

「、、、ハク」

「そうじゃなくて」

董色の眸が、向かいに座った狼の双眸を見つめ、言葉を搜し彷徨い、

「、、、、」

やがて、諦めたかのように項垂れ、首を振った。

「分からないのか？」

「ん」

「さっきの潮の香り。花精でもないようだが、、、なんでまた、あの沼に」

「、、、、」

「あそこで発生したにしちゃ、この形は妙なりだな」

呟えた水干の袖から、ぽとりと落ちたものがある。

絹糸を藍と浅葱に染め編まれた、髪紐。

狼が鼻先を近づけるより早く、象牙色の手がそれを引手繰っていた。

さつさと胸元に仕舞うのを眺めながら、

「そうかい。小さいなりに、訳ありかい」

呆れたように、片側だけ牙を覗かせたのだった。

「急にぶん投げて、悪かったな、、、」

黒狼が、伯の前で腰を下ろした。

「俺は黒鉈こしこ。見ての通り、齡百の狼の化生けしょうさ。人語は解すが、まだ

神通力を使うには若くてな。ああ、煩わしいからガキ共には言うん  
じゃねえぞ」

こくり。

「お前も気がついたかもしれないが、ガキ共は捨て子だ。あいつらが  
お前を見ても驚かないのは年端もいかねえ頃から、ルウシャに育て  
られたからだ」

「ルウシャ、、、」

「あいつもお前と同じでな。人の形だが、異なる者。いや、少し違  
うか、、、」

「？」

「半分、人の血が入っている。ルウシャは、花精なんだ」

「か、せ、、、」

「生来、花精は移り気だ。だから、発生すると探花使つてのが、天  
界に連れて行く」

花精も、この世に生を受ける者に変わりはないようだが、黒鉛の  
口調にはどこか侮蔑さえ感じさせるものだった。

「住み分けをしている大陸と違って、花精と人が交わってつてのは、  
昔からこの国では良くある事のようながな。ま、大半は殺されるか、  
人柱とされるか。昔からそうやって人の中で淘汰されるのがオチな  
んだが、、、」

後ろ足で耳の後ろを掻きながら、花精が人の親か今となっては分  
からぬが、ルウシャは山に捨てられたのだと言った。

「こつこ、は、、、」

「俺はなんつーか、ルウシャの育ての親つーか、、、まあ、そん  
なところだ」

それから黒鉛は、伸ばした前肢に頸を乗せると、上目使いに伯を  
見上げた。

「で、おまえは？」

「、、、、、、」

再び黙りこくってしまった、伯。

そして訪れた、沈黙。

その問いを、己自身に問いかけているのだと分かったのか、黒鉈は前肢を伸ばして立ち上がった。

「、、、まあ、どうしたいか分かんねえなら、ここにいりゃいいさ。ここにいるやつらは、みんなそうだしな」

「、、、、、、」

大きな体が歩き出す。

見送る童の視線に気付いて、振り向くと、

「帰るぞ」

太い尾を、ゆらゆらとさせたのだった。

きゅんッ

花咲き乱れる原に、甲高い声が、響いている。

出迎えた女に続いて、屋敷の女主人の居間へ向かうべく渡り廊下を歩いていった男は、声の方へ目をやった。

涼風舞い込む藤棚の木陰。

花を落とし、青々とした葉を茂らせたその下。

腕組みをした砂色の髪的美丈夫の前で、ひっくり返っている者がいる。

「胡露ころう、、、、」

欄干に腕を乗せて、男は声を掛けた。

「これは、都守。気がつきませんで」

「随分と賑やかだな、、、、」

「ええ」

慎ましく寄り添って座る野狐二匹の前に、足を跳ね上げてジタバタしているのは水干の中に埋もれた、これもまた野狐であった。

「この父親は、大陸の高僧に仕えた護法童子サントでしたが、、、、」

溜息交じりの声音。

その視線を受けて、野狐は体を小さくした。

「齢を重ねても、神通力が身につかず、この有様。他の兄弟達は人に神に仕えているのに、この仔だけ野に生きて行くのはなんとも不甲斐ないと、母親が地仙に泣きつきましてね。こうして預かっているのですが、」

「お前、」

蒼装の闇色の眸に見つめられれば、今度は水干の中に隠れてしまふ。

「斗々烏では、世話になつたな、」

その声音に応えるかのように、水干からひよっこり覗かせていた耳が、ぺこりと折れた。

嫌がる野狐の中で唯一、共に洞窟を渡った野狐であった。

「斗々烏で何か？」

「こちらの話だ。天狐の元に、寄らせてもらつぞ」

「あ、はい」

先で待つ案内の女の方へと歩み去るその背を、見送った。

「あ、若君のお姿が、」

いつもは、真つ先に己を見つけて犬齒を剥く、伯。

それが無いと、やや寂しくもある。

どこかに隠れているのではないかと、その姿、探して彷徨う胡露の足元で、

ウククルウ…

どこか心配そうな、野狐の鳴き声。

琥珀色に染められた長い爪。

平素、煙管か杯しか持たぬその指が、今日は細心の注意を払い、触れるものがある。

朝露を、ふつくらとした花卉に結んだ、芙蓉の蕾。

女主人手ずから、雉の羽でもって葉につく虫を落とし、世話を焼

いている。

「天狐」

池の上に建てられた離宮に通された男は、七宝にて雲海に遊ぶ天女を描いた衝立の向こうから声を掛けた。

「来たか。もう少し遅ければ、見逃したえ、」

手を止め、体を傍らの長椅子に伸ばしたのは、薄衣の重ねを纏い、笹百合の花簪を挿した天狐遙絃。

「む、、小さいのは、どうした？」

平素、その傍に付き添う者の姿が、無い。

「先日、出ていった、」

「ふん。ついに愛想が尽きたか、」

傍らで、扇にて風を送っていた侍女に、

「胡露に酒を持たせろ」

「かしこまりました」

命じて退出させると、ようやく席を勧めた。

向かいに、蒼装が腰を下ろすと、

「無理も無いわ。その人の形なりで、あれのために何が出来ると言うのだ？」

さつそく、いつもの皮肉口調。

「で、いったい、何をしたえ？」

詮索好きと言うより、どこか卑下た笑みを浮かべる遙絃に、

「何も、」

にべもない。

「何もせんで、あれが出て行くものか」

踏ん反り返る遙絃の眼差しを避け、見つめた先に、卓子たくしに置かれた酔芙蓉。

先程よりも、蕾が丸く膨らんで見えた。

「はじまるぞ、」

「ああ、」

ふっくらとした蕾が、ほころぶようにゆっくりと花弁を伸ばして

ゆく。

身を寄せ合っていた花弁の先端が、それぞれの花弁へと離れた刹那、白銀の雫が、零れ落ちた。

燐粉を纏い、放ち、蟠る。

「形すら定められぬ、脆弱な生き物よの、」

「この状態で、探花使に引き渡しているのか、」？

「まさか、」

遙絃が、鼻で笑った。

咲きかけの、純白の花弁。

水差しからその根元へ少し、水をくれる。

「花が終れば、ようやく形が定まる。大抵は、その後引き渡す、」

「

「成る程な。このように無防備故、鬼に喰われるものも多いのだな」

「それにこの香りだ」

甘く噎せ返るような、芳香。

「鬼が寄るのさ、」

「鬼だけではなからう。これでは人も、惑う、」

「ああ、そういえば、」

胡露が、酒器を盆に載せて現われた。

遙絃が、艶然と微笑む。

「しばらく前と言っても、十数年も昔。東の街で、たまたま探花使が見かけたんだとよ」

「人の中で暮らす花精を、か、」

咲き零れ、白々とした粒子を纏い鉢の上で蟠る花精の原型など視界に入らぬのか、蒼装は煙草盆に置かれたままの煙管を、手に取った。

「、、、、、」

心得たもので胡露が丸め差し出す葉を火皿に受けると、その吸口に青い唇を寄せた。

「いいや。見世物小屋の雛壇を飾る巫人を、だ」

「ほう、、、」

深藍ふかあいの煙が、立ち昇った。

「見てくれは幼くてな。ただ、髪の色だけが異様に赤かったそうだ」  
「半人では、上も預かりおくまい、、、」

闇色の双眸が茫洋と、煙の余韻を探して彷徨う様を、どこか愉しげに見つめながら、

「せめて髪の色が黒ければ、手放されることも無かったやもしれぬが、、、」

「それで、、、？」

「一先ず、目付をつけたそうだ」

空になった杯を差し出せば、氷の上に置かれた翠玉の酒器が蒼装の手によって傾けられた。

平素、給仕に関しては卒の無い胡露であつたが、今日は少しばかり気が回っていない様子。

能面の如く、感情の一切を失つた伴侶の貌かおを、肴かあにしているのか？  
覗き込んでから、一息に杯を干した。

「ふふ、、、」

すでに花の先が、ほんのりと朱鷺色に酔い染まっているのを見つ  
け、遙絃が愛おしそうに手の甲で触れる。

「その探花使にしては珍しく、不憫だと思つたのか、後日再び見世  
物小屋を訪ねたそうだ」

「遙絃、その話は、、、」

口を挟んだ胡露のその先を、  
かた…り…

煙管が置かれた音が、阻んだ。  
「どうなつたと思う？」

「さてな、、、」

直衣の袖に手を仕舞いながら、蒼装は立ち上がった。  
「また寄る、、、」

衝立の向こうへと消えてゆくその背中へ、

「人だかりに駆けつければ、皆、事切れていたとき。ただな、その赤い髪の女雛<sup>おひいさま</sup>だけがどこを探しても、見つからなかったそうだ、、

くつくつと喉を鳴らす天狐の声。

それが耳孔に纏わりついて、離れない。

## 第漆幕後

徒花

（前書き）

、  
、  
西の山へ向かう一行を見舞う、突然の別れ。責任を感じた伯は、

死人還りの都守蒼装、業丸を継ぐ武官燕倪、幽身であるがこの世に縛られた伯。それぞれが紡ぐ異国絵巻、第七幕後編。。。

薄闇の中、賑やかな声がする。

「みんなびしょ濡れじゃないか、」

急に振り出した夕立の中、逃げるようにして帰ってきた子供達。乾いた着物に着替えさせるだけで、大忙しだ。

「オレの着ろよ」

「、、、、ん」

伯も水干から、柿色の小袖に着替えた。

ここで過ごすようになって、早数日が過ぎようとしていた。

「ハク、こつこつ」

「こつちだつてっ」

「ん、、」

庵を囲んで大鍋を囲む時、新しい仲間の隣りはいつも争奪戦だ。その喧騒の中、相変わらず部屋の片隅で丸くなっているのが、黒<sup>こ</sup>鉛<sup>つこ</sup>。

食事が終わり、雨で外に出られない時など子供達の格好の餌食となり、大きな耳を引っ張られたり、背に乗られたり。

そんな黒鉛は皆が寝静まった頃、決まって狩りに出かける。

明け方近くに大猪や鹿、雉を獲るのが、彼の仕事だ。

育ち盛りの子供達を、この山懷で育てて行けるのには、この黒狼の尽力によるものが大きいのもかもしれない。

「こつちやつて紐にするんだ」

「お」

食事の後、ルウシャと草鞋を編む年長の少年の傍ら、藁を擦って紐にしてゆく。

子供達に揉みくちやにされても一言も発しない自分を、董色の眸が見つめているのに気がつき、

「、、、、」

前脚に顎を預けたままの黒狼が、銀鼠ぎんねずの一瞥。

その視線に動揺したのか、視線を逸らして手を動かす伯を、ルウシャが荷物を纏めながら穏やかに見つめている。

やがて、新しい草鞋の数が揃ったところで、

「明日晴れたら、次のお山に行くからね。いっぱい歩くから、今日はしっかり休むこと」

一人一人に、真新しい草鞋を渡した。

きよとんとしている伯の手にも、

「はい」

「、、、、、、」

ルウシャが、一つ。

「ひとつところに居ては、この森が疲れてしまうから、お伺いをたてて次のお山に行くんだよ」

「おうかがい、、、、？」

「白い人影を見たら？あれとルウシャは喋れるんだ」

まゆもが、胸に草鞋を抱いたまま、鹿の毛皮の上に寝そべって言った。

「“彷徨ひたひたつ者”なんて呼んでいるけれど、あれは山の斥候しやくこうでもあって、眷族でもあるんだよ」

甘栗色の眸が、きらきらとした。

「えるにいは、聞こえるんだろ、声?!」

遊びに夢中の子供達こどもたちの分まで、寢床しどを用意していた少年は、

「声というより、歌みたいだな、、、、」

「うううっ、いいな、いいなッ!!で、どんなだった?!」

「ああもう、うるさいやつだな。早く寝ろっ」

「わっ」

少年に抑え込まれたまゆもも、負けじと反撃。

寢床しどの上で始まったじゃれ合いに、いつしか他の子供達も混ざって、

「、、、、、、、、」

まだ慣れない甲高い奇声と、その笑い声に怯え、ルウシャの側に寄った、伯。

その髪を撫でながら、

「ここじゃ毎日が、こんな調子」

その子らの様子に、ついつい頬が緩んでしまふルウシャを、伯の董色の眸が不思議そうに見つめている。

翌朝。

朝霧立ち込める中、背に必要最小限の荷を負った一行は、庵を後にした。

ここから人の足で四日程西へ下ると、また、別の庵があると言う。庵を出発してから、半刻程行った辺り。

熊笹が茂る杣道<sup>そまみち</sup>を、下っていた時だった。

「あ」

「どうしたの、ルウシャ？」

「そう言えば西の山には、南沙参<sup>ナンシャジン</sup>と蒼耳<sup>ソウジ</sup>を切らせてたんだっけ」

「ええええっ、もしかして取りに戻るの!？」

「ここまで来たのにいい」

口々に言う子供達に、

「みんなは先に行つて。あたしの足なら、すぐに追いつくから」

「でも、薬草なら西の山にも生えてるだろ？」

年長の少年が、おんぶをせがむ女童を背負いながら、口を挟んだ。

「蒼耳はいいけど、南沙参は咳に良く効くからね。すぐ戻るから、

遅れないように黒鉛に付いていくんだよ。黒鉛、千年杉<sup>せんねんすぎ</sup>の大岩で」

「、、、、、、」

前方で、のっそりと黒鉛が顔を向けたのを確認して、ルウシャは元来た道に戻って行った。

「さあ、行くぞ。はぐれんな」

再び杣道を歩き出した、一行。

一番後ろを歩いていたまゆもは、落ちつかなげに何度も後ろを振

り返っている。

「まゆも。さつさと歩けよ」

前方で、女童を背負った少年の声。

「えるむっ！！やっぱオレ、ルウシャと一緒に行って来る。後で一緒に来るからっ」

「お、おいつ」

ぱっ、と踵かかとを返し、

「行こうぜ、ハクっ」

「え、あ、、、」

ぼうつと突っ立っていた、伯の水干の袖を掴むと走り出した。

「まったく、あいつらッ」

「えるにい、ゆうまも行っていていい？」

「みいるもっ」

次々と名乗りを上げる子供達を、

「だめだ、だめだ。そんなことしてたら真っ暗になっちまうぞ。俺達は先に行って、千年杉の大岩で、ルウシャを待つんだ」

やんわり宥めながら、中々言う事を聞いてくれない幼い子供達に、頭を抱えるのだった。

帝都の外れ。

迫る山稜が、近いその辺り。

膝ほどまでに伸び揃った稲は、水を満々と湛えた田に、青々としていた。

その畦道に沿って、背の高い草木が茂っている。

太い枝の先に、駱駝らくだいろ色の穂。  
蒲がまである。

その枝の一つに、手にした小刀を押し当てている者がいる。

浅葱に染めた狩衣を纏い、長い黒髪を編んで肩に垂らした、物腰優雅な若者。

一つ一つ、見目も良いものを探しては、持ってきた布の上へ置い

てゆく。

こと花に関しては並々ならぬ入れ込みのようなのに、屋敷の内に在りさえすれば見向きもしない。

思い出したかのように、あれが欲しい、これが欲しいと我侘を言つて、屋敷の者を困らせる。

古参の女官が言つに、若者が屋敷に入つてからは、それは形を潜めるところが更に酷くなつたらしいのだが、

「ふ、ふ、」

当人は、それも苦ではないらしい。

何か思い出したかのように、寢室の花活けに飾る蒲が欲しいとせがまれた。

今日もこんなところまで出張つては、裾を汚し葉で手を切つても、どのように花活けに生ければ主が喜んでくれるか、それだけを考えている。

そうする事が若者が選んだ使命であり、生甲斐であるはずなのに

：

「これは、ふ、」

漆黒の涼しげな目元が、山稜を見つめた。

手にした小刀を鞘に収め、帯の間に挟むと、

若君の、ふ、

微かに残るその匂いを、辿り始めた。

庵の裏。

一抱えある石をどけると、その下に掘られた穴が覗いた。

敷き詰められた杉の枝を除けると、壺が並んでいる。

そのうちのひとつを空け、

「これこれ」

柿渋で染められた包みを取り出す。

懷に仕舞い岩を戻すと、元来た道へ。

小さな澤を渡り、一面苔で覆われた樹海に差し掛かり、

「痛つ、、、」

ぐらりとよろめいて、ルウシャは大地に両手をついた。

「あたたた、、」

木の根に足を置いたところ、露を結んだ苔に足を取られた。

右の足を、内側に捻ったようで、擦さすつていればみるみる膨れ、青紫へと変わっていった。

「こんな時に、、」

どこかに杖の代わりになるものが無いが、辺りを見回していれば、ルウシャっ

なだらかな苔に覆われた斜面を、猿まじひの如く駆け下りてくる童の姿。

「ああ、まゆも。それにハク、、」

「挫いたの?!」

まゆもが、足首を擦るルウシャに、駆け寄った。

「大丈夫。ちよつと、捻っただけだから、、」

「だめだよ!!オレ、先行ったみんなに知らせてくるから、そこにいてっ」

「まゆも」

「ハク、ルウシャを頼んだぞっ」

「あ、、」

血相を変え、そのまますつとんでいった、まゆも。

「まゆもは、大袈裟なんだから、、」

呆れながらも、どこか嬉しそうな表情のルウシャ。

その側に腰を下ろすと、

「いたい、、?」

腫れ上がった足首を見つめる、伯。

「少しだけ、、」

片目を瞑って苦笑するルウシャ。

その患部に、伯の手が触れた。

「あっ」

「いたい、、?」

「ハク、、、」

氷のように冷やりとした手が、足首を冷やす。  
そつと肩に触れた。

「ありがと。だいぶ楽よ」

「、、、、、、」

薄い肩だった。

華奢な体躯などを見れば、年頃同じ山育ちの子供の方が、発育が  
良い程だ。

まだ、幼い神霊だろうに、優しい子、、

見るからに異形の姿であるのに、その立ち振る舞いには、どこか  
人間臭さが伺えた。

初めて出会った際に纏っていた、この上等な水干といい、この性  
格。

人の世で何不自由無く、暮らしていたのかもしれないと、ルウシ  
ヤは思っていたのだが、

黒鉛も不思議がついていたけれど、いったいどうして蜚ほたるがふちケ淵淵に、、

、  
傍らでそつと患部を冷やす伯の耳に、邪魔そつに垂れる髪を、か  
けてやる。

「？」

その耳を押さえ、首を傾げる伯に、

「ここにおいで」

ルウシヤが、膝を叩く。

「、、、、、、」

「ほら、恥ずかしがる事ないじゃないか」

「、、、、、、」

ちよこんとその膝に、背を向けるようにして座ると、

「やわらかい髪ね」

少し癖のある、群青色の髪。

良く櫛が入れられていたのか、すんなりとルウシヤの手の中でま

とまっつてゆく。

自らの髪を束ねていた、紅や橙、桃色の着物の端切れを縫い合わせ、捻って編んだ髪紐を解くとその背に、長い緋色の髪が広がった。「ちよつと女の子みたいかな」

後頭部に前髪を集め、蝶々結びで束ねてやった。

「、、、、、、」

結び目におずおずと触れていた伯はややあつて、こくりと頷いた。それでも解こうとはせず、じつとしながら、腫れた足首を見つめている。

その肌が、泡立つ。

刹那、

「！！！」

張り詰める空気に、伯が振り向いた。

木立の中。

逆光を背に、男が立っていた。

「まさか、あなたとこんなところで、、、、」

静かな声音が、響く。

「忘れたままで、いたかった、、、、」

どこか、懐かしさを滲ませた声音と、それに似つかぬ風体。

手には、小刀が抜き身のまま提げられていた。

それがルウシャと伯の視線の先で、武骨な大太刀へ変化する。

「あなたは、、、、？」

「無理も無い。私は、あなたの前を通り過ぎる客の一人に過ぎなかった、、、、」

「客、、、、」

ルウシャの顔が、青ざめてゆくのを見つめながら、男は陽の光から逃れるように、足を踏み出した。

伏せ目がちの漆黒の眸が、瞳孔細い銀灰ぎんかいを宿す。

黒髪は、長く、腰をゆうに超す砂色へ。

銀毛で拭かれた大きな耳と、銀系の太い尾。

浅葱の狩衣をその身に纏う、瘦躯の優男。

「ウロウツ」

いつにも増して、敵意を露にする、伯。

「、、、、」

しかし、その眸は、ただ一人を映すのみ。

「ルツ、、」

ルウシャが、気負う伯を抱き寄せた。

「あたしを、、裁きに來たの？」

眼前に、迫っていた足が、止まった。

「いえ、、私は、もう探花使ではありませんから、、」

胡露が、静かに言った。

「私が地に堕ちた事で、この一件は片が付きました。ただ一言で言えば、怨恨、でしょうか、、？」

「怨恨、、」

「ええ、、」

胡露は眼を細め、

「ただ一度、見かけたあなたに興味が湧いた」

微笑んだ。

「っ」

ルウシャの背筋に冷たいものが、流れた。

優美な物腰が贗す伶俐な眼差しが、そうさせるのだ。

「結果的に私は、それで道を外れましたが、、」

「そう、、あなたが、、」

その人が誰であるのか、ようやく理解したのか、

「ハク、、」

ルウシャが、背に庇うようにして立つ伯の耳に、唇を寄せた。

「いいの。大丈夫よ」

「ルウシャ、、」

訳が分からず、立ち上がるルウシャを見上げた。

「人知れず朽ちるのなら、構わない。でも、、」

辺りの木々が、ざわつき始めた。

どこからとも無く漂う薄霧の中、茫洋と白い輪郭だけの存在が集まってくる。

「“彷徨う者”に、何ができると、、、」

太刀の柄を握り返した胡露の、無造作の一振り。

オオオオ・オオン…

霧が、割れる。

その一帯に居た“彷徨う者”達の姿は、掻き消え、霧の壁はそこだけ霧散していた。

「あたしは、誰の手にも掛からない」

「ッ」

霧と共に、ルウシャと伯に群がる“彷徨う者”達。

「ああッ」

視界を覆い尽くす白い霧に、伯が目を閉じる。

「逃がすか、、、」

太刀の一閃が、二人諸共斬り捨ててるべく、鈍い輝きを送った。しかし、

「くッ、、、、」

空を斬る感触だけが、手応え。

四方に散る、白い霧。

くん、と鼻を鳴らす。

かつて、探花使長として地上を駆けた記憶は、そう遠く無い。

それなのに、

「、、、、、、」

二人の足取りは、生きるものが等しく残すその匂いと共に、霧に掻き消されたのか、掴めない。

風が、頬を湿らせる。

いったい、何が起こったのか？

「ッ」

ルウシャの着物を握ったまま離さない手が、その先にあつた温もりが失われていると気付き、伯はようやく目を開けた。

「る、、、」

その体は、透けていた。

否、

『だいじょうぶよ。ぼうや、、、』

押し包むようにして囲む、“彷徨う者”達と同質と化していた。

そして二人を乗せた薄霧の塊が、木立を縫うように渡っているのだ。

「ルウシャっ」

その頬に手を伸ばし、

「!?!」

伯は、手を引いた。

確かにそこに居るのに、その体は透け、陽炎のように揺れている。その姿を前にして、董色の眸になんとも言えぬ感情が滲み、

「るう、、、」

ルウシャの身に起きた事態を理解したのか、着物を掴むとその胸に額を押し付け、伯は声にならぬ苦鳴を上げた。

『遅かれ早かれ、あたしはこうなるべきだったの、、、』

探花使の鼻を欺けるのは、森の、この山の力添えなくしては、成し得ない。

そしてそれは、この森である山との契約の行使を、意味していた。

『ハク、、、』

その両頬を、温もりを失ったルウシャの手が、包む。

深い紫紺しんへと沈む眸を、半透明の眼窩が見据えた。

『あの人を、知ってるのね?』

「、、、、、、」

視線を逸らそうとする伯の頬を捉え、

『なら、あの人を恨まないで』

そう、言い聞かせる。

「どう、して、」

困惑して眉を寄せる伯を、

『あたしはあの人のお陰で、黒鉛に出会えた』

ルウシャは、穏やかな微笑みを浮かべたまま、見つめている。

『黒鉛が手伝ってくれなかったら、あたしは今でも、あの小屋の片隅に居たのかもしれない。そうしたらもちろん、あの子達とも出会わなかった、』

汚臭漂う劣悪な環境の中、格子越しの空を、その名も知らずに眺めていた。

継ぎ接ぎの獣達と肩を並べ、物珍しいと髪を抜かれた。

八つの頃、客を傷つけるからと爪を剥がれ、好き者の客のためだと歯を引き抜かれそうになって、無我夢中で暴れた。

細く、骨ばった親指が運悪く世話係の目を抉り、仰け反ったところを取り落とした鉄でもって殴りつけて…

板戸を破って現れた黒い獣が『逃げろ』と吼えて、我に返った。

どこへとも知れずに逃げ込んだ、深い森。

それから、黒鉛に導きによって森の理ことわりに触れ、探花使見習いであった彼の口から、花精を知った。

『山は、新たな着族を欲する時がある。動物や植物、稀に人はその呼び声に応じ、森の一部となるの。“彷徨う者”《これら》は、山そのものでもあり、それに従う、いいや、山そのものとなった個々の、想いの形に近いのかもしれない、』

命を紡ぐための恵み育み、与え、時として、死の淵へと誘いねいもする。

その姿こそ、万物を包み込む大いなる流れ、ありのままの姿。

『あたしは、ずっと喚よばれていた。いつかこうなる日の事を、山は心配してくれていたのかもね、』

森の中にいる時、焼け付くようなあの惨劇の出来事すら、どこか遠くを感じた。

全てを、包み込まれる感覚に身を委ね、苔むした大地の上で眠る時、

あまりの陶醉感にかえって怖くなつては、黒鈷の姿を探した事もあった。

『あたしがこの地に根を張る事を、この山のこの森は歓迎している、』

群青色の髪を梳きながら、ルウシャは今、山の中から全てを視ていた。

子育てに追われる、熊鷹の番い。

草を食む野兔の親子。

深い谷の底で、ひっそりと息絶える老いた鹿の、最後の吐息。

それだけではない。

羽化して羽を乾かす蝶や、翡翠に啜えられた、鮑。

光が差し込まぬ草木の中で、萎れ頂垂れる鬼百合や、風雨に耐えかね折れた檜の木に顔を出した、新たな息吹。

山里に近い辺りでは、山菜採りの帰りの老夫婦の話し声や、蜻蛉を取ってはしゃぐ子供らの笑い声。

太刀を片手に樹海を探り歩む、胡露の姿まで、今は手に取るように視えているのだ。

これが、山に融け、森に成ると言う事、、それは痺れるような、歡喜の連続でもあった。

見るもの全てが、新しく感じる。

全てが、美しく、愛おしく、感じる。

嗚呼、あたしの子供達、、

そして何より大切な、黒い獣に導かれて前方の山を見下ろす高台を下る子供達の姿が、視えた。

手に木の枝を持った者。

背に自分より幼い子をおぶった者。

ぐずりながらも手を繋ぎ、歩を進める者。

急勾配に慣れた子供達にとっては、険しい山道もさして苦では無い様子。

黒狼を先頭に、見知った道を、行く。

毎月、ルウシャに連れられるまま、山を転々とするのを常とした子供達だ。

疲れた様子など、無い。

子供達の様子に眼を光らせ、次の山へと渡る道を選び導く、黒鉛。雨の匂いを嗅ぎ取れば、雨宿りできる洞が多くある道を通り、逆に陽射しが厳しければ、緑の深い道を選んだ。

二日もあれば、西の山に入るだろう。

「、、、、」

風上から嗅ぎ慣れた子供の匂いが、近づいてくる。  
足を止めた、黒鉛。

まゆも、、

草叢に見え隠れしながら駆けてくる、童。

「おーいつ、ルウシャが大変なんだッ」

その声を、聞いた。

「足を捻挫して、動けないんだよっ」

手を振りながら、茂みを渡るまゆも。

しかし感じ取ったのは、

いや、違う

森を渡る風の異変だ。

森が、ざわついている、、

木立の奥へ、眼を凝らした。

白いものが、見えた。

何か、来るッ

急いで子供達の前に出たところで、

「ッ」

黒鉛は、その正体に気がついてしまった。

それは“彷徨う者”でありながら、よく見知った者。  
霧から姿を現した伯の手を引いた、その人を。

『黒鉛』

その声がわんわんと、頭の中で木霊する。  
波長を同調させ、想いを送っているのだ。

白い霧の固まりは、一行の元で四散すると、

「ハク?! 何処から来たの?!」

「あ、ねえ今、ルウシャの声がしたッ」

「ルウシャ、どこ?!」

“彷徨う者”の姿が見えぬ幾人かの子供達の中。

「ルウシャ、、、」

まゆもは、黒鉛の首を抱きしめたその姿を、呆然と見つめていた。  
やがて、その体が大地へと吸い込まれると、橙の花が揺れた。

金魚草。

「、、、、、、」

その葉に黒鉛が、頂垂れ額を寄せる。

「黒鉛、、、、」

一番年長の少年が、黒鉛の傍らへ。

「えるむ」

その少年の名を、黒狼が呼んだ。

「うん、、、、」

えるむが、静かに応じた。

ルウシャは、この一番年長のえるむだけにはすべてを語り、そして子供達のこれからを、託していたのかもしれない。

動揺を隠せない子供達の中に在って、えるむは、ひどく落ち着いて見えた。

「先に行っている」

低い、その声音。

「こっこが、、、喋ってる」

「こっこ、、、、」

驚く子供達の前から、その姿が駆け出してゆく。

「どうしてこっこが喋るの?」

「こっこ、犬だよね?」

混乱している子供達を他所に、遠ざかる黒鉛。

「おいっ」

その尋常とは思えない様子に、咄嗟にまゆもは、

「黒鉛っ、オレたち、大岩で待つてるからなッ」

声の限り、叫んだのだった。

『きつと、誰が悪いわけでもないのよ』

黒露から黒鉛を守るためとは言え、行方を晦ませるために山へ還ったその人が残した、言葉。

悪いがお前の願い、俺は納得できねえ

シダが生い茂る原を駆け抜け、澤を越えた。

鹿の群を横切り、暮らし慣れた俺のその辺り。

その鼻が、捉える。

風上から微かに残された、匂いがする。

それを辿り、水の音に大滝を見た。

そして、

「久しぶりだな、黒鉛」

俺の前。

「黒露大人、っ、」  
くろろうたーれん

黒鉛は、その人と対峙した。

「お前に初めて与えた任務で、よもや地に堕ちるとは思わなかった、っ、」

低い、その声音。

「見捨てるべきだったのは、分かった。俺はただの見張りであつて、経過を報告すれば、それで、っ、」

今も昔も変わらぬ、伶俐な眼差し。

「だが、どうしても赦せなかった。あんただって、あの場に居合わせたらきつとっ、っ、」

「っ、っ、っ、」

その眼差しを受け止めれば、黒鉈は言葉を失い、項垂れた。  
探花使長。

一株も残す事無く地上に発生した花精を刈り取り、天界の神々へと引き渡す事を生業にしていたこの男を前にすれば、探花使に名を連ねた事のある者達の覇気は、黒鉈のように一様に霧散しまう。  
体に染み付いた絶対という掟が、そうさせるのだ。

不甲斐ないかつての眷族に、

「所詮お前は、人に飼われていた狗だ。<sup>イヌ</sup> お前が仕えているそれは、  
今も昔も、情だ、」

風を斬って、太刀が振られた。

大気が、張り詰めた。

「くっ、」

口の端を噛み切ったのか、血が、ぽたりと大地に滴った。

ルウシャ、

じり…

今までに感じたことのない殺気に、後脚が、大地を掴み、

「爪も牙も誇りすら失って、人の形<sup>なり</sup>にて鉄の爪を振るう今のあんた  
になんぞ、言われたくないな」

黒鉈が、身構える。

息を吐き、右肩を前に出した。

皺を寄せ、牙を剥いたその鼻先に、

「こんなところに蒲なんぞ、ありはしまい」

甘い芳香が吹き込み、辺りを包み込む。

澄んだ女の声は、頭上でした。

どこか蟲魅的すらある笑みを浮かべ現われたのは、

「地仙、何故、」

虹色の羽衣を腕に通し、漆黒の戦袍を纏った侍女二人を従えた、

天狐遙弦であった。

「その大太刀は、私が<sup>はなざりばさみ</sup>くれてやったものだと忘れたか？その封を切れば、私の知るところとなるさ」

腰に手を当てて、

「しかし、随分と勝手なことをしているじゃないかえ。初めてお前が地に這った時の土の味、今すぐ思い出させてやろうか？」

大地に舞い降りる遙絃を、その銀灰の一瞥で迎えた。

「こればかりは、お目を瞑っては頂けないでしょうか？」

太刀を離さぬ、胡露。

「人を手に掛け、あまつさえ、我が一門に泥を塗った。この者のせいで負った眷族が雪辱、長であつた私が雪ぐ<sup>こそ</sup>のが、道理、」

静かなその声音に滲む、ふつふつとした憤り。

身構えたままの黒鈷も応じ、鋭い牙を剥いた。

「そうか、」

さもつまらなそうな様子で、頭の後ろを掻きながら、胡露が太刀の柄に力を込めるのを、見つめている。

「では、好きにしろ」

その声が、合図だったのか。

「おおおッ」

太刀の柄を右腿に引きつけた胡露の咆哮。

その覇氣を受け、全身の毛を逆立てた黒鈷が鉤爪、大地を抉る。風を切つて奔る閃光を、身を伏せて避け、

「ギガガアッ」

牙を剥き、刃を反す胡露に向かい、飛び掛る。

「がッ」

黒鈷の眼前。

鼻面を押さえるようにして広げられたのは、手。

仰け反った黒鈷の腹には、二の腕と膝が、押し付けられていた。

一方、

「あぐッ、」

胡露の端正な口元からは、紅い飛沫。

「お前が言つたんだ、」

声は、顎の下で聞こえた。

胡露の脇腹を抜けて背に、琥珀色に染められた爪もたおやかな手が、生えていた。

「例え同門であつても、負つた雪辱はその長が雪ぐべきものだとな、」

刹那の内に、二人の間に割つて入つた、遙絃。

その瘦躯が、左手で肉を裂き、右腕と膝だけで獣の巨軀を抑え込んでしまつたと言うのか？

「遙絃、」

鈍い音を立てて太刀が大地に落ちると、遙絃は素早く手を引き抜き、後方に跳躍。

紅い鮮血が噴出し、みるみる大地に血溜まりを作つた。

よろめきながら、大地に崩れ込む、胡露。

侍女達が持つ絹布に、体液で濡れそぼつ腕を拭かせながら、

「黒鉛と言つたな」

「あ、ああ、」

「拾つたとはいえ、今は我が眷族に相違ない。二度と、そなたらに関わらぬよう思い知らせる故、どうかこの件、我に預けてはくれまいか？」

「、、、、」

黒鉛の眼差しが、彷徨つた。

赤黒い染みが広がる大地に、かつての主。

「そう簡単じゃ、ないんだ、」

搾り出すような、

「なんで、」

声音。

「なんで、ルウシャは森に同化しなきゃいけないんだッ」

子供達を残して行つてしまつたその無念さを思つと、どうしても納得がいかなかった。

今一度飛び掛ろうと、身を低くしたその鼻先に、

「そうか、」

「!？」

投げ落とされたものが、ある。

銀灰の、眼球。

左半顔を押さえ、砂色の髪を乱して仰け反った胡露の傍らで、

「無論、当方に異存はない。気が済むまで、つき合わせて貰うぞ」

艶然と微笑む、天狐。

「なあ、胡露。心の臓を握りつぶす前に、指を裂いてやろうか？」

「よう、げ、、、」

「座興だ。どうせなら、キレイな声で鳴いてみせてくれよ、」

冷や汗が噴き出し、滴る細い顎先を、琥珀色の爪が喉仏まで辿った。

その仕草に、

「やめてくれッ」

ぶるぶると黒鉛の前脚が、震えた。

「うん、、、？」

自分で何を言いたいのかも分からないのに、

「もういいっ、もう、、、」

そう、叫んでいた。

「やめて、くれ、、、」

頭が、割れるように痛かった。

ここ数十年、この男の影に怯え、隠れて暮らして来たと言つのに、

俺はなんて情けねえんだッ

この男が、地を駆けるだけの己を眷族として迎えてくれた主である事を、今でも恩に着ている。

そんな自分が、頭の中に居る。

黒鉛は、喉の奥で苦鳴を上げた。

やがて、

「天狐の神様」

搾り出すような、声だった。

「なんだえ、、、？」

「あんたに、預ける」

遙絃に、言った。

「最初に裏切ったのは、俺の方だ。俺みたいなのにも、地仙になれるのだと、眼を掛けてくれたのは、胡露大人だけだったのに」

「、、、、、、」

「俺は、そんな大人タイレンからも、逃げた。こんな俺が、あんたに頼んで大人タイレンの命まで奪う事になったら、、、」

黒鈷の眸は、

「俺は、、、ガキだったルウシャを痛めつけた奴ら以下、だ、、、」  
決りだされた胡露の眼球を、見つめていた。

「今後は、我が着族に勝手な事はさせぬよう、目を光らせる、、、」  
すまなかった、そう口にした天狐遙絃に、黒鈷は無言で背を向けた。

黒狼が木立へと姿を消すのを、遙絃の炯々と光る碧玉の双眸が、見送っている。

「おい、蒼装」

寄せられた怪異に関する嘆願書の写しを、受け取りに訪れた都守を、気安く呼ぶ者がいる。

「今日辺りどうだ？」

見れば、若い衛士らの中から抜け出してくる、大男。

「燕倪」

「快気祝いに銀仁も呼んで、皆で屋敷でいっぱいやろうと言ってたんだ。あの衛士の嫁の実家が漁師でな。釣った若鮎を分けてもらう事にしたんだ」

「骨も繋がらぬ内にか？気の早い快気祝いだな、、、」

「酒が呑める口実さえあれば、そんなことどうでもいいんだよ。なあ、お前も来るだろ？伯も連れて来いよ」

その鈍色の眼差しから逃れるように、蒼装は歩き出した。

「おいっ」

「今夜は程々にしておけよ。嵐が来るぞ、」

相変わらずな背中を見送る燕倪の元に、

「備堂様」

「やっぱりいらっしやらないか。残念だなあ」

「ああ。都守とお近づきになれると思つたのに、」

集まる、若い衛士達。

口々に、好きなことを言っている若者の声など耳に入らないのか、  
「嵐？こないいい天気なのに、何言ってるんだか、あいつ、」

顰め面で雲一つ無い青空を、見上げている。

牛車の前で待つ琲瑠が、主のために無言で簾を上げた。

乗り込む途中、

「琲瑠」

鬱々とした、低い声音が掛かった。

肩を揺らした琲瑠の視線の先。

薄暗い車内に腰を下ろした、白い浄衣の背。

「鋼雨こつうに鞍をつけておけ」

「あ、」

「長雨が続けば、狭い厩舎だ。辛かるう、」

琲瑠は、震える手で簾を降ろすと、

「畏まりました」

静かに、それに応じたのだった。

「馬鹿なヤツだよ、お前は、」

腹を押さえ、半身を血で染めたままの男に、女は笑いながら言つた。

「地仙こそお変わりなく、見事なお手並みで、」

凄惨極まりない姿ながら、

「ついでにその舌も、引き抜いてやろうか？」

「貴女あなたが、お望みならば、」

いつもと変わらぬ微笑み湛えた薄い唇で、男は返した。

その態度に呆れた様子で、

「しかし、私に刃向かうと知って、どうしてこんなことを、」

椎の古木の根に背を預けた胡露。

その傍らに転がっている、武骨な大太刀を見つめた。

柳腰に手を当て、首を傾げる女を前に、

「さて、」

口調とは裏腹に、銀毛で葺かせた耳は申し訳なさそうに折れていた。

「探花使であろうと、この帝都における一帯は我が負った地。その花、徒花と言えども勝手に手折る事、攫う事赦さぬ。ここが彼の地と違ふのだと、お前も知っておるのに、」

その言葉を受け、少しの間血塗れた太刀を眺めると、

「それに甘んじて、のうのと生きる自分を、追いつめたかったのかもしれない、」

溜息と共に、吐き出した。

「貴女に拾われ、すべてを忘れ、やり直そうとしていたのですが、」

その人を見上げて、男は笑った。

「結局の所の私は、何も変わっていなかったようです」

どこか晴れやかなその笑顔に、女もつられて笑った。

「この体たらくじゃ、私の伴侶は務まらないえ」

止めを刺すのならば、近づいた二人の侍女を手で制し、

「まったく、焼かせるじゃないか。この私に世話を、ね、」

投げ出されたままの血塗れた右手を取り、そのまま頬に押し当てた。

「いけません、遙絃、」

手を引こうとするが、女の手がそれを許さなかった。

「いや、むしろ大馬鹿なのは、私の方か、」

くつくつと喉をならすと天狐遙絃は、胡露に自らの肩を、貸した。

のだった。

見上げる程に高く、居並ぶ千年杉。

生い茂る葉によつて空は覆われ、辺りは薄暗く、大地は張り出した根によつてでこぼことしている。

そこに、山の頂の辺りから剥がれ落ちたのか、黒茶けた巨岩が二つ、折り重なるようにして苔むしていた。

すすり泣きが洩れている。

子供達が、身を寄せ合うようにして、張り出した根の一つに腰を下ろしていた。

陽が、傾きだしていた。

「ルウシャ、どうしたのかな」

ぼつりと、誰かが言つた。

「黒鉛も、、、」

小さく声を上げたのは、えるむの背から離れない齡二つ三つの、女童。

「、、、、、、」

えるむは、無言だった。

それどころか、いつもは真つ先に辺りの散策に出かけるまゆもまでもが、えるむの傍らで黙りこくっている。

伯は、一向から少し離れた所で、杉の幹に背を預けていた。

そこへ、駆け込んだきた黒いものがある。

「揃いも揃つて、辛気くせえ顔しやがつて」

「黒鉛ッ」

それは、からりとした口調であった。

口に銜えた柿色の包みを、えるむの足元に置くと、

「さ、行くぞ」

多くを語らず、顎で促した。

その黒狼に、

「わっ、てめっ、何すんだッ」

「こつこおッ」

「うわわぁぁんっ」

子供達が群がった。

「むう、、、」

もみくちやにされながら耳を折り、目を細めて呻く、黒鉛。

己が喋る事を知った子供達が、怯えていたら、、、？

黒鉛は何よりそれが、怖かった。

「みんな、心配してたんだ。黒鉛まで、どっかに行っちゃうんじゃないかって、、、」

少し安心した表情を見せた、えるむ。

「黒鉛」

まゆもの、もの言いたげな眼差し。

すべてを視ていたその眸に、嘘はつけなかった。

「一度しか言わないから、お前ら良く聞けよ。ルウシャはな、森に還ったんだ」

「帰った？」

「どうして一人で?!」

今にもまた泣き出しそうな顔が、見上げてくる。

「ルウシャはな、森の精だ」

「え、、、」

「森の、、、？」

目を丸くする、子供達。

「大体俺が喋るんだ、何も不思議はねえだろ？」

その問いに、一様にこくりと頷いた。

「今は、この森のすべてに、ルウシャがいる。ここいらの草木にも、な」

「見えないよおっ」

女童を宥めるように、頭をその肘に擦りつけながら、

「いずれ、視えるようになるさ。えるむとまゆもが、良い例だ」  
「えっ」

「視えただろ？ルウシヤを」

片目を瞑った黒狼に、二人は顔を見合わせる。

「ルウシヤ、いた！？」

「ちゃんと見えた！？」

子供達に押されて、

「ああ」

「うん」

頷いた。

「あたしにも、ちゃんと見えるようになる？！」

「ああ、きつと」

「今もちゃんというる？」

その問いに、黒鉛は辺りを見回して、

「ああ、今もそこに、、、」

頷いた。

えるむとまゆもは黒鉛の視線の先に、遠巻きに茫洋と佇む“彷徨者”の姿を見た。

陽炎のようにゆらゆらと、一行が向かう先へと消えてゆく。

「行こう。暗くなれば、ルウシヤが心配する」

えるもが子供達を立たせると、

「うん、行こう」

まゆもも立ち上がった。

「少し急ぐからな。疲れたやつは、俺の背に乗るといい」

「大丈夫ッ」

「だって、ルウシヤが見てるんでしょ？！」

黒狼の前を、それまでえるむにおぶわれていた子供達が、袖で眼元を拭い拭い、歩き始める。

その背中を見て、

この子らは皆、お前に似て気丈だな、、、  
黒鉛はそう思った。

「ん？」

それに続こうとした黒鉛が、ふわりと巻いた潮風に、振り返る。  
茂みの向こう。

「ハク、、、」

薄闇の中に、白い水干の袖が、ひらりと、みえたきりだった。

宵闇に包まれた時分。

東の山稜に掛かった重たげな、雲。

往来を家路を急ぐ人々も、いつ降るか分からぬ雨の気配に笠を目  
深に被り、または傘を引き付けている。

旅人や商人は、纏った蓑の前を合わせ、空を見上げては一様に恨  
めし顔だ。

湿気を含んだ生暖かい風が、往来を抜けて開け放たれた門より吹  
き込む中、

「、、、、、、」

うつそりと空を仰ぎ見ている者が、居る。

風に弄<sup>な</sup>られ、肩に遊ぶ白い髪。

白い狩衣を纏った蒼装、その人である。

門前に焚かれるはずの篝火が今日は消え、茫洋と浮かぶ白い姿も、  
この日ばかりは宵闇の中に沈んで見えた。

表情を浮かべぬその人の視界に、往来を横切る細い影が、過ぎつ  
た。

そのまま足元へ、闇色の視線を落せば、

「お前、、、、」

ちよこなんと、座っているものがある。

口に、鬼灯の枝を銜<sup>く</sup>えた、狐。

闇の中でも炯々と良く光る、琥珀色したつぶらな瞳が、見上げて  
いた。

膝を折り、その枝を受け取る蒼装の耳に、馬の蹄の音が近づく。

「主様、、、、」

漆黒の堂々たる肥馬、鋼雨。

青乳色した鬘を振り乱し、落ち着き無く首を振るのを、轡を取った琲瑠が宥めている。

その背に乗ると、傘を手にした汪果が、提灯を差し出した。

「灯りは、いい、」

鞍へ、傘だけ琲瑠に結ばせると、

「待たせたな、」

いつまでもそこを動かぬ狐に言った。

差し向けた、鬼灯の枝。

心得たもので、野狐は高く飛び跳ねると、青い燐光となってその鬼灯に宿った。

一度、鋼雨の手綱を引き絞った蒼装は、並んで佇む汪果と琲瑠に一瞥与え、

「後は任せた、」

銀の馬蹄を響かせて、往来へと消えていった。

その姿を見送り、遠ざかる蹄の音を聞きながら、傍らで俯く琲瑠へ、

「一日一日と過ぎる度、眉間の皺が深くなっていた事、わたくしが気付かぬ訳ないでしょうに、」

少し呆れたような、汪果の眩き。

「、、、、」

傍らの琲瑠が沈黙しているのを尻目に、

「いけませんわ、殿方の瘦せ我慢。それも二人して」

「はあ、すいませぬ、」

さすがに今回ばかりは堪えたのか、傍らで琲瑠が頂垂れた。

肩を落したまま、

「すべては、私の不徳の致すところ、」

世話役を名乗っているのに、この有様。

主君である伯が抱えた不安にも気付かず、使役主である蒼装のやり方に対しても、つい感情のまま口調を荒立ててしまったあるまじき失態が、どうやらそうさせるようで…

平素、くると氣を回す事に長けるこの若者にしては、珍しい事でもあった。

「私がつまらぬ意地など張らず、主様に頼んでいればこんな事には、  
、、」

「頼んでいても、同じこと、、」  
「え、、、？」

汪果は、けろりと言いのけた。

「やはり、これで良かったのではないのかしら。だって、離れてみなくて、気付かぬ想いもあるでしょう？」

「そう言うものでしょうか、、、」

眉を寄せ、首を傾げる若者に、

「たまには突き放して、ありがたみてやつを分かせてやらなくては」

汪果は背を向けた。

踵を返した汪果の後を、琲瑠は不思議な表情を浮かべて追いかけた。

当初は、幼神である伯の一切を琲瑠に任せていた、汪果。

それは絶対的な畏れと敬いから、端を発していたのに…

「わたくしは膳を整えますから、琲瑠は燈明の仕度を。それから湯船に水を張って、薪を運んでおくように」

「あ、はい、、、」

「若君がお好きなお酒も。そうそう、庭に、からまつはもう咲いていたかしら？」

「ええ。先日、西の庭に、、、」

「氷雨に、お体を冷やしてはいけないから、からまつと一緒に酒をお召しになれるよう、摘んでこないと、、、」

あれやこれやと指を折り、母屋を炊事場の方へと向かう汪果。

その背が廊下の向こうに消えてから、ひとりぽつりと残った琲瑠は、ぺこりと頭を下げたのだった。

嵐が、近い。

上空では風が巻き、雨の匂いが漂い始める。

黒々と湧く、雨雲。

遠くから渡ってくる、稲妻の気配。

身を小さくする事しか、今はできない。

「、、、、、、」

伯は、膝に顔を埋めた。

古木に開いた洞の中。

小さな体が、より小さく見える。

胸に渦巻く、痛み。

蟠る、熱。

鎮めようとじっとしているのに、それは勢いを増して燃え盛る炎  
ように、胸中を焦がす。

最近、人の世に在って、それが多くなってきた。

きつと、その人の側にいるせいだ。

山を越え、海を渡ったその先へ。

そこではきつと、こんな想いをしないで済むはず。

漠然とそう思ってたのに……

この分ではどうやらそれは、違ったようだ。

頭上。

空を覆えとばかりに生い茂る木々の葉を、穿ちながら渡る雨音が、  
近づいてくる。

やがて、この身にも等しく降り注ぐことだろう。

肌寒い風が、辺りに漂い始めた。

目を瞑っていても、雨雲を渡る稲妻の閃光が瞼を弄うのが分かる。

「う、、、、」

膝に目頭を押し付けて、耳の横に回した腕を絞めた。

煩わしい、稲妻の声。

犬歯の辺りが、憤りにむずむずとする。

「うう、、、、」

苛立たしげに牙を剥き、憤り紛れに声の限り叫んでやろうと顔を上げ、

「っ」

息を呑んだ。

雨は、とつくに辺りを包んでいた。

その中に、傘を差した長身の男が、一人。

「、、、、」

手には、青い燐光を放つ、野狐提灯。やこちょうちん

野狐が宿った大振の鬼灯が二つ三つ、その姿を見つけて喜ぶのか、猫のような声を上げて、ゆらゆらとした。

白い狩絹の袖が、揺れた。

左手から、はらりと取り落とされる、野狐提灯。

大地に当たって、燐光が舞い上がる。

現れたのは、若い狐。

鬼火を纏って雨の中、再会を喜んでか、伯の回りを飛んだり跳ねたりしながら、

キュ……

その足に太い尾を巻きつけたのだった。

目の前。

「あ、、、、」

その左手が、

「伯」

差し出された。

「ソウ、、、、」

伯は、手を胸の前に上げたきり、その人の手を取れずにいた。目を逸らせ、うつむく。

「、、、、、、」

その手を、男の纖手が、取った。

小さな手を包み込むようにして握ると、蒼莢は何も言わずに歩き出した。

「、、、、、、」

手を引かれ、ようやく広いその背中を見上げた。

その先に、雨に濡れたその人が、いた。

後ろを歩く伯の頭上に傘が来るよう、雨に打たれぬように。

キョクルル：

伯の顔を覗き込んでいた野狐は、小首を傾げた。

ククルル：

立ち止まると、野狐は転々とぬかるむ大地の上にて光る輝きに、

鼻先を近づけた。

「う、、、、」

はらはらと溢れて零れる、涙石。

それを拭い拭い、

「いた、い、、、、」

こみ上げる嗚咽に、喉が圧迫されている。

胸が軋んで悲鳴を上げ、それを堪える事<sup>こた</sup>に必死になって、顔を上げる事が、できなかった。

溢れ出すこの痛みは、だから何だというのだ？

もどかしくも甘美な、この痛みを、なんと呼ぶ？

「うあああああ ツ」

叫ぶ。

大地に、空に、雨に。

耐える事もなく、吐き出そう。

今は、その人の手の温もりだけが、道標。

「ああ、、、、」

肩に遊ぶ、白い髪の手。

それに伝う雨粒に、

「今日は、久々によく降りそうだ、、、、」

目を細め、家路を急いでいた足の運びを、緩めた。

その涙の跡を、感情が齎す痛みを、この雨が甘く包み込んでくれる事を、望んでいたのかもしれない。

草を食<sup>は</sup>んでいた鋼雨<sup>こうう</sup>が、顔を上げた。

激しく枝を揺らすのは、大粒の雨。

けれど、その一帯は空を覆う葉が、まるで天蓋。

雫は砕け、小さくなつた。

その雨粒は木々の幹を伝い、あるいは、葉の先からぽたぽたと滴り、大地へ還る。

森は、降り注ぐ雨を、ただ優しく受け入れる。

ゲゲル…

鋼雨は、童の手を引いて現れた、主人の元へ。

その手が手綱を取り、労うかのように首筋を叩けば、鋼雨はゆつくりと歩き始めた。

一先ず落ち着いたのか、しゃくりあげる童の背に長衣を掛け、

「、、、、、、」

解けかかっていた髪<sup>かみ</sup>の蝶結びを、直してやった。

「うううッ」

何かを思い出したのか、声を上げて胸にしがみつく伯。

「、、、、、、」

その華奢な肩に掛けた長衣の前を合わせる、蒼装。

鋼雨は、緑深い森の闇がたゆとう、緩やかな斜面をゆっくりと下つて行く。

河鹿の声。

雨の匂い。

そして、遠ざかる蹄<sup>ひづめ</sup>の音。

この森を去る一行を、茫洋とした陽炎一つ。  
いつまでもひっそりと、見送っていた…

## 第漆幕後

### 徒花

#### （後書き）

この季節、濃い翠の中で一際目を引くのか、金魚草の橙<sup>だいだいひ</sup>緋。

正式名称は、松扇水仙。

幼い頃、この花の名は、そのまま金魚草と教わった。だから、そのイメージで書いたのだが、実際にキンギョソウと言うのは、淡いオレンジだったり、イエローやピンクを呈した、見るからに渡来の花。画才皆無の俺には、挿絵は無理だから、せめて写真だけでも挿絵代わりになれば、と思つては、いる。

## 第捌幕

鳴神

(前書き)

空から落ちてきた、獣。かつての自分の姿を重ねた伯は、  
、

死人還りの都守蒼装、業丸を継ぐ武官燕倪、幽身であるがこの世に  
縛られた伯。それぞれが紡ぐ異国絵巻、第八幕。。。

## 第捌幕

## 鳴神

良く晴れた日だった。

空は青く、白い月が、中天に掛かっていた。

「、、、、、、」

忙しなく鳴き始めた、蝉の声。

陽射しがこれから厳しくなる、朝の時分。

気に入りの楓の梢から降りた伯が、庭の中島に突っ立っている。

強い陽射しに眼を眇め、随分と長いこと空を見上げていたが、

「、、、、、、」

ようやく視線を落とした先は、なだらかに盛られた築山の辺り。

そこに、もかくものが、ある。

キキュキュキュ…

鋭い鉤爪。

らくだいろ

駱駝色の体毛には、黒い斑点がある。

白い柔毛が密集した腹を晒し、もかくものは、獣の姿をしていた。

「、、、、、、」

鈍い音に驚いて、梢から転がり降りれば、この通り。

どうしたものかと佇むその華奢な背に、

「ああ、若君。こちらにいらっしゃったのですか」

大池の向こうの母屋から、声が掛かった。

「ハイル、、、、」

手に盆を提げた琲瑠が、その姿を見つけて平橋を渡ってくる。

「、、、、、、」

ぱつと、伯が駆け出した。

つぶらなその眸が、駆け寄ってくる伯の姿を捉えると、

ギイツ、ギギツ

鋭い鉤爪を振り回しながら、力の限り暴れ始める。

しかし、

くわッ

鋭さを増した犬歯を剥かれると、

イイイ…

とたんに萎縮し、身を縮こませた。

一方、

「マギの国より、蜂蜜の蒸し物を届けさせま、、若君？」

蜂蜜に目が無い、幼い主君の喜ぶ姿を探そうとして、琲瑠の視線は庭を彷徨った。

先ほどまで、そこにいたはずのその姿が、無い。

「あ、、、」

彼方で、白い水干の袖が、翻った。

阿四屋あしやの向こう。

花を落とした南天の、青々とした茂みが広がっていた。

藤棚の下。

簡素な、籐とうの揺り椅子。

そこに腰を下ろしていた男は、銀恢ぎんかいの眸を細めた。

陽光が降り注ぐ、広大過ぎる庭に、動物達の姿が無い。

雲一つ無い、空。

澄みきった、大気。

そのせいかな、いつもより彼方の山稜が迫って見える。

蓮華、竜胆、女郎花、撫子、彼岸花、福寿草、萩、蠟梅、花桃、芍薬、木蓮、金鳳花、槿、、

花々は、いつにもまして狂い咲いて、芳しいはずのその香りは複雑に交じり合っている。

常人であれば、肺を蝕まれることだろう。

風が木々の枝を揺らすのに、この世界には音という音が、失われ  
ていた。

「、、、、、」

屋敷の女主人の心がそうさせるのだと、その男は知っていた。

銀糸で雌雄の孔雀を縫い取った、深藍ふかあいの長袍。

その胸に流れるのは、ゆったりと編まれた砂色の髪。  
長い前髪が、半顔を、覆っている。

脇腹の辺り置いた、骨ばった手。

そこだけ布地の色が、濃い。

懐の傷は、その治癒力でもっても塞がらず、今だ血塗られたまま。  
完全に塞がるには、まだ少しかかりそうだ。

「、、、、」

細い顎が、上向いた。

辺りが、薄暗い。

俄かに湧いた薄雲が、太陽を覆ったのだ。

溢れる色彩とは対照的に、どこか無機質なその世界。

そこに、

「胡露、、」

音が、生まれた。

首に絡む、冷たい女の、細い指。

深い花色に染められた長い爪が、喉仏に触れる。

男が、仰け反った。

晒されたその喉元に爪を立て、薄皮の感触に、紺碧の双眸が眇すがめられた。

その眼差しの先。

深い闇を湛えた眼窩が、こちらを見つめていた。

ふつくらとした丹唇が、そつとその闇を、塞いだ。

「、、、、」

「、、、、」

重なつて伸びた影が、名残惜しそうに、離れた。

再び砂色の髪で隠された、半顔。

「赦せよ。お前をそこまでさせるその女雛に、妬いたのだから、、」

「

膝の辺り。

縋るように頬を寄せた、その人。

「私が心を砕く方は、御身ただ一人、」  
いつも変わらぬ穏やかな微笑みを湛えたまま、胡露は優しく、その髪を梳くのだった。

とある公家の屋敷。

盆は過ぎたというのに夜な夜な現われては、何故か向かいの屋敷の主の夢枕に立つ幽鬼の供養から戻る頃、門前には篝火が焚かれていた。

礼にともらった白桃の箱を、琲瑠に渡すと、母屋ではなく、木々が植えられ、大池のある庭へ出る小道へ入った。

吹き抜ける涼風が、肩に遊ぶ銀糸の髪を、弄ってゆく。

立止ったのは、可憐な鷺草揺れる、楓の木の前。

見上げた先に、

「伯、」

その姿が無い。

家主が不在ともなれば、この梢で休むのが、ほとんどなのだが、

「、、、、」

耳を澄ませば庭のどこかで、何やら木々のざわめきが、聞こえる。

見上げた木の葉の彩と、影。

足の下にある、土の冷たさ。

喧しく鼓膜を打つ、蝉の声。

水面に刻まれる、風と陽光が織り成す、輝き。

獣にとってどれもこれも、新鮮な発見の連続だった。

列を成す蟻の群を見つけ、おずおずと爪を立て、鼻を近づけ、

ヒャンッ

「、、、、」

傍らで見守る伯の元に、よたよたと逃げ込んだ。

まだ上手に大地をとらえる事ができないのか、その四肢の動きはどこか緩慢とし、滑稽だ。

それでも好奇心の方が勝るのか、興味の赴くままに辺りを、散策。ククク…

時折、伯の姿を確認するように振り向いては、喉の奥を鳴らす。

一日中、飽きるでもなく獣の傍らにいたためか、すっかり伯に慣れた様子。

「お、、、」

頭上を覆っていた木の葉から垣間見える空が、茜色に暮れ始める夕暮れ刻。

伯は何を考えたのか、青い髪紐を解くと、それでもって木の幹に獣をぐるぐる巻きにし始めた。

キギユ…

「、、、、、、」

大人しくされるがまま、幹に縛り付けられた、獣を見つめていると、

「伯、戻ったぞ、、、、」

腹腔に響く、低い声音。

びくりと肩を震わせた伯は、

「、、、、、、」

南天の茂みから、外を覗いた。

宵闇の中、白い髪の男が、立っている。

「ソウ」

茂みの中から伸びた小さな手を、蒼装の手が取って、その華奢な体を引き上げた。

「酒の相手を拒むのなら、もう少し上手く隠れたらどうだ、、、、？」

闇色の深い眸が、口調とは裏腹に穏やかに見つめてくる。

髪についた蜘蛛の巣を払い、衣についた木の葉を落すと、蒼装は歩きだした。

「燕倪に泣きつかれ、今宵は左大臣宅にて行われる祝賀の宴に、付

き合つ事になった。半刻もしたら迎えが来る故、そうそのんびりとお前と膳を囲めぬが、赦せよ、伯、  
「うん」

その傍らに続き、

「、、、、」

振り返る。

ひっそりとしたままの、南天の茂み。

「どうした、、？」

足を止めた、その人。

ぶるぶると頭を振って、伯は先に行く蒼装の傍らに、駆け寄つたのだった。

西の空が、深藍へと彩いろどりを変えた頃、白い人影が門前に現われた。  
灰浅葱はいあさぎに白鷺を染めた抜いた直衣を纏い、烏帽子を頂いた、その人。

遊び疲れたのか、いくらも杯を重ねぬ内に、伯は丸くなって眠ってしまったため、そのまま起こさぬよう支度を終えた、蒼装である。

「主様」

珍しく宴の誘いを受けた蒼装に、琲瑠が声を掛けた。

「何だ、、？」

うつそりと応じ、振り向く。

その闇色の眼差しに見据えられれば、

「あの、若君の様子が、、」

つい、語尾が小さくなってしまう。

「ああ、、」

何を言わんとしているのかを察したのか、蒼装が袖を探った。  
琲瑠の鼻先に突き出されたのは、駱駝色の獣の毛。

「これは、、」

「衣に、付いていた、、」

「いったい、何が、、」

「雷獣だ」

「は？」

困惑して、思わず細い眉を寄せる、琲瑠。

「雲の中に暮らす獣よ。鳴神とも言つ」

「よりによつて、そんな、、どう、いたしましょう？」

どうも、普通の獣ではないらしい。

何とかならないものかと、思案顔の琲瑠に、

「放っておけ、、」

にべも無く、言い放った。

「そう言われまして」

食い下がる従者に、

「迎えを待たせては悪い、、」

汪果が捧げ持つ盆から、扇の一つを選ぶと、あっさりと背を向け、門前につけられた車に乗り込んだ。

深々と頭を垂れて見送る汪果の傍らで、琲瑠の当惑した顔が、牛追い童子や供人に守られて遠ざかる牛車を、見送っている。

蒼装を乗せた牛車が、往来の向こうに消えた頃、見送る琲瑠の袖を引くものがある。

「若君？」

先程まで、すやすやと眠っていたはずなのだが、董色の眸は、ぱちりと大きい。

さては、狸寝入り、、？

自分も行くと、いつもの我儘を言い出すのかと思えば、

「え、翡翠輪ですか？」

出掛けるからと、翡翠輪をせがむ。

「なにもこんな時分から、お出かけにならずとも、、」

宥めようと膝を折った琲瑠。

しかし、彼を見上げるその董色の眸は青々と深く、  
「ハイル」

「う、う、若君」

澄んでいた。

茫洋とした眸はもう、そこにはない。

「、、、、只今、お持ちいたします」

「ん」

折れたのは、勿論琲瑠の方だ。

一旦、母屋の奥へと姿を消すと、手に漆塗りの箱を持って現われた。

欄干に座って待っていた、伯。

箱から翡翠の連珠を取り出すと、

「くれぐれも、お気をつけて、、、、」

その細首に、掛けた。

群青から、黒髪へ。

董色の眸は、漆黒へと、染まる。

髪から覗いていた、小さな翡翠色した一对の角。

「、、、、、、」

手で、消えている事を確認すると、伯は庭に舞い降りた。

草履を引つ掛けると、庭の大池に浮かぶ浮き草を足場に、僅かな波紋を刻んで、対岸へ。

あつ

池の淵にて、ちょこなんと座る獣を小脇に抱えると、そのまま堀の向こうへと、消えてしまった。

「あれが、雷獣？ なんといいのか、鼬のような気も、、、、」

その姿を目にしても、どこか腑に落ちない琲瑠であった。

「なんともならんのか、、、、」

臙脂の直衣の袖から、武骨な腕が覗いている。

雲の掛かった望月は、彼方の山稜、その上。

満々と水を湛えた湖面にあつらえた舞台には、楽師らが居並び、舞い手は篝火焚かれた明かりの中。

左大臣備堂真次の屋敷である。

「何をだ？」

突き出された杯に、酒器を傾けながら、

「お前のその仏頂面だよ」

燕児の渋い顔。

「なんとも、」

青い唇に当てた杯を、

「そうだろうな」

恨めしげに眺めている。

涼しげな風貌なのに、ありありと浮かぶのは、鬱々とした翳かげのよ  
うなもの。

末席で結構、と花を終えた菖蒲の葉が、野放図に茂る辺りに腰を  
下ろしている。

「かように不味い酒は、久しいな、」

「そう言うな」

頼んだ手前、堪りかねた燕児が傍らに席を取ったのだが、

「まあ、この身なり、俺の性しょうにもあわんが、」

傍らで、袖を抓んでみせた。

幾度酌み交わせども、酔う心地がしない。

男の子が生まれた、燕児のすぐ上の兄の祝いであった。

この気難しい友の傍らに在れば、つつがなく宴が終わると、そう  
踏んでの頼みであったのだが、

「早く、終わらないかな、」

近づいてこそしないが、屋敷のいたるところで見知った顔が、何  
やらこちらを見ながら囁きあっている。

「何なら、凍りつかせてやろうか、」

「凍りつかせてどうするんだ」

お前が言つと洒落にならぬ、と燕児が肩を落とした。

口程にもない男、なのである。

その耳に、凜と澄んだ篠笛の音。

舞台には、舞の上手で知られる左近の将が上がっていた。

篠笛の音に重なるのは、箏。

名手で知られる長兄の妻女多津螺の音に、しばし耳を傾けていると、

「都一、高い木は、なんだ、？」

いいところで、鬱々としたその声音が、意識を引きずり戻した。  
「ああ？」

見やれば、どこか遠くを眺めたままの蒼装。

趣向を凝らした山海の珍味、演奏や舞、馨しく香る龍涎香も、薄雲を払って現われた望月さえ、この男の前ではもはや何の価値もないらしい。

ただ、空になった杯が、その纖手に弄ばれている。

「高い木はなんだと、聞いている、」

酒器を傾け満たす、杯。

「高い、木？そりや、お前、」

己の杯は手酌で済まし、

「南の、鳳祥が仙洞だろう」

今夜はやけに舌を焼く酒を、一息に呑みこんだ。

「帝の、」

鬱々とした、呟き。

先々の上皇が居を構え、冷遇されていた帝がその幼少期を過ごした仙洞には、天女が舞い降りたとされる千年杉が、在る。

袈裟を纏った枯れ枝のような和尚が、若い僧侶を伴い境内を歩いている。

「すっかり遅くなっちゃいましたね」

先方が持たせてくれた提灯で、和尚の足元を照らしながら、とつぷりと暮れ、望月掛かる夜空を見上げて言った。

糸のように細い目が、つられて夜空を眺めると、

「ついつい、長居してしまっただけい。猊下のお引止めとあれば、断

れまいよ」

しゃがれた声で、荷を持つ傍らの供に、言った。

西の山に嶺鶯寺りょうえんじを開き、早々と隠棲した先々代鳳滝上皇の囲碁の相手。

開祖を同じくすることも手伝って、顔を合わせるうちに、不思議と膝を突きつけ合わせる仲となった。

「しかし、和尚の健脚振りには、驚かされました」

「そうかね、、？」

齡九十を数えると言うのに、用意された輿を断ると、参道ではなく細い獣道に分け入ったのだ。

「膝腰に掛かる負担を考えれば、石段に行くより易いものよ」

手にした錫杖で、ならされた大地を突けば、遊環が澄んだ音を立てた。

この時分では皆、食堂じきどうにいるのか、境内に人気はない。

大門を潜ると、本堂に燈された灯りが、茫洋と前方に見えてきた。

「和尚、、？」

和尚の体の具合を気遣いながら、東の庵へ向かう若檜の小路に入った時だった。

「、、、、、」

木立から伺い見えるのは、本堂の右手奥に聳える、五重塔。

いつもは長く垂れた白い眉の中でしょぼしょぼとしている和尚の目が、闇夜に炯々と光って見えた。

「どうかありませんか、、？」

その視線の先。

見上げる程に高く聳える、その突先。

突き出した相輪を片手に立つ、小さな人影、一つ。

「こ、子供？！」

一体どうやって登ったのかと考える間もなく、若者の第一声は、  
「こらあッ」

それであった。

「なんと罰当たりな。降りて来いっ  
と言っより先に、」

「、、、、、、」  
びっくりと身を竦めたその人影は、ふわりと水干の袖を翻した。

「お、、、、」

まるで重さを感じさせぬ、跳躍。

一旦、屋根の縁に舞い降り振り向くと、

「、、、、、、」

そのまま、鬱蒼と茂る竹林へ、吸い込まれるように消えてしまっ  
た。

飛び去るその腰に、尻尾のようなものが見えたような、、、、

「和尚っ、み、見ましたか、い、今の?!」

狐狸が化けたのだろうか?

言葉を紡げぬ、うろたえよう。

一方。

「ふむ、、、、なんとも大きな、、、、」

和尚は、竹林の方を眺めつつ、にこりとした。

その目は、月明かりに伸びた巨大な影を、視たのかもしれない。

そして、動転したままの若い僧侶の傍らで、

「眼福眼福、、、、」

手を合わせる和尚の姿があつた。

「月が高い、良い夜だな」

幾分酔いの回った体を解しながら、月明かりに沈む界限を歩いて  
いる。

客人を見送った後、勝手に歩いて帰るからと無理を言っつて屋敷を  
出た、二人である。

袖に腕を差し入れたまま、水路に沿って植えられた柳の木の下。

足を止め、彼方の山々を見つめているのが、

「、、、、、、」

肩に銀系の髪を流した蒼装、その人。

「どうした？」

「やはり、な。探している、、」

「何を、、？」

訝しげに濃い眉を寄せる、燕倪。

音こそ聞こえぬが、彼方の空が、ちかちかとしている。

北の山の向こうでは、雨が降っているのかもしれない。

「親が仔をな、、」

「空のどこにそんなもの、、酔っ払ってるのか？」

「その戯言と思つて、今から私に付き合つか？」

「お、、おう」

成り行きに逆らえぬのか、訳も分からず頷いてしまった。

「ならば、行くぞ、、」

その背が、北に向かつて歩き出すものだから、

「さつき言つてた、南の仙洞に向かうんじゃないのか？反対だぞ」

「そこに用は無い」

「そ、、そうか」

釈然としないまま、蒼装の後に続いた。

今年は、他に類を見ない冷夏。

暑い日が続いたと思えば、長雨が続き、薄雲に覆われる日も少ない。

暦の上では、夏も盛りと言つのに、左手に流れる川を渡る夜風が、秋の夜風のように冷たい。

ぶるりと一つ、身震いしてから、

「で、どこに行くと言つんだよ」

少し前に行く蒼装に、問うた。

「勝間の山だ、、」

「おいおい、正気かよ。陽が登るぞ」

「まもなく、来る」

「ん？」

立ち止まり、振り返ったその眼差しの先。  
軽やかな馬の蹄の音が、近づいて来た。

滲む闇の中から抜け出したのは、青乳色の鬣を振り乱した、肥馬。  
鋼雨。

続いて、月毛の浮葉。

「遅くなりました」

浮葉の手綱を取っていた琲瑠が、その背から顔を覗かせた。

「ご苦労だったな」

「いえ。あの、若君は、すでに、」

鋼雨の背に乗ると、手綱を絞った。

「ああ、分かっている。あれで中々に強情だ。当分は諦めまいよ。  
急ぐぞ、燕倪」

馬首を向けると、腹に一蹴り入れて、駆けていった。

「毎度の事だが、何がどうなってるんだか、」

琲瑠に促され、浮葉に跨ると、

「燕倪様、お氣をつけて」

「ん、ああ、」

先に行く鋼雨に追いつくと、浮葉を奔らせたのだった。

帝都の喧騒にあつて、ここはまるで異界。

広大な敷地のこの一画は、静謐で満ち、しつとりと冷たい深い森  
の如き大氣が、漂っている。

当代の帝が、まだ鳳祥院と呼ばれ居を構えていた頃は、出入りの  
者も多かったが、今では屋敷の内にも、人氣が無い。

屋敷の東北。

闇の中に注連縄が、白々と浮かんで見えた。

一説には、樹齡千五百を数えるとも言われ、その前に立つ者は、  
勇壮たる様に思わず頭を垂れるものだが、  
「、、、」

太い根元に、小柄な人影が、ひとつ。

あんぐりと口を空け、見上げているのは、水干を纏った伯であつた。

その小脇には、

キキユ…

小さな耳、斑模様。

つぶらな眸の、猫ほどの大きさの獣。

高い場所に登っては、更に高い場所を探し、ようやく辿りついた先が、ここであつた。

「、、、、、、」

不安げな声を他所に、伯はすぐ上にある枝に舞い上がった。

綱を入れる事赦さぬ、隆々とした枝ぶり。

天女呼んだ、千年杉。

その姿は、夜の闇の中に在ってなお、神々しい。

キユイイ…

「、、、、、、」

口に咥えた、獣の首。

自由になつた両手で枝を伝うと、猿ましらの如く身軽に登ってゆく。

次第に広がる視界に映るは、夜霧に眠る、家々。

彼方には、高い塀で囲まれた御所も窺うかがい見える。

地上彼方の、千年杉の突先。

都が、都に定まる以前、天女がこれに、舞い降りた。

当時は、荒野原が延々と続いていたのだが、三方向を囲む峻険な山々と、うねるように流れる川の様子が気に入って、この地に宿つたと言ひ伝えがある。

今は見る影も無く、人の手によって築かれた建立物は軒を連ね、整備された川は水路となつて、都中に張り巡らされている。

変わらぬものと言へば、闇夜に黒々とした山々と、どこかに遠くで聞こえる野犬の遠吠えくらいなもの。

「、、、、、、」

見上げた夜空。

中天に掛かる満月に、星々は形を潜め、薄い雲は彼方上空を漂っている。

伯は、おもむろに口に啜えていた獣を両手で掴むと、力いっぱい高く掲げた。

キキュキイツ

とたんに体を振って暴れる獣と、構わず足を踏ん張る、伯。獣の重みに腕が震えても、伯は空に獣を掲げ続けている。

闇夜に延々と続く、白い石段。

下から見れば、中程を行く二つの人影が、豆粒のように見えた。「ちよ、待、ってくれっての、」

まだ中腹と言うのに、この有様。

「はあ、は、あつ」

膝に両手を付いて、息を整えようとするのだが、標高が高い上に酒が回り、思うように体が言うことを利いてくれない。

腕と体力には自信がある男だけに、

「だらしない、」

汗一つかかずに上で待つ蒼装のこの一言に、もはや頂垂れるしかない。

平素、持つのは杯ぐらいのこの男に、今宵は武官である燕倪が敵わないのだ。

口を利く気力も失って、先に行くその背においてかれまいと足を上げる事、さらに半刻。

ようやく、頂上の大鳥居が見えてきた。

「化け物かよ、」

息も絶え絶えに石段を登りきった先で、

「似たようなものかな、」

白い喉が、くつくつと鳴った。

石造りの大鳥居を潜ると、ならされた山の頂の<sup>いただき</sup>一画に、簡素な社殿が一つ。

椎や櫓と言った巨木に、守られるように鎮座している。

「そついやあ、」

燕倪が、辺りを見回した。

以前、勝間の主だと名乗った女童の姿は、無い。

蒼奘はそれに構わず、社殿の裏手に歩いていった。

「で、一体どこにいるんだ？」

息を整えながらその傍らに立つと、切立った崖の向こうに広がる深い山々が、月夜に鬱蒼と見受けられた。

その山の一つが、光っている。

遠く、稻妻の奔る音が、響いてきた。

彼方の山稜を覆う雲の下は、雨が降っていることだろう。

「まさか、あそこに行くと言っくんじゃないだろうな？」

さすがにげんがりした所で、

「陽が登れば人目に付く。さすがに都守のところの式と言っても、当代帝の後見にも等しい千年杉の上に在ったとなれば、煩わしい事になるう」

蒼奘の低い声音。

「日の出まで、そう時間は無いぞ」

「ああ。分かっている」

「お、おいっ」

燕倪の背を押し、崖の淵に立たせると、

「鳴神を、掴つかまえてみせようよ」

「生き物だつてのか？」

「視ようとせねば、視えぬものもある。この先、あの太刀を手に長生きしたけば、形に囚こわれるな」

燕倪の直衣の合わせた襟や肩、袖に何かを擦りつける仕草。

「何してる？」

「すぐに分かる、」

棒立ちの燕倪をそこに残し、

「良いと言っまで、けして目を開けてはならん。無腰のお前は、塵

にも等しい」

「仕方ないだろう。業丸は打ち直しに出しているんだ」  
惘然としつつも、眼を固く瞑った。

「風伯よ」

袖から覗いたその手に在るのは、扇。

指し示したのは、彼方の山。

頭上に隆々とした枝を伸ばしていた木々が、ざわめき始めた。

「、、、、、、」

蒼装は、崖に迫り出すようにして枝を伸ばした檜の大木にその背を預けた。

青い唇が、いつもの笑みを湛えている、、、、

風が、背中から吹き抜けた。

頬を打つ髪に、思わず顔を顰めたのは、風が強くなつたためであった。

このまま体を崖下へと持つていくかのような、そんな強さであった。

「堪えよ、燕倪、、、、」

鬱々とした声音が、鼓膜を打つ。

「言つてくれる」

どこかでいつものあの薄笑いを浮かべ、この様子を眺めている事だろう。

ここで落ちたら、化けて出てやるからなッ

足に力を入れ、堪える事しばし、

「お、、、、」

風が、ぴたりと止んだ。

代わりに、

ゴ・ゴゴゴ……

腹腔を振動させる、この音は、、、、？

彼方の山を覆っていた雨雲が、揺ら揺らとこちらに向かって漂ってくる。

更に頭上では薄霧が発生し、渦を巻くかのように濃さを増すと、その霧を伝うのか、稲光と轟音が渡って来た。

「、、、、、、」

櫂の木陰にて、息を潜める蒼装の闇色の眸。

鶯色に沈み、琥珀に澄むと、金色へと染まる。

仁王立ちする燕倪の、まさに頭上。

渦巻く、灰恢の雲の中。

ガ…ッ…

大気を震わせ、雲を裂き、、、、

ふらりと、木陰から出たのは蒼装。

ガガガ      ツ

、、、、稲妻、落ちる。

その刹那、右腕が光の柱へ。

「!!」

轟音と共に、瞼を抜けた白い閃光が、頭蓋の奥に突き抜ける。

耐え切れず、目元を押さえたその耳に、

「いいぞ」

鬱々としたその声音が、近くで聞こえた。

眉間を揉みながら目を開けば、

「ぬわッ」

目の前に、黒く大きなつぶらな眸。

後退いた燕倪がみたものは、金毛に斑の模様。

愛くるしい眸とは対照的に、不釣り合いな黒い鉤爪。

小さな耳と長い髭を持つそれは、大の大人の背丈をゆうに越す、

巨大な、、、、しいて言えば、鼬。

長い尻尾を脚の間に挟み、鼻をひくひくさせている。

「鳴神だ。雷獣とも言っ」

その背で、蒼装の声がした。

「お前、肝を潰す気か。今ので眠気も酔いも、一発で醒めたぞ」

胸に手を当てながら、鼬の後ろに回ると、蒼装がその首根っこを掴んでいる。

「杯しか持たんと思えば、」

「見くびられたものだな。まあ、この形なりとは言え、空に在る者は、軽い。食性でな、」

蒼装は、袖を探ると、

「探しものは、これだ」

駱駝色の獣の毛を取り出した。

燕倪の衣に、擦りつけていた正体でもあった。

それを鼻先に近づけると、

ケケケケケツ

鳴神が、鳴いた。

「何も、匂わんぞ」

袖をくくんやるのを尻目に、

「幸せな奴め。その香りがなければ今頃、消炭けしずみだ、」

蒼装の呟きだ。

「この仔は、人の都に落ちた。都一高い千年杉の頂いただきで、そなたの迎えを待っている、」

ケケケケツ

蒼装が手を離すと、

ケケ

「うっ」

閃光に、腕を突き出した、燕倪。  
「、、、、」

一方、闇色の眸はその身が閃光と化し、頭上に広がる雲の中へ潜り込む様を、捉えていた。

黒く重そうな雲が、ゆるゆると伸び、帝都の上空へ覆ってゆく。

その雲の中を稲妻が、金や紫、白、きらきらとつねりながら、渡

って行くのだった。

どれ程の時間が過ぎただろう。

観念し、大人しくしていた獣が、ふるふると首を振りだした。

ウクユクユ...

不安気な、その声音。

いつまでたつても訪れぬ迎えを、諦めようと...

「だめだ、」

空から落ちてきた、獣。

歩く事を知らぬ、その命。

「空に、帰りたいんだろ」

それは、強い声だった。

地上に在る全てのものに怯えるその姿に、伯は、かつての己の姿を見たのかもしれない。

曲がった、肘。

片手で獣を支えながら、それでも続ける。

薄雲彼方の、空の下。

あの薄雲まで、あの身であれば届くのに。

忌々しい、この身。

ギギ...

噛み締めた奥歯が、音を立てた。

秤にかけられぬもどかしさに、それでも共に行くとしたから、  
「何にも出来ないままじゃ、嫌なんだ」

高く高く、その身を、掲げる。

傾いた、月。

そして、無情にも、白々と明け始める、東の空。

人目があれば、この帝都の神木にも等しい千年杉の上にはいられない。

悔しさに滲む涙を堪え、伸ばし続けるその腕に、  
キクククキユ...

長い尾が、絡んだ。

見上げた先。

長い胴を伸ばし、つぶらな黒瞳が伯を見つめると、その鼻の頭を  
クク：

ぺるぺると舐めた。

「でも、、、」

両手を伸ばし伯の肩へ降りると、その頬に小さな頭を摺り寄せ、  
小さく鳴いた。

「、、、、、、」

肩に落ち着いた鳴神の仔に促され、唇を噛み締める、伯。

見上げた先の、空の色。

はなだ  
縹。

今日ほど苛立たしげに、感じる事はないだろう。

人目につく前に降りようと、足を伸ばし、

「!？」

腹腔に低く響く音が、耳を打つ。

白々と明けてゆく空を覆い尽くさんと、雨が、走ってくる。

【雨の始まり】は、あつと言う間に伯の頭上を越えると、そのまま  
南へ。

キケケケ：

「来た、、、、」

頬を打つ大粒の雨の中、獣は伯の頭の上に攀じ登った。

雨の紗幕にそっくりと包み込まれた、帝都。

見上げた、上空に巻いた雲が、閃光に瞬いている。

後ろ足で立ち、くんくんと鼻を鳴らす“鳴神の仔”の胴を、伯の  
手が抱き上げた。

刹那、

ガ・ガガ      ンッ

舞い降りた光、そして、衝撃。

千年杉の頂から、その小さな体が剥がれ落ちた。

「、、、、、、」

落ちてゆく、伯の小さな体。

茂った枝らに、背中を強く打ちながら、

「ばいばい、、、、」

大小二筋の稲光が、雲の中へと吸い込まれていくのが、見えた。

「おおよそ、空から落ちてきたのだろうよ」

二人が眺める、その先。

帝都。

その上空が、差し込む朝陽を阻み、乳色に滲んで見える。

雨が、降っていることだろう。

「よくあるような物言いだな？」

固まった体を解す燕児の頭上で、<sup>ねぐい</sup>埒から出た小鳥は<sup>たんす</sup>囀り、鹿の群れは、水を求めて石段を横切って行く。

椎の幹で羽を休めていた蝶らは、朝露を結ぶ花を求め、二人の間を通り過ぎた。

東の山稜に顔を覗かせた朝陽に、目覚めた勝間の山の民。

「大陸でもこの倭でも、不用意に近づき、身を切られたと言う話は、多い」

「あの爪でやられたら、ひとたまりもないぞ」

禍々しい、漆黒の鉤爪。

蒼装に掴まれているうちは、大人しかったが、暴れて振り回されでもしたら、生身の人間はひとたまりもないだろう。

「伯についていた毛で、それが何かと分かっただけ、良かったか、」

「何だ。何を拾ったかは知らなかったのか？」

「隠して見せなんだ」

「何をしたんだ」

「、、、、、、」

以前、天狐にも同じ事を言われたと、思い出したのかもしれない。

それとなく流すつもりが、燕倪が訝しげに見つめるものだから、  
「何も、」

「何もせんで、伯がお前に隠し事なんかするかよ」

「皆、一様にそう言うがなあ、」

うんざりしたような眼差しだけを返す、蒼装。

「あの仔の心は、私とて読めぬよ」

「まあ、そりゃあそうか、」

太い腕を組むと、しばし何かを考え、

「でもまあ、伯の事だ。一人で片を付けるつもりだったのかもな」  
鈍色の眸を大きくした。

「まあ、そうであるうな、」

「で、お前は、それとなく助け舟を差し向けた」

「いつまでも千年杉の頂にいられては、都守としても困る、」  
「照れるなよ。親心つてやつだろ？」

燕倪が、傍らの蒼装の肩を、勢いよく叩いた。

「親、か、」

肩を揉みながら、侮蔑を含んだ笑みが、鼻を抜けた。

稲光を伴う雨雲が、次第に薄い霧へと姿を変えてゆく。

橙を帯びた灰白い空に、彼方の山稜が、青々としたその姿を、次第にはつきりと刻み始める。

暁の刻が、近い。

「見つかるといいな、あいつにも、」

小さいその呟きに、

「見つかる、」

珍しくも、柳眉を寄せた蒼装の貌。

燕倪は無言で、傍らに在るその人を見つめると、にんまりした。

「気色の悪い、」

一人、石段へと向かう、蒼装。

他でもない、勝間は疎遠になっている妻の実家。  
その身内に見つかれば、煩わしい。

燕倪はもう一度、蹲るようにして暁を迎えた帝都を眺めてから、  
「、、、、、、」

視線を落とした。

その先に、延々と続く石段。

どこか不機嫌に見える、白い髪の友の背。

「いつか、きつと、、」

そう呟いて、石段に足を向けた。

燃えるような橙の空の上。

藍から董色へと変わる、暁刻。

東の山稜から、ようやく顔を覗かせた朝陽が、石段を下る二人の影を長く長く、してゆく。

布津稻荷の境内に立つ市へと品物を運ぶ荷車が行き交う、目抜き通り。

突然の雨に、ぬかるんだ大地。

こんな天気を、狐の嫁入りと言うのだろうか？

朝陽は眩しく、雲が晴れたのにもかかわらず、霧雨が止まない。

その中を、先を急ぐ大人の訝しげな視線もなんのその、手に猫じやらしを持った童がひとり。

歩いている。

他でもない。

翡翠輪を首に掛けた、伯である。

濡れて頬にくっつく黒髪はすっかり乱れ、木の葉がくつつき、水

干はぐつしよりと泥を吸って重たそうだ。

草履はどこかに脱ぎ捨てたのか、素足で歩けば、ぴたぴたと裾に泥を跳ねた。

顔や手足に赤く滲んだ切り傷、擦り傷。

痛々しい姿である事には違いのだが、

「んんー」

悪戯を終えた子供の顔が、そこにはあった。

帝都の南西。

素封家の屋敷が連なる、その一つ。

門前で一人の若衆が、雨で消えてしまった篝火の消炭を、始末している。

「ハイル」

澄んだ、その声音。

手にしていた箒を取り落とし、

「嗚呼、若君。お帰りなさいませ」

羽織っていた長衣を脱ぐと、伯の肩へ。

頬に跳ねた泥を袖で拭い、

「お怪我は？」

「ん」

問題無いと、言っているらしい。

その様子に、ほっと安堵の溜息、一つ。

「湯を張ってありますれば、まず体を濯ぎましょう」

母屋への上框で、桶に張られた水で足を洗ってやると、

「う、、、」

うつらうつら、船を漕ぐ。

その内、

「若君、、、？」

框に体を預け、すやすやと寢息を立て始めた。

無防備な、その寝顔。

そつと翡翠輪を外し、腕に抱き上げると、群青の髪が長く流れた。

「、、、、、、、」

渡殿を、寢殿へと向かう瑋瑠。

その薄い唇が口ずさむのは、子守唄か、、、？

往来の喧騒遠く、今だ静寂の中に在る、都守の屋敷。

雲間から差し込む陽射しに、大池の水面が、きらきらとしている…

## 第捌幕

鳴神

（後書き）

なんか、短編のネタでも、と妖怪サイトを覗いていて浮かんだのが、この短編。どうしても、鳴神が、書きたかった。響きと漢字が、かつこよかった。俺の中では、外伝、箸休めのな、息抜きで書いてみた。

ばいばいは、英語だとは重々承知。どーしてもこれしか出てこなかった。それ以外の台詞は、「・・・・・・・・」になっちゃうからwww

## 第玖幕前

巨猪

（前書き）

伯を打ち据えんとする男から、その楯となつた琲瑠。居合わせた  
あとりと銀仁によつて、その場を切り抜けたが、、、

死人還りの都守蒼装、業丸を継ぐ武官燕倪、幽身であるがこの世  
に縛られた伯。それぞれが紡ぐ異国絵巻、第九幕前編。。。

## 第玖幕前

## 巨猪

月の無い夜空。

満点の星空が、煌く帯となり、幾筋も流れている。

その下には、なだらかな丘陵を覆うように鬱蒼とした広葉樹林が広がる。

無数に枝分かれし蛇行を繰り返すのは、星空を映す河川。

穏やかなその水面に、蒼白い巨影が揺れた。

フォッ・・・フォッ・・・

浅い呼吸を繰り返す主は、堂々たる体軀に萩を巻きつけた、見上げる程に大きな巨猪。きょちよ

額には、擦じれた胆礬色たんぱいろの一角。

深い森を思わせる緑柱石の眸が、ひどく濁って見えた。

その足元で、小さな影が跳ねた。

黒く、つぶらな眸。

鼠色の被毛の小兎だ。

巨猪の足元で忙しく跳ね回ると、

ざっ・ざっ・・・

遠く、砂利を踏む音が、近づいてきた。

それが一旦、止んだ。

「、、、、、、」

俯いていた顔を上げ、眼を凝らしているのか、人影が彼方。

そして再び、

ざっ・ざっ・っ・ざっ・・・

人は、急ぐでもなく、獣は、逃げるでもない。

ひとりと一頭の間には、そんな不思議な時間が、流れていた。

フォッ・・・フツ・・・

程なくして長身の男が、獣の傍らに立った。

「待たせた、、、、」

低く、擦れた声を掛けると、巨猪の鼻先に手を当てた。

フオオ・・・

一つ、深々と息を吐き出し、巨猪は水辺にて緩慢な動きで前脚を折った。

とろりと潤んだ眸が瞬きを繰り返しながらと閉じると、その身を  
取り巻いていた萩の葉は落ち、紫紺の花は萎れ、枯れ果てた。

ドゴオオ・オ・・・オン...

轟音と共に、その体躯が大地に投げ出される。

「、、、、、、」

鼻先に置かれていた手が、そのまま男の顔の前へ。

男は、わんわんと森にこだまするその轟き止むまで、片手拝みの  
姿勢を崩さなかった。

やがて、

「、、、、、、」

訪れた静謐に眼を開けると、男は袖に手をしまった。

岩陰に身を縮込ませながらも、長い耳をぴんとそばだてた小兎が、  
黒目を瞬かせる。

再び現われたその手には、銀の輝きが、握られていた。

睡魔との闘いに打ち勝った男は、大きく伸びをしながら庭へ出た。  
玉砂利が、ひっかけた草履の下で、小気味良い音をさせる。

薄闇の中。

雉鳩のほろほろと、低く響く鳴き声。

水面。

水をかく、緋鯉の尾。

耳元。

羽虫の、羽音。

大きな口が、あくびの形をとり、

「おっ」

白がんだ空に奔る輝きに、しばし、釘付けになった。

人気の無い大通りを、漆黒の馬がゆつくりと行く。

規則正しく響く、馬蹄の音。

深更、篝火焚かれた門を叩く、使いの若衆に応じ、訪れたのはさる歌人の屋敷であつた。

北の街道にあつたと言われる、奇岩。

馴染みにしている庭師に乞うて、庭石にともらい受けた大きなものあつたが、夜泣きをしてかなわんと、泣きつかれた。

赴いてみれば、成る程、さめざめと泣く幽鬼が、一人。

問うてみれば、物盗りに斬り殺された際、生まれ出でた我が子の身をただただ案じ、泣いていたのだと言う。

それを伝えたところ、深い同情を寄せた、歌人。

不憫で仕方なくなつて、自ら搜索を買つて出た。

一先ず、意気込む歌人に任せる事にし、その屋敷を後にしたのだが、

「、、、、」

見上げた空は、白々と明け始めている。

涙を滲ませ、あくびを繰り返す童の頭に手をやれば、

「ん、、」

手綱を持つ腕に背を預け、目を閉じた。

冷たい夜気が、朝陽から逃れるように、背へ吹き抜けてゆく。

頬を打つ、銀系の髪。

うつそりと眺めた先に、

「、、、、」

目が覚めるような耀きが、流れた。

白がみ始めた、東の空。

どこか遠くなつた、星々の輝き。

群青から董色へと、暁を迎える夜空の下。

「、、、、」

額に滲んだ汗を、血塗れた手が拭った。  
見上げた夜空に、緑青色ろくじょうの尾を引き流れる、  
彗星ほうきぼし。

あ、、

傾ぐ、体・

喧騒に包まれているのに、どこか遠くに感じる。

漆黒の視界に抜かれた球体二つ。

狭まった視野に、初秋の高い空が見える。

「ハイルツ」

若君、、

空を遮って飛び込んできた、その人の顔。

混濁する意識の中、

そのように涙ぐんで、どこか痛むのですか、、？

今にも毀れそうな、透明な雫を、見た。

頬に触れようと伸ばした手の感覚が、無い。

こぼ…こぼぼ…

懐かしい海の音が、聞こえる。

瞼が、重い。

背に当たる大地が、冷たかった。

わたしは、、

狭まる視線が、闇に閉ざされ、

我が君、、

沈む意識を、手放した。

「ハイルツ」

劈くような、それは凜と澄んだ叫びであった。  
布津稻荷。

月の決まつた日に立つ、朝市。

境内には物売りや行商人の賑やかな声が響き、まだ泥も乾かぬ季節の野菜から、烏賊の一夜干し、鰯やカマスの干物、おが屑に潜る車海老や渡り蟹といった魚介類が居並ぶ。

また、鋳物、金物、陶器など日用品、煙草や酒、果てや、どこか胡散臭い大陸の珍品等が入り混じり、それらを買ひ求める人々でこつた返していた。

その一画が、凍りついたのは、まさに一瞬の出来事であつた。

「見たか、人が、」

「これは奇怪な、」

人垣の真ん中の石畳には、水が滲んでいた。

その水の中で、膝をつく者がいる。

「、、、、」

水干を纏つた童。

声の主、伯。<sup>はく</sup>

「邪魔が入った、」

打ち据えようとした童を庇つたのは、その供であつた。

ざわつく人垣に、

「皆、よう聞け。こやつらは、つけ入る隙あらば全てを喰らい、皮を被る」

所々、破けた白い衣。

目深に被つた笠の下に、炯々と光る鷹の如き双眸。

壮年と思われる年の頃だろうが、赤銅色に焼けた肌は筋骨隆々とし、白いものが混じつた無精髭と相俟つて、偉丈夫と呼ぶに相応しい堂々たる体軀。

手には、琲瑠を一瞬にして打ち砕いた、錫杖。

その切っ先を向けた先に、黒髪の童の姿があつた。

男の網膜には、大地に伸びる巨影が、はつきりと視えていた。

瘡にかかったように、体を震わす童を冷ややかに見据えたところ  
で、

「ギ、、、」

童の手が、首に掛けた翡翠の連珠に掛かった。

「正体を現すか、、、」

錫杖を握る手に力が、入る。

網膜に浮かぶ巨影と童の姿がだぶり、茫洋として、その全貌が見透かせない。

この童、ただのものだけでは、、

眼を眇めたところで、

「何をしておるのじゃっ」

人垣の中から、晴れ着の女童が飛び出した。

黒目がちで、青く澄んだ黒瞳に、強い光が宿っている。

腕を広げ、割って入ったと思えば、

「ぬ、、、いかんっ」

袂で包み込むように、伯を抱き締めた。

「ううっ」

身じろぐその体を、力いっぱい抑え込む。

「、、、、、」

男は何を感じたのか、それまで懷手にしていた右手を伸ばした。

軽やかな音がして、長く大地に垂れたものがある。

数珠だ。

その長い数珠を手繰りながら、何やら唱え始めると、

「待たれよ」

その間に、頭一つ分高い男が、人垣から抜け出した。

褐色の直衣を纏い、黒髪を結った若者。

「まかりなりにもここは、神域。手荒な事は、止めて頂きたい」

「ほう、まだ連れがいたか。これは面白い、、、」

男は若者を眺め、眼を眇めた。

「では、問おう。そなたは？」

「陰陽頭に仕える、銀仁おんみょうのかみ いんじん」

「仕える？その匂いをさせて、人の都でのうのと、、、」

厚い口元に刷かれたのは、どこか侮蔑を含んだ笑み。

「、、、、、、」

銀仁のどこか憂いを帯びたままの双眸には、しかし、何の感情も見受けられない。

「まあいい。都の要たる陰陽頭が名、語る不屈き者はいまい、、」

一つ、杖を突く。

錆びをふいた遊環ゆかんが、澄んだ音を立てた。

「、、、、、、」

「、、、、、、」

無言の内に踵を返した、その広い背。

長い包みを背負った男が、人垣の彼方に消えて行くと、ひそひそと不振な眼差しを一行に残しつつ、人垣も薄れていった。

「しかし、、、、」

小さく毀れた、眩き。

くん、と鼻を鳴らし、彼方を見つめる男の傍らで、

「銀仁、、、、」

伯を抱きしめたまま、あとりが見上げてくる。

「ああ、、、、」

心得たもので、伯の前にしゃがみ込むと、

「伯。琲瑠は、式だ。早く屋敷に連れて行ってやろう、、」

懷から懷紙を取り出した。

「いたかった」

押さえ込むように回したあとの腕を、振り払うかのように、肩を揺する。

「伯、、、、」

あとは、腕の中でもがく伯の中に渦巻く、怒りと悔しさを、感じていた。

「ああ、痛かっただろう。だから、あいつを同じようにすれば、気が済んだか？」

「、、、、、、」

急速に、力が抜け、項垂れる。

その、やるせなさ。

「伯、、、」

あとりが堪らず、その肩に頬を寄せた。

「、、、、、、」

しばしあつて伯の手は、ゆつくりと翡翠輪から離れていった。

それを見届け、

「行こう」

銀仁は、水に濡れそぼち、力なくだらりと伸びている海鼠なまこを、懐紙に包んだのだった。

長く伸びた枝。

その細やかな萌葱色の葉の間に、淡紫の彩いろづきが鮮やかに弾けている。紫式部。

橙の蝶が遊ぶ、涼やかなその茂みの先。

「うつ、、、、」

海水を張られた桶を覗き込んでいたあとは、ぶるりと身を奮わせた。

都守の屋敷。

母屋に程近い、阿四屋の一つである。

「大丈夫なのか、、？」

その体表は赤黒くぬめぬめとし、無数の突起が突き出している。

おまけに、白く細やかな糸状の腸が、粘つくようにゆらゆらとしているのだ。

気丈な姫も、この手の類だけは、受け付けぬらしい。

「あの姿は、人の姿を模した写身うつしみだ。傷も、大したものではないよ、、、」

長椅子の肘掛に片肘預け、頬杖の美丈夫。

その傍らでは、どこかを睨み、まんじりともしない、伯。

「しかし常人が、式を見破れるか？」

向かいに腰を下ろしたのは、朱金の斑毛、琥珀色の双眸、腕組みの銀仁だ。

「伯のこの翡翠輪、生半な術者では見破られるはずがないのだがな、」

「見たところ、行者のようにも見受けられたが、」

「ふむ、そのようだな、」

蒼装が、伯の群青色の髪を梳いた。

やや癖があるが、指の間を、絹糸のように滑ってゆく。

その頭頂部に、翡翠色の突起が一對。

あとりが、戯れに指で突こうものなら、

「や」

腕で振り払って、庭の一面に広がる木立に分け入ってしまった。

「あっ」

追いかけようとしたあとりに、

「姫よ、放っておけ、」

蒼装の低い声音。

「でも、」

「琲溜の事で少しばかり、気が立っているのだ、」

じきに機嫌も直る、と薄い茶碗を手にとった。

青い唇を湿らせると、

「さて、銀仁、」

鬱々とした声音が、問うた。

「その男の風貌、もう少し詳しく聞かせてくれ、」

武家屋敷の門を潜ったのは、笠を目深に被った男。

所々擦り切れた白い衣に、錫杖。

名を伺い、慌てた様子で母屋に駆け込んだ、若衆籐那。

しばらくして、賑やかな足音が響いてきた。

「慟杏殿、このよう<sup>なり</sup>な形にて、すまぬ」

寝癖頭を掻きながら現れたのが、寝着の胸元肌蹴たままの屋敷の

主。

人好きのする、その笑顔。

「ご足労願ってしまい、なんとお詫びしたら、」

宿直明けで、休んでいた燕倪である。

「他に小用がありましたので、不躰とは思いましたが、門を叩かせて頂きました」

「ああ、当方はいつこうに構いませぬ。どうぞ、上がってください」

「旅垢に塗れた身故、ここで結構、」

「何を仰いますか。今、風呂の仕度を整えますので、当屋敷でござるりと、」

食い下がる燕倪に、それでも頭を振ると男は笠を脱いで、上がり框に背の包みを置いた。

「打ち直したる、大太刀。確かに、これに、」

白鞘に糸巻き。

七宝散りばめた、その太刀。

「おお、」

手に取り、鞘を撫でる。

鯉口を切ると、冴えた銀の輝きが、溢れた。

すらりと引き抜かれると、乱れ丁子の刃紋。

目を眇め、鞘に戻す様を鷹のような双眸が見つめながら、

「守刀の類は多少打ちますが、打つほどに心洗われる鋼は、初めてでございます」

強面が、ほんの少しだけ、緩んだようだ。

「かように粘りある玉鋼は、おそらく見つかりませぬ。飛ぶ鳥落す備堂家が宝刀の真髓、しかと拝見させていただきました」

「若輩者故、この太刀に負担をかけておりますれば、また、お手を煩わせる事になるやもしれまぬ、」

頭を下げる備堂の御曹司に、しばしあって、

「、、、谷津に、拙者をお訪ね下さい。縁があれば、再び、」  
低い声が応じた。

「心強い」

破顔した燕倪に頷くと、

「それでは、、、」

慟杏は声を掛け、笠を被った。

燕倪の手戻った大太刀を見ると、目を細め、会釈一つ。

巖の如き大きなその背が、門を潜り大通りに出て行くのを見送り、ひとつ伸びをした燕倪。

- 寝直すか、、、 -

腕に業丸を抱き、奥の寢所に向かうその背に、

「いいッ」

ふわりと纏わりつく風、ひとつ。

「エンゲッ」

象牙色の手を持ち、冷たいそれが、首に攀じ登った。

首をめぐらせば覗き込む、深い黒瞳。

「伯？！」

猿まじうの如く肩に上がり座ると、体を折り曲げ、

「これ、ハクに教えるッ」

しっか、と掴んだのは、大太刀業丸。

困惑するその鼻先に、顔を近づけ、

「エンゲッ」

「い、いきなり現われて、お前、何を言うかと思えば、一体、何があつたんだ？」

「ううッ」

もどかしいのか、身震いすると、白い牙が眼前に覗いた。

「わっ、分かったから、少し落ち着けっ」

「むぐむッ」

その口を押さえたところで、

「主様、お客様は、、？」

手に足を濯ぐ桶を持った籐那が、戻ってきた。

「今しがたお帰りになられたところだ。無理にお引止めしても悪い

しな」

寝着姿の主の小脇に、抱えられているものがある。

「はあ、、、あの、その、、、」

指を差したその先に、黒髪の童がじたばたと、暴れている。

「蒼装のところの伯だ。一人のようだし、屋敷に送り届けてくるから、千草に鞍をつけておいてくれ」

「かしこまりました」

着替えるために、母屋の北の対に向かいながら、ふと、

「お前、少し背が伸びたか、、、？」

「、、、、、、」

小脇に抱えられたままの伯に、反応は無い。

「なんだ。気のせいか、、、？」

業丸の鞘を握って離さない伯をそのまま、燕倪は軽い、溜息だ。

風が巻き、下ろされていた御簾が舞い上がる。

それを待っていたかのように、頼りなげな闇が一つ、舞い込んだ。  
薄闇うすやみの中、鼻先で、燐粉が舞う。

「、、、、、、」

それまで俯きながら、膝に置いた嘆願書の写しの一つに眼を通していた男が、貌を上げた。

覗き窓から差込む日差しが、どこか月光を思わせ、寒々としていた。

蒼装

燐光の正体は、揚羽蝶。

そして、その声の主を、蒼装は知っていた。

「檣葉しょうようか、、、」

近くにも寄らぬ故、遙々こうして出向いてやったぞ

凜と澄んだ、女童の声音。

西の森より、使いが参った

「西の、、、、」

牙を咬えていたよ。青角が、喰われたようだ、

その名は、遠野の辺り一帯を治める、地仙の名。

「ほう、、、」

眉一つ、動かす事は無い。

ただ、淡々とその耳を傾けるだけ。

毎度の事ながら、あやつくさくの使い玄兎は、事後報告だけで、埒がなかぬよ。寄り道ばかりしよって、、、いったい幾日前だか、肝心な所が定かではない

「青角がおらぬとなつては、玄兎もただの獣に戻る。使いに來ただけ、御の字だ、、、」

うむ。まあ、確かに、伝えたぞ、、、

それだけ言い残すと燐粉は失せ、蝶は忙しく飛び回った。

御簾を上げてやると、往來を行く人々の喧騒と共に秋の陽の光が、車内に差し込んだ。

「、、、、、」

御簾を掴む織手の上で、一旦羽を休ませると、名残惜しそうに鼻先に舞い上がり、それから御簾を潜っていった。

陽光の中へ掻き消える闇色の蝶を、鬱々とした眩きが、見送った。

「神喰らい、か、、、」

その織手は、先程まで目を通していた嘆願書の写しの束を、弄んでいる、、、

「入れ違いか？」

出迎えの若衆瑋瑠の姿が見えぬため、勝手に既に千草せんそうを繋いでいるところに、汪果が現われた。

「はい。今し方まで、銀仁様とあと様もいらっしゃっていたのですが、急に星読博士のお召しが掛かりまして。何でも古い曆が出てきたとか、、、」

「まあ、あいつの事。適当に切り上げて戻ってくるだろ」

「あの、燕倪様は、、、？」

出仕もしないで、と言う汪果の視線に、

「宿直明けでな。今日は非番なんだが、こいつが、」

指を差した先、小脇に抱えられながらも業丸の鞘を離さぬ、伯。

「寝直そうにも、この有様でな」

「若君、」

むすつ、とした様子で、顔も上げようとしない。

「で、何があつたんだ？」

ただでさえ口数が少ない伯に、説明を強いたところで埒があかない。

琲溜もない以上、この侍女に問うより他は無く、

「わたくしも、実際に居合わせた訳ではないので、定かではございませんが、」

汪果は、事の次第を話し始めた。

帝都北西、黒亜門<sup>へきあもん</sup>。

かつては、漆が塗られ荘厳を歌われた北西の大門も、風雨に晒され、今は見る影も無い。

荒涼として見えるのは、前方彼方にたなびく茶毘の煙のせいだけではあるまい。

どこか、とろりとした瞳に、瘦躯。

垢で薄汚れた衣とも呼べぬ襷袢を纏った者達が、黒亜門に至る石畳に点々と座り込んでいる。

中には、眼差し鋭い者達も混じっているが、大半は今日の糧にも困る貧しい民であつた。

雑踏の中に在っても、この門を通る者は多くなく、あえて行こうとするならば、袖を引かれ、運が悪ければ身包み剥がされ、川に浮かぶ事となるう。

笠を目深に被った男が、その門をまさに潜らんとしていた。

彼等と同じまではいかないが、薄汚れた白い衣に、袖無し羽織。けして裕福には、見えない。

巖のような体軀を見た瞬間、幾人かの者達は俯き、舌打ちした。恐れ気無く駆け寄ったのは、他でもない。

「おいちゃんッ、ねえ、食べ物分けてくれよっ」

「ほんの少しのお金でもいいからっ」

「女が欲しいんなら、うちんとこ来てっ」

数人の子供達だ。

櫛梳る事の無い髪は絡まりあい、虱によって白っぽくさえ見える。丈が合わず晒された膝や腕には骨が浮かび、男を見上げるその顔らは、汚れていた。

男は、彼らが手に持つ欠けた椀や、土器かわらけを見つめた。入っているのは、陶器の欠片や砂利だけだ。

男は、知っていた。

自らの子供達を、物乞いに出す親の心理も、あるいはそうせざるおえない現実を、

「ねえねえ、おいちゃんてばあッ」

男は、子供達の前にはしゃがみ込んだ。

「この先には、詳しいか、」

しゃがれた声音に、

「うん。この先の橋の下が、僕らの住処だもん」

「ここで生まれたんだんだ」

初めて聞かれたのか、興奮した様子で指を指す。

その中の一人、

「おいちゃん、なんか、用があるの？」

膝に手を置いて、男の子が不思議な顔をした。

「人を探している」

「人？」

「腰の曲がった偏屈な爺さんだ、」

「へんくつなあっ!!」

「じいさんッ!!」

顔を見合わせて笑う、子供達。

物乞いをしていてもこの辺りでは、案外助け合って暮らしているのかもしれない。

「ヘンクツ爺さんッ」

「へんくつ、じじいつ」

子供達が、歌いながら駆け回る。

男が歩き出すと、子供達が纏わりついては口々に、

「どんなじいさん?!」

「なんでじいさん?!」

矢継ぎ早な、質問が飛び交う。

男は錫杖を鳴らしながら、汚泥溢れ、腐臭漂う川を渡った。板を組み合わせ、或いは打ち付けただけのあばら屋。

両の手を広げれば、それだけで塞いでしまえそうな小道を、縫うようにして進む子供達。

けたたましい鶏の声や怒号、嬌声、悲鳴が響く、その界限。

訝しげな眼差し注ぐ者達の視線を、全身に感じながら、

「まずは、首無し地蔵」

ぼつりと一言。

「くびなしい?」

小首を傾げた年少の童に、

「あ、小便地蔵さんのことだっ」

「こつちこつちっ」

兄妹か、袖を引く。

「あのくそ女ッ」

前方から、若い男が駆けて来る。

押さえた手首の辺りが赤く、点々と血が落ちては染みを作った。

子供達は日常茶飯事なのか、気に止める風でも無く、狭い道を譲っただけだった。

「二度と顔出すんじゃないよっ!!」

鼻息荒く、手に赤々と染まった小刀を持つ女が走り出して来ては、彼方の男に向かって罵声を放つ。

煤けた橙の小袖から、ぬめぬめとした太腿が覗いている。

垂らしたままの黒髪は乱れ、肋が浮く胸元も露露あじわなその青白い肌に、返り血か、朱けが跳ねている。

三十そこそこの、鶏がらのような女なのだが、むしゃぶりつきたくなるような色気があった。

「ちッ、、汚れちまったじゃないかつ」

華奢な肩を怒らせて、胸元を拭っているその向かいで、子供達は足を止めた。

「ここだよっ」

「、、、、、、」

見れば、ちょうどその女が出て来たあばら屋の前。

どこから持ってこられたのか、首の無い地藏が、二つ三つ。

汚臭漂い、雨でもないのにぬかるむ一画に、佇んでいる。

「すると、まかべ殿とは、、、、」

男は、女の顔を見た。

「なんだい、あんた。客かい？」

赤い舌が、唇を舐ねぶった。

品定めするかのように腕を組むと、女は細い顎を上向けた。

「まかべは、あたしだよ」

「まさか、琲瑠なまこが、海鼠なまことは、、、、」

手桶を覗き込んでいた燕倪は、しみじみと言った。

「媒体さえあり、心が強ければ、式として召抱えられる資質は十分です。琲瑠は元々、若君の眷属に連なる者。齡、百を数える大海鼠、、、、、」

「昔から気になっていたのだが、ずっと変わらぬそなたも、、、、」  
死人還りとなって程なく、蒼装は一介の星読士より、兼ねてより固辞していたはずの都守の役職を、賜った。

その頃から、燕倪もこの屋敷に出入りするようになったので、かれこれ五、六年は経っている計算だろう。

少年から青年期へと成長を遂げた燕倪から見ても、この異相の侍女は皺一つ増えた様子はない。

むしろ、若々しくさえ見受けられる。

燕倪に、改めてまじまじと見つめられながらも、

「お察しの通り。わたくしも、人ならざる式神、」

汪果は、艶然とした微笑みを絶やさない。

「そうか、そうだろうなあ、」

腕を組み、一人頷く燕倪。

鈍いようでも、薄々は察していたらしい。

しかし、

「けれどわたくし、若き日の皆様を、存じ上げております。先代が蒼装様を養子に迎えられた以前より、この屋敷に出入りしておりますので、」

「え、」

それは、意外であつたらしい。

「当時のわたくしは、おなが尾長の姿。お気付きにならぬのも、無理はありません」

「おなが尾長?!」

「当代都守により、このような姿を賜りましたので、皆様のお世話を焼けるようになったのですわ」

「すると、使役主の、その、好みにより、姿を変えられると、  
、？」

脳裏を過ぎつたのは、勝間で逼塞している妻女、箏葉の貌。

複雑な表情を浮かべた燕倪を他所に、

「そのようなものです」

汪果は、艶然と微笑んだ。

「わたくしの場合、先代都守に帰依しておりますので、その年数を数えると、もう数十年にもなりましょう。業深く、かつての経緯はお話できませんが、」

「ふむ、」

この際、興味を隠さぬその鈍色にびいろの眸に、

「女子おなこの氏素性を逐一知りたがる殿方は今時、煙たがられるもの、

ぴしゃりと釘を刺した。

「それもそうだな」

苦笑した燕倪が、罰が悪そうに頭の後ろを搔いた。

その腰に下げられた大太刀が、力強く引かれた。

大太刀業丸に、しがみついたままの伯の仕業だ。

「とにかくお前は、琲瑠を打ち据えた野郎に一発食らわせたいんだな？」

「まう」

こくり、

「しかしなあ、相手は人だぞ。もっと穏やかに、キメれないもんかね」

太刀の柄を叩くその傍らで、

「きるんじゃない、」

小さく澄んだ声音が、応じた。

「、、、守りたかった」

人の世に在るやり方を、何も知らぬのだと、思い知らされた。

「そうだったのか、」

「でも、」

肺腑から吐き出された、深い吐息。

「だめ、、、だった、」

それは、齢を重ねた老人のような、溜息であった。

不意の事とは言え、人の世にあつて、あまりにも無力を痛感した。それが何より悔しくて、伯を太刀の使い手の元へ、走らせたのだ。つた。

頂垂れたその童の苦悩を、垣間見て、

「まあ、さ、」

言葉を探した。

「命までは取られなかったんだから」

慰めのつもりが、

「トラレテイタラ、、？」

「、、、、」

これには、燕倪が口をもごもごさせた。

さては、最近の悶々とした様子は、これが、、

伯がぶち当たっている壁を燕倪は、ここでようやく見た気がした。

無理も無い。元は、飛べるわ、潜れるわ、果ては氷水ひょうすいをも意の

ままに操るんだ。人の身に封じられているとは言え、この無力感。

堪えるわな、、

傍らで頂垂れているその頭を、ぽんぽん、とやると、

「うつつ」

やめるとばかりに、身を震わせた。

犬歯を剥いて見上げた先に、

「付き合ってやるよ」

「、、、、」

どこか穏やかな目をした、燕倪の顔があつた。

やはり、気になる、、

その香り。

最初は、気のせいかと思つたのだが、

死臭とも、腐敗臭とも違う。到底人なんぞが、持ち得まいよ。

しかし、どこかで、、

何か、引つ掛かる。

「どこか具合でも、、？」

心配そうな、若者の顔。

「あ、いや、、」

すぐ傍らで、御幣を折っていた若い陰陽師、稀水きすい。

敷き詰められた玉砂利が、降り注ぐ陽射しを眩しく、照り返している。

昼過ぎのため、外に出ている者も多く、館内は静かであった。  
御所、陰陽寮の一室である。

「そう言えば、朝から少し熱っぽい気が、、」

「季節の変わり目ですしね。無理をせず、お帰りになった方が、、」

「そうさせてもらう」

傍らの若者は、遠慮無く立ち上がった。

颯爽と歩み去る新人りの背を見送ってから、白木三方を眺めた。

「ふう、、」

思わず洩れた溜息。

その視線の先には清められた紙が、こんもりと堆く、積まれている、、

「ああ、間に合つて良かったよ」

女、まかべは、薄暗い部屋の奥へと男を案内した。

筵を延べ、着物を敷いただけの寝床の脇には瓶子が転がり、火など熾された形跡など無い竈が、見えた。

「あいつ、爺様の道具にまで手をつけようとしてね。懲らしめてやつたところさ」

まだ死んでもいないうちから、とぶつぶつ言いながら、板の扉を外した。

「手癖の悪い奴らが多いから、入り口は打ちつけちまったのさ。こっちからだよ」

黴臭く、酸えた臭いが籠もったその奥、

「、、、、」

火の気が絶えて久しいと思われる火床には、風を送る、鞆が取り付けられている。

その前には鉄を打ち鍛える金床と、床に掘り込まれた水槽。整然と並べられ、立てかけられているのは、大小様々な槌と火箸。

粗末なあばら家ながら、掃除が行き届いたここだけは、凜と張詰めた大気が満ちていた。

「あたしは、爺さんのこの家を間借りしててね。飯が食えない時は、姉弟共々、よく食わせてもらってさ。それなのに、あいつと来たら恩も忘れやがってっ」

「先ほどの若者、」

「気にしないどくれ。あたしの弟さ」

「、、、、」

女は、部屋の片隅にあつた引き戸を、空けた。

「爺さん、あんたの弟子が訪ねて来てくれたよ」

声をかけると女、まかべは顎をしゃくった。

薄暗い四畳程の室内には、所々外の明かりが差込み、筵に横たわる瘦軀が見えた。

笠を置き、にじり寄つたその先に、

「お師さま、」

薄い白髪、落ち窪んだ眼窩の老人が、薄手の掛具を掛けられて、横たわっていた。

後継を男に定め、谷津の工房を去つたのが、十数年前。

見る影もないその人を前に、男は言葉を失った。

「、、、、」

拳を握り、頂垂れた男の背中を見て、

「口は悪い爺さんだけど、結構みんなに慕われてんだよ。金物を直してくれたり、研いでくれたり、さ。悪さしている連中だって、頭が上がないんだ」

まかべが、口を開いた。

「たまに貴族絡みの依頼があつて儲けると、みんなに振舞つちまったりするような、そんな爺さんでさ。酔えば、決まってあんたの話をしてたんだよ。わしの弟子が、わしの倅だってね」

「、、、、」

まかべは、どこか寂しげな表情でその背を見つめると、静かに部

屋を後にした。

昼間でも薄暗い、その部屋の中。

男は、師の枕元でそのか細い吐息に耳を傾けているのか、師の姿を眼に焼き付けているのか、まんじりともせず、その顔を見つめている、

「こらっ、枝を啜える奴があるかつ」

それは、怒号に近かった。

庭の彼方。

往来の者達が驚いて思わず脚を止め、屋敷の内を覗く程に。

鬱蒼と生い茂る、木々。

その向こう広がる、広大な庭。

渡殿で結ばれたいくつかの離宮と、大小の阿四屋が点在する、都守の屋敷である。

「んがああッ」

大池に浮かぶ中島で、水干の童が長い枝を啜えたまま、首を振った。

「危なッ」

傍らに居た男が、咄嗟にくの字に身体を折り曲げて、避けたが、  
「ぐぬうッ、素振りもまともにできんうちからッ」

たまらず拳を握った。

どうやら、いきなり太刀を握らせると逸る伯と、基本姿勢から入ろうとする燕倪。

その意識の違いが、お互いをやきもきさせているらしい。

眠気と疲労が増す中、さすがの燕倪も限界が来ているようで、  
「むッ」

拳の下で、毅然と睨み上げるその董色の眸に、苛立ちを抱く。

拳が伯の頭上に落ちる刹那、

「穏やかではないな」

山野草が茂る楓の木立の向こうから、白い淨衣姿の若者が、現れ

た。

「むぎゆうっ」

拳骨げんこつをくれようとしていた手は伯の首に回り、燕倪の厚い胸に、太い腕でもって引き寄せていた。

「なんだ、銀仁か」

露骨にほつとした友の顔に、

「そなたも、激昂するのだな、、」

腹腔を震わせる低い声が、応じた。

じたばたもかく伯を琥珀色の眸が見つめた時、その背に朱金の斑毛が、長く流れた。

「その格好、、」

「気になる事があって、な。取り急ぎ、このような形なりにて、、」

屋敷にも寄らず、白袍姿そのまま、こちらに向かってくるやうだ。

「燕倪。そのまま伯を、押さえていてくれるか？」

「あ、ああ、、」

燕倪の腕に捕らえられたままの伯が、

「ッ!!」

何を感じ取ってか、近づいてくる虎精を拒むように暴れる。

しかし、さすがに燕倪の豪腕。

生半に外す事など、できはしない。

「許せよ、伯」

骨ばった大きな手が、伯の頬を掴み、圧迫。

「お、おいおい、銀仁っ」

「調べたい事があるのだ、、」

扇の柄を咬ませると、そのまま決じ開けた。

日に日に鋭さを増す犬歯が、覗いた。

くん、と銀仁の鼻が、鳴った。

そんなはずは、、確かに、あの時、、

頬を掴む手に、思わず力が入ってしまい、

「うっッ」

怒りに赤身を帯びた、董色の双眸。

「ま、まだか?! いかんせん、これは酷だぞっ」

「もっ少し、」

扇の柄を手の甲で押さえ、その指が口腔へ。

「んぐぐうっ」

「銀仁いんじんッな、何する気だ?!」

喉の奥で丸まっている桃色の舌を、銀仁の指が無遠慮に抓つまんだ。  
さすがに声を荒立てたところで、

「あ、」

身体を押さえていた燕倪がまず、凍りついた。

伯の舌を引き出し、目を凝らしつつ、その喉の奥を覗き込んだところ、

「何をしている、」

鬱々として冷やかな声音が、乳色の陽射しの中に響く、

板の間に、唐草模様を染め付けた更紗地の敷物。

その上に車座で、肩紐を結びながら蒼装が腰を下ろした。

浄衣から、白い狩衣に着替えている。

向かいには、肩肘枕のまま目を閉じている燕倪と、申し訳なさそうに頂垂れる銀仁。

「、、、、」

覗い見たその先では、伯が指を咥え、すんすんと鼻を鳴らしている。

先程の庭での一件のせいで、蒼装の傍らから、離れようとしない。

「聞こうか、」

静かに口を開けば、

「例の男が纏っていた香りと、伯の口からした香りが似ていたと思  
い当たり、確かめようとい、」

申し訳なさそうな、銀仁の声。

「、、、、」

蒼装の沈黙に、

「だが、気のせいだったようだ。伯、すまぬ」  
深々と頭を下げた銀仁。

その様子を、背中から顔だけ覗かせ、董色の眸が見つめている。

「いつの事だ、、、？」

「あ、ああ。斗々烏ととくの夜の事だ。車から、伯が寝惚けて我の上に落ちてきた時に、、」

微かにその香りを、嗅いだ気がしたと、言う。

背にしがみつく伯を一瞥し、青い唇が吊りあがる。

「あの騒ぎの最中、暢さやか気にあまい夢に遊んでいたか、、」

「？」

眉を寄せた、銀仁。

「汪果、封瓶を、、」

酒器を運んできた汪果は頷き、母屋の暗がりへ消えた。

再び戻ってきたとき、その手には脚付きの銀盆。

こんもりとした袱紗の包みを取り上げると、中から虹色の輝きが洩れた。

「これは、、」

「ん、なんだ、それ。いつかの靈紫れいしじゃないか？」

目を擦りながらの燕倪の声に、

「ああ」

彩いろとり変える、至宝の一つ。

「万物の本質。そのようなものだ」

投げ渡すとそれは、銀仁の手の中で煌々とした。

「そんなものが、伯の口から、、？」

困惑した様子の銀仁。

「この仔の身体は、血肉から造られたものとは異なる。想念が宿つたものともな」

何らかの意志を持つて、この本質を元に形作られた、純粋な存在。「体内に残ったその名残が、吐き出される事がある。稀に、天津国

生まれの純粹な神仙の吐息に含まれるが、地上ではまず眼にすることはない代物だ、」

「靈紫、」

まじまじと光に透かして眺めれば、万華鏡のように七色の輝きが、床に煌びやかな輝きを落とした。

「幾らかあつたが、それが最後の一つだ。天狐に呉れてやつたり、先の怪我でも、世話になった」

「以前は、よく酒を呑んではぶかぶか吐き出してなかったか？」

「ああ。今思えば、漂う様子を眺めてなどおらずに、とっておけば良かった。何分、欲が無いものでな、」

「よく言うよ」

呆れたような燕倪の声だ。

「産まれ出でた頃は心安く、よく吐き出していたが、最近では舌も肥え、多少の刺激ではお眼にかかれん」

「この地にある心労だよな、伯？」

「、、、、」

燕倪の言葉に、伯はそっぽ向いた。

「否定はせんよ、」

蒼奘だけが、静かに肯定。

機嫌を直したのか、腹が減ったのか、膝に入った伯に杯を持たせると、なみなみと酒を満たしてやった。

喉を鳴らして呑み干す様を、眺めながら、

「嗅いでみる」

「だが、これを使えば、琲瑠が、」

「靈紫は、純粹。それ故、使い方を誤れば毒ともなる。あの程度では、かえって毒となるう」

その毒と成るようなものを、今まさに嗅がせようとしている者の台詞にしては、随分と無責任な発言であった。

躊躇する銀仁に、

「俺も嗅いだ事があるが、この通りピンピンしている。嗅ぐだけな

ら、大丈夫さ」

寝そべったままの燕倪に言われ、ほんの少しだけ蓋を捻った。

これはっ、っ、

それだけで、銀仁には十分であった。

とろりと目尻が下がり、琥珀色の眸は潤んだ。

恍惚となる馨しいまでの香りの中に、

我が、故郷が、っ、視えるっ

急峻な山々に抱かれた、花咲く春の深い森が視えた。

幼い頃。

弟と共に蝶を追い、無邪気に野を駆けた懐かしい思い出が、甦った。

しかし、次の瞬間、

「ふ、っ、」

どこか自嘲気味な笑みと共に頂垂れた、銀仁。

「どうした？」

「っ、っ、っ、」

しばし言葉を失った銀仁を、案じる燕倪を他所に、

「毒の部分をも、持ち合わせていたか、っ、」

不謹慎極まりない、蒼装の呟き。

「どういう事だ？」

むっとした燕倪と、

「我は、っ、大丈夫だ。少し、大陸の事を思い出してしまっただけ、っ、」

こめかみを揉む、銀仁。

燕倪も蒼装も、この虎精の過去は知らぬが何よりも、漂っどんやりとした空気が沈黙を歓迎した。

やがて、

「都守」

銀仁の太く低い声音が、自らその沈黙を破った。

懐紙で首の辺りの汗を吸わせながら、

「間違い無い。琲溜を打ち伏したる男、このような香りを口腔から、いや、その身に纏<sup>まと</sup>うていた」

手にした封瓶を、袱紗の上へ返したのだった。

「霊紫を吐く者、か、」

どこか愉しげに、目を細めた蒼装。

敷物を抱いたまま、ちびりちびり酒を舐めていた燕倪の、  
「なんだよ。心当たりが、あるんじゃないかよ」

皮肉にも似た、眼差し。

「ふ、」

青い唇に、意味深な笑みを刷くと、疲れと眠気で腐っている燕倪に、

「それはそうと、燕倪。遠野に行こうか、」

唐突な、それは誘い。

「と、遠野ッ?!」

勢い良く上半身を起こした燕倪と、

「羽琶<sup>うわ</sup>、」

膝に入って見上げてくる董色の眸の主、伯の声が、同時。

杯を、唇にあてながら、

「ああ、」

それは、都守の気紛れか、?

第玖幕中

団栗

（前書き）

勝間の地仙檣葉からの知らせ。ひとまず嘆願書にあった集落を訪れるため、遠野へ赴く事にした蒼装らは、

死人還りの都守蒼装、業丸を継ぐ武官燕倪、幽身であるがこの世に縛られた伯。それぞれが紡ぐ異国絵巻、第九幕中編。。。

## 第玖幕中

## 団栗

宮中、近衛府。

玉砂利が敷き詰められた庭に、青々とした厚い葉を茂らせるのは、橘。

強い風がその枝を揺らせば、カラカラと乾いた音をさせた。朝陽眩しいその庭の渡殿を、束帯姿の女丈夫が歩いている。

「これは、右中将、、、」

「おはようございます」

道を空ける、若い武官達。

彼等の羨望の眼差しが、たとえ己が背に注がれていると気づいても、この者はなんとも思わないだろう。

真っ直ぐに伸びた眉の下には、炯々とした切れ長の褐色の双眸。

高い鼻筋と、薄い唇。

骨格こそ華奢ではあるが、渡殿に行く、その堂々たる様よ。

そこには、帝への忠誠を永遠の伴侶に決めた者の姿があった。

「左中将」

同期と廊下で談笑中の左近衛府中将を見つけると、清親は足早に歩み寄った。

「ああ、右中将。おはよう。大気も澄んだ、良い朝だね」

「おはようございます」

「昨夜は稲光激しく、風の強い夜だったけれど、良く眠れたかい？」  
「穏やかな眼差しでこちらを見つめるのは、左近衛府中将真紀烈也。飄々として、掴み所が無い性格と容貌なのだが、その実、女誑しで知られている。」

「昨夜は、宿居番でしたので」

にべも無く言えば、

「中将にもなって、宿居だなんて、、」  
くすりと笑う、その人。

「第一線を疎かにするつもりはありませんので」

冷ややかに澄んでいく清親の眸だけが、その胸中を雄弁に語る。その眼差しすら、柔らかな笑みでさりりといなし、

「大切な事だね。けれど、」

細く、長い指先。

筆しか持たぬその指が、うつすらと隈の浮かんだ、その目元に、  
「中将の体は、中将だけのものじゃないんだから、程々にしないとね」

触れた。

「、、、、、、」

褐色の眸が、今度はありありと憤懣を浮かべ、眇められる。

あらら、、、、

大抵、これで靡かぬ女はいない。

それは、烈也が扱う女の殆どか、籠の中育ちだからなのかもしれない。

「お気遣い、感謝致します。我々は体が資本故、体調には万全をきしておりますが、、、、まだまだ精進が必要なようです」

やんわりとその手を払うと、

「それはそうと、貴殿の揮下<sup>きか</sup>、少々勝手が過ぎるのではと右近衛府ではその話題で持ち切りでございます」

「ああ、、、、」

烈也は、わざとらしく欄干に凭れ、額に手をやった。

「本日も、都守と共に西の集落を訪ねる旨の届出が出され、即受理されたと聞きました」

「君も知っているだろう？都守と左少将は、旧知の仲で先の一件でも功績を、、、、」

「揮下を監督するのも、上役<sup>つわやく</sup>の勤め。我等の本懐は、帝をお守りすることでございます。したがって、本来ならば怪異の人手は、陰陽寮より選出するのが筋」

「まあまあ、右中将、、、、」

「右近衛府としても、再三お願い申し上げておりますれば、左近衛府におかれまして、徹底していただきたくお願いに、」

脳裏に浮かんだ顔は、左大臣である当の左少将備堂燕児の父、備堂真次。

新家である烈也は、本家の力関係もあり、

「う、」

さすがに、何も言えなくなってしまった。

それを感じ取ったのか、烈也の耳元に口を寄せると、

「と、言ました所で、私も左少将の幼馴染には変わりありませんね。

右近衛府中將として、他の諸将の手前お願いに上がりましたが、ご気分を害されたのであれば、お詫びいたします。左中將の寛大なるお心で、どうかご容赦下さいませ、」

卒なく小声で言い足した。

「では、これにて失礼致します」

にこやかな笑顔で一礼すると、風を切って右近衛府の社殿へ歩み去った。

「はふ、」

やれやれ、今回は見事に咬まれたね、

袖にうつ伏し、吐き出した深い溜息。

「くくく、右の中將、相変わらずお前には、手酷いな」

一部始終を見ていた傍らの同期が、喉を鳴らしつつ、烈也の肩を叩く。

しかし、再びその顔が上がった時、目尻はすっかり垂れていた。

「そんな情ないところがまた、可愛い<sup>つれ</sup>のだけれど、」

「懲りないヤツ」

どこか呆れた、同期の声音。

一方、始業を待ち、人気の無い廊下に行く、女丈夫。

誰も見ていないことをいい事に、足音響かせ、肩は怒らせた。

「我が身がいつそ、煩わしい、」

ぶつぶつ言いつつ、袖で目元を拭い拭いの清親。

いつもより若干口調が荒くなつたのはやはり、目元を触れられたせいであるらしい。

「ねえ、あんた。あんたまで死んじまう氣かい？」

あれから丸一日、まんじりともしない男を氣にして、まかべは顔を出した。

「そうだよっ！！うちの人が芋を貰ってきたから、少しくらいお食べよっ」

「、、、、、、」

他に数人の人々が、声を掛けた。

枕辺に座り、時折水で口を湿らせては、目覚めるでもないその人の傍らを、離れぬ男。

男は、右腕の辺りに手を置いた姿勢のまま、ひっそりと黙りこくっている。

「っ」

その様子に、まかべが前に出た。

「ちよいと、まかべっ」

「あんた、何する氣だいつ」

他の者達が、巖の如く背に向かうまかべの肩に手をやるが、呆気なく振り払われた。

大股で歩み寄り、細腰に手をあてると、

「やいっ！！あんたまでここで死ぬってんなら、他に行つとくれッ」

昨日、弟に向かって吐いた罵声よりも大きな声が、叫んだ。

「ああっ」

「もう、どうしてあんたは」

まかべの氣性を良く知る者達が、溜息をつく。

「ここはねッ、死ぬ氣のヤツを生かしてやるほど、分け前はないんだよっ」

次はいつもの刃を振り回す氣か、と氣が氣でない者達の視線の先で、

「、、、、、、」

岩にでもなつてしまったかのようなだった男が、立ち上がった。ゆっくり振り向くと、

「なんだい。何か言う事でもあるのかいつ?!」

胸元をだらしなく肌蹴るのも構わぬまかべが、仁王立ちだ。

男は、背に負ったままの包みを解いた。

ぽさりと、足元に白い包みが落ちた。

「ん、、こりゃ、護符じゃないか?」

「布津稻荷の病氣平癒の符だ。実際のところ、気休めにもならんが、  
、、、、」

それでもまかべは、

「なんだい。気休めでも、無いよりましさ」

土を払うと、枕の下に差し入れた。

「こつ言つもんはね、縋ったもん勝ちさ。だめなら、こいつのせい  
にしたらしい」

膝を払いつつ立ち上がったそのまかべの、鼻先。

「なっ」

男は、何重に包んであったものを、差し出した。

両の手に余る程の、赤黒い肉の塊。

「猪肉の塩漬けだ。師に食べてもらいたく、持参した」

「ほえ、、あたしや初めて見たよ。猪の肉?こんなに真っ赤いん  
だねえ」

ぎよつとして仰け反りながらも、訝しげに指で突くまかべに、

「師を看病してくれたそなたらにも、昨日世話になつた子らにも馳  
走したいのだが、、」

男はそれを預けた。

「こんだけあれば、あの子らも腹が膨れるだろう。よしつ、あたし  
に任せておきな」

腕をたくし上げながら、まかべは埃が被ったままの竈へ向かい、  
「そうとなりゃ、うちには味噌があるよ」

「あいよ。それじゃあちよつと、収穫を手伝いに行っている亭主んところに、野菜を見繕ってもらってくるよ」

他の者達も、すわ、とばかりに駆け出して行った。

「あつ、、、」

竈の埃を掃き出していたまかべが、袖から出したものがある。

血がこびりついたままの、小刀だ。

ところどころ錆びているが、その輝き。

師の打ったものに違いない。

「刃物といっちゃ、あたしにはこれだけなんだ。研いどいてくれな  
いかい？」

「人を刺すのに、使わないのなら、、、」

「あ、あれが最後だよ」

二度もあつてたまるかい、とぶつぶつ言いながらあばら屋の裏で  
雨曝しになっていた土鍋を洗う、まかべ。

男は、束ねた藁で土鍋を擦る小気味良い音を聞きながら、工房の  
片隅の台の前に膝をついた。

その傍らには水瓶と、整然と並ぶ数種類の砥石。

良く使い込まれたその一つを、手に取った。

「、、、、、、、」

師の几帳面さを思い出しつつ、男は砥石に水を吸わせると、女の  
手に合わせて作られた小刀を当てたのだった。

鰯雲も橙に焼けた、茜空。  
だいたい

重なる丘陵には、葉を落とした梅桃の木々が植えられ、刈取りを  
待つ田の畦道には、子供達が虫を追って遊んでいる。

それまで獲物を追っていた鷺達も、一羽二羽と埒に帰る、そんな  
時分。

馬蹄を響かせ、二頭の馬が遠野の里に駆け込んだ。

かつて預けた富農の好意に甘え、馬を預けていると、なだらかな  
坂の上の庵にまず、尼僧が顔を出し、慌てた様子で庵の中へ戻って

いた。

その庵に向かい歩き出せば、門前に現れた庵主が、手を振った。  
「羽琶殿」

堪らず駆け出したのは他でもない。

未明に帝都を出、遠野まで駆け通しの一行。

それなのに、疲れを微塵も感じさせぬ、燕倪の走りであつた。

「羽琶殿。急に無理なお願いが、、、」

開口一番、詫びるその人に、

「無理などんでもない、燕倪様。この山深き地に、当庵を頼っていただき、嬉しゅうございます」

その人が、微笑んだ。

「平素は寂しいこの庵も、賑やかになりますしね、、、」  
落ち着きなげな燕倪の肩の向こうに、羽琶の視線。

その先に、

「久しいな、羽琶姫。変わりなく、何より、、、」  
ようやく蒼奘が、姿を見せた。

「蒼奘様も、いく久しく。息災で何よりでございます」

深々と頭を下げ出迎えてくれた、たおやかなその白き髪の姫。  
鷹乃杷羽琶。

長身の二人の前で、随分と小さく見えた。

「う、わぁ、、、」

燕倪の背中に隠れていたつもりか、背中をよじ登り、顔を覗かせたのが、

「まあ、伯様も。お元気そうで」

水干を纏い、首に翡翠輪を掛けた、伯。  
両手を伸ばす伯を、

「あ、こらっ」

燕倪の静止空しく、腕に抱き上げた。

「狭く、何もお構いできませんが、どうぞ我が家とお思ひになって、お寛ぎくださいませ」

案内に立つた羽琶の肩越しに、伯が燕倪に向かって牙を剥いた。  
「ぐぬっ」

呻いた燕倪の視線に、蒼装の背中。

傍らを通り過ぎる際に、

「荷を頼む、」

その声音。

振り向けば、

「あっ」

一行の荷の包みが、残されている、

腹が満たされると、子供達は折り重なるようにしてまかべの寢床で丸くなった。

どこからともなく差し入れられたのは、酒の入った瓶子。

死期が近いと知った悪党共からの、ささやかな饞別であつたのだが、ここで今を生きる者達にとつては出所は、大した意味を持たなかつた。

次々と蓋を開けられ、振舞われれば、あつという間に胃の中だ。

そんな賑やかな時も、食べ物や酒が尽きればお開きとなり、今は、あばら屋には吹き込む風と、子供達の寢息が、音の全て。

修繕間に合わぬ屋根から差込むのは、望月の煌々と冴えたる明かり。

部屋の隅を走っていた鼠が、動いた影に怯えて逃げ出していく。

横たわる師の枕辺で、汁の入った椀を手にその口を湿らせていた

男は、師の顔を拭いてやろうと手拭いに持ち替え、

「、、、、」

ふと、工房を振り返った。

振り向いた先の工房では、冷たい金床に縋るようにして、まかべが眠っていた。

床に投げ出したままの腿と、だらしなく後襟が開き、覗いた背中が、寒々として見える。



「お師さま、」

しかし、声にならぬ苦鳴を放ちながら、白く濁ったままの双眸は紛れも無い怒りを湛え、

「くおああアアッ」

落ち窪み皺深い眼窩から、男を睨みつけている、

遠野から、更に馬の脚で一刻。

深い山懷に抱かれた集落では、稀に見る怪異に見舞われていた。

つい、半月程前の未明。

川が、それは赤く染まったと言う。

何人もの村の者達が目撃し、突然の異変に手をこまねいている間に、その水は水路に流れ込み、いつものように田畑を潤した。

気味悪がった者も多かったが、すぐに透明な水となってしまったために、その時は大した騒ぎにならなかったと言う。

それどころか、収穫を控えていた稲はさらに丸々と肥えて垂れ下がり、枯れかけ抜く時を待っていた茄子や胡瓜は、また花を結んだ。

更に、川に網を張れば、いつになく魚が獲れ、村人を喜ばせた。

しかし、それも束の間、

「子供達が、次々と妙な病に、」

数日の内に流行病か疫病か、乳飲み子から四、五才までの子供達が、一様に意識を失ったのだ。

「大人や、年老いた者達には、一切見られぬ症状だそうです」

知らせを受けた管領が、急遽その集落への入り口を、封鎖したと言う。

むいあき

村長の嘆願書だけが、ようやく帝都に届けられたのがつい、先日。地方、それも三百程の集落のせいか、迅速に封鎖されたわりに、大した調査もされていない様子が伺えた。

「だいぶ、時間が経っているな」

遠野、羽琶の庵で一晩休んだ、翌朝。

燕倪は、集落へと至る勾配厳しい山道を眺めていた。

そこには、急遽掻き集められたとみられる不揃いの戦袍を纏った武人らが、太刀や槍を手に居並び、俄仕立ての木製の関所が、人の出入りを監視している。

「行こうか、」

青乳色の鬘、漆黒の体軀。

赤紅の眸、鋼雨の背に乗ると、手綱に手を掛けた。

葦毛の肥馬、千草の背に乗った燕倪が、手を差し出す。

「行くぞ、伯」

張り巡らされた幔幕の一画。

しゃがみ込んでいた伯は、その声に立ち上がると燕倪の元へ。

馬上に引き上げようと、その手を掴み、

ポタ・・・トトト・・・

拾い集め、袖に入れていたものが、こぼれ落ちた。

深栗色の輝き。

丸く大きな、どんぐりだ。

「す、すまん、」

坂を転がっていく様を無言で見送るその横顔は、

「、、、、」

あきらかに、むすつとしている。

見上げれば、頭上に大きな<sup>あへまき</sup>が、その枝を張り出していた。

「帰りにまた拾おう、な？」

「いない」

「そう言っなよ」

いつもの二人のやり取りに構わず、馬腹を蹴ろうとしたところで、

「あの、、」

頼りなげな声が掛かった。

浅葱色の袍。

先ほどまで応対してくれた、医官だ。

なりたてと言った様子で、歳も若い。

押し付けられ、態良く飛ばされたのだろう。

「僕も、連れて行つてはくれませんか、？」

それは、震えるような小さな声だった。

「、、、、、、」

馬上から、どこか冷ややかに睥睨する闇色の眸に、身を竦めつつ、

「これでは、ここまで来る村人の聞き取りしか、、」

「どういう事だ。そなた、集落に入つたんじゃ、、」

「いえ。実は僕も、足止めをされて、、」

「奇病ならば、手っ取り早く、村一つつてか。氣に入らんな」

腕を組んで睨んだ、その先。

武人達を従える、生木を打ち付けただけの関所。

「医官を派遣したと言う、口実だけあればよいのよ、、」

「民の嘆願書程度では、中枢は動かん、かあ。御上が知るまでも無く、処理されちまうんだな」

悲痛な響きを含んだ声音に、

「むしろこの程度、被害を拡大させぬためと言うのなら、生温いかな、、」

侮蔑を含んだ、声が返した。

「お前までそんな事を、、」

露骨に嫌な顔をした、燕倪。

蒼装は、何も言わず馬首を向けた。

道を閉鎖する武人達も、その姿は耳にしているのか恭しく門を外し、都守のために簡素な扉を開いた。

「まあ、口ではああ言いながらも、行くんだよなあ」

呆れた様子で、燕倪も馬首を向ける。

「あつ、少将殿、、」

追いつがる医官の若者に、

「一応、あいつはあれで飯食つてるんだ。遙々出張って来たって事は、その手の仕業なんだろうよ」

屈託ない笑顔で手を振ったのだった。

「その、手、、？」

ぼつりと取り残され、首を傾げた若い医官の視線の先。  
ぎしぎし言いながら、関所の扉が閉じられた。  
遠ざかる蹄の音が、山間の道に軽やかに、響いている。

急峻な山道に行くことしばらく、とたんに視界が開けた。

空は広く、大地は果てなくどこまでも広がって見えた。

それまでと打って変わって、なだらかな丘陵のように見えるのは、  
背の高い木々が樹海となって広がっているからだ。

紅葉とまではいかぬが、萌黄や橙、黄が混じる樹海のその中を、  
巨大な蛇を思わせる川が、合流と枝分かれを繰り返しながら長くう  
ねっている。

集落へと降りる峠道で、馬を止めていると、

「けほっ、、、ケッ、、、ケホケホッ」

異変に、伯を覗き込んだ。

「どうした、大丈夫か？」

咳き込むその背を擦りながら、振り向けば、

「なんだか、伯の様子がおかし、、、蒼装？」

「、、、、、、」

袖で鼻から下を覆った蒼装が、一望できる崖の手前で、広がる大  
地を見据えていた。

「どうした？」

馬を寄せれば、

「大分薄れてはいるが、まだかなり、、、」

「何が？」

「香るのよ。甘く、れいし霊紫がな」

「霊紫？俺には、何も、、、」

くんくんと鼻を鳴らす、土の香りと木々の青臭さくらい。

別段変わった事は、無い。

「そろそろ話してくれよ。大体どうして、そんなものが？」

「以前、遠野で大猪に会っただろう？」

「あ、、ああ。白くて、角の生えたヤツか、、？」

「青角そうかくと呼ばれていてな。ここら一帯の地仙ちせんさ」

「地仙めし。主か、、」

総毛立った感覚をまざまざと思い出して、腕を擦る燕倪に、

「死んだ、とつい先日、勝間の主より聞いてはいたが、この分では  
どうやら間違いないようだな、、」

袖越しの、こもった声音が応じた。

「死んだ!？」

「ああ。その血肉が、この地に還ったのだ。霊紫となつて、、」

「それで痩せた作物が再び花を咲かせ、実をつけるような事が、、  
。だが、子供が何故？」

「ううっ、、」

顎の下で呻き声が、洩れた。

顔を腹に埋めてくる華奢な背を、擦りながら、

「こんな状態じゃ、俺だけ行つてこようか？」

心配そうな燕倪の顔。

「何、肺腑に馴染めばこの程度、毒ではない。すぐに、嗅覚も麻痺  
する」

「おいおい。麻痺つて、お前、、」

「生き抜く力か、人の身体は実に上手く出来ている、、」

意味深な言葉を残し、蒼装は深く大気を吸った。

「ケシヨっ、、けッ、ホ、、」

「だが、伯は辛そうだぞ」

蒼装は袖を探ると、小さな巾着を一つ、取り出した。

濃紺に、望月と兎が染められ、紅の飾り紐がついている。

「伯、、」

「う、、」

顔を上げると、目に涙が滲んでいる。

「袖に入れておけ」

小さな手が受け取り、鼻先に持って行くと、

「ほう、、、」

これまた小さな溜息が、こぼれた。

燕児の鼻先にも、その可憐な香りは届いたようで、、

「この清涼感、、、鈴蘭だな」

「ああ」

にやりとしながら、さては、

「どこぞの姫君に、貰ったのか？」

箏葉殿という奥方を貰いながら、お前、といかにも言いたげ。しかし、

「昨晚、羽琶殿に無理を言っつてな。調香してもらったのだ」

「何!？」

実際のところはやはり、寄せる想いも寄せ付けぬ男であった。

「破魔の血を引く羽琶姫。その力、あやかりたいものよ、、、」

「おっと、、、」

武骨な手に、投げ渡された匂い袋が、もう一つ。

藤の香りが、広がった。

「お前の分、だそうだ、、、」

「羽琶殿、、、って、なんで今頃渡すんだ?!」

「姫が手ずから渡せば、長くなりそうだったんでな」

「うぐっ」

何も言えず袖に仕舞う頃には、伯も落ち着いた様子。

木々の根が張り出した下り坂を、二頭の馬は歩き出した。

ふと、

「お前も貰ったのか、、、？」

先に行くその背に問うてみた。

「ああ、、、」

声だけが、鬱々と応えた。

「伯は鈴蘭。俺は藤。お前は？」

「薔薇そつびであつたよ、、、」

「、、、、、、」

なんともなしに尋ねたのだが、羽琶が抱く三人への想いをそのままを現しているとしたら、

脈なし、か、

と思えなくもなくなる、燕倪であつた。

急勾配の山道を下ることしばらく、山裾に身を寄せ合つようにして、特徴的な切妻造りの屋根が見えてきた。

集落彼方の平地には川が流れ、その向こうは深い樹海。

川のこちら側に、田畑が広がっている。

調度、稲の刈り取りの最中か、頬被りの人々が鎌を手に、刈り入れを待つ田に入って作業しているところであつた。

海棠が植えられ、村へ降りる者の姿が見え隠れし始めると、幾人かの村人がこちらに気づき、遠目で伺うように眺め始めた。

深い雪に耐えるため、急な角度であつた茅葺屋根。

川原の白石でもって石垣が築かれ、細い水郷がさわさと涼しげな音を立てている。

縁側で、我が子を抱き、昼の温もった陽射しを浴びている所に、  
「？」

蹄の音。

村へ至る唯一の道は、封鎖されているはず。

見れば、村の入り口。

地蔵が居並ぶその辺りに、二頭の馬が姿を現した。

「ん、ん、？」

家の石垣に生えた草を抜いていた老婆は、馬の蹄の音に皺深い目を更に細めた。

腰を叩きながら、

「お、おばあッ」

石垣から顔を覗かせ静止の声を出す、聞こえぬ様子。

女はたまらず、隣の家を駆け込んだ。

「富じいつ、お、おかしな風体の人がッ」

「な、なんじゃと?!」

畑仕事を若夫婦に任せ、孫の枕辺に居た祖父は、手に鎌を持つと外に飛び出した。

「ば、、、」

化け物の親玉か?!

その姿、異形。

背まで流れる銀系の髪。

透けるように白い肌。

雪色の狩衣を纏い、手に錫杖を持っていたても、あまりにも異質であつた。

かたや、

「おお、ばば殿。ご無理をされるな」

ゆつくりとこちらへ向かう老婆に、馬を櫓の木に結わえていた若者が駆け寄つた。

「手前どもが参る故、ささ、戻りましょう」

その手を取つて連れて来るのが、腰に大太刀を下げた、偉丈夫。

どこか眼差しに愛嬌のあるその男は、対照的に、ひどく平凡であつた。

その二人の後ろ。

地蔵尊の脇に生えた芒を抜いているのが、水干姿の童であつた。

呆氣にとられる老人と、それを伺う若い女の前に来ると、

「つかぬ事をお伺いするが、村長源助殿のお屋敷は、いずこか?」  
むらおさげんろく

手に老婆を支えながら、ちらりと鎌を見た偉丈夫。

その快活な声音が、問うた。

「あ、あなたさま、は?」

咄嗟に鎌を後ろに隠した老人に、鬱々とした白い髪の主が応じた。  
村長日比野源助が嘆願書により罷り越した都守、みやこもり 耶紫呂蒼装、やしろうそうじょう、

「同じく、左近の少将、さしやうしょう 備堂燕倪」  
ひどうえんげい

「み、都から?!」

信じられぬ様子の老人の後ろで、

「ご、ご案内致します。どうぞ、こちらへ」

乳飲み子を抱えたまま、若い女が進み出たのだった。

「遠路遙々、かような辺境の地に、ようお越し下されました、  
三層の叉首構造<sup>さすまたしっぽうぞう</sup>。」

天井には太い梁が渡され、整然と組まれた桁と相俟って、長い年月をかけ人々の生活と共に燦<sup>くら</sup>された、鐵<sup>くろがね</sup>の纏<sup>まと</sup>だ。

明かり障子から取り込まれる陽の光はそれでも仄暗いが、飴色に輝く床のせい、か、そう感じさせない。

広々とした、居間の中央。

自在鉤が吊るされた囲炉裏の向こうに、熊の敷物。袖なしの羽織を纏った白髪の老人が、座っていた。

「お出迎えもせず、なんとお詫びしたら、」

長く垂れた白い眉で、その下の眸も見えない。

瘦軀ではあったが、骨格は豊かであった。

「このままで結構。堅苦しい挨拶も、お氣遣いも無用に、」  
上がり框の前に立つ、白髪の都守。

その前に進み出てようとするのを手で制したまま、

「早速だが、目覚めぬ子等を一ところへ、」

静かな声音が単刀直入、そう告げた。

村人の案内で、赤く染まったと言う川辺に立った、燕倪。

穏やかに細波を刻むだけの澄み切ったその川辺で、腕組みだ。

「おかしなもので、川海老も魚も、網を上げればたくさん獲れるんで」

見れば、岩陰をすり抜けてゆく魚影も、多数。

冷え込んできた大気とは裏腹に、再び鼻をつけた茄子や胡瓜も、先ほど目にした。

「以前にもこんな事が、」

「いえ、」

「確かにそれじゃあ、薄気味悪いわな」

さすがに同情を寄せる燕倪は、水を掬った。

手に、ひやりと纏わりつく、川の水。

ふと目をやれば、岸の向こう側に、鹿の群れが現れた。

「さすがにここいらは、山が深い」

目を眇め、その群れが人を恐れるでもなく水を飲む様を眺めれば、  
「私共は、獐はしません。この川の向こうは、代々の先祖が休む地、  
盆にだけ、先祖を迎えに川を渡りますが、それだけです」

傍らの若者が、手を合わせた。

「それじゃあ、川上を見に行つてないのか？」

「はい。この村の民ならば、先祖の地を踏み荒らすことなど、到底、  
、、」

「そうか。森に入りたいところだが、それじゃあなあ、」

どうしたものかと、大太刀業丸の柄を叩いていれば、

「でも、少将殿は都のお人。村長がお許しになれば、」

農作業に負われつつも、耳を立てている村人らには聞こえぬように、  
小声で言った。

「そうだな。この際、聞いてみるか」

この若者も、奇病に罹った子の父親。

こちらを伺い、やがて森に消える鹿の群れを見送りながら、

「何かの前触れじゃ、と皆心配しております。子等の事も、このま  
まではお医者様もお迎えすることも出来ず、ただ、待つばかり、、、」

「

不安を隠せぬ様子。

「ま、そこいらはあいつが何とかしてくれるさ」

頂垂れた若い男の肩を叩くが、

「だと、いいんですが、」

溜息を連発しつつ、刈入れの作業に戻って行った。

「ありや、」

その背中に苦笑しつつ、伸び一つ。

「さて、俺は少しばかりこの川を、調べてみるかな」

村の一画にある入母屋造りの集会場。

村長の命令により、程なくして、村中の子供達が集められた。

その数、二十余。

板の間に寝具を敷き詰め、寝かされた子供達の親。

煩わしいからと人払いをしたのだが、生後五ヶ月と言う乳飲み子を抱えた、あの女だけは頑として首を振らなかった。

「では、好きにしろ、」

どこか冷ややかな声音に、

都人みやうじんとは、皆一様にこんな者達なのか？！

思い描いていた何かが、崩れ去った気がした。

薄暗い部屋の片隅に座ると、女は白い髪の主が、一人の女童の傍らで膝を折るのを見た。

灰白い暗がり、白い織手が伸ばされ、女童の手首に触れる。

そつと袖の中に手を戻してやると、目元を引いて眼球を覗き込む。  
蠢く黒目に、浅く頷くと、

「その子に、乳は、」

闇色の眼差しが、訊ねた。

「あつ、は、はい、」

突然の事に、頷き、

「でも、飲ま、なくて、」

「他の子らも、少なくとも十日は何も口にしていない、と、」

「はい。おもゆを与えても、受け付けません。なのに痩せるわけでもなく、かえって丸々として、」

「子等以外はどうか、」

「それが、寝たきりだったおばあは、急に起きだし、峠だと言われている横窪のじいさまは、持ち直して畑に出るようになって、」

足腰が弱っていた年寄りだけでは無く、煩わされていた病にも回

復の兆しが見られた者や、食事の量は変わらぬのにふつくらと肥えた者も多い、と女は言った。

「あたしはいつもより、乳が張るくらいで、、わっ」

何を言っているのか、思わず赤くなつた女を他所に、蒼装は辺りを見回した。

部屋の奥。

白い袖が、覗いている。

「伯、、」

「っ」

びくっ・・・

急な階段に足を掛け、その上にある明かり障子を見上げていた伯は、思わず身を震わせた。

死角になっている階段の向こうから、顔を覗かせれば、

「袖のものを、、」

「あ、、」

そつと押さえた、袖。

布地の下には、ころころ丸くすべらかな、手触り。

「、、、、、、」

「伯」

ふわり、また、ふわり。

子供達の上を飛び越えつつ、蒼装の傍らへ。

「、、、、ん」

渋々袖から出されたその手には、深栗色の輝きが握られていた。

どんぐり。

懐紙で受け止めると、

「助かる」

とぼとぼと外へ出て行く童の背に、声を掛けた。

集められた子供達。

滾々《こんこん》と眠るその子等の口を、緋手が抉じ開けた。

そこへ、どんぐりを一つずつ、含ませる。

「あ、あの、、、先生、、、」

腕に抱いた、乳飲み子。

訳が分からず、子を胸に抱き寄せた女に、蒼装は懐紙から一粒摘み上げ、

「この里に満ちているのは、霊紫と言う生命の根源のようなものだ。水や食物によつて体内に蓄積された霊紫は、豊かな食生活を送るこの子らには、強すぎた。欠けたるものが多い大人に比べると、遙かにな、、、」

腕で眠る女童の腹の上に置いた。

「あの、、、わ、わかりま、せん」

震えるような、その声音。

次の子供の傍らに膝をつくと、同じように口に含ませながら、  
「子らがこのように丸ければ、大人はこちら、、、」

懐紙の中から、どんぐりを一つ選ぶと、放り投げた。

か・つっ……

それは、軽い音を立て、不規則な動きでもって女の足元に転がった。

目を凝らせば、

「あ、、、虫食い、、、」

黒い孔が開いている。

「この辺りに満ちる霊紫は、植物や生き物に吸収され、徐々に薄れている。この子等も呼吸と共に排泄しているため、放っておいても近く目が覚めるだろうが、、、」

「う、、、」

それは、小さな声であった。

蒼装が、入り口付近に寝かせていた童の枕元で、膝をついた。

そつと、ふつくらとした頬に手を当てると、ころりと唇から零れ落ちる輝き。

すぐに睫が揺れ、

「う、、、ん、、、」

うつすらと目が、開いた。

「せ、先生っ、、、」

信じられず、声を上げた女の視線の先で、

「おじさん、、、誰？かあちゃん、は？」

寝惚け眼を擦り擦り、童が呟いた。

「酷い風邪が流行っていると聞いてやってきた、医者だ。母御は、粥を炊いている。すぐに来るから、安心しなさい、、、」

注がれるそれは、穏やかな眼差しであった。

「うん、、、」

まだ、半分眠りの中なのか、ぼんやりと天井を眺めている。

「生まれ出でようする力は、計り知れぬ程、貪欲だ。与えられるままに喰らい、我がものとする、、、」

蒼装は、静かにその傍らから離れた。

「そのような憑代よりましがあれば、それに吸収させてしまえばいい」  
かつ・・・り・・・

足元に、投げ渡されたものが、もう一つ。

「あ、、、芽が！？」

飴色に磨かれた床板に、深栗色のどんぐり、一つ。

目覚めた童の口から吐き出されたそれは、緑の突起を持っていた。

「こんな事が、、、」

今だ、夢でも見ているのではないだろうか？

何ともいえぬ表情の母親の前で、白い纖手が、抱かれた女童の腹の上にぽつりと置かれた輝きを、掴み上げた。

薄暗闇の中。

「目覚めるいつかを待つか、それとも、、、」

長い銀系の髪を持つ都守が、最後の一人となった女童の母に、

「私に、任せてみるかね、、、」

鬱々と問うのだった。

『おおっ』

と言つどよめきが、

『お、、、？』

になり、やがてひそひそとしたざわめきが、占めた。集会場にしている屋敷から出てきたのは、他でもない。水干を纏った、伯であつた。

「、、、、、、」

能面のような顔であるため、不機嫌だと言つのが分かつた者は、いまい。

しかし、あの異形の死人還り、都守。

その連れ。

底知れぬ何かが、その童一人のために道を開かせた。石垣積まれた道を、田畑の方へと下るその小さな背。顔を見合わせ見送る人々の視線は、しかし、

ぎああああ　ッ

劈くような乳飲み子の、元気な泣き声によって再び戸へと、注がれるのであつた。

村長の了解を得て、千草を連れに戻つた燕倪。

「おつ」

石垣の上に、良く肥えた雀が稲穂を啄ばむ様を眺めている、伯の姿。

「おい、伯」

その手には、どこでもいできたのか、柿の実一つ。

「、、、、、、」

顔だけ向ければ、

「ご機嫌斜めつて顔してんのな、、、

この男には、何故かそれだけは、はっきりと分かつた。

「川向こうに行くが、行かないか？」

「、、、、、、」

うんともすんとも言わず、水干の袖が翻つた。

まだ刈入れ途中の田を渡ると、一斉に雀が舞い上がり、赤蜻蛉は空の高みへと舞い上がる。

白い彼岸花ひがなはな咲く土手を上がると、おおよそ人とは思えぬ跳躍で、ふわりと燕児の前に舞い降りた。

そこは心得たもので、何も言わず馬腹を蹴ると、千草は恐れもせず川を渡り始めた。

白くまるやかな石が敷かれた、川底。

苔生したそこには、巨影にも臆せず、縄張りを荒らす不屈き者を威嚇する、尺鮎の姿。

千草の膝程までを濡らし渡りきると、蛇行する川辺に沿って歩を進めさせた。

やがて、集落が深い樹海の向こうへと隠れても、馬上ではカシカシと、まだ少し硬い柿を齧る音が、響いている、、、

川を上ること、四半刻。

「ここいらは、やけに蝶が多いな」

顔に纏わりつくのを、やんわりと振り払う。

川面に群れ、川辺で羽を休めるのは、漆黒に水の色の紋も艶やかな、アサギマダラ。

涼やかな薄黄の模様の、ナミアゲハ。

橙に斑のアカタテハ、ツマグロヒョウモン。

「、、、、、、」

鼻先に蝶を止まらせた、伯。

袖を翻し、ふわりと蝶の群れへ。

「おい、、、、」

川辺に舞い降りると、そのまま水の中へ入っていった。

川の中で羽を休める蝶達が、一斉に舞い上がる。

「うつ」

舞い上がるその数、数千。

顔に当たる羽ばたきに、目を瞑り、

「エンゲ、、、」

その声に目を開けた。

「ん、、？」

川の中に立つその腕に、重そうに抱かれているものがあつた。

水に晒され、白く湾曲した巨大な頭蓋骨。

伯であれば、そのまま中に隠れられそうだ。

「おい。それ、骨じゃ、、」

千草を降り、水に濡れるも構わず駆け寄ると、

「ん、、」

伯が、それを燕倪に押し付けた。

「お、重いな。こりゃ、猪か、、？」

突き出した吻ふんが、その特徴を捕らえていたが、猪にしてはひどく大きく、燕倪の腕にも余る程。

「すると、これが、、」

「青角そうかく」

水に沈んだままの骨を拾い上げ、浅瀬に投げると、蝶が群がった。

「ここで息絶え、その血が村に流れ込んだのか。この蝶は、霊紫を求めて、、？」

「、、、、」

「おい、何を、、」

骨を拾い投げては、川底を覗き込んでいる。

袖が濡れるのも構わず、川底の石を引っ繰り返す。

「伯、、？」

「ん、、」

こちらを見ると、己の額の辺りを突いた。

「あの角か？」

抱えた、頭蓋骨。

その額にぽっかりと開いた孔、一つ。

「なら、俺も手伝うぞ」

諸肌脱ぎになると、凍えるような冷たい川の水に、入ったのだっ

た。

## 第玖幕後

青角

（前書き）

西の森の地仙青角の屍が眠る川で、青き角を探す伯と燕倪。しかし、その角は、意外なところに在った、、

死人還りの都守蒼装、業丸を継ぐ武官燕倪、幽身であるがこの世に縛られた伯。それぞれが紡ぐ異国絵巻、第九幕後編。。。

## 第玖幕後

## 青角

蝶を狙い、薄い皮膜がついた翼を翻す。

凄まじい速さで反転したと思ったら、その口に捕らえられていた。何処とも知れぬ洞窟の暗がりから現れた、小型の蝙蝠達の群れ。

「ああっ、寒いッ」

頭上擦れ擦れを掠め飛ぶその下で、さすがの燕倪が音を上げたのは、辺りが暮れ始めた時分であった。

「、、、、、、」

象牙色の肌も紅に染まる、逢魔が刻。

「伯、これ以上は無理だ。さすがに、見つかりっこないぞ」  
「、、、、、、」

深くなっている水底を、大きな岩の上から覗き込んでいた伯。水を含んで重くなった袖と裾を絞ると、おおよそ人とは思えぬ跳躍でもって、岸に上がった。

袖に腕を通し、

「これだけ探して無いんだ。もっと下流に流されたのかもな、、」  
「ん、、、、」

「明日も探すんなら、付き合っが、、」  
抱き上げた伯を、千草の背に乗せた。

馬上に上がり、手綱を手にしたところで、  
「いい。たぶん、もう無い、、」

小さな声が応えた。

「そっか、、」

宵闇が迫る東の空を眺めれば、瞬く星々の姿。

途中、横切るヤマカガシを見送り、雁の声を遠くに聞いた。

千草に驚いた雉の番が、賑やかな羽音をさせて飛び退る。

静寂には程遠く、忙しない豊かな樹海の夕暮れ。

山裾に蹲る切妻屋根が見えた時、辺りはとつぷりと暮れていた。

墨色に沈む集落から漏れる明かりと、たなびく白い煙。

その景色が、何故だが懐かしく感じる。

ほっ、口をついて出たのは、安堵の吐息。

その川岸。

「ソウ、、、」

白い髪の主が、鋼雨の背にて、二人の帰りを待っていた。

十六夜月夜。

庵からは、遅い炊事の煙が上がっていた。

「山の向こうは、ここより冷え込みましたでしょう？猪肉を頂きましたので」

膳を運んできたのは、尼僧みずは。

その心遣い。

脚付きの膳には、里芋や牛蒡、人参、葱などを味噌で煮込んだ猪

汁の椀が、湯気を立てていた。

「あ、、、」

ちらりと見た先に、項垂れたままの伯の姿。

咄嗟に、

「こ、これは馳走。痛み入ります、みずは殿。我らこと猪肉には、目が無くて。なあ？」

苦肉の決断で振った先。

燕倪に振られた蒼装はしかし、

「、、、 ああ」

あっさりと頷く。

この時ばかりは燕倪、蒼装の良心を確認し、内心胸を撫で下ろしていた。

共にと乞うて、運ばれた膳は、五つ。

冷え込む夜気に、半分だけ開け放たれた板戸。

庭に面した縁側には、芒と秋桜が生けられ、調度芒の上辺り。

月が、掛かっていた。

ゆらゆらと頼りない燈明の灯り。

けれど、平素閑散としてゐる客間が、今宵は賑やかだった。箸を持つて、すぐの事だった。

こりこりと、音がする。

「ん？」

燕倪は、隣にちよこなんと座つた伯を覗き込んだ。

見れば、その口から骨が出ている。

思わず燕倪が、骨を抓んで引つ張ると、

「んやッ」

手を払われた。

「氣に入つたようだな、」

「軟骨のところが好きなのか、」

「かり・・・こり・こりこり・・・」

「羽琶殿の前だと、酒以外もちゃんと食べるんだな、こいつ」

ぷっくりとした頬を突けば、つんとそっぽ向いた。

「ああ、そう言えば、」

遠野に現われた、神々しいまでに巨大なその姿。

あの日、腰を抜かす程驚いたが、

「幼子おさなごと思ひまして、杯の用意もせず、」

こうして見ると、俄かには信じがたい。

杯をもう一つ持つてくると、あっさりと伯は口の骨を出した。

水のように杯を干す、童。

燕倪が瓶子を傾け、空になつた杯に満たす。

それを見ていた羽琶は、

「いくら神仙とは言え、伯様は幼子おさなごに変わりありません。お酒は過ぎるとかえつて体を冷やしますから、程々に」

「、、、、、、」

そつと伯の腕に手を置いた。

「ん、、、、」

ややあつて、杯を箸に持ち替えるのを、向かいに座る蒼装の闇色

の眸が、穏やかに見つめている。

場も解れ、食も進み、酒も進んだ頃合。

話題は、集落での話になった。

「まあ、、、」

みずはは、不思議そうな顔で耳を傾け、羽琶は興味津々と言った様子。

隠棲しているとは言え、若い娘の姿がそこにはあった。

「それでは、子供達も皆、、、？」

「ああ、大事無い。それどころか、当分あの集落に医者が必要なころ」

ヤマメの塩焼き。

羽琶が、隣で身を摘むのに苦戦している伯に世話を焼きながら、

「羨ましいこと、、、」

ぽつりとこぼした。

杯を離さぬ蒼装の杯に瓶子を傾けつつ、

「姫は、季節の変わり目に、必ずお風邪を召しますものね」

「もう、みずは。子供の時とは、違うわ」

「みずはにとつて姫様は、いつまでも姫様です」

みずはが柔和な微笑みを湛え、ほんのりと頬を紅潮させた羽琶を、見つめている。

みずはだけが知る、羽琶の顔でもあった。

そんな様子を、先程から目尻を下げて眺めている者がいる。

「不自由な事があれば、文を出せばいい。燕倪が飛んで来たところでどうこうなるかは分からぬが、それでも、、、」

「何っ?!どういう意味だっ」

傍らで、既に酒臭くなっている燕倪が、とたんに肩を怒らせた。

「頼りになると、言っている、、、」

空の杯を揺らせば、

「お、俺、俺かぁ?!あ、いやいや、そうですよ。不自由があれば、この備堂燕倪を頼ってくださいっ」

なみなみと杯を満たしつつ、胸を叩いた。

備堂の名がな、な、

呆れながらも、それを口には出さなかった。

にこにこと羽琶に見つめられている事にも気づかぬ、この幸せ者を、今は酒に酔わせてやりたい、そんな心持ちだったのかもしれない。

一雨来て、ようやく覗いた、晴れ間。

朝陽が東の空の雲間から、差込む。

それでも、一刻程は眠ったであろうか？

子供達に見送られ、昨夜のうちに帝都を出た。

途中降り出した雨に逃げ込み草鞋を脱いだ廃寺には、今まだ筵に包まったまま休む旅人や、軒下で火を熾す行商人の姿があった。

「な、な、な、」

声を掛けるでも無く、男は錫杖を突きつつ、峠を登る。

纏わりつくのは雨漏りがひどく、その湿気で重く、旅垢で薄汚れた衣。

その衣が陽射しで乾いていく際に、容赦無く体温を奪ってゆく。

胸元を掻き合わせ、ぬかるむ坂道を行く事半刻、紺碧の大海原が彼方に見えた。

淡い空色とその紺碧が、水平線で混じって見える。

峠を下った先に、宿場町として栄える美津がある。

美津浦と呼ばれる松林が伸びる優美な海岸には、船の姿が点々と見えた。

潮の香りに背を押され、峠を下れば、昼過ぎには美津の雑踏に入った。

客引きの者達に袖を引かれるでもなく、海産物を商う商店を冷やかすでもなく、男は黙々と街道を西へ西へと歩いていく。

街道は、美津の先で西北へと伸びている。

見慣れた田園風景が広がる、平坦な道。

後、二日も歩けば、谷津に構えた己が庵に着くことだろう。

足元を飛蝗が、土手の向こうへと跳んでいた。

左手の田んぼには、刈取られた稲が干され、その向こうには柿の木々がほんのりと色づいた実をつけていた。

ヒヨウ・ロロロ・・・

天高く、弧を描くように舞う、鳶の姿。

先を急ぎ、追い越してゆくのは、荷車を押した農夫であつた。

子の手を引く旅人や、馬を駆る役人然とした者達。

遠く、鈴の音が聞こえた。

彼方の畦道に、僧侶を筆頭に棺桶を若衆に担がせた一団が、見え  
た。

「、、、、、、」

草陰で伴侶を求める虫達の音が、どこことなく哀愁をはらみ、男は袖の中で数珠を手繰った。

足を止め、片手拝みで佇む男の姿に気づいてか、先に行く僧侶が、頭を下げた。

一行が、静々と丘陵を上がり消えるのを見送って、笠を深く被り直した時だつた。

「おお、慟杏殿<sup>どうあん</sup>ではないか?!」

葦毛の肥馬が、向かいで足を止めた。

「これは、燕倪殿。このようなどころでお会いするなど、、、、」

男は笠を上げると、顔を覗かせた。

眼に愛嬌のある男と、童が一人。

「奇遇ですなあ。これから、谷津へお歸りに?」

「ええ。実は帝都に赴いたのは、我が師の見舞いでして。持ち直しましたので、こうして、、、、」

「そうであつたのか。これは水臭い。慟杏殿の師なれば、我が太刀の親も同然。む、、、、?」

男の眼差しが鋭くなる。

俄かに殺気立った偉丈夫慟杏に、燕倪がその視線を辿れば、

「おい、どうした？」

「ギギッ」

鼻の頭に皺を寄せ、今にも飛び掛らんばかりの伯。

まさか、伯を打ち据えようとした相手ってのはッ？！

咄嗟に肩を押さえたところで、

「、、、、、、」

それを無言の内に眺めていた蒼装は、鋼雨を千草に寄せた。

「そのためだけに、神たる地仙を喰ろうたのなら、高くつくぞ、、」

「

「月色の髪、死人還り。そなた、、都守か？」

見つめた先に、深い深淵を思わせる闇色の双眸。

「どう言う事だ、蒼装！？」

伯を押さえる燕倪が問えば、

「青角そうかくが、いるのだよ、、」

指差した先が、

「そこに、な、、」

男の右腕の辺り。

「青角とは、あの主の名か、、？」

しみじみと、男が言った。

「何も言わぬで、知らなんだな、、」

男、慟杏は、指差された辺りを擦さすった。

布地の下にある硬い感触を確かめながら、低く擦れた声音が、語りだした。

「主ぬしとは、もう二十年来になるだろうか。掟を破り、狩りをしていた時に、西の樹海で出逢った」

運悪く飢狼の群に襲われ、命からがら登った木の枝で、己が血の滴り落ちる様を、幾日も眺めていた。

足元では獲物が息絶えるのを待つ、飢狼の息遣い。

ろくに睡眠も取れぬまま、血塗れた傷口から手足が冷えてゆく。

臉が重く、朦朧とした意識の中、狼達の悲鳴を聞いた、気がした。  
「こんな話をしても、誰も信じないだろうがな」

ぬくぬくとした感触に眼を覚ませば、身を寄せ合う鹿の群の中に居た。

跳ね退く鹿の群に呆気にとられつつも、傍らから温もりが去る事は無かった。

「主に、俺は命を救われたらしい」

それが、巨猪であった。

一目でその獣が、尋常では無いと分かった。

雨に打たれたのか、泥が跳ねてなおその体軀は神々しいまでに白く、模様の如く巻きつく蔦も、額の擦じれた青き一角も、どれもこれも今まで見たことの無い、、いや、敬う事を忘れた慟杏にとつては、それを揺り起こすに十分であった。

それから村を出て、樹海の東の果てにある谷津の刀工に、弟子入りした。

砂鉄を集め、来る日も来る日も玉鋼を打ち鍛える工程に、心が洗われる気がした。

やがて、心洗われる程に、見えるものも多くなっていた。

鋼の、心。

鋼を求める、人の心。

鋼が被<sup>き</sup>う者の、心。

「道、極<sup>きわ</sup>まば、どれも同じところに行き着く、、」

弟子である己に工房を譲り、今は帝都の貧民街にて刃物を鍛える師が、ことあるごとに言った言葉。

包丁から鋏といった日用品、やんごとなき姫君の守刀、武官の大太刀、果ては物盗りが振るう太刀まで、、

鋼と向き合い、輝き出すその時まで、打ち出しの手を休める事無い慟杏の確かな腕は、刀工の中でも抜きん出ていたが、そのために名を伏された事もあった。

それでも、舞い込む依頼を選ばず、日がな一日中、思いの丈を打

ち込み、今に至る。

「青角の本質はその実、青角と呼ばれるその？<sup>オク</sup>。代々宿主を替えては、森を見守ってきた大地の粹だ。その青角が、人であるそなたを選んだと言つ訳か、」

鬱々と響く声音に、

「元より主により紡がれた命。その願いを断る選択肢など、俺には無かった、」

「ふむ。鋼を鍛え、その心を知るそなたに、青角は何かを見たのだろつ、」

蒼装の言葉を受け、袖をたくすと、青い輝きがこぼれた。

擦じれた角が、埋まっている。

「おい、待てよ。主となれば、屍<sup>かはね</sup>は森に還さねばならないだろう？  
つて、事は、？！」

はつとして慟杏を見る燕倪。

「森に、入るつもりだ」

どこか晴れ晴れとした顔が、笑って言った。

「しかし、」

「主の使いが現れた時、すでに決めた事だ。掟に背き、集落を捨てた俺には、身寄りと言つ身寄りはもう、貧民街で刃物を打つ老いたる師のみ」

「なら、尚更、」

燕倪の声に、慟杏は首を振った。

「心残りと言えはそれくらいだ。主が倒れる刹那、それを見透かした主に万病に効くと諭された、」

物言わぬ骸となった巨猪に鋼を入れ、血を啜り、肉を食らえば、腕に？が宿った。

それから、師のための肉を一抱え、切り取った。

「塩漬けにして、その甕の前で幾日も悩んだよ。悩んだ末、結論出ぬまま帝都に赴いた。だが結局のところ、死の淵にあったその姿を見ると、どうしようもなくなってしまつてな、」

自嘲気味な笑みが、慟杏の口元に湛えられた。

「主の肉を汁にしてもらい、師に飲ませた。程なくして目覚めた師に、昔のようにひどく叱られたよ。命極めんとする者を、揺り起こすやつがあるか、とな。無理も無い。俺の知る限り、齡八十を数えるのに、病一つしなかった師だ」

筵に横たわる姿を見せるのは、死ぬ時だけだと、決めていたのかもしれない。

師を慕う者達が、慟杏に送った文がなければ、今世、再び見える事もなかっただろう。

「あの剣幕では当然、地に還る事はあるまい」

かつてのように怒り散す師を思い出したのか、その眼差しが遠く東の空に注がれた。

「慟杏殿、これより森に入ると言うことなれば、太刀はもう、打たぬのか？」

不安気な顔の燕倪に、慟杏は頭をふった。

「主の代行であっても、鋼を打つ事を、やめるつもりはない。幾年かかるかは分からぬが、使いを出せるようになれば、居所をお教えしよう。急ぎであれば我が師、曉杏をお訪ねあれ。師の腕は確かだ」  
「御気性を窺うに、慟杏殿の名を出すなど、そら恐ろしくて到底できぬよ」

燕倪の言葉を受けて、からからと笑った。

「では、太刀と相談され、大切に振るわれることだ」

「ああ。やってみる、」

燕倪は太刀の柄頭に手を置き、頷いた

それでは、と笠を目深に被ったところで、ひやりとした手が、腕に絡みついた。

「お、」

「、、、、」

見れば、漆黒の眼差しが、腕に注がれている。

「別れの挨拶を、したいそうだ、」

鬱々とした声音が、言った。

「以前、一度だけだが、この仔は青角に会っていてな、、」  
「そうであつたか、、」

袖をたくせば、逞しいその二の腕で青角が、冴えた輝きを放った。  
伯の幼い手が、擦じれた角に触れると、

こ、これは、、

その網膜に、はつきりと巨像が、結ばれた。

幼き童によつて見せられ、捻れた青き？によつて流れ込んでくる。  
優美な曲線を持ち、透けたるその身。

大きな鱗が煌々と刻まれ、深紅の鬣は流れ、迫り出した紫紺の背  
鰭は長く広がる。

それは、水と言わず風をまでもを、捉える事だろう。  
もののけでは到底持ちえない、その姿。

嗚呼、、

そして、その突き出した吻の先。

小さき獣が、一つ。

縞も鮮やかな猪の子、うりぼう。

吻が、ゆつくりとした動きでもってうりぼうを一、二度、突いた。  
幼くして、青角となつた先代の宿主の、それは魂であつたか？

吻に身をすりよせるうりぼうの姿を見たところで、焦点は街道脇  
の田畑を映した。

「、、、、」

ゆつくりと手を離れた、伯。

「神霊たるそなたに、俺は何と言う事を、、」

その童の前に膝をつけ詫びれば、漆黒の眸が、男の顔をまっすぐ  
に見つめてきた。

「小さい青角も、お前と共に行く、、」

その言葉に、右の拳が震えた。

そして、押し殺したような声音で、

「ああ。もとよりこの血肉に、、」

辛うじてそこまで言うと、足に力を込めて、踵を返した。  
笠を目深に被った慟杏が、錫杖で大地を突くと、錆びた遊環が街道に響いた。

己を助け、己を変えたその主を、喰らったその男。

溢れ出す感情に胸の内を焼きながら、足早に去るその足跡には、  
ぽつりぽつりと雨の跡。

「、、、、、、」

見上げたところで、雲は無い。

「伯、、」

遠ざかるその背をいつまでも眺めている伯を、蒼装が馬上に抱き上げた。

「琲瑠には、気の毒だったが、これで、万事解決って訳か？」

「そうなるか、、」

「慟杏殿が主になる、ね、、」

「人が主に成るとは、あまり聞かぬが」

鋼雨が、ゆつくりと歩き出す。

「人でもあるが故に、出来る事も多かるう、、」

「お。珍しく前向きな意見」

千草を寄せた燕倪が、懷から包みを取り出した。

月桃の葉を開けば、羽琶が持たせてくれた草餅。

手を伸ばす伯の指が、打ち粉もろくに払わず摘み上げた。

ブシュシュシュツ・・・

少し後ろにいた千草がそれを吸い込んで、首を揺らし、

「うツ、、、わぁっ、ああぁあッ!!」

包みの中身は、そっくり街道脇の土手を、転がり消えた。

「ああぁあああっ」

せつかく羽琶殿が作ってくれたのに、と続きそうな、長い溜息であつた。

「心が痛むな、、」

ほう、と小さな溜息の蒼装に、

「お前が言つなッ」

さすがの燕倪、齒を剥いた。

「なあ、伯、、、」

「やつ、、、、」

「まだ、何も、、、、」

くつくつと喉を鳴らす、都守。

もきゅもきゅ……

餅の柔肌と餅粉が齒に擦れる音をさせながら、伯が頬張る草餅。

千草の首の辺りに腕を置き、顎を乗せつつ、横目でそれを眺めるは、燕倪。

雲ひとつない、蒼天の下。

長閑すらあるその集落を抜ければ、まもなく、宿場町で知られる美津の海が見えてくるはずだ。

ちらほらと見え始めた、松の木々。

ほのかに香る潮風が、数日振りと言うのにそれは懐かしく感じる、秋の空であつた。

帝都。

賑やかな声が、する。

「やあやあ、季節外れと笑うなかれッ！！東は大江稻荷の古吊り鐘を、潰して作つたありがたい風鈴だよッ」

わんわんとして、実に騒がしい。

「袖を引かれ引かれて、都に着いたのはついさっき。大方買われちまつたが、残りがこれだッ！！さあさ買ってくれいッ」

捻り鉢巻に、尻端折り。

良く焼けた若い男が声を張り上げ、往来を天秤に黒金の風鈴を提げ、

「その旦那、どうだいどうだい！？軒下に吊るせば、鬼は逃げ帰

り、福は舞い込む、縁起ものだよっ」

威勢よく売り歩いてゐる。

「ついさっき？一昨日も見たぞ！？」

「やい、若造っ、お布津さんの市にいただらうっ」

往来の人々が野次を飛ばせば、

「べいッ！そりゃ、おいらの偽物だッ！！こちらが正真正銘！！」  
と、軽快に受け答え。

大方、適当な由来をつけて、安く買い叩いたものを売っているのだらう。

「止めてくれ、、、」

その風鈴売りの少し先の辻で、牛車が止められた。

供の若衆が主に命じられ、手を拱いた。

「へいへい、毎度ッ」

破顔して駆け寄る風鈴売りの鼻先で、物見が開いた。

「っ」

その貌を見て、ぎよつとした風鈴売りは、

「東の大江稻荷は、古狸。金気を嫌う生臭だ、、、」

背に冷たいものが流れるのを、感じた。

「へ、、、へい、旦那様がおっしゃる通り、大江稻荷の鐘などでは、  
、、」

見透かされる闇色の双眸に、萎縮した様子の風鈴売り。

「左の竿に下がっているものを、見せてくれ、、、」

鬱々とした声音に、

「へ、へいつ」

慌てて竿を差し向けた。

物見から白い織手が伸びると、しばらくいくつかの風鈴を揺らし、  
個々の音に耳を澄ます。

「これをもらおうか、、、」

一つ、その織手自らが竿から抜き取ると、供が風鈴売りの手に銅  
銭を握らせた。

「あ、有難うござえますッ」

やつのことで押し出した声は、上擦り、引つ繰り返った。

物見か閉じて、惚けた様子の風鈴売りを、気の毒そうに眺める  
供の顔に、

「あッ」

我に返った。

ほんの短い時間であつたのに、風鈴売りにとっては、心臓を鷲掴みにされ続けているような錯覚さえ覚えた。

目礼して、供が牛を追う。

ぎしぎしと車が遠ざかつて程なく、

「おい、ありや、都守だッ」

「なんだってっ！！それじゃあ、魔を祓う有難い鐘って訳か？！」

「俺にもひとつッ」

「あたしにもッ」

遠巻きに眺めていた人々が、駆け寄った。

西に湧いた雲に、太陽隠れる、逢魔が刻。

「お、押すなああッ」

揉みくちやにされる、風鈴売りの嬉しい悲鳴が、往来に響いている。

恵堂橋を渡った先の辻を、折れた。

宵闇に沈み始める往来に、篝火が見当たらない。

変わって、ちょうど牛車が止められたところだった。

主のために前簾を上げているのが、

「琲瑠ッ」

「ああ、燕倪様」

穏やかな物腰の、いつもの若者であつた。

「もう、いいのか？！」

大きな手に肩を掴まれると、

「はい。ご心配をお掛けしましたが、この通り、」

苦笑しつつ、頷いた。

「良かった、」

ほっとした燕倪の鈍色にひいろの眸。

「簾を上げるくらいしたらどうだ、燕倪、」

肩を掴まれたままの琲瑠に代わり、自ら降り出したのが、

「甘えるなよ。それにお前なあ、従者と言えども怪我人を労われ」

「ふん、」

肩に、銀系の髪を流した蒼装だ。

先に篝火を焚くように命じると、二人は門を潜った。

「先ほど宮中で銀仁に聞いたが、真面目に宮勤めに励んでいたらしいな、」

蒼装が、燕倪の目元の隈を指差して言った。

「俺がいつさぼったか、聞かせてもらいたいものだ」

燕倪は鼻で笑うと、

「どうも、清親が烈也のやつに何か言ったらしくてな。いつもの報告書に加え、宿居しゆくぐに警邏けいろと昼夜を問わず、身を粉にしてお仕えしていたと言う訳さ」

明日が、ようやく非番なのだと言う。

「琲瑠の見舞いと兼ねて、伯に、久々に稽古をつけてやろうと来たわけだ」

「そうか。では、酒はその後か、」

「おう」

庭へと抜ける、山野草植わる木立の先。

「おい、伯」

声を掛けたのが、楓の梢。

「、、、、」

その上で枝を齧りながら、暢気に仰向けで寝そべっているのが、群青の髪を結った、伯。

「稽古をつけるぞ。降りて来い」

垂れている袖を引こうと手を伸ばすと、当人が引かれまいとして

袖を掴み上げてしまった。

「もう、いいい」

「んえ？」

きょんととして立ち尽くす燕倪の傍らに、

「どうもな、枝を振り回すのは、性しやうに合わんと気づいたらしい、

」

蒼装が佇んだ。

「性に合わんって、、そう言う問題じゃないだろ？」

琲瑠が復歸したらば、どこ吹く風。

「伯、、」

チ・リイイ・・・ン・・・

澄んだ音が、響いた。

董色の眸が見開き、蒼装と風鈴を交互に眺めると、

「ん、、」

梢の上から、手を伸ばした。

黒金くろがねの、冷やりとしてざらつく感触。

その下に垂れる琴を揺らせば、澄んだ音。

手近な枝に、結びつける様子を闇色の眸の端で捉えると、

「これからは、先見さきみの感覚を養うのだそうだ、、」

口元に笑みを刷きつつ、平橋を渡っていった。

「お、おい、、」

その背を追う、燕倪。

阿四屋の屋根の下。

長椅子に腰を落ち着けたところで、既に用意されていた石榴石の

杯を手にとった。

「なんだよ。人がせつかく、、」

珍しく、ぽつりと毀れた愚痴に、蒼装はその杯を差し出した。

瓶子を傾けると、澄んだ酒が注がれ、杯を持つ燕倪の指をしたたか濡らした。

愚痴をそのまま飲み込むように、喉を晒す友に、

「剣は、我らに二つと必要ない、」

「？」

伯の言葉。

「だ、そうだ、」

「分かん」

置かれたままの杯が、勢い良く満たされる。

それを眺めつつ、

「それでいいさ、」

盆の中。

乾いたままの杯、一つ。

「はうふ、」

楓の梢から洩れた、溜息一つ。

夜空に伸ばした右手を、握ったり、開いたり。

そのうち、

「、、、、」

拳を握り、腹の上。

ぼんやりと眺めた先。

木の葉の間に茫洋と、透かし燈籠を吊るした阿四屋が垣間見える。

その屋根の下。

酒を酌み交わす、蒼装と燕倪の姿。

「、、、、」

やはりこの地にある限り、この手の心労は続きそうだ。

ギリリと、奥歯を噛んだところで、

「あふ、」

睡魔。

涙ぐんだ眸の先で、さわさわと木の葉が揺れ、風鈴は啼いた。

心地よいその波に吞まれるまま、瞼を閉じた。

ざわつく胸の裡とは対照的に、夢に沈む意識の先には、束の間の  
安らぎがある事を、知っているのかもしれない、

第玖幕後

青角

（後書き）

## 第拾幕前

青鈍

（前書き）

都守に代わって勅旨を下賜されてしまった燕倪。瘴氣が噴出して  
いると言われる帝都南東へ、赴く事になったが、

死人還りの都守蒼装、業丸を継ぐ武官燕倪、幽身であるがこの世  
に縛られた伯。それぞれが紡ぐ異国絵巻、第十幕前編。。。

煌々と、中天に昇らんと輝く上弦の月。

その下に、長い影が伸びている。

月明かりの中を、肩に雪色の長衣を掛けた若い男が、歩いていた。夜露を払うためか、漆黒の笠を被り、背には包みを背負っている。高い空に、咽び泣くように響き渡るのは、篠笛の音であった。

月夜に誘われたのか、はたまた、そうして一夜の宿を得ているのか、

甲高く時に瀟々《しょうしょう》と響き渡ればこの時分、高い築地塀の中で、聞き惚れる者も多からう。

やがて、耳にじょうじょうと、琵琶の音が聞こえてきた。

男の足は自然、その音の方へと向かっていった。

じょう・・・じょう・・・

月夜に奏でるその調べを、男の篠笛が捉えた。

古き時代を偲ぶかのような音色に、

ヒョウヒョウ・・・ルルル・・・

どこか高みを舞う鳶が、誘われ舞い降りてくるような、

やがて、

じょう・・・う・・・

冴え渡る月の下。

余韻を残し、琵琶の音が、止んだ。

長い睫毛が、ふるりと揺れた。

その意識は今だ空の高みに在るのか、濡れた漆黒の眸が覗いた。唇に当てていた篠笛を下ろすと、足元に散る、梔子色の木の葉に気づいた。

篠笛を手に見上げた先には、

「、、、、、、」

大銀杏が、聳えていた。

白壁は手入れが行き届き、剥げ落ちたところなんぞ、ひとつも窺えない。

琵琶は確かに、その向こうからした。

色の薄い唇から、白い吐息が長く、こぼれた。

辺りには、いつの間にか夜霧が深く漂っていた。

行くあてはあるのか、踏み出したその足を、

「もし、、、」

塀の向こうから、女の声が呼び止めたのだった。

「いない？」

篝火の仕度には、まだ少し早い時分。

門前で、舞い寄った木の葉を掃いていた瑛瑠はいるは、

「ええ。それもここ数日、お屋敷には戻っておりません」

燕倪えんげいを見上げて言った。

「どこほつつき歩いてやがるんだ、、、？」

「さて。どこへ行くと、いつ帰るともおっしゃらずに、ただ、出掛けてくるとだけ、、、」

「勝間か、、、？」

ふと、脳裏に過ぎった箏葉こてはの貌。

「まさか、な」

口に出しつつも、否定した。

あの男に、そんな甲斐性があるとは、どうしても考えられなかった。

「伯は？」

「若君でしたら、いつもの楓の枝でお休みになっております」

「そうか。じゃ、あいつの顔を見て、今日は帰るよ」

いつものように、庭へ続く木立に分け入った。

季節外れの風鈴の音に、草陰に隠れる虫達の声が混じる。

藤袴に女郎花、松虫草が揺れる小道を行くと、

「エンゲ」

枝の上から声が掛かった。

顔を上げるより先に、肩に回された腕。

重さを感じさせないその主を、

「なんだ。置いてきぼりで、不貞腐れていると思ったが、」  
腕を回して、捉えた。

脇に手を入れ、目の前で抱き上げると、

「、、、、」

菫色の大きな眸が、静かに見つめてきた。

二又に割れた一对の小さい翡翠の角。

ばさらに垂らしたままの群青の髪。

朱鷺色の唇から、その能面のような貌には不釣り合いな犬歯が、覗いている。

「で、お前も、あいつの行方を知らないのか？」

「、、、、」

「どうなんだ、、？」

ぷいつ、とそっぽ向いた。

「知ってるのか？」

「、、、、」

伯のこの様子で、知っていると見た燕倪。

「ふむ、、」

そつと大地に下ろしてやると、

「お前を連れて行けぬとなると、やはり、誰ぞ気に掛かる姫でも見  
つかったか、、？」

顎に手をやって呟いた。

伯は、そんな様子を冷ややかに眺め、

「はふ、、」

小さな溜息を一つ、母屋へ向かって歩き出した。

「んな、、お前、知っているなら、教えるよっ」

その背に追いつがる、燕倪。

行灯に灯りを燈して屋敷を回っていた汪果おづかがこちらに気づき、手にしていた燭台を手拭いに持ち替え、伯の足を拭うために母屋へと上がる石段に膝をついた。

すんなりと膝に入る、伯。

その泥だらけの足を、母親が子にするように拭ってやりながら、

「燕倪様もいらっしゃったことですし、今宵は、杯をお二つ、ご用意致しましょうね、？」

「、、、、」

こくり、、

「？」

何が何だかわからぬ燕倪に背を向けて、伯はそのまますたと奥の間へ歩いていってしまった。

燕倪の耳元に丹色の唇寄せて、

「情つれなく帰るなどと、おっしゃらないでくださいまし。若君お一人だと、あまりお召し上がりにならなくて、」

あれで嬉しいのだと、汪果がそれとなく耳打ちしたのだった。

絢爛と花々が狂い咲くその中に、緋毛氈が敷かれている。

肩肘枕で、長煙管を咥えた屋敷の主が、

「地仙、使いにやった野狐が、戻って参りました」

その声音に、大きな溜息をついた。

「不在、だそうです」

砂色の髪、隻眼の若者が、散らかしたままの刻み煙草を、片付け始めた。

ぼんやりとたなびく、紅梅の煙を眺めながら、

「不在不在と、首に縄でも掛けておけよ、」

紺碧の眸が、空を彷徨った。

「どなたにですって？」

くすくすと笑いながら、尋ねれば、

「決まっておろう」

紺碧の眼差しが、胡露<sup>ころう</sup>を、睨<sup>ね</sup>めた。

そんな眼差しも慣れたもので、持ってきた茶器を操りながら、  
「若君は、いらっしゃるそうですよ」

「ふん。こんな時に、幼神残して、冥府にでも雲隠れか、」

遙絃が、長い爪を苛立たしげに噛むのを見た。

その手をやんわりと包み込む、胡露の手。

「思い通りにならぬと、その爪を噛む癖。直しませんが、」

「構うな。お前の前だけだ」

「また、そんなことを、」

呆れたような溜息に続き、

「まあいい。いざとなれば、幼神を吊るし上げさえすればいい。そうすれば、あやつのことだ、出てくるだろう、」

「遙絃」

銀恢の隻眼が、窘めた。

そんな胡露が、蓋椀を差し出すのを受け取りながら、

「まあ、あの性格。何も知らぬで、おとなしくしておるとは思えぬが、」

「一先ずここは、様子を見てみる事にしたらしい。」

永遠とも言える、静謐と宵闇の中。

蒼白く滲んだ広大な、庭。

御簾など巻き上げたままの、その一室。

燈明の頼りない灯りの中、うつ伏して何度も読み返した絵巻物に  
眼差しを落としていた者は、

「誰ぞ、ある、」

微かに揺れた焰に、見えぬ誰かを呼んだ。

開け放たれたままの襖の向こう。

ゆらりと、佇んだのは、見たことの無い長身の若者であった。  
その手に、だらりと篠笛が提げられている。

「法師が言つておつた、新しい樂師か、」

聞きなれない音色が、響いていると思えば、その主であつた。

燈明の灯りの元に進み出たのは黒髪を長く垂らし、見るからに青白い肌の男。

そつと膝をつくつと、

「はい。今宵、こちらの軒下を借り受ける事となりました。僭越ながら、ご挨拶に、」

抑揚に欠ける低い声音が、応えた。

「今宵と申すと、それは夜が明けるまで？」

「姫が、お引止め下されば、幾日でも、」  
しばしあつて、

「、、困つた。当屋敷では、夜が明けた試しがないもの  
いつからなのか、それすらも分からない。  
思い出せないのだ。」

「なれば、この上なき喜び、」

生気の欠片も感じられない声音が、応じた。

「喜び、と、、？」

「はい。いつも知れぬこのような暮らしを続けておりますれば、  
明日、身を寄せるところを考える始末。篠笛の音に、打ち込む事も  
できませんので、」

再び、絵巻物に視線を落としながら、

「そう、、なら、わらわはいつこうに構わぬゆえ、ゆるりとして  
ゆかれよ」

以前にも同じ事を、別の誰かに言つた事がある様な気がした。

二度は無い、別の誰かに、

「恐れ入ります、」

平伏し、立ち上がったその背につと、

「そなた名は、？」

これもまた同じ問いを、したような。

一人一人違う名を、一々覚えていくわけでもないのに、

既に灯り届かぬその中で、人影となった男は、横に首を振った。

「日々、違う軒下を渡る身でございますれば、呼び名は様々。お好きなようにお呼びくださいませ、」

「わらわが、名付ける、」

そんな事は、初めてであった。

深藍の直衣。

涼しげであるのに、どこか憂いを帯びたその楽師。

浮かんだ名は、

「時雨<sup>しぐれ</sup>」

通り雨の名であった。

「過ぎる雨、でございますか、」

物憂げな男の声音に、

「氣に入らない、」

首を傾げて、言った。

「いえ、相応しき名かもしれませぬ、」

闇の中で、楽師が、薄く笑ったような、

「それでは、姫。長い夜のうちに、また、」

渡殿を、夜霧の向こうへと消えゆく楽師の背中を、ぼんやりと眺めながら、

「そう言えば、雨が降ったのはいつのことだったかしら、」  
明ける事の無い、長い夜。

それだけは分かるのに、いつからそうなったのかが、どうしても、  
思い出せぬ。

唯一思い出せるのは、

宮中。

「都守が、不在？」

白袍纏った精悍な若者が、眉宇を顰めた。

「ああ、ここしばらく屋敷にも戻ってないらしいぞ、銀仁」  
社殿を背に立つのは、束帯姿の燕倪。

玉砂利が敷かれたそこは、ちょうど陰陽寮の裏手であった。

「南東より噴出した瘴気が日に日に強まっていると、こちらでも場所の特定を急いでいるが、なにせ広範囲らしい、」

「南東と言えば、曰くつきの池や社が幾つもあるからな。先の帝の崩御間も無く、逆賊などと言われ、地盤固めに一掃された者達も多かった、」

ふと、かつての出来事を思い出したのか、暗い陰を落とした鈍色の眸。

多くの血が流れたその中に、燕倪も居たのだろうか？

銀仁は、鬱々と沈んだ顔の燕倪を、なんとも言えぬ眼差しで見つめた。

快活明快。

そんな偉丈夫も、思い出したくない過去の一つや二つ、あるのかもしれない。

銀仁の視線に気付いて、  
「ああでも俺は、見鬼でもないしな。俺一人じゃ、この手の類はからつきし」

苦笑した燕倪が、手にした桐箱を肩に打ち付けた。

紫紺と銀系の組紐。

紛れもなく、都守に下されたものである。

「勅旨が出たところで、当人もいない。どうしたものかね」

代わりに燕倪が受け取るのもおかしい話だが、共に行動している事も手伝って、下賜されたらしい。

「陰陽寮だけで片付けられるのであれば、いいのだが、」

「まったくだ」

「我も付き合いたいところなのだが、」

「ああ、気にするなよ。今朝、清親も心配していたが、あと、酷い風邪なんだってな？」

銀仁が、溜息をついた。

こと、あとの事となると、この虎精も形無しだ。

「季節の変わり目は、必ず風邪をひくのだ。肺に負担がかからねばいいのだが、」

「今日、帰ったら藤那に葱を届けさせるよ。長雨が続いたが、年々水捌けが良くなっている。今年は葱が、畑を覆う勢いなんだ」

「ありがたい。あと私も、喜ぶだろう」

「早く良くなるといいな」

銀仁の肩を叩いて、燕倪は午後の勤めに戻るべく、歩き出した。

「燕倪、こちらでも何か動きがあれば、連絡する」

「おう」

手だけが、ひらひらと応じた。

やっぱり、だめかあ。ま、あとりが病じゃ、仕方ない、

腕に抱いた桐箱を擦りながら、

「ま、とりあえず、あいつが戻るまではあの界隈の警邏から、やってみるか、」

こればかりは仕方ないと、燕倪が呟いた。

大銀杏で、足を止めた。

見上げたその枝の葉は宵闇に青白く、くすんで見えた。

そっと、白い手を伸ばし幹に触れた時、

「、、、、」

袖の中で、ころりと動くものがあつた。

袂を探れば、小さな巾着。

香りも失せてしまった、その匂い袋。

指先が、その中に固い欠片に触れた。

巾着の口を開き、眼を眇めたところで、

「ふ、、」

思わず毀れた笑みは、誰へのものであつたのだろうか？

「どうしたのかね、客人？」

しゃがれた声が、掛かった。

腰が曲がった瘦躯が袈裟を纏い、夜霧の中にこにと佇んでい

た。

「いえ、、、」

俯くその貌に、

「若いのう。誰ぞ、心を砕く者でも、、、？」

「お恥ずかしながら、、、」

手にした巾着を、そそくさと袖に仕舞った。

大銀杏の前に立つその楽師の傍らに、法師が立った。

「しかし、見事な大銀杏ですな、、、」

「樹齡は、もう百五十は数えることだろうて」

「お屋敷の外で拝見した時には、落葉していた気がしたのですが、

、

その呟きに、法師の長い眉に隠された眸が、

「それよりもこの老いばれに、そなたを待つ姫の名を、聞かせてはくれまいかな？」

輝きを増した。

そんな事などつゆとも気づかぬ楽師は銀杏の木を見上げ、しばらく黙っていたが、

「はて、、、」

首を傾げた。

楽師のその背を、法師が満足げに叩いた。

「夜は、長い。朝が来れば、思い出すだろうて。さ、もう一曲、、、

」

見れば、燈明の元、琵琶を抱いた女が調弦をしているところであった。

全てが灰白く、宵闇に沈むこの屋敷。

じょうじょう、ヒョロロと、どこか物悲しい音色が、いつまでも夜霧に滲んでいる、、、

手には、提灯が一つ。

雲が覆う夜空では確かに心もとない、すっかり夜の帳に抱かれた

時分。

人気の無い通りを、背を丸めた男が歩いている。

「あのな、、、」

ここ最近、陽が陰るとめっきり冷え込むせいか、その猪首に布を巻いている。

「そりやこうして来てくれるってのは、嬉しいが、、、」

鈍色の眸で、見上げた先。

その左肩に、座っている者がいる。

男の硬い髪をむんずと掴み、その背に両足を投げ出しているのは、肩からは降りてくれないか、伯、、、？」

「、、、、、、」

燕倪のそんな頼みも、もちろん聞く耳持たぬ、伯である。

先刻、琲瑠を連れ、警邏を見越したかのように燕倪の屋敷を訪ねてきたのだ。

『秋の夜長と言いますし、連れて行ってはいただけませんか？』

琲瑠の、あのなんとも困った表情で頼まれると、断る理由も見つからず、この有様である。

「なんだかな、、、」

真綿の如く、重さを感じさせぬだけ、幸いであつた。

向こうの辻から巻いた風が、肌を弄って行く。

黒髪が、はたはたと頬を打った。

御所から南東に下ったこの界隈は、宮家や公家らの贅を凝らした屋敷や別邸が居並ぶ。

鬱蒼とした竹林や、船を幾艘も浮かべても余りある大池を所有する屋敷も多い。

耳を澄ませば、高い塀の向こうから笑い声や嬌声、華やかな琴の音も聞こえてきたが、それも夜が深まるに連れて、静まり返っていた。

懷手で、長い築地塀の屋敷居並ぶ界隈を、一刻程は見回っていたであろうか。

「、、、、」

ふと、その足が止まった。

しん、と静まり返った、とある屋敷の前。

固く閉ざされた、門扉。

手入れが行き届かず、崩れかけた塀が、なんとも寂しげ。

ここは、、、、

塀から窺い見える大きな檀まゆみの木に、見覚えがあった。

あの日も、月の高いこんな夜であった。

けたたましく吠え立てる、犬の声。

馬の蹄の音。

赤々と燃える篝火を手に、具足を鳴らし入り乱れる、武官らの声。  
わんわんと耳に残るのは、根絶やしにされた一族郎党の阿鼻叫喚  
であつたか？

それとも、返り血に滑る太刀の柄ぬめを握り直した、荒い己の息遣い  
であつたか？

思わず額を押さえたその耳に、

「あふ、、」

小さなあくびが聞こえた。

見れば朧に垣間見える月が、傾いていた。

「今日は、もう帰ろう。伯」

「ん、、」

眼を擦る童を肩に、燕倪は元来た道を戻り始めた。

居並ぶ屋敷の幾つかに、手を血で染めた忌まわしい己の過去がある。

「だから正直、気が乗らないんだがな、、うう、さむっ」

夜氣が入り込む胸元の襟を合わせながら、ひとりごちた。  
背を丸め、足早に帰路に着くその男の肩で童が、ひとり。

「、、、、」

どこか恨めしげに、欠けたる月を隠す薄雲を、見上げている、、

翌日。

左近衛府、社殿。

「あふああつ」

欄干に背を預け、生あくびを繰り返しながら、肩を揉み解すのは、燕倪。

ここ最近は人事異動が続き、地方で荒らしまわっている盗賊被害も手伝つて、警邏のための部隊の編成、再編の件で届けられる要望書や案件が、燕倪の机にも山と積まれる事となった。

下官に慕われる性格が災いして、中々筆が進まないのが本音なのだが、可能なのであれば、

烈也の机に、そっくり積み上げてやりたいなどと忌々しげに、己が文机を睨んでいると、

「少将」

若い武官が、歩み寄つて来た。

「うん？」

「陰陽寮の銀仁殿が、いらしてますが、、」

「ああ、すぐ行く」

大きく伸びをしながら、他の社殿とを結ぶ渡殿へ。

その途中に、白袍を纏った長身の若者が待っていた。

「いつそ、左近衛府に欲しいくらいだ」

堂々たる、その体軀。

白袍でなければ、そのまま武官と見紛う銀仁である。

「困らせてくれるなよ」

苦笑した虎精が、

「おおよその場所は、特定出来たぞ」

声を潜めて言った。

「おおよそ、、？」

「それと、この半月で、分かっただけでも三名程、消えている」

「消えて、、」

「主人の使いに出た者。夜半に抜け出したと見られる子息が一人。」

中には女子おんなの元へ向かう道中、主人を残して牛追いが消えた事もあったらしい。どれも、夜だ」

銀仁が、丸めた紙を差し出した。

広げたそれは、帝都南東部の地図であつたが、所々に赤い印が打つてあつた。

「この赤く塗り潰されているのが、消えた三名の屋敷で、この点が、牛追いが消えた付近だそうだ。この黒い丸は、」

その一つは、昨夜足を止めた場所ではなかったか？

「帝が即位された後、討ち入った屋敷跡、だな、」

その呟きに、

「燕倪、、、？」

銀仁が顔を覗き込んだ。

「ああ、すまん。続けてくれ」

「、、、消えた者の屋敷と、牛追いが消えた付近をざっと囲むと、この辺りになる。昨日、調べに行った陰陽師らの計器での測定も、だいたい符合した」

「それで、おおよそなのか、、、」

「ああ」

燕倪は、太い腕を組んだ。

庭の玉石が、陽光に反射してきらきらとしている。

「昨夜、この辺りは通つたんだが、別段おかしい感じではなかったがな」

「そうか、、、」

「伯が来てくれてな。瘴気が濃ければ俺でも見えるだろうが、あいつも何も見なかったようだし、」

辺りが、ふいに暗くなった。

太陽を、流れる雲が隠したのだろう。

「普通、瘴気が濃くなれば、他の鬼共の動きも活性化するんだろう？」

「ああ。だが、今回はどうもそうでもないようだな」

「おかしいよな」

一礼しながら、通り過ぎる若い武官達の忙しない、足音。

どこからか聞こえる、賑やかな笑い声。

彼らのそんな日常に気を止めてみれば、あの不遜な都守の供などせずに過ごしていたのなら、こんな話に頭を悩ませる事もなかったのかと思い、

しかし、あいつ、どこにいるんだ？

となった。

急に無然とした燕倪の胸中を他所に、

「充慶殿が言っていた。瘴気は噴出してはいるが、消えているのではないかと、」

銀仁が、ぼつりと言った。

「消えて？だが、今までそんな事、、」

「もしそうであるのなら、計器に出た瘴気は、漂っていると言った方が近いのだろうな」

「漂うって、、その、噴出して蟠っているってのか？」

「そこには無かったものが現れるのなら、可能性はある。結界と呼ぼうか、異界と呼ぼうか、、」

「異界、、」

聞きなれぬその言葉に、

「異界はそのまま、この世ともあの世とも異なる世を言う。結界は、その世の摂理で構築されるが、異界はなんとも厄介でな、、」

ぐうの音も出ずに、首を傾げた燕倪。

「たとえば夢は、一つの異界だ。あの世ともこの世とも、異なる。目が覚めて忘れたとて、その記憶はどこかに在る。どこに在ると思う？」

「頭の中か？」

「まあ、そのようなものだ。逆にその記憶が、夢という異界と我々を繋いでいるとも言える。ただ、肝心なそこへ至る鍵の在処は無意識の中にこそあって、思い出せぬだけなのだ。あとは、生来その

在処を知っている。故に、夢路を渡り、時に他の夢に干渉する事ができるのだ、」

「待てよ。鍵のある無意識の地点ってのは、皆共有していると言うことなのか？」

「どうも、そうらしい、」

「わからん、」

銀仁もあとರಿから聞くに、その見解に行き着いただけらしく、

「夢の場合だな」

そう、強調した。

呻く燕倪の眼差しの先で、玉石が白々と輝いた。

太陽を覆っていた雲が、晴れたのだろう。

「とにかく、異界がこの世に現れたり、消えたりしているのなら、」

「異界への鍵を持つ何かが居て、この世に現れたが故に、、瘴気を放つ？」

「それと、異界そのものを形成した、核の存在。楔とも言うが、いずれにせよ瘴気を放つくらいだ。それ相応の化生の存在は否めない」

「よく分からん上に、ますます厄介だなあ」

頬を搔く燕倪に、

「だから、こうして陰陽寮が情報を流しているのだ」

銀仁が苦笑して言った。

燕倪の懷に地図を挟じ込みながら、

「都守を待つて、動いた方がいい」

「そうだよな、」

深い溜息を、背中に聞いた。

渡殿を陰陽寮へと戻りながら、

「ああ、燕倪」

同じところで、まだぼんやりとしている燕倪を呼んだ。

「あ？」

顔を上げたその人が、

「あとの礼を、忘れていた。熱にうなされながらも、どうせなら鴨もよこせ、と呻いておったよ」

「お前の姫らしいな」

ようやくいつもの調子でからからと笑った。

そして、

「この件が片付いて、あとの具合も良くなったら、落葉の山に狩にでも行こう」

「ああ」

二人は、背を向けて歩き出した。

机の脇に山と積まれた書簡。

おとなしくその前に座ると、左中將で従兄弟の真紀烈也まきれつやが様子を見にやってきた。

「燕倪、それは二の次にして、都守を探しにいったらどうだ？」

召喚にも応じない、都守。

勅旨まで代わりに下賜されてしまったのを、さすがに憂いているらしい。

上官として右近衛府からの風当たりを一身に負いながらも、その武功で数多の姫君をものにししている 烈也にしたら、その実、さつさと片付けてもらいのだ。

ここは一つ、熱を入れている姫との枕話に新しい花を添えて貰いたいものだが、

「探したって、出てくるような奴かよ、」

もつともとも言える燕倪の呟きに、肩を落としたのだった。

「姫」

しゃがれた声が、掛かった。

青い目の人形。

金色の巻髪を、櫛で梳いていた姫は、顔を上げた。

視線の先。

開け放たれた襖の向こうに、小柄な影が蹲っていた。

「なんじゃ、法師」

膝を擦りながら進み出ると、燈明の灯りによって皺深い顔に、影が落ちた。

「いえ、こちらに笛吹きが参つておらぬかと、、？」

「笛吹き、、先刻、挨拶に來た樂師か？」

「はい」

恭しく平伏する法師に、

「知らぬ」

人形遊びに忙しい姫の返事。

「ええ、そうでしょうとも。お屋敷は広うございます故、他を探してみます」

渡殿へと向かうその背に、

「法師」

声が掛かった。

「はい、なんでしようか、姫？」

にこにこ振り返れば、

「その笛吹きに逢うたら、伝えよ。せつかくじゃ、一曲、所望する  
と、、、」

抑揚に欠けるその声音。

「かしこまりました」

深々と一礼し、霧の中へと消え去るのを待つて、姫は手にした人形を放り投げた。

「よいぞ」

声を掛ければ、後ろの屏風から、

「お心遣い、痛み入ります、、」

黒髪の樂師が姿を現した。

燈明の下。

車座になつたその膝に手を置いて、

「して、その男の眼の色は？」  
まなこ

身を乗り出した。

露に濡れた黒曜石を思わず、その眸。

「姫も良くご存知かと、」

「もったいぶるな、時雨」

楽師が、穏やかに見つめ返す。

そして、

「青鈍あおにびでございます、珊瑚ごじやひめ姫、」

宵闇に滲む、その色を告げたのだった。

第拾幕中      四季襖      (前書き)

知らず知らずのうちに、異界へと足を踏み入れた燕倪。その後を追う、伯と琲瑠は、

死人還りの都守蒼装、業丸を継ぐ武官燕倪、幽身であるがこの世に縛られた伯。それぞれが紡ぐ異国絵巻、第十幕中編。。。

「とか何とか言つたつて、放っておけるかよ、」

ぶつぶつと言いながら、屋敷を出た。

犠牲者が少なからず出ている以上、知らぬふりなどできぬ性分に、自ら頂垂れての出發となつた。

東の空に、大きな月が掛かっている。

こんもりとした雲が、いくつも夜空を行くが、どれも空を覆うようなものではなかつた。

恵堂橋を渡り、その先にある都守の屋敷の門を叩けば、案の定、相変わらず、でして、」

琲瑠のなんとも言えぬ顔が、出迎えた。

「だろうな。また、これから警邏に出るんだが、」

「それが若君は、今宵はもうお休みに」

「そつか。じゃ、またな」

嫌な顔ひとつもせず、にこりとして、背を向けた燕倪。

「燕倪様」

琲瑠の声が、呼び止めた。

「なんだ？」

「あの、くれぐれもお気をつけて」

「おう」

月明かりの中。

遠ざかるその人を見送つて、琲瑠は門扉を閉めた。

そして、

「これで、宜しいですね、若君？」

屋敷の内側。

燕倪から、ちょうど死角になっていたその暗がり、白い水干を纏った伯が、

「、、、、」

董色の双眸で空を睨んでいる。

そこへ、汪果が長衣を持って現れた。

「こんな事ならば、若君の丈を測っておくべきだったわ」  
どうやら丈が合わず、縫い直していたらしい。

「私も気がつきませんで、」

申し訳なさそうに苦笑した、琲瑠。

伯の肩にふわりと掛けてやると、琲瑠には大振りの瓶子を一つ抱かせ、

「若君。月夜は、彷徨い出るものも多いですから、必ず琲瑠の目が届く所にいてくださいまし」

汪果が、その首に翡翠の連珠を掛けた。

群青の髪は艶やかな黒髪へ。

小さな翡翠の角は消え、漆黒の眸が汪果を見上げ、

「、、、、」

こくり、、

頷いて、門の外に出た。

「それでは、行って参ります」

微笑みながら会釈する琲瑠に、

「留守はわたくしが、、」

汪果が頷いた。

琲瑠が振り向いた時には、すでにその姿は、彼方。

「ああ、若君っ」

ふわり、また、ふわり。

月夜に舞うかの如く、辻へと消えた伯を追いかけて、琲瑠が駆け出した。

門から顔を覗かせ、その背を見送っていた汪果が、

「大丈夫かしら、、」

ぽつりと、呟いた。

「この辺りか、、」

銀仁に手渡された地図に、記された、その辺り。

月影浮かぶ水路に掛かった橋を渡ると、長い築地塀の屋敷らが、軒を連ねている。

水路沿いに植えられた柳の木々がさわさわと揺れ、塀の上を歩いていた猫は、こちらに気づいて足を止めた。

これまた同じような屋敷が、揃いも揃って幾つも、、

一步、その界限へ足を踏み入れれば、白い築地塀が延々と連なり、さながら迷宮の如く。

人気の無いそこを行くのは痩せた野良犬と、風に舞う木の葉くらい。

しばらく歩いたところで後ろを振り返り、

誰か、連れてこれば良かったな、、

どれも同じような築地塀のせいで、己の現在地も分からなくなりそうだ。

「どうしたものか、、」

さすがの燕倪も溜息、一つ。

見上げた夜空にちようど、流れる雲から顔を出す満月の姿があった。

鈍色の双眸を眇める燕倪の影が、長く長く伸びた。

じよう・・・じよう・・・

「ん、、？」

その耳に、どこからとも無く聞こえる琵琶の音。

自然、燕倪の足が音の聞こえる方へ。

両側を延々と伸びるかに見えた白い築地塀の果て。

「ここは、、」

欠けたところなど一つも無い白壁に、四足門。

白い石が敷き詰められたその向こうに、見事な大銀杏を頂いて、荘厳瀟洒な屋敷がひとつ。

開け放たれたままの門の向こうには、行灯の灯りが洩れていた。  
ヒヨウ・・・

篠笛の音に誘われて、思わず門前に立つたところで、

「？」

燕倪は、辺りを見回した。

屋敷の向かい。

眼を凝らせばその暗がりの中から、丸々とした鼠が二匹、駆け出して行くところであつた。

首を傾げたその背に、

「もし、、、」

女の声。

振り向けば、臙脂の着物を纏い、豊かな黒髪を巻き上げた女が、立っていた。

「ああ、すみません。なんとも言えぬ琵琶の音に誘われてしまつて、  
、、」

苦笑した燕倪に、

「そうでしたか、、お耳汚しでは、ごさいませんでしたか？」

縋るような顔で、女が言った。

硬く閉じられた、眼は、<sup>まなこ</sup>光を失つて長いのかもしれない。

「いやいや、天上の月も聞き惚れて、貌を覗かせた程で、、」  
と、見上げた先。

おかしいな。月が、、

いつの間にか、空は薄雲で覆われ、辺りには夜霧が漂っていた。

それでも雲の向こうにある月は煌々と明るいのか、闇が辺りに青白くに滲んでいるようにさえ、思えた。

賛辞の言葉を受け、にこりと微笑んだ女が、

「ここは、<sup>こじやうめ</sup>瑚麿姫様がお屋敷。音に誘われ、いらしてくれたのなら、  
昼夜を問わず客としてもてなすように、仰せつかっておりますれば、  
、、ささ、どうぞ、、」

ふわりと、前に出た。

「あ、、、、」

危なげな足取りに、咄嗟にその腕を取ったところで、女が燕倪の

腕に身を寄せた。

開いた着物の襟から、豊満な胸元が覗く。

「あ、、、いや、こんな夜分遅くに、そのようなつもりで、、、」

目のやり場に、慌てた燕児の腕を、その胸に抱いて、

「秋の夜は、長ございます。これも何かの縁と思つて、どうぞこちらへ、、、」

「いや、しかしつ、、、」

「ささ、、、」

引かれるままに、屋敷の内へ。

どうも、この男。

鬼は叩き斬れど、女子供の細腕だけは、どうしても振りほどけぬ性質らしい、<sup>たち</sup>、、、

「、、、、、、」

首根っこを掴まれ、おとなしくしていた伯は、草履がようやく大地についたところで、顔を上げた。

なんとも鋭いというか、、、

築地塀の影から、向こう側を窺っていた若者は、屋敷のうちへと消えたその背を見送つて、安堵の溜息を一つ。

塀に背を預け、伯の前にしゃがみ込んだ。

「申し訳ございませんでした、若君、、、」

そつと水干の襟を直すのは、琲瑠。

「しかし、危うく見つかるところでしたよ」

今にも出ていきそうな勢いで身を乗り出し覗いていた伯を、琲瑠が影に引きずり込んだのだった。

草履で、転がっている砂利を蹴り上げるのを、

「、、、、まだ、すねていらつしやるので？」

「、、、、、、」

宥めるように、琲瑠が言った。

「貴方様を頼りにしておられるからこそ、こうして、、、」

「、、、、、、」

「若君、、、、」

能面の如き貌が、空を眺めた。

月が雲に陰り、そして、再び顔を出した。

伯は、影からその月明かりの中へ。

「ハイル、、、、」

主君に呼ばれ、その傍らへ。

その手が、琲瑠の抱えているものを、ひたひたと叩いた。

白磁の瓶子。

「ああ、そうですね。お月見酒、、、、」

ようやく機嫌を直してくれたのか、にこりとして、その背に続いた。

燕倪が消えたはずの屋敷を見上げ、

「しかし、、、、」

琲瑠は苦笑した。

手入れされぬまま、朽ち果てる時を待つ屋敷が、一つ。

この界限に住む者達を、震え上がらせるこの屋敷。

魍魎屋敷。

入るうものなら高熱を出し、取り壊そうものなら決まって死人が出た。

火をかけようものなら、己が身に燃え移り、俄か雨に吞まれる始末。

誰のものであったか、口伝するのとはばかり、時折訪れる者といえば、事情を知る古参の陰陽師らで、誰も踏み込まぬようにと張り巡らせた注連囲いを見回るのがせいぜいだ。

「、、、、、、」

そんな注連囲い、謂れなんぞ、なんのその。

伯は、崩れ、塞がりかけた門を、潜って行く。

その背に続きながら、

「なんともおどろおどろしいお月見に、なりそうですね、、、、」

いつものなんとも言えぬ琲瑠の声音が、夜気に滲んだ。

危なげな足取りも屋敷の中では勝手知ったる、とても言うように奥の間へと誘われる程に、すっかりとしたものになった。

燈明の灯りが点され、夜霧に煙る庭に面した部屋に通された時、袈裟を纏った小柄な法師が、人の良い笑みを浮かべ、手をついた。

「いらせられませ。御身足を病み、屋敷の奥で寂しくお過ごし姫も、喜びましょうぞ」

「いや、、」

言葉を探しているうちにその腕に縋った女が、望月に芒野が描かれた襖の前に腰を下ろした。

「なんのおもてなしも出来ませぬが、ささやかながらの歓待、お受けくださいますね」

「お氣遣いは無用に。拙者は、その、、ほ、ほんの通りすがり。やんごとなき姫君のおわすお屋敷とは露知らず、とんだご無礼を、、」

恐縮する燕倪に、法師はほろほろと笑った。

「何をおっしゃいますか。名のある御仁とお見受け致しました。そのままお帰りになったとあれば、後々姫様にきつうお叱りを受けてしまいます。さあ、遠慮なさらずに、、」

法師の目配せが分かったのだらうか？

女は眼を伏せたまま、襖を開けた。

脚付きの膳が並べられ、松茸、いわたけ、うるかにからすみ、海<sub>こ</sub>鼠腸<sub>のわた</sub>、鮑<sub>のわた</sub>など、、

山海の珍味が、色とりどりの瓶子と共に、用意されていた。

歓待となれば、ますますおかしな事になると、

「あ、、これでも拙者は武官の端くれ。さ、酒は嗜みもうさぬ」

咄嗟に口からでまかせを言った。

「では、お食事だけでも、、」

ぼってりとした唇を尖らせる女に、

「あいや、それも先ほど済ませたばかりで、、そのお心だけ頂いて、今日はこれにて」

すまなさそうに、申し出た。

頭を垂れ、来た道を戻ろうとしたその足を、

ヒヨウヒヨウ・・・ロロ・・・

どこからとも無く漂う篠笛の音が、引きとめた。

法師の笑みが、深くなった。

「どうぞ、こちらへ」

先に立つた法師の後に、渋々従いながら、

おかしな事になってきた、、

ぼんやりと霧煙る広大な庭を、眺めたのだった。

明りは、天井から吊るされた透かし燈籠。

青みの強い硝子が嵌め込まれているのが、四方を襖で囲まれたその一室は、浅葱の紗幕が下りたようであった。

「当お屋敷では、四季襖と呼んでおりますれば、お聞苦しいかとも存じますが、一曲、、」

じょうじょうと琵琶を掻きならすのは、三十路をいくらか過ぎたあの盲目の女。

透けるように白い肌は、そのまま陽の光を浴びたなら、溶けてしまいそうだ。

臍脂に白菊を縫取った衣から、ぬめぬめとそのまま色香が滴る胸元が、覗いている。

細い首筋は、後ろ襟が大きく引かれ、哀愁と女盛りが鬨ぎ合って見えた。

しかし、固く閉じられた眸、鼻筋通り、ぽってりと厚い唇は今、引き締められ、その五感全てが琵琶と同化しているようにも、見える。

朗々と低く喉を震わせ唄うのは、鄙びた法師。

枯れ木のような瘦躯は、墨色の袈裟を纏い、膝に置かれた手には、

数珠が巻かれている。

落ち窪んだ眼窩には、白く濁った瞳が嵌め込まれ、どこかここではない彼方を眺めている。

時折、思い出しかのように手繰られる数珠が、微かな音をたてた。それは、弔いを生業とする者である、己への戒めだろうか、、、？二人からやや遅れて現れたのは、漆が塗られ糸巻きも重厚な篠笛を口に当てている、女よりも幾分若い男。

艶やかな黒髪は梳られたままに流し、深藍に、こもり雪を縫取った直衣を纏っている。

長い前髪から覗く物憂げな眼差し、高い鼻梁に、色の薄い唇。そこから細く吹き入れられた吐息が、憐憫<sup>れんぴん</sup>を湛えた音<sup>ね</sup>となり、どこか篠笛が咽び泣いているかのようにさえ聞こえる。

法師が春を唄えば、琵琶弾きが春の野に出た小鹿の喜びを奏で、楽師の笛が桜がはらはらと風に散る様に泣く。

夏を唄えば、夜の川面で刹那の愛を謳歌する蜻蛉を奏で、河鹿が鳴く。

秋を唄えば、野を駆ける人の子らを奏で、風車がカラカラと哭く。冬を唄えば、しんしんと降り注ぐ雪を奏で、森の番人梟が啼く。四方の豪華な襖絵が、そのまま動き出すかのような、そんな幽玄の世界に、さしもの燕児も我を忘れ、いつしか深く聞き入っていた。

いつ終るとも知れぬ、管絃の宴。

それは、いつ終ったとも知れぬ管絃の宴となった。

法師が喉を押えた手を離し、琵琶弾きの女が撥を置き、楽師は膝に篠笛を置いた。

俯いたきり、ぴくりともしないその男を、法師が満足そうに頷き眺めた。

その眸は、開いていた。

口は半分開き、肩に力は無く、今にも崩れ伏してしまいそうであった。

「お疲れだったのかな。琵琶女、床をのべて差し上げなさい」  
「はい」

法師が、その身のにじり寄ろうと立ち上がり、女が抱いた琵琶を置く。

顔を背け、眸を伏せた楽師が、退出するために膝に力を入れた時であつた。

かた・・・

何かが、鳴った。

膝に投げ出されていた燕倪の手に、僅かに業丸が触れていた。

「、、、、、、」

ゆつくりと、燕倪は顔を上げた。

焦点定まらぬその眼差しが、天井に吊られた燈籠を見つめ、

「いやはや、なんとも見事な、、」

破顔した。

「瞼に浮かんだ四季折々の情景に、ついつい魂を抜かれてしまったようです」

「そ、れは何よりのお褒めのお言葉、、」

座りなおした法師に、

「まこと、天上に遊んだ心地にございますれば、姫君に是非とも、

お礼申しあげたく、、」

燕倪は、伏して請うた。

「勿論でございますとも。それではその御仁を、姫の間へお連れ致せ、、」

法師が声を上げ、琵琶弾きの女が身じろいだが、

「わたくしめが、、」

そつと立ち上がった楽師が、手にだらりと篠笛をさげたまま、締め切られていた襖の一つを開いた。

外には、灰白い闇が滲んでいる。

「こちらへ、、」

抑揚の無い低い声音に続いて、廊下に出た。

襖が閉められたところで、

危うく意識を失いかけたぞ。気をつけねばなるまい、、  
そつと業丸に触れた。

楽師に導かれるまま、黒曜石が敷き詰められた渡殿に行く。

しかし、いつたいなんなんだ、ここは、、銀仁が言っていた、  
その異界とやらか？

月明かりに青白く染まった広大な庭。

大陸辺りから運ばせたのか、見上げる程に巨大な奇岩は苔生し、  
薄く湖面を漂う夜霧のせいで、それだけで峻険な山稜のようにさえ  
見える。

その足元に広がる池は、なだらかな岸を持ち、霧に果てを覆われ  
てしまえばそれだけで、大海原のようだ。

寄せては返す波のように、湖面がゆらゆらとして岸の砂を弄<sup>い</sup>つて  
いる。

鼻腔をくすぐる甘くて深い馨しい香りは、いつたい何の香木であ  
ったのか？

ぼんやりと霧に包まれ始めたそこを眺めていると、ここがどこで  
あるのかさえも、何故ここに居るのかさえも忘れてしまいそうだっ  
た。

これは、なんとという心持だろう。袖を引かれているような、、

そのまま渡殿の欄干に肘をついて、いつまでもこの景色を眺め  
ていたいものと、足を止めそうになったところで、

リ・・・イイン・・・

鈴の音が、聞こえた。

はつと、前を向いたところで、先に行く楽師が腰を折っている。  
ちようとその灰白い手が、床に転がった包みを拾い上げていると  
ころだった。

我に返った燕倪は、慌ててその楽師の元へ歩み寄った。

その足元に、真鍮の香炉が一つ。

細い煙を、燻らせていた。

いかん。はぐれたら身も蓋もないぞ

何事も無かつたかのように歩き出した楽師に続き、渡殿に掛かる霧を抜けると、ようやく渡殿の果てを見た。

「これは、、、」

母屋とばかり思っていたものは、その実、客人を持てなすためだけの迎賓用。

広大な庭を贅沢にも割って伸びる渡殿の向こう。

夜霧に沈んでいるのは、湖の如き池を抱き包むかのように両翼を伸ばす、莊嚴すらある寢殿造りの屋敷。

その規模は、四季襖の間で、この屋敷の粋を知ったと思った己の浅はかさに赤面してしまう程であった。

行灯の灯りも無く、静謐と永遠とも言える宵闇に染まつた屋敷に上がり、楽師の後ろに続きながら、ふと、

しかしこの楽師、随分と背の高い、、、

線が細いと見えたのは、座っていた時の角度であつたらしく、こうして先を行くその背中では広がった。

背も、己と殆んど変わらぬ程であるから、この容姿と相俟って人の中に居ればさぞかしと目立つ事だろう。

「武官殿、、、」

先の角を曲がったところで、手にした篠笛を先ほど拾い上げた包みにしまいながら、楽師が振り向いた。

「む、、、」

薄暗がりの中、楽師の仄白い貌がすぐ間近にある。

まじまじとその貌を見める羽目になった燕倪は、長く垂れた黒髪の間から垣間見える能面の如き面相に、

なんとも、端正な、、、

一瞬言葉を失いかけた。

それを見越したのか、

「ふ、、、」

その色の薄い唇から、小さく笑みがこぼれた。

「なんだ？」

黒髪の奥で艶光る、漆黒の眼差しに見つめている。

「、、、面白い御仁だ」

さらに近づくその貌に、

「お、おっ」

眼を見開いて、弾かれたように声を上げようとする燕児の口を、  
楽師の手が塞いだ。

「お静かに、、、」

「う、、、」

一呼吸おいてゆっくりと手を離せば、その眼差しが彼方を見つめた。

「この先に、瑚麿姫こしゃひめがいらせられる、、、」

袖に篠笛を差し入れると、楽師が再び背を向けた。

その先の板の間に入ると、奥の襖の前で膝をついた。

深紅の体毛、金目の双鶴が睥睨する襖に、恭しく楽師が手を掛けた。

「くれぐれも、粗相の無いように、、、」

一声掛けると、その唇を意味深に吊り上げ、襖を開けたのだった。

ころりと足元に、鞠一つ。

「あっ、、、」

小さな声音が、もれた。

棒立ちの燕児が、見えない糸に引かれてもしたかのように、一歩、  
前へ出た。

「瑚、麿姫、、、？」

問いただそうと振り向いたところで、そろりと襖が閉まる所であった。

「そっ、、、」

「とってたも」

叫ぼうとしたところを、

「えっ、、あ」

可憐な声が乞うた。

金銀紅の錦の糸巻きも鮮やかなその鞆を、大きな手が拾い上げた。そつと膝をつき見上げたその姫に、ふわりと投げ渡せば、ころころと中に入れられた鈴の音が響き渡った。

「ほんに、よう来てくれた、、」

秋の野に青鷺が描かれた屏風を背に、燈明の灯りの中で鞆を手に微笑むその姫は、纏っているものこそ上等な朽葉色の襲目色の単であつたが、

これが、屋敷の主。異界に潜む化生と言うのか、、？

鬘結いでもおかしくない年頃の、可憐な童女であつた。

「もそつと近くに、、」

「あ、、」

辺りには、絵巻や異国の人形、見たことも無い動物を象つた彫物が散乱している。

「もどかしいのう。わらわはこの通り、そこに行くことがままならぬのじゃ」

桃色の唇を尖らせ、そろりと長袴の裾をたくし上げた。

「つッ」

雪色の肌、その細い両の足首に残る、生々しい傷跡。

恥ずかしそうにそれを隠すと、凭れた脇息をぽんぽんと叩いた。

「なれば、失礼を、、」

なるべく平静を保ち、足元に散乱する玩具を払い分け、姫の傍らに行けば、

「そなた、名は？」

「燕倪と、、」

「ふふ、、時雨しぐれの言つていた通りじゃ」

たおやかな手が、燕倪の頬を包んだ。

「なんです、姫、、？」

手に硬い前髪を押し上げると、訝しげな燕倪の心配を他所に、姫の貌が近づいてきた。

その眸を覗き込みながら、

「青鈍の眸」  
あおにび

姫が言った。

「ああ、、、禍つ色と呼ぶのですよ」  
まが

燕倪が、慣れているとも言つような声で応えた。

父母は何も言わぬが、喪に服す色だと、一族の者達に陰口を叩かれた事も少なくない。

遠目では黒く沈んで判らぬが、こうして燈明の灯りの近くで見れば、隠す事などできはしない、深い青みを帯びた鈍色。

凶色の眸も物珍しいものだろうが、

「大御爺様と同じ、、、」  
おおおじいさま

よもや、同じような眸の主が二人と居たとは、、、

「大御爺様、、、？」

「ええ。まだ、側仕えの綾音も杷野衣もいなくなって直に、一度だけ訪ねて来てくださったの」  
あやね  
はのい

瑚麿姫は、燕倪の青味の深い鈍色の眸を見つめて、言った。

「とても綺麗なお目、、、」

「綺麗、、、」

呆然とした燕倪の眼差しの先で、しかし、

「この色のお目は、よく憶えている。大御爺様が、大きなこのお目でさめざめと泣くものだから、わらわは困ってしまつて、、、」

瑚麿姫の貌に翳が落ちた。  
かげ

「殿方の涙など、その時初めて目にしたから、どうかお心安くとお頼みしたのだけれど、、、」

その涙は、止まらなかったのだと言う。

「生き、生き、生きていれば、いつかきっと、姫の前に再び見える事もできよう。その時は、、、」  
まみ

それだけを言うと、巖の如き体軀の老人は、屋敷を後にしたのだ

と言つ。

「その時は、ゝゝ」

燕倪の呟きに、瑚麿姫が微笑んだ。

「こうして再び見えたのは、他でもない、ゝゝ」

そのたおやかな手が、そつと業丸の柄頭に触れた。

かた・・・・かた・たた・・・・

鞘鳴る業丸を、燕倪の手が押さえると、それはぴたりと止んだ。

「大御爺様のお導き、ゝゝ」

ひどく年老いた者のような吐息が、可憐な唇からもれた。

「いつの事だと問われても、わらわにはもう思い出せぬし、思い出したくも無いのじゃ」

明けぬ夜を数えども、月もなければ星もない。

夜霧と、永遠とも思える静謐の中、偲ぶ誰かの顔も名も、忘れ果てた。

ぼんやりと思い出すのは、大した手柄も功績も無いくせに、本家の栄光の影に埋没してしまう事を恐れた父が、好き者で知られる時の少納言に齡十二の己を嫁がせたことだ。

その日の閨での出来事も、逃げぬようにと切られた足の痛みも、靄がかかったその向こうで、はつきりとは思いつけない。

足の傷による熱でうなされる中、門付けの琵琶弾きを屋敷に招き入れ、その撥はちに寝首を掻かれようとも、怪しげな法師が出入りしようとも、瑚麿姫の知るところではなかった。

「長かったようにも、短かったようにも感じるが、ゝゝ」

侍女がいなくなっても、琵琶弾きと法師によつて絶えず届けられる、見たことも無い玩具の数々が、瑚麿姫の心を慰めた。

そう思い込むように、していたのだが、

「それもようやく終わる、ゝゝ」

その眼差しは、ただ一つだけを見つめている。

「ほんに待ちわびた、業丸よ、ゝゝ」

破魔の太刀、業丸。

不意に、襖の向こうから篠笛の音が聞こえた。

甲高く啼けば、低く腹腔轟かせる。

その篠笛の音に合わせて、業丸が再びカタカタと音を立てた。

漆黒の眸が燕倪を見つめ、その手が離れると、そっと肩に掛けていた衣を脱ぎ落とす。

なんてことだ、

燕倪は瑚麿姫の真意を知り、愕然とした。

『生き、生き、生きていれば、いつかきつと、姫の前に再び見える事もできよう。その時は、』  
□

それに続いた言葉は、

業丸で、斬るつもりだったのだ、

忙しなく震える業丸の柄を、燕倪の手が押さえた。

この鯉口を斬って、細首を刎ね上げる。

燕倪の腕であれば、造作もない事。

嗚呼、だが、

悲痛な色はその鈍色の眸に蔭を落とした。

斬れようはずが、ないではないか、

橙に揺れる、燈明の明かり。

華奢な童女が、白い小袖の胸元を寛げるのを、

「そなた、」

燕倪の手が止めていた。

「何か、他に方法があるはずだ」

乾いた喉から搾り出すような、その声音。

打掛一枚、その肩に掛けると燕倪は背を向け、膝をついた。

「行こう」

「どこ、へ、」

眼を丸くした瑚麿姫に、

「こんな屋敷から出るんだ」

「あ、」

「野に出れば錦の如く、落葉が川を流れるんだ。鹿や雉がそこを渡

つて、、それを見たら、百年の憂さも晴れるぞ」

燕倪は、力強く言い放った。

ぽつりと、

「落葉か、、」

瑚麿姫が呟いた。

「ああ。空は高く、雁が山の向こうへと群を成して跳んでゆく。風は冷たいが、馬で行こう」

「馬、、」

「名は、千草だ。どの馬よりも速いぞ」

「ふふ、、」

瑚麿姫は、そつと燕倪の肩に手を掛けた。

背に、華奢な体が身を寄せると、燕倪は左腕を後ろに回した。長い紅の袴を払い、立ち上がったその拍子、

「お、姫、苦し、、」

瑚麿姫の腕が、燕倪の首に回って、しがみつく。

「あつ、、」

慌てて腕の力を弛めた。

「千草で野に行って、それからはどうするのじゃ、燕倪?!」

耳元で、どこにでもいる童女のような元気な声音が、ようやく聞けた。

自然、燕倪の口元も綻び、

「そうだな。美津にも行こう。広い海があるし、食べ物も旨い。少しばかり寒いだろうが何、それもまた良いものだぞ」

「海、、」

溜息が、こぼれた。

「瑚麿姫。だから少しばかり、眼を閉じていろよ」

こくり・・・

素直に頷くのが、わかった。

肩に頬を寄せた、瑚麿姫。

一呼吸した後、燕倪は意を決したように、勢い良く襖を開け放つ

たのだった。

「聞いていただろう」

襖の向こう。

黒髪の楽師が立ち上がった。

先程まで吹いていた篠笛を手に佇むその襟を、燕児の力強い手が乱暴に掴んで引き寄せた。

「お、、、」

引き寄せられるまま、闇色の眼差しを据えたと、

「何か言う事があるか？」

鈍色の眼差しが、眼光鋭く睨み上げてきた。

「お前は姫を斬るお膳立てをしたようだが、俺はここを出るぞ。瑚麿姫も一緒に、だ」

低く唸るようなその声音に楽師は、背に負われた姫を一瞥し、

「当方に、異存は無い。ただし、、、」

静かに言った。

「姫が望んだのであれば、だ、、、」

どこか冷ややかな楽師の声音に、

「時雨<sup>しぐれ</sup>よ。そなたには感謝している。だが、わらわは、、、」

可憐な声が応じた。

「わらわは、外が、見てみとうなったのじゃ」

それは、強い願いであつた。

「、、、なれば、瑚麿姫の仰せのままに」

打掛を、眼を閉じてじっとしている瑚麿姫の目深に、被せてやる楽師を、

「回りくどい事をさせやがって、、、」

憤り収まらぬ燕児の、眩きが洩れた。

その顔をちらりと一瞥し、

「まだ、分からぬと言つか、、、」

襟を掴まれたままの楽師、その鬱々とした声音が迎え撃つ。

こんな時にでも、煮えきらぬその物言いに、

「はつきり言えよ、蒼装そうじょう」

楽師に扮したその名を、呼んだ。

「、、、、」

闇を湛えた切れ長の双眸が、静かに見つめてくる。

「む、、」

腹腔に渦巻く苛立ちが、冷や水を浴びせかけられたかの如く、霧散してゆくのが分かった。

何か、あるのだ。考えろ、考えろっ

業丸を待っていた、瑚麿姫。

邂逅を、咽び鳴くかのように鞘鳴り震えた、業丸。

青鈍の眸を持つ、かつての業丸の主、その涙。

その意味を、、

「まさか、、」

顔を上げたその友に、

「そのまさかよ、、」

襟首から力が抜け、ようやく手が離れる様を見つめながら、蒼装が言った。

「愛智姫あちひめの、、」

「ああ。紛うこと無き、その所縁の姫よ、、」

「では、大御爺様と言つのは、、」

「瑚麿姫の時代、その身内でそう呼ばれた者は、ただ一人、、」

「土師業はじぎょうせん駕、、」

息を吞んだ燕倪が、

「何故、こんな事に、、」

絞り出すかのように吐き出した。

「わらわは、大御爺様がいらせられた時、何も知らなかったのじゃ」

「瑚麿姫、、」

故に、斬れなかったと言つのか、、

何も知らぬうちに、時を止めた瑚麿姫の前では、さすがの土師業

鴛も業丸を抜く事すらできなかった。

それも、当然であつた。

今、燕倪が背負つたその身は温かい。

紛れも無く、瑚麿姫はこの異界に在つて、生きているのだから。

「ならば、どうしてその時連れ出さなかつたっ」

その声音に、

「連れ出せなかつたのだ、」

蒼奘が静かに応じた。

「化生共の外法によつて、異界に吞まれた瑚麿姫は、そのままこの異界の楔。楔を欠けば異界はやがて消滅し、同化している姫も、おそらくは、」

「それでは、どのみち、」

首にしがみつく、瑚麿姫の腕の力が、強まつた。

「何か手は無いのか!？」

ぎりと奥歯を噛みしめた燕倪の叫びに、無情にも蒼奘が、首を振つた。

「この異界を補完している化生に知れば、異界の構造は変えられ、瑚麿姫を隠される。私も手出しができぬ故、奴らの誘いに乗り、お前を招き入れたのだ、」

「姫を、」

斬らせるためにッ!!

肩を怒らせたのが、伝わつて、

「誰も責めてくれるな、燕倪。この業丸は、わらわと異界との根を断ち切る唯一の物と言う。思えば、せめて魂だけとはと、大御爺様自ら参つてくれたのじゃ、」

「瑚麿姫、」

「わらわは、何も知らぬで、大御爺様を迎えてしまった。もしあの時、今宵のような心持であつたならば、そなたにこのような迷惑は掛けずとも済んだのであろうな、」

「、、、、」

頬を肩に摺り寄せる瑚麿姫に、燕倪に言葉を失った。

そんな燕倪に代わり、

「瑚麿姫よ、」

業丸に斬られ、冥府へと送られる事を望むのなら、そう改めて問おうとした蒼装に、瑚麿姫は子供のようにいやいやと首を振った。

燕倪が、黙ってその腕に、手を置いた。

言葉を失った二人の前に、蒼装が背を向け、

「祖先の恨み辛みは、時としてその血に色濃く出る場合がある。それも等しくその者の業と呼ぶのは一概にどうかとも思うが、この世にはそれを煽り、つけ入る化生もいる、」

庭に面する間へと続く襖を、睨んだ。

その言葉に呼応したかのように、腰に帯びたその太刀が、震え始める。

「業丸、」

柄頭に手をやれば、焼きつくかのように灼熱していた。

燕倪は、その柄を強く握り締める。

青角となった憧杏どうあんの顔が、脳裏を過ぎった。

嗚呼、これが、

今、燕倪が感じているものは、己が体と太刀が同化しているような感覚と、

「業丸の、怒り、」

鋼の心。

青い唇の端が、微かに吊り上った。

懐に篠笛を仕舞うと

「その太刀は、どうやら使い手を違えた事がないらしい、」  
次に現れた織手には数枚の符が挟まれていた。

「どういう事だ？」

「お前のような者が、代々その業丸を育んで来たのだろう」  
「けなしているのかよ」

深藍に染められた直衣の袖が、振られた。



夜霧に包まれた、屋敷の一画。

大きな銀杏の古木が、はらはらと黄色きいなの葉を散らせるその下。  
生き物の姿など、昼間でも到底覗い見る事叶わぬ沼に、しゃがみ  
込んでいる人影があつた。

抱えるには調度いい石を抱き、うつらうつらしているのは、水干  
を纏った伯。

その傍らには琲瑠と、空の瓶子が一つ転がっている。

もう、どれ程の間、そうしている事だろう。

凍える夜気に霧と相俟つて、衣は冷たく重い。

持ち込んだ酒も底を尽き、残るは睡魔だけとなつたらしい。

懸命に、眼を開けようとしているが、その抵抗虚しく、細い寝息  
が聞こえ出した。

肩に掛けた長衣がずり落ちて、琲瑠が手を伸ばしかけた、その時、

「、、、、」

ぱちりと、伯の眸が見開いた。

「若君、、」

翡翠輪で抑え込まれているはずのその眸に、琲瑠は黎明れいめいを見た。

炯々と光る董色まなこの眼が、闇色の水面を眺めた。

「ハイル」

首の翡翠と瑠璃硝子の連珠を外すと、群青色の髪が風も無いのに  
巻き上げられた。

その身が水面へと吸い込まれるようにして投げ出されると、

シャ・アア・アン・・・

微かな波紋だけを残して掻き消えた。

闇色の水面を覗き込んだ、琲瑠。

凪いだその水面には、

「お気をつけて、、」

心配そうな自分の顔が、映っている、、

## 第拾幕後

銀杏

（前書き）

異界の楔である瑚麿姫を燕倪と伯に任せた、蒼装。ひとり、異界に残った蒼装は、

死人還りの都守蒼装、業丸を継ぐ武官燕倪、幽身であるがこの世に縛られた伯。それぞれが紡ぐ異国絵巻、第十幕後編。。。

## 第拾幕後 銀杏

「お前、今なんつった？」

それは以前にも聞いた事のあるような言葉でもあったが、聞きなれない音を含んでいた。

見上げた相手は、どこか遠くを見つめている。

その視線の先。

「おおっ?!」

水面には霧を頂き、うぞうぞと骸達を吐きだす湖面が、淡く輝き出した。

オオオオオオ・・・ン・・・

その巨大な輝きが水飛沫と共に迫り出すと、一瞬にして霧は霧散し、這い出しかけていた骸の群は、塵芥の如く砂と化す。

「伯?!」

突き出した吻。

透き通った巨軀に刻まれる翠の鱗に、深紫の背鰭が長く迫り出した。

身震いすれば、深紅の鬣が長く尾まで流れる。

四枚だった鰭は六枚に数を増やし、のっぺりとした印象であったその巨軀は、どこかほっそりとして見えた。

オ・オオオオ・・・オオ・・・

長く伸びた尾鰭を力任せに打ち付けると、透明に澄んだ雫が撥ね、骸に降り注ぐ。

ギキツ・・・

クウウ・・・

アアアア・・・ツ

次々と砂塵と化す骸達の断末魔の中、蒼装は池へと歩き出した。その後続いた燕倪の、

「なんとも、凄まじいなあ、、、、」

感嘆の溜息を、背中越しに聞いた。

「憂さ晴らしにはなろうよ、、、、」

他人事のような呟きに、

「お前のせいだろうが、、、、」

燕児は小さくひとりごちると、伯を見上げた。

冷たい水飛沫の中、蒼装が腕を伸ばせば、

キキユ・・・

その鼻先を押し当て、岸に身を寄せる。

「先に行け、燕児、、、、」

「お前は？」

伯が差し向けた鰭を伝い、鬘を掴んでその背に乗ると、腕を組んだままの蒼装は顎で池の向こうを指し示した。

「ん、、、、？」

眼を凝らせば、手に琵琶を掴んだ女と、枯れ枝のような法師が佇んでいる。

「伯、、、、」

蒼装の目配せに、

「おいっ、まだ、あいつらがいるじゃないかっ！！わっ、、、、伯、待てっ」

伯が、ふわりと舞い上がった。

「燕児、瑚麿姫を頼んだぞ」

「待てっ、伯！！まだ厄介なのが残っ、、、、」

ク・・・オオオオオオ・・・ン・・・

突き出した吻が、湖面にのめった。

「い、息を止めるんだ、瑚麿姫っ」

燕児は水の衝撃に備え眼を閉じ、姫を抱えている腕に力を込めたのだった。

「さて、、、、」

ひとり、取り残された蒼装は、池の畔。

夜霧を渡るかのように、対岸に佇んだ二つの人影が、舞い寄ってきた。

「楔を欠けば、じきにこの世界は崩れよう。この異界を補完していたその方らも、吞まれるか、彷徨うか、」

うつそりと言えば、

「なに、楔に足る人柱に、挿げ替えれば良いだけの事、」

法師が、笑って言った。

「神霊を操るようだが、二度はないよ」

湖面に靄が掛かった。

眼を凝らせば、無数に張り巡らされた細やかな糸が見える事だろう。

糸は、黒髪を逆立てた琵琶弾きの両の手から伸びていた。

燐の如く青白き炎揺らめくその眼は、光を失ったのでは無かったか？

「これで逃げ場を失ったぞ、笛吹き。共に音を奏でた仲だ。おとなしく、その身を楔と成さしめるのであれば、五体満足にして屋敷をうろつくぐらいは許してやるが、」

無腰の楽師に、法師の舌なめずりが、問うた。

どこか淫靡な眼差しが、弄るように睨めるのを、

「せっかくの誘いだが、」

楽師は胸に手をやって応じた。

穏やかな眼差しで、二人を見つめ、

「すでにこの身は、楔でな。他に懸想は、できぬのよ、」

低く言い放った。

「そうか、それは残念だ、」

琵琶弾きの深い溜息が、細やかな糸に変わった。

「若い後家を、ちよいと手入れて作った式神よ、」

その身がどす黒く染まったと思いきや、細かい繊毛が全身を覆い、衣を突き出して伸びた手足が、人の体と蜘蛛の脚を持つ異形の姿へ。

「屍鬼か。道を違えたな、法師よ、」

「御仏はお仕えしても、わしに何も語ってくれななでな」

からからと声を上げるその口に、乱杭歯らんくいばが覗いた。

「琵琶女びわめ、わしを謀りおった若造に、口の聞き方から教えてやれ」  
琵琶弾きが跳ね上がった。

そのまま空中でぴたりと止まると、

ギギイイイガガ　　ッ

口から放たれた細い輝きが、幾重にも伸びてゆく。

棒立ちの蒼装の周りに、白い靄が出来たかと思えば、

「成る程な。腹に溜め込んだ魂魄に、蟲の精を混ぜたのか、」

指に触れたふわりとした、感触。

纖手から滴る温い朱が、ひたひたと湖面を打った。

異形が、糸の束に手を掛ける。

「知らぬ存ぜぬとは言え、この地に業深い瑚麿姫に比べるまでもないが、その魂の波動は中々のものだ。それなりに、この都に業も深いと見た。それがあれば、崩れ行くこの異界を安定させ、現世に舞い戻る事ができようよ」

異形、琵琶女が、それを引き絞った。

収縮する白い靄に包まれると、靄に紅い血潮がじわりと滲んだ。

「ふ、その上で、ゆつくりと、新しき生きた楔を見つけなければいい」

輝き、舞い出る魂の輝きを待つて、法師は紫の舌で唇を弄った。

舌に甘いその味を、忘れる筈もない。

初めてその甘やかな輝きを口にしたのは、いつのことか？

寒い冬の夜に、軒下に置き去りにされたままの赤子が腕の中で息絶えた、あの日であったか？

彷徨い出でた輝きを消え去るその前に捕らえて口にした、甘美なまでに満ち足りたあの瞬間を、法師の舌は忘れる事が出来なかった。魂を喰らい、長き時を生きるうちに眼をつけた、まだあどけない姫。

異界を開き、その楔とするのなら、現世との結びつきが強い者で

なければならぬ。

「亡き堯元公のお館に出入りしていた者で、お愛智の方様との仲を知らぬ者はおらんかったでな。瑚麿姫を訪ねて、あの男がここを訪れた時には肝を冷やしたが、手も足も出ずに帰参したるその顔、堯元公に見せてやりたかった、」

法師は、槇廼堯元の荒ぶる血を引く者に、眼をつけた。

この国にあつて現世との楔にするのなら、これほどの憑<sup>よりまし</sup>坐は見当たらなかった。

「よもや、瑚麿姫を攫われるなどとは思わなかったが、これからはもう少しわしも修行を積まねばなるまいな。しかし、」

久々の倭の国、その帝都に現れ出でた、あの日。

篠笛の音と共に現れた、楽師。

「他に使い道もあるうと招き入れたおぬしから、こうも早くその身を裂きて魂を取り出す事となるうとは、」

その魂の輝きに、喉を鳴らせた時だった。

「このまま現世に舞い戻り、瑚麿姫が味わった“永劫の今”を、汝<sup>うぬ</sup>らに与えてやるのも一興かと、思っていたが、」

鬱々とした声音が、響き渡った。

琵琶女が、腕を振った。

「何、、、?!」

血溜まりは掻き消え、確かに刻んだはずの肉片、髪の一筋も残ってはいなかった。

「楔とは、現世と異界を繋ぐものでもある。楔を失った今、ここは、現世と完全に切り離された、」

呆然とする二人を他所に、

「それとも、自らが楔となるか? できはしまいよ。人ならざる者となったその身に、楔の資格などはないからな。彷徨い出る先は、無限坂の水底か、」

その声音が、続けた。

俄かに殺気立ち、辺りを見回す法師と琵琶女に、

「正直なところ、人の身は気苦労が多くてな、」

深い溜息が、宵闇に滲んだ。

「我が手足でありながら、その力を行使するには、この身ではいささか役不足の上、この世ではどのような顛末が待つのか、想像もできぬ。だが幸い、ここはあの世とこの世とも、真に異なる世だ、」

「珍しく饒舌な、蒼装の声音。」

「貴様、、いったいつ、、」

耐え切れずに、叫んだ法師。

琵琶女が上空から見回すが、その姿はどこにも見受けられない。

それなのに、その声だけが、届くのだ。

「汝らが私欲の為にうぬ袂に開けた、この世界。どうなるうとも、懸念するに値せん。調度、我が真名は、この手の内にあることだしな、」

唄うように、

「遠慮はいらん。焼払え、八火業焰衆、、」  
告げる。

八柱の鬼神が、轟々と燃え盛りながら、靄の掛かった空を破って現れ出でた。

金色の後光を纏ったその将が、その身を赤、橙、紫、青、白、銀、紫、金の焰と化す。

入り乱れるようにして、異界の空を奔れば、屋敷は噴煙を上げて空を焦がし、池は沸騰を始めた。

池の底で、今だ眠っていた亡者共の断末魔に混じって、琵琶女の劈くような怨嗟の音が響き渡る。

弄るように肌を舐める業火に、骨まで軋ませ、

「ぎいああ ツ！あぐがつ、あがわああッ」

のた打ち回る法師の赦しを乞うその声を、苔むした巨岩の影で、背を預けたままで聞いていた。

「憂さ晴らし、にもならんな」

その手には、香炉が一つ。

燻らせる香りの靄がたなびく様を、金色に染まった眸がうつそりと眺めながら、

「魔道に落ちた汝らの席など、都合よく冥府にあると思うなよ、」

「燃え盛り、崩壊を始めた異界の空を見つめた。」

剥がれ落ちように垂れ込めた薄墨色の空の向こう。

押しつぶさんと、闇が迫って見える。

その闇に、何を見たのか青い唇が、酷薄に吊り上り、

「鬼であるなら、鬼のままで逝け、」

くつくつと喉を鳴らすその音だけが、燃え盛る業火の海に、響いている、

「燕倪様、」

その声に、

「むっ、琲瑠？」

眼を開いた。

廃墟の跡地、その池を覆うようにして、翠の巨軀が伸びている。

「キキ・・・キュウ・・・」

「ご無事で何よりでございます」

労わるかのように、伯の吻を擦りながら琲瑠が微笑んだ。

「戻って来たのか、」

袖を見ても、濡れた形跡が無い。

異界の水面に沈んで、正にほんの一瞬の事であった。

肺腑に冷たく染み渡る夜気に、ほっと息をついたのも束の間、

「瑚麿姫、眼を、」

燕倪は、背に負ったその人を、揺さぶった。

「ん、」

被せられた打掛の中から顔を覗かせ、

「嗚呼、」

冴え冴えと、中天高くに掛かった望月を見上げ、瑚麿姫は息を呑んだ。

その空には、すべてを仄白く見せる靄も夜霧も、存在しなかった。月夜にはらはらと、黄色<sup>きいな</sup>の葉舞う、大銀杏。頬に冷たい、夜風の感触。

草陰にて刹那を謳歌する蟲の声を聞いたのは、いったいどれ程ぶりだろう。

ほろほろと鳴くあの鳥は、いったい何と言う名であったか。

星とはかように瞬き、彩<sup>いろとり</sup>変えるものだ、教えてくれたあの人の名は、なんであつたろうか？

「よつとつ」

燕倪の手が、くるりひらりと舞い落ちる銀杏の葉を一つ、？まえた。  
「ほら、、、」

大きな手の中のそれを、瑚麿姫の手が包み込んだ。

すべらかで、夜露に濡れた銀杏の葉。

さ・・・ら・・・さ・・・

砂が擦れる音が、耳の奥でした。

さら・・・さ・・・さら・・・

それは、止まっていたはずの時<sup>さかのぼ</sup>が遡る、音。

瑚麿姫が、燕倪の肩に頬を摺り寄せる。

しっかりと握り締めた銀杏の葉と、広いその背の温もりを感じながら、

「燕倪、、、」

溜息のような声音が、ひとつ、洩れた。

この背で逝けるのなら、きつと、、

背に回していた手指を、細やかな粒子が滑って行く感触。

「瑚麿姫っ」

弾かれたように振り向いた燕倪は、その人の貌が、ほろり、、、

淡く微笑むのを、見た。

「じ、じ、」

肩、背、腕、手指。

伝い、こぼれ落ちる、細やかな砂の粒子。

「あ、あ、」

足元に蟠ったかと思えば、衣も共に朽ち果てて、白き砂と化す。

それは、たった一瞬の出来事。

こんもりと蟠るその砂を、震える手で掬い上げれば風が巻き、銀杏の葉と共に舞い上がった。

月光に、銀の帯が銀杏を抱いて、夜の闇へと溶けて行く。

「、、、、、、」

こんなにも唐突で、呆気ないものなのだろうか、、？

まるで、夢。

その人の温もりも声も、まざまざと覚えているのに、そのどこにも存在しない。

何も、残さない。

「ああつ、、、あああああつ！！」

夜空への咆哮と共に、握り締めた両の拳。

やり場の無いもどかしさ。

「ああッ、ガああッ」

大地を穿つのは拳と、そして、、

「ああああッ」

頬に伝い、顎先から滴るそれをきつと、なみだ涙と呼ぶのだろう。

クキユ・・・

僅かに身じろいだ巨躯を、傍らに立つ琲瑠が制した。

大銀杏が舞い散るその下で、慟哭に暮れる燕倪を、一人と一柱は、今は見つめることしか出来なかった。

どこからともなく、風が巻いた。

影を落とす大銀杏の暗がりから、闇がひとつ、人の形を取った。

黒髪を夜風に弄らせて、月明かりの中へと歩みだしたのは、蒼装。

キクク・・・

のそりと鎌首を擡げた伯の、

「待たせたな。伯、、、」

その吻を擦って、言った。

みるみる収縮する巨軀が、人の手足となり、大地に着く前に抱きとめたのは、琲瑠であつた。

首に翡翠輪を掛けると、己が上着で抱き包む。

伯は、その琲瑠の首に齧りつくと、蒼装が燕倪の元へ行くのを、黙って見つめていた。

「燕倪、、」

「ぐっ、、うっ、、」

「、、、、」

「うっ、、うっ、、」

両の拳を地につけ、嗚咽を堪えるその友に、蒼装の手が伸びた。

「つつ」

凄まじい力で引き上げられ、

「終わったのだっ」

その叫びに、鼓膜を打たれた。

「蒼、装、、」

「言わせるな、、」

冷やかな眼差しに、明らかな苛立ちが、宿っていた。

「、、、帰るぞ」

すぐに手を離れた横顔は、

「あ、、ああ」

見慣れた男のものであつた。

歩き始めたその背を見つめ、

あいつも、、

握り締めた拳を、ゆっくりと開いた。

袖で顔を拭うと、一行の後に続いた。

頭が、重かつた。

喉が、焼け付くように痛んでいる。

胃の腑が灼熱したままで、縋るように業丸の柄に触れた。いつもの冷やりとした感触だけが、そこに残っていた。

朽ちかけた門を潜ったところで、伯の大きな眸とぶつかった。

「、、、、、、」

だがそれは、燕倪の肩の向こうを見つめているだけであつた。思わず振り向いた先に、

「あ、、、、」

はらはらと夜風に散る大銀杏と、その頭上に掛かった、冴えたる望月。

当たり前過ぎて、たわいも無く見過ごしていた、時の移ろい。気づかせてくれたのは、いったい誰であつたのか？

忌むべき色と思い込んでいた眸を、初めて綺麗だと言ってくれたのは？

その誰かの名を、この先、燕倪が忘れることはないだろう。

「この世は本当に、綺麗だ。なあ、瑚麿姫こさぎひめ、、、、」

燕倪の小さなその呟きに、琲瑠の肩に顎をのせていた伯だけが、

「、、、、、、」

こくり、、、、

頷いたのだつた。

「蒼装、、、、？」

青空の下、白い浄衣姿の男が大銀杏の下に腕を組み、佇んでいる。うつそりと貌を向けたのは、

あまへきよちか  
「天部清親、、、、」

何故か、右近衛府中將に対していつもその呼び名の、都守であつた。

訝しげな表情で歩み寄り、そつとその髪を一房手に取った。

「どうしたんだ、この髪、、、」

「織部の一人に無理を言つてな。辛夷（しんい）で染めたのだが、色が落ちてきたようだ、、、」

「鉛色だな」

「、、、、、、」

珍しくからからと笑う女丈夫に、今日は返す言葉もないらしい。

「あ」

気を悪くしたのかと、槌を持つ人夫らが、屋敷を取り壊す様を眺めるその端正な横顔に、

「やはりお前は、月色の髪の方が似合うぞ」

事情を知らぬ清親は、ぼつりと言った。

「染めずとも、お前はそのままで、、、」

「、、、、、、」

「お、お前が取り壊しに付き合っていると聞いて、屋敷も近いから見物に来たのだ。珍しい事もあるものだと、、、」

「抜い清めは終えたと言われても空恐ろしいと、取り壊しに立会う筈の神祇官と陰陽師に、散々泣きつかれてな、、、」

渋々、立会人となつたらしい。

「そつか、、、」

「一旦更地に戻し、日を見て、地鎮のための社を建てるそうだ」

清親は、運び出される材木を眺めながら、

「木を植え、花鳥も集えば、子らの遊び場にもなる。何がこの屋敷を魍魎屋敷と呼ばせしめたかは知らぬが、賑やかになれば、慰めにもなるうよ」

ぐつと、伸びをした。

背に束ね流した黒髪、その椿油の香りが、辺りに漂った。

傍らの女丈夫を一瞥して、

「何か、用があつたのではないのか、、、？」

鬱々と尋ねた。

「あ、いや、、、実は、燕倪が物忌みなど、珍しくてな。都守なら、何か知っているかと、、、」

「物忌み、、、」

「どうも、ここ数日屋敷に籠っているらしい。」

「通年皆勤のあの男だ。これが、宮中でもちよつとした噂になっていてな。それが鳳祥院の耳にも入ったのだ」

「御上おかみに、、、」

「事情も知らぬのに顔を出して、余計に燕倪の気に障るような事になつたらと、、、」

「それでも珍しく気を揉んでいるようで、何があつたのかを尋ねるため、こうして足を運んだらしい。」

「宮中では、若き武官らの信頼厚い右のきぢゅうじょう姫中將。」

「いや、今となつては信念を貫くその物怖じせぬ姿、鍛錬欠かさぬ武術の腕前で、鬼中將きぢゅうじょうの名の方が定着しつつあるのだが、今日は見る影も無い。」

友を案じるそんな清親の胸中を他所に、蒼装が鼻で笑った。

「おい、、、」

「さすがに慚然とした清親に、」

「わざわざ足を運んでくれた者に対し、気に障るものにもあるまいよ、、、」

「やんわりと、低い声が、応じた。」

「都守」

「あやつは、そう言う男だ、、、」

「どこかで、『先生』と呼ぶ声がした。」

「また、蛇でも出たか、と粉塵の中へ向かうその背を見送って、  
「そう言えば、そうであつたな」

清親は、門前に待たせてあつた青鹿毛の肥馬のもとへ。

「梔子に紅葉を染めた狩衣の袖をはためかせ、颯爽と騎乗の人となつた。」

「知らぬ仲ではないはずだと気づかされ、どこか晴れ晴れとした清

親の声音が、

「不覚だ」

晩秋の空の下、言葉とは裏腹に、凜と響いたのだった。

けたたましい馬の蹄の音に、慌てた様子で若衆の籐那が走り出てきた。

ひらりと袖を翻し、轡を取ったのは、

「あ、これはっ、天部様っ」

清親であつた。

「久しいな、籐那。燕倪は、どうしている？」

その問いに、一瞬凍りついた籐那は、

「そ、それが、一応、物忌みと、」

「ああ。だが、いったいどうしたと、」

「あの、」

なんとも言えなくなつて口籠る。

「上がらせてもらつぞ」

「あつ、」

青鹿毛の愛馬、於<sup>おき</sup>碕の轡を籐那に取らせると、さつさと庭から回り込んだ。

何か、あつたと言つのか、

籐那の凍りついた表情に、自然足が早くなる。

「燕倪、私だ」

がらんとした母屋へ声を掛けると、昼だと言つのに寝着姿の男が、寝癖のついた髪をそのまま姿を現した。

「おお、珍しいな、清親」

無精髭の生えた顎先を撫でながら、庭先の清親に向かって片手を上げた。

「具合が悪い、訳でもなさそうだな、」

別段目立った外傷も見受けられないし、病でもなさそうだ。

友の訝しげな眼差しに、

「ああ、至つて健康さ、」

あくびを嚙殺した。

「ただの中弛みか？」

憤然とした清親に、庭へと続く階段に腰を下ろした燕倪は、

「それがなあ、大変だったんだ。人手が無くてな」

ぼんやりとした顔で、雲が行く様を眺めて言った。

「人手、、、？」

首を傾げた清親は、

「ああ。急に、籐那の実家の牛が産気づいたってんで、」

「それで物忌みか？」

信じられぬその言葉に、呆れた。

「いや、それだけじゃない」

ふいに思い出したかのように、神妙な顔をするものだから、

「うん？」

つい、気を弛めたのがまずかった。

「逆子さかごでな」

「貴様っ」

清親の手が、今度こそ燕倪の胸倉を掴んで揺さぶった。

「うわっ、な、なんだよっ」

「牛如きに頭を悩ませたと言うのか、この私がっ」

「悩む？お前が？なんでまた？」

相変わらず能天気な燕倪の問いに手を離すと、

「もういいっ！！帰るっ」

「なんだ。夕餉くらい、たまにはいいだろう？」

片腕に抱いていた、大きな和紙の包みを投げた。

「鳳祥院からだ。有難く受け取れっ！！」

「お、、、」

胸に投げ渡されたのは、色鮮やかな秋桜こすもすの束。

見ていれば、それだけで顔がほころんでしまいそうな、花の色に、

案外あいつは、鋭いな、、

もう、気安く友とは呼べぬその人を、想った。

多少の怪我なら飄々と出仕する燕倪の事、物忌みなどと届けを出すのなら、心労の方だろうと、その人は感づいたのだろう。

青鹿毛に乗って、門を潜るその背に、

「清親、ありがとな。明日からは、ちゃんと出仕するからっ」

燕倪は、大きく声を掛けた。

「ふんっ、っ、」

肩を怒らせ、往来へと消えたその人を見送ってふと、

「あ、っ、」

気がついた。

「そっぴや花器<sup>かき</sup>なんて、あつたか？」

軒庇の下に、秋桜が風に揺れている。

芒とツルウメモドキ、ユキヤナギが、辰砂の釉薬深い楕円形の花器に、共に生けられている。

「すっかり白くなってきたな」

結局、花器は見つからず、夕暮れを待つて蒼装の屋敷を訪れた燕倪であった。

「髪と糸では、やはり勝手が違<sup>また</sup>うらしい、っ、」

肩に掛かる斑<sup>まだら</sup>の、それでも鉛色<sup>なまりいろ</sup>なら褒められたものである己<sup>おの</sup>が髪を掴みながら、蒼装が言った。

そんな相手にしみじみと、

「今となつては、黒髪の樂師殿が恋しいよ」

「どういふことだ、っ、？」

「殊勝なまでに、おとなしくなさつておられたわけだろ？」

燕倪の声に、蒼装は鼻で笑った。

「さすがに名うての弾き手に歌い手。生半な篠笛の音では、共にと誘つてはくれぬであろうからな、っ、」

「だが、中々、あれだけのものは吹けぬぞ、っ、？」

「それだけ良い品と言つわけだ。妹を想う兄の憐憫が、篠笛を泣か

せるのよ、」

「妹、兄、」

手にした包みを、燕倪の膝へ。

その包みから出すと、頭の部分に鷹羽の紋を見た。

「う、羽琶殿の笛ではないか?」

「気づいておらなんだのか。お前らしいな、」

「どうしておまえが、これをつ、」

口を顔にして言うのを、愉しげに眺めながら、青い唇に杯をつけた。

その様を肴に、もう少し眺めているつもりだったのだが、

「主様、」

新たな瓶子を持ってきた琲瑠によって、やんわりと窘められた。

「先日、わたしめが主様の文を預かり遠野へ、お伺いしたのですよ」

「礼も、まだであつたからな。反物を幾つか、贈らせてもらったのだ、」

「そうだったのか。言ってくれば、」

「あの化生共。それなりに用心深く、屋敷のうちに入れるは、一人と決めておつてな。運良く最奥の間へ通ったところで、」

「運良く、?」

「まあ、大概の者は、四季襖の間の前に酒にやられるか、馳走によつて足を止められる、」

「馳走も酒も、一人では味気無いぞ」

真面目な顔をして、そんな事を言う燕倪を、蒼装は良く知っているとでも言うような口ぶりで、

「それとも、琵琶弾きの虜となるか、」

どこか意味深な眼差しを、くれた。

「おいおい、俺を朴念仁か何かみたいな目で見るなよ」

「ボクネンジン、」

縁側で、汪果に大粒の葡萄を剥いてもらっていた華奢な背中が、

眩いた。

「聞こえているぞお、伯」

睨んだ先の背中が、微かに震えている。

「四季襖に通されると、お前も味わったであろう？」

意識は白昼夢の如く漂い、まざまざと美しき四季の移ろいの中に入り込んだ。

「ああ。あの時、業丸の鞘鳴りに気づかなかつたら、、」

「四季襖。その世界に魂は囚われ、法師に喰われるのを待つばかり、  
、」

「何?!」

叫んだところで、腕を擦った。

名にも知らなかったとは言え、さすがに泡肌が立った。

「四季襖を抜ければ、こちらのものだと思っていたが、庭で足を止めた時には、正直ここまでかと肝を冷やしたよ、、」

「庭、、?」

「渡殿に焚かれていた香、覚えているか？」

「ああ。麝香が深いあれか、、」

「大陸の氷湖に沈めた香木と、変異種の雌鹿の角を合わせたものだ。  
酔神香すいじんこうなどと呼んでいたが、その香に遊べば同じく、やはりこれも  
魂が口から抜けでる代物だ、、」

「そうなのか。いつかの霊紫に比べたら、そうでもなかったぞ」

広大な、あの庭。

霧に包まれ、世界がまるでそこにあるとでも言うような、、

しかし、一抹の寂しさがどうしても拭い去れなかったのは、何故だったのだろうか？

「いつまでも、この岸边に佇んでいたい。いや、、佇んでいてやりたいと、そう思ったんだ、、」

夜霧に包まれたその世界は、

「瑚麝姫の世界、そのすべてであつたからな、あの庭は、、」

「ああ、そうか、、」

最奥の間、双血鶴の間から見える、全てであった。

「誰も来ぬ奥の院に、ひとり。現世の時間軸と切り離されても、時には人恋しく、思うことだろうて、」

「なんとも不憫な、」

大銀杏のその下。

花ほころぶように、ほろり、微笑んだその姫を、その温もりを、

燕倪は思い出していた。

「鈴の音が聞こえなかったら、俺は今もあの庭に立っていたんだろ  
うな、」

我にと返らせしめた、羽琶の鈴の音。

しみじみとその篠笛の包みを見つめてふと、

「わざと落としたんだろ？」

見つめた先で、蒼装が杯に口をつけたところだった。

「いや。香炉にな、少し香木を加えた時に、偶然、」

「何をくべたのだ？」

「青角の骨」

「ああ?!」

先の一件で青き角を捜し、川辺で骨を拾っていたのは他でもない  
燕倪と、

「伯、」

その人であった。

「お前、大猪の遺骨を持ち出して来たのか、」

汪果に指を拭いてもらって、伯が歩いてくる。

そのまま燕倪の膝に座ると、

「なくなる、のが、いやだった、」

額を、その肩に押し付けた。

「伯、」

ほんの少しでもいいから、何か側に置いておきたいと、思ったの  
だろう。

燕倪は、確かに背にあった瑚麝姫を、思い出した。

手のうちから、零れ落ちてゆくその様を、  
ほんの少し心を重ねただけなのに、消え行くその身に縋り、その  
人が生きた証を探したのでは無かったか？

燕倪は、その手を伯の肩に置いた。

布地の下、その華奢な肩は、仄かに温かかった。

「その欠片を、伯が、私の衣の袖に忍ばせたのだ、」

「お前を連れては、いけないから、？」

こくり、

頷いた、伯。

「そうか。お守り、だったんだな」

燕倪の呟きに、

「大いに役に立ったよ。漂い出た霊紫が、あやつらから我が身を隠  
してくれたからな、」

「それでお前も無事に、って、そんな事もできるのか？」

「酔神香に勝る、霊紫だ。酔うたとも気づかぬ者に幻術を掛けるな  
ど、造作も無いこと、」

瓶子を傾けた蒼装が、青い唇を吊り上げた。

なみなみと満たされた杯を差し出せば、たおやかな手が受け取っ  
た。

「お、」

ほろり、笑ったその人が、

「瑚麝姫、」

紅の単を纏ったその姫に、見えたような、

眼を瞬かせるその鼻先を、

「やっ」

「痛てっ」

ぴしゃりと叩いた手があった。

「からり」

螺鈿で秋明菊が描かれた杯を投げ出し、そのままぱたと庭へ  
出て行く伯を、琲瑠が慌てて追いかけて行った。

鼻先を押さえた、燕倪。

その杯を満たしながら、

「深く想い念じれば、伯は心を映す。忘れたのか、、、？」

闇色の眼差しが、ひた、と見つめてきた。

「だからって、叩くことはないだろお」

「我らが、その姫にはかり構うたと、妬いているおのだよ、、」

「ふん。やはり、子供だなあ」

その涙目では、いささか説得力に欠ける燕倪の様に、蒼装がくつくつと喉を鳴らし、酒に濡れた床を拭いていた汪果は、肩を震わせた。

「なんだよ、二人して、、」

惘然とした燕倪を他所に、

「いやなに、、」

お前も伯も、そう変わらぬような、、

花器に揺れる秋桜を眺めながら、その後続く言葉を、酒で飲み下したのだった。

## 第拾ノ巻幕前

星詞

(前書き)

怪異が報告された辻で出逢った少年、悠霧。その爪は、鬼を抜う  
と言つ、、、、

死人還りの都守蒼装、業丸を継ぐ武官燕倪、幽身であるがこの世  
に縛られた伯。それぞれが紡ぐ異国絵巻、第十一幕前編。。。

第拾ノ巻幕前

星詞

風も澱む闇の中、

「、、、、、、」

朽ちた土壁を弄る凍てついた風の中に、ある氣配が佇んだ。  
なぶ

重い、瞼。

氣力でもって、決じ開けた。

「、、、、、、」

落ち窪んだ眼窩の奥。

虚ろなその瞳はかつて、見えざる者達をも捉える事が出来ると重宝がられ、そして、疎まれ、怖れられた。

闇の中にいても、うつすらと金色に視える、光。

それが、生ける者が平等に纏う光であることを、彼は知っている。  
闇の中に在ってなお、

「、、、、、、」

炯々と光る、眸。

その眸は、雪深い原を渡り訪れた、その光が、土壁に触れるのを、見た。

こちらに、伝わるはずなど無いのに。

こちらが、見えるはずなど無いのに。

怒りも憎しみも、悲しみすら削ぎ落とされた心には、  
触れない

ただそれだけが、全てを占めた。

骨ばった腕を、間接のひとつひとつを、懸命に伸ばした。  
枯れ木のような膝、動けと念じた。

檻褸を纏っただけの体は、壁に縋るようにして手を伸ばし、けれども  
ど後もう少しのところで、届かない。

長い間、曲げたままの足の骨は軋み、紫がかって腫れ、凍傷にか  
かっているのか、もうなんの感覚も無い。

触れたい

ほんの少しの高みにある輝きが、遙か彼方にも思えた。  
土壁の向こう。

金色の人型が、身じろいだ。

土壁に触れていた手が、輝きが、儚い夢であつたかのように急速に色を失い、ただの朽ちた闇へと姿を変えた。

「、、、、」

行き場も無く、伸ばしたままの手。

縋ったままの、体。

触れたい

かさついた唇が土壁に触れ、額が摺れて嫌な音がした。

突き立てた爪が折れ、鈍い痛みとなつて手首へと走った時、

「、、、、」

その眸は、

触れたい

そう願つた輝きを、ぬくもりを、見る、、

朽ちた土壁から差し込む光は、最初はいつか見た星々のように小さな光だったが、すぐにまあるい拳大の穴となつた。

鼠くらいなら、這いでてこれようその穴から、そろりと手が生えた。

土壁に生えた手は、浅黒く骨ばっていたが、その下に居る者を氣遣つてか、ほろほろと土蔵の外側へ向かつて崩し始めた。

「、、、、」

差し込む光が、瞳孔鋭い眸の奥を、穿つ。

眩く、冴えた世界。

ようやく捉えた、その光。

逃れてしまわないように、瞬きを、忘れた。

「、、、、」

五感全てが、目だけになつたような、、

そんな錯覚さえ、覚えた。

程なくして、子供一人が通れそうな穴となると、白銀の世界が広がるその中に、一人の男がしゃがんでいた。

足元に伸びたその影には、一對の角。

木目が浮かんだ飴色の肌には、閉じられることなどない、裂けた口。

鋭い牙の羅列の上には高い鼻梁と、いつか見た寺の屏風絵にあった唐獅子。

その鬘にも似た、金色の髪の中に沈むのは、アカクレナイの眸であつた。

「かくれんぼは得意だね」

鬼面の男が差し伸べる、手。

褐色の肌を持つ手は、鬼面とは対照的にすらりと指が長く、ひどく綺麗な手であつた。

「、、、、」

迷いは、無かつた。

誰とも知らぬその手に、手を重ねれば、力強く引き出された。

「あッ、、」

全身を突き刺すような、外界の眩さと、凍てつく大気。

堪らず眼を閉じたその身に、肩に掛けていた衣を掛けると、

「雪の照り返しは、その眼に障る。そのまま、眼を閉じておおき」

男は枯れ枝のようなその体を、背に負ぶつた。

頭上高く、大きな鳥が翼を広げる音が、響いた。

力強い羽ばたきに混じって、

「さあ、逃げるぞ」

どこか愉しげな声音を、聞いた。

腕の下にある、人の背の温もり。

「、、、、」

世界のすべてがそこにある気が、した、、

「ぬんっ!」

闇の中、銀しろがねの一閃。

続いて、

「右」

「おおっ」

ヒュッ・・・

風を切る短い音を立てて、太刀が振られた。

「、、、、」

「最後だったのか？」

指示が無くなり、後ろを振り向けば、銀糸の髪を流した蒼装が、築地塀に背を預けてうつそりと彼方を眺めていた。

「なんだ、、？」

その視線の先。

酒を酌み交わしながら舞い踊る鬼影を、幾つも目撃したとの届けのあった辻にはつきりと、水干を纏った背中が、見えた。

「あれが親玉つてわけか、、」

腕を捲くる燕俔の傍らを、

「どうやら片付がついたようだ、、」

「あ？」

蒼装が、通り過ぎていった。

その浅葱に染めた狩衣の裾を掴むのは、

「、、、、」

伯。

その背に隠れて、辻の真ん中で佇む者へと近づく。

「俺にはさっぱりだな、、」

ここしばらく、夜半に雨をもたらす雲が空を覆い、風が温かった

せいもあつて澱んだ大気が雑鬼を招き、結果、この辻に集まったらしい。

大したものではないとは聞いていたが、それを餌にする怨鬼が出てきては厄介だと、蒼装の指示で業丸を振り回す事となった。

生来見鬼ではない燕倪には、漂い集まる脆弱な雑鬼らの姿を、捉えることは出来ない。そのせいか、いつそ死人還りのこの男に、

さては、謀<sup>たは</sup>られたか？

と思える時もある。

ただ、空を斬るにしてはほんの少し手応えがあつたような、？それが、救いと言えば救いであつたのだが、

一先ず業丸を鞘に納めると、燕倪もその背に続いた。

「うう、」

蒼装の背中から顔を覗かせていた伯が、小さく呻いた。

歳の頃は、伯より少し上といったところであろうか？

栗色の髪を楮<sup>しじ</sup>で束ねた、それは少年。

蒼装は、その手に握られているものを見つめて、闇色の眼差しを顰めた。

「、、、あんだ、お前？」

手にしていたものを放り出し、少年が、顔を上げた。

炯々と良く光る、鳶色の三白眼。

「耶紫呂蒼装と言う。この惨状、お前が一人で成したのか、」  
放り投げられたのは紛れも無い。

この辻が喚<sup>よ</sup>んだ、雑鬼。

その、なれの果て。

黒々とした、胴体と思しき芋虫の如き体躯は、消滅への蠕動を繰り返している。

そうして力任せに引き千切られたと思われる雑鬼に、怨鬼の骸が、辺りに散乱しているのだ。

「へえ、あんたも、視えるのか。こいつらが」

にっと笑うと、蠕動続けるその雑鬼を踏みしめた。

「都ってゆーからさ、どんな所だろうと思っていたが、この程度なら退屈しそうだな」

「おいおい、どうなってるんだ、蒼装？」

「見かねて尋ねれば、

「見鬼であれば、眉を顰めるような光景だ、、」

「白い溜息をついた。

「おじさん、なんでこんな無能な退魔士、連れてるの？」

「お、おじさんっ?!」

「燕倪が濃い眉を跳ね上げた。

「あのなあ、年長者にはもう少し口の利き方に、、」  
「前に出た燕倪の脇を、

「あっ、、」

「旋風のように、擦り抜けた。

「なあっ」

「っ、、」

「蒼装の背に隠れた童を見つけ、少年が顔を近づける。

「鳶色の眸と、漆黒の眸が交錯し、

「、、、、」

「じりじりと近づかれた伯が、蒼装の長い袖の下に入り込む。

「くん、、

「少年が、鼻を鳴らし、

「お前、いい匂いがするな。よく見えねえけど、、」

「じつと、その足元を眺めた。

「眼を凝らせば、くろぐろとした巨影だけが、網膜に結ばれた。

「神霊か？」

「、、、、」

「伯は、蒼装の衣に顔を押し付けて、何も言わない。

「その髪を、大きな手が撫でた。

「私が世話をしているが、この通り。幼くてな、、」

「ふうん」

少年は、まじまじと伯を見つめた。

漆黒の眸が、片方だけ覗いて、少年の位置を確認する。

「おい、蒼装。どうするんだ、この状態、、、」

「さて、、、」

蒼装を挟んで、二人が対峙している。

「お前、、、」

ふいに、

「ちびすけだな」

「ッ」

「怒ったか？ははは、ちびにちびって言って、何が悪い」

「かううつ」

さすがに、犬歯を剥いた伯。

そのまま身を乗り出そうとしたところを、

「相手にするな、伯」

首根っこを掴んで、小脇に抱えた。

「伯って、ゆーのか、そいつ？」

「、、、なせっ、エンゲッ」

手足をばたつかせながら、牙を剥いた伯の鼻先で、

「俺は悠霧<sup>ゆうきり</sup>。宜しくな」

にやりと笑う、少年。

「じゃ、またな、ちびすけ」

「があああッ」

水干の袖を翻し、闇の中へと駆けていった。

それを見送って、

「なんだか知らんが、面倒なのが出てきたな、、、」

燕倪がしみじみと言い、

「ああ、、、」

蒼装が、うつそりと応じた。

手柄を、攪われた形になった。

「しかし、凄まじいな。あの歳で視える、被えるじゃ、確かに、俺

なんて無能だな」

伯を下ろしてやると、燕倪は溜息。

「これから、こうして怪異がらみに出張って来るとなると、さすがの都守殿も肩身が狭くなるんじゃないのか？」

「そのようだな、」

袖に腕を差し入れたまま、蒼奘が歩き出す。

その背に、伯が攀じ登った。

「帰るのか？」

「ああ、」

闇の中へと歩み去る背中を見送って、燕倪が大きく伸びをした。

見上げた空には久々に覗いた満点の星空と、欠け始めた月が高く、中天で輝いている、

菅笠を目深に被っている、墨色の袈裟を纏った男。

脚絆に手甲、蓑、背に負った包みを見れば、旅の者か？

闇夜に彷徨い出でた、化生の如き様子で、ゆらり、ゆらりと無人の往来を行く。

時折、空を眺めれば、東の山稜の上。

月に掛かった、薄雲。

男の足は、自然、その方向へと歩いてゆく。

月光に照らされたその横顔は、柔和そのものの若者のものであったが、眸は閉じられていた。

白い無機質な、その貌。

面、であった。

上空で巻く風を捉え、弧を描きながら滑空するのは、大鷹。

闇が濃い、ひっそり閑と静まり返った大路を逸れば、忙しない足音と共に、闇の中から水干を纏った少年、悠霧が抜け出てきた。

「都に入ったとたん、急に走りだして。怪我は無いだろうね？」

冷えたその頬に手をやれば、悠霧はぶんぶんと首を横に振って、

「あのね、雑鬼共を蹴散らしていたら、俺と同じくらいの年格好の

式神が来たんだっ」

眼を輝かせ、男に語った。

男は、穏やかな口調で、

「そうか。ちゃんと挨拶できたかい？」

悠霧の肩を押し、歩き出した。

「うん。俺がほとんど被っちゃって、そいつら後から来たんだけどさ。大きな武人と、白い髪の男が一緒だったよ」

「白い髪の、、、」

「それでね、そいつ、伯って言うんだって。凄く良い匂いがしたから、きつとんでもない神霊なんだろうけど、なんだかすつとぼけててっ」

くすくす笑う連れの話に耳を傾けながら、細い道を幾つも折れれば、小さな神社に出た。

石の鳥居を潜り、梟鳴く参道を行けばすぐに古びた社。

「ここは、無神。今日は、この軒先を借りるとしよう」

慣れたものでその扉を開けると、男は誰かが置いていったのか、片隅に積まれている筵を延べた。

「ねえ、実敦様さねあつ」

「なんだい？」

「本当に、お別れなの？」

都を街道から遠目に眺めていた時は、あんなにはしゃいでいたのに、、、

男は、傍らに寝そべった悠霧の体に衣を掛け、そして蓑を掛ける。

「寒くはないか？」

「北の地に比べれば、こんなの暑いくらいだ」

男は、面の下で淡く微笑むと、眼を閉じた。

「お前の居場所、ここでもなら見つかる、、、」

「、、、、、、」

その言葉に、何か言いたげに口を開いたが、すぐに引き結んだ。そして、黙って筵に頬を預けた。

「狭い都だ。その式神にも、そのうち見えることだろう」  
切なさの反面、悠霧の胸中に渦巻く期待を見越しての、それは言葉であつたか？

本当は、明けてなど欲しくない、明日であつたはずなのに、、  
夜が更けるに伴って、

「、、、、、、」  
悠霧も、いつしか眠りに落ちてゆくのだった。

「眠れない、か、、」

腹腔に響く、低い声音。

西の空に傾いた月も、雲の中。

大気も凍える初冬も近い言つのに、爪先で泉の水を掻いている。  
その足の下。

琥珀、碧、橙、緋、藍、紫、無。

揺らめく水草に抱かれた大小色様々な？<sup>ぎよく</sup>らが、垣間見える。

ロン・・・ロロ・・・ン・・・

滾々と湧き出す清水によってそれらが触れ合い、玲瓏と鳴るここ  
は、屋敷の中庭。

石段に腰を下ろしている華奢な背中が、腕組みで見下ろしてくる  
その人を、

「、、、、、、」

董色の珠を結んだ眸で、恨めしげに睨んだ。

足の爪先から頭頂までを、何度も伯の視線が往復するので、

存外、根に持つ性格だな、、

どうやらすぐに、身の丈の事と気づいたらしい。

やがて、直接脳裏に流れ込む、それは声であり、思念。

ソウ、、、、

やけに今日は胸の内が細波立ち、眠れないのだと言う。

遥か高みから降り注ぐ無数の何かが、体の中を通り過ぎ、耳を塞  
いだところで、わんわんと体内に響き渡っている、らしい。

そう説明している最中も、

「っ、っ、」

何かに怯えたように身を震わせては、忌々しげに夜空を睨む。

「っ、っ、そうか」

見上げた夜空に、銀系の如く流れる、彗星。

雲が晴れ、山々から流れ込む寒気によつて大気が澄み、今日は良  
く見える。

「無理も無い。我らは今、流星の群の中に在るのだから、」

「っ、っ、っ、」

夜空を見上げる、蒼装の細い顎先。

その向こうで、また、一つ、

「りゅせ、っ、」

星が、流れた。

「きら、い」

ついに耐えかねたのか、嗚咽交じりの伯の眩きを受け、蒼装は寝  
着の裾を払うと、その傍らに腰を下ろした。

伯の両耳を蒼装の手が、塞いだ。

「っ、っ、っ、」

シャ・・ンツ・・ジャツ・・ギ・イイ・・ツ・・

薄氷がひび割れるような、触れ合うような、そんな音が伝わって  
くる。

不安げに見上げてくる、大きな董色の眸。

「お前が受け取っているものは、降り注ぐ星の詞。<sup>ほし</sup> 静かに澄んだ夜  
だ。幼神である今のお前が、それを拒絶できぬのも、無理は無い、

っ、

「っ、っ、っ、」

手を離せば、伯が、くすん、と鼻を嚙った。

それを、情けなく感じているのかもしれない。

「伯。この地には煩わしく、もどかしい事の方が多かるっ、」

蒼装は、そつと水に触れている足を取った。

「、、、、、、」

懷から絹布を取り出すと、その足を拭ってやりながら、

「だからこそ、得るものもあつて欲しいと、私は思っている」

「、、、、、、」

「生き急いでくれるな、、、、」

それは、蒼装の願ねがいであつたろうか？

「、、、、、、」

頷く事もせずに、伯は、その人を見つめた。

銀の星々しろかねが流れる、空の下。

立ち上がった蒼装の袖を、

「ん、、、、」

伯が、掴んだ。

頼りなく揺れる行灯の明かり、その先へ。

蒼装は、伯を袖に、歩き出した。

ロン・・・ン・・・ロロ・・・

程なく訪れるだろう黎明を待つて、無人の中庭に、？が触れ合う音がする、、、、

立ち込めた朝霧が晴れるのを待つて、一台の牛車が屋敷を後にした。

ギシ・・・ギシ・・・ギシ・・・

往来に響く、齒車の音。

心地良い揺れに身を任せ、間近に迫った冬の訪れを予感させる、張詰めた大気を心地良く感じながら、静かに眼を閉じていた男は、

「む、、、、」

力強い羽ばたきを、耳にした。

牛車が止まると、物見から外を窺うのが、同時。

「旦那様、男童が、その、、突然、、、、」

牛追い童子や供人の困惑した声音を他所に、その眸は、

「、、、、、、」

羽ばたきの主をその腕に止めた男童を、捉えていた。

陰陽寮。

「充慶殿、お呼びでしょうか？」

その、一室。

陰陽頭に呼び出された銀仁いんじんは、衝立の向こうで膝をついた。

「ああ、入ってくれ」

「失礼致します」

簾は全て巻き上げられ、清々しい朝陽を取り込んだ角部屋には、所狭しと地方から届けられる書簡や卜占の結果、大陸の古い書物が積み上げられていた。

足の踏み場も無い、その執務室。

今日は既に、先客があつた。

文に眼を通していた初老の男、天羽充慶あめつせは、

「そこに座りなさい」

向かいの板の間を、指差した。

「、、、、、、」

腰を下ろしたところで、

「今日から、陰陽寮で預かる事になった、悠霧ゆうきりと言う」

「、、、、、、」

見れば、水干を纏った少年がこちらを見て、にやついた。

「悠霧、銀仁だ」

「ああ、本当に大きな猫だな。仲良うしてくれ」

その言葉に、

「陰陽頭、、、、」

どう言うことですか、とばかりに眉を寄せた、銀仁。

「東国の寺に預けられていたのだが、この通り天性の見鬼でな。多少荒削りではあるが、呪術も使う。末頼もしい若者だ」

充慶は、うんうんと頷く悠霧を穏やかな眼差しで眺めつつ、

「稀水きすいの屋敷で面倒を見てもらうよう、手筈は整えてある」

「左様ですか、」

渡殿をこちらへと向かつてくる足音を、聞いた。

「陰陽頭、稀水です」

澄んだ若者の声音に、

「ああ。今、悠霧をやるから、案内を頼む」

行きなさいと、眼で促せば、悠霧が跳ね上がった。

そのまま忙しない足音をさせ、衝立の向こうで待つ、若者の下へ。

「お前が、稀水か？よろしく頼むぞっ」

「あ、はあ、」

「もう俺さあ、こんな人がたくさんいるの久々でっ」

そのまま手を引かれ、逆に稀水が連れて行かれる形となった。

遠ざかって行く足音と、少年の声。

稀水の困惑した顔を思い浮かべていると、

「預けられていたとは、よく言ったものでな、」

充慶が、ようやく語りだした。

「その実、寺の土蔵に幽閉されていたようだ」

「幽閉、」

「まあ、一年以上も前の事らしいが。これが、その旨の実敦さねあつからだ」

平素、稀水と同じ刻限に宮中にかかる銀仁は知らなかったが、どうやら御所まであとも少しの道端で、実敦の白大鷹シロオオタカを腕に、この男童に呼び止められたらしい。

「実敦殿は、ご嫡男の、」

「ああ、そうか。お前はまだ会あった事がないのだったな。あやつは地方を行脚し、怪異の根を探して廻っているのだが、気配なその生活が気に入ったようで、帝都にはとんと寄り付かぬ、」

そんな倅を思い出したのか、ほとほと呆れはてている父の顔になった充慶であったが、

「とにかく、その実敦が悠霧を連れ出したと言うのだ。食事もなくに与えられぬまま、黴臭い土蔵に籠められ、ゆくゆくは次の飢饉の

人柱か、、、」

「人柱なぞ、神霊が喜ぶものでは、、、」

「地方の集落では、未だ、忌まわしいその風習が、色濃く根付いているものなのだよ」

ふと、その眸に哀れみを浮かべた。

「寺の前に捨てられていた孤児のようだな。見鬼と分かった当初は、憑物落としなんぞをさせていたが、読経にも頼らね。寺にしてみたら、その一切が、次第に薄気味悪くなったのだらう」

骨と皮にも等しい悠霧を連れ出た実敦は、その体力の回復を待つて、都に送ったのだと言う。

「幽閉されていても、あの性格。大したものだ」

ぼんやりと充慶の話を聞いていた銀仁は、

「未は、都守のようになるのでしょうか、、、」  
ぽつりと言った。

読経でもなく、祝詞を捧げる訳でもない。

己が手足のように自然神霊を使役するかと思えば、神霊そのものの心を試し、揺さぶりもする。

何故か、あの不遜な都守の姿が脳裏に浮かんでいた。

清々しい朝陽の中、

「、、、、なつて欲しくはないな」

それを懸念するかのような充慶の溜息が、滲んだのであった。

宮中。

若い衛士らと話し込んでいた燕倪は、

「あ、あん時のおじさん」

聞き覚えのあるその声に、辺りを見回した。

「お前は、、、、」

若い陰陽師、稀水に連れられているのは、紛れも無い昨夜の少年。  
「ゆ、悠霧っ！！少将に、なんて事をつ！！嗚呼、申し訳ございませぬっ」

平謝りの稀水に、

「昨夜で懲りているというか、慣れていると言つか。気にするなよ。それより、この子は、、？」

「はい。今日より陰陽寮で預かる事になりました、悠霧でございます。これよりしつかりと宮中での礼儀作法を叩き込みますので、どうぞご容赦くださいますよう」

「まあ、これくらい元気があった方がいいさ。俺は気にしてないよ」  
燕倪はにこりと笑って言った。

それを見ていた悠霧は、

「おじさん、偉い人だったのか、、」

「ゆ、悠霧っ」

「ああ、いいいい。あのな、俺はただの武官だ。そんなことよりお前こそ、陰陽師になるのか？」

「なるわけないじゃん」

はつきりと言った。

ぎよっとした稀水を他所に、

「俺は、実敦様に言われてここに来たが、陰陽師になれとは言われてないからな」

「おお、実敦殿か。懐かしいな」

「知っているのか？」

悠霧が、眼を輝かせた。

燕倪は、鈍色の眸を眇め、

「ああ。飄々としておられるが、その実、弓の名手だな。都にいらつしやった頃には、よくご指南を受けていたよ」

「本当？」

「阜嵯弥ふさやという、真っ白い大きな鷹を飼っておいでだろう？」

「うん。あいつ、狩が巧くてさ。秋のうちに丸々と肥えて、そのうち飛べなくなるんじゃないかっての」

笑いあうその二人を、稀水は不思議そうな顔で眺めていた。

「で、実敦殿は都に戻られているのか？」

「うん。でも、もういつちゃった。都は苦手なんだって、」  
一瞬、哀しげな顔をした悠霧。

けれど、すぐに眸を炯々と光らせると、

「なあ、それより、昨日のあのちびすけ。ここには、いないの？」

「あいつは、ここには出入りしてないからなあ。いつも蒼装にくつついてはいるが、ここにはまず来ない」

「そうじょう、って、あの白い髪の毛の、」

「ああ。都守と、言ってな。まあ、星読師やら陰陽師みたいなものだが、宮中での出仕よりも、昨日のように魍魎どもを相手にして回るのが仕事みたいなもんだから、」

「なあんだ。それじゃあ、退屈だなあ」

さもつまらなそうに、溜息をついた。

「悠霧、あまり少将をお引止めしてはいけませんから、」  
「やんわりと袖を引けば、」

「お前、どこに住んでいるんだ？」

燕倪が、悠霧に問うた。

「この人の所」

夕霧は、傍らの稀水を指差した。

「あ、、陰陽頭のお屋敷の近くにある、大納言様の別邸の裏手で  
す」

「そこなら分かる。じゃ今度、連れて行ってやろう」

「本当に？」

「ああ。その代わり、」

燕倪が、悠霧の華奢な肩を叩いた。

「実敦殿のお言いつけを守って、しっかりお勤めしろよ」  
「分かった」

仲間に呼ばれて左近衛府の社殿に向かうその背を、

「なんか、ちよつと実敦様に、」

悠霧は稀水に袖を引かれるまま、見送ったのだった。

「実敦兄さま、、、？」

頼りない行灯の、ともしび。

夕餉を済まし、後は褥に入るだけ。

先ほどまで聞こえていた、母が爪弾く琴の音も止んでしまった、そんな時分。

銀仁は、向かいで、大きな木盤に伸びやかに描かれた色彩鮮やかな世界地図の上に、駒を進めていたあとりに、尋ねた。

「稀水殿の元で、預かる事になった男童がいてな。その方の紹介であるようなのだ」

あとは姿勢を正すと、高杯に積まれている紅葉の形をした落雁を、つまみ上げた。

まだ、眠る気はないらしく、盤を持ち出して来たため、銀仁はその相手である。

「宮中での出来事など、父上はわらわに何も話してはくれぬでな、」

口に入れば、粉っぽい中に、ほんのりとした甘味が、広がった。すでに冷めてしまった白湯で、流し込むと、

「一の兄上とは、もう長いことお会いしておらぬが、度々、夢でなら会っておるよ」

黒目がちな眸で、銀仁を見つめた。

「お山で修行なさっている二の兄上と違って、飄々とした御方だな。雲のような気性の方じゃ」

「雲、、、、」

「年も離れているせいか、何をお考えなのか、わらわにはさっぱり分からぬ」

「、、、、、、」

「ただ、この国を回って、怪異の根を探し、被っていると父上が言っておった」

「何故、都を拠点とされないのだろっ、、、、」  
不思議そうな顔をした銀仁に、

「単に、旅がお好きなのだ。一度、父上について地方に出向した事があつて、それで味を占めたのだと以前、これも父上が洩らしておつたが、」

銀仁を見つめる眸が、どこか得意げに輝いて、

「先代都守が在りし頃は、次代都守ではとの噂があつたらしい」

「次代、」

「うん。今の都守が、先代の遺言のまま、いや、その実、力づくで継いでしまったのだと、母上が嘆いていた。と、まあ、わらわは姉上から聞いたのだけれど、」

すぐに、深い闇色へと沈んでしまった。

先代都守の養子であり弟子でもあつたが、まったく無名に等しい若者が、底知れぬ神通力でもって都守の座に就いた話を、銀仁も聞いていた。

しかし、その渦中にとりの兄もいたとは、初耳であつた。

「もし、一の兄が都守であつたのなら、ずっと都にいらつしたかもしれない」

「あと、」

小さな溜息がこぼれて、銀仁はその手をあとの華奢な肩に置いた。

気丈なあとのりの中の、弱い本音が、銀仁には少し痛々しく思えた。あとりが、視線に顔を上げれば、

「む、」

琥珀色の眸が、なんとも言えぬ感情に眇められていた。

「銀仁」

心得たものであとりは、大丈夫だと、いつものように口角を吊り上げる。

そして、

「そなたの番じゃ」

「あ、あ、すまん」

銀仁を促し、サイを振らせた。

さわさわと、赤々と染まり、長く伸びた紅葉の枝が、軒先に触れる音が、する。

風が、でてきたようだ。

その風が呼んだのか、ぱたぱたと雨足が混じった。

カ・ララ・・・・ン・・・・

乾いた音が、漆が塗られた器の中に、響いた。

くるくるとひとしきり器の中で踊って、六が、出た。

いち、に、さん・・・

マス数を数えていたあたりは、そこに描かれていた文字を読んで、にんまりした。

「そうそう。不思議なお目の色をしていてな。銀仁も、一の兄様に会えばすぐに分かる」

「目の色、・・・？」

何気なく駒を進めた後、気がついた。

「む、・・・」

駒の下に、『六マス戻れ』の文字。

銀仁の駒を、もとあった場所に戻しながら、

「金色の髪と、南天のように赤いお目をされているから、・・・」

あたりは、歌うように言ったのだった。

第拾ノ巻幕前

星詞

(後書き)

第拾ノ巻幕中ノ前

夜鷹

(前書き)

流星が放つ、星の詞。それは嘆きか、それとも福音か、

死人還りの都守蒼装、業丸を継ぐ武官燕倪、幽身であるがこの世に縛られた伯。それぞれが紡ぐ異国絵巻、第十一幕中の前編。。。

「お、今帰りか？」

屋敷へと急ぐ者達の中にその姿を見つけ、燕倪が声を掛けたのは、氷雨が明けた翌日の事であった。

ようやく、季節外れの晩秋の長雨が明けたと思ったら、今度は身を切るような氷雨が数日続いた。

晴れ間が覗いた今日も、しつとりと湿ったままの大気がひんやりとして、肌寒い。

まだ、所々、翠を残す木々の葉も、いつせいに色づくだろう。

「これは、少将。ええ。これから、屋敷に戻るところです」

心労か、ただでさえ顔色が悪い稀水の顔に、雲間から差し込む乳色の陽射しが、翳を落とす。

「そうか。悠霧。もう、慣れたか？」

その傍らで、しつかと袖を掴まれているのが、

「うん。まあ、ね」

悠霧だ。

稀水の教育の賜物か、以前よりは落ち着いて見えた。

ただ、刻限のせい、往來へと出て行く牛車や、年頃近い牛追い童らの姿も多く見られ、視線はなかなか定まらない。

燕倪は、西の空へ傾きはじめる太陽を、眺めた。

陽の入りが早くなつたとは言え、夕暮れはまだまだ先だろう。

「どうだ、これから？」

「何が、、、？」

訝しげに見上げてくる悠霧に、

「この重い束帯ふくを着替えたなら、都守の屋敷に顔を出すつもりだ。お前もどうだ？」

鈍色の眼差し。

「都守って、あのちびがいる？」

「ああ」

「行く行くつ、絶対行くッ」

「悠霧ッ」

悠霧は、稀水の心配を他所に、燕児の腕を取って引っ張った。

もし、都守の氣に障るようなことになったら、、

あの冷やかな死人還りの眼差しと、充慶の渋い顔が、脳裏を過ぎった。

「あの、少将。悠霧は、修業の身。その、この子をお連れになれば、きつとお手を煩わせるような事に、、」

「ああ、構わん構わん。これぐらいの年頃なら、それくらい当たり前だ。そんな、氣にするなよ」

「しかし、、」

「蒼<sup>あいっ</sup>契<sup>つ</sup>もああ見えて、氣が長いんだ。どうせ伯も、退屈しているだろうし」

「そう、ですか、、？」

なおも心配顔の稀水に、

「おうさ」

燕児が、人好きする笑顔で請け負った。

その人柄が滲み出ている笑顔の前では、さしもの稀水も断る理由を、失った。

「ああ、悠霧。それでは、くれぐれも粗相のないようにするんですよ?!」

「子供扱いするな」

むくれる悠霧のこの顔には、さすがに慣れたのか、

「ちゃんと遅くなる前に、おいとまして、帰るのです。一人で帰れますか？」

釘を刺した。

「任せる。伊達に夜中、屋敷抜け出してねえよ」

「なっ、、」

案の定、引きつった顔の稀水を他所に、

「主様、ああ、こちらにいらつしやいましたか」

屋敷へ向かう牛車や、その供らで混雑する往来から、聞きなれた若衆の声が掛かった。

「おお。ここだ、ここだ。籐那<sup>とうな</sup>」

大きく手を振れば、

「御車はこちらです。すいません。今日は少し遅くなってしまつて、  
、、」

人混みの中から、飛び跳ねて見え隠れする、籐那。

燕倪は、

「おし。じゃ、借りてくぞ」

稀水の肩を叩き、悠霧の腕を取る。

人混みに消える手前、悠霧が、

「へへっ」

どこか勝ち誇った笑みでもって、稀水を振り返った。

人混みの中、遠ざかる燕倪の後ろ姿を、

「どうか、何も起きませんように、」

稀水が祈るように、見送っている、

「ふ、あ、」

ぼんやりと、している。

傾き始めた太陽が、西の薄雲の中で橙色を滲ませる、時分。

見上げたその空が、

「あ、」

回っている。

「、、、」

闇色の、視線の先。

金銀に紅白、丹頂、黒。

忙しなく水面に口を寄せ合い、大きな鯉達が集まっている、ちょうど真上。

橋桁に腰を下ろし、空を見上げている伯が、

「あ、、、あ、、」

うとうと・・・こくり・・・

舟を、漕ぐ。

大池に面した、奥の書院。

墨を筆に含ませていた蒼装も、

「、、、、」

先程から、浮島に掛かる平橋の上で危なげに揺れるその様を、眺めている。

どうやらここしばらく、体内を通過する星の詞が鳴り止まず、夜はろくに眠れぬせいであるらしい。

その【星詞】とやらも、人々の喧騒で掻き消える、日中。

そのほとんどを、眠っているような、いないような、こうした状態で、ぼんやりと過ごしている。

小康状態ではあるが、まだ影響下にあるか、、

流れ行く星の群も、そろそろこの星区を抜けてもいい頃合なのだが、余韻のように後を引いているようだった。

気に入りの楓の梢にも戻らず、かといって寝所にも寄り付かず、それでも何故か蒼装の視線が届くところにいるのは、強がってはいても、不安がそうさせているのかもしれない。

「、、、、」

視線の先で、また、こくり、とやった。

池の畔で、方々から舞い寄った枯葉を掃いていた琲瑠が、それを見かね、

「若君、床を延べましょうか、、？」

何度目かの問いを、繰り返す。

しかし、

「んや、、」

答えは、同じ。

ぶんぶん首を振ると、眼を擦り擦り橋桁から降り立った。

平橋を渡り、欄干を到底、人とは思えぬ跳躍でもって飛び越えて、

肩に長衣を掛けた蒼装の元へ。

「、、、、、、」

心得たもので、そのまま膝に頬を預けるのを好きにさせつつ、再び筆を動かし始めた。

薄く開かれたままの、董色の眸。

その目元に手を置けば、掌に睫毛が触れて、瞼が閉じたのが伝わってくる。

やがて、穏やかな寝息が、小さく聞こえてきた。

蒼装は、古い異国の文字で書かれた暦の綴りをめくり、琲瑠は、屋敷の裏手へと集めた枯葉を運ぶ。

そろそろ夕餉の支度をと、竈に火を熾していた汪果は、目覚めたばかりの小さな焰の揺らめきに、眼を眇めていた。

それぞれに、それぞれの穏やかな時間が、流れてゆく。

上空では風が強いのか、優雅に弧を描いていた鳶が軌道を外し、千切れ雲の向こうへと流されていった。

ヒョ・ウル・・口口・・口・・

途切れた、鳶の声。

「、、、、、、」

手の下から、抜け出す気配に、蒼装は大池の向こうを眺めた。

木々の葉も落ち、茂っていた野草にも、冬を迎える衰えが窺え始めた木立から、

「よお」

見慣れた男が、少年と共に、現れた。

空が焼け、橙色の陽射しが水面に映れば、そのままもう一つの空となった。

どこからか舞い込んだ海老色の木の葉が落ちて、その空が、揺れる。

風が少し、ある。

池の畔に面した、阿四屋。あつちや

迫る夜の気配に、肌寒さを感じる中、  
「なあ」

群青の髪を首の後ろで束ね、翡翠の一对の珊瑚の角に、目尻に朱を滲ませた大きな董色の双眸。

異形であるその姿を前にしても、動じるどころか、

「そっちの方が、絶対いいぞ」

満面の笑み。

伯はと言うと、

「、、、、、、」

言葉も無く、蒼装の背に隠れてしまった。

その背中を、覗きこんで、

「あのさ、お前、俺と組まないか？」

悠霧は、単刀直入に、申し出た。

「、、、、、、」

感情を、微塵も感じさせない董色の眸だけが、じっと、悠霧を見つめた。

「、、、、、、」

「な、いいだろ？」

悠霧は、その眼前に、右手を差し出した。

健康的な桃色をした爪は長く、少年にしては不釣り合いに、鋭かった。

伯の視線を受けて、

「俺は、こいつで、鬼を抜う。お前は？」

「、、、、、、」

「また、だんまりかよ。ちびすけ」

「っ」

とたんに小さな犬歯を剥いた伯に、

「そうそう、そこなくっちゃ」

待っていましたと言わんばかりに、悠霧の顔が近づいてきた。

「っ、、、、」

伯は、がちがちと齒を鳴らせた。

相手は、こちらの事などお構いなしの様子。

「、、、、、、」

助けを求め見つめた先に、

「、、、、、、」

長椅子の肘掛に凭れ、物憂げに池の水面を眺める、蒼装の姿。

伯の、その視線を辿った悠霧は、

「、、、、そっか。お前もう主取りしてんのか。逆らえないんだってな、式神はさ」

残念そうな、溜息を一つ。

名残惜しそうに、群青の髪を掴もうとするのを、手で払い除けつつ、

「ちい、があう」

「あ？」

「式神、ちがあ、う、、、、」

とたんに、輝きを取り戻す、悠霧の眸。

「違うのか？」

「、、、、、、」

こくり、、、、

「じゃ、俺と契約しろ」

「、、、、、、」

しかし、それには、ふるふると首を振った。

「なんでだよ。俺となら、どんな奴だって敵わないぞ」

「、、、、、、」

ふるふると、また、首が振られた。

「だから、なんで？」

「、、、、、、」

今度は、ぷいっ、とそっぽ向いた。

「はつきりしない奴だなあ」

椅子に仰け反った悠霧に、

「その子を、私が封じているからだ、」

それまで黙ってやり取りを聞いていた蒼装が、口を挟んだ。

「封じるって、、？」

「他の誰も使役できぬように、神霊としての理を奪い、封じた、」

「

「なんでそんな事？」

「さて、何故であろうな、、」

嘯く、その端正な横顔に、

「じゃ、伯は、首輪つけられているみたいなものじゃないか？他の誰とも契約も出来ず、かといって、自由でもない」

鼻息荒く、言い放った。

「そうなるな、、」

「なら、、」

潤んだような眼差しの一瞥の後、

「あんたがいなくなれば、こいつは俺のものになるのか？」

「う、え、、」

その手は、伯の手首を掴み、引き寄せる。

「俺を、選べよ」

ブンツ・・・

風を切る音。

傍らに立つ蒼装に向かい、鬼を屠るその腕を一閃。

「つつ、、ッ」

呻いたのは、

「いい加減にしろっ」

燕倪の手によって、手首を捻り上げられた悠霧、当人であった。

「喧嘩売りに来たのか？！」

「離せよっ、冗談じゃないか」

大人をどうとも思わぬ、不敵な笑みに、

「冗談にしちゃ、殺気があつたぞ」

さすがの燕倪も、声を荒げた。

「いててつ、やめろよつ、馬鹿力ッ」

「燕倪、よさないか。子供相手に、、」

「見かねた、蒼装の声。」

「だが、と食い下がる燕倪に、」

「私は、構わんよ、、」

「しかしだなあ」

「伯、、」

「蒼装に名を呼ばれ、悠霧に腕を？まれたまま、身動き取れぬ伯が、」

「あうう、、」

「上目遣いで、呻いた。」

「この際だ。しばらく、悠霧と共に行ってみるか、、？」

「、、、、」

「さすがにあんぐりと口を開けたまま、言葉を失ってしまった伯に、」

「おい、蒼装。お前なあ、いつか言つてやろうかと思つていたが、」

「」

「黙つて聞いていた燕倪が、握つた拳を振るわせた。」

「伯の気持ちもちつたあ考えた事、あんのか?!」

「しばしあつて、」

「、、、、いや」

「いつもの酷薄な笑みを浮かべたまま、蒼装は言った。」

「お前っ」

「その襟首に伸びた手を、」

「エンゲ」

「伯の手が、止めていた。」

「伯、だいたいな、お前も嫌なら嫌だとはつきり言つてやれよ。そ

「んなんで、今までのくなく事なかっただろっか？」

「、、、、、、」

「こくり、、」

「頷いた。」

「なら、、」

それでも、その手は離れなかった。  
しばしあつて、

「オレ、行く、、、」

「ああ?!」

「ユーギリ、、、と」

伯が、悠霧の顔を見つめた。

悠霧の顔に、笑みが広がった。

「ま、マジか?!」

「ん、、、」

伯が頷けば、

「おおっ」

悠霧がその身を抱きしめた。

「あ、ぐぐう、、、」

「じゃ、行こうぜっ!」

「んああ、、、」

燕倪の手を振り払い、伯の手を引いて駆け出してゆく。

その手に引かれるまま、伯が木立の向こうに消えて行くのを見送  
つて、

「お前が、あんな事言うからだぞ」

腕組みしつつ、燕倪が低く言った。

「いつもの事じゃないか、、、」

伶俐すらある、いつもの闇色の一瞥に、

「帰る」

燕倪もまた、木立へと歩き出した。

「あ、、、燕倪様」

阿四屋にいつもの酒盛りのため、火鉢を運んでいた琲瑠が、その  
背を追いかけていった。

毛氈を手に現れた、汪果は辺りを見回し、

「、、、、、、」

いつの間にか書院に戻り、筆を動かしている、主の姿を見つけ、

その元へ。

「あの、、、一体、どうなされたのですか？」

「どう、とは、、、？」

古い暦を書き起こしながら、顔も上げずに言った。

「あ、、、」

いったん口を閉ざした汪果だったが、

「いえ、なんでもございません」

そのまま、書院を後にした。

頬を撫でる風が、刺すように冷たい。

汪果は、二の腕の辺りを擦った。

振り返った先に、暮れゆく空を映す大池。

そこに浮かぶ、書院。

そろそろ、行灯に灯りを灯して回さねばならない刻限が迫っている。

「、、、、、、」

見回せば、どこか閑散とした、屋敷の内。

冬の訪れも近い、寒気に滲むのは、

以前のお屋敷に、戻ってしまったような、、、

かつての静けさを、少し寂しく感じる、汪果の溜息。

「まったく、あいつ、、、」

何考えてやがるっ

思い出せば思い出す程、腹が立つてくる。

肩を怒らせ往来を行けば、人々は道を開け、訝しげな眼差しでこ

ちらを見つめている。

その傍には、

「すみませぬ、、、」

琲瑠が、なんとも言えぬ表情で、項垂れていた。

「お前が謝るなよ、琲瑠」

「自分でも、なんとも不甲斐無い従者だと思っているのです。先の

一件でも、嗚呼、、、」

「お、落ち込むな。こんな往来で、、」

薄い肩を叩けば、深い溜息が吐き出された。

蒼装の申し出そのまま、伯を送り出してしまった事に、少なからず落ち込んでいるようだ。

「あの方の事、何かお考えがあるとは思うのですが、、」

「ああ。そうか、、」

今、気づいたとばかりに、燕倪は琲瑠を見つめた。

「魍魎屋敷の一件では、示し合わせていたんだろう？今回は、何も聞いていないのか？」

「まさか。燕倪様が、件の男童くだん おのわらわをお連れするなど、さしもの主様も夢にも思わぬでしょう」

「あ」

なんだ。結局、俺のせい、てかつ、、

今度は燕倪が、項垂れた。

木枯しが、所々の辻で巻き上がっては、道行く人々は背を丸め、

先を急ぐ。

阿智川あちに掛かった、石橋。

恵堂橋。

首の長い青鷺が数羽、どこからともなく落葉流れる水面を、見つめている。

琲瑠の見送りも、ここまでだ。

「厄介になつてゐる屋敷は、陰陽頭の屋敷の近く、大納言は曾野叢そのむら殿の別邸、その裏手だそうだ。芳蘇家おつすけつていやあ、先々代の御世じや、参議を勤めた家柄だ。後で、行くんだろ？」

「はい。お屋敷の方々も困惑されるでしょうから、主様のお許しを頂いた後、その御名でご挨拶に。お酒やお召し物も届けねばなりませんし、、」

「相変わらず、だな」

「若君にお仕えすることこそ、わたしの喜びですから、、」

微笑んだ琲瑠であつたが、すぐに翳を落として、

「主様のお言いつけ通り、翡翠輪はちゃんと身につけられているでしょうが、よりによつて、宮中に入入りされるとなると、」

「まあ、陰陽寮にや銀仁もいるんだ。しばらく様子を見るとしよう。何かあれば、俺も力になるから」

珍しい燕倪の放任的な、その物言い。

「、、、はあ」

琲瑠は煮えきらぬまま、頷くことしかできなかった。

陰陽師や修業生らが詰める、社殿の一画。

棚から溢れんばかりの書物は所狭しと、床に山積みになれ、地方から送られてくる卜占の結果や気象の変化、報告された怪異などを纏めた月報らが、文机の上を覆っている。

皆、一様に書面と向かい合っている中、

「おいっ」

「、、、、」

朝陽が眩しく差し込む始業時より、どたどたと不釣合で忙しない足音が、ずっと続いている。

「待てよっ」

「、、、、」

うんざりした様子の伯を、悠霧が追い掛け回しているのだ。

どうも、昨夜から屋敷でもこの調子だったらしく、

離れの手入れが終つていいが、、、

稀水は額を揉みながら筆を走らせ、

「いつからここは託児所になったのだ、、、」

「お、陰陽頭っ」

その声に、顔を跳ね上げた。

定例会の招集に応じ、大内裏に出向いていた天羽充慶と、彼に付き従つのは、

「まったく、落ち着きの無い、、、」

虎精の銀仁。

「これには、その、、」

なんと説明したらいいのかと戸惑う稀水を他所に、  
「いいんじん」

伯が、銀仁の背に逃げ込んだ。

黒瞳深いこの童には、見覚えがあった。

翡翠の連珠を首に掛けた伯に、充慶も、

「何故、都守のところの神霊しきが増えている、、？」

訝しげに、眉を寄せた。

眼を眇める充慶の前に、

「おじさん」

歩み出たのは、悠霧。

「俺、こいつと組む事にしたんだ」

「組む、、？」

思わず首を傾げた、銀仁の眼差しの先で、

「ああ。俺とこいつが組めば、都中の鬼が束になってかかってきて  
も敵わねえよ」

悠霧は、どこか得意げに唇の端を吊り上げた。

「ふむ、、」

一方充慶は、銀仁の背に隠れたままの伯を一瞥し、

「神霊の気性を、お前はもう少し学ばねばなるまいよ」

「なんだよ、それ、、？」

悠霧の頭に手を置くと、そのまま何も言わずに、書斎に向かい歩  
き去った。

取り残された銀仁は、背中にしがみつかれたまま、かける言葉を  
探していたが、

「来い」

「、、、、」

そのまま伯を小脇に、渡り廊下へ。

「お、おいっ！！そいつをどうするんだっ？！俺んだぞっ」

悠霧の喚き声に応じるは、

「皆の職務に差し支える故、しばらく預かるう」

有無を言わせぬ、銀仁の低い声音。

さしもの悠霧も、虎精の獰猛な眼光に射抜かれれば、

「ぐっ」

気迫にたじろいでしまった。

「稀水殿、宮中の見回りは？」

「あ、い、行きましようっ」

稀水は、その場から逃げ出すように銀仁の広い背に、続いたのだ  
った。

式部省の社殿。

人の出入りが多い美福門を右手に見ながら、銀仁は後ろにつき従  
っている伯に向き合った。

「いったい、何がどうしたんだ？」

気遣う銀仁を他所に、

「、、、、」

伯は、いつものだんまりの構え。

その様子に、鼻から息を吐いた、銀仁。

「それが昨日、左近衛府の少将が、都守のお屋敷に悠霧をお連れに  
なつたのですが、、」

宵の口に、ちゃんと戻ってきたと思ったら二人になっていた、と  
稀水が肩を竦めて語った。

「燕倪が、、」

いったいどう言う事なのだろう。

珍妙極まりない修業生が二人になったと言う事は、神経の細い稀  
水にはとってはさぞ荷が重い事だろう。

しかもその一人は、陰陽頭の長男が送って寄越した者。

もう一人は、都守のところの式神だと言うのではないか。

ただでさえ顔色が悪い稀水が、今日は一段と青白く、脆弱に見え

てならなかった。

そこへ、

「むっ、っ、」

同僚らと門を潜って通りがかったのが、

「燕倪っ」

「ん、っ、？」

束帯姿の備堂燕倪、その人。

「義徳、直友、先に行ってくれ」

ひらひらと手を振ると、こちらに向かってずんずんと歩いてきた。  
銀仁の前にいる伯を見て、

「さっそく問題を起こしたのか？」

事情を知る燕倪は、つい小声になった。

「大した事ではないが、陰陽頭も困惑しておいでだ。いったい、どうして悠霧の元に伯が、っ、？」

「まあ、なんと言うのか、っ、」

伯を盗み見れば、朱鷺色の唇を引き結び、足元を列を成して行く  
蟻を、小枝で弄っている。

「年頃も近いし、友になればよし。なれねばそれまで、と言っのか、  
っ、」

「？」

「好きにやらしておけよ。ガキ同士の付き合いに、俺達がとやかく  
口を出していい年でもないしな」

珍しく放任的な態度で背を向けた。

その広い背中に、

「燕倪」

呼びかけたところで、片手を挙げて応じたきり、さっさと、同僚  
を追って歩み去ってしまった。

「ますます分からんな」

「本当に、っ、」

「燕倪のあの口ぶり。大方、都守のいつもの気紛れに苛立っての事

だろうが、  
「

「  
「

ふと、視線を落とせば、銀仁を漆黒の眸が見上げていた。

その通りだと言いたげな眼差しを、

「退屈するよりは、こうして屋敷の外に在ると言うだけ、マシと言うものか？」

琥珀色の眸が見つめ返す。

しばしあつて、

「  
「

こくり、  
「

頷くと、伯は歩き始めた。

一人、陰陽寮の社殿へと向かうその華奢な背中を見送って、

「あのきかん坊の手綱を取れるのは、案外、  
「

銀仁は、ひとりごちた。

「早い所なんとかして欲しいものです。当屋敷でも、ずっと、あの調子でして。御簾は外すは、花器は割るわで、それでも終始、野放図にしておくしかないんですから、  
「

今日もまた、騒がしくて眠れぬ夜が来ると思えば、頭痛に胃痛が入り混じる稀水の悲痛な溜息である。

頭上から、影が落ちてきた。

見上げれば、長い髪がはたはたと硬い頬を打った。

遙か高みより降り注ぐ陽光の中から、白い輝きがその双翼に、風を従えていた。

猛禽類の中でも、両翼を広げれば大の大人の背丈にもなるう、王鳥。

力強い羽ばたきに続き、鋭い鉤爪をちらつかせると、空の高みより舞い降りる。

「どうしたんだい、ふたや阜嵯弥？」

鬼面の男は、肩に掛けていた長衣を二の腕に絡ませると、慣れた

様子で白き大鷹を迎えた。

グッ、グググ・・・

獲物の肉を引き裂く嘴で、指を甘咬みしながら喉を鳴らし、くるくるとよく動く虎目石の如き眸で見つめてくる。

そのまま頭を掌に押し当てれば、男は心得て、すべらかな羽毛を撫でやった。

「ああ、そうか。お前、寂しいんだね」

子を諭すような、穏やかな口調でもって、男は大鷹に言い聞かせる。

「でもね、これはきつと必要な事なんだ」

クッ・・・クククク・・・

首を傾げる、大鷹。

その口に、懷から取り出したのは、干した猪肉。

啄ばませながら、

「おれと居たら、人の中には戻れないかもしれない、、」

高い空を、見上げた。

千切れ雲が、幾つも流れてゆく。

前方彼方に見えるのは、白い細波を刻む、暗黒の大海原。

どこまでも続く無人の原は、薄っすらと雪で覆われはじめていた。

北の果てでは、雪が早い。

腕を跳ね上げれば、天高く舞い上がる、大鷹。

高い太陽の光が差し込むその双眸は、深い紅くれない。

「さあ、行こう。古の御陵いにしえみささぎは、もうすぐそこだ」

菅笠を、目深に被り直せば、強い風が巻いて衣の袖を巻き上げた。

風花舞う一面の草原が、からからと音をたてる。

それは赤子だけではなく、鬼や死者をも慰める風車かまぐるまの音に、よく

似ていた、、

弓を思わせる月が、掛かっている。

大気が澄んで一段と冴え冴えと、しかしどこか頼りないその月明

かりに、行灯の優しい橙色が、滲んでいた。

ここ数日で、俄かに冷え込み始め、火桶や温石を運ぶ者達の衣擦れの音が、耳を澄ませば微かに聞こえてくる。

池を挟んだ、ここは、芳蘇稀水の屋敷。

その母屋の対岸にある、瀟洒な離れである。

かつて栄華を極めた名家、芳蘇家<sup>おつす</sup>だけあって、手入れの行き届いた竹林に抱かれており、帝都の喧騒も、ここでは遠い。

数日程前、予期せぬ来賓を迎え、その離れを解放したのは、他でもない。

陰陽頭の命に続き、都守の名が、決め手となった。

「若君、翡翠輪はなるべく、人目につかぬように、」  
「、、、、、、」

これから本格的な冬を迎えると言うのに、ふつくらと薄紅色に膨らんだ蕾。

寒気を受けてなお、つやつやと、深緑の葉。

寒椿。

その葉に結ばれた夜露と、頼りなげな水面に映る湖月を肴に、縁側で杯を手にしていた伯は、なみなみと注がれたばかりの杯を、一息に干した。

心得たもので、傍らに影のように控える従者に渡すと、寝衣の胸元を寛げる。

翡翠の勾玉と瑠璃硝子が触れ合い、澄んだ音を立てながら、薄い胸元へと滑り込んでいった。

「お体の具合は、どうですか？」

穏やかな声音の主は、他でもない。

ここ数日、雨だろうが、風の強い日だろうが、欠かさず訪れる<sup>は</sup>瑠である。

その甲斐あってか、稀水の心労も半分には減った。

と言うのも、朝晩、必ずこの屋敷を訪れては家主らが恐縮するほど卒無く、二人分の世話を焼いているのだ。

湯浴みから着替え、夕餉の給仕に褥の準備。

さらには、今日は時間が余ったせいか、薪割りから、屋根の修繕、植木の手入れも済ませている。

「、、、、」

漆黒の眸が、琲瑠を見つめた。

相変わらず無口な、伯。

、、、、

思念ですら何も発さず、ただ黙って、水面を眺めた。

幾筋もの鯉の背鰭だけが、水面に波紋を刻んでは、暗い水の深みへと消えてゆく。

「大分、良いはずだぜ。おっさん」

二人の調度頭上から、声は掛かった。

琲瑠が見上げれば、三白眼が印象的な少年の顔が覗いた。

屋根の上、夕餉はとうに済ませたはずだと言うのに、伯の御相伴に預かっていた悠霧だ。

「あなたも、聞こえるのですか、、？」

琲瑠の細い眸が、さらに細くなり、さも不思議と言いたげに、少年の顔を見つめた。

「ん、ああ。でもきつと、こいつより、ずっと小さい音だけだな。

よつとつ、、」

空のお重を腕に抱いて、悠霧が猿まじらの如く縁側に降り立つ。

「篝星の放つこの音は、嘆きか、それとも福音か、、」

「嘆き、福音、、ですか？」

悠霧の言葉に思わず面食らって、琲瑠は顎先にはっそりとした指をあてたまま、小首を傾げた。

「実敦様が、いつか言ってたんだ。篝星が落ちる時、それは自身も消滅する時。でも、中には、終末を告げる福音ともなるって、、」

「終末を、告げる、、」

琲瑠は、細い眼を更に眇めて、夜空を眺めた。

何の変化もない見慣れた夜空が、そのまま広がっている。

「箒星がここに落ちてきたら、俺達も死んじゃうし、箒星だって砕けちまう」

「それは、、そうですねえ」

「中には、それが星命？って言うのか、、神霊ってゆーのは、本来目的があつて、そのために生まれ、生きているんだろ？」

「お詳しいですね、悠霧様は、、」

穏やかな眼差しで見つめられれば、悠霧は得意気に、

「ま、な。俺の師匠は誰よりも、すげえんだから」

につ、と唇を釣り上げた。

「箒星が、今を謳う賛歌とも言つし、旅を終える【いつか】を嘆いて啼くとも言つし、真相なんて、星じゃねえと分かんないけど、、

悠霧は、伯を見つめた。

伯は、湖面を眺めたままだ。

その横顔を見つめたまま、

「俺達は、【かなしうた】って呼んでんだ」

「哀しいうた、ですか、、」

「ああ。だって、、」

悠霧は、ぽつりと、呟く。

「なんだが、ひどく寂しい音だろ？」

「寂しい、、」

また、遠く星が、流れた。

琲瑠の視線の先、

「、、、、」

柱に背を預けるように足を投げ出している伯の肩も、小さく揺れた。

「残念ながら、幾ら耳を澄ませても、わたしには何も。顕現して、

まだ日が浅いものですから、、」

苦笑した琲瑠に悠霧は、どこか寂しそうに、

「大昔は、みんなちゃんと聞こえていたのに、夜を畏れて眠るよう

になってから、気づかなくなっちまったんだって、」  
そう、言った。

かつて、夜通し空と語り合う、そんな風習が当たり前のように存在していた頃が、あったのかもしれない。

人々は星の声を聞き、鬼を見、祖先と語り、大いなる流れの導きを感じながら、今よりもずっと親密に、互いに関わりながら生きていた時代だろう。

「、、、、」

もし、その頃に生まれていたら・・・？

夜空を睨む悠霧の横顔を、

「、、、、」

困ったような、泣きそうな、そんななんとも言えぬ顔で、琲瑠は見つめた。

「ん、、？」

しばしおいて、その人の視線に気がついた、悠霧。

「ほいよ。美味かった」

「あ、、おっと」

舐めたのか、と思えるくらいきれいに平らげられたお重を、投げ渡す。

ぐつと一つ、大きく伸びをすると、

「ああふっ」

あくびまで、出た。

琲瑠は空になった瓶子や、手がつけれぬままの山海の肴を詰め込まれた伯のお重を、

「悠霧様も、眠れていますか？」

片付け始めた。

「ん、まあ、最近はな。【かなしうた】が賑やかだった盛りも、過ぎたみてえだ。伯は、気がつく<sup>こいつ</sup>と昼でも夜でもしよっちゅう寝てやがるし、、」

炯々とよく光る、鳶色の三白眼。

視線の先、伯が犬齒を覗かせ、

「はあわ、、、う」

釣られてあくびをしているところだった。

「何よりです。それでは、わたしはこれで、、」

深々と一礼すると、縮緬の大きな包みを手に琲瑠は離れを後にし、母屋の方へ。

月明かりの中、庭を渡り、退出の挨拶に遠ざかる琲瑠の、後姿。

「、、、、」

瘦せぎすなその背中を漆黒の眸が茫洋と眺め、そのまま崩れるように床に伏すと、瞼を閉じてしまった。

傍らに腰を下ろした悠霧は、長く床に流れた黒髪を手にとって、

「おい」

軽く、引つ張った。

「、、、、」

うんともすんとも言わぬ、伯。

耳を澄ませば、小さな寝息が聞こえてきた。

「、、、なんだ、もう寝てんのか？」

目付役も消え、また今日も出掛けようかと思っていたのだが、

「、、、、」

悠霧は一人、奥の間へと消え、すぐに戻ってきた。

その手には、誰かが忘れていったのか、艶やかな朱華色の打衣。

伯と背中合わせに横になると、悠霧はその体にも打衣を掛け、無人となった庭先を眺めた。

椿の葉の上に結ばれた夜露が煌いて、宙を滑ると、苔むした大地に当たって、砕けた。

さわさわと、夜風に遠く、竹の葉が擦れる乾いた音。

寝ぼけた鯉が水面を咬む、水音。

やがて訪れる冬に、命尽きるその前にと懸命に謳う、虫達の羽音。悠霧の睫毛が、ふるふると、揺れた。

音も無く渡る薄雲が、北東は峻険な山々のその連なりの向こうへ

と消える頃。

規則正しい二つの寝息が、聞こえている、、

深更。

枝を広げ、大地深くに根を張った、千年杉。

見上げれば山の如き巨木が、身を寄せ合うようにして軒を連ねる  
帝都の今を、見守っている。

風も穏やかな、静謐に満ちた夜であった。

湿気を含んだ夜気を吸って、絹で紡がれた薄衣が重く肌に纏わり  
つく。

豊かな金色の髪を踝まで垂らし、腕を組む姿が、その頂にあった。  
ふつくらとした丹の色の唇の端を微かに釣り上げ、その眸は、閉  
じられたまま。

蟬のように白い肌、その細い顎先が、上向いている。

大きく広がった獣の耳。

それが小さく動いて、程なく、

「こちらにお出ででしたか、、」

長い睫毛が、ふるりと揺れた。

紺碧の濡れた眸、

「さすがに、鼻が利く、、」

虹色の領布を腕に絡め直し見下ろせば、腰の辺りで九尾が揺れた。  
すぐ下の梢に、隻眼の白き大狗が、銀恢の眸で見上げていた。

「そろそろ、お屋敷にお戻り頂けませんか、地仙。野狐達が案じて  
おります」

その眼差しもなんのその、

「お前もここに上がって、耳を澄ませたらどうだえ？」

天狐遙絃である。

その傍らへ、一息に舞い上がれば、背に遙絃が寝そべった。

太い首に腕を回し、漆黒に染められた鋭い爪でもって喉元の柔毛  
の感触を愉しみながら、

「彼の流星から放たれる、不可視の素粒子。彼らがこの星を通過するのは、百余年振り、、、」

「その年月を、懐かしく感じておられるのですか？」

胡露の問いを、鼻で一蹴。

「ここに来る前までは、な。だが、実際どうだ。ここに立ち、改めて見渡し、この胸中を占めたものは、その反対さ、、、」

そう一人ごちて、顔を埋めた。

甘さの無い、琥珀の香り。

「忙しくも節操のない、人の世の有様。川はその流れを変え、大地は穢れ、大気は曇る。私がここに降り立った頃は、見渡す限り黄金の原が広がり、銀の大蛇の如き大河が、大きくうねりながら大地に融けていた。それをまあ、随分と好き勝手に、、、」

「それも愛おしいと、おっしゃっていたのは、、、？」

前肢の上に顎を乗せ、どこか呆れたような、その声音に、

「、、、相変わらず、可愛げのない奴だな」

水を差される形となった遙絃が、唇を尖らせた。

全てが、深い濃紺に塗りつぶされ、墨色の凹凸が描く、夜都。

遠く、野犬の遠吠えが聞こえれば、どこかで驚いた鳥達が、峙から飛び立っていった。

「やはりわたしには、喧しくて、いけませぬ」

「刹那を奏でる、この世に二つと無いものだ。そう邪険にするものでない」

長い爪先が、彼方で響いた音に合わせ、大狗の肌を打つ。

「この星の万物が、其に奏でられるための楽器のようなものだとしたら、、、そう、考えた事は無いか、胡露？」

「そのためだけ、とおっしゃるのでしたら、想像したくもありません」

終始穏やかな胡露の声音に、珍しく憤りのようなものが交じった。装ってはいても、気位の高いこの男をよく知る遙絃は、

「私も年を食ったか。感傷的になったものだ、、、」

宥めるように、頬を寄せる。

今にも消えて無くなりそうな細い月が、雲間に隠れる様を、紺碧の眸で捉えながら、

「前は、陽光に守られていたが、この分では、今回は明日の夜半になろう」

「朔、ですか、」

「ああ。月は眠り、流星らが被い清めを終えた道を、いよいよ、その王が渡る、」

「王、」

「だが、それも遙か彼方の出来事だ。何も起らぬとは思つ、がな、」

その背に座り直した。

心得たもので、大狗は立ち上がり、

「都守のお屋敷に、寄られますか？」

「水氣に火氣、拳句に冥府の匂いが入り混じる節操の無い屋敷になんぞ、足を踏み入れられるか、」

「左様で。では、」

町並みを遙か眼下に、跳躍。

風に長い髪を巻き上げられながら遙絃は、

「この都が奏でる音色、なかなかのものだったぞ、」

見る見る遠ざかる千年杉の頂を見つめ、誰に言つても無く、呟いたのだった。

後宮、蓮華舎。

夜の帳に抱かれ、ひっそりと静まり返った社殿に、微かな衣擦れの音がする。

「、、、、、」

背に弓を負い、大太刀を提げたのは、あまへきよちか緋色の戦袍を纏い、豊かな

黒髪を首の後ろで束ねた右近衛府中将、あまへきよちか天部清親。

後宮の見回りを兼ねてだったのだが、

「む、ゝ、」

その鋭い褐色の眸が、闇の中、予期せぬ人影を捕らえた。

庭先に、白い花をつけた小振りな椿、詫助わびすけの木の下。

大太刀に手を掛け、足音を忍ばせて近づけば、

「鳳祥院？」

「わっ、ゝ、」

人影が、びくりと肩を震わせた。

「お、脅かさないでよ。清親」

「御上。恐れながら、このような時分に、いったい何をなさつておいでです？」

跪く友に、よしてくれ、と手を振れば、深い溜息と共に、清親が立ち上がる。

声を潜めて、

「休めないのか？」

そう問えば、相手は子供のように肩を竦めてみせた。

「いやね、こうして自由にできる時間がないだろう？ここの女御達は皆、聞き分けが良くてね。その好意に甘えて、何も考えず夜空を眺め、花を愛でていたところさ」

終始、傳かすかれる身だ。

物心ついた頃より、緑豊かな仙洞暮らしが長かったせいもあって、こうして草花に触れる時間は、何より心が安らぐ時間なのかもしれない。

清親は、肩から長く掛けていた銀狼の毛皮を、階に腰を下ろしたその人の肩に掛けてやった。

「あ、わたしは平気だよ。寒くないから」

「いいから」

清親のすっかり骨ばった手が、その肩を押えた。

「御身に障りでもしたら、蓮華舎の女御達の面目、丸つぶれだぞ」

「それも、そうか、ゝ、」

手の下で身じろいだその肩は、以前に比べると成長期を迎えた青

年のものであったが、変わらず肉が薄かった。

背もすらりと伸びて、

皆に、追い抜かれてしまったな

けして背が低い方ではないのだが、それがなんだか少し寂しく、  
思えた。

傍らに在る女丈夫の、そんな胸中など露知らず、

「本当はわたしがあなたにしてあげなくてはいけないのに。自分の  
気の回らなさに、嫌気がさすよ」

「気にするな。勤務中だ。それに私は、お前と違って風邪などひか  
ん」

「右の鬼中將には、かなわないね」

鳳祥院は、自分の隣りに座るように、叩いた。

首を振る、清親。

その袖を掴んで、

「清親」

鳳祥院が見つめてくる。

穏やかな眼差しの奥に、強い星の輝きを宿す、眸。

胸中に湧いた細波など、その眼差しの前にあつては、

「ね？」

「、、、、、、」

すっかり凪いでしまう。

幼馴染なら、誰でも知っていることだ。

辺りに誰もいない事を確認して、清親は渋々腰を下ろした。

夜風が肺腑に冷たく、体にしみ込んでゆく。

凜と、それでいて甘く鼻腔を擦るのは、闇の中、可憐に揺れるあ  
の詫助だろう。

夜風に揺れる、その白き花。

移ろう日々の中、草花に眼を止めたのは、いったいどれくらいぶ  
りだろう？

「、、、、、、」

それまで夜空を眺めていた鳳祥院は、清親の顔を眺めている。平素はそこに居るだけで張詰める空気が、今はない。

童女が見せるような、清親の無防備な、その横顔。

鳳祥院の腕が、そっとその肩に回った。

「む、む、」

身じろいで、互いの肩が触れ合った。

すぐに離れた、手。

左肩を見れば、銀狼の尾が肩に長く、流れていた。

振り向けば、すぐ鼻先で、

「このほうが、暖かい。いいだろ？じきに褥に戻るから、」

鳳祥院が、子供のように笑って言った。

「まったく、」

呆れたように額を揉んだが、それっきりだった。

声を掛ければ、穏やかなこの時間も、去ってしまうような、

そんな、気がした。

「、、、、」

「、、、、」

ぼつぼつと星が流れ、細い雲が行く先を、無言で二人の眸が、追う。

けして交わる事の無い、互いの道。

触れ合ったままの、肩。

布地越しに伝わるその体温だけが、今を共に生きる者の証。

チヨ・・・チヨツ・・・

どこかで、夜鷹あかつきが啼いている。

夜は長く、暁は、まだ遠い。

第拾ノ巻幕中ノ前

夜鷹

(後書き)

この話で、

「あああ（＊・＊）???！天女つて、まさか、ゝゝ、」

伝わると、書き手は少し、嬉しかったり。。。　（・＊－＊、）

本編はあくまでファンタジーだが、実際、自身の経験に基づいて書いております。ほんの少しの靈感と第六感で、ね。。。　

もっとも、お稲荷系とは、正直反りが合わないのだけれども。。。

第拾ノ巻幕中ノ中

朔

(前書き)

百余年に一度の【星の御渡り】。その夜、いつものように屋敷を  
抜け出した悠霧と伯は、

死人還りの都守蒼装、業丸を継ぐ武官燕倪、幽身であるがこの世  
に縛られた伯。それぞれが紡ぐ異国絵巻、第十一幕中の中編。。。

「ほあ」

仰向けに寝そべって、右手を伸ばしている。

陽光に透けた体から、虹色の輝きが毀れ、伯は眼を細めた。

今、伯の指先を含んでいるものは、不可視の神霊であり、鬼でもある。

そして、まだそのどちらとも言えぬ、姿を定められぬ【脆弱なるもの】。

「、、、、、、」

それを、手にとつて眺めている。

陰陽寮に隣接する、星読寮の一室。

星読頭、博士の書斎よりさらに奥。

平素、人の出入りも無いここは、秘文の間へと至る回廊にある、代々の都守が詰所。

御簾は下ろされたまま、室内は薄暗く、閑散としている。

先代都守が在りし頃は人の出入りも多く、人柄がそうさせるのか、忙しくも賑やかだったようだが、今となつては見る影もない。

掃除は行き届いているのだが、どこか無機質で、空気も張詰めている。

「、、、、、、」

それが、返つて伯には好ましい、らしい。

星読頭も博士らも、いつかの稲妻によつて、破壊された秘文の間を形式通り守り続ける衛士らさえも、都守の式神と言う手前、眼を瞑っているようで、摘み出されるような事もない。

それもあつて、隙あらば陰陽寮を抜け出し、この一室に入り込んでいるのだ。

今日は、回廊の真ん中に寝そべり、ひなたぼつこの最中、軒先を這うこの生き物を見つけた。

珍しくは、無い。

今まで、幾度となく這っているものや、飛んでいるものも、見ている。

たまたま手に取っただけだったが、改めて見るといろんな発見があるものだ。

伯は手を這う冷やりとした感触を愉しみながら、それを床へ放した。

「ああ、、、」

それまで、緩慢な動作で指先にあつた白い輪郭を持つそれは、野兎のように跳ね回り、回廊を星読寮の方へ。

ふいに、白く大きな雲が太陽に掛かり、辺りが薄暗くなった。

それまで遠ざかるその動きを追っていた伯が、一瞬眼を離して空を見上げ、

「あ」

半身を起こした。

「ぬっ」

短い声に続き、霧散した、虹色の輝き。

伯は、駆け出していた。

「お、いたいた。帰るってさ」

水干の袖を翻し、足音をさせずに駆け寄ってきた伯に、悠霧は声を掛け、

「うう、、、」

「、、、、、、」

今まさに、【脆弱なるもの】が霧散した床を見て沈黙するその様子に、手を揉んだ。

「あ、悪い。向かってくると、つい、、、その反射で、手が出ちまう」

「、、、、、、」

沈黙に、たまらず両手を、後ろへ回した。

「何だよ。仕方ねえだろ？俺の爪、勝手に被っちゃうんだから」

「、、、、、、」

伯は、じつと床を、見つめている。

その姿に、さすがの悠霧も、

「お前みたいに、俺はやたらに触れないんだ」

取繕おうと、する。

桃色の健康そのものの、己が爪。

鋭く伸ばしたままなのは、その方が振るう際に都合が良いからだ  
が、

「、、、、、、」

「っ、、、、」

伯の眼差しを受けて、この時ばかりは拳に仕舞った。

漆黒の眼差しが、ひた、と悠霧の顔を見上げる。

マジで、怒ってやがる、、

ギリ、と噛みしめた奥歯が、鳴った。

能面のように表情希薄な、伯の貌。

それが返って、

「人や動物が、大丈夫だって分かっているけど、怖いさ。もし、大事な人まで消えちゃったら、って、、」

悠霧の胸中を吐露させた。

「なんで、こんなの、持って生まれちゃったんだろうな、俺。こんななけりゃ、、」

語尾が、掠<sup>かす</sup>れた。

考えないようにしてきたはずなのに、、

何がかっかけになるのか、知れたものではない。

腹腔深くで擡げる、劣等感のような、蟠り。

悠霧は、たまらず額に手を当てた。

劣等感の矛先は他でもない。

いつだって己自身に、刃を突きつける。

それ以外の矛先を、悠霧は知らなかった。

己が前髪を、力任せに握り締めたところで、

「、、、、、、」

伯の手が、成すすべなく、だらりと下げられたもう一方の手を、取った。

「お、おい、、、、」

そのまま、顔の横に持つていくと、

「、、、、、、、、」

その手を頬に、押し当てた。

ひやりとした肌に、爪先が、当たる。

「やめるよっ」

思わず引こうとしたが、

こいつッ

伯の漆黒の眸はまっすぐに悠霧を見据え、その手首を凄まじい力で引き止める。

底知れぬ何かが、今、目の前に居る。

幾度と無く、鬼や化生と遭遇し、その都度死地を潜り抜けてきた悠霧が、胸の辺りから腹腔にかけて、冷たいものが下がつてゆくのを感じていた。

「、、、、、、、、」

「、、、、、、、、」

逸らせない、視線。

まんじりともしない、二人。

流れ雲が太陽を隠し、薄闇に染まったと思えば、また乳色の陽射しに包まれる。

その繰り返し。

瞬きも赦さぬ沈黙が、

「悠霧、式神殿に、何をしているのです？ 帰り支度、まだ済んでいないでしょう？」

聞き慣れた若者の声に、破られた。

「きいいすう、、、、」

伯の手が離れると、傍らを音も無く駆け出して行く。

その背を追った悠霧の視線の先、伯が振り向いて、  
くわッ・・・

と牙を剥いた。

まるで、

『その爪が、なんだと言っただ？』

とても言いたげな、挑発的な仕草。

悠霧は、己が爪を、まじまじと見つめた。

やられた、、

無慈悲なまでに万能だと疎ましく思っていた悠霧は、その実、被えぬものもあるのだと、痛感させられたのだ。

だが、どうだろう？

胸中に沸く、この想いは？

自然、足が、その背を追う。

「偉いですねえ、式神殿は。さ、お世話になった星読寮の皆さんに挨拶を済ませましたら、屋敷に甘いお菓子を用意させてありますからね？」

「ん」

稀水の前、一足先に駆け寄った伯の元へ。

華奢なその背中を、

「やつぱ、お前はすげえやッ！！」

「うぐ、、」

「いきなりなんなんです、悠霧？！」

稀水の悲鳴じみた声音と、当人の呻き声を他所に、悠霧は力一杯抱きしめた。

「俺が見込んだだけあるぜ、伯。ますます、お前が欲しくなったッ」

「ぎぎゅ、、う」

「わけのわからない事をッ！！とにかく、放しなさい。嫌がついてるでしょう？」

「嫌だね」

「まったく、、」

一度は呆れて言葉を失った稀水であつたが、

「なら、あなたも一緒に来なさい。いいですね？」

「ちよつ、、、何で俺までえッ」

「都守の式神殿と一緒にいたいのでしょう？それなら、つべこべ言わない」

さすがに扱いに慣れてきたのか、悠霧の首根っこを掴んで、元来た道を戻り始める。

長い廊下を、賑やかな足音が遠ざかつて行く。

再び訪れた、静寂。

無人となつた回廊に風が巻いて御簾を揺らせば、なんとも淋しげな乾いた音が、からからと響く、星読寮が最奥の間。

二胡<sup>にこ</sup>が、鳴いている。

帝都南西。

裏鬼門に在る、都守の屋敷。

いつにも増して今日は、どこか閑散としていた。

異相の使い女、汪果が弓弾く二胡が、もの哀しく、鳴いている。

「、、、、、、」

大池に面した濡れ縁にて、闇色の長衣を肩に掛け、酒が残ったままの杯を片手に、

「、、、、、、」

蒼装は、銀の髪<sup>しろがね</sup>を垂らし、青銅で造られた古い水盤を眺めていた。太陽は、西の山稜の向こう側へと吞まれ、空は、藍色を滲ませてようとしている。

そのまま彫像にでもなってしまったかのような時間が、流れていた。

「、、、、、、」

白い織手が、水盤の縁に掛かった。

赤銅色の一番星が煌いて、鏡のように凪いだ水面に映っている。

その手が開かれると、柳の細葉が滑り出し、幾枚も水面に浮かび、

ゆらゆらとした。

刻まれた波紋に、水面に映っていた一番星が、ぶれて、消えた。

捉えた、  
、

蒼装の闇色の眸が、眇められる。

それまでであったはずの水盤の底は闇色に塗りつぶされ、柳の細葉の向こうに、幾つもの星々の輝きが、窺えた。

空には変わらず、一番星のみ。

しかし、水盤の中には、既に幾つもの星が瞬き、さながら小宇宙ではないか？

水面でゆらゆらとたゆたう細葉は、そのまま、舟。

水盤に形成された小宇宙の中に、輝きが、流れた。

それは銀系に似て、一本、二本と、その数を増やしていく。

縦系に、横系が交錯し、<sup>はし</sup>奔る。

暮盤目状に編まれてゆく、糸。

ゆらめく細葉、沈む細葉、中層で浮遊したままの細葉。

それらを足掛かりに、張り巡らされる、その姿。

まぎれもない、帝都。

だが、いったい、どうやって？

眼を凝らせば、数匹の水蜘蛛の姿を、微細な銀系の先に見つけることができるだろう。

程無く、水盤の中に築かれた、銀系の帝都。

蒼装は、青い唇の端を、咬んだ。

艶々と赤紅の珠が結ばれると、

つつ・・・

青白い肌を滑り落ち、細い顎先から、水面を穿つ。

闇色の眼差しは、

「、、、、、、」

水盤に注がれたまま、だ。

いったんは滲んだ血の珠が、銀系の一端に触れてその姿を保つ。  
星々が、輝いた。

それを待つていたかのように、

血の珠は銀糸を伝い、滑るようにして動き始め、

「、、、、、、」

闇色の眼差しの中で、ある一点を差し示す。

それを見届けると、蒼装は懷紙で顎先を拭い、空を見上げた。

いつの間にか、星々が瞬いている。

二胡の音が、止んだ。

汪果の視線の先で、蒼装の長身が立ち上がるところだった。

「主様」

弓を置いて声を掛ければ、

「出掛ける、、、、」

うつそりと、どこかを見つめたままで、応じた。

「では、すぐにお召し物のご用意を」

汪果も心得て、すぐに母屋の暗がりへと消えて行つた。

汪果に続いて蒼装も、几帳の向こう側へと消え、大池に面した濡縁には、底に細葉を沈めた何の変哲も無い水盤と、なみなみと酒を湛えられたままの杯が、取り残されている、、、、

朔。<sup>さく</sup>

月の無い闇夜に、生温かい風が、吹き抜けていた。

こんな夜は、一様に門扉を堅く閉じ、人々は恙無く太陽が昇るのを待つ、そんな夜であつた。

数匹の野犬が、大地に鼻を擦り付けながら、歩いていた。

物欲しげな顔で、獲物を探して。

「どいつもこいつも、子供扱いしやがつて、、、、」

苛立たしげな澄んだ声が、振つてきた。

日中、ここぞとばかりに星読寮にて、散々頭を下げさせられた悠霧である。

オンツ・・・オンツ・・・

牙を剥くその鼻先で、銀の輝きが瞬いた。

キャワンツ・・・

クウウウ・・・ン・・・

尾を腹の下に仕舞い、駆け出す野犬が居たその位置で、

「つまんねえよな。なあ、伯？」

塀から飛び降りた悠霧が、言った。

「、、、、、、」

面倒な様子で塀の上でしゃがんでいるのが、ゆったりと束ねた黒髪を、背に長く流した伯である。

琲瑠が去ったのを見計らい、まさに稀水の屋敷を抜け出している最中であつた。

「あふ、、、、」

大きく生あくびを繰り返し、そのまま片肘ついて寝そべってしまったのを、

「ホント、どこでもすぐ寝るなあ、お前。起きろよ、ほらッ」

「によああ」

悠霧に腕を引かれ、転がり落ちる。

猫のように体を反転させ、大地に手をつけば、

「へ、、、、臭う臭う。今日のはでかいぞ」

傍らで、眼を凝らす悠霧。

風が囁き、本能が、告げる。

渦巻く瘴気が、後頭部で彩を纏い、誘う。いざな

「あつちか、、、、」

「、、、、、、、、」

そのまま伯の腕を取ると、闇夜の中へと、駆け出したのだつた。

「主様、烏帽子がまがつています」

屋敷の若衆、籐那の声に、

「はああ、行きたくない、、、、」

父が寄越した、牛車を前に渋っているのは、燕倪。

見合いにと、話をつけたとある姫の元を訪れるためであつたが、

「お逢いになるだけでしたら、そんなに、、」

「何が嫌だってな、烈也が父上に耳打ちしたつてのが気に食わん」

「かといって佐築の姫のお屋敷に伺わなければ、左大臣さまのお顔に泥が、、」

「むうつ、、」

脳裏に浮かんだおやかな顔は、誰の貌か？

籐那にも、容易に見当がついたが、それとこれとは、さすがに別問題。

なんとか、待たせている牛車に乗ってもらわねば、と言葉を選ん  
でいれば、

「あ」

往来に、白々とした人影が現れた。

往来の者達も、道を開け、遠巻きに眺めるその人は？

「ん、、？」

籐那の視線に、眼差しを向ければ、

「蒼装」

白い髪を背に長し、錫杖片手に、雪色の袍。

はなだ  
縹の長衣を羽織つて、深紫の布を首に巻いている。

「ああ、燕倪か、、」

こちらに気づき、一瞬立止ったと思ったら、すぐにまた歩みを出した。

「ああ、つて、、」

燕倪の視線が、素早く辺りを窺った。

そのどこにもやはり、伯の姿が、無い。

屋敷の前を通り過ぎたその背に、

「どこ行くんだ？」

つい、いつもの調子で、声を掛けてしまった。

「決まっておろう。警邏だ、、」

「、、、、」

嘘をつけ。そんな事、率先してしたためしがなかっただろう！

？

言葉を失った燕倪を他所に、

「では、な、な、」

遠ざかる、白い背中。

「うつむ」

腕組みで呻いた、燕倪。

その人の、言葉。

警邏。

「主様、な、」

籐那の不安げな眼差しと、散々待たされている牛追い童と供人の、どこか縫るような眼差しが交錯する中、当人は、

「むむむ」

その背が遠ざかる程に、冬眠明けの熊のように、うろつろ、そわそわ。

「ッ」

彼方の闇に紛れてしまう、その前に、

「その警邏、俺も行くぞッ」

「あ、主様ッ」

烏帽子を籐那に押し付けると屋敷に駆け込み、刀架に掛けられた破魔の大太刀、業丸を掴んだ。

「主様、よくお考えになつてくださいよおっ」

「すまんっ」

いてもたつてもいられぬ性分で屋敷を飛び出すと、その人の姿を探し、追いかけた。

先の角を曲がったところで追いついて、

「行くのか、な、？」

うつそりとした声音に、迎えられた。

いつものように傍らに並び、

「おう。業丸が要りようになるかもしれんだろ？」

「そうか、な、」

応じたその青い唇が、薄く笑ったような、、？

それには気づかず、

「で、どの辺りに？」

夜気が吹き込む襟元を、掻き合わせつつ、尋ねた。

「御所の真西。ト占で、少々気掛かりな卦が出てな、、」

「気掛かり、、」

「羅<sup>ろ</sup>？の影が、落ちる辺りで、、」

「妖星か?!」

「安心しろ。妖星でも、他の星に近づくもの。朔<sup>さく</sup>と言うのに、星々の輝き受けたその影が、この都に落ちるだけだ。観測にも引つかからぬ、とるに足らぬ彼方の星よ、、」

「どうなる？」

「闇夜に落ちた影とは言え、妖星の一部に変わらない。吐き出す瘴気で、あたりの雑鬼どもが多少活性化するくらいで済むだろうが、

一応、な、、」

「影、、」

蒼装は空を見上げた燕倪の、溜息を聞いた。

「空の高み、彼方の妖星の影にも、気に止めねばならんなど」

「なんだ、、？」

鬱々と一瞥だけを寄越した蒼装に、

「いや。気苦労が絶えんな、お前も」

しみじみと、燕倪が言った。

「ふん、、」

どこか惘然とした表情で、白い息を一つ吐くと、うつそりと足元を眺めた。

じり・・・

草履が、土に擦れる、音。

釣られた燕倪も視線を落とせば、

「どうした？」

夜露に濡れた大地が、黒々と在るだけだった。

「急ごうか、燕倪、」

蒼装の歩みが、速まった。

「おい、なんだってんだよ」

「影が、ざわめき出した、」

「影って、」

影の無い、新月の夜。

いや、この夜にあつて、大地に落ちる暗闇は全て影なのかもしれない。

「刺激は、禁物、」

燕倪の傍らを、

「過信も、な、」

意味深な呟きが、通り過ぎていった。

「あふあ、」

眠気に、つやつやと濡れた漆黒の眸が、見つめる先。

華奢な少年の水干の袖が舞うようにはためて、その指先に触れて四散する極彩色の雫が、雨となって辺りに染みを作っている。

それは、ここしばらく伯にとって、見慣れた光景であった。

漂う死臭に、瘴気。

袂で鼻先を覆うと、伯は観念して築地塀の上に、寝そべった。

腹の下で感じる土壁の冷たさに硬さが、疎ましくも忌々しいが、帰ると言い出したところで、相手は聞いてはくれないだろう。

一度、ぐつと猫のように腕を伸ばしてみたものの、気だるさが、体から抜けきらない。

ようやく鳴り止んだ、【星詞】。

それなのに何かが、引っかかってならない。そうだ。

これは、予感。

「ん、」

瞬きを繰り返すと、辻の暗がりから、

ゾゾ・・・ゾ・・・

抜け出す、雑鬼達。

漂う瘴気に触発され、塀の影から、屋根の上から、木々の梢からと、あちらこちらで、こちらを窺う視線を、感じる。

こり・・・こりこり・・・

同胞の血肉を、齧るものまでいる。

普段は日中、木の葉の影や家屋の床下で、人や動物の姿に怯えてじっとしているもの達までもが、牙や爪を隠さず一様に、悠霧の細首を狙っている。

頸の後ろにある頸口けいこうから入り込み、無防備な内臓に巢食い、あるいは食い破る時を、窺っているのだ。

もつとも、これらが束になってかかってきたとしても、悠霧が倒れるとは思えなかった。

その手が翻るごとに、伯の目には、光の帯が奔って見えている。人並み外れた瞬発力は、掻い潜ってきた死地の数だけ研ぎ澄まされてきたものだ。

ひとつ、ふたつ、、むつつに、ここつつ。

枝を揺らし、大地を蹴って、群がるようにして跳び跳ねたのは、【棘在るもの】、【牙鋭きもの】、【ぬめらかなるもの】や【目多きもの】などなど。

「おせえよ」

短く吐いた吐息に続き、開かれた十指が空を、斬る。

色とりどりの火花が散るように、砕けるのは、今まさに飛び掛つたもの達の慣れの果て、であつた。

そんな事を、悠霧はほぼ毎晩、繰り返しているのだ。

まるで、何かを忘れんとしているかのように。

いつもの事で、この界隈の悪鬼や雑鬼、怨鬼らが湧き続ける限り、悠霧はその手を休める事はないだろう。

「、、、、ん」

伯は、腕に頬を預け、眼を閉じた。

悠霧についてきたはいいが、稀水の屋敷、都守の屋敷、共に、帰る口実が見つからない。

考えれば考える程、重く沈もうとする、意識。睡魔に全てを委ねようと、細く息を吐き出し、

「、、、、、、」

ヒタ、と、何か冷たいものが足首に、触れた。

そのまま絡みつく、蛇に似た、感触。

重い脛を押し上げ見れば、赤黒い【触手のようなもの】が、蠕動を繰り返しながら、双頭の鎌首を擡げ、青い舌先をちろちろと覗かせていた。

くわッ

伯の犬歯が、剥かれる。

今にもこぼれんばかりに見開かれた漆黒の眸が、ありありと憤懣を湛え、赤味がかつたと見るや、

パンッ・・・

軽やかな音を立てて、【触手のようなもの】は、存在した証すら残す事を許されず、消失。

さらに

「、、、、、、」

今ので、睡魔もどこかに隠れてしまったらしい。

緩慢な動きでもって上半身を起こすと、

「、、、、、、」

伯は足首を擦りながら、塀の上に座り直した。

「はふ、、、、」

小さな溜息が白く、可憐な朱鷺色の唇から、こぼれた。思い返せば、ここしばらく、こんなことばかり。

騒がしく、まったく碌な事が、無い。

もう一つの溜息が、喉から迫り上がったところで、

「い、、、、あぁあッ」

イイイ・・・イ・・・ン・・・

伯は耳を、押えた。

頭蓋にわんわんと響き渡る、耳鳴り。

その音は、どんどん大きくなり、

イイ・イイイイ　　ッ

「ああッ」

小さな悲鳴虚しく、それは、落ちてきた。

音となって。

影となって。

大気が、震えた。

刹那、体から魂が押し出されるような、ぶれが生じ、伯は己が肩を抱いて耐えた。

「ッ」

固く閉じたはずの瞼に、無数の小さき光が、描かれる。星だ。

暗く沈んだまま、軌道を違える事無く廻り続ける仄白い、巨星。

蒼々と光を放つ、星団。

極彩色の蝶の羽状に広がった、星雲。

闇よりも暗いガスを吐き出す、暗黒惑星。

爆発と燃焼を繰り返し、燃え盛る、恒星。

それらが、近づいては、遠ざかって行く。

伯は、眼を開けた。

イイイイ　　、イイイイ・・・ン・・・

「あ、、、」

音は、去っていた。

先程までの平穏が、静寂と共に戻ってきた。

咄嗟に見上げれば、夜空の遙か彼方を、長く白焰の尾を引く彗星

がひとつ、流れて消えるところだった。

嫌な汗が、額から頬を伝った。

ぶつきらばうに袖で拭い、伯は視線を落とした。

辻の真ん中。

「、、、、」

大地に巨影が、黒々と蟠っていた。

月の無い、闇夜よりもさらに暗き、影。

その中央では、悠霧が、蹲っている、、

楮で束ねられた、黒髪。

その髪が、逆立つような感覚に、

なんだッ?!

悠霧は袖を返して、天を斬った。

そのつもり、だったが、

「くっ、、」

その時には、既に、吞まれていた。

空より落ちてきた星影は、【星詞】であり、【かなしうた】。

大地を擦り抜け、そのままこの星を抜け、無限なる宇宙を永劫に

彷徨うはず、だった。

それが、悠霧と言う人の子の真上に落ち、今、大地に蟠っている。

悠霧は、大地に膝を付き、耳を押えるしか、出来ずにいた。

イイイイイイイ

ッ

体中で、音が鳴っている。

骨が、、

筋が、、

細胞が、、

悲鳴を、あげている。

肉体が、精神が、分解と再構築を、繰り返している。

自身では到底太刀打ちできぬ、絶対の力に見透かされ、奏でられている。

ゆつくりと、緩慢にして、それは脳天から眼窩の奥、鼻腔へと下り、喉から胸へと落ちて行く。

脳裏に流れ込んでくるのは、幾千幾万の星々。

燃え盛る炎の塊は太陽だろうか、その記憶がどつと押し寄せ、かくも美しい世界にしかし、悠霧は吐き気を催した。

人知の範疇を遥かに凌ぎ、美しすぎて、、

「あ」

やがて、足の爪先から大地へと巨影が抜けると、音は鳴り止み、同時に悠霧はそのまま地に伏した。

「う、、」

実際は、ほんの十数秒の事だったが、永遠の長さにも感じていた。

全身を襲う脱力感に耐え切れず、心身共に放心状態。

それも束の間、

「は、、あ、、」

その身は大地に沈み始める。

「、、、、」

築地塀の上。

伯が、食い入るようにして眺めているもの。

それは、大地の深みへと浸透していくかのように吸い込まれて行く巨影と、その影と共に呑み込まれんとする、悠霧の姿。

このままじゃ、呑まれ、る、、こいつにッ

悠霧は、重い体にそれでも力を込めようとして、

くそっ、、

既に下半身を大地に呑まれている事に、奥歯を噛みしめた。

力を込めようにも、体が言う事を聞いてくれない。

こんな事は、初めてだった。

胸元まで呑まれ、肩を揺すって抵抗を試みた視線の端で、こちらを眺める視線と、ぶつかった。

「は、く、、」

まさに、巨影に呑まれようとしている所であったが、

「、、、、」

伯は、築地塀に腰掛け、足をぶらぶらとさせながら、その様子を眺めている。

思い起こせば最初から、苦戦を強いられている今も、その傍観の姿勢が変わることは無い。

くっ、、、こいつ、、、っ

恨めしげに睨んだ所で、どうしようもない。  
分かっている。

相手は、神霊。

それも、契約で縛っているわけもなければ、手を貸す義理もない。  
ここしばらく、無理我儘を言って、悪戯に追い掛け回した相手だ。  
思い起こせば、己自身もこの程度の扱いだったと、今更になって  
悠霧は思った。

珍しくしくじって、被うはずの鬼に体内に巢食われた時、寺の者は悠霧を、まるで腫れ物に触るかのように、土蔵に隔離した。

ずたずたに引き裂かれながらも、なんとか調伏に成功したのだが、  
土蔵の門扉が開かれる事はなかった。

永遠とも言える孤独と、待ち構える、死。

そして、闇。

その中で、朽ちるはずだった、命。

ああ、そうか、、、

望んではいけなかった。

鬼や神霊の声に耳を傾ける事無く、力任せに調伏を続けた道具にも等しい己に、居場所なんぞ、、、

俺は、、、必要とされなくなった時点で、消えるべきだったんだ、、、

闇に吞まれてゆく、体。

いや、同化してゆくのか、、、

それとも、還ってゆくのか、、、？

闇の侵蝕が、始まっていた。

取っ掛かりを求め、掻いていた手が、

沈んでゆけ。二度と浮き上がる事など、無いように、  
それを、やめた。

鼻や口に、とろりと生温かいものが入り込んでくる。  
胃の腑に落ちれば、体内で暴れ周り、いつかの激痛と共にこの身を食い荒らす事だろう。

そして、何も、感じなくなる。

幾度と無く、足元に広がる闇との闘ぎ合いを経験している悠霧は、それを、知っていた。

多くの彷徨える幽鬼を、問答無用で引き裂いた痛みを思えば、相応しいのかもしれない。

なんだろう、気分がいいや、

妙な充実感が、今、胸中を占め始めている。

いつまで経っても訪れぬ痛みに代わって、包み込んでくるぬくもりに、その人の名を思い出した。

実敦様、

目頭が、熱くなった。

堪らず、眼を瞑ったその耳に、

「簡単に、諦めるんじゃないやねえッ」

腹腔を震すその太い声は、届いただろうか、

時は、それより少し前に、遡る。

「まずいんじゃないやねえのか？」

先の辻から、一部始終を眺めていた燕倪は、振り返った。

「、、、、」

築地塀に背を凭れ、懷から取り出した小振りな瓶子でもって大地に黒い染みを作っているのは、蒼装。

二人が駆けつけた時、星影は悠霧の真上に落ち、その広がった巨影に構わず踏み込もうとした燕倪を、蒼装が阻んだところであった。染みが広がるにつれ、悠霧を呑み込みまんとする巨影は、今、収縮を始めている。

ピ・・シヨン・・・

どこかで、水が跳ねる音が、聞こえたような気がした。

「応えた、、、」

蒼装の小さな呟きよりも、燕倪は目の前で起きている事態に気を取られている。

眼を凝らせば、伯があくびしているのが見えた。

「おい、伯も、動かんぞ」

「あれでも、相手を選ぶでな。神霊と言うもの、闇雲に使役せんとする者に、その心は開かぬよ。第一、その自尊心が赦さぬ、、」

「あいつ、悠霧がやられそうだったのに、なんとも思っていないって言うのかよ」

「顛末に、興味はあるようだがな。あの位置ならば、その力は及ばぬ。確かに安全圏には違いない」

「傍観かよ。趣味を疑うな。お前に似てきたんじゃないのか？」

横目に睨んでも、皮肉の矛先蒼装の表情に、変化は微塵も窺えない。

「それどころか、

「今、星影を、私が喚んだこの世の闇に、繋げた。影は、羅？星より放たれたもの。どこに出ても、影はそこから再び天へと還り、無限の宇宙を彷徨い続けるだろう。何故だと、問うなよ、燕倪。そういうものなのだ、、」

「う、、、、」

返って、黙られた。

「人は、大地に縛られるのが定め。取り込まれたまま、宇宙を彷徨うような事は、万に一つもない」

「本当だろうな？」

燕倪が、堪らず睨んで寄越すのを、

「ああ」

頷いて、かわした。

「しかし、それに気づいていればともかく、伯のあの様子、気付い

ておらん、」

「お、それじゃあ、もし悠霧が別の化生に出くわして、万が一にもって事になっても、」

何も発さず、そればかりか悠霧が吞まれる様を窺う伯の様子に、

あいつが、そんな、

燕倪は、それ以上続けられなかった。

「悠霧が倒れば、それまでだ。何食わぬ顔で屋敷に戻ってくるであらうな、」

「、、、、」

それは、燕倪が今まで思いもよらなかった伯の神霊としての一面でもあった。

こんもりと波打ちながら先の辻へと引いて行く闇の中、もがく悠霧の細い手足が、見えた。

「人も神霊も、その実あまり変わらぬ。礼を尽せば、応えよう」

「ぬつ、、それが出来ないから、伯が助けないと取れるぞ」  
堀に、掛けた手。

力を入れ過ぎたのが、漆喰が剥がれて大地に白い粉をふいた。

そんな燕倪とは対照的に、

「それ以外に何がある、、？」

相も変わらず、伶俐な物言いの蒼装。

「だからって、死んじまったら元も子もないじゃないか」  
唸るようなその声音に、

「何、これは墨依湿原の水。その【点】とを結ぶための【線】であり、呼び水、、」

「はあ?!」

「繋げた先は、墨依湿原だ。あの神通力に、性格だ。運悪く幽世に迷い込んだとて、死人還りになっても、再びこの世に舞い戻ってこようよ」

蒼装は薄笑みを浮かべたまま瓶子をひっくり返し、底を軽く叩いた。

残っていた墨の如き雫が二、三、滴った。

「そう言う問題じゃない。子供相手に、おまえは、」

闇が、大地に吸い込まれるにつれ、もがいていた悠霧の手が、  
「ッ」

見えなくなった。

その刹那、

「があッ！もう、我慢ならねえッ」

見かねた燕倪が、飛び出す。

「踏めば、お前まで呑み込まれるぞ」

うつうつとした蒼装のいつもの声音に、

「うるせえッ」

燕倪の広い背中が短く応じた。

それを闇色の眼差しが見送り、

「、、、、」

その青い唇は、僅かに吊り上ったのだった。

頼りない星々の明かりの中、

なんだってんだよっ、いたい！！

前方の辻に向かって駆けた。

礼を尽くす？！こんな時に、そんな事言ってる場合じゃねえだ  
ろッ

見えなくなった手を追って燕倪は、わだかま蟠る闇に踏み入れ、沈み込む  
場所に、腹這の姿勢で上半身をつっ込んだ。

「むっ、、」

肌に纏わりつくヘドロのような感触に、覚えがあった。

生温いそれは酷くべたついたが、どれも太い腸を思わす帯状で、  
その間に居る限り、呼吸には事欠かない。

「悠霧、おいっ、悠霧ッ」

細かい触手が這いよってくるのを、力任せに振り払えば、  
「悠霧ッ」

取り込まれるようにして、無数の触手に覆われるその姿が見えた。  
だらりと下げられた、手。

どうしようもないきかん坊の姿は、無い。

「！！」

燕倪は、その目に滲んだ輝きを、見た。

全てを諦めた悠霧の、姿。

ぎり、奥歯が鳴った。

「簡単に、諦めるんじゃないっ」

伸ばした、腕。

ゆっくりと沈んで行くその体に、

「悠霧ッ」

たまらず燕倪の足が大地を蹴った。

その後の事など、この時の燕倪は何も考えていなかったに違いない。  
い。

ほっそりとした少年の手首を、燕倪の無骨な手が、しっかと掴んだ。  
だ。

せめて自分の方へと引き寄せようとして、

「うっう、っ、」

どこからか聞こえる、呻き声。

闇へ吸い込まれそうになった左足を、誰かが抱いている。

一人しか、いなかった。

「伯！？」

「うっう、うっ」

「馬鹿野郎ッ、お前まで呑み込まれるぞッ」

悠霧を胸に抱き寄せ、燕倪は脇差を抜いた。

体を支えるために腸壁の如き蠢く支柱に、突き刺そうとするが、

「ぐッ」

真綿の如き感触だけを、残す。

かといって伯に、抱えた悠霧共々、己を引き上げられるとは思えなかった。

「うつつ」

ズ・ズズ・・・

徐々に、体が吞まれて行く。

あの分じゃ、蒼<sup>あいつ</sup>装の助けは期待できない。なら、

「伯」

燕倪の、静かな声音。

低く、大気を振るわせる。

「離してくれ」

「い、いやだっ」

その応えに、

そう言つと、思つたよ

燕倪は、眼を閉じた。

「なら、」

「、、、、」

その次に続く言葉をこの時、伯は待つていたのかもしれない。

青鈍の眸が意を決し、闇の最果てを睨んだ。

「仕方ねえよな」

「、、、、」

こくり、

の次に待つ、

ズズズ・・・

真つ逆さま。

体が、闇の腸壁の狭間へ落ちてゆく。

足首に、しがみつく強い力を、感じる。

ゆっくりと沈んでいたのが、次第に速度を増す。

すぐに、右も左も、上も下も、分からなくなった。

隙あらば取り込まんとする、触手を払い退ける。

「寄るな、叩つ斬るぞッ」

一喝に続き、破魔の大太刀業丸を振れば、その気迫に中てられたのか、星影が一行からみるみる離れて行く。

一方、伯は、

「むむう、、、」

内心、舌を巻いていた。

星影に即発されたせいかわ、何も無いはずの目の前で展開する、映像。

わかつているのは、闇の中、この道に漂う記憶の断片を、拾っていると言う事。

いつの時代とも知れぬ者達が、この闇に足を踏み入れ、そして渡っていった。

そう、それは、この闇が持つ、記憶そのもの。

ユーギリ、、、

鮮明に脳裏に流れてくる映像の中には、若者と少年が肩を並べて歩むものがあつた。

その中でも真新しく流れ込んでくるのは、黒衣を纏った鬼面の男が一人。

ぽつかりと開いた穴の向こうから、注連縄を掛け、祝詞を奏上する姿。

伯は、思わず自由になる手を、伸ばしていた。

「うわッ」

燕倪が、短く声を上げた。

それまで星影を追って落ちていた体が、あえて言うなら真逆の方向へと引かれたからだ。

なんだ？

ついには、視界から消えた、星影。

それは、道が別れた、瞬間でもあつた。

やがて、頬に当たる闇の感触が、水のような質感へと変化を始める。

燕倪は、業丸を鞘へおさめると、悠霧を抱く腕に力を込めた。

もうすぐ、、、

永遠とも思える常闇にも果てがある事を、燕倪の直感は、告げて

いた。

とぶん・・・

闇が、閉じた。

ジリリ・・・

草履の下にある、固い大地の感触。

長い指が、そのまま冷たい大地に、触れた。

「、、、、、、」

望月を思わす金色に染まった眸を、はらはらと流れ落ちた銀系の髪が隠す。

その頭上、高くから影が、落ちた。

伯が、上手くやったか。あれで、好奇心は旺盛だからな。真新しく閉じられたばかりの鬼窟へ出れば、その先におそらくは、、

立ち上がった蒼装が、左腕を伸ばせば、

「まったく、蒼装あやつと違って、義理は無いのだが、、」

力強い羽ばたきと共に舞い降りる、白き大鷹。

覗きこむようにして大地を見つめ、低く喉を鳴らせるのを、

「心配するな。この地は、私が負うた、地。主の元へ、帰れ、、」

再び空に放せば、疲れも見せぬ羽ばたきが、風を巻いた。

うつそりと闇色の眸で見上げた先に、黒々と浮かぶ北東の山稜。

その方角へ向かい、遠ざかる黒い影を、

「さて、少々過ぎた真似をした。急がねばなるまいよ、、」

言葉とは裏腹に、うつそりと見送ったのだった。

## 第拾ノ壱幕中ノ後

隠鬼

(前書き)

、  
、  
大地に穿たれた、深淵。そこは鬼の途。悠霧を追った燕倪と伯は、

死人還りの都守蒼装、業丸を継ぐ武官燕倪、幽身であるがこの世に縛られた伯。それぞれが紡ぐ異国絵巻、第十ノ一幕中の後編。。。

「ぬおおあッ」

突然、放り出されたと思ったら、強か腰を打った。

手を着いた先は、冷やりとした大地。

「何がどうなつてんだが、、ん？」

その膝に、垂れているものがある。

「注連縄しめなわ、、？」

落ちた拍子に外れてしまったらしい。

真新しい稲藁で、作られていた。

辺りを見回せば、前方から微かに明かりが差し込んでいる。

腕を見れば、その肌を覆っていたはずの触手もそっくり剥がれ落

ちたのか、悠霧が眠っていた。

ほっとしたのも束の間、

「ああうっ」

頭を打ったのか、傍らで頭を押えている者が、呻いた。

「大丈夫か、伯？」

「ん、、」

涙を堪えて、伯が頷く。

出てきたと思ったところは、岩と土の壁。

悠霧を背負うと、這うようにして、狭い穴倉の中を上り始めた。

蜘蛛の巣が不快に顔に当たり、行く手を木の根が邪魔をする。

脇差で切り払いつつ抜け出せば、星夜に樹海が鬱蒼と広がってい

た。

「うっ、、」

ぶるりとやったのは、何も夜のせいではない。

うっすらと積もった雪が、大気を凍えさせるのだ。

「おいおい、どこなんだ、ここは、、」

肩を擦りながら辺りを見回しても一面、なだらかな白樺の原生林。

突然の人の出現に、それまで餌を探して歩き回っていた野鼠は巢穴に駆け込み、それを狙っていた梟は音も無く、森の深みへと消えて行った。

迂闊に足を進めようものなら、深く積もった枯れ葉に足を取られる始末。

あてもなく行くのも、とさすがの燕倪も困った時、

「、、、、、、」

伯がふわりと木の枝に舞い上がった。

そのまま、するすると遙か高みへと登って行くことしばらく、

「あ、、、、」

伯が、指を差した。

「灯りか?!」

ふわり・・・ふわり・・・

高みから舞い降りながら、

「、、、、、、」

こくり、、、、

頷いた。

よくよく眼を凝らせば、薄く積もった雪の上、点々と足跡らしきものが続いている。

「お前、ほんと頼りになるな」

「うぐぐ、、、、」

ぐしぐしと力強くその頭を撫でると、いつものように小脇に抱え、足跡を辿るように、伯が見た灯りの方へと、歩き出したのだった。

「言っただろう?人里に降りてはいけないと、、、、」

キギユ・・・

涙目になっているのは、大人の膝ほどにも満たない、一つ目の子鬼。

その枯れ木のような腕を取って、摺った薬草を塗っている者がいる。

「人の子の中には、お前を快く迎え入れてくれる子もいよう。だが、大きくなるにつれ、物事を知れば、歪むものもある」

布で巻いてやると、そつと子鬼の肩を擦った。

「お大事に」

ぺこりと頭を下げ、子鬼が雪の上を走ってゆく。

小さな小さな足跡が、彼方の闇の中へと消えて行った。

燃え上がる炎に、木の枝をくべながら、肩に掛けていた長衣を掻き合わせる。

落ちたその影には、一對の角が、生えていた。

一通り北の地も回った。古の御陵も検めた事だし、そろそろ南へ下ろうか、

ぼんやりと思い出すのは、懐かしい顔ぶれ。

そして、預けたその子の、顔。

達者にやっている、いいけれど、

まだ、半月も経っていないというのに、決心が鈍ってしまいそうになって、頭を掻いた。

指先を、色素の薄い髪が、滑ってゆく。

「、、、、、、」

その手が、止まった。

微かに耳に聞こえてくるのは、人の足音。

人里を遠く離れた、こんなところに？

鬼面の男は、炎を背に振り向いた。

「お、、、、？！」

どこともしれぬ山奥に、赤々とした炎の色。

その心細さも手伝って、つつい足が速まり、

「！！」

焚火を背に立つ、墨色の衣の主に眼を凝らす。

闇の中、ばさらに伸びた色の薄い髪に、

「そ、、、、」

その名を呼ぼうとして、伯に袖を引かれた。

「、、、、、、」

こちらを見上げて、むっ、としている。

そ、そんなはずないよな。それじゃあ、、

よくよく見れば、突き出した一對の角が見えるではないか？

大きく、削り開けられた牙の羅列。

思わず腰の業丸の柄に手を置いたところで、

「君は、、」

その声に、聞き覚えがあった。

「さ、、」

はっとして、口を開きかけたその顔に、

ギキキイイ                      ツ

「うぬぁッ」

頭上から飛びついたものがある。

仰け反ったその顔を引つかいているのが、

「ああ、だめだって言ったそばから、、」

あの子鬼と知って、駆け寄った。

咄嗟の事に宙を掻く燕倪から、子鬼を引き離せば、

「やはり、実敦殿、、」

顔に引つ掻き傷を作った燕倪が、なんとも言えぬ笑顔を見せた。

「すまないね。人の子が投げた石に当たったこの子鬼を、今し方まで手当てをしてやっていたところなんだけれど、、おや、、」

その背に背負われている者を見て、実敦は深紅の眼を眇めた。

「悠霧。これはいつたい、、」

「なんとも俺の方も、どこから話せばいいのやら」

「とにかく、火のそばへ」

斑模様の毛皮を敷いたそこに腰を下ろせば、焚かれた炎によつて、凍えた体が解れていく。

膝に入った伯の温もりが手放し難く、身じろぐのも構わず腕に閉じ込めれば、さすがの伯も燕倪の冷えた体を察してか、

「、、、、、、」

おとなしくなった。

寢床に設えたのか、土を盛って枯れ草を敷いたそこに、実敦は蓑、そして山猫の毛皮を敷くと、悠霧を寝かせた。

深紅の眸が、涙の跡を見つけ、

「、、、、、、」

そつと己の長衣を掛けた。

程なくして、椅子代わりの倒木に腰を下ろすと、

「呑むかい？体が、温まるよ」

炎の側に置いてあつた竹筒を、手渡した。

口に含めば、

「ぐっ、、、、」

喉を、焼く。

「う、、、、なんとも、辛い」

「大陸の白酒だ。（うい、まひい、こは）帝都に出回っている、体を冷やす酒とは違つ」

燕倪から返されたそれを、実敦は受け取った。

一口、二口やってから、

「しかし、何年振りだろうね。随分と背が伸びて、一瞬、誰か分からなかったよ」

数えれば、実敦は三十路を幾らか過ぎた辺りだろうか？

かつての穏やかな口調そのままに、向かいの燕倪を、実篤は鬼面越しに見つめた。

「五、六年は経っていると思います」

「ああ、もうそんなに、、、、」

「先日、悠霧から実敦殿のお話を聞いて、懐かしく思っていた所で、まさか、こんな早くお目に掛かれるとは、なにやら狐にでも抓まれているようで、、、、」

「おれもさ。燕倪」

何も変わらぬ、穏やかな眼差しのその人に、

「あの、そこでつかぬ事を伺いますが、ここは、その、どこら辺で

？」

切り出した。

一瞬、きょとん、とした実敦に、燕倪は事の次第を掻い摘んで語った。

やがて、

「そう言うことだったのか。都守が、」

合点がいったのか、実敦が頷いた。

「君達が出てきた穴は、ちょうど、おれが塞ぎ直した穴でね」

「穴？あの、注連縄が張られていた、」

「この世ではないどこかに繋がっている、なんとも厄介な代物だ。

どうも【とんでもないもの】の通り道でもあるから、その瘴気で中からよく抉じ開けられてしまつてね。百余年に一度の【星の御渡り】もあつたから、心配で離れられなくて、」

小枝を炎にくべながら、

「放つておいてでもして活性化してしまつたら、とんでもない化生が這い出してきてしまう事もある。在来の神霊達も、落ち着かないんだ」

見上げ先、ひっそりと静まり返つた冬夜を占める、深い闇。

深紅の眸には、自由に舞い踊る神霊や精霊の姿が、見えているのかもしれない。

「こうして、時々、見回りに足を運んでいるのさ」

そのために、この国を回っているのだと実敦は言つた。

「注連縄なら、出てきた拍子に、」

なんとも罰が悪そうに燕倪が言えば、実敦は首を振つた。

「それは、大丈夫。恙なく【星の御渡り】も済んだし、何より、そこのおちびさんが、中から浄化してくれたからね」

「んがっ」

指を差された伯が、思わず犬歯を剥いた。

おちびさん、が気に障つたらしい。

「分かるので？」

「都守のこのころの神霊だろ？こんな大きな影を持つ童、人であるはずもないよ」

実敦の深紅の眸には、燕倪には見えない大地に黒々と伸びる巨影が、見えているのかもしれない。

「神が通れば、それだけで浄域には違いない。穴は、内側から閉じられているから、しばらくは心配ないのだけれど、」

少し言いづらそうに、顎に手を置いた実敦。

訝しげな眼差しの燕倪に、

「閉じられたとなると、なあ。都までは、上手く潮と風を捕まえたとしても早船でも、四日」

「四日?!」

「ここは、北部の五百来だ。最寄りの大きな港まで、歩いて三日は掛かる。馬なら、そうだな。山を幾つ越えるか。駆け通して、まあ君でも八日は見ないと、」

改めて、とんでもない所に吐き出されたものと、実感した。そして、

「さすがに、そんなに勤めを空けたら、」

頭の中で、今にも喚き散らしそうな従兄弟の顔を思い出して、燕倪は項垂れた。

顎の下で、伯が窮屈そうに身じろぎ、

「あ」

思い出したのは、いつか遠野から羽琶を連れてきた、事。

「なあ、伯」

「、、、、、、」

夜露に濡れた黒曜石にも似た眸が、見上げてくる。

「お前、化身を解いて都まで送って、、痛ぐッ」

伯の頭突きに、鼻を押える燕倪。

伯は、

「、、、、、、」

腕を跳ね除けると、今度こそ手近な枝の高みへと舞い上がってし

まった。

その様子を眺めていた実敦は、

「神霊に、無理強いはいけないよ。燕倪」

やんわりと、そう言った。

「ですが、」

「本当は、明日にしようと思っていただけだけど、もう一つ塞がないといけない場所が残っているから、そこから送ってあげるよ。あの小鬼が心配で、ここから離れられなかったつてのもあるんだけど、君に飛びかかれるんだもの。もう安心だ」

「はあ、、あの、でも送るつて、どうやって？」

「ああ。墨依湿原は大きくて安定しているから、おれも時々使っているんだ。何か出て来たとしても、君とあの子なら心配なさそうだし、」

見上げた先の、白樺の梢。

仰向けになつてゐる伯の背が、見えた。

「出てくるとか、安定とか、一体何がなんだか、」

炎で橙に染められた、燕倪の彫深い顔。

顎を膝に預けた実敦の、

「手っ取り早く言えば、鬼の途を渡るのさ。君達が渡つて来たように、」

どこか愉しそうな、声音。

「お、俺達が渡つてきたのが、鬼の道？」

そついや、死人還りになるとか何とか言つてたな、蒼装、

顎に手をあて、

「、、、、」

今度は燕倪、黙り込んだ。

「忙しい男だね、君は、」

くすくすと笑いながら、

「不安定な空間同士を、ちょっと繋げるだけだよ。こんな小さな鬼

窟に繋げるなんて事、さすが都守と言いたところだけれど、どうやら、それを成したのは、この子みたいだね」

伯を見つめた。

「お前が、繋げたのか？」

燕倪も、その視線に釣られて伯を見上げたが、

「、、、、、、」

案の定その背中中は、うんともすんとも、言わない。

「まあ、墨依湿原なら、おれも繋げる事が可能だから、安心するといい」

実敦は、褐色の肌をした手を、伸ばした。

傍らで昏々と眠る、悠霧。

「人の中にこそ、お前の居場所があると思ったけれど、、、、」

その艶やかな黒髪を撫でながら、

「結局おれは、お前の事を何も考えてなかったのかもしれない」

溜息が一つ、毀れた。

一度、闇に囚われた者は、呼びかけたところでそう易々と目覚める事は出来ない。

それを実敦は、知っていた。

「軋きしり、、、、」

その呟き。

「お、、、、」

実敦の足元から、闇色の体に、無数の小さな星の輝きを持つ者が、立ち昇った。

ゆらゆらとした、【陽炎の如き者】。

「それは、、式神ですか？」

燕倪がまじまじと見つめれば、

「いや、そのままおれの半身さ、、、、」

実敦が、にこりとして言った。

体が、どこか薄く、透けて見えた。

「ん？」

眼を瞬かせる燕児の足元へ、舞い降りた者がある。  
伯だ。

「んー」

しゃがみこんで、指を差す。

その指先に、

「あ、影が、無い、、、？」

実敦の足元に在るはずの影が、無くなっていた。

「式神<sup>しき</sup>は、どうも信頼がおけなくてね」

「自らの影を、式神として、、、」

そんな事が、、、

絶句したまま、濃い眉を寄せる燕児を察し、

「あまり深く考えるな、燕児。おれが武官の君に言える事としたら、  
自分の眼にしたものを疑うな。それらをそのまま呑み込む事が、森  
羅万象を解する一番の早道さ」

「はあ、、、」

「さあ、それでは急ごうか。さすがにそう長い間、おれももたない  
実敦は、苦笑しながら立ち上がった。

その背に続きながら、

「、、、、、、」

後ろを振り向いた、鈍色の眼差しの先。

これで、良かったんだろうか、、、？

眠る、悠霧の姿があった。

ゆらめく陽炎に守られながら見るその夢は、どんな夢なのだろう  
か？

「エンゲ、、、」

燕児の袖を、伯が引いた。

二人の視線の先で、

「ああ、軋」

実敦が、背中越しに声を掛けた。

「くれぐれも火を、絶やすなよ」

「、、、、、、」

物言わぬ己が半身、影。

それに短く命じると、一行は改めて、白銀の雪原に足を踏み入れたのだった。

白銀の雪が、跳ね上がり、はらはらと大地に舞い戻る。

「あれだけ見ると、まるつきり子供だなあ」

燕倪が、髪に乗った雪を払いながら言えば、

「この世に生まれ出でた喜びを、謳歌しているのさ」

傍らの実敦が、鬼面の奥で、その切れ長の眸を眇めた。

先行する、伯である。

寒さを感じないのか、肩紐は解けかけ、広がった襟からは薄い胸元が、覗いている。

「五感いっぱいに、この世を感じるための器を、得ているのだからね」

「そついえば子供の頃、日が暮れるのを疎ましく思いながら、野を駆け回っていたものです」

かつて、伯のように見るものすべてに興味が湧いた時期が、あった。

「何が愉しかったのか、今となってはもう、思い出せないんですが、、、、」

実敦の手が、白い大地に長く伸びた青き綾紐を、拾い上げた。

跳んだり跳ねたりする伯の黒髪が、今は長く背に流れている。

「おれ達は、いつの間にか当たり前に埋没して、忘れてしまふ。そうして忘れたものの方が、得るものよりも、いつの間にか多くなっていく、、、、」

緩やかな傾斜に、霜を下ろした緑が覗いていた。

窪地の底には、凍りかけた小川が流れている。

「もうあと半月もすれば、ここは雪に埋まってしまっただろう」

膝まで沈みながら沢まで降りれば、苔生し、雪を頂いた小さな木

粹のようなもの。

簡素な作りの、白木で作られた鳥居だ。

その向こうから、ちよろちよると水が、湧き出している。

「伯、、、？」

舞い降りた伯が、そこを覗き込んだ。

岩と岩の間の闇には、光苔の淡い輝きが滲んでいる。

手を、流れる清水に手を伸ばし、

「おやめ。【星の御渡り】で、活性化してい、、、」

「いああッ」

実敦の静止虚しく、仰け反った。

「お、おいおいッ」

「ひぎいい、、、」

崩れ落ちるその身を抱きとめれば、腕の中で指を啜える、伯。

その手の甲から、紅の血潮が、滴った。

「まったく、お前って奴はッ」

懷紙でもって強く押さえれば、白地にじわりと朱が、滲んだ。

くったりとしたまま、虚ろな眼差しの伯を覗き込み、

「大丈夫か？」

「、、、っ」

焦点が合ったのを確認して、小さな安堵の溜息だ。

「無茶するなよ、こんな時に、、、」

燕児の視線の先で、伯は、無事な左手で胸元を寛げ始めた。

薄い胸が覗くと、長く垂れた翡翠の連珠が見えた。

「外すんだな？」

「ん、、、」

燕児の無骨な指先が、勾玉の一つを摘み上げた。

そのまま首から抜いてやれば、黒髪は群青に染まり、漆黒の眸は

董色へと、明ける。

枝分かれした一对の角も異形の、その姿。

「ほう、、、」

実敦の唇から、感嘆の溜息がこぼれた。

懐紙から抜かれた手指の傷は失せ、炯々と光る眸が燕倪を見上げると、

「んっ」

無造作に、腕を突き出した。

「ここに入れるのか？分かったよ」

袖に翡翠輪を入れて、甲斐甲斐しくも襟を合わせ、肩紐を結んでやった。

「ほら、いいぞ」

「ん、ん、」

伯は、燕倪の腕から立ち上がった。

再び、向き合おうとする華奢なその肩に、実敦の手が掛かった。

「だめだよ。ここを、完全に被ってしまえば、この山は死んでしま  
う」

「まう、ん、」

小首を傾げた伯に、視線を合わせると、

「いいかい？長いこと【渡り】をしていて、知り得た事なのだがね。

これは、大地の膿のようなものなんだ」

「膿、ですか、ん、？」

「ああ。溜まった膿は、どこかに出さなければならない。溜め込めば、そこは奈落に堕ちる、ん、」

「奈落、ん、？」

「蝕み、侵蝕し、巢食う、厄介なもの。それが意思を持てば、  
でもない禍神まがつかみともなるのかもしれない。だからここは、完璧に綴じ  
ては、いけないんだ」

「しかし、噴出す瘴気による怪異の心配は無いのですか？」

「程度にもよるが、この程度ならな。それに、この辺りは山と瘴気  
が鬩ぎ合っから、よりいつそう豊かでもあるんだ。一概に全てを清  
め被えとは、言えないのだよ、燕倪」

実敦が、辺りを見回せば、

「なんとも摩訶不思議な、、」

「、、、、」

燕倪と伯も、つられて視線を廻らせた。

うつすらと揺らめく【陽炎のような者達】が、見えたような気がして眼を凝らす、そこには緩やかな斜面が延びているだけだった。「病に遭って、免疫や耐性をつけるようなものさ。ここ以外にも、この国には幾つもそんな場所がある。おれの手にも負えるうちは、これからも世話を焼いていくつもりだ」

「それで、飛び回っておられるわけで、、」  
「ややあつて、」

「、、、、いや」

薄い口元が、淡く笑みを浮かべようだった。

それは、どこか自嘲気味な、笑み。

深い、石榴石の如き眸が、燕倪を見つめた。

「何というのか、、」

鬼面の下。

口元に刷かれた笑みが、少し罰の悪い、そんな苦笑に変わると、

「逃げたのさ」

「逃げた、、？」

「ああ」

骨ばった指先が、ばさらに流れる金色の髪を、抓んだ。

「都にいた頃は、この髪もね、染めていたんだよ。おれの髪、黒かつたろう？」

「、、、、」

「その眸」

覗き込めば、光が入って青みを帯びた鈍色を、さらけ出す。  
まがついろ

「褐色などと呼ばれた君なら、分かるはずだ、、」

「、、、、」

「一度も、疎ましく思った事は？」

「それは、、」

口竈った燕倪に、実敦は浅く頷いてみせた。

「この目も、髪も、肌の色だって、生まれつきさ。天羽の血筋は、代々陰陽道や暦道に精通した家系。その威光もあって、前世は鬼神などと言われ、捉えようによっては箔ともなるが、それが、、なんとまあ、くだらなく思えてね」

「、、、、」

ついには、掛ける言葉も無く、黙りこんでしまった燕倪。

実敦は、構わずその先を続ける。

「返って、さらけ出した姿に恐怖を抱く者達の反応の方が、自然と言うのか、新鮮というのか。それもあって、おれはこの国を行脚しているのさ。あのちっぽけな箱社会から、抜け出たくて、、。」

これは、そのまあ、態の良い口実って奴だ。稚拙だと、笑うかい？」

「実敦殿、、」

「それでもね、思わぬ収穫はあるものだね。こんな姿でも歓迎してくれる人々も出来たし、なによりも、この世は人だけのものではないのだと、知り得た、、」

「そう、でしたか、、」

淡々と話す実敦の口調に、迷いや戸惑いは無い。

どこか晴れやかさすら感じさせる、そんな言葉であった。

実敦は、伯を見つめた。

澄み渡った黎明を思わす董色の眸が、見上げてきた。

「伯、と言ったね」

「あ、、」

その人の手に、長く垂れたものを見て、伯は首の後ろを探った。

やや癖のある群青の髪が、背に流れている。

膝を着いた実敦が、その手を取った。

細い手首に結んだのは、

「この先、【君の道】が途切れぬように、、」

青い綾紐。

「、、、、」

どこか不思議そうに手首の綾紐と、実敦の顔を交互に眺める、伯  
「それは、、、？」

鼻息荒く、ぽっかりと覗いた暗がりに向かう伯を他所に、燕倪が  
尋ねれば、

「おまじない」

実敦のが、人を食ったような笑い声で、応えた。

「おまじない、、、」

呟いたところを、

「っ、、、分かった分かった」

袖を引く手に、急かされた。

「下がっておいで」

懷から取り出されたのは、小振りな瓢箪の連なり。

朱、墨、紺と、漆が塗り分けられている。

その一つ。

墨色の口を外すと、実敦は同色の液体を湧き出し、水が溜まる場  
所に垂らした。

「墨依湿原へ繋ぐ、呼び水だ」

透明な清水が薄墨色に染まり、すぐに

「おお?!」

渦を巻いた。

そのまま風が巻き、ぽっかりと闇色の穴が顔を覗かせる。

「いいかい。くれぐれも暴れるんじゃないぞ。さっきは、上手くい  
つたみたいだけだね。流れに任せるんだ。さもないと、どこに吐き  
出されるか、おれも保障はできん」

「はあ」

淵に立つたつて覗き込めば、

咄嗟とはいえ、こうして改めて見てみると、とんでもないこ  
ろに飛び込みしまったものだ、、、

さすがに渦巻く闇に、躊躇。

足元からじわじわと総毛立つ感覚が、全身を包むまで、そう時間

は掛からないことだろう。

自然、燕倪の手は、大太刀業丸へと伸びた。  
その柄頭に触れれば、

カタ・・・タ・・・

微かに、業丸が鞘を鳴らした気がした。

業丸が、在る、、

全身を呑み込もうとしていた震えは、辺りを占める寒気に変わっていた。

「エンゲ」

耳元で弾けた、澄んだ声音。

いつの間にか背に攀じ登った伯の、僅かな苛立ちをそれを感じ取れば、

「実敦殿、あの、悠霧を、、」

燕倪は、実敦に向かって、申し訳なさそうに頭を下げた。

「ああ、、」

燕倪の事だ。

あの状態の悠霧を残し、ここを去るにあたって、罪悪感があるのだろうか。

まったく、この男は、、鬼窟を渡らんとしているのに、他人の心配か、、

実敦は、思わず口角を上げた。

一步、足を踏み出した燕倪の耳に、

「おれは最初から、頼る相手を、違えたのかもしれないね、、」

実敦の、溜息交じりのそんな言葉が、頭上彼方へと取り残されていくのだった。

足元から吹き上げる、生温い風。

その風圧に、眼も空けていられない。

ただ、凄まじい速度で落ちていく。

肩にしがみつく力が、徐々に弱くなり、

「ぐっ」

燕倪は、業丸を掴んだままの腕を、伯の腰に回して引き寄せる。

一瞬、胃の内容物までも、込み上げるような不快な香りが鼻先をつき、

「つつ」

瞼を押し上げた先に、黒い壁から染み出す巨大な深緑の鉤爪を、見た。

そいつが闇を引き裂いて、出てこようとしている。

総毛立つ、感覚。

風圧に、ひどく眼が乾くの、閉じる事が、出来ない。

不可視の何かで強張った四肢が、落ちてゆく中、盛り上がった頭部のようなものと、切れ目が入った目のような部分が、赤光を放ちながら開こうとして、

「メ、メ、」

「おっ？」

視界を、幼い手によって奪われた。

伯の手によって、両目が覆われたのだ。

「何するんだ、伯？」

首を振る燕倪を他所に、

「、、、、」

伯は、見る。

こちらを見つめ、瞬きを繰り返す、その存在を。

意味を探し、渴望するそれは、

オンナジ、、真名、ヲ、知らヌ、存在、、

「伯？」

燕倪の右脳の後ろ辺りで、伯の声が聞こえた気が、した。  
、、、、

「黙るなよ。お前なんだろ？」

しかし、声はそれっきりで、後は轟々と腹腔を震わせる風の音と、落ちて行く、その感覚。

「、、、、、、」

群青の髪を巻き上げられる中、伯は眼を眇め、吹き上げる風の奥を、睨んだ。

闇に生まれ、闇に囚われた者を尻目に、彼らの道を抜け、  
ピシヨ・・・ン・・・ン・・・

滴り落ちた呼び水が、その奔流を引き寄せる音が、聞こえた。

風の音が、いつの間にか雨音のような水の音に変わった。  
そして、

「む、、、、」

静寂と共に伯の手が離れ、眼を開けば、前方に白い水干が舞い降りるところだった。

「着、いたのか？つて、ぬわっ」

足を取られ、手をつきそうになって気がついた。

膝まで、黒い泥に埋まっている事に。

「あ、、、、」

さらには、濡れた袖を見て、項垂れた。

今日の日のためにと、母が送って寄越した、直衣。

淡い翠の発色も見事な山絹の布地に、銀糸で縫取られた花鳥も、跳ねた墨色の雫によって見るも無残な有様だ。

ま、こうなりや、仕方ないよな、、、、

気を取り直して見回した辺りには、濛々とした霧と薄闇に包まれており、ところどころにこんもりとした瀬と、倒木が窺える。

伯は、すぐ近くの倒木に腰を下ろしていた。

「おい、伯。何か、引っ張るもの、、、、」

調度良い枝などは、無い。

ぬかるむ大地と、いつの頃ともしれぬ巨木の屍。

その、子供の太腿はあろうかという枝を、伯が手折れるとは到底思えなかった。

「その髪紐でもいい。俺を引っ張ってくれないか？」

「、、、、、、」

伯は、手首の結えられたままの髪紐を見つめ、燕倪を見つめる。そして、

「、、、、、、」

ふるふる・・・

首を、横に振った。

案の定のその反応に、

「そうだろうよ」

燕倪、溜息を一つ。

仕方なく足元を踏み固めるつもりで、少しずつ足を抜く事にした。幼い頃、田圃ではまった事を、思い出した。

足が浮く場所を探りながら、地道に瀬に向かう。

けれど、足の下で草履が抵抗となって、思うようにはいかない。

「しかし、墨依湿原に、違いはなさそうだが、いったいどこから出てきたのやら、、、、」

伯によって視界を奪われたために、肝心なところを見逃してしまったような心持だ。

「しかも、こつも暗いと、抜け出す自信もねえな」

草履を諦めれば、ようやく足が泥から抜けた。

袴の裾が黒々とした泥に染まり、足首に纏わり付くのが、ひどく不快。

のろのろと瀬に上がれば、

「あふ、、、、」

あくびをしながら伯が、眼を擦っている。

その隣に腰を下ろし、

「明けるまで、動かず待っていた方がいいかもしれんな、、、、」

生温い、瘴気を含む大気のお陰か、辺りはさほど苦になるような寒さではなかった。

燕倪は、うつらうつらと船を漕ぎはじめるこの童を、鈍色の眸で見つめた。

聞きたい事は山ほどあるが、先ほどのように首を振られて終いだとも、分かっている。

ぼんやりと眺めた先の、墨色の水面。

白い背鰭が、幾つも線を引いて泳ぎ寄っては、去ってゆく。

前方から濃い霧が、渡って来た。

足元から、何かが這い上がるような、毛穴が総毛立つような感覚が、じわりじわりと昇ってきて、

「なんだあ？」

燕倪の手は、業丸の柄へ。

腰を浮かせれば、

くん……

鼻を鳴らせた伯が、いつの間にか燕倪の袖を掴んで、迫る霧の中を見つめていた。

何だが、妙な雰囲気だ、、

前に出ようとする伯を背中に押し込みながら、濃い霧に呑み込まれる。

四方も頭上も、足元ですら、一面の白い靄に覆われ、くすくす……

どこか愉しげな笑い声が、肘の辺りで聞こえた。

伯が手を伸ばし、【おいでおいで】を、している。

「伯っ」

不意に、砂気を含んだ風が吹きつけ、片袖で顔を覆えば、

「ヒライタ、、」

燕倪の背から抜け出す伯の群青の髪が、長く靡いた。

「どこ行く?! おいつ、待てッ」

掴もうと伸ばした指先を、風によって巻き上げられたその髪が、弄うように擦り抜けて、

「たまには俺の言う事も、、」

燕倪はたまらず袖を払うと、吹き付ける風の中へと消え行こうとするその背へ向かい、大地を蹴った。

春の野に吹くそよ風に遊ぶような、伯の歩み。

一方、冬夜の嵐が吹きすさぶその中を行くかのような、燕倪の重い足取り。

指先を擦り抜ける、群青の髪。

はたはたと、靡くその長袖を、

「聞けよッ」

燕倪の指先が絡めるように、捉えた。

ぐっ、と後ろに引かれた伯の体は、そのまま風に弾かれて、燕倪の腕の中へ。

「きうつ」

受け止めた際に、強か、背中を打った伯が呻くのも構わず、その細腰を抱いたところで、風が止み、

「むっ、、、」

霧が、晴れる。

視界が、白一色に覆われていた。

なんだ、、、

「うっうっうっ」

腕の中でむずかる伯に、視線を落とせば、

「うおっ」

思わず、後じさって、尻餅をついた。

足元を、さらさらと覆ってゆく白い砂が、急勾配の斜面を滑って行く。

見上げれば、延々と斜面は続き、そのまま大地が斜めになってしまったかのような不思議な感覚であった。

白い傾斜の大地は、そのまま白い大気に溶け込んでいて、燕倪は眩暈すら覚えた。

くん・・・

膝に座る伯が、鼻を鳴らしている。

「知っていたのか、お前は？」

「、、、、、、」

それには答えず、ふわりと袖を翻し燕倪から離れば、伯は指を差す。

白い大地に、幾筋もの帯が刻まれ、それがこちらに近づいてくる。

「、、、、」

もはや燕倪は、何も言わなかった。

その手に抜き放たれた、銀の輝き<sup>しろかね</sup>。

伯は、ちぎれ雲のように辺りに漂う靄に、両手を差し入れた。

引き出された指には、細く長い氷柱のようなものが、青白い輝きを放っている。

その姿には迷いも、相手に対する遠慮も、微塵も窺えない。

水干の袖が、振られた。

ギョオオツ……

ギギツ……

眼下に迫っていた二筋がまず、砂塵を巻き上げた。

いよいよ、化け物のお出ましかっ

巨体が、大地の上でのたうつその脇を、残りの一筋が擦り抜けた。  
オオツ……オオオツ……

長い背鰭が見えた刹那、

「ぬんッ」

燕倪は、身を倒しながら業丸を振った。

こいつはっ

空を切る感触と共に見たのは、業丸の刃を、身を掠って避けた赤黒い巨体の腹、であった。

ドッ　オオオオ　　ッ

砂塵を巻き上げながら、砂の大地に飛び込む、その姿。

燕倪は、眼窩の奥で炯々と輝く赤光を見て、背筋に冷たいものが流れるのを感じていた。

今まで相対した、そのどれとも、異質。

額の、一角。

野郎。こちらの力量を、試してやがるな

眼下彼方で、砂塵卷上げのたうつ、甲冑をそのまま纏ったような二匹の骸骨魚とも、明らかに格が、違う。

砂の帯は、伯が群青の髪を振り乱しながら投げる氷塊をことごとく避け、やがて、のたうつ二匹を引き連れるようにして深みへと消えた。

来る、、

燕倪は、柄を握る手に力を込める。

何が何だかは、分からない。

唯一分かっている事、それは、身を守る事に全神経を集中しなければならぬことだけだ。

からからに渴いた厚い唇から、細く、吐息が洩れた。

鈍色の眸が、青く沈んで眇められる。

業丸の切先が、熱く灼熱しているのが、分かる。

まるで己の血管が、脈打っているようだった。

遠く、砂を掻く音が、聞こえてくる。

足の下に、微かな振動を、捉えた。

青鈍が散った、灰灰色の瞳孔。

それが開いた、刹那、

オオオ・・・ンッ

足場が崩れ、突き出した吻が砂諸共呑み込みまんとする。

燕倪の身は、すでに空中にあった。

呑まれ、大地が緩むより先に、地を蹴ったのだ。

その手は、柘榴石が埋め込まれた柄頭に、置かれている。

視線の先で、降り立つ先の砂の斜面が、抉れた。

突き出したのは、巖の如き、吻。

奔る、閃光。

「ッ」

無言の気合と共に、その突き出した吻に、叩き込んだ。

手応えは、

何ッ?!

その通り、砂の感触。

白砂となつて崩れ去つたのは、吻の形でもって盛り上がった砂塊  
だけではなかった。

足場であつたはずの斜面が、大きく抉れたのだ。

さかしまに斜面を転げ落ちゆく、まさにその鼻先に、赤光鋭い眼  
窩が見えた。

一角と、棘の羅列である背鰭が、鰓の辺りから大量の砂を吹き上  
げながら、

・・・・・・

こちらをじつと、見つめている。

降り注ぐ砂の中、視界が白く塞がれるのを感じながらも、業丸を  
握り直し、

「伯ッ」

その姿を探した。

「ハあクッ」

しかし、一度バランスを崩してしまえば、その姿を捉える事は容  
易な事ではなく、

斜面に漂う千切れ雲の中へと転がり込むのを、自分では止める事  
ができなかった。

赤光がそのまま嵌め込まれた、落ち窪んだ眼窩。

瞳孔鋭いその視線が、さかしまに斜面を転がり落ちてゆく脆弱な  
人間を睥睨し、

・・・・・・

それも束の間、鼻先に降ってきた白い人影に、眼を眇めた。  
眼前に躍り出たのは、

「、、、、、、」

伯。

燕倪が下方の千切れ雲に消えるのを視線の端で見届けつつ、間髪  
入れずに袖を振った。

翻る水干の袖から、幾筋もの閃光が、迸る。

擦じれた氷柱ことうを思わすそれは、大人の中指程の大きさの氷鉄ひやうてつとでも呼ぼうか？

オオ・・・ウウ・・・

一角が、大きく身震いすれば、

巨軀を押し包むようにして、白き砂の波が、その身を包み込んだ。手応え無く、氷鉄が、砂に吸い込まれて行く中、伯は漂う薄い霧を蹴って、舞い上がる。

睨んだ先に、延々と続く、白い砂の斜面。

風も無いのに描かれてゆく風紋が、無数の蛇の群を思わせる。クン・・・

気配を探ろうと鼻を鳴らしたところで、

伯

名を、呼ばれた。

それまでの執着は、どこへやら。

伯は、興が剋れたかのように群青の髪を靡かせると、足下に蟠る濃い千切れ雲へと飛び込んだのだった。

「、、、、、、」

不安定な足場は、浮遊しているようでもあり、それは水に浮かんでいるような感覚にも似ている。

ああ、、、そうだ。ここは、、、

肌を舐める、纏わりつく温ぬくいそれは、紛れも無い、闇。今、立つそこそが、起点。

誰が呼んだか、それは、夢の通路。

いつものように、ふらりと足を踏み出そうとして、

「あ、、、、」

傍らを、黒衣の若者が横切っていった。

ばさらに靡く髪は金色、そこから一對の細い角が伸びている。こちらに気づいている様子は、無い。

黙っていれば、そのまま行ってしまう袖を、

「あ、兄上っ」

たおやかな手が、咄嗟に掴んだ。

「、、、、、、」

夢と言う名の異界で交わる、夢と夢。

他人の夢に干渉出来る者、【夢見】だけが出る【夢結び】。

ゆつくりと振り向いた鬼面のその人が、

「ああ、小姫<sup>ちいひめ</sup>。お前、いつからそこにいたんだい？」

袖を掴む末の妹を見て、微笑んだようだった。

「また、夢路に遊んでいるの？」

穏やかなその声音に、

「兄上こそ」

勝気な、澄んだ声音が、応じた。

くつくつと喉を鳴らしながら、

「すっかり顔色も良くなって、嬉しいよ。あとリ」

その手が、あとの頭の上に、置かれた。

とたんに、可憐な唇を尖らせると、

「兄上。あとりは、いつまでも子供じゃありません」

黒目がちの澄んだ眸が、鬼面の兄を見上げて言った。

「ああ、そうだったね。おれの中では、まだ、、、、」

「あっ」

そうして抱き上げたあとの姿は、晴れ着姿の、大人の腰ほどにも満たない童女の姿であった。

腕の中で青々と澄んだ黒瞳が鬼面を覗き込めば、幼い手が冷たい無機質のその頬に掛かった。

朱色の隈取。

その内側から覗く、<sup>ふかくれない</sup>深紅の眸に向かって、

「かように恐ろしい鬼面をつけて、兄上のお心が知れませぬ」

「この面はおれを隠し、内面を晒す。おれに、必要なものでね、」

「兄上がおっしゃる事、あとりに、わかりませぬ」

膨れ面。

「それでいい、」

兄の腕に抱かれ、歩き出すままに辺りを見回せば、闇が和らいでゆく。

「ん、」

ふいに、どこからか舞い込んだ薫風が、あとの頬を弄った。

差し込む日差しに見上げれば、木漏れ日の中に、薄紅色の天蓋が、芳しい香りと共に揺れている。

その中を、丸々とした鶇ひわが、枝から枝へ。

花の蜜を求めては、互いに囀さえずりりながら、木々を渡ってゆくのが、

見えた。

「ここは、」

突如として開けた世界に、見覚えがあった。

延々と山裾に広がるなだらかな丘陵には、そよ風にきらきらと細波を刻む、湖。

そして、むせ返すような春の芽吹きの中には、淡い桃色がいたるところで、弾けていた。

はなもち  
花桃香るその里は、

あとり  
「花鳥の庄、」

あとの名を冠した里であり、まだ皆共に帝都に在った頃、二人の兄と、姉と共に行った、母の故郷。

「あとり」

すぐ上の姉の声に首をめぐらせれば、池の畔で、敷かれた緋毛氈の上で琴を爪弾く母と、鞆を持ったその人の姿。

傍らには、書物に眼を落とす、二の兄の姿があった。

「何をしているの？こっちよ」

珍しく上機嫌な姉姫の声音に、あとリモつい、嬉しくなる。

年頃を迎え、屋敷にこもりがちな姉姫よりも、鞠を蹴るのが上手な御転婆なかつてのその姿の方が、あとりにとっては馴染み深い姿であるのかもしれない。

「あまい夢を、小姫ちひめ、、、」

抱き下ろされれば、裳裾が乱れるのも構わず、草原を駆け出した。大地を捉えた、素足で感じる、しつとりと冷たいその感触。すべらかで柔らかい、草花の香り。

そして、

「行つたわよつ、あとりつ」

金系銀系も鮮やかな糸巻きの鞠が、高く高く舞い上がった。

「ほら、しつかりつ」

大きく広げられた、腕。

大気を張らんで広がった袂に、抱きとめられれば、

「凄いわ、あとりつ」

姉姫の嬉しそうな声が聞こえてきた。

「姉さま、もう少し手加減して、、」

そう声を上げようとして、振り向いた。

「実敦兄さま、、？」

自然と、その頃呼んでいた呼び名が、口をついた。

一際大きい花桃の、見事な枝ぶりの下。

腕を組み、微笑むその人。

そして、その腕に抱かれた、鬼面。

若草に染められた狩衣を纏い、ばさらの髪を風に遊ばせている。

陽の光の眩しさに、眇められたままの紅くれないの眸は、父充慶の眼差しに、よく似ていた。

その人が、ただ、そこに在る。

それだけで、安心する。

あとりは、着物の襟が肌蹴るのも構わず、腕に抱いた鞠を大きく、蹴り上げたのだった。

花桃の木の向こう側から、

「子らの夢とは、いいものだ、、」

低い声音が、こぼれた。

痩せぎすな体躯が木陰から抜け出すと、その長い指先が、遠目に家族を見守る少年の、腕に抱かれた鬼面を、取り上げた。

前髪が顎先まで長く垂れ、その顔を窺い見る事は、叶わない。

ただ、炯々と輝く眸が、血の如く赤かった。

穏やかな笑みを湛える少年の肩を叩くと、

「当人が望むままに、見せてもくれる、、」

実篤は、燦然と輝くこの世界に背を向けるようして、歩き出した。鬼面はいつの間にか、その顔を覆っている。

振り返る事無く踏み出す、草履の下。

確かだった大地の感触が喪失するまで、そう時間はかからなかった。

陽が翳ったような感覚に辺りを見回せば、忽然とあの世界は消失し、代わって残された鏡らを無数に目にする事だろう。

その一つには、夢に遊ぶ妹の笑い声が、聞こえている。

実篤は、光届かぬ夢路の、更に奥へと足を進める。

無数の輝きは彼方の頭上で輝き、やがて現れたのは、陽炎の揺らめき。

肩先に触れれば、耳元に怨嗟の声音が響き、劈くような悲鳴が、頭の中に鳴り響く。

さすがに、深い、、

顔の前に持ってきた己の指先が、見えない。ふいに誰かが、裾を掴んだ。

ヒオオ・・・ヒヒヒ・イイ・・・

袖は引かれ、首には生臭い息遣いを感じる。

夢魔、、

夢魔。

夢路に囚われ、肉体朽ち果てた、還る光を失った者達の成れの果て。ここは、その澱み、、、

闇の中、茫洋と浮かぶ鬼面の目は、艶やかな深紅を湛え、ふかくれない辺りを睥睨した。

異形と罵られたその眸には、何が映るのか？  
袖を払えば、

「今更、縊るな。足掻いたところで、その目に、ここから抜け出す救いの光は差し込まぬ」

後方で、何かの呻き声が上がった。

ズズ・・・ズ・・・ピ・・・シヨ・・・

ズ・・・ズ・・・シャ・ズ・・・ズズ・・・

何かが、這いずる音が重なる。

頭上を覆いつくさんとする陽炎の如き靄は、闇の中で灰恢色の乳房のように垂れ込め、鈍い音と共に確かな質感が、実敦が踏みしめる地に蟠る。

オ・・・ウウアア・・・

足元に這い寄る無数の気配に、乾いた溜息が鬼面からこぼれた。

「やれやれ。鬼の邪魔を、するもんじゃない」

だらりと下げた右の衣の袖から、光の連なりが、伸びた。

ヒアア・・・アア・・・ツ

ウア・・・アア・・・

白くまるやかなそれは、

「いっくん鯨人の泪。人の生を終え、海神に仕える魂がいますと言つ。彼らが人であつた頃を思い出し、さめざめと泣けば、その想いが？と生つて浜に打ち上げられるのだと言つ、、、」

ついでに白珠、真珠の連なりであつた。

褐色の指先が、一粒一粒手繰れば、

シャ・ラ・・・ラ・・・ジャラ・・・ジャ・・・

？が触れ合い、擦れる音が、辺りに響いた。

耳に心地良い、どこかで聴いた波の音にも、いつか聴いた風の音

にも似た、音色。

暗黒の中に茫洋と、儚くも確かな光を滲ませる、そんな乳色の輝きと相俟って、生者を押し潰さんとする気配達の動きが、

ア・・・アア・・・イア・・・ウウ・・・ホ・・・

止まった。

ホウ・・・ホ・・・

やがて、一様に揃って揺れる気配が、伝わってきた。

実篤は、手にした大粒の真珠の数珠を肩から長く、その身に掛けた。

「祈ろうか。お前達が望み描く、その夢のために、」

喉を押えれば、低く朗々とした声が、大気を震わせた。

ひい　ふう　みい　よい　む　な　や　・・・

真珠の頼りなげな輝きを纏い、手繰りながら、夢路の更なる深みへ。

ホホホ・・・ホホホホ・・・ホ・・・ホ・・・ホウ・・・

互いに溶け合いながら揺らめく、灰恢の靄。

それが、果たして夢魔と呼ばれる者たちか？

・・・そをたはくめかうおえにさり  
へてのますあせゑほれけ

靄立ち込める、闇のさらにその奥へ、

夢に眠れ、深く、、孤独さえも、手放して、、

鬼面の男、更なる夢路の深みへと、足を踏み入れる、、

手放せ・・・と、闇が言った。

「、、、、、、」

それでも良いと、今は素直にそう思った。

塞いだ、耳。

固く閉じた瞼と、唇。

膝を引き付けて、全てを否定すれば、やがてこの世界に同化し、  
自我を失う事だろう。

忘れてしまえば、暗がりの中こそが、相応しい居場所なのだと、きつと思えてくる。

全てを委ね、任せ、投げ出し、棄てる。

なんだか、ひどく、、疲れたな、、

その通りだ・・・と、闇が囁いた。

縫った手に、振り払われたような、そんな喪失感。

お前が悩み、苦痛に叫んでいたとて、あの者は知らぬ顔だ・・・  
ぼんやりと脳裏を過ぎったのは、異形の童の貌であったか？

どうして、、いつも、、

それとも、厄介者とはかりに突き倒しながら、あの冷たく暗い土蔵へ閉じ込めた者の、顔であったか？

いや、その土蔵から引き上げてくれた、懐かしいあの人の姿であったのかもしれない。

とろりと体内を満たす、闇の雫。

手足の微かな痺れは、その闇に分解されているからだろう。

それを、融けると言うのか、浸蝕されると言うのか。

ひたひたと、満たされてゆくように、闇色に塗りつぶされる、感  
触。

あああ、、

涙はきつと、寒空の下、捨てられた時に、とうに枯れた。

怒りや憎しみは、かび臭い土蔵の中で、欠落した。

今はただ、虚しさだけが、胸中を占めている。

繰り返し、繰り返す、、

意識など、いつそのまま碎けてしまえ。

浮かび上がる事など、もう二度とないように。

闇を、吸い込んだ。

肺腑深くへ招き入れれば、頭が重く、意識は更に沈んでいった。

もう、何も、、

考えなくていい・・・

闇と同調し、同化してゆく。

その言葉は、己のものか、闇のものか？

ただ、無へと還る安らぎは、絶対だ。

それを、何故人々は、恐れるのだろうか？

恐ろしいのは、喉元を通り過ぎる、ほんの一瞬。

同化してしまえば、時によって薄れゆくように、何も恐れる事などないというのに・・・

最後の溜息。

全てを吐き出すため、唇が薄く開き、

「【知る】者は、【知らぬ】者からしたら、【恐ろしい】者、」

その耳に、声が、届く。

<sup>からだ</sup>闇のどこかでする、声が、、

闇と同化してゆく最中、その声だけが、わんわんと体じゅうに響いている。

「それを知るお前は、強い、、」

耳を塞いでも、すぐ近くで鼓膜を震わせるような、そんな声。

やめろ・・・

揺れて、

やめ・・・ろ・・・な・・・い・・・で・・・

揺さぶられて、

も・・・やめ・・・

闘ぎ合う心が、

ア・・・ああ・・・

まだ、どこかに、在ると言っのか？

「まったく、どうしてだろうね。いつもいつも、手放してから、気づくんだ、、」

降り注ぐ雨ように、その言葉は闇となった者のどこかを、

「おれにお前は、眩しくて、、」

それは、雲間から差し込む一筋の陽の光にも似た、

「その姿に、感銘すら受けた事を、、」

目映いばかりの、詞の光芒。

それを受けてざわめくこの心は、誰のもの？

あ・・ああつ・・

闇に融けた眼が、彷徨い、

どう・・し・・て・・っ・・

探す。

失った手足の感覚を、今程取り戻したいと思った事は、ないだろう。

貴方が、どうし・・て・・こ・・こに・・

声にならぬその叫びは、誰のもの？

突然、都に行けと言われ、ついに厄介者だと捨てられたのだと喉まで出掛かって、それでも呑み込んだ、あの夜。

それは、その人の言葉で、それを確かめなくなかったからだ。

それを思い出し、闇は、

・・・・・

息を潜めた。

揺れてくれるな、と、、

闇であろう、と、、

幼い頃から鬼を祓うための道具として扱われ、大人の顔色を窺いながら生きてきた悠霧は、手にしたものを手放さねばならぬ辛さを、やるせなさを、誰よりも知っているから、、

## 第拾ノ巻幕後

## 鬼面

## （前書き）

闇の侵蝕を受け入れつつある悠霧と、接触を試みる実敦は、己が鬼面に手を掛けて、

死人還りの都守蒼装、業丸を継ぐ武官燕倪、幽身であるがこの世に縛られた伯。それぞれが紡ぐ異国絵巻、第十ノ一幕後編。。。

実敦は今、一人、闇の中に佇んでいる。

六無。

闇と静寂に、今にもその身を塗りつぶされてしまいそうな、そんな立ち姿。

辛うじて闇の中に、その輪郭を浮かばせるのは、肩から掛けた白珠の数珠。

褐色の指先が、白珠を一粒一粒手繰っている微かな音だけが、静寂からの呪縛を跳ね除けているかに見えた。

しかし、その攻防虚しく、その身は闇の侵蝕に晒されている。

白珠の輝き届かぬ爪先、指先、髪の手。

その身は、細い噴煙をしようしようと立ち昇らせながら、じわりじわりと、溶けてゆく。

喰われれば、夢魔。

残された時間は、そう無い。

ま、正直、それでも構わないんだけど、、

そんな心持は、夢路に入った時からここに到るまで、変わらないらしい。

ただ今は、

ああ、燕倪、、

その実敦の脳裏を過ぎったのは、久々に会った、あの男の顔。

鬼窟を渡ってまでして、悠霧を守り、己に託したその想いに、偽りは無い。

そして実敦も、

分かっているさ、、

その身は無防備に晒しながら、闇と、向き合い続けている。

想いを、伝えるために。

「あんなに近くに居たのに、おれ達はいつの間にか、随分と遠回り

してしまつたようだ、」

鬼面から洩れた、苦笑。

それには、言葉にする気恥ずかしさも、混じっていたのかもしれない。

「、、、、本当に」

しばしあつて、小さな溜息が、こぼれた。

「それも、終りにしなきゃね、、」

自分に言い聞かせるように呟くと、骨ばった手が、鬼面に掛かった。

そして、その手から、滑り落ちる。

あ・・・

息を潜め、闇であろうと、そう決めたはずなのに、、、指先から、ひらひらとひるがえりながら、舞い落ちてゆくその鬼面を追うべく、

ッ！！

決意とは裏腹に伸びた己が手が、白い球体二つに縁取られた視界の先に、確かに、見えた。

そう、、、、

ここは、夢路。

望み、描けば、見せてもくれる。

嘘偽りの無い、想い。

悠霧の手が、懸命に宙を掻く。

届けッ

しかし鬼面は、その指先を弄つかのように、ひらりひらりと、底無しの闇の深みへ。

「実敦様ッ、面がつ」

喉を突いて、声が、出た。

「いいんだ、、」

闇に薄っすらと浮かび上がった輪郭に、実敦の手が伸びて、肩を、掴まれた。

振り向き、見上げたその先に、異形と罵られるには柔和すぎる男の貌が、あった。

「でも、いつもっ」

「あれは、もう要らない、」

実敦は、穏やかな眼差しで、悠霧を見つめ返す。

「どうして?!」

「見つけたんだよ」

その眸が、まるで子供のように、きらきらと輝いた。

「見つけたって、何を、」

「本当は、お前が最初におれを、見つけてくれたんだってことを、こうしてまた、お前に会って、【見つけたんだ】、」

「さ、ね、」

悠霧は、その眼差しから、眼を離せなくなった。

「お前が闇の中に隠れるのなら、おれがそれを見つける鬼でいようと、そう思っていたけれど、それは、どうやら違ったようだ、」  
陰陽寮から推されながらも、術比べに負け、都の守とも成れなかった異形の陰陽師。

それを機に噴出したのは、他でもない。

彼を推していた貴族達による、陰湿極まりない仕打ちであった。

陰陽頭でもある父充慶の手前、それらから逃れるように職を辞し、各地の陵や霊場を検める任を請負った。

「お前に出会うまでおれは、この世にありながらこの闇の中に在った」

生来持つて生まれた容姿と相俟って、それを機に身につけた鬼面は、予想通り煩わしい人付き合いを解消し、実敦は、文字通り幽鬼の如く生きてきた。

それは、幸と呼ぼうか、不幸と呼ぼうか、？

見てくれだけで判断せぬ者達に巡り合えた縁は、<sup>えにし</sup>耳を塞ぎ、眼を背け、歪むことを、彼に赦さなかった。

悠霧の話は、数少ないそんな者達から、聞いた。

一帯に生きる雑鬼、神霊達が恐れる、人の子。

狙われたら最後、必ず狩られる、と彼らを震え上がらせていた、とある寺院の秘蔵っ子。

実敦が、興味本意で寺院を訪れた時、人からも恐れられていた悠霧はすでに幽閉の身で、朽ちる時を待たれていたが、

「そんなおれをお前は、いつでもそのまっすぐな眼差しで、見つめてくれた、」

善も、悪すらも、無い。

その眸が語った、生への渴望。

がむしろに生きよう、生きようとするその魂が、何よりも、

「悠霧、、、」

燦然と、輝いて見えた。

目の前に現れた者こそ必要なのだと、声無き叫びに打たれ、同時にその輝きに魅せられて、気がついた時には実敦から手を、差し出していた。

「でも、俺、、、」

俯いた、その顔。

噛みしめられた、唇。

走馬灯のように押し寄せる、記憶。

その中で、報われる事など無かった思い出が、喉を、引きつらせる。

声無き苦鳴を、それでも堪える悠霧の肩に、実敦の手が、置かれた。

「出逢った頃は、ここに頭があつたのにね」

その背丈が告げるのは、成長だけではない。

共に過ごした、確かな記憶。

それが長かったのか、短かったのかは、分からない。

分からないが、

嗚呼、、、

実敦の中で育まれたものが、今は、はっきりと見えていた。

「必要なんだ」

「ひつ、よう、、？」

嘘でもいい。

それは、ずっと欲しかった、言葉。

望んでも、応えても、けして与えられる事の無かった、【もの】。

「俺、、俺ッ」

その言葉を受けて、堰を切って溢れ出す、

「さ、実敦様のお側にいたいっ！！」

言葉。

悠霧には、止められなかった。

「寺とか、都とか、誰かのためとか、そんなの俺はどうでもいいんだっ」

それは、子供じみた我儘なのかもしれない。

一笑されるかも分からない。

それでも、今、我慢する事なんて、出来なかった。

「そんな事より、実敦様のお側で、役に立てるようになりたいんだよっ」

拳を握って、心の叫びを舌に乗せた。

嫌われたくない相手に、胸の内を吐露する事は、こんなにも勇気がいるものなのか？

不安に囚われ、今更ながら、膝が、震えた。

俯いたまま、

「、、、、、、」

実敦の顔を見ることができない、悠霧。

一息に言い放てば、喉元から下腹へと血の気が引いていく。

一秒一秒が、ひどく遅く、ひどく重く、感じた。

肩で息をする、そんな悠霧へ返って来たのは、

「ああ。だから、もう、なっているんだよ」

どこか間延びした、いつものそんな声音。

耳を疑って、あんぐりと口を開いた悠霧の肩を押して、

「だって、お前が、ここにいるんだから、、」

「え、、」

実敦は歩き出す。

「お前の意見を聞こうともしないで、無理をさせたのは、おれの方だ」

「そ、んな、、」

「お前の気持ちも酌んでやれなくて、この世の有様の何が視えよう？おれもまだまだ、お前から学ばなきゃね」

「っ」

悠霧は胸が詰まって、何も言えなくなった。

こそばゆくて、嬉しいような、ついには泣きたい気持ちも入り混じって、硬く拳を握った。

「悠霧、、？」

「、、、、」

肩に力が入っている。

実敦が白くなった拳に気づくと、涼しげなその眸に、どこか呆れたような、それでいて穏やかな感情が、浮かんた。

頑なで、強情。まっすぐで、清々しい、、

褐色の大きな手が、その拳を包み込むように、重った。

「あ」

慌てて手から力を抜けば、指と指とが触れ合って、

「実敦様、、」

見上げたその人が、慈愛に満ちたいつもの眼差しで、微笑んでいる。

やがて、どちらともなく繋がれた、手と手。

「さて、悠霧。かくれんぼは、もうおしまいにしようか？」

悠霧は、実敦の手を、

「うん。帰、ろ、、？」

確かめるように握り返した。

穏やかに眇められた、紅の眸。

「ああ、帰ろう」

実敦が、頷いた。

手繰っていた白珠の数珠を悠霧の肩に掛けてやると、二人の姿は、  
金色の輝きとなつて、二羽の鳥となった。

輝きは闇を跳ね除け、鳥は互いの翼を並べたまま、彼方に広がる  
無数の星々の輝きに加わるべく、昇つてゆく。

夢の浅瀬。

差し込む暁の光こそ、現世への棧橋。さんばし

最初はか細い光が、強い輝きを放ち始める。

二羽は迷う事無く、揃つて、差し込むその光芒の中へと、融けた。  
その先の、在るべき現世に、還るために、

「がッ」

不意に襟首の辺りを、凄まじい力で、引かれた。

「踏み入れるには、まだ早い、」

聞きなれた声音が、頭上から降ってきた。

千切れ雲の中、一面の白い視界が、掻き消されるように闇に侵食

され、そして、

「むっ?!」

閉じた。

それなのに、巨大な骸骨の如き顔に穿たれた暗い眼窩が、未だ鼻  
先に在るようで、

「なんなんだ、」

我に返つてさすがに呆然と、呟いた。

素足に、滑るような黒い泥状の大地の感触が、あった。

「あれの胃の腑に落ちれば、死人還りどころでは、すまされん、」

「

「いたんなら、もっと早く来いよっ、蒼装」

襟を掴む手を振り払いながら振り向けば、

「幽世との狭間に、この霧だ。無理を言うな、」

馬上から、慥然と切り返された。

「このような所まで深入りしおつて、」

鬱々とした呟きに続き、腕が伸び、

「乗れ。人の身を、いつまでも晒してよいところではない、」

「だが、伯がまだっ」

「心配無い、」

闇色の眼差しの上に、華奢な姿が、朧げに滲んで現れた。

「無事か、」

安堵の溜息と共に、ようやく太刀を鞘に収めた燕倪を背にさせる  
と、

「伯」

走り出した鋼雨に、白い靄の中から現れた伯が、飛乗った。

濃い霧の中へと、疾駆を続ける鋼雨。

墨色の飛沫を跳ね上げながらの、その走り。

大の大人二人を乗せているとは思えぬ力強さと、それに違わぬ速  
さであった。

強靱な、鋼の如き筋肉の躍動を感じながら、

「出られるのか？」

さすがに疲労を隠せぬ、弱音が口をついた。

手綱を握る蒼装は、鼻で一笑。

「出られようよ。こうして分け入って来たのだから、」

不意に、鋼雨が跳ねた。

倒木が、一行の行く手を阻んでいるのだ。

やがて、霧が幾らか薄くなり、どんよりとした霧に覆われていた  
空に、瞬く星が顔を覗かせ始める。

それから程なく、鋼雨の脚が並足に、落ち着いた。

薄霧の向こうに、青白く空け始めた空が、間近に迫った山稜を黒  
々と縁取っている。

それに圧されるようにして、董色に滲み始めた西の空へと、星々  
が追いやられてゆく。

「なあ、あの骸骨のような、虎魚おしぜのような奴は、、」

「屍魚かばねうお。あの世の守のようなものだ。平素は大人しく、砂海の底で眠っているのだが、、」

ちらりと眺めた先、和紙のその包みを手に、伯がかりかりと何かを齧っている。

汪果が琲瑠に持たせた、色とりどりの花卉に糖衣を纏わせた、菓子だ。

蒼装の視線に気付いたのか、見上げたその董色の眸が、  
「、、、、」

すぐに、逸らされた。

挑発したか、、

かつて、その魂は冥府に遊び、冥府の守でもある骸骨魚、否、【屍魚】らを、退けた。

不安定なまさに境界であるこの地から、冥府の波動を感じ取り、喚び寄せる理をことわり、どうやら伯は、鬼窟を渡った事で身につけてしまつたらしい。

一方、冥府の守もりとしたら、その名にかけて、予期せぬ外部からの侵入者を追い返す事は、至極当然の事。

「それじゃあ、あの白い大地が、お前が渡った、、？」

「ああ。どうも、そうらしいな、、」

「らしい？」

訝しげな燕倪のそれには応えず、

「彷徨えば、死人。運良く戻っても、死人還り。正に、あの世への入口だ」

そう、嘯いた。

「なんだって、そんなところに入っちゃったんだ」

思わず頭を抱えた、燕倪。

「その実、珍しい事ではない。この世の薄皮を一枚捲れば、どれも繋がっている、、」

実際には無かったものも、人々の畏怖がそれを呼び寄せるのだと、

言う。

「ああ、もう、よせよせっ！！お前が言う事は、まともに理解できた試しはないっ」

燕児のうんざりしたその言葉を聞いて、くすくすと伯の肩が、小さく揺れている。

「、、、、、、」

闇色の双眸が、どこか冷ややかに睨み下ろせば、

「ひあっ」

これもまた小さな悲鳴が、上がった。

悠霧と共に在った鬱憤を、いつか撃退した冥府の守で、晴らそうとしたのかもしれない。

「いずれにせよ、守の姿に逃げまどつのがおちだが、お前のようにまともにやりあう奴がいるとはな、、、、」

「俺だつてな、身に降りかかる火の粉は、払うさ。そりゃ、、、、」

燕児は、手酷く翻弄された事を思い出し、奥歯を噛みしめた。

いつの間にか口の中に入った砂塵が、不快な音を頭蓋に響かせた。

「だいたい、この際、言わせてもらつとだなあ。子供相手にお前はやりすぎなんだ」

「、、、、、、」

「あんなやり方で、悠霧を送りつけるなど、正気の沙汰とは思えんぞ」

すぐ後ろで上がる苛立たしげな声音など、まるで耳に入っていないのか、

「あ、、、、」

おずおずと顔を上げた伯は、注がれたままの闇色の眼差しに、怯えたように身を震わせる。

そして、

「、、、、、、」

眼を逸らせずに、いた。

「おい、聞いてんのか？」

無言のままの相手に問えば、

「、、、 ああ」

背を向けたまま抑揚に欠けた声が応じ、その肩に幼い手が、掛かった。

いつの間にか、湿原は後方の葦の原へとその姿を変えた。

白々と明け、橙に雲が焼け始めた、空の下、

「エンゲ、、、」

顔を半分覗かせた伯が燕倪を、呼んだ。

「どうした？」

鈍色の眼差し先で、

「ごめ、、、さ、、、い、、、」

翡翠の角が小さく動いて、すぐに蒼装の向こうへと、消えた。

「なんでお前が？」

眼を大きくして、きょとんとしたのは、燕倪。

何かなんだが分からぬ燕倪をそのまま、蒼装は長衣の袖を抜いた。

「、、、、、」

それを、頭から伯に掛けると、前方に身を寄せ合うようにして蟠り広がるあばら家の群を、遠目に眺めた。

細く登る、炊事の煙らの向こうに、黒々とした帝都への大門が聳えている。

長い一日が終わり、また新しい一日が、始まるうとしていた。

「さて、、、」

蒼装が、手綱を引いた。

ブルオオオオオ・・・ンンッ

「ぬあッ」

後足立ちになった、鋼雨。

咄嗟に蒼装の腰にしがみつけば、

「一息に、駆け抜けるぞ、、、」

燕倪に何も言わず、鋼雨はその言葉通り、一陣の風となる。肌を刺す、大気の冷たさ。

手綱を握る銀の髪が頬を打つのに、眼を眇めれば、  
「お、、、」

珍しく険しい、友の貌。

霜で盛り上がった大地を跳ね上げながら、白銀の軌跡を残し、規則正しい馬蹄の音が、響いている、、、

くべられた薪が、ぱちぱちと弾ける音が、する。

「、、、、」

臉を押し開ければ、曙色に染まった空が、広がっていた。

朝の、凜と張詰めた大気には焚火のぬくもりと、

「起きたかい、、、？」

つながれたままの手の温もりが、そのまま滲んでいるようだった。

「実敦様、、」

「でも、起きるには、まだ早いよ」

いつもの鬼面ではなく、そこには、柔和な師の貌があつた。

「、、、、」

耳に残っているような、【かなしうた】の叫びも、闇と融けた感触も、まざまざと思い出せるのに、すべてが遠い夢であつたかのような、そんな目覚めであつた。

「実敦様は、ずっと起きて、、？」

「ああ。今日はどうしても、朝陽を見逃したくなってね。しかし、鬼面越しに見ていた世界の狭さつたらないよ」

顎先を撫でながら、実敦は苦笑を浮かべた。

「あの空の橙が、眩しくてならないんだ。ま、元々この目は、色素が薄いせいもあって、お前も知つての通り、陽の光は苦手なんだけれども」

心地良い、その聞きなれた声音。

悠霧は、炎の中にくべられた鬼面を、ぼんやりと眺めた。

それに気づいて実敦は、握っていた悠霧の手を、そっと離れた。

悠霧は、焚火に己が手を、かざした。

「、、、、、、」

鬼面はくべられても、この手ばかりは、共に生きていかなばならぬものだ。

その手を一緒に眺めながら、

「やはり想い、なんだろうな。強く生きて欲しいと、お前を手放さなければならなかったその人の想いが、この世ならざる神霊の加護を、生き抜くための力を、与えたのかもしれない」

「え、、、、」

「人は、鋭い爪も、傷つける牙も、毒する棘も持たずに生まれる。それは、過ちを、赦すことが出来るからだ、、、、」

実敦は、どこかぼんやりと言った。

「お前のその爪は、切開くためのものだ、おれは思うね、、、、」  
「切開く、、、、？」

「ああ。どんな困難に遭ってもお前は、お前の道を切開けるように、、。ま、そうあって欲しいと言うおれの勝手な願望なのかもしれないけれど」

その人の苦笑を受けて、

「うつん、、、、」

悠霧は、首をふった。

「なんでだろ。今なら俺、素直にそう思えるんだ」

悠霧は、手を掛けてあった衣の下に仕舞った。

生きたいと、思うのだ。

この人と、共に在って。

知りたいと、思うのだ。

この爪が守り、切開ける未来を。

濃紺の夜空を押し分けながら、橙に焼けた空が、しらがみ始める。西から流れる高い雲が、一足先に白く輝き、堇色の地球影が、空をぐるりと縁取った。

その堇色から、帝都での出来事が、脳裏を過ぎった。

「そのうち、ちゃんと挨拶に行こう」

悠霧の胸中を読んだのか、すぐ傍らで、実敦が言った。

「挨拶って、、帝都に？」

「ああ、一緒に。おれも、いつまでも逃げ回っていて、いい年でもないしな」

悠霧の胸中に引つかかっていた痞えが、蟠りが、溶けてゆく。

思い返せば、良くしてくれた人達が、大勢いる。

帝都に在った頃は、気付きもしなかったのに、気付こうとしなかったのに、今は素直にその存在を感じている。

いつの間にか出来た、実敦以外の、【大切な人達】。

白々と、太陽の輝きに薄れて行く星の瞬き。

彼方の星が一つ、力強い羽ばたきと共に、舞い降りる。

「阜嵯弥」

風を？まえ、夜通し飛び続けて来た、白き大鷹。

グ・・・グググ・・・

実敦の腕から身を乗り出すのを、悠霧は腕で受けて、胸に抱き寄せた。

離れ離れになっても、実敦と悠霧を繋いでくれていた、かけがえの無い大切なものの、ひとつ。

実敦が、穏やかな眼差しを注ぐ、その先。

言葉にすれば、せつかく気づいた大切なものが、なんだか零れ落ちてしまいそうで、悠霧は口を引き結んだ。

阜嵯弥のすべらかな羽毛の感触を確かめながら、それでも頬が緩んでしまうのだけは、どうする事も出来ないのを、感じながら、、

太陽の陽射しが枝に積もった雪を照らし、透明な氷柱から、雫となって零れ落ちる頃。

足跡が点々と、白い雪の上に残されていた。

陽のあるうちに眠り、夜の帳が明ける前に移動する日々は、これから少なくなる事だろう。

二人と一羽は、東西に伸びる街道目指して、歩き出している。

この先は、雪深くなるのを避けて、西へ下る。  
帝都に寄つて、それから南西に点在する霊場を、共に検めるために、

白い砂の大地に、足跡が続いている。

白亜の大地は、見方によっては、平坦にも見え、波打っているようにも、見える。

果ては彼方遠く、そのまま同色の空に溶け込み、もしかしたら大地と  
思っているものは、そのまま空へと続いているのかもしれない。  
「ん？」

砂海。

足元に、寄せては返す砂の波。

その波間から、打ち寄せられてきたものを、白い手が拾い上げた。  
「無限坂の水底から、浮き上がって来たのかな、？」

砂を手で払い、指先が頬の辺りに浮かんだ木目を、擦った。

一方、白髭を蓄えた翁は、

「ああ、そちらでしたか、」

彼方、白砂の波打ち際にぽつりと蹲る、黒衣の冥官めいかんを見つけた。

蒼い花が一面に群れるその中から、手に茶器の乗った盆を携え、

「一息、つかれてはいかがですか？」

花が途切れる辺りで足を止め、声を掛けた。

「蛮器翁ばんきおう」

立ち上がった若者が、銀系の髪を揺らせ、ゆっくりと振り向いた。

「これはこれは、」

しかし、そこは好々爺。

若者の悪戯にも動じる事無く、にこり。

その様子に、

「なんだい、なんだい、」

溜息を一つ吐いて、若者は頬の辺り指で弾いた。

トトン……

硬質な音が、響いた。

頭の後ろに手を回して、貝紫で染められた紐を解けば、不満げな  
呟きとは裏腹に、穏やかな若者の貌が覗いた。

オオオオオ……ン……

その若者が、砂海の彼方を見つめた。

闇色の眼差しの先で、巨大な背鰭が覗き、一角が現れる。

そのまま若者の脇を擦り抜ければ、蛮器翁の眼前で落ち窪んだ眼  
窩を覗かせ、腹鰭を長く大地に伸ばし、静止。

蛮器翁は、胸鰭の上に盆を載せると、慣れたもので肩に掛けてい  
た更紗を屍魚の背に長く敷いた。

「こちらへお掛け下さい」

「ああ。失礼するよ、いちきひめ壱岐媛、」

屍魚の鋭くそそり立つ第一棘を撫でると、

……

上目遣いに赤光放つ双眸が、若者を一瞥しただだけ、だった。

背鰭に背を預け、屍魚の巨軀に腰掛ければ、視界前方に広がる蒼  
い花の群。

その中央には、ぼつかりと地に開いた広大な闇の口がある。

さらにはそこに突っ込む、【回帰回廊】と呼ばれる魂の道が、う  
ねりながら、さながら無数の絡みあう巨龍の如く、天地を縦横無尽  
に走り、繋ぎ、支えているようだった。

見上げれば、薄雲か、はたまた砂海と同じ粒子か、判別つきかね  
ないものが、白々と上空を覆い、【回帰回廊】の一部は、その先に

消えている。

「、、、、、、」

どこか懐かしいようなそんな心持で、ぼんやりながめている若者を、

・・・・・・

壱岐媛と呼ばれる、屍魚が、赤い眸で見つめている。

「その鬼面は、、？」

「さつき、そこで拾ってね」

蛮器翁の言葉を受けて、若者は、手の中にある面を擦った。

一対の長い、角。

裂けた口には、牙の羅列が、その鋭さを見せつけている。

「、、、、、、」

しばらく、無言でその鬼面の空洞と化した眸を見つめた後、

「この砂海は、秘そうとした想い、そのものまでも汲み上げてしま  
うのだね、、、、」

若者はぼつりと、呟いた。

皺深い顔の、糸のように細い眸が、

「ここは、今生の形や想いを清算し、奔流へと還る、その準備をす  
るところでございます。どのような摂理が働いているのか、それま  
ではわたしも理解できてはおりませぬが、、、、」

若者の横顔を一瞥すると、再び己の手元へと、視線を落とした。

「想いと言うものも、生まれたからにはどのような形であっても、  
この冥府へと辿り着くように出来ているのかもしれない、、、、」

「生まれたからには、か、、、、」

「強く望み、描けば、【想い】も昇華され、彷徨うことはないのか  
も、しません」

若者の色の薄い唇に、淡い微笑が、刷はかれた。

「それじゃあこれは、僕が責任をもって【回帰回廊】へ、還すとし  
よう」

「ええ。それが、よろしいかと、、、、」

ジ・・ジジ・・・ジ・・

蓋碗の中で、茶葉が開く音が、微かに聞こえたようだった。  
壺岐媛と呼ばれた一角の屍魚は、

・・・・・

心地良いのか、その音に、骨ばった瞼を閉じた。

風も無いのに、そよそよと揺れる、蒼い花。

彼方に朧に霞むのは、白い月か、太陽か？

湖面のように凪いでいたかと思えば、隆起する大地には、小さく  
白い人影のよう列が、現れたり、消えたり。

ぼんやりと、こうして白砂の大地を眺めていれば、

お師さま、

ここに在るはずの無い、あの人を探してしまう弱い自分を見つけ  
て、若者は首の後ろを掻いた。

「お、」

その鼻先に届いた、芳しい香り。

皺深い手が、蓋碗を差し出すのを受け取れば、温もりが掌に優しく  
伝わってくる。

「しかし、なんとまあ、」

「うん、」

礼を言おうと顔を向ければ、若者の膝に置かれたままの鬼面を見  
つめて、

「ずいぶんと優しいお貌の、鬼でございますなあ、」

穏やかな表情で好々爺がそう、呟いたのだった。

目には見えないものが、実は空から降り注いでいる。紫外線もそうだが、中性子とか。。物理はまったく素人だが、どうやらカミオカンデが掴まえようとしているものが、そんなようなもの、らしい。。。

ガキの頃、双眼鏡で夜空を眺めるのが、オヤジとの時間だった。惑星や星雲、星団を図鑑で見ても、そんな小さな双眼鏡では見えやしないのに、毎夜毎夜、名も知らない星を追いかけた。

俺たちが今見ている星の輝きは、何千、何万年、何億光年前の輝きなんだそうだ。今はもう、その星は実際には存在していないのかもしれない。それでも、未来に光は届いている。

新月の夜。南米くんだりで、満点の星空を眺めた時、古代人は、星の合間の闇を縫って、星座と呼んだというのを思い出した。それ程までに、星と星の間が、近い。星が多すぎて、闇の方が、少ないように見えるのだ。人工の灯りが眩い日本で、目にする事はできないかもしれないが。。。

流星にも、影はある。

存在しているから。

星の輝きで、あるいは恒星に照らされて。

その影は、雨のように断片的に降り注ぐようなものなのかもしれない。

放たれた影は、いろんな情報を持っているのかもしれない。記憶を。

もしかすると、歌うのかもしれない。

今回は、俺にも良くはわからないんだが、自分なりの、科学的な根拠のない、手前勝手な哲学のようなもの、が、もやもやと形を成して、流星を咀嚼しながら、筆を走らせたもの、なんです。。。

## 第拾ノ武幕前

血胡弓

(前書き)

誰に見取られるでもなく、大陸は神皇が後宮で娘が一人、人知れず息絶えた。遠く海を渡った帝都では、天狐遙絃が悪夢に見舞われ、

死人還りの都守蒼奘、業丸を継ぐ武官燕倪、幽身であるがこの世に縛られた伯。それぞれが紡ぐ異国絵巻、第十二幕前編。。。

いろとりどりの花々が、揺れている。

暗い水面に、柔らかな光を放つ、灯籠だ。

それが、幾つも浮かんでいた。

儚げに揺れるその明かりが、月の無い闇夜にささやかな抵抗でもしているのか、ぼんやりとした光源となって、白亜の離宮や渡殿の姿を、朧げに浮かび上がらせる。

巨大な湖を思わせるそこには、大小様々な離宮や音楽堂、釣殿、四阿屋らが、渡殿によって結ばれ、点在していた。

陽があるうちに臨めば、湖面に佇む瀟洒なそれら建物の他、四季の野草が植えられた浮島や、鶴が遊ぶ奇岩群が目を引く事だろう。

計算し尽くされ、整然と配置された、造形美。

それを目の当たりにすれば、成し得た労力と膨大な年月が想像に余りあり、舌を巻かずにはおられないだろう。

陽の光の入り方、風が吹きぬけて奏でる音、緩急をつけて注ぎ込まれて清水に揺らめく、水草の動き。

ここでは、意のままに操ることが困難な自然ですら、持ち得ているその全てを、余すところ無く、引き出されるのだ。

風の無い、今日のような闇夜の晩を、除いては、、、

ヒュ…ヒュアアア…

どこから湖面を渡る、胡弓の哀しき調べが、聞えてくる。

息を潜めるようにして、祈り暮らす者達も、この時ばかりは耳を傾け、遠く離れた故郷に暮らす一族を想い、涙しているのかもしれない。

咽び無くかのような胡弓の音には、そんな啜り泣きが、混じっているようだった。

ここは、後宮。

蛮族と呼称される、異民族の姫らが集められた、そのまま哀しき

その  
園だ。

渡殿に、ぽつぽつと吊るされた吊燈籠に、灯りが燈される事はまず無い。

ここでは、その誰もが、神皇の目に留まる事を拒んでいる。

頑なな華達は、故郷を遠く離れても、今だ一族の誇りと共に在ると言っ、その証拠なのかもしれない。

ヒュオアア…ワンツ…ビイン…ッ

引き攣るような音色が、闇夜を劈く。

続いて、

カツッ…ン…

小さく、乾いた音が、聞えてきた。

音は、無数に点在する離宮の一つから、した。

震える手から取り落とされ、淡く翠を帯びた御影石の床に当たり転がったのは、弓。

「けふっ、けほっ、、こふッ、、」

ビシャッ…

続いて、生暖かいものが、口を押さえた手を伝い、床を染めた。

薄闇の中、そのまま闇が床を舐めるように広がれば、鉄錆に似た香りが、辺りに漂う。

長椅子から、床に崩れ落ちた華奢な体が、血溜まりの中、肩で息をしながら蹲っていた。

透けるように白い肌を持つ、うら若い娘であった。

「う、くっ、、」

肺が、驚掴みにされているように、痛む。

服の上から、胸元を押さえるが、今日の鈍痛は、いっこうに治まる気配が無い。

「ふっ、、こ、ふっ、、ゴホッ、、」

そればかりが、せり上がる不快感が止まらない。  
喉に、ひりつく痛みが増す。

そのまま、喉から体が裂けてしまふのではないか？  
ついには、耐え切れず、血溜まりに伏せてしまふ。

いつもなら、多少の吐血の後、痛みも、波が引くかのように治ま  
つてくれるのだが、

「くうっ」

食いしばった歯の間から、堪らず苦鳴が漏れた。

痛みが、頭頂部まで突き上げる。

まるで心臓が肥大して、体中にあるかのように、ドクドクと早鐘  
を打つ。

耐え切れなくなった体が、今にも激痛に、破裂してしまいそうだ。  
可憐な唇から、しとどに溢れる血潮に、泡が交じった。

血溜まりの中、白い手が、爪が折れるのも構わず、固い床を掻き  
穿る。

「ぐっ、っ、っ、つぁっ、っ、」

苦鳴は、獣じみたものに、変っていた。

体が内側から、焼かれている。

目尻に涙が滲み、頬を濡らしていった。

どうして、こんな目に遭わねばならないのだろうか？

怒りとも憎しみともつかない、否、その両方とも思えるどす黒い  
ものが、腹腔深くから、首を擡げてくる。

体が弱いのは、生まれつきだ。

痛みと共に、生きてきた。

声を殺し、耐える事なら慣れている。

それは、自分が生きるための、痛みだから。

ひゅっ、と喉が鳴った。

「が、っ、っ、っ、」

ぼたぼた、と、今までに無いほどの血潮が、顎先から滴る。

薄紅色だったはずの舞衣も、新雪のような肌だと羨まれた指先も、

視界も、何もかもが、無情にも赤黒く、塗りつぶされてゆく。

「はあ、、、がふっ、、、あ、、、っ」

こめかみのあたりが、熱く、痛みに合わせて脈打っている。貌を顰めながらも、肺腑に空気を送ろうと、口を大きく開いた。意識せずともできていた呼吸すら、ままならない。

肺は、切れて噴き出した血液ですでに、溢れかえっているのだろ  
う。

手足が冷え切ってゆく感覚の中、涙で濡れている頬だけが、熱か  
った。

「、、、、、、」

叫びたい。

今まで、耐えてきたものは、守ってきたものは、いったい何だっ  
たのだ?!

神と言うものがいるのなら、問いたい。

大罪を負っていると言うのなら、その罪の名を聞かせてほしい。

この痛みは、自分から全てを奪い去る痛みだ。

そう、全てを、、

ッ

込みあげる感情に、身を委ねた刹那、痛みに濁っていた眸が、ふ  
いに見開かれた。

そこには、澄みきった夜空を思わせる濃紺の眸が、静かに揺れて  
いた。

「あ、、、、」

顎先が床につくと、震えていた指先が、止まった。

瞼の向こう。

白々とした光が、溢れてくる。

突如、脳裏を過ぎった、その姿。

今、前頭葉の辺りから抜け出して、目の前に、佇んでいる。

物言わず、こちらを見つめるその人が、穏やかに微笑んでいた。

「ああッ」

痛む胸に押し寄せるのは、他でもない。

無上の懐かしさでもあり、愛おしさ、だ。

それが、今にも濁流となり、堰を切って溢れ出してしまいうだ  
った負の感情を、いとも容易く宥めてしまう。

娘は、もどかしそうに口を何度か開け閉めし、

「、、、、、、」

やがて、覚悟を決めたかのように、視線を逸らせ、俯いた。

血塗れた床につけた、頬。

その横顔はかつて、【よそ風に揺れる芙蓉の如し】と賞賛された、  
清楚でたおやか、そのものであった。

淡紅色の薄い唇が、微かに震えた。

肺腑に残っていた最後の吐息が、

「ティエ、、ラ、、、、」

静かに、吐き出された。

全身を苛んでいた痛みが、急速に遠退いていく。

そして意識もまた、視界を白く覆いつくさんとする光の中に渗む  
ように、溶けていった。

風も無いのに、ふわり、と窓に掛かっていた、絹布が揺れた。

はたして、こんなにも、暗かっただろうか？

【命ある者】がこの場に居たのなら、闇が濃くなったような、そんな  
錯覚さえ覚える事だろう。

窓の向こうから、さらなる闇と静寂が、忍び込んできたかのように  
だった

そして、闇と静寂はそのまま、床に伏した哀れな娘を腕に抱き、

「、、、、、、」

深く深く、更けゆく夜の帳に、沈んでいくのだった、、

もの哀しく噎び泣いていた胡弓の音色も絶えれば、辺りは無機質

な静寂に、包まれる。

高い塀で囲まれた後宮、それを鐘楼より眺めていた男は、闇に溜息を渗ませた。

「あともう少し、だった、」

呟きとは裏腹に、惜しいという感情を微塵も感じさせない、抑揚に欠けた口調であつた。

冷え冷えとした夜気が、痛いほどに張り詰めている。

「世を夢み、自身の境遇に憂い憂いて幽鬼に堕ちれば、良い手駒になると思つたんだが、」

本当に、【あともう少し】、だった。

胸騒ぎに似た、高揚感。

生まれ出でたばかりの幽鬼は、式神として使役するには格好な条件を、兼ね備えている。

彼らが属するのは、現世と常世の狭間。

言わば、神霊達にとつても管轄外のため、どう扱おうが、後腐れない。

「まったく、時間だけを、取らせてくれた、」

誰に言うでもなく、ひとりごちると、男は肩に掛けていた長い布を、半顔に巻きつけ始めた。

調度、左側。

耳の後ろから額に掛けて、目を覆うように。

シュツ…シュツ…

小気味良い絹擦れの音が、響く。

布を巻きつける手馴れた様子は、まさに流れるような所作であつた。

首の後、髪の中に隠れるように結ぶと、男は、暗い湖面が広がるその場所を改めて見つめた。

広大な後宮にあつて、高い塀で囲まれている、その一画を。

高い塀の内へと至る入り口には、物々しい松明が焚かれ、屈強な武官らが守っている。

そこには、白粉や紅が放つ特有の匂いは無く、華美な衣装を纏う者もない。

故郷を想い、さめざめと、泣き暮らす者が殆どだ。

高官に取り入り、神皇の寵愛を得んとする者や、他者と競い勝つ事に、存在価値を見出す女達とは、空気からして異質な、空間であった。

「、、、、」

それを、職業柄、出入りを許されているこの男は、肌で感じていた。

もちろん、先刻、息絶えた女が誰なのかも、把握している。

今宵は、新月。他の姫君らの安息に水を差すのも、気が引ける。明日、検めに行くか、、

後宮に住まう者から湧き上がる【怨嗟】は、神皇に向けられるものであつてはならない。

捻じ曲げてでも、己が被らねばならないものだ。

それが、男が負っている肩書きの、対価だった。

男は物見窓に、背を向けた。

真鍮の囲いに嵌め込まれた紫紺色の硝子、その中でゆらゆらと頼りなげに揺れる炎が、地上へと続く螺旋階段に、影を落とす。

カツカツ、と長靴の踵を鳴らせながら、

しかし、、

男は、ぼんやりと考える。

あの娘は、蛮族の姫の中でも、一番聞き分けが良かった。

全てを諦めている、そんな様子の者なら、今まで幾度と無く目にきてきている。

だが、

あれは、、確かに受け入れようと、していた、、

娘は、一目で違つたと知れた。

清楚な外見からは想像も出来ないが、置かれた境遇を受け入れ、理解しようとしていた感があった。

ただ、漠然と世を夢み、諦めた【生きながら死んでいる者】とは違う。

傍から見れば【生きながら死んでいる者】と変りないのかもしれないが、男は娘から、宿命に抗ってまでしても生きたいと言う氣負い、その匂いを、嗅ぎ取っていた。

だからこそ、、

思わず唇の端が、吊り上がる。

薄い唇に、酷薄な笑みが、湛えられていた。

その魂魄が、瓦解する様を見たかった、、

己が死に直面した、まさにその時、用意された無情なる宿命を前に、無力感に打ちひしがれた娘は、失意の内に負の感情に呑み込まれ、そして、幽鬼へと堕ちる、、はずだった。

「、、、、」

しかし、実際はどうだ。

鐘樓の遙か高みから、男は確かに、視ていた。

絶望や恐怖、怒りや憎しみ、その痛みに吞まれんとした刹那、娘を【あるがまま】に繋ぎ止めたものがあった。

それは、何だったのだろうか？

最後まで人たらんと、乗り越えたその強さは、どこからくるのだろうか？

腕を組みなおしながら、考える。

もし、その強さがあつたのなら、、あの時、自分は、、

不意に、

アケワタセ…

「ッ」

ずきん、と、左目の奥が、痛んだ。

頭蓋をわんわんと反響させる程、甲高い耳鳴りが、弓で搔き鳴らされるように【声】となる。

アケワタセ…

もう一度、同じ言葉が、奏でられた。

思わず、巻きつけたばかりの布地の上から、左の半顔を押さえた。抑えた手の平、その下が、灼熱している。

熱い。

熱く、じつとりと手の平を濡らしてゆく。

血の雫が、手首に巻かれた布に吸われ、黒い染みを作った。

冷や汗が頬を伝い、堪らず男は齒を剥いた。

眉を寄せ、肩で息をする。

「、、れ」

血の気を失った唇が、震えた。

「黙れッ」

短く、吼えた。

引き攣るような痛みは、左目の灼熱と共に、霧散。

鳴り響いていた音 こえ も、沈黙していた。

「はあ、、、、は、、、、あ、、、、」

冷え冷えとした大気に、けして白くはならない冷たい息が、吐き出される。

呼吸を整えると、男は何事もなかったように押し黙り、

「、、、、、、」

暗紫に彩られた闇の中へと、溶け込んでいったのだった。

翌朝。

「結構、気に入っていたのだが、、」

血塗れた胡弓を眺め、男は転がっている弓を手にとった。

馬の尾の房は、すっかり赤黒く変色し、こわばっている。

折れそうな程細い指先で、慈しむように撫でれば、房に塗られた膠の名残が、ざりざりとした感触を伝えてくる。

冷たくなって、息絶えている屍には見向きもせず、男はその腕に

胡弓を抱くと、背を向けた。

冬の冴え冴えとした朝陽が、若草色に染められた絹布を巻き上げ、薄暗い部屋に差し込んだ。

そのまま、

「、、、、、、」

眩い光に照らされ、思わず貌を顰めた、男。

痩せぎすで華奢な体躯には、赤黒く染められた布を幾枚も巻きつけるようにして、纏っている。

若い。

角度によつては少年にも、青年にも、見える。

朝陽を浴びて、銀の光沢を放つのは、この国では珍しい、薄墨色の肌だ。

細い首の辺りで揺れるのは、やや青みを帯びた鼠色ねずいろの髪。

同色の、細い剣眉の下で、深紅に縁取られた長い睫毛が揺れた。

右目は、冷たく澄んだ氷湖を連想させる、水縹みずはなだ。

左目は、布が耳の辺りから額にかけて布で覆われ、窺えない。

「、、、、、、」

光に背を向けるように、足早に離宮から退散しようとするその背中に、

「導師」

低く、抑揚に欠けた声が掛かった。

頭頂部から足元まで、淫色くりいろの長衣ですっぱりと覆った者が数名、屍の周りに佇み、これも表情の窺えない布の奥から、視線だけを送ってくる。

ひどく緩慢な態度で、肩越しに振り向くと、

「古の時代、蛮族らと交わした不可侵の契約は、今だ、その効力を持つ」

薄い唇が、酷薄な笑みを湛えた。

「それでは、、、、」

僅かに、肩を揺らす者達に、

「探せ。この世の果てまでも。王は、直系の姫をご所望だ」

言い捨て、導師は離宮を後にする。

キュイイツ……

きつく張られた一の絃が、鋭く伸ばされた爪先で辿られれば、血塗れた胡弓は悲鳴じみた音色を放つ。

その音色を、爪弾く感触を、愉しみながら、導師はくつくつと喉を鳴らした。

鏡のように凪いだ、湖面。

水面下では、底知れぬ深みに差し込む陽の光が、青々とした光を幾重にもくゆらせている。

そこに映るのは導師の、怜悯な容貌。

だが、

「、、、、、、」

酷薄とすら思える笑みを湛えた唇とは対照的に、白日の下に晒された右目には、どこか悲痛な感情が、揺れているようだった。

温かい。

それは、全体重を掛けていても、感じる温もりだ。

弾力があって張りが、ある。

親指を重ね、両手で包み込むように力を込めている。

薄霧立ち込める空間であつた。

首を、

「、、、、、、」

「、、、、、、」

絞めている。

絞めているのは、馬乗りになった黒髪の長い、女。

絞められている相手は、抵抗するでもなく、横たわっている。

黒白の輪郭だけという姿なのに、女の手の中に、気道が空気を求

める生々しい反応を伝えてくる。

己が首を絞める女を、無意識に傷つけないためか、輪郭だけの相手は自身の腕に爪を立てている。

「くっ、くっ、」

噴き出す汗が、涙と相俟って、女に苦鳴を漏らせた。

早く、終わらせてやらなくてはならないのに、終わらない。  
終われない。

もどかしさで、手が震えた。

じつとりと噴き出した汗で、手から力が、抜けそうになる。  
その腕に、温もりが触れた。

「ヒュ、ヒュ、」

「あ、あ、」

目が、合った。

いや、ずっと、合っていた。

その全てを焼き付けるために、瞬きすら、忘れていた。  
気負い、焦るその心を宥めようと、

「んっ」

横たわった相手は、女の細腕を弱々しくも優しく、擦った。  
女の顔が、

「うつつ」

とたんに歪む。

折れそうになる心を奮い立たせ、唇を咬んだ。

細く眇められた眸は、苦痛に喘いでいても、澄んでいる。  
穏やかすらある眼差しを受け、

「ぐぐうッ」

「、、、、、、」

八重歯が、

ぶつり、と薄皮を突き破れば、舌尖に血の味が、広がった。  
指先が、柔らかい皮膚に食い込む。

腕が、ぶるぶると震える。

見開いた、眸。

目尻が裂けて、血が滲む。

ギギッ

手の中で、骨が軋んだ。

微かに唇の端を震わせると、

「、、、、、、」

横たわっている相手は、眸を閉じた。

女は、一度強く首を振ると、

「があああッ」

猛々しくも哀しく、吼えたのだった。

「う、、、、はっ」

手が宙を掻き、固く閉じていた瞼が、瞬きを繰り返す。

天蓋には、見慣れた深紫の牡丹が咲き乱れていた。

どのような造りなのか、天蓋から迫り出した、牡丹を閉じ込める透明な半球体の向こう側では、蒼い胡蝶が、雪色の鱗粉を撒き散らしながら、優雅にひらひらと、舞っている。

淡い色合いの紗を重ねた、帳。

それが降りたままの寝台から、

「くそっ、、、、」

遙絃は跳ね起きた。

いつも、誇らしげにぴんと張った大きな耳は今、完全に伏せられ、天狐の名に違わず、ふさふさとして堂々たる九尾は、柳腰の後ろで力なく頂垂れていた。

ビッ

握り締めた帳が、鋭い爪によって、引き裂かれる。噴き出した汗が、雪色の肌を、滴り落ちていった。

「はあ、、、、はっ、あ」

薄闇の中、白い寝着の裾が、長く靡いた。

「くっ、くっ、」

遙絃は寢室の窓辺に縋ると、月の光を吸収し、淡く白光する夜光石の壁に、握り締めた拳を打ちつけた。

何度も、何度も。

いっそ、くっ、切り落としてしまおうか、くっ、ッ

あの日、終わったはずなのに、今尚続いている、これは悪夢だ。温もりも、弾力も、まざまざと思い出せる。

残って、いる。

睨み据えた両の手が、忌々しい。

「くっ、くっ、くっ、」

気を、紛らわせなくては、切り落としかねない、心持ちだった。両手から、視線を逸らそうと、遙絃は、窓の向こうへと視線をやった。

紺碧の夜空に在って、この大地に迫る勢いの、橙に翠の縞の入った大きな星。

円形の淵も歪な、クレータだらけの青白い星が、それに重なっている。

紅と翠がゆらゆらと交じりあい、たゆたい揺れるのは、オーロラだ。

荒ぶる胸中とは裏腹に、己が作り出した世界は、静寂で満ちていた。

平素は賑やかな野狐達も、今頃、それぞれの寢床で安らかな夢に遊んでいることだろう。

彼らの存在を思い出せば、しつとりと湿気を帯びた夜気を、ようやく素肌に感ずることができた。

夜光石の壁の冷たさが、握り締めた手から、染み入ってきた。

夢よって調律され、同調していた感覚が、徐々に切り離され、現世に戻ってくる。

遙絃は、白くなるまで握り絞めていた拳を、ゆっくりと開いてい

った。

揺れては、いけない。

自分が揺れては、慕い、仕えてくれる彼らの安寧を、守ることができない。

「ふ、う、、、」

静まりかえった屋敷の中、遙絃は、深く息を吐き出した。

忌々しさは、疲労感と脱力感に、変りつつあった。

「、、、、、、」

それまで伏せられていた獣の耳が、跳ね起きた。

聞き覚えのある足音と、陶器が触れ合う音が、近づいてきた。

獅子が、鞠で遊ぶ様子を描いた、衝立の向こうから現れたのは、隻眼の優男。

砂色の髪を背に流し、漆黒の寝袍シェイパオを纏い、盆を手に行っている。

「、、、、、、」

腕に頬を預け、力なくこちらを見つめる遙絃の視線を感じながら、胡露は寝室脇に置かれた卓子の上で、ただ黙々と茶器を操り始めた。

「、、、、、、」

「、、、、、、」

互いに、声を掛けるでもない。

茶器が触れ合う音と、芳しい香りが、今ある音の、すべてであった。

やがて、

ジ…ジジ…

微かに、茶葉が開く音が、聞えてきた。

胡露が、無言で蓋碗を差し出した。

遙絃も、黙ってそれを受け取ると、手で包み込む。

じんわりと手のひらから伝わる温かさに、

「ほう、、、」

思わず弱い溜息が、漏れた。

蟲惑的な唇を寄せ、立ち上る湯気と共に一口啜れば、冷え切った

体を内側から温めてくれる。

強張ったままだった遙絃の肩から、力が抜けるのを確認して、

「遙絃、、、」

胡露は、ようやく声を掛けた。

「、、、大丈夫だ」

いつもは涼しげな紺碧の双眸に滲む、疲労感。

けれど口調は、いつもの尊大すらある天狐遙絃のものだ。

顔には出さないが、胡露は内心、ほっとしていた。

それから、遙絃が無言で茶を啜る様子を、見守りながら、

ここしばらく、頻発している、、、

胡露は、ここ数日の出来事を反芻していた。

遙絃は、時折、今日のように魘される。

魘される理由は、話さない。

胡露も、聞き出そうとは思わないが、尋常ではないその姿を目にする、なんともいたたまれなくなる。

以前、そんな胡露の心中を察してか、

『これは、私が、負うべきものの一つだ』

遙絃は、そう言つて、少し寂しそうに笑った事があつた。

理由はどうあれ胡露は、遙絃なりの、負うべきものへの覚悟を、そこに垣間見た。

それからと言うもの、魘され始めれば、胡露は遙絃を起こすような事はせず、我に返るのを見計らつて、茶を淹れることにしている。過剰な優しさも、介抱も、その覚悟の前で遙絃は、望まないだろう。

「、、、、、、」

ふと、紺碧の眸と、ぶつかった。

視線の先で遙絃は、一度、唇から碗を放すと、

「お前の淹れてくれた茶は、本当に、温まる、、、」

その目を眇めて、そう言った。

「それは、何より、、、」

胡露も、隻眼銀恢のその眸でもって、見つめ返した。

月のない夜空を映す、大海原。

その色を宿した紺碧の眸も、この時ばかりはいくらか、安らいで見えた。

第拾ノ式幕前

血胡弓

(後書き)

以上、序章部分【無題】を添削し、再度載っけております。。。

第拾ノ武幕中ノ前 - 思ひ色 - (前書き)

花守見習いの少年、宵藍。一族の言いつけを守りながら、年老いた花守を助けて暮らしていたが、、、

死人還りの都守蒼装、業丸を継ぐ武官燕倪、幽身であるがこの世に縛られた伯。それぞれが紡ぐ異国絵巻、第十二幕中の前編。。。

第拾ノ武幕中ノ前 - 思ひ色 -

顔を、あげてはならない

ここは、結界外。

人柱の守護も、無い。

声を、紡いではならない

この地は、最果て。

地仙同士の繋がりには、あまりにも脆弱。

その守護にも、頼れない。

自由を、嫉んではならない

ただ、じつと息を潜めるしかない。

追手に見つかれば最後、連れてゆかれる重き扉の向こうは、血の  
通わぬ鬼畜の園と聞く。

【掌握される者】と、【掌握する者】。

古の契約に取り決めされた、それが運命。さだめ  
今更、覆すことは、できない。

【契約】は、【掟】を掬めとった。

【掟】は、一族の誇りだ。

例え、最後のひとりに、なったとしても、、、

後ろ手に扉を閉めると、白い息が、大気に滲んだ。

指先が、冷たい。

手を擦りながら、暮らし慣れた屋敷を見回した。

「、、、、、、」

いつもと、同じだ。

凜として瑞々しい椿、まっすぐに空を仰ぐのは枯芙蓉、鋭い棘を  
持つ葉の下で可憐に揺れる柊、薄紅を散らす山茶花、そして、一際

目を引くのは、俯きがちに蕾を結ぶ、鮮やかな蒼い芥子だ。

ふいに、足元で木枯らしが巻いた。

木の葉に交じって、ちらほらと、白いものが舞い上がっていく。  
門の脇に植えられた、冬桜の花弁だろう。

「ほう、」

小さな溜息が、思わず、毀れた。

屋敷の塀の内には、季節の花の香りが、満ちていた。

その香りに、安心、する。

少し、はしたないか、と逡巡しつつも、指先に走った鋭い痛み、  
手を袖に入れた。

懐手は、温かい。

母屋への小路を行きながら、屋敷へ戻る道中考えていた事が、  
再び首を擡げてきた。

思わず、

「、、、、、、」

唇を噛み締めた。

どこでも同じだと、思った。

屋敷のうちでは、自由にできる。

だが、

これでは、どこにいったって、、

もう一度、噛み締めるように、口の中で繰り返した。

それは今まで、幾度と無く、繰り返した事だった。

何よりも、自分自身に言い聞かせるために、、

鐘の音が、瀟々と聞えてきた。

見上げれば、雲が橙に焼けている。

濃紺に染まった東の空と、夕暮れの西の空が鬩ぎあい、その狭間  
を、ちょうど雁の群れが行くところだった。

北へ、向かっている。

その向こう。

峻しい弩礫山系くわいざんの向こう側には、紺碧の海が大地を割り、広大な

陸地が、在る。

「、、、、、、」

大陸。

瞼を閉じれば、若草色の豊かな故郷が、今でもまざまざと、蘇る。故郷を離れて、随分経つと言うのに、噓せ返るような草の香りが、鼻腔に残っているような気がした。

抜けるような、青い空の下。

野生の馬が草を食み、羊達の水場を求め、長い列を作る。

風にそよぐ、一面緑の大草原。

その中で、冴え冴えと白銀の輝きを放つのは、銀狼達だ。

草原の、絶対的な捕食者。

美しい、その毛並み。

気高い大地の霸王として、生態系の頂点に君臨する孤高の存在。

その遠吠えは、いつだって耳に、心地良い。

ささくれだった心も、訪れる闇夜への不安も、何もかもが、すべて風いでゆく。

物心ついたときから、その声は、身近にあつたせいもある。

けして、怯えるものではない。

夜の帳が降りる時分、必ず聞えてくる遠吠えは、一族の守となるかわる、【合図】だ。

決まって祖父の左の膝で、聞いた。

そして、右の膝には

「、、、、、、」

そこで瞼を、押し開けた。

草の香りは掻き消え、噓せ香る花々の匂いが、宵闇に沈まんとする冷えた大気に、濃厚に溶けていた。

シャオラン

「宵藍」

しゃがれた声が、掛かった。

扉の前、足元に落ちた影をいつまでも見つめていた少年は、我に返って顔を上げた。

枯れ枝のような瘦躯が、花園から母屋を繋ぐ渡り殿の一面に、佇んでいた。

「老爺、<sup>らおいえ</sup>、」

屋敷の外では、終始黙っていたためか、声が、掠れた。

「ああ、寒かっただろう？」

佇んだままの少年の傍に、足早に老人が歩み寄る。

この屋敷、永寿宮の主である、【花守】。

見慣れた顔が、

「風邪をひく前に、中へ、」

優しく微笑み、そつと肩を押した。

じんわりと伝わるその手の温もりが、【今】を、伝えてくるようだった。

「こつ急に冷え込むと、節々が悲鳴を上げる。お前がいてくれて、助かったぞ、宵藍」

「あ、いえ、」

老いた花守に変わり、季節の花々を御所に献上しに行った、帰りであつた。

とは言つても、決まつた時刻に門前で、顔見知りの役人に渡すだけなのだが、

「御上は、白い花がお好きだと聞く。丹精込めて育てた椿に、冬桜の花枝、お気に召されるといいが、」

「あの立派な花枝ならば、香りも良いはず。見事な枝ぶりでしたから、きつと、お気に召されることでしょう」

それでもその後、あたりをぐるりと散歩するのが、ささやかな楽しみでもある。

道を行き交う旅装束の一団や、煌びやかな装飾の車、肥馬を操る武官に、年頃も近い童達の姿。

賑やかな帝都の喧騒に揉まれれば、今在る場所こそが、己が生きている場所なのだと、思えた。

しかし、

「、、、、、、」

今だ、ぼんやりとしている少年の眸に揺れるのは、一抹の寂しさだった。

老いた花守の乾いた唇が、しゃがれた声を、紡ぐ。

「姉姫の心を、、、、」

「つ、、、、」

弾かれたように顔を上げた、少年。

その大きな黒瞳を見つめ、花守は、

「大陸から、早くに離れた儂が言うのも、どうかと思うが、、、、」

そこでいったん言葉を切った。

長い白眉の下にある、大きな眸は、

「酌んでおやり、、、、」

亡き祖父に、良く似ていた。

少年は、再び、俯いた。

やがて、

「、、、、、、、、」

小さく頷いた。

骨ばった、大きな冷たい手が、そつとその髪を撫でる。

祖父のものと良く似た、けれど、祖父よりもすんなりとしたその手は、花々を慈しむ大地の香りが、した。

長く、夕日に影が伸びる往来を、牛車が行く。

手に鞭を持ち、牛を追う童。

ぎしぎしと車輪が軋む、小気味良い音色の中、車に寄り添うように歩いていった大柄の男は、鼻先を掠めた微かな臭いに、素早く辺りを見回した。

「、、、、、、、、」

一瞬、横切ったかに見えた影はすでに無く、寒々とした風が、吹

き込んでくるだけだった。

憂いに沈んだ眼差しが鋭く眇められ、

「銀仁、、、」

物見が少し開いて、声が掛かった。

陰陽頭天羽充慶と、目があった。

「充慶殿、、」

正体も定かではないうちに、なんと言っているのか。

銀仁は、浅く息を吐いた。

一方、充慶は、星が煌き始めた空を見上げると、

「風が、澱んでいる、、」

顎を撫でながら、そう言った。

「風、、、、」

釣られて、銀仁も空を見上げた。

時折、体ごと攫われてしまいそんな強い風が吹き荒ぶ中、鼻を鳴らしてみたが、先ほど捉えたような気配は、嗅ぎ取れなかった。

「何か、良からぬ事が、近づいていると、、？」

空を睨むように目を眇めた銀仁に、

「そんな気がするだけだ、、」

充慶は、苦笑を浮かべた。

「虫の知らせ、のようなものだ。杞憂に終われば、それに越したことはない」

時折、白々としたものが舞い散るのを眺めながら、

「先代都守が在れば、、」

思わず、口を突いてでた言葉に、充慶は頭の後ろを、掻いた。

子供のようなその仕草に、

「先代、、？」

銀仁も、興味をそそられた。

「先の都守。清々しい風を纏う、女性ひとだった。風伯と会話する、そんな稀有な資質を持った方だな」

「風伯と会話、、」

「ああ。あの人がいたのなら、、、つい、そう、考えてしまったのだよ。儂も、年を喰ったものだ」

風伯。

それは気紛れな、風の精霊。

そこらかしこにいるのに、語りかけても素知らぬ顔で、傍らを擦り抜けてゆく。

深い皺が刻まれ、髪にも白いものが交じる天羽充慶であつたが、思慮深い眼差しが、いつになく、澄んで見えた。

そう、まるで、少年のように。

「その方は、、、」

詮索するのともうかと戸惑いつつも、この時ばかりは銀仁も、好奇心を隠せなかった。

なにせ、この世の習いから言えば、あの【異形の都守の養母】に当たるのだから。

もっとも、それは、【異形】となる以前の【蒼装】の【養母】、なのだが、、、

充慶の眸が、もう一度空を見上げた。

重そうな灰色の雪雲が、いつの間にか、東の山稜より、こちらに迫っていた。

「もう随分と前に、亡くなった。先の帝が幼くして崩御され、後を追うように、すぐに、、、」

「高齢だったのです?」

銀仁の問いに、

「いや、、、」

頭を振ると、充慶は物見窓の縁に頬杖をついた。

視線を宙に彷徨わせながら、

「何をどうしたものか、いつまでも、若かった。齢は、七十を数えていたかもしれん。それなのに、見てくれば二十歳そこそこだった。神霊の加護の賜物か、不老不死ではないかと噂される程でな」

「不老不死、、、」

人であるのなら、俄かには信じがたい事であった。

目を丸くする銀仁を他所に、

「両目は、生まれつきの【破眼】。神霊に好かれると思えば、化生とも親交深く、そのまま正邪を、、陰と陽の理を、その身に併せ持つような方であ、、、」

破眼。

場所によつては、邪眼や蛇眼、霸王眼とも呼ばれる。

神々からの【福音を告げる者】、または【災厄の予兆】とも言われ、そのまま崇められる対象にもなれば、忌み嫌われるものでもある。

さしもの銀仁も話には聞いた事があるが、実際、目にした事はなかった。

「得意とするのは、呪術。だが、実際はどうだ。手解きもそこそこに、当時修業生だった儂に教えてくれた事と言えば、酒の呑み方よ。懐かしいものだ。あの頃はまだ、陰陽寮も星読寮も、互いにうまくやっていたのだよ、銀仁」

在りし日のその人を思えば、平素、宮中で引き結ばれている口元が、自然に緩んでしまうようだった。

陰陽寮では統括として、威厳に満ち溢れている充慶が、この時ばかりは少年のように、目を輝かせている。

それが銀仁には珍しく、不思議に感じだようだった。

会ってみたいものだ、、

思わず、そう心の中で呟き、そして、驚いた。

誰かに会ってみたいなど、この国に流れ着いてから今まで、思ったことなど、一度も無い。

生きる事への後ろめたさと、負い目を感じていた自分の中で、心境の変化が少なからずあったのだろうか？

だとしたら、それは、、

「お、、、、」

ふいに、巻いた風に、あかいものが舞った。

ひとひら…ふたひら…

銀仁の足元に舞い寄ってきたものは、どこかの庭先にでも咲いたのか、寒椿の花弁であった。

それが、強い風に攫われ、空高く、舞い上がってゆく。

もうすぐ、屋敷に着くと言う、その寒空さむそらの下、

「あつ、…、銀仁っ」

銀仁の姿に大きく手を振ったのは、門前で馴染みの庭師と談笑していた、あとりであった。

大方、庭師らの後について回っていたのだろう。

木々の手入れをする匠の技はいつ見ても、あとの好奇心を刺激するらしい。

「父上っ」

あとりが、駆けて来る。

朱華に梔子の段の唐衣は、手鞠と雉を縫い取ったそれは上等なものだ。

手毬の細やかな糸巻きから、雉の翼の細部に至るまで、職人の技がいたるところで窺える。

姉姫と同じく、そろそろ年頃を迎えるのだから、屋敷の内で歌や箏に親しんで欲しい、と言う、母、津々ついで螺の、せめてもの想いが、現れているのだろう。

「おお、あとリ」

充慶が、あとの姿に破顔し、牛車を止めさせた。

衣の裾を摘んで、元氣いっぱいに駆けてくる姿など、肺を止んでいた頃のあとリを知る者ならば、驚嘆せずにはいられない快復ぶりだろう。

心得た銀仁が簾を上げれば、浄衣姿の充慶が、往来に降り立ち、

「父上、銀仁も、おかえりなさい」

「ああ、ただいま、あとリ」

額に掛かる前髪を払ってやりながら、目を眇め、我が子を迎えた。

「、、、、、、」

銀仁は、その傍らであとりに頷き、陰陽頭から少年、そして、父親の顔になった充慶の横顔を、なんとも穏やかな心持で眺めた。

白い息を吐きながら、頬を朱鷺色に染めたあとりは、

「こんな早い時間に、二人揃ってなんて、珍しい」

青みを帯びたその眸でもって、二人を交互に見つめる。

華奢なその肩を押して、屋敷へと向かいながら、

「たまには、あるものだよ、あとり。こんな日のために、我らは皆、骨を折っているのだから。なあ、銀仁、、、？」

充慶は、銀仁に問うた。

「ああ」

大きく頷けば、あとりの大きな眸と、目があった。

勝気で、それでいて深く澄んだ黒瞳は、そのまま吸い込まれそう  
だ。

あとり。

小さき、銀仁の主。

その傍らに、在れる。

この先、迷いや憂いが消える事はないのかもしれない。

けれど、

己が心を偽らずにいられるのは、あとりがいるからだ、、

今は、素直にそう思えるのだ。

すぐ傍らで、背の高い銀仁を見上げたあとりが、

「なんだか、ひなたぼっこしている猫のような顔をしておるぞ、銀仁」

笑って、そう言った。

「そうか、、」

銀仁も、思わず苦笑を浮かべ、顎先を撫でた。

今の自分の顔は、あとりの言う通り、なのだろう。

そんな心持、なのだから。

屋敷の前で、

「充慶殿。お帰りなさいませ」

腰の曲がった老いた庭師が、頭を下げた。

道具を背負った、孫と思われる若者二人も、その傍らで揃って頭を下げた。

「ああ、与助殿。いつも、世話になっている。この寒さだ、脚を傷めていると聞いた。車を出そう。乗って行くといい」

「お氣を使わないでください。このお庭に寄せてもらえる事が、わたしの誇りでもあります。それで、十分でございますよ」

手を振って断ると、杖を手に、一礼。

「それでは、これで失礼させていただきます。雪が深まる前に、寄らせて頂きます。姫様、鷺草のお話の続きは、また、」

「うん。柊殿も、梅殿も、またね」

「姫様、その呼び名は、」

顔を見合わせ、思わず苦笑した、若者二人。

たまたま喧嘩したおりに、別々に柊と梅を手入れしているところをあとりに見られ、そのまま呼び名になったらしい。

一行は往来を、北へ向かって歩いていった。

二人の孫に付き添われ、遠ざかるその背をしばらく見送っていた充慶が、ふと、

「あと、何やら与助殿の背中に、影があるようだが、」  
問うた。

あとは、頷くと、

「父上、与助殿の奥方が、病で苦しんでいるのだ。庭師には、楓と紅葉の見分け方や、花々に纏わる物語を、たくさん聞いた」

充慶を見つめた。

「ふむ、」

一際強い光を放つ、その眸。

「父上は、あとりが病に倒れば、たくさん符をくれた。心強かった。符は、父上からの励ましの手紙だと、母上が言った。だから、快癒の符を、あとりにも教えて欲しいのじゃ」

意志が、そうさせるのだ。

「もちろんだ、あと。病に打ち勝ったお前の励ましなら、効果は絶大だろう。書いてやりなさい」

「うんっ」

あとは、充慶の袖を掴んだまま、門を潜った。

銀仁は、その父子の様子を、少し後ろに下がって見つめていた。

下男が庭先で落ち葉を掃く音に、姉姫が爪弾く箏の音が、交じる。忙しない足音に続いて、おしゃべりな侍女達の紅の袴と白い単が、屋敷のあちこちで見え隠れする。

すっかり冬支度を終えた、庭。

雪吊や、冬囲いも済んだ庭木らが、いよいよ冬の到来を歓迎しているようだ。

大池には、今年もやって来た鴛鴦が羽を休め、湖畔では、どこから迷い込んだのか一匹の野良猫が、池に落ちたその影に釣られ泳ぎ寄る鯉には目もくれず、じっと二羽を凝視している。

平穏な日常の風景が、炊事の煙を上げる母屋を背景に、広がっていた。

「、、、、、、」

そんな中で、銀仁は一人、口元を引き結んだ。

先程気付いた黒い気配も、充慶が感じ取った違和感も、穏やかなこの風景を目の当たりにすれば、

本当に何事も無ければ、いいのだが、、

思わずそう願わずには、いられなかったのだった。

臥待月が、ようやく顔を覗かせた、深更。

頼りない星月の明かりが、湖面に揺られている。

ここは、浮き御堂を頂く、青梅池。

その昔、仙洞の敷地内にある千年杉の頂に、降り立った天女がこ

こで、口を濯いだとされる。

当時は、満々と澄んだ水を湛えていたのかもしれないが、今は、見る影も無い。

暗い水面に面した、その濡縁に、

「、、、、、、」

黒い影が、陽炎の如く立ち昇った。

一度、霧のように散ったかと思えば、再び集まり、  
ゆらり…

女の姿となった。

長い垂髪は、艶々と濡れびかり、銀の光沢を放つ。

青白い肌は、陶器の滑らかさで、抱きしめたら、折れてしまいそうな程に華奢なその身に纏うのは、唐衣

黎明を表す濃紫に、天の川が銀の錦となって縫い取られ、番いの白鷺がその中を、翼を並べている。

ふわりと袖が振られると、

「ふう、、、、」

赤々とした唇から、細い溜息が毀れた。

どこか恨めしげに月を眺めてから、

「、、、、、、」

再び、その身を冷たい水底に沈めんと、濡縁に身を寄せた。

伸ばした指の先で、水が、跳ねた。

指先から全身に、刺すような痛みが、奔る。

冷たい。

「、、、、、、」

実際には、その記憶だけが遠く、残っている。

もう一度、手が、水を掻いた。

指先に纏わりつくような、感触だけが、残った。

もう一度、女は貌を上げた。

細い月は、変わらず同じ場所で、こちらを見つめている。  
ふいに、女の眉が、苦しげに寄せられた。

次の臥待月の頃には、この池は、厚い氷に鎖されることだろう。

その前に、せめて、もう一度だけ、、  
しばらくの間、

「、、、、」

無言で月を眺めていたが、女は、想いを振り切るように固く瞼を閉じ、貌を背けた。

その頬を、一筋の涙が、滑り落ちる。

足元に蟠るのは、波打つ、闇。

そこに、足を踏み出そうとして、

「つ、、」

振り向いた。

風の音に、衣擦れの音が、混じっていた。

「遅くなった、、」

男がひとり、闇の中から抜け出してくるところであった。

髪は、烏帽子に仕舞われ、伶俐な細面に、月明かりが陰影を落とす。

凍える冬夜に、燃えるような臙脂の長絹が、鮮やか。

浮御堂に現れたのが、幽鬼の如き姫ならば、こちらは、人の姿をして現れた、鬼神と言ったところだろうか？

生前、舞を嗜むと言うその男に、女が縫って贈ったものだ。

どこか、酷薄な笑みすら口元に湛えて、浮島から、平橋を、こちらの浮御堂へ。

真紅に染められた唇が、込みあげる想いに堪えきれずに、震えた。  
冷えた大気を吸い込み、そして、

ヒギア…ッ！！

引き攣るような己の声に、女は、唇を押さえた。

声帯が、かつてのように機能していないことに、動揺したのだろう。

「、、、、」

だが、呼ばれた【名】を、男は確かに聞いて、頷いた。

動じるでもなく、古ぼけた浮御堂に至ると、女の元へ。

「気にするな、、、」

「、、、、、、」

女は、口を袖で押さえたまま、涙で潤んだ眸を向けた。

眸は、哀しい色を、帯びていた。

「そなたの声を、私は違えぬよ」  
たが

唇の端を、僅かに吊り上げると、男は手を差し伸べた。

おずおずと、女は手を伸ばす。

まだ、水に濡れたままの指先を、

「約束を破るような男に、見えたか？」

男の親指が、擦った。

闇色の眼差しに見つめられれば、

ア…

待てど暮らせど、現れなかった【あの日】を思い出し、水底へ帰ろうとしたのを見透かされた気がして、何とも恥ずかしい気持ちになった。

女が、慌てて、首を振る。

それは、幼い子供の仕草に、似ていた。

「では、行こうか、姫、、」

その手を引いて、男はゆっくりと歩き出す。

浮御堂を出、いくつも掛けられた橋を、女の歩幅に合わせて、渡る。

池の浅瀬。

葦の茂みで寄り添うようにして眠る、葦鴨。

葉を落とした木々の下では、夜露を結ぶ苔蒸した大地が煌き、梢では木兔が、首を傾げている。  
みみずく

その上を、星が、幾つも流れた。

水の中から眺めるのとは、まったく違う風景。

それなのに女は、

「、、、、、、」

繋がれた指先を、見つめている。

そこから温もりが、じんわりと伝わってくる。

かつてのその人よりも、ずっと、すんなりとした背中。

腕や肩は、もっと遅しかった。

それでも、

「姫、、、？」

視線を感じて、男が振り向けば、

「、、、、、」

女は黙って、なんでもないと首を振った。

再び俯いて、頬が緩んでいる自分に、気がついた。

不思議だった。

たった数日前、出会ったばかりだと言うのに、、

その日、女は、浮かび上がった池の畔で、この男と会ったのだ。

『そろそろ逝く気になったか、、？』

声を掛けられたことにも驚いたが、初めてにしては、ずいぶんと

不躰な言葉だと思った。

だが、その闇色の眸に、投げかけられた言葉とは別の何かが窺え

て、一つ、我俣を言ってみせたのだった。

そう、、、、

あの日、叶えられなかった、【最後の願い】、を。

「うっ、、、、」

太刀に手を掛けたまま呻き、思わず肩の辺りを擦った。

あいつ、あんな薄着で、よく、、

眺めた先の、平橋の上。

ちようど、男が女を振り返ったところであつた。

古ぼけた薬師堂の軒庇の下。

座るに調度いい庭石に、腰掛けている。

「ん、」

小さな声が、すぐ傍らで、漏れた。

膝に背を預け、身を丸めるように、大きな瓶子を抱いている。

今さっきまで起きていたと思えば、いい気なもんだ、

群青の髪と、翡翠の一对の角が、寝息と共に揺れている。

無骨な手が、その髪に触れ、頭を撫でた。

宵闇に沈む時分、蒼装の屋敷を訪ねたのだが、珍しく伯がその袖を引いているところに、出くわした。

話を聞けば、幽鬼との約束を果たしに行くと言う。

相手が相手だけに、伯を置いていきたい、蒼装。

そして、自分も行くと言って聞かない、伯。

蒼装は存外、伯の胸の内が分からぬのかもしれないが、燕倪は、何故だか伯の様子を見て、すぐに検討がついた。

蒼装に、『来るな』と言われた事が、伯にしては、単純に嫌だったのだろう。

そして燕倪は、その伯に乗った。

青梅池に眠る姫の話は、帝都に住む者ならば、知らぬ者はいない。その姫が、現れると言うのだ。

気にならない、はずがなかった。

伯は自分が見ているから、と蒼装を言い包めての同行となった次第である。

しかし、なあ、

顎先を撫でながら、燕倪は周りを眺めた。

二人を取り囲むように、円が描かれている。

大地が、濡れているのだ。

場所を定めると蒼装は、伯の翡翠輪を外し、酒でもってぐるりと円を描かせた。

『伯が描き、結んだ結界だ、』

『だが、これじゃ、丸見えじゃないか。隠れなくていいのか?』

これといった遮蔽物は、無い。

白い花をつけた、柊の青々とした茂みがあるくらいだ。

蒼装は腕を組むと、怪訝な顔の燕倪を、冷ややかに一蔑し、

『伯がいる限り、ここは、浄域。姫からは、見えはしない。ここを、出るな、』

そう言い放つと、浮御堂を伺いながら、平橋の方へと歩み去ったのだった。

必要ないと言われたが、万が一の業丸の出番を考えれば、伯の酒の相手をするわけにもいかず、杯に酒を満たしてやつては、現れ出でた青梅池の姫の姿を探して、目を凝らしていたわけだが、

「、、、、」

「う、、ん、、」

傍らで、掛けられた衣を巻き込むように、己が肩を引き寄せる、伯。

案の定、同行した事に満足したのか、青梅池の姫を見るでもなく、眠ってしまった。

お陰で、燕倪の長衣は、伯の体に掛けられることとなった。

病とは無縁の、半神体であると知ってはいても、この男の性分で、寝顔だけは、どこからどうみたって、いっぱしのガキ、だよな、、

どうにも、割り切れるものではないらしい。

安らかな、その寝顔を見つめていると、

「お、、」

衣擦れの音が、徐々に近づいてきた。

顔を上げれば、池の畔を、女の手を引いた蒼装が、こちらに向かってくるところであった。

思わず大きな体を縮こませ、息を潜めたのは、烏帽子を頂いたその姿が、まるで別人のようであったからだ。

陽炎のように揺らめく、青梅池の姫。

その名は悲恋の末、伏され、知る者は数少ない。

燕倪も、知らぬ。

知っていたとしても、戯れに口にしてよい名では、ないだろう。

だが、どうだろう？ 姫は、幸せそうだ、

燕倪の目には、うつすらと透けて見えるのに、その頬が、ほんのりと上気しているような、？

一言、二言。

蒼装が、何やら声を掛けているようだが、その声は低く、音だけが微かに夜気を渡って聞えてくる。

その都度、女は頷いたり、首を振ってみせたり、傾げたりと、童女のような仕草をしてみせた。

それが何とも、幸せそうだと、見えたのだ。

枯草を踏む足音をさせ、二人が、燕倪と伯の前を通り過ぎる。

緊張に、息を止める、燕倪。

「、、、、」

だが、その心配を他所に、二人は薬師堂を通り過ぎ、弓形の湖畔を、鐘楼のある方へと進んでいく。

ほっ、と息を吐いた時だった。

「う、、、、」

背中から、冷たい夜風が吹き込んできた。

ぶるっ、と肩を震わせた矢先、

「ふえ、、、、つ、、ふぁっ、、、、」

むず痒さが、鼻腔を突いたのだった。

「ぶえつくしよいッ！！」

大きくなくしゃみに、女は貌を上げた。

月光に照らし出された、その貌は、

ギギッ

たおやかだった女のものではなかった。

心情を表してか、口は耳まで裂け、黄色く濁った白目が、辺りを忙しなく窺っている。

だらしなく顎の下まで垂れた舌までもが、水を差された憤怒に、蛇のような撓りをみせた。

裂けた目尻から、つつ…と赤い筋が頬へと滑り落ちようとして、

「姫、、、」

冷たい指先が、それを掬い取った。

見上げれば、臥待月をちょうど頭上に頂いた男が、闇色の眼差しで、静かに見つめていた。

「次のこの月まで、花は、我らを待つまい、、、」

「っ、、、」

そのまま肩を抱かれれば、女の表情は、すう、と安らかなものへと戻っていった。

そして、男に背を押されるまま、再び歩き出す。

目を閉じて、男に身を預けるように歩く女とは対照的に、

「、、、、、」

後方、古びた薬師堂脇に鋭い一蔑を与える、男。

その先で、まさに燕倪が大きな肩を竦め、片手拝みで謝っている。傍らでは、ぽう、とした寝惚け顔の伯が、目を擦り擦り、酒が残ったままの瓶子を、抱え直しているところだった。

溜息を吐きたいのを堪えつつ、薄闇の中、朽ちかけた鐘楼へ向かう。

青梅池は、かつての寺院跡であるが、いわくつきのため、いつしか【都守預かり】となった。

人柱による結界、その一端を担っていた場所、と言う事もあるだろうが、その方が事情を知る者達には、都合が良かったのだろう。星読寮より管理の人手を出しているが、最低限の手入れのため、草木の勢いがある春先から夏にかけては、雑草が野放図に生い茂り、歩くのもやっとの有様。

だが、草木も枯れるこの季節は、不思議なもので、それも反って

風情に変わる。

枯れ芒が風に揺れ、乾いた音をさせれば、狐が顔を覗かせる。  
柔らかな落葉の大地に、斑に残った残雪は、仄白い光源となって  
夜道を朧げに照らしだす。

時には、埒に潜り込む無粋な輩もいるようだが、

「、、、、、、」

「、、、、、、」

この瞬間、触れ合い伝わる温もりは、二人だけが感じているものであり、時間、そのものだった。

傾きかけた、鐘楼。

そのすぐ隣に、覆う勢いで大きな椿の木が、湖に迫り出すように茂っていた。

ふかみどり 深緑の固い葉の中の、いたるところに、闇でも鮮やかな真緋が、  
弾けている。

甘く深い香りが、湿気を帯びた夜気に、そこだけ立ち込めているようだった。

椿だ。

水面に、浮かぶものもあれば、足元に散ったものもある。

「、、、、、、」

喉が、震えそうになるのを堪え、女は、唇を強く、噛む。

一人では、どうしても足を運ぶことができなかった、場所であった。

まだ若かった女は、夜半、屋敷を抜け出しては、この場所を訪れた。

そしてここは、初めて互いの想いを重ねた、大切な場所となったのだ。

今でも、わたくしは、、、

現れなかった男を想い、女は、手を伸ばす。

優しく、夜露を結んだ花弁に触れれば、後方から腕が、伸びた。  
思わず振り向けば、その人が高いところに咲く一輪を、手折ると

ころだった。

「そなたの、思ひの色、か、」

一際強い、火の色をした、椿。

男は、余計な枝と葉を落とすと、女の髪を一筋手に取り、器用に枝で掬い取ると、その耳の上辺りに挿してやった。

じわりと潤んだ、眸。

堪らず俯くと、

「良く、似合っている、」

低い声音が、鼓膜を震わせた。

『貴方には、燃えるようなこの色が、本当に良く似合う』

いつか、同じ事を言われたのを、思い出した。

「、、、、」

女は、涙を湛えた眸で、男を見つめた。

あの日、この場所で、離れてしまった心をもう一度繋ぎとめる事はできなかったけれど、涙で滲んだ視界の中、向き合った男は、愛しい背の君であって、懐かしい微笑みを浮かべていた。

嗚呼、許泰さま、、

胸の内。

暗い水面に、陽の光が差し込むように、穏やかな光で、満ちてゆく。

大きく息を吸い込めば、爪先が、大地から離れる。

ぷち…ぽつ、ちつ…ぷち、んっ…

椿の簷に触れた指先から、泡が弾けるような軽やかな音が、体内を満たしながら、響いてきた。

ふわりと舞い上がり、陽炎の如く揺らめいていた女が、燃えるような火の色一色に、染まってゆく。

思ひの色。

椿の簷に手を触れたまま、

「、、、、」

女は最後まで黙ったまま、真っ直ぐに天を、仰いだのだった。

火の色が、一際強く輝いた後、微かな水音を残して、闇に滲むように掻き消えていく。

「、、、、、、」

想いが弾ける様を、蒼装は、無言で見つめていた。

湿気を含んだ冷たい風が、長絹の袖を巻き上げ、吹き抜ける。

名残のように甘く立ち込める香りを、大地に散っている花卉を供に、空へと攫ってゆく。

それからしばらくの間、椿の傍らに佇んでいたが、

「、、、、、、」

烏帽子を懷に仕舞うと、踵を返した。

枯葉を踏む乾いたその音が、近づいてくる。

「お、、、、」

薄闇の中、目を凝らせば、長い銀の髪の主が、こちらに向かってくるところだった。

燕児は、体勢を変え、今度は膝にだらりと身を預けるようにして眠る伯の肩を、揺さぶった。

「おい、伯、、、、」

「ん、、、、」

しかし、目覚める気配は無い。

仕方なく、伯を腕に抱き上げたところで、

「用は済んだ。帰るぞ、、、、」

蒼装の声が掛かった。

「おう」

立ち上がれば、寒さで固まった筋肉が、いたるところで悲鳴をあげた。

肩を並べ、往来へ面した門へと向かう途中、

「なあ、俺には、赤く光ったようしか見えなかったが、青梅の姫は、

、  
「  
燕倪が、蒼装に尋ねた。

「、、、、、、」  
無言の闇色の一蔑に、

「さすがにあの距離じゃ、ぼんやりとしか見えん」

燕倪は、懲りずに食い下がった。

気まずい沈黙に、耐え切れなかったのだ。

そもそも伯に乗ったと言うのと、先のくしゃみが、尾を引いている。

蒼装は、闇色の眼差しを前方に据えながら、

「、、、、流れに還った、とでも言おうか、、、、」

「あ？」

鬱々とした声音が、それに応えた。

葉を落とした木立を抜ければ、薄闇の中、青白く浮かび上がって見えるのは、朽ち掛けた築地塀に、門。

その向こう。

牛車の前で、提灯を手にした琲瑠が、いつもの困ったような顔で、微笑んでいる。

「う、、、、」

小さい声が、漏れた。

伯が、燕倪の肩で、目を瞬しばたいている。

そのまま、鼻先を肩に摺り寄せながら、小さな犬歯を見せて、欠伸を繰り返す。

ずり落ちそうになっている長衣を、蒼装の指先が掬い上げると、角を隠すように覆った。

まだ、眠気を帯びた董色の眸が、とろりと蒼装を映す。

「想念とは、純粹な想い。性質の悪いものは、そうそうない。赤子のようにひたむき故に、な、、、、」

「そつ、なのか、、？」

よく分からない、とばかりに首を傾げる燕倪を他所に、蒼装は、

そつと伯の額に触れ、

「ああ。気が済めば、自ずと泣き止むものだ、」

「ん、」

頬に触れた。

すると、伯は再び、燕倪の肩に頬を預け、瞼を閉じてしまった。

「もう、現れないのだな？」

念を押すように、問えば、

「ああ」

蒼奘が、頷いた。

「ふむ、」

どこか釈然としないまま、門を潜ると、琲瑠が頭を下げ、三人を迎えた。

淡い木賊色の長衣を、蒼奘の肩に掛けつつ、

「ささ、お寒かったでしょう？火桶を積んでございますから、暖をおとりくださいまし、」

卒がない。

「俺はいいよ。歩いて帰るから」

そう断る燕倪を、

「せめて、屋敷の前に着くまで、その肩を貸してやってくれ、」  
先に乗り込んだ蒼奘が、引き止めた。

右肩を見れば、伯の寝息が首筋を、くすぐっている。

燕倪が伯を腕に乗り込むと、引戸が閉められ、簾が下ろされた。

赤い炭が入った火桶を中央に、腰を下ろせば、ぎしぎしと車輪を軋ませながら、動き出す。

吊るされた提灯から滲む、橙の光が、辛うじてお互いの輪郭を浮かび上がらせる。

眠る伯に遠慮してか、互いが沈黙を守る中、

ウオオオオオン

遠く、遠吠えが聞えてきた。

どこかで、その遠吠えに応える声が重なるのを聞きながら、

「最近、野犬が帝都近郊でやたら目撃されているらしいぞ」

「、、、、、、」

燕倪が顔を上げれば、蒼奘は物見を少し開き、外を窺っているところであつた。

隙間から、冷たい夜風が細く、忍び入ってくる。

「群れられちまったら、女子供はひとたまりもない。近いうちに、駆除に乗り出すだろうよ」

「放っておけ、、、、」

「あ？」

蒼奘は、静かに物見窓を閉めながら、

「じきに、片が付く、、、、」

燕倪を、見つめた。

「どうということだ？」

「あれらは少なくとも、人を、襲わぬ」

ぬけぬけと、そう言い放つ相手を、

「どうして、言い切れる？」

鈍色の眸が、睨みつけた。

うつそりと視線を外すと、蒼奘は背を壁に預け、横を向いた。

「そもそも、犬ではない。あれは、狼だ、、、、」

「狼、、、、」

あんぐりと口を空けてしまった、燕倪。

狼。

それは、人里には滅多に下りてこない、獣の名だ。

「おいおい、そりゃ、余計に厄介だろう？」

「心配するな。そこいらの餓狼とは違う」

「どう違つてんだ？犠牲者が出てからじゃ、遅いんだぞ」

まるで、他人事のような口ぶりに、燕倪の口調が荒くなる。

闇色の眼差しが、燕倪に向けられる。

燕倪も、逸らすようなことはない。

少しでも引つ掛かりを覚えると、どんな相手であろうが、まっす

ぐに、挑むような眼差しを、向ける。

それは、燕倪と言う男の性格を、そのまま現しているのかもしれない。

まったく、そのまま腰に帯びた太刀のような男だな、

蒼装の口元に、いつもの薄笑みが、刷かれた。

根負けしたかのように、

「大陸の、草の香りがするのだ、」

静かに、吐き出した。

「大陸、草？」

「ああ。大陸から、遙々海を渡り、やって来たのだろう。誇り高い、草原の主よ。そうさな、虎精と並び称される、狼精とでも、言おうか、」

「狼精、、虎精っていったら、銀仁か。では、人の姿にも？」

「どうであろうな、」

細く、息が吐かれた。

こればかりは本当に、知らぬのかもしれない。

燕倪は、低く呻いた。

「お前は、気掛かりではないのか？」

「草原の主は、風狼とも呼ばれる。この国を訪れたのは、故あっての事だろう。そのまま風だ。いつかは、他へ流れるもの、」

「だから、ほうっておけ、か」

「必要ならば、しかるべき措置をとる。今は、その段階ではない。

ただ、それだけだ、」

「ふむ、」

腕を組んだまま、燕倪は押し黙った。

ぎしぎしと、心地良い振動が伝わる中、遠く、異国の狼達の遠吠えが、重なった。

鬼気迫るもの、と言うより、どこか哀愁を帯びたようにも聞える。存外、蒼装の言う通り、いきなり襲い掛かってくるようなもので

は、ないのかもしれない。

それでも、思ったところで、ゆつくりと牛車が止まり、

「燕倪様、お屋敷に着きましたよ」

聞きなれた琲瑠の声が、掛かった。

四半刻は、経っていたのだろうか？

蒼奘相手に思案していたせいかな、思っていたよりも早く、着いた気がした。

「おう」

己が長衣に包まった伯を、そのまま静かに座っていたところに寝かせてやる。

深い眠りに就いてしまったのか、起きてぐずる気配もない。

薄く、口を開けた無防備そのものの寝顔を見つめれば、

「良く寝てやがる、」

思わず、笑みが毀れた。

そのまま、足音を忍ばせて降りると、

「何かあれば、絶対知らせろよ。蒼奘」

釘を刺す。

「ああ、」

蒼奘が頷いたのを確認し、燕倪は牛車から離れた。

「お疲れ様でございました。燕倪様、おやすみなさいませ」

いつものように、深々と頭を下げる、琲瑠。

「じゃあな、琲瑠」

「はい。それでは、これで、」

ゆつくりと遠ざかる、牛車を見送って、

「さむっ、」

己が肩を、擦る。

湿気を帯びた夜気が、刺すように、冷たい。

背を丸め、門のうちへと飛び込もうとした、その鼻先、

「ん？」

白いものが、ちらついた。

見上げた、夜空。

差し込む月明かりで、青鈍に透けるその眸が、鈍色へ変わる。  
闇が、濃くなる。

そこに、

「お、、、」

白い吐息が、滲んだ。

眇めた眼差しの先。

重い雲に隠れた星月に代わって、細雪がはらはらと、大地へ舞い降りてくるところだった。

雪は、好きだ、、、

肩先や髪に、粉雪を遊ばせ、琲瑠は思わず口元を、緩めた。

大気が澄んで、遠くまで良く見えるから、、、

闇の中でも、琲瑠の目は、彼方の山稜の輪郭を、見通しているのかもしれない。

川のせせらぎが、近づいてくる。

休もうと、足を止めようとする牛を追いながら、恵堂橋を渡れば、屋敷まで、後もう一息だ。

前方彼方に篝火が、見えた。

夜更けと言う事もあって、人気の無い大通りは、ひっそり閑と静まり返っている。

人影が動いたような気がして、

「、、、、、、」

琲瑠は、目を凝らした。

そして、すぐに、

「ほ、、、これはこれは、、、」

頭を下げた。

青白い狐火が宙に浮かべば、唐衣の女が一人、古びた屋敷の門前

で、こちらまで深々と頭を垂れたところであつた。

都守の屋敷より程近い、天狐遙絃の屋敷。

凍える冬夜だと言うのに、屋敷のうちには燦々と陽光が降り注ぎ、小鳥たちは競つて囀っている。

狂い咲く、花々。

極彩色の彩りが、地平線に溶けている。

その大地を、白い人影が歩いている

烏帽子を懷に、手には、扇子。

月明かりには目立たなかつたが、陽光の中で見る臙脂の長絹ちやうけんには、唐草と孔雀の縫い取りが織り込まれ、今にも羽ばたきそうだ。

「ようやく現れたと思うたら、今日はまた珍しく、華美な装いじゃないか」

いつもの皮肉を、唇の端を吊り上げただけでいなし、四阿屋で待つ遙絃の向かいに腰を下ろしたのは、

「誰ぞ、気にかかる姫でも口説きに行つていたのかえ、蒼装？」  
その人であつた。

翡翠を削り、彫り出された桃の枝の細工も精緻な長椅子の肘掛に凭れ、

「そんなところだ、」

うつそりと、青い唇を歪めてみせた。

「しかし、どこかで見た様な、」

遙絃が眉を寄せれば、

「布津稲荷に、舞と共に奉納された、長絹だ。神主に無理を言つて、借り受けた、」

「ふん。悪かつたな、社には寄り付かぬ祭神で、」  
不在がちな己の社が出所だと、痛いところを衝かれる結果となつ

た。

紺碧の眼差しの先で、月色に透ける長い髪が、さらりと肩から胸元へと、滑り落ちてゆく。

「伯は、どうした？」

辺りを見回しても、その姿が無い。

珍しいこともあるものだ、と、問えば、

「幽鬼の姫との逢瀬に、共に行くと言わぬで、連れては行つたが、  
、」

その皮肉にも、相手は口元を、僅かに歪めただけであつた。

「ほ、いわくつきのその長絹と言ひ、その幽鬼、えいら、青梅の娃えいら斐螺ひめ姫か？」

最近になつて現れた、青梅池の畔に佇むと言ふ、幽鬼。

娃えいら斐螺姫。

姉姫の元に通うようになった、かつての恋人。

嫉妬にその身を焦がし、ついには身投げしたという、いわくつきの姫だ。

蒼装が頷き、

「正確には、幽鬼ではない。水面に漂つていた想念が、長い年月のうちに洗われ、流れ着き、再び姫の姿をとつたものだ、」

「魂の方は、どうした？」

「冥府に辿りついた、という鬼録きりくは、なかった。とうの昔に、昇華したのだらう」

彼方の地平線を遠く、眺た。

いつもあるはずの山々は姿を消し、平坦な大地が延々続いている。

「して、その姫の願いは？」

「臥待月の晩に、椿を愛でたい、と、」

「で、手を取り、花見に興じてきたわけかえ、」

遙絃が、『物好きめ』と薄く笑つ。

それには応えず、

「先ほどから、胡露の姿が無いようだが、」

そう、問うた。

広大なこの世界は、遙絃が形成する結界であり、異界。

そのまま、術者の力を現すものだ。

そして、異界はもとより、核となる【楔】による影響が大きい。

地仙級ともなれば、なおさらだ。

どうやら漂う違和感の元凶を、蒼奘は、ここにはいない相手と踏んだらしい。

遙絃は『出掛けている』とだけ、言った。

ぐつ、と大きく伸びをすれば、花簪が抜け、蜂蜜色の豊かな髪が、踝まで流れ落ちた。

ふわりと、腰の後ろで九尾が揺れ、小さな犬歯を剥いて、欠伸をひとつ。

乾いた音を立てて転がった花簪もそのまま、長椅子に寝そべると、大海を思わす紺碧の双眸が、蒼奘を見つめた。

潤み、煌く眸でもって、

「【鵠】が、放たれた」

語尾が、掠れた。

欠伸がもうひとつ、喉からせり上がり、手の甲で、黄金に彩られた蟲惑的な唇を隠す。

滲んだ涙が、長い睫毛に珠となって、結ばれた。

一方、

「神都、奉華門が開いた、か、」

低いその声音には、どこか穏やかな響きが、含まれていた。

蒼奘の視線は、赤瑪瑙の巨岩を削り出し、造られた卓上に注がれている。

長い指先が、卓上に咲き群れるように刻まれた、冷たき大輪の薔薇に、触れた。

滑らかな花卉の感触は、まさに生花のそれで、甘く、深く、肺腑に染み入る香りは、そのまま赤瑪瑙の薔薇が放つものであった。

天津国の天匠が腕を揮えば、冷たき石も、自らを花であったと錯

覺してしまうのかもしれない。

「あやつらも、胡露同様、鼻が利く」

侍女が差し出した煙管を受け取り、

「すでに、大陸中を探しあぐねたはず、」

唇から細く吐き出したのは、紫苑色の煙であつた。

蒼奘は、というと、

「ほう、、、」

他人事のように薔薇を愛でつつ、相槌を打っている。

相変わらずのその様子に、華奢な肩を竦めた、遙絃。

蓮を模った、翠水晶の灰受けの縁に、煙管を打ちつけながら、

「以前あつた人柱の結界は、もう無い。大陸に比べ、歴史が浅いこの国では、地仙同士の繋がりも、希薄だ。庇護も、加護も無い【あれ】を、鶴らが見つけるのも、時間の問題」

溜息混じりに、吐き出した。

「天狐、、、ここは、」

言わんとしている事をすでに察してか、何の感情を窺わせない、

ただただ穏やかすらある闇色の眼差しが、遙絃をひた、と見据えた。

「そもそも、そなたが負うた地だ。そなたが拒めば、そのように結界が発動しようよ、、、」

「都守、私は、、、」

何かを言わんとした遙絃だったが、溜息を一つ。

卓子に肩肘をつくつと、手のひらに頬を預けてしまった。

その仕草は、ひどく幼く見えた。

もどかしげに、何度もカツカツと、煙管を縁に打ちつけながら、

紺碧の双眸が上目遣いに睨んでくる。

『分かっているだろう？』とでも、言いたげに。

蒼奘は薄笑みを浮かべたまま視線を外すと、彼方に静止したままたなびく雲を、眺めた。

ただ、そこに在るだけの、雲。

動く事も無く、さりとて消える事すら、許されない。

まるで、、

何を思ったのか、その眼を眇めると、

「その実、何がどうなるうとも、そなたには、関心がないのだろう？」

鬱々と、そう言い放った。

つい、口を突いて出た言葉であつたが、

「、、、、」

ぎり、と短く、何かが擦れる鈍い音が、した。

遙絃が、奥歯を噛み締めたのだ。

秀麗な貌から、いつもの余裕の笑みが、掻き消えていた。

針のように細く引き絞られた瞳孔が、射抜くように蒼装の横顔に注がれば、世界はそのまま音を、色を失い、凍りつく。

大気は、外気のそれよりも重く冷たく張り詰めて、吐き出した吐息は、そのまま霜となり、吸い込めば肺腑からその身を、凍てつかせよう。

黒白に沈んでゆく無機質な世界で、二人の姿は、さながら氷像のようであつた。

しかし、それも一瞬の出来事。

「ふん、、」

遙絃が、鼻で、笑った。

世界が色を、取り戻す。

何事も無かつたかのように息を吹き返した世界を、遙絃は、ぐるりと眺めながら、

「ああ。お前が言わんとしている通りだ。人々を導くなんぞ、そんな殊勝な考え、私には、端からない、、」

からりとして、それでいて残酷に響く、言葉であつた。

この地に降り、時には世話を焼いてはみたが、それ程心を傾ける事も無かつた。

ただ漠然と、地仙と言う役柄を、演じていただけなのかもしれない。

唇に浮かんでいるのは、そのまま自嘲気味な笑み、であつた。それを突きつけられた瞬間、腹腔深くから憤怒が込みあげたが、今は不思議と、心は穏やかであつた。

押し寄せた感情の波は、どこかに浚われ、穏やかに凪いだ紺碧の眸が、蒼装を見つめた。

相手は、遠く、彼方の空を眺めたまま、相変わらず感情の一切を、窺わせない。

伯を共に訪れる時は、この限りではないのだが、伯を地に縛るそれ以前、

私としたことが、すっかり忘れておつた。元々、こやつは、与し難い相手であつた、

【地仙】と【都守】として対峙して来た頃は、それは扱い難い相手でもあつた。

下手な小細工は、返つて逆効果になると踏むと、

「だが、胡露は違う。今回は、事情がある」

遙絃は、心情を吐露した。

なまじ、その方が、効果があるかもしれない、そう思った。

自分が、胡露と共に在つて変わったように、この相手もまた、そうなのかもしれない。

不変なものなど、ないはず。

ならば、それに掛けるしか、なかつた。

私は、地仙だ。これは、人の間で交わされた、契約。動くわけには、いかん、

闇色の眼差しが、遙絃に注がれ、

「ああ、そう言えば【あれ】は、犬神筋であつたなあ、」

青い唇の端が、吊り上つた。

合点がいった蒼装に、遙絃は素直に頷いてみせた。

「だから、多少は荒れるだろう。すべては【あれ】次第だ。それだけ、お前に言っておく」

椅子が、引かれる音と共に、長身が立ち上がった。

「、、、、」

白と言つより、銀に近い髪が、摩く。

侍女の案内を待たずに往来に面した門へと遠ざかるその背中越し、  
「、、、、心得た」

一拍置いて、低い声音だけが鬱々と、応じたのだった。

第拾ノ武幕中ノ前 - 思ひ色 - (後書き)

思ひ色。。。

緋の色に掛けた、古き時代の言葉、だそうで。。。  
先日、たまたま知ったのだったけれど。。。

思いを言葉だけでなく、それ以外でも伝えようとした古人の直向さ  
には、脱帽。。。

第拾ノ武幕中ノ中 - 礎 - (前書き)

吐息も凍える、冬夜。招かざる大陸からの使者が、帝都に姿を現し、  
、

死人還りの都守蒼装、業丸を継ぐ武官燕倪、幽身であるがこの世に縛られた伯。それぞれが紡ぐ異国絵巻、第十二幕中の中編。。。

人々が寝静まった、深更。

ヒュ・・・ンツ・・・

凍てついた大気を劈き、白銀の閃光が、煌く。

ヒュツ、、、ビュウツ、、、ンツ・・・

幾筋も、幾筋も。

それは屋根の上から、木陰から、塀の向こうから。

同じ標的に、向けられた、【殺意】そのものだつた。

大地を蹴つて、右へ左へと軽やかにその殺意を躲せば、獲物を見失つた白銀の閃光は、無機質な正体を晒すこととなる。

大地に突き刺さっているのは、投擲する、ただそのためだけに作られた、小指程はありそうな太さの、長い針だ。

大地に深々と突き刺さっているのを見ると、当たれば身体を貫通するだろう。

それすらも、嘲笑うかのように立ちはだかっているのは、

ハツ、、、ハツ、、、

これもまた、闇夜に銀波を放つ、大狼であつた。

生きながらにして死地に在る、我らだが、、、

闇の中、仲間が【闇針】でもって仕留めようとするその様子を、彼方の老松の梢から見つめていた【者】は、

化物め、、、

目を眇めた。

その姿を捕らえたと思つた瞬間、寸でのところで身を翻す。  
イエンシン  
闇針。

異形をも、仕留めると言つ、特殊な針だ。

その闇針が、澄んだ音を立てて、弾かれる時さえある。

先の蛮族掃討戦で暗躍した、【蛮狼】。その記述はあつたが、  
、、なんとしてもここを、抜けなければ、、、

この国の住人になりすましたところで、その鼻は、敏感にこちらの臭いを嗅ぎ分けることができるようで、執拗に追いつてくるのを見ると、どうやら【目的のもの】は、この都で間違いはないらしい。

それを、散らばっている者達に、伝えなくては、

この場から離れる隙を探っていれば、

「がら空き、ですよ」

「、、、、」

振り向きざまに、闇針を投擲。

その切先を、肩越しにいなした相手が、闇の中で微笑むのが、見えた。

手に、幅広の無骨な大太刀を、握っている。

ぎらついている。

禍々しいまでに。

老松から、路地に着地。

足音も、吐息すら殺した相手は、そのまま人の形をした影であった。

身体の線こそ、すっぽりと頭頂部より被った淫色の衣が、夜に融け、染まっているのだ。

「、、、、」

優美すらある微笑を浮かべ、築地塀の上にいた瘦躯が、路地へと舞い降りる。

「大陸の【鵠】が、この倭で、いったい何を嗅ぎまわっておいでで？」

「、、、、」

暗い眸が、敵を見つめている。

幾度となく、死地を潜り抜けてきた直感が、告げている。

生かすつもりはない、と。

爪先から、総毛立つ、感覚。

「、、、、」

本能が、戦いたい、と言う。

投擲の瞬間を見せぬ造りの、衣。

その布の中、無数の闇針を指の間に挟みこみながら、背を丸めた。  
大気が、張り詰めた。

来る、、、

大太刀を握る手に、男は力を込める。

一回り、鵜が、広がった

かに、見えた。

ふわりと、袖が広げられたのだ。

刹那、銀の雨のように降り注ぐ、無数の闇針。

男は、大太刀を振った。

風が、巻いた。

不可視の一太刀。

銀の雨は、大地を穿ち、太刀は、空を斬った。

布が、ひらりと舞い落ちる。

その向こう。

彼方の屋敷の屋根に、遠ざかる鵜が、見えた。

本能を捻じ伏せ、任務を全うすること、したのだろう。

「、、、、、、」

慌てることもなく男は、大太刀を持つ手首を、返した。

手の中で、白銀の大弓へと変化すると、足元に落ちている闇針を

一本、つがえた。

その細腕からは到底想像できぬ程、強く、弓が引かれ、撓る。

遠ざかるその背に狙いを定めると、

「、、、、、、」

右目を眇めた。

闇色の眸が、銀灰に透けてゆく。

瞳孔が、細く引き絞られ、

ヒヒュ・・・ッ・・・ン

放たれる、矢。

視線の彼方で、鵜が一人、銀の閃光に刺し貫かれ、崩れる様が、

見えた。

「ふ、、、う、、」

薄い唇から、細く、息が吐き出す。

大弓を下ろすと、一振り。

それは、手の中にすっぽりと収まる程の花切鋏へ。

木賊色の狩衣、その懷にしまったところで、

ククウウウ・・・っ

軽やかな足音が、駆け寄ってきた。

数匹の大きな狼が、その口を、爪を、朱に染めている。

中には、傷を負っているものもいるが、男を見つめる青い双眸は、  
穏やかであった。

それぞれが、それぞれの目的を、達したのだろっ。

頼もしくも、狼を見つめた時だった。

ヒヒユウ・・・ウンッ

「ッ、、、、」

上空に、何かが打ち上げられる音が、響いた。

振り向いた先、

しまった、、

細く空へと上がった、光の筋。

小さく弾けて消えるその狼煙に、思わず舌打ち。

ウウウウ・・・

喉の奥で唸り声を上げながら、牙を剥く狼達と共に、

「、、、、、、」

男、胡露は、光が掻き消えた後も尚、夜空の一画を、睨むのだった。

む、、、、

帝都への街道に行く旅人が、夜露避けの菅笠を上げた。

前方に、黒々と見えるのは、闇夜に眠る帝都だ。

その上空で、光の筋が、弾けた。

目を凝らせば、その余韻か、淡紅色の煙が、たなびいてみえた。

紅煙の烽火。近頃、狼が出没すると耳に挟んではいたが、やはり、ここに、、、

旅人は、目を擦り擦り、街道にしゃがみ込んだ。

脚絆を確かめ、草鞋の紐を結わえ直す。

手甲の捲れを直しつつ立ち上がると、そのまま帝都への道を取り、しばらく行ってから、無人の街道を脇に、逸れた。

薄つすらと霜を降ろした、田畑。

その畦道を行けば、簡素な竹垣根の家々が、ぽつりぽつり。

畦道沿いに引かれた水路から、水の流れる音が、聞えてくる。

大きな櫛の木下に、傘を頂いた、地蔵が一体。

その先にある民家郡を横切ると、そのまま裏手に広がる林に入った。

人の手が入った山とて、夜ともなれば、鬱蒼として、闇が濃い。

その中を旅人は、おおよそ、常人とは思えぬ脚力でもって、帝都に背を向け、疾駆を始めた。

白々と残る残雪を跳ね上げながら、熊笹の茂みを揺らすその姿は、さながら一陣の風だ。

さて、相手は、古の蛮狼。幾人の同胞が、この地に残っているか、、、

薄笑みを口元に湛え、旅人は、駆ける。

主と、仲間の元に、烽火が上がった場所を、伝えるために。

白銀の狼に導かれるようにして、帝都は西の白季門を潜った、  
露。

閑散とした闇夜に、時折、乾いた冷たい風が舞う中、開けた空き  
地へと踏み込んだ。

畦道に、ぼつりと、とり残されたのは、白木蓮の巨木。

今はまだ、葉を落とし、寒々しいその辺り。

白い薄霧が、茫洋と蟠るようにして、漂っている。

狼達が、一様に立ち止まり、耳を下げた。

胡露の目の前で、霧が濃淡を滲ませると、人の形を取って、抜け出してくるところであつた。

「、、、、、、」

青い。

涼しげな眸は、瑠璃一色。

そのまま、よく研磨された瑠璃を、嵌め込んでしまったかのような。

真冬と言うのに、長身でしなやかな肢体には、簡素な闇色の薄絹を数枚、纏うだけ。

くせの無い、真珠色の髪を、そのまま腰まで垂らしている。

どこか痩せぎすで、それでいて中性的な容貌の主が、

「しばらくぶりですね、、、、」

現れた男に向かつて、静かに声を掛けた。

胡露が大地に膝をつき、

「やはり、貴女でしたか、、、、」

拱手。

眼を伏せると、

「久闊でございます。翠雲<sup>ツィユン</sup>公主」

深々と、頭を垂れた。

一方、公主と呼ばれた主は、堅苦しさから口元に薄く笑みを刷くと

「【青目】で、構いませんよ、玄胡露」

気遣いは無用だと、手を振った。

「なれば、お言葉に甘えまして、、、、」

胡露は顔を上げると、改めてその相手を見つめた。

青目。獸神らによって組織される元老院の一柱であり、北の大地を治める、狼精筆頭、、、、

多くの風狼に傳かれる者こそ、大陸は北東部、翠雲の大地に生きる獣の長で、その地仙。

【青目】。

天津国に籍を置いたものならば、知らぬ者はいない。

風狼を束ねるにしては、少しばかり線が細いが、見てくれで力の優劣を判断する事は、愚かだ。

天津国には、赤子のような外見の神が、その微笑み一つで、竜巻を召喚することなど、ざらなのだから。

「玄家が、下賜された天領を返納し、大地に降りたこと、花王から聞き及んでおります。その後、一族は息災で？」

「はい。皆、散り散りにはなりましたが、古参の獣神、地仙らのご厚意により、眷族に迎えていただきました。かく言うわたしも、こちらの地仙の庇護にあやかっております」

「それは、何より」

「しかしながら、青目。天津国に居られるはずの貴女が、御自ら、参られるとは、」

それまで、まっすぐに胡露を見つめていた眸が、伏せられた。

「我が良人<sup>おとこ</sup>は、周知の通り、翠族の始祖。その直系の娘は、すなわち、我が娘、」

長い睫毛が、ふるり、また、ふるり、と揺れた。

「押し寄せる人の群れに、一度は大敗を喫しはしましたが、此度、娘が、入内を拒むのであれば、」

感情の一切を窺わせない、貌。

その高く通った鼻梁に、皺が寄った。

薄い唇から鋭い犬歯が覗けば、周りに控えていた風狼達も呼応して、低く唸りはじめた。

しかしながら、感情をあらわにしたのも、一瞬の事。

すぐに感情の一切を掻き消すと、

「二年前、奉華門を潜った娘は、病身。その身を押し、自ら後宮に入りました。しかし、哀しみに膿んだ大気に蝕まれ、天命を待た

ずして、人知れず果てました」

淡々とした口調で、そう告げた。

「そう、でしたか、」

大草原で、家畜を追って暮らす、騎馬牧民。

その一つである、翠族。

風狼が庇護する彼らを、胡露も、見知っていた。

北の大草原を拠点とする蛮族らの首魁、との記述が神都に残るが、敵ながら勇猛果敢で、大軍を前にしても臆する事無く、最後の一騎に至るまで、まさに獅子奮迅の働きをし、他の民族らを鼓舞したと言われている。

十数年かかったと言われる大陸北部平定の原因は、神出鬼没で將軍らを苦しめ続けた、北の雄【翠族】にあると言っても、過言ではないだろう。

「貴方もご存知の通り、翠族は代々、直系の末の男子が長子。早く生まれた男子は、皆、他の地へと流れます。娘の将来を悲観した長は、何の悪戯か、落雷にあつて命を落とし、眼を病んだ先代は、誰とも口をきかなくなりました」

「、、、、」

「長子となる末の弟はまだ幼く、神皇に番う年頃の娘と言えば、」

「

「青目、」

胡露は、眸を伏せた。

皮肉とも言える因果に、同情、したのかもしれない。

「しかし、、、翠族の元に、使者が参つて、暴かれたのですか、、、？」

「いえ。たとえ、爪を剥がされようとも、喉元に刃を押し当てられたとしても、それはありません。翠雲の地に生きるものは等しく、一族の誇りと共に生きております」

「これは、とんだ失言を。お詫び致します」

青目は、構わないと、首を横に振る。

薄い胸の前で腕を組むと、長い睫毛がふるりと揺れた。

肌と同じ色の、薄い唇。

少しだけ、何かを考えるような仕草で、下唇を噛んでから、

「ここ百年、神皇の側近に屍鬼が一人、名を連ねています」

静かに、そう口を開いた。

「屍鬼、、、」

屍鬼。  
しき

文字通り、人や獣の屍に巢食う、鬼を指す。

また、意図的に魂魄を屍に定着させる術法によって、生み出される式神も、屍鬼に含まれる。

「屍鬼ならば、上からの追手がかかっても、おかしくはないはずでは？」

返魂は、現世において外法であり、禁じ手。

場合によっては、天津国の神々から討伐の命が下る場合も、あると言う。

「今回は、掟通りに翠雲を去った者達の足取りを、調べたようです。平素、隠密部隊【鶴】を束ね、自らも神都の守【導師】として神皇に仕えており、その姿勢は、どこまでも忠実。神都では、別段、何を企むわけでもない、、、、」

「、、、、、、」

「それ故、少々厄介と言いましうか。その力は悪鬼、意志は、人何の理に属すのかすら、分からぬ有様。それ故、天津国の諸神も、静観せざるおえないのです」

「悪鬼で、人、、、、」

胡露の瞳孔が、針のように細く絞られる。

胸中には、未知なる相手と対峙することになるかもしれぬ高揚感と、

「なんだ、この、感覚は、、？」

妙な胸騒ぎが、入り混じっていた。

堪えきれず、鋭い犬歯を覗かせた、胡露。



「や？」

冷ややかな一蔑となって、投げかけられた。

「くっ、くっ、くっ」

もどかしく、奥歯を噛み締めた、胡露。

やはりその想いで、青目は、地上に降りたのだ。

白銀の毛並みの大狼に守られ、消え去る、その姿。

その一言で、帝都が、くっ、

青目が大狼を従え、掻き消えた後も、

そんな事が、赦されると言うのだろうか、くっ、？！

胡露はまんじりともせず、薄霧が晴れてゆく様を、見つめていたのだった。

首筋に、纏わりつくのは、

？

視線。

心地悪さに、泡肌が立つ首の後を擦りながら、素早く左右を窺った。

「くっ、くっ、くっ」

けれど、そこには見慣れた帝都の喧騒が、広がっているだけだった。

気のせい、か、くっ、

酒甕を積んだ荷車や、反物を背負った行商、見回りの武官連中の姿に慌てて脇道に逸れるごろつき、肩に野猿を遊ばせた猿回し、など。

別段、変わった様子は無い。

腕に抱えなおしたのは、大陸の蒸留酒、白酒だ。（うめざけ）

老いた花守の寝酒で、馴染みの酒蔵へ使いに出るのが、宵藍の役目でもあった。

昨夜ちらついた粉雪も、日中の陽射しで幾らか溶けてはいたが、通りを吹き付ける風は、やはり冷たい。

思わず背筋を丸めると、自然と早足になってしまった。

花守はきつと今頃、室内に入れた牡丹の鉢の手入れをしている頃だろう。

火桶によつて、温かく保たれた室内で育てられる牡丹は、年明け、この界限で暮らす娘たちの花簪として、振舞われる。

花の盛りに手折るのは気が引けるが、閑散とした屋敷に、晴着姿の娘達が集まれば、これまた別の花が咲いたようで、それは賑やかなものだ。

一度、

『丹精込めて作った牡丹を、手折るのですか？』

と聞いた事がある。

花守は笑って、

『毎年、帝都のどこよりも早く、春を告げにきてくれるでなあ』

そう、言った。

幾度か目にしているが、娘達のそのおしゃべりは小鳥の囀りにも似て、春が一足先にやってきたような、そんな心持にさせてくれるのだった。

そんな事を考えながら、先の辻を曲がった。

荷車が行き交う大通りよりも、少し細いが、入り組んだ路地を行つた方が、早い。

人気の無いそこは、手入れが十分になされていない築地塀や、竹垣が目立つ。

背の高い庭木で、空は狭く薄暗いが、蠟梅、梅、木蓮や槿、金木犀に海棠などが居並び、いつ来ても、目を愉しませてくれる。

今日も、甘く、それでいて深みのある香りが漂ってきた。

築地塀から乗り出すように咲き群れる、白椿。

日陰に残った雪の上に、白い花卉が散っている。

ずしりと重い瓶子を抱き直し、眼差しを足元から前方に据えた時だった。

「っ、っ、っ」

思わず、びくりと身を竦めてしまったのは、前方に人が立っていたからだった。

咄嗟に、視線を足元へ。

大柄な黒い影が、大地に伸びている。

「、、、、、、」

相手が、動く様子はない。

大の大人二人が肩を並べて歩くのがやっと、と言う狭さだ。

宵藍は、会釈すると、右の竹垣に寄つてすれ違ふ事にした。

できるだけ身を縮めて、やり過ごそうとして、

「もし、、、、」

「ッ」

低く、くぐもった声に続き、大きな手によって、肩を掴まれている。

咄嗟のことに、心臓の鼓動が、大きく跳ね上がる。

取り落としそうになった瓶子を胸に掻き抱き、顔を上げれば、

「！？」

息が、止まった。

頭からすっぽりと、全身、淫色くりいろの布によって覆われている。

肩幅から窺える、がっしりとした体躯が、ゆったりとした布地の動きのせいで、ずっと大きく見える。

吐く息のせいか、眼前に垂らした布の向こうに、人の顎先が見えるのが幸いだ、眼差しはこちらからでは窺えない。

窺えないのに、動けない。

見えない視線に、射竦まれている。

それでも、心を奮い立たせ睨みあげれば、

「、、、、、、」

布越しでも、目が合っているような気がした。

長く垂らした前髪の間から、青く、どこまでも深く透けるのは、空色の眸。

淫色の衣の男は、大きく頷いた。

「問おう。その眸。草藍ツォイランの縁者か？」

「！！」

『あなたはっ、、、、』、そう喉までせり上がったところで、飲み込んだ。

声をあげてはいけない

ぎり、と奥歯を噛み締め目を伏せると、肩を擦って走り出した。入り組んだ路地を、駆ける、駆ける、駆ける。

冬でも青々と、葉を茂らせたままの大柑子。

朽ち掛けた土壁の向こうから、路地へと飛び出したその枝に頬をしたたか引つ掛けたが、顔を顰めたただで、駆け抜ける。

得体の知れぬ恐怖で、振り向く事も、できない。

右へ、左へ。

また、左へ。

荒い息遣いと、鼓動が、体中に反響しているようだ。路地が、少し広くなる。

手入れのされた築地塀が、両脇に聳える。

もう少しで、花守の屋敷が面した大通りに、出る。

いつもは煩わしい人々の喧騒に、早く包まれない。

そうすれば、少しは安心する。

風にはためく狩衣の袖が、はたはたと、耳につく。

じわりと、弱い涙が視界を滲ませた時だった。

「こちらへ、、、、」

聞きなれた、声音に続き、

「はっ、、、、」

体ごと脇道に引きずり込まれた。

視線が、白一色に包まれる。

鼻腔をくすぐるのは、深く落ち着く、荷葉の香り。

この香り、、、

顔を上げようとして、

「今しばらく、動かないで、、、」

短く、告げられた。

抱き抱えられたまま、小さく戸が閉まる音がした。

そっと、肩に回されていた腕が、外される。

傾きかけた扉の隙間から、外の気配を窺う若者の横顔は、

胡露どの、、、

確かに、その人だった。

「、、、、、、」

しばらく、聞き耳を立てていたが、宵藍の視線に気付くと、

「こちらです、宵藍殿、、、、」

いつもの優しい微笑みで、ついてくるように、と促した。

地味な灰浅葱の狩衣姿が、金柑や柚子と言った柑橘系の樹木らが、野放図に植えられたここでは、よく映える。

手入れがされていないのか、行く手を塞ぐ中、胡露は枝を摘んでどけながら、

「ご存知だとは思いますが、棘が鋭いですから、、、、」

「、、、、、、」

宵藍を、導く。

ふかふかとした枯葉に、足を取られながら、辺りを見回す。

土壁に沿って、黒松が植えられ、頭上を覆わんと枝を広げる大柑子の木々と相まって、鬱蒼としている。

冬とはいえ、ここは緑が、深い。

ここは、いつの間にか、うち捨てられた町家だろうか？

その濃い緑の中、朽ち掛けた屋敷が、ひっそりと眠っていた。

胡露は、朽ちた井戸の前で足を止めた。

崩れかけたその井戸には、くたびれた筵が、掛けてあった。  
それをどけると、大地にぽっかりと空いた、闇が現れる。

そこに梯子が、掛けられていた。

「説明は、後で。足元に気をつけて」

背を押されながら促されて、

「、、、、、、」

宵藍は、困惑した視線を向けた。

無理もない。

「永寿宮の裏手の屋敷に繋がっていますから、心配いりませんよ。  
わたしも、すぐに行きますし、、、、」

屋敷を訪れる時と寸分変わらぬ、にこやかな笑顔。

宵藍は、その笑顔に促されるまま、梯子に手と足を、掛けたのだ  
った。

暗い。

目が慣れるとか、そういう問題ではない。

温く、澱んだ大気と共に、濃厚な闇が、横穴の奥に塗り込められ  
ている。

見上げれば、頭上遙かに、小さな光の入り口が見えた。

あんなに、遠い、、、、

それが、失われた。

胡露が、筵を掛けたのだろう。

暗闇の中、梯子の軋む音だけが、わんわんと反響する。

「、、、、、、」

ただ、じっと待っているだけでも、総毛立つ。

思わず、腕を擦った。

この闇は、怖い。

夜がもたらすものとは、違う。

光を知らぬ、常闇だ。

縋るように上を見上げたが、胡露の姿を捉えることはできなかった。

「宵藍殿、ご心配なく。わたしには、見えていますから、」  
身を強張らせる姿に気付いたのか、慮る胡露の声が降ってきた。  
程なくして、傍らに降り立つと、

「このお屋敷は、わたしの主が所有のものでございます。主は土竜道、などと呼んでおりますが、帝都の地下には、水脈が幾つも走っているのは、ご存知ですか？」

宵藍は、闇の中で頷いた。

その手に、冷やりとした手が重なり、

「さ、こちらですよ」

引かれるままに、歩き出した。

表面は冷たいが、触れ合えばすぐにぬくもりを生む。

それが、右も左も分からぬ闇の中で、何よりも心強い。

「水脈は、日々流動するもの。ここは、水脈がずれたことにより、水が通わなくなって久しいそうです。井戸が枯れば、便利さに慣れた人々は不便だと手放します。そういった古い屋敷が、帝都には、意外にあるものです」

「、、、、、、」

先に行くその背中すら見えないが、その声にほつとする。

常闇に、吞まれてしまいそうな心も、繋がれている。

どうせ、何も見えないのなら、、、、

宵藍は、目を閉じた。

手を引かれるまま足を動かせば、幸福感に満ちている己が気持ちに、気がついた。

それを意識して、思わず頬が上気する。

「、、、、、、」

背中を向けているため、気付かれることはないだろうが、  
「悪戯な主が、屋敷の者を撒く時に利用するものでして、、まさ

かこんな役に立つとはおもいませんでしたよ」

「、、、、、、」

胡露の口から出た『主』に、どきりとした。

宵藍は知らぬ、その相手。

花守は、会った事があるようだが、宵藍が、その相手について尋ねた事は無い。

胡露に対して抱いている気持ちを、花守に気付かれてしまいそうで、

「、、、、、、」

それが、できない。

肩から垂らした黒髪に、思慮深げな灰灰色の双眸。

普段、親しく言葉を交わす相手が花守だけのため、度々訪れるこの物腰柔らかい若者に、特別な思いを抱いてしまうのも、無理ないことなのかもしれない。

そんな胸中など、露知らず、

「廃屋の庭木の手入れにと訪れてみれば、あなたが見えた。あの男に、心当たりがおありで？」

胡露の澄んだ声が、尋ねた。

「、、、、、、」

首を横に振れば、

「そうですね。最近、帝都もなかなか物騒なようです。あのよな風体の輩が徘徊しているようですから、人気のない路地は避けた方がいいでしょう」

淡々とした、忠告が降ってきた。

こくりと頷き、慌てて、相手が見えていない事に気がついた。代わりに強く手を握れば、

「ええ、そうして下さい」

手の甲に触れている指先でもって、とんとん、と軽く擦られた。

この深い闇の中でも、伝わった事が素直に嬉しくて、

「、、、、、、」

宵藍は思わず、俯いてしまふのだった。

固く閉じられた門扉を叩けば、しばしあつて、  
「誰かな？」

しゃがれた花守の聲が、掛かった。

「花守、胡露でございます。宵藍殿も一緒です」

「今、開けよう」

細い路地には、冷たい風が吹き抜けるだけで、幸い、人気は無かった。

木戸が開くと、胡露はまず宵藍を入れ、外を窺った後、扉を閉めた。

手を、土で汚した瘦躯が、

「何か、あつたようなの？」

細い溜息と共に、出迎えた。

「老爺らおいえ、、、」

ずっと黙っていたせいか、掠れた声が、花守を呼んだ。

「何があつた？」

手拭いで汚れを拭うと花守は、そつと宵藍の肩を抱いて、擦つてやった。

「妙な、風体の男に、、草藍の縁者かと、尋ねられました、、」

「む、う、、、、」

花守の手が、一瞬止まり、表情が強張った。

しかし、すぐに、

「お前に使いを頼んだわしが、悪かった。しばらく屋敷から、出でないぞ」

眉を寄せると、なんとも寂しげな顔で、そう言い聞かせた。

宵藍が、こくりと頷くのを見届けて、

「ここまで送り届けてくれ、礼を申しますぞ」

花守は、頭を垂れた。

胡露は、

「ちようど、近くを通ったところでしたから、お気になさらず。しかし、年の暮れともなると、懐具合が寂しくなるのか、なかなか物騒ですな」

首を横に振った。

「ともあれ、何事も無くて、良かった」

そして、にこりとして、宵藍を見つめると、

「わたしは、これにて、、」

男の問いかけの件には何も触れず、踵を返した。

その様子に、なんとも言えぬ寂しさが込みあげて、

「あ、、、胡露どのっ」

宵藍は、その名を呼んだ。

門に手を掛けたところで、振り向いたその人に、

「あの、、、あ、ありがと、ございました」

宵藍もまた、頭を下げる。

「いえ、、、」

物静かな、それでいて穏やかな声音が、還つてくると同時に、カタタ…リ…

木戸が閉じられた音が、聞えてきた。

花守が、門を閉めると、

「今日はわしが、茶を淹れような」

深い溜息と共に、瓶子を抱いたまま突っ立っている宵藍に、そう言ったのだった。

胡露が恵堂橋を渡ったのは、夕暮れが迫る時分であった。  
「、、、、、、」

優美なその貌が、今日は心なし、暗かった。

気分が、優れないのだ。

白い息を吐きながら、人々が忙しく行き交う中、

「おや、、、」

橋桁から、身を乗り出すようにしている者に、気がついた。

その傍らに立って、

「何が、見えるのです？」

「ッ」

声を掛ければ、掛けられた方は、弾かれたように身を振った。

と、その拍子に手を滑らせ、

「！！」

傾ぐ、体。

眼下を流れる冷たい川へと、落ちるその前に、

「危ない」

胡露の手が伸びて、引き寄せた。

「、、、、、、」

後襟を掴まれたまま、無言で睨むのは、

「飛び込むおつもりで、若君？」

水干を纏った、伯である。

脛を出した寒々しい姿を見ると、屋敷を抜け出してきたのだろう。

いつものように、鋭い犬歯を見せところで、苦笑した、胡露。

そつと川面を覗き込めば、

「ああ、白鷺の羽根」

洲になっているところに、白い羽根が一枚だけ、引っかかっていた。

さすがに、人目があるところでの跳躍は、禁じられているらしい。  
人がはけるのを、待っていたのだろう。

しかし、そうこうしているうちにも流されてしまうのではないかと、橋桁に齧りついていたのだった。

おかしなものを欲しがるものだと思ひながら、傍らでじつと、羽根を眺めている伯に、

「お屋敷になら、熊鷹、鸚鵡、孔雀に鳳と凰の羽根も、ございます。要りようとあらば、差し上げますが？」

「、、、、、、」

伯は、無言で頭を振った。

どうしても、あの羽根が欲しいらしい。

「困りましたねえ、、、、」

胡露は、空を見上げた。

幾つもの風が行くのが、視えた。

白い、しらうおのような姿をしているものから、大きな龍のようなものまで、その姿は大小様々だ。

胡露は、そつと眼を閉じた。

「、、、、、、」

伯が、胡露を見上げ、釣られるように空を、見上げた。

我が声に耳を傾ける、天駆ける神の末、、、、

思念が、大気を渡る。

「?!」

伯が、思わず身を竦めた。

そのすぐ鼻先を、鼯のような姿の風の精が、吹き抜けていった。頭上高くでは、大気がざわめき、

その白き翼に、今一度風をはらみ、幼神の御前へ、、、、

一陣の風となって、巻いた。

びゅっ、と傍らに吹き降りてきた風に、

「お、、、、」

伯は、細く長い尾を幾筋も引いた、大きな蝶を、視た。

それが、水面に吹きつけ、無数のしらうおの如き姿で群れ広がり、今度は数匹の獣の姿となり、旋風となった。

あちらこちらで旋回すれば、葉を落とした柳の並木や土手の枯れ草が、盛大に揺れはじめた。

人々が襟元を掻きあわせ、背を丸めていそいそと歩み去る中、  
「あ、、、、」

くるり…くるくる…

伯の鼻先に舞い寄る、白き羽根が、一枚。

「ふおお、」

両手で受け取ると、黒目を大きくして、その羽根を覗き込む。

表情は無いが、羽根の根元を摘んでくるとやる姿に、方法はどうあれ、一先ず満足を見た、胡露。

お変わりなく、無邪気なこと、

薄い口元を思わず綻ばせ、屋敷へと足を進めようとして、

「？」

袖を、引かれた。

見れば、袖を掴んだままそっぽ向いた伯が、

「、、ガ、ト」

小さく、礼を言ったところだった。

「お安い御用で、若君、」

胡露はそう言つと、歩き出した伯と共に、往来へと出た。  
何に使うかは一向に不明だが、

「、、、、」

視線の端で窺えば、くるくると羽根を回し、ご機嫌だ。  
ほどなく、古びた外観の天狐の屋敷に、着いた。

傍らにいた伯を見つめれば、漆黒の眸と、目が合った。

「メ、」

伯が、胡露の左目を指差した。

今日は、隻眼ではなかった。

二つの眸が、揃って動いている。

「ああ、」

胡露は軽く目元を押さえると、

「これは、義眼ですよ」

小さく、伯に囁いてよこした。

「ぎ、が、う？」

「ええ。適当な宝珠を、入れているだけです。本物は、地仙が耳環

になさるとかで、返して下さらずで、」

苦笑した胡露にしかし、伯は、

「、、、、」

首を傾げた。

どうして遙絃がそんな事をするのかが、いまいち、理解できなかったのだろう。

説明したところで、まだ幼い伯に、理解できるとは思えなかった。

「、、、、」

「、、、、」

沈黙が、二人の間に流れる。

やがて、

「、、、、」

「おや、、」

どこか慚然と様子で、伯は一人、歩き出した。

胡露の微笑、その意図に、気づいたのだろう。

西の山稜に沈まんと差し込む、橙の光。

往来の何もかもが染まってゆく中、華奢な肩を精一杯怒らせ、その光芒へと溶けゆく小さな背中を見送って、

どうにも、いけない。若君とは、やはり、馬が合わないと言  
うのか、、

胡露は、小さな溜息を、吐いたのだった。

「嗚呼、若君。いつの間にか姿が無いと思ったら、今日は、どちら  
にお出掛けに？」

都守の屋敷の門前には、案の定、篝火の仕度をする瑋瑠の姿。

「、、、、」

いつもの事でそれには応えず、門を潜ると、気に入りの楓の木のある木立へ、入った。

季節はずれの風鈴や銅鐸、鈴が結ばれた梢に登ると、そこに髪紐でもって、白い羽根を結びつける。

よくみると、楓の木の窪みには、団栗や椎の実、松笠、赤い小石、貝殻などが詰め込まれている。

気に入ったものを、集めているのだろう。

幼神とは言え、子供とあまり大差ないらしい。

「、、、、」

風に、白い羽根がゆらゆらと揺れるその様を、眺めていると、

「伯、、」

木立の下に、蒼装が立った。

戻ったと聞いて、足を運んだのだろう。

伯の手が、伸びた。

掬い取るように、長く垂らしたままの髪を、絡めとる。

「紅い、か、、？」

木立に差し込む、燃えるように赤い夕陽によつて、色素の抜け落ちた髪が、赤々と染まっていた。

蒼装が腕を伸ばし、伯の脇に手を入れて、抱き下ろす。

「、、、、」

そのまま腕に座らせ、するりと、胸に掛けていた翡翠輪を外す。ぶるぶると首を振れば、ややくせのある群青色の髪が、背に流れた。

大きく欠伸をする伯を腕に、蒼装は大池の畔へ、出た。

薄く、空を覆い始めた雲を夕陽が赤々と、焼く。

池で羽根を休めていた数羽の白鷺が、塹へと急ぎ、飛び立った。

浮島へ渡り、平橋を母屋への階に向かう中、

「荷葉の香りが、するな、、」

ふと蒼装が、呟いた。

伯が、くんくん、と自分の袖の辺りで鼻を鳴らす。

その様子に、

「珍しい事もあるものだ、伯。相手は、胡露であつたか、、」

穏やかな闇色の眼差しを向ければ、伯の喉が小さく、  
クルル…  
と鳴いた。

その喉鳴りがいかにも、【不本意】、だと物語っている。  
階の先で、母屋の奥より現れた汪果が、膝をついた。

「若君、お帰りなさいまし。化身されたまま、そのような薄着でお  
出掛けになられて、、お寒うございましたでしょう?」

蒼装が草履を脱がせば、伯は、汪果の膝へ。

汪果は、その小さな足を絹布で拭ってやりながら、

「お酒の仕度さきが、整っております。若君のお好きな天津国の花糖衣  
も、ご用意しておりますよ」

「ん、、」

小さく応じた伯を見つめ、微笑んだ。

一方、蒼装は、濃紺の宵闇を従えた北の空を見つめながら、

胡露が、天狐の元に戻った、か、、

耳を、澄ましていた。

往来の喧騒遠い、都守の屋敷。

ここ数日、ちょうど今時分から聞えていた遠吠えが、今日は聞え  
ない。

「、、、、」

冷えた欄干に手を置き、眼差し遠く、彼方を眺めていれば、素足  
で床を歩くひたひたという足音と共に、袖が、引かれた。

軒庇に吊るされた、透かし灯籠に揺れる、焰。

その、頼りない光源の中に在っても鮮やかな董色の眸が、蒼装を  
まっすぐに見上げていた。

「月が中天に掛かるころ、私は出掛けるが、お前は、、」  
「、、、、」

こくり…

伯はただ小さく頷いて、その袖を掴んだ。  
「そうか、、」

蒼装は伯を袖に、歩き出す。

その少し後に、衣擦れの音をさせながら、薄紅色の唐衣を纏った  
汪果が、従った。

同じ頃、門前では琲瑠が、大きく伸びをしていた。

篝火の仕度を、終えたところであつた。

肩を揉みながら、空を見上げる。

薄雲の向こう、朧に瞬く星々が、霞んで見えた。

月が現れるまでは、まだ大分、時間がありそうだ。

白い吐息が、上空から吹き降ろす風によって、掻き消えた。

どこか遠く、鐘の音が重なり聞える、逢魔が刻であつた。

古びた門が、蝶番の軋む音をさせ閉じられる。

橙一色に染められた外の世界とは、別次元としか思えぬ世界が、  
広がっていた。

延々と、彼方まで続くのは、季節を忘れた花々の狂乱だ。

その中を、額から後頭部へと張り出した、見事な巻き角の山羊ら  
が、渡つてゆく。

胡露は、視線をその先へ。

青々とした隆起を空に刻んだ山脈は、今日はどれも白々と雪を頂  
いている。

術者の微細な心情を、察したのか、

少しばかり長く、傍を離れていたようだ、

小さく吐息が、薄い唇から漏れた。

編んで、長く垂らしていた髪紐を解くと、砂色の癖の無い髪が背  
に流れ、銀毛で葺かれた獣の耳が、頭上に現れる。

太く立派な尾を、一振りすると、

「、、、、、、」

足早に、朱塗りの母屋へと向かった。

どこか閑散とした屋敷の内を、見回せば、

「お帰りなさいませ」

「ああ、胡露さまが、お戻りになられた、」

「お戻り、お戻りよ」

まるで息を吹き返したかのように、煌びやかな衣を纏った侍女らが、柱廊に現れた。

その中から抜け出し、傍らに従った女がいる。

「お帰りなさいまし、胡露大人。我が君は、？珀古堂にお籠りでございます」

「潤星<sup>ルンシン</sup>」

いつかの、狐火を従え、往来で都守が戻るのを待っていた女であった。

野狐筆頭、名を、潤星と言う。

「わたしの留守中、地仙に変わりは？」

胡露の問いに、細く、切れ上がった眼を眇め、  
「相変わらず、悪夢に魘されておいでです、」

首を振ってみせた。

「そうか、」

格子戸の向こう。

庭先では、優雅に水を浴びる白孔雀の番いが、仲睦まじく互いの毛づくろいをしているところだった。

その小川に掛かった橋を渡り、その先の回廊を左へ折れる。

金色の花弁を持つ、蓮花。

その水面は、瑞雲たなびく青空であった。

雲間で遊ぶ龍魚らの、藍や白金<sup>しろがね</sup>、朱金、翠の鱗が、陽光に煌く。

広大なその蓮池の先。

白い、大小二つの月が寄り添うその下へ。

弓なりの、優美な曲線を持つ石橋を渡ると、翡翠色も鮮やかな絹羽鳥の羽で葺かれた、離宮の姿。

蔦を長く伸ばす時計草が、飴色の巨木を組んで造られた離宮の至

る所で、青々と咲き群れている。

「、、、、、、」

質素な外観とは裏腹に、離宮の内部は細部に渡り、螺鈿でもって矢車草を思わせる幾何学的模様が描かれている。

角度によつて変わる輝きは、星の瞬きにも似ていた。

その冴えた輝きの中、翡翠を削り創られた麒麟の像や、縦横斜めと無数の絃が張られた楽器のようなもの、真つ二つに割れた石版や、青鋼製の古の硬貨、幅広の大太刀などが、ところ狭しと並べられている。

辰砂の釉薬鮮やかな、長壺の間を擦り抜け、奥へと出れば、

「、、、、、、」

視界が、開けた。

蓮池を一望できる、最奥の間。

卓子からだらしなく伸びた絵巻が、幾重にも重なるその上。

腕に頬を預け、眼を閉じているのは、天狐遙絃。

卓上から、足元へと伸びている絵巻の内容は、

これは、古戦を描いたもの、、、、

太古の時代、神々が二つに割れて、長き大戦に突入した時代があった。

胡露がまだ幼い頃、一族の長老より聞いた話を、思い出した。

散らばる絵巻、その中の、一つ。

一際、眼を引くのは、蒼い雪を頂いた冰山だ。

冰山を挟んで、獣神と、闇色の炎のようなものが描かれているその足元で、祈りを捧げるのは、人間の姿か？

天山、、、、？

何か、引つかかりを覚え、近づこうとして、

「ん、、、、」

小さな声を、聞いた。

胡露は足音を忍ばせ、その傍らへ。

ずり落ちていた掛布を、華奢な肩に、かけてやる。

おや、、、

豊かな金髪が、結われることも無く、垂らされているのに、気がついた。

普段から胡露が結うため、侍女らに、触らせなかったのだろう。

「、、、、、、」

胡露の指先が、髪を掬い上げると、そつと背中へと払った。

無防備な、その寝顔。

指の背で、陶器のように白い頬に触れれば、長い睫毛がふるりと揺れた。

「、、、、胡露」

潤んだ眸が胡露の姿を捉えると、髪を掻きあげながら、長椅子に背を預け、

「戻ったのか、、」

白い細首を晒し、仰け反る。

頭痛がするのか、額を揉む遙絃に、

「このようなところで、、寝台へお連れ致しましょう、地仙」  
恭しく、手を差し伸べた。

額を揉む手指の間から、紺碧の一蔑が投げかけられ、

「いい。それよりも、そちらはどうだ？」

頭を振りながら、顎を引く。

その横顔が、胡露には少し、やつれて見えた。

「正直、あまり芳しくは、ありません」

「そうか、、」

遙絃の、花桃色に染められた長い爪が、卓子の隅に用意されたままになっっている、緋水晶で作られた酒器を、指差した。

心得たもので、胡露が青鋼製のゴブレットを差し出す。

酒器を傾け、青乳色の液体が細く注がれれば、強い芳香が辺りに漂った。

細やかな気泡が立ち上り、弾ける音を聴きながら、

「鶴らも既に、倭の地を踏んでおりました。それどころか、帝都に

いることを嗅ぎつけたようで、」

遙絃が唇を湿らすのを、見守った。

赤い舌先で、酒に濡れた唇を弄りながら、

「今更、他へ流すにしても、この国は狭すぎる、か、」

それまで充血し、潤んでいた眸に、いつもの覇氣が戻ってきた。

「ええ。当人が望めば、別、ですが、」

胡露は、青目との会話を、掻い摘んで話した。

「ふん、」

その言葉に、遙絃の唇が、歪んだ。

「青目。望めば【契約】をも覆さん、か、。正直、それほどま  
では。まったく、泣かせてくれる」

「、、、、」

遙絃は、大きく伸びをすると、長椅子から立ち上がった。

長く、豊かな蜂蜜色に透ける髪が、さらさらと背に流れるまま、

蓮池に迫り出した平舞台へ。

飴色の檜に施された螺鈿の細工が、さながら宇宙に散らばる星の  
ように、燦々と降り注ぐ陽光に、瞬く。

その中を、薄紅、鶯、浅葱の薄絹を重ねて着崩し、その上から月  
白の長衣を羽織った遙絃が、絹擦れの音をさせながら、歩いてゆく。  
「地仙、本当に、よろしいのですか？」

少し後に付き従いつつ、胡露は、欄干に肘をついた遙絃を、伺い  
見た。

「ああ。栄えるにしろ、滅ぶにしろ、見届けるのが、役目だ。もつ  
とも、眼に余るような所業に及べば、相手が大陸であれ、狼精筆頭  
であれ、この限りではないが、」

秀麗な横顔はまっすぐに、空と水面が融ける七色の水平線を、見  
つめている。  
みなも

光芒が極彩色の錦となって、幾重にも絡み合い、水底へと差し込  
んでは、交じり合う。それらは、水中で揺らめいては、鏡面の如き  
その湖面の下、光の波となった。

時折、こちらまで差し込む光の帯が水面を通し、遙絃の横顔を照らしていく。

その都度、紺碧の眸は光を受けて煌き、縁取る長い睫毛は、ふり、またふるりと、揺れるのだった。

穏やかな、静寂。

世界は、どこまでも静かだった。

「、、、、、、」

「、、、、、、」

訪れた静寂に、掛ける言葉を搜していれば、

「お前は、どうするんだえ？」

反対に遙絃に、尋ねられた。

「、、、、、、」

咄嗟の事に黙ってしまった、胡露。

わたしは、どう、したいのだろう、、

さすがに、尋ねられてすぐに、答えが出るようなものではなかった。

俗に、人間らに犬神と呼ばれるものは、虎精や狐精、化猫といった獣のように、神通力を帯びた状態の犬科を指す。

胡露もまた、その流れを汲む。

「、、、、、、」

尚も、押し黙る胡露に、

「おいおい。お前と私の仲だ。今更、遠慮はいらんぞ」

「、、、、、、」

苦笑した遙絃が、振り返った。

「、、、、、、」

言葉に詰まる、胡露。

自分でも答えが、見えなかった。

銀恢の眸を見つめながら、欄干に肘を預け、頬杖をつくとき、

「お前の好きにしたらいい」

慈愛に満ちた眼差しでもって、そう言った。

「遙絃」

思わず、その名を呼んだ胡露であつたが、

「ふ、ふ、」

次の瞬間、端正な口元から笑みが、毀れていた。

場合によつては打つて出る、と言つたばかりの相手とは思えぬ変わり様に、その昔、手酷いめにあわされた事を、思い出した。

「なんだ？」

好意に水を差され、とたんに眉間に皺を寄せた、遙絃。

「いえ。いつか、わたしを叩きのめした方の言葉とは、思えなくて、すいません」

遙絃は、類稀な神通力の持ち主だ。

手合わせした事のある胡露は、それをよく知っている。

それなのに、妙な気の回し方をする。

主として命じれば済むことなのに、力づくではしない。

そこに、好奇心が闊ぎあっているのだが、させたいように、させる。

遙絃が、野狐らに慕われる理由のひとつでもあり、彼らに接する際の遙絃なりの指針、のようなものだった。

不器用なりの、優しさ。

それが少し、可笑しかった。

「あの、あの時は、死に急いでいるお前が、単純に気に食わなかったただだ」

胡露の言葉を受け、慥然とした様子で、顔を背けた。

その横顔が心なし、紅潮している。

照れくさかったのかもしれない。

「、、、、、、」

「、、、、、、」

胡露が、その傍らに立った。

肩を並べ、欄干に腕を預けると、

「わたしはあなたに出会うまで、誇りこそが生きる意味なのだと、

信じて疑わなかった」

遙絃が見つめる水平線の彼方を眺めた。

「地に落ちて、その誇りさえも失った。その上、あなたに、負けた、  
、、」

「ふん、、、」

「初めて味わった、屈辱。その恥辱の中、『ただ、生きる』と言われ、生かされ、困惑したものです」

「、、、、、」

『ただ、生きる』

その言葉通り、意味など無い。

縛られる誇りも、掟も、守るべき者も、無い。

無くても、生きる。

当時の胡露は、地上で芽吹いた花精を狩っては天津国の神々に引き渡す探花使長として、その名を知られていた。

神意に実直な性格から、行く行くは地上に降り、人々を導く地仙格に推挙されると言われた程だった。

ただ一度、情を掛けた半花精が、目付けにつけた探花使と共に、

地上で殺傷騒ぎを起こすまでは。

責任を問われ、地上に墮とされた胡露は、そこで初めて遙絃に出会ったのだった。

「あの時のわたしには、あなたに抗う術も、拒む力も、自らに幕引く気力すら、残っていなかった、、、」

『そこで、呼吸しているだけでいい』

胡露を、文字通り叩きのめした遙絃は、そう言い放って、姿を消した。

残された胡露は満身創痍のまま、地に伏し、陽が暮れてはまた昇る様を、幾日も幾日も、眺めていた。

一つとして、同じ形のものはない雲が行き、その違いすら指摘できずに過ぎ去る日々の中、その一瞬一瞬、姿を変えゆく夕暮れや朝焼けが、世界が、【ただ、美しかった】。

何も背負っておらずとも、時は流れていく。

自らの命を絶ったところで、それは変わらないだろうと思っていた。  
この世にいても、いなくても。

だが、

「わたしは、気づかされた、、」

不変なものなど何も無いと、だからこそ一瞬一瞬がこんなにも美しいのだと、そして、それを目の当たりにしたのも、まさに今、こうして呼吸しているからだ、と、素直にそう、思えた。

「ですから、今は、、」

遙絃の傍ら。

視線は遠く、遙か彼方を見つめたまま、

「わたしは、やはり、わたしで在りたい」

低く、それでいて澄んだ声音が、告げた。

隣で、その言葉を聴いていた遙絃は、

「、、、そうか」

唇の端を少しだけ吊り上げ、浅く、頷いた。

「同じ祖に連なる、好<sup>よしみ</sup>。出来ることなら、力に、、」

それだけ言つと、胡露は傍らの遙絃を見つめた。

「あなたの眷族に加えてもらい、あまつさえ、その庇護の下に在ると言つのに、随分と勝手な事ばかり並べ立てているというのは、重々承知。それでも、、」

「胡露」

大気が凜と震え、その名が呼ばれた。

紺碧の眸が、銀恢の眼差しを、包み込む。

「二度も言わせるな」

呆れたような、それでいて、胡露の性格を良く知っているとばかりに響く、言葉であった。

「あ、、、」

思わず、ぴんと張ったままだった、獣の耳を伏せる、胡露。  
その肩に手を置いて、

「気負うなよ、私の前では」

遙絃は無邪気な子供のような笑みを残すと、母屋とを繋ぐ渡殿へ向かい、歩き出した。

普段は、遙絃の影のように仕えているせいか、誰に対しても差し障り無い受け答えをする、胡露。

今日は、その本意に触れ、満足したのだろう。  
ふわり、ふわり、と、遙絃の尾が揺れている。

遙絃に、何かを返そうと口を開き、

「っ、っ、」

言葉が見つからず、胡露は、口を閉じた。

結局、悪夢について一言も口にしなかった、遙絃。

遙絃の性格上、胡露が尋ねれば、隠さずに答えるだろう。

別段、強がっているわけでもない。

現に、遙絃は強い。

心身、共に。

それは、遙絃の伴侶となった胡露が、一番良く知っている。

その遙絃が、今回ばかりは、さすがにひどく参っているように、思えた。

『これは、私が、負うべきものの一つだ』

何度も反芻した、その言葉。

遙絃の言葉には確かに、【覚悟】と【深入りするな】と言う気遣いが、垣間見える。

胡露にしても、自分の方から、出逢う以前のことを尋ねるようなことはしないため、真相は未だ、謎のままだ。

いつか、悪夢から覚める日が、来るといいのだが、  
それだけを、切に願っている。

そして、出来ることなら、少しでもその荷を背負わせて欲しいと、思っている。

「、、、、」

渡殿を、母屋へと、遠ざかるその背中。



透ける様に青い目を、している。

その姿に、どこからともなく現れ、集まった狼らは、一応に太い尾を上げると、耳を伏せた。

こちらへと歩んでくる銀狼の姿が、月光を浴びて淡く、闇に滲んだ。

そのまま、月光を長く従えたかと思うと、それは、薄衣の裾となつた。

また、別の光の一端は、すらりとした手足となり、長き髪となつた。

寛衣の襟を正すと銀狼、青目は、狼らの前で腕を組んだ。

ウウクオオオオ・・・ン

ウウウ・・・ウオフツ

ククク・・・

一様に、上目使いで甲高い声を上げる、狼ら。

それらの声に耳を傾けることしばし、

「、、、分かりました。皆、苦勞を掛けます。引き続き、頼みますよ」

淡く微笑みながら、労いの言葉をかけた。

甘えるような仕草で鼻を鳴らすと、狼達は闇の中、散り散りに駆け出していった。

大地に、銀色の風が、しろがねいろ巻く。

「、、、、、、」

軽やかな足音が、遠ざかってゆくのを耳にしながら、

「青目、久しいな、、」

「、、、、、、」

低く、声が掛かった。

反射的に、瞳孔が、針のように引き絞られた。

眼光鋭く、辺りを見回せば、

「そなた、は、、」

畦に、伐採を免れた白木蓮の巨木。

小さな新芽を幾つも結んだその幹に、もたれている者が、いた。  
闇夜にも、白々と浮かび上がる、その姿。

纏っているものこそ、地味な闇色の狩衣だが、青目や風狼の鼻が、  
その気配を嗅ぎ取れないわけがなかった。

さしもの青目も眉を寄せ、身体を向けた時、だった。

「、、、、、、」

その闇色の袖に、白い小さな手が掛かっていることに、遅まきながら気がついた。

おずおずと、その背中から顔を覗かせたのは、

幼、神、、、、

三叉に割れた、一对の翡翠の角。

ややくせのある群青色の髪は、背にばさらに流した、男童。

董色の大きな眸で、

「、、、、、、」

じつとこちらを見つめている。

結界を、その身に張っていた、、幼神を、従えて、、？

青目は視線を逸らさず、くん、と鼻を鳴らせた。

見まごうことなき、どこにでもいる人間だと、五感が伝えてくる。

しかし、人の身でそのような事が、、

眼を、凝らしたところで、

もしや、、、、

白木蓮のちようど、真上。

陽炎のように茫洋と、八柱の将が控えていた。

「冥真君、、、、」

その名に、無言で青い唇を歪めた、蒼装。

「天狐はともかく、玄胡露。よもや、貴殿までも、この人の都にいたとは。それに、その脆弱な氣。人の器で、いったい？」

困惑を隠せない、青目に、

「預かっている。少々、事情があつてな、、、、」

蒼装は、闇色の眼差しで、応えた。

青目の視線が、再び、伯へ。

「、、、、」  
伯が、身じろぐ。

「その、幼神も、、？」

青目の眼差しが、自分に向けられると分かった、

「、、、、」  
再び、蒼装の背中に隠れてしまった。

「そのようなものだ、、」

「貴殿が、珍しいこともあるものですね」

対峙している相手の事を、良く知っているとでも言うような口振りに、

「不変なものなど、この世のどこを探しても、見当たらぬものだ。そなたの、心変わりのように、、」

「、、、、」  
闇色の眼差しが、黙らせた。

沈黙が風となって、粉雪と共に、吹き込む。

凍てついた大気が、張り詰めていた。

「何をするも、構わんが、、」

それは、低く腹腔を震わせる声音であった。

「我は、この人の身で帝都を負った、、」

腕を組んだまま微動だにしない、青目の前までくると、

「この地は、我らが知るよりも、複雑だ。私と、天孤の手を、煩わせてくれるなよ、、」

「それだけを言っ、傍らを通り過ぎた。その姿を追った視線が、」

「、、、、」  
董色の双眸と、ぶつかった。

「つ、、」  
一瞬、大海の深みにいるような、そんな映像が、脳裏を占め、霧

散した。

袖を掴んだままの伯は、後を振り向いたまま、以前、青目を見つめている。

感情の一切を窺わせない、能面のような貌だが、

あの幼神、海皇の縁者のようだけれど、

その董色の眸の中に、青目は、僅かな感情の起伏を、見た。

垣間見えた、好奇心のようなものに、手を振れば、

「、、、、」

少しだけ蒼装を見上げ、すぐにまた、青目を見つめてくる。

「ふ、、」

青目は、思わず引き結んだ唇を、綻ばせた。

伯が、そつと袖から手を出し、小さく応えたのだ。

完全に縛られてはいないようだが、あのような姿で大地に留め置くとはい、冥真君、なんとも酷なことを、

青目の視界の端。

闇の中で、影が、身じろいだ。

一度、大きく身を震わせると、力強い馬蹄の音を辺りに響かせた。

蒼装の元に駆け込んできたのは、青乳色の鬘に深紅の眸、漆黒の

肥馬、鋼雨。

蒼装が騎乗の人となると、伯がひらりと舞い上がり、その膝へ。

小柄なその姿は、広い背に隠れ、すぐに見えなくなった。

「、、、、」

遠ざかる馬蹄の音を聞きながら、青目は、帝都に背を向ける。

薄霧漂うその先へと身を潜めながら、青目は自らの胸に、手を置

いた。

そして、

「心変わり、ですか、、」

天の高みに在った頃を思い出し、ぽつりとそう、呟いたのだった。

## 第拾ノ武幕中ノ後

霸王眼

(前書き)

粉雪舞い散る、冬夜。帝都では、静かな死闘が繰り広げられていた。夜陰に紛れ、刃を交える、鵠と風狼。そんな最中、大陸では神都の守が、動き出さんとしていた、、、

死人還りの都守蒼桒、業丸を継ぐ武官燕倪、幽身であるがこの世に縛られた伯。それぞれが紡ぐ異国絵巻、第十二幕中の後編。。。。

あか、、、い、、、

赤と、黒。

混じりあいながら、うねっている。

視界に重く押し掛かっているそれらが、何なのか？

今となつては、もう、分からない。

覚えて、いない。

ただ、生温いものに包まれているような感覚だけは、あった。  
瞼は、そのまま剥がされてしまったのか？

身体と言う概念すら、喪失してしまった自我は、

あか、くろ、、、また、、、あ、か、、、

視界を占めるものだけを情報とし、漂っている。

剥きだしの視界に展開する、赤と黒のうねりに、果てはない。

あか、、、くろ、、、あか、、、くろ、、、

延々と続く、その繰り返し。

もう、どれ程の間、ここにいいのか？

長いのか、短いのか。

その感覚すら、欠落している。

許されていることは、

あか、、、くろ、、、あか、、、

やがて訪れる、【その時】を、待つことだけ。

ふいに、

あ、、、ああ、、、

雲間から、朝陽が差し込むように、白き光が、毀れた。

あ、ああ、、、、つ

顔を背けようと、眼を閉じようとするが、視界が揺らめくだけだった。

それまで視界を占めていた赤も黒も払いのけ、白光に、包み込ま

れる。

刹那、

ツ、、わ、い、、ひかりは、、こわい、、

それは、拒絶であり、闇を選んだ瞬間でもあった。

光に背を向け生きてきた者の、当然の選択だったかもしれない。

じわり・・・

視界に、墨が落とされたように、闇が滲んだ。

みるみる色褪せてゆく、光。

光が、喰われてゆく。

くろ、、くろ、、くろ、、くろ、、

再び訪れた、黒き闇。

その中で、考える。

何時から、だろう？

夜が来ると、心が安らぐようになったのは？

何時だった、だろう？

血塗れた所業のすべては、夜の闇で塗り潰し、その懐深くへと隠匿してしまえばいいと、教えられたのは？。

あれは、あれは、あれは、、

くろ、、よる、、やみ、、

呟きを舌に乗せている、そんな感覚だけは、ある。

唱えたことなど無い、経文の一説のように。

くらやみ、、かげ、、ぬえ、、

闇の中、その感覚だけを、辿った。

ぬ、え、、ぬえ、、あ、、

残された自我は、それは緩慢に、侵蝕されていくはずだった。それが、

鵲、、

言葉が、手繰り寄せたのは、断片的な記憶の欠片。嬌声に、酒の匂いが混じる。

白粉と、甘い香が鼻腔をくすぐる、不快に。

天井、軒下に潜み、あるいは、給仕に扮する時もあつた。

手には、ぎらつく刃物を持つ時もあれば、無腰で臨む時もあつた。噴出す血潮に濡れる時もあれば、生々しく、死への蠕動を繰り返す感触だけが、手に残る時も、あつた。

押し寄せる、どこか懐かしい、記憶。

その全てが、思い出であり、一人の『鵠』として、確かに生きた証であつた。

あ、、、

ふいに、ズルリ、と足が引つ張られたような気が、した。

ズル・・・ズズズ・・・ズ・・・

すぐそこにあつた闇が遠ざかり、濃厚な闇の触手が、絡みつく。

あ、、、血、の、、、

とたんに、血臭が、鼻を衝いた。

肺腑に心地よい、その匂いの記憶は、すぐに薄れてしまったが、

齎すものは鮮明に、

血、、、死、、、死、、、

覚えていた。

死、、、

視界の闇に、赤が滲む。

深く、深く、沈んでいく中、手を伸ばそうとして、

！！

息を、呑む。

闇色に切り取られたそれは、かつては、【手】であつた、【触手】  
《もの》。

それは、自分のものであつたのか、それとも、引きずり込まんと  
している闇のものであつたか？

いや、、、だ、、、ッ

今となつては、分らない。

子供のように取り乱し、錯乱する、精神。

それは、自我の崩壊であり、その人であつた生の幕引きをも、意

味する。

視界が、濁る。

肌がざわめき、あわ立ち、波に吞まれるようにして、

溶け、、、る、、、

トブ・・・ンン・・・ッ

浚われる。

、、、、、、

、、、、、、

、、、、、、

訪れた、静寂。

もし、佇む者が居たとしたら、今、そこは、凪いだ大海原を連想させることだろう。

穏やかでありながら、底知れぬ不気味さを秘めた、空間。

ここは、奈落。

光を拒み、漂い蟠る闇に抱かれたその魂に、残るものは、果たして？

ポタ・・・ポタタ・・・タ・・・

何かが滴る音が、する。

噎せ返るように、充滿しているのは、鉄錆に似た臭いだ。

タタ・・・ポタ・・・タ・・・

闇。

とつくに太陽は中天にあると言うのに、光差し込まぬ、その一室。  
「、、、、、、」

一人、闇よりも濃い染みを、床に作っている。

限界か、、

染みの中に、さらに暗く澱むものが、あった。

見通せるはずなどないのに、その先には、深い深い穴が、どこま

でも続いているように見えた。

短い舌打ちが、乾いた唇から、漏れた。

海を隔てると、さすがに、遠い。彼の地の呼び水も、無い。

餌さえあれば、あるいは、

貌を歪め、その染みを覗き込むように、背を丸めているのが、

「導師」

その、人であった。

僅かに身じろぐと、導師はゆっくりと声がした方を、振り向いた。淫色の衣をすっぽりと纏った【鵠】が、控えていた。

「陛下が、お呼びでございます」

右の拳を床に着き、短く伝えれば、

「、、、、、、」

ゆらりと、立ち上がる気配があった。

すぐ傍らを導師が、革靴の踵を鳴らせ、通り過ぎてゆく。

布を、貌に巻きつける小気味良い音の後、

ギイイ・・・ギギギ・・・

光の縁取りが、徐々にその大きさを増すのが、見えた。

錆付いた蝶番が、耳障りな音を立てる。

押し開かれた扉は、差し込んだその光でもって、一室を照らし出した。

閑散とした、何の変哲もない、部屋。

ただ、床だけが、不気味なほど赤々と、濡れていた。

キ・・・キキイイッ・・・

すぐにまた、闇が訪れると、鵠は立ち上がった。

任に帰ろうとして、

「、、、、、、」

ふと、振り向いた。

視線が吸い付いたのは、闇よりも濃厚に、床に伸びた染みだ。

導師が、不可思議な術を使うのは、知っている。

大陸中から集められ、神都に召抱えられている道士らとは、明ら

かに異質な術。

ふらりと足が、向いた。

「、、、、、、」

その鵜は、まだ、若かった。

吸い寄せられるように、その染みを、覗き込んでいた。

噓せ返るような、血の匂いに、眩暈を覚える。

狩りの香りだ。

夜陰に紛れ、獲物を狩る、あの匂い。

獲物は大概、男の場合が多いが、中には若い女の場合もある。

名声や十分な地位を得ているにも関わらず、そう言った者程、よからぬ事を企てる者が、多い。

抵抗赦さず、今まさに息絶えんとするその刹那は、夜陰に潜む自身らが他の誰よりも、あたかも高等な種であるような錯覚に陥る、瞬間だ。

「、、、、、、」

この若い鵜も例外ではなく、幾度かその感覚を、味わったことがある。

あの、瞬間、、、、

その、何とも言えぬ高揚感を、思い出した時だった。

・・紅・・隼・・

「ッ」

名が、呼ばれた。

鵜の任を拝命してからと言うものの、久しく聞かなくなった【名】であり、【音】であつたが、その声は鮮明に記憶を揺さぶった。

声の主は、、、、？

兄哥、、いや、しかし、兄哥は任で神都を離れて、、ぬッ？！

視線が、血溜まりから外せなくなった。

どう言つわけが、手足も、動かせない。

声も、出せない。

身体を揺するうとも、石になつたかのように、ぴくりともしない。  
「、、、、、、」

冷たい汗だけが額を伝い、頬から顎先へと、滴っていった。

こぼ・・・ん・・・

水の音が、聞えてくる。

視線の先で、泡がひとつ、弾けたところだった。

こぼぽ・・・ん・・・

もう、一つ。

こぼぽ・・・こぼ・・・とぽ・・・ん・・・

ふつつつと、湧き上がるそれは、見る見る勢いを増し、影の鼻先をしたたか濡らした。

「つ、、、、く、、、、」

からからに渴いた、喉。

飲み込もうとした唾も、乾いてしまったようだった。

目の前で起こらんとしている事を、頭で理解しようとしても、そう易々とできるものではない。

赤い触手のようなものが、首に絡みついた時、眼前に迫った泡を

見て、

「！！」

眼を、剥いた。

紛れもない、それは、人の目だ。

見ている…

それはこちらを、じつと…

眼が、ゆっくりと近づいてくる。

瞼を閉じることも、できない。

眼球同士が　　、ぶつかる。

刹那、

なッ、、、、

若い鶴は、息を飲んだ。

それは、何とも奇妙な感覚であった。

痛みも、触れ合った感触も、ない。  
それなのに、眼の中に眼が、在る。  
頭の中に、確かに在る。

もつと、ずつと奥まで　　、這い入ってくる。  
己の意志など関係なく、それは侵入を果たした。  
急速に、羞恥が、押し寄せてきた。  
見られている・・・

先ほど抱いた、浅はかな高揚感を。

「あ、、、」

鼻の辺りから、何かが滴った。

生暖かい、それでいて、大地に蟠るものと同色の体液が、唇に鉄  
錆の味を残し、滴った。

カラカラに乾き始めてゆく眼球が、俄かに赤く、赤く、潤ってゆ  
く。

一筋だった赤い筋は、その両目から、鼻から、口から、とめどな  
く溢れ出す。

やがて、

しやり・・・ごりり・・・ごきゅ・・・ごっ・・・

頭蓋に反響する、不快な音。

「あ、、、あ、、、」

布地の下で、眼球が反転し、白目を剥いた。

喰、われている、、俺は、、喰われ、て、、

痛みは、無い。

音だけが、体中に反響しているのだ。

「うう、、お、あ、、」

だらしなく開いた唇から、涎が滴り、全身が、弛緩してゆく。  
意識が混濁し、腕をつくことも敵わず、

「、、、、、、」

そのまま、血塗れた床に、突っ伏したのだった。

「、、、、、、」

導師が立ち止まり、後ろを、振り返った。

歴代の王を祀る、靈廟。

そのすぐ近くにある、石造りの離宮は、贅を凝らした靈廟とは対照的に、粉雪舞う曇天に、そのまま融け込んでしまうかのような、質素な造り。

導師は、平素、訪れる者も限られるこの靈廟付きの離れを、使っていた。

「若さ故に、巢食われ、蝕まれた、か、、、、」

勢いを増しながら、降り荒ぶ粉雪に掻き消えた、その呟き。

木々が揺れ、身体に巻きつけた布の端らが、強い風に、巻き上げられる。

そんな中、

「、、、、、、」

風の音に混じり放たれた、声ならぬ若き鶴の断末魔を、聞いたのかもしれない。

神皇に仕えるにおいて、個は、不要。その好奇心は、他でもない。自身を滅ぼすと、教わらなかったのか、、、、

雪の中から、抜け出す者が、いた。

二人。

すっぽりと、淫色の衣を纏っている。

鶴だ。

その鶴が、差し出すものが、あった。

波状の白い髪が、面から垂れている。

紅く塗られた肌には、漆黒の隈取。

見開かれた金色の眼でもって、見るものを威圧、睥睨する。

剥きだしの鋭い牙といい、突き出した硬質な髭といい、その貌、異形。

導師は、慣れた仕草でその面をつけると、腕を伸ばした。

「、、、、、、」

絹地に、彩雲に遊ぶ紅顔の異形、【鵠】と夜の月。

別の鵠が現れ、導師の背に回ると、その腕を、裾の長い官服の袖に通した。

小気味良い衣擦れの音を聞きながら、

「我が閨で、汝らの同胞が一人、吞まれたようだ、、、、」

傍らの鵠を、横目に眺めた。

「左様でございますか、、、、」

無機質な声音が、応じた。

何の感情も窺わせない、闇に生きて長い【鵠】の、短い返答であった。

「ああ。だが、拝謁から戻るまで、そのままにしておけ」

「御意、、、、」

ほっそりとした指先が、襟元の、氷のように冷たい象牙に触れた。象牙で作られた領子<sup>リンス</sup>を、止めながら、

まあいい、、、、お陰で都合良く、鬼窟が開く、、、、

導師は、薄い唇を、歪めた。

死したのは、あの若い鵠の縁者か、、、、我が霸王眼によって開かれた【奈落】に呼応し、現世と幽世の境を漂っていたところで祖国の仲間の、温かい血肉を欲したのだろう。呼び水が、彼の地で流された、鵠らの血潮とは、なんとも、、、、

面越しに見上げた空に、細く息を吐き出した。

どこまでも冷たい、死人の吐息。

、、、、すでに対価は、払われた

面の下で、薄笑みを、自嘲気味な笑みに変えると、

神皇のご尊顔を拝した後、せつかくだ。蛮姫を迎えに、一息に鬼窟を、渡るとするか、、、、

肩に降り積もった雪をそのまま、付き従う鵠らと共に、吹き荒ぶ雪間へと、掻き消えたのだった。

飴色に磨かれた、床。

足袋越してもひやりと、冷たい。

肺腑深くに吸い込めば、すでに陽も高いが、朝の清々しい大気がまだ、残っているようだった。

パ・・・シャ・・・

ふいに、水音が弾けた。

に視線をやれば、母屋と書院を繋ぐ細い渡殿の下、大きな人影に驚いた緋鯉が、緩慢な動きで、青く澄んだ深みへと、黒く溶けていくところだった。

渡殿の先、突き出した軒庇の下を、回り込めば、

「よう」

換気のため開けられた蔀戸の先に、男童を膝に入れた、見慣れた貌があった。

二人とも、所狭しと積み上げられた書簡の山に、埋もれている。

「こりやまた、お前、溜めたな、」

一目見ただけでも、民の切実な嘆願の声が、聞えてくるようだった。

「たいしたものはないが、年の暮れともなると、余計な心労が増えるようだ、」

読み終えた書簡を巻き直せば、

「どれもこれも、片付けちまって、気分一新、新年を迎えたいって心理だな」

顎先を撫でやりながら辺りを見回していた男が、同情するとも言いたげに、逞しい肩を竦めて見せた。

「お、」

視界の端。

陽射しを受けて、煌くものが、あった。

琥珀、梔子、翠、蘇芳、薄桃、紫苑に、瑠璃。

「いつもの楓の木、覗いたんだぞ、伯？」

目にも鮮やかな色とりどりの飴玉を、真白の懷紙に広げ、

「、、、、」

カリカリと小さく音を立てて齧っていた伯は、董色の視線だけを向けた。

いつも同じ場所にいると思うな、とでも言いたげだ。

「陽も高いうちに、珍しい。今日は、どうした、、」

その伯を膝に、文机に頬杖ついた蒼装は、闇色の眸を、眇めた。

「お前に、見てもらいたいものがあるんだ」

いつものくつたくのない笑顔で、燕倪が、片手拝み。

慣れたもので、さつさと空いている書院の片隅に陣取ると車座だ。袖を探れば、袱紗が、出てきた。

「んー、、」

伯が、膝から手を伸ばせば、

「言っておくが、菓子じゃないぞ」

燕倪が思わず、苦笑。

「蒼装。お前、この間、風狼がどうのとか言っていただろう？」

「ああ、、」

無骨な指先で、包みを解けば、

「警邏の最中、若い者が妙なものを拾ってな。もしやと思って、さ、、」

明り取りから差し込む陽光を受け、鈍い輝きが、転がり出でた。

身を乗り出し、覗き込んでいた伯が、

「ッ」

不意に水干の袖を膨らませ、部屋の片隅へと跳躍。

「お、おい、伯?!」

「、、、、」

群青色の髪はざわざわと波打ち、小さな犬歯が、剥かれる。

澄み渡った黎明を思わせる董色の眸には、朱が滲み、怒りとも、

緊張ともとれる様子で、袱紗の中から現れたものを、睨んでいる。

「なんだか、、、まづかった、か？」

伯の豹変振りに、さしもの燕倪が蒼奘を見れば、

「どれ、、、」

すでに、鈍色の輝きは、その手に収まった後だった。

「ふむ、、、」

蒼奘が、手の中のを陽の光に、当てる。

それは小指程の太さがあり、鋭い先端とは裏腹に、左に螺旋を描いて抜れている。

鈍色を放つが、黒々と光を吸収しているようにも、見える。

「これ、なんだと思う？」

「、、、、」

文机の上に置くと、指先で、転がした。

闇色の眼差しが注がれ、

「元は、法具、、、」

聞き慣れた、抑揚に欠ける鬱々とした声音が、告げた。

「法具？」

「独鈷杵」

「仏が持っている、あれか？」

「その様なものだ。被魔の力が宿っている」

「被魔の、法具、、、」

腕組みで首を傾げた、燕倪。

「しかし、もしそうだとして、そんな大層なもの、誰かが無用心に落としたってのか？」

「どうだろうな、、、」

蒼奘が懷紙を取り出すと、紫檀の文机に、広げた。

その上に置くと、切先の擦れが始まる部分に、爪を当てた。

そのまま引つかくようにして動かせば、

「お、、、？」

黒い欠片が、白地に幾つも毀れた。

赤黒く、指を汚すその欠片に、

「これは、、、」

濃い眉を寄せた、燕倪。

向けられた鈍色の眼差しに応える代わりに、蒼奘は青く薄い唇を、吊り上げた。

その態度に、一瞬、憤然した燕倪だったが、自らが持ち込んだだけに、一つ深い溜息を吐いて、

「やっぱり、血生臭い事になっているじゃねえか、、、」

恨めしげに睨むに、とどまった。

薄笑みを浮かべたまま、視線を外した、蒼奘。

「我らが介入すれば、民が巻き込まれる、、、」

「、、、、、、」

そう言われてしまえば、燕倪、

酌んでくれ、か、、、

押し黙るより他、無くなった。

ひとしきり指先を懷紙で拭くと、蒼奘は、軽く膝を叩いた。

「、、、、、、」

それまで、壁際で硬直していた伯が戻ってきては、そろりと膝に入る。

まだ多少、髪が逆立っているのは、得体の知れぬものを見て、警戒しているからだろう。

菓子には目もくれず、片手は蒼奘の袖を掴んだままだ。

その背を、擦ってやりながら、

「これはな、闇針イエンシンと呼ばれている」

青い唇が、静かに語り始めた。

「闇針、、、破魔つて割には、物騒な名前だな、おい」

改めて、机の上に転がっているものを眺めれば、陽光の中にあっても禍々しい輝きを放っているような気が、した。

「ああ。それ自体に、不可視の呪が、刻まれているからな。強い、想念だ、、、」

「想念、、、」

「元より針とは、縫い止めるもの。この法具は調伏ではなく、むしろ、捕縛、、、」

「捕縛？何を、ってんだ？、、、まさか、お前、魑魅魍魎ってんじゃないだろうな？」

青い唇に浮かんでいた薄笑みが、深くなった。

燕倪は、濃い眉を顰め、

「その、まさか、かよ、、、」

額を揉みながら、思わず呻いた。

「古より、異形のものとは、幽世や常世といった、現世とは別次元の存在として認識されている。そういったものは、あちら側から現世へと抜け出した時、現世の影響を受け難い性質があると信じられていてな」

「むむ、、、」

「これは、それらをこの世に縫いとめんとして、精錬研磨されたものだ」

「だが、刺されば、人でもただでは済まないだろうが、、、」

「そのどちらにも効果があれば、尚、いいだろう？」

「蒼装ッ」

ぞっとするような、冷ややかな眼差しで言えば、燕倪がたまらず、窘めた。

同時に、びくり、と身を震わせた伯は、蒼装の背へと隠れ、

「まあ、燕倪様、そのような大きなお声で、、、」

「あ、いや、つい、その、、、すまん」

盆を手に現れた汪果は、目を丸くした。

茶器が触れ合う心地良い音に、どこかで琲瑠が庭を掃く軽やかな音が、混じる。

やがて、蓋碗から薫り高い芳香が漂えば、伯がようやく顔を覗かせた。

「、、、、、、」

ちょうど二人の間に座ると、薄桃色の干菓子に手を伸ばす。

小さく齧るその様を眺めてから、

「どのみち、こんなものが転がっているのなら、巻き込まれているって、言うんじゃないのか？そこまで、知ってるわけだし、」

横目で、蒼装の表情を、窺った。

「、、、、、、」

案の定、これといった変化は、無い。

鈍色の眸を眇めると、

「あー、そうかい、そうかい、、」

その反応に、溜息だ。

一方当人は、どこ吹く風で、

「、、、、、、」

闇針を袱紗に仕舞うと、薄笑みを浮かべたままの唇をそっと、碗に寄せるのだった。

衣を巻き上げ、肌を刺す、寒気。

夜の闇は、吹き荒ぶ粉雪によって、一面灰恢に塗り潰され、大地は、叩きつける雪が風を彩り、波打って見えた。

皆、一様に、門扉を固く閉じ、朝陽を恋しく思っているころだろう時分、

ズズ・・ズズズ・・

何かを引きずる音が、聞えてくる。

ズ・・ズズ・・ズズズズズ・・

灰恢の世界の中、複数の影が、蹲っている。

涅色の衣を纏い、一様に、同じ方向を見ている。

大きく開け放たれた、離宮の扉。

そこからちょうど一人、出てくるところであつた。

粉雪吹き込み、風によって、拝領の書画が巻き上げられるのも構

わず、現れた導師の手は、

「、、、、、、」

物言わぬ骸の襟を、掴んでいた。

それを、

ズ・・・ズズー・・・

引き摺っている。

靈廟前、広大な広場と思しきその中央へ向かえば、赤黒い染みが、離宮と骸とを繋いでゆく。

弄うようにして、大地を舐めていた粉雪も、染みに触れれば、次第に赤く赤く滲んでは、染まっていた。

やがて、鈍い音と共に、無造作に投げ出された、骸。

導師の手が、顔を覆っている布を、取り払った。

死者への哀悼の欠片もない、無機質な所作であった。

風が、天高くへと舞い上げてしまえば、まだあどけなさすら残す

若者の顔が、現れた。

白目を、剥いている。

それどころか、眼球は赤く赤く染まり、鼻腔、耳孔、口から溢れたと思われる血潮が、ぐつしよりと固まり、無残にも肌に、こびりついていた。

導師が、自らの髪の中へ、手を差し入れた。

何かを探りながら、

「皆、下がっている、、、、」

低く命じた。

控えていた複数の鶴らが腰を曲げ、音も無く、後退。

するりと、半顔を覆っていた布が、手に巻き取られる。

手指が、左目の前で、何度か何かを引き抜くような動きを見せた。袖に、巻き取った布と、引き抜いた何かを仕舞うと、

「、、、、、、」

左目は閉じたまま、若い鶴の下瞼を引つ張った。

指先が直に眼球に触れ、覗き込むと、その左目がゆっくりと、開

く。

ポタ・・・タ・・・

若者の頬の辺りに、赤い雫が、落ちる。

ポタタ・・・タタ・・・

ひとしずく、ふたしずく・・・

止めどなく左目から滴る、血涙だ。

反転した白目を指で辿って戻すと、虚ろな視線が、導師を見上げた。

ポタタタタ・・・ポポ・・・タ・・・

血涙が、その勢いを、増す。

若い鵜の頬を濡らしていたそれが、眼球に、落ちた。

ピシャ・・・ン・・・

凪いだ水面に落ちたかのように、眼球が、波打った。

ピシャン・・・

もう、一滴。

虚ろな眸が、赤黒く、滲む。

「おお、、、」

離れたところから、導師を見守っていた鵜らから、どよめきが、漏れた。

吹き付ける粉雪と風に、視界を奪われながらも、微動だにせず、導師の一足一動を見逃すまいとしている、鵜ら。

その視線の先で、風が、巻いたのだ。

粉雪は、そこだけ巻き上げられ、取り除かれた雪の下より現れたのは、異国より切り出され、千夜を掛けて遙々運ばれたと言われる、黒き御影石の一枚岩。

見る・・・

鵜の一人が、言った。

血塗れた床に、無数の孔が・・・

艶やかな光沢を放つ、天鵲絨を思わせる深い闇が、口を開けんとしていた。

御影石の床が、細やかな流砂となって波打ち、穿たれた孔へと吸い込まれてゆけば、導師の身体も骸も、ゆつくりと沈んでいく。

息をするのも忘れ、その光景を見入っていた鶴らの中から、

「鷗鷺」

一人の名を、呼んだ。

「、、、、、、」

音も無く、その傍らに立てば、流砂のように足をとられる不快な感触が、伝わってきた。

「導師」

「導師、、、、」

他の鶴らが、たまらず声を掛けたのは、すでに上半身まで沈み込んだ導師が、無言で布を左半顔に巻きつけ始めたためであった。慣れた様子で、髪の中で布を結びながら、

「二、三日、留守にする。戻るまで、誰も近づけるな。陛下、さえも、な、、、、」

「はっ」

一斉に蹲踞した鶴らを残し、導師と骸、そして、鶴一人は、完全に、闇に吞まれた。

ゆらゆらと波打つ、御影石の床。

そこに、さらさらと、粉雪が吹き込み始めた。

何の変哲もない、御影石。

その硬質な表面を、滑らかに舞う、雪の白さ。

ゴウゴウ、ヒョウウウ・・・

風が、強くなった。

打ち付ける粉雪が、曇混じりになって、肌を打つ。

はっきりと口を開いた闇を、その色がみるみる覆ってしまったも、

「、、、、、、」

「、、、、、、」

残された鶴らは、目の前で起きた術を、整理しきれずにいるようだった。

## 第拾ノ武幕中ノ後

霸王眼

(後書き)

短ッ!! 苦し!!

それでも、一応、更新ちゅやあ、更新やね・・・♢(・・、)

非常に遅い更新、それでもオカワリしていただいてる方に、まずは、感謝を(´・`・´)ノ　って、そんな奇特な人、いんのだろうか。。。目下、不明。。。。

試験の合否はとにかく、お勉強漬けの日々から解放されて、ようやく、筆を進めることができるべ。。。もー参考書なんて、捨てちまおう。。。。

だが、来週発売のダークソウルの誘惑も待ち構えている。。。ブラ三も、2クール目、始動する。。。あのコとのお食事の約束も、合コンも。。。もー、誘惑に勝てる自信が無いお(´・`・´)

まったく、、

秋ってやつは、誘惑の秋だな。。。。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2933g/>

---

帝都異聞鬼灯録

2011年9月17日03時21分発行